

3. 4 維管束植物

今回の見直し（改訂第3版）に掲載される種は以下のとおりである。

<種子植物>

| カテゴリー 分類群 | 絶滅 | 野生 絶滅 | 絶滅危惧 I 類 | | 絶滅危惧 II類 | 準絶滅 危惧 | 絶滅のおそれ のある地域個 体群 | 情報 不足 | 合計 | |
|--------------|----|----------|----------|------|-------------|-----------|------------------------|----------|-----|-----|
| | | | I A類 | I B類 | | | | | | |
| 初版 1996 | 7 | | 71 | | 317 | 61 | — | 135 | 591 | |
| 改訂第2版 2006 | 5 | 3 | 294 | 185 | 109 | 156 | 39 | — | 80 | 577 |
| 改訂第3版 2018 | 5 | 3 | 319 | 204 | 115 | 161 | 42 | — | 77 | 607 |

<シダ植物>

| カテゴリー 分類群 | 絶滅 | 野生 絶滅 | 絶滅危惧 I 類 | | 絶滅危惧 II類 | 準絶滅 危惧 | 絶滅のおそれ のある地域個 体群 | 情報 不足 | 合計 | |
|--------------|----|----------|----------|------|-------------|-----------|------------------------|----------|-----|-----|
| | | | I A類 | I B類 | | | | | | |
| 初版 1996 | 9 | | 28 | | 30 | 30 | — | 3 | 100 | |
| 改訂第2版 2006 | 5 | 0 | 55 | 35 | 20 | 31 | 12 | — | 5 | 108 |
| 改訂第3版 2018 | 5 | 0 | 57 | 37 | 20 | 32 | 12 | — | 3 | 109 |

※初版のカテゴリーのうち、絶滅種は現行のカテゴリー名の絶滅と野生絶滅を集約することで示し、このほか絶滅危惧種は絶滅危惧 I 類、危急種は絶滅危惧 II 類、希少種は準絶滅危惧、地域個体群は絶滅のおそれのある地域個体群、未決定種は情報不足として現行のカテゴリー名に変換して示した。

(1) 本改訂でのおもな留意点

維管束植物は、対象となる種数が多いので、特に個体数や自生地数が少ない種を中心に現地調査を行った。また情報不足の種については、国内外の大学や研究機関の植物標本室に収蔵されている沖縄県産の標本を探索し、同定と採集情報の確認を行った。

分子系統分類学の急速な発展により、維管束植物の科名や属名などの見直しが進み、大きく変更されつつある。それらの変更点をすべて反映したリストの改訂は、それだけで多くの労力を必要とすることから、今回は種子植物は従来のエングラウ方式の科名に APGIV (Angiosperm Phylogeny Group IV) の科名を併記するに留めた。シダ植物は従来の科名に PPGI (Pteridophyte Phylogeny Group I) の科名を併記した。今後これらの新しい分類システムが一般に浸透するようになれば、科名ばかりでなく属名や種小名までを対象とした全面的な改訂が必要である。

環境省版レッドデータブック (2016) では、単純な雑種は対象としていないが、沖縄県版レッドデータブックでは、雑種起源とされる種 (例: アイノコホランノブ) や、種子や根茎で繁殖し、種のように振る舞っているもの (例: オキナワウラジロイチゴ、ホコザキノコギリシダ)、まだ雑種と断定されていないもの (例: マヤイチゴ、クニガミクロウメモドキなど) については対象に含めた。

(2) 本改訂で明らかになったこと

今回の改訂で個々の種の生育状況に新しい情報を加え、評価の見直しを行った。ランクを変更した種は 12 種 (例: コモロシガヤ、シラスゲ、オサラン、コウトウヒスイランなど)、リストから外した種は 1 種 (オオアオガネシダ)、新たにリストに加えた種は 32 種 (例: ミツバウコギ、ハマヤブガラシ、ホソバムラサキ、トックリスゲ、カギテンツキ、コカゲラン、ニオイラン、ツツザキヤツシロラン、ツボミヤツシロラン、フサシダなど)、和名や学名を変更した種は 5 種 (例: トカラアジサイ、オキナワヒヨドリジョウゴ、トゲウミヒルモ、タイワンカンズゲなど) である。

前回の改定の後、やんばる国立公園、慶良間諸島国立公園が新設され、西表石垣国立公園や沖縄海岸国定公園が拡充

され、維管束植物の生育地の保全がある程度保証されることになったが、採集や小規模な開発により絶滅の可能性が高まった種も数多く確認された。増殖した野生化ヤギによる植生の破壊が生態系に深刻な影響を与えているものと危惧される尖閣諸島では、多数の種の絶滅が危惧されるが、1991年以降は上陸調査が行われておらず、現状を反映させることができなかった。

これまでの調査で全く発見されておらず、絶滅が危惧されていたヒメヨウラクヒバ、ホソバフジボグサ、コケセンボンギクなどが現地調査で再発見されたり、存在が不明だった西表島のソノハラトンボの自生が標本調査で確認されるなどの成果も得られた。今回の調査で実際に足を踏み入れることができなかった島嶼がまだ多く残っている。無人島や小島嶼を対象とした調査は、今後の課題である。新たにリストに追加された日本新記録種も多いことから、掲載種だけを対象とした調査でなく、基礎的な植物相全体を対象とした調査は今後も必要であると思われる。

執筆者 横田昌嗣（琉球大学・教授）

(3) 掲載種の解説

1) 種子植物

和名 : オキナワハイネズ
分類 : ヒノキ科
学名 : *Juniperus taxifolia* Hook. et Arn. var. *lutchuensis* (Koidz.) Satake
方言名 : ヒッチャシ、フィチェシ (沖縄島: 首里)
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 雌雄異株の常緑低木。幹は匍匐性で、多数分枝し、2~4 m の範囲に広がる。針葉は3個輪生し、長さ約1 cm、下面に2条の白線がある。球果は径7~9 mm、紫褐色に熟する。
分布域(県外) : 本州(伊豆半島、伊豆七島)、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之島。
県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、屋我地島、渡嘉敷島、阿嘉島、座間味島。
生育環境 : 海岸や海岸に近い日当たりの良い原野や崖に生える。
生育状況 : 各地の海岸に点在しているが、海岸線の開発や護岸工事により、多くの自生地が失われた。庭木や盆栽用に盗掘され、足場の良い所では消失してしまった。
学術的価値 : 分布域の南限である。沖縄島は、基準産地である。
減少の要因 : 自生地の開発。園芸用の採集。
保全対策 : 緑化樹に苗木増殖した株を用いることにより採集を防止する。
備考 : 本種が自生する沖縄島北部地域の海岸線の多くの部分は、やんばる国立公園の指定地であるが、種の保存のための規制はほとんどない。IUCN カテゴリー: Near Threatened (NT)。
文献 : 新納義馬・島袋 曠, 1974. 沖縄島北部(国頭村)東海岸の植生. “沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告, 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島”, 沖縄県, 17-35.
宮城康一, 1974. 慶良間列島の植物. “沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告書, 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島”, 沖縄自然研究会(編), 沖縄県, 143-168.
執筆者名 : 新里孝和*・横田昌嗣(追補)

和名 : ウバメガシ
分類 : ブナ科 (APG 科名: ブナ科)
学名 : *Quercus phillyraeoides* A. Gray
方言名 : ウフゲーラー (伊平屋島)
カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の高木だが、通常は低木状で高さ2~5 m のものが多い。葉は硬い革質、倒卵形で長さ2~6 cm、堅果は楕円形、長さ2~2.5 cm で褐色。
分布域(県外) : 本州(関東以西)、九州、四国、中国中部。
県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島。
生育環境 : 山地の頂上部から中腹、海岸に近い風衝地に群落を形成する。
生育状況 : 伊平屋島、伊是名島ではトベラーウバメガシ群落を形成するが、近年、造園用、盆栽用に盗掘され、

個体数が減少している。沖縄島では北部の1ヶ所に生育に限られる。

- 学 術 的 価 値 : 分布域の南限である。
- 減 少 の 要 因 : 園芸用の採集。
- 保 全 対 策 : 緑化樹には苗木増殖した株を用いることにより採集を防止する。
- 備 考 : 自生地の一部は、県指定天然記念物（伊是名城島のアカラ御嶽のウバメガシ及びリュウキュウマツ等の植物群落）、名護市指定天然記念物（許田のウバメガシ）として保護されている。沖縄県指定天然記念物（アカラ御嶽のウバメガシ及びリュウキュウマツ等の植物群落）（1977年）、名護市指定天然記念物（許田のウバメガシ）（1973年）。
- 文 献 : 新納義馬, 1980. 伊是名城跡の植生. “沖縄県自然環境保全地域指定候補地学術調査報告, 伊是名城跡・大浦川のマングローブ林・億首川のマングローブ林”, 沖縄自然研究会 (編), 沖縄県, 17-40. 新納義馬・新城和治, 1959. 伊平屋・伊是名諸島の植物. 琉球大学文理学部紀要 (理学編), (3) : 81-105.
- 執 筆 者 名 : 新里孝和*

- 和 名 : ウラジロガシ
- 分 類 : ブナ科 (APG 科名: ブナ科)
- 学 名 : *Quercus salicina* Blume
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 常緑性の高木で高さ20 mくらいに達するものがある。1年枝は灰白色で皮目が目立ち、淡褐色の軟網を密生するがやがて無毛となる。葉は互生、披針形～長楕円状披針形、時として楕円状長楕円形、長さ5～12 cm、幅1.5～4.5 cm、鋭尖頭または長鋭尖頭、鋭脚またはやや円脚、鋭尖鋸歯縁で先端は多少内曲し側脈は7～13対、上面は無毛、下面は粉白色となる。葉柄は長さ1～2.5 cmで無毛。雌雄同株。雄花序は1年枝の下部付近から出て下垂し、線状長楕円形、長さ3.5～4 cm、柄は長さ1～1.5 cmくらいで開出褐毛を密布する。苞は広卵状3角形で鋭頭、長さ1.5 mmくらいの雌花2～5個を総状につける。各雌花には1枚の苞と2枚の小苞がある。花柱は3個、柱頭は幅広く反曲する。堅果は2年目の10～12月に熟し、殻斗は皿形で約7層の環状鱗片からなり、淡灰緑色、淡灰褐色の微毛を密布し、辺縁には鋸歯状の欠刻がある。堅果は広卵状楕円形、長さ1.5～2 cm、幅10～13 mm内外で濃褐色である。

- 分 布 域 (県 外) : 本州 (関東以南西)、四国、九州、種子島、屋久島、奄美大島、徳之島、南朝鮮、台湾。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄島北部、与那国島。
- 生 育 環 境 : 山地の尾根部や斜面に生えるが、群生はしない。
- 生 育 状 況 : 沖縄島北部では数ヶ所に産するが、個体数は少ない。与那国島では、1ヶ所のごく狭い範囲に生え、個体数は極めて少ない。
- 学 術 的 価 値 : 東アジアの照葉樹林を代表するブナ科樹種の一つであるが、沖縄県では沖縄島北部と与那国島の非石灰岩酸性土壌地帯に分布し、アジア大陸及び九州と中琉球、南琉球、台湾をつなぐ陸橋等の存在について、植物地理学的に考察する上で重要である (初島・金井, 1974)。
- 減 少 の 要 因 : 山地開発。森林伐採。
- 保 全 対 策 : 生育地や個体数が少なく、山地開発等による生育環境の劣化の影響が危惧される。個体群だけでなく生育地の森林を保全する必要がある。

文 献 : 初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.

執 筆 者 名 : 新里孝和*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)

和名 : ムクノキ
分類 : ニレ科 (APG 科名: アサ科)
学名 : *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch.
方言名 : ウフバーブンギ (沖縄島: 田港)
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 落葉性の高木。幹の下部はときとして板根が発達する。葉は卵状楕円形、長さ 5~9 cm、エノキ属のように歪状のくさび脚で 3 行脈をもつ。核果は球形で径 8 mm。
分布域(県外) : 本州、四国、九州、種子島、屋久島、朝鮮、中国。
県内の分布 : 沖縄島北部。
生育環境 : 低山地斜面の自然林に、イスノキ、ガジュマル、クスノハカエデなどと共に生える。
生育状況 : 大宜味村田港、名護市仲尾次、名護城跡にごくまれにみられる。
学術的価値 : 分布域の南限である。
減少の要因 : もともと個体数が少ない。
保全対策 : 生育地を地域保全する。
備考 : 本種の自生地の一つは国指定天然記念物(大宜味村田港御願の植物群落)にされている。

文献 : 新納義馬・新城和治・新島義龍・宮城朝章・島袋 曠・大嶺 徹・西銘盛光・日越国昭・佐久本敏, 1995. 大宜味村の植生. “大宜味村文化財調査報告書第 4 集 大宜味村の自然・大宜味村動植物調査報告書”, 大宜味村教育委員会, 17-196.
新城和治・新納義馬・新島義龍・宮城朝章・島袋 曠・大嶺 徹・日越国昭・佐久本敏, 1995. 大宜味村の植物相. “大宜味村文化財調査報告書第 4 集 大宜味村の自然・大宜味村動植物調査報告書”, 大宜味村教育委員会, 197-252.
新里孝和・澤岬安喜, 1979. 名護市の御嶽林. “名護市天然記念物調査報告 2”, 名護市教育委員会, 179pp.

執筆者名 : 新里孝和*

和名 : サキシマエノキ
分類 : ニレ科 (APG 科名: アサ科)
学名 : *Celtis biondii* Pamp. var. *insularis* Hatusima
方言名 : ビンギ (沖縄島: 首里/クワノハエノキも含む)
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 高さ 2~5 m の小高木。小枝は皮目が多い。葉は卵形、長さ 5~7 cm、尾状鋭尖頭、3 行脈をもち、上面は多少ざらつく。コバノチョウセンエノキに似るが、葉の毛の量が少ない。
分布域(県外) : セレベス、ニューギニア。
県内の分布 : 宮古島、伊良部島。
生育環境 : 低地の石灰岩地に生え、ときに小群落をなす。
生育状況 : 生育地は 4 ヶ所(宮古島 3 ヶ所、伊良部島 1 ヶ所)が知られているだけで、個体数も少ない。
学術的価値 : コバノチョウセンエノキの変種と見なされていたが、永らく裸名のままであった。2016 年に正式に記載された (Umemoto *et al.*, 2016)。分布域の北限で、国内唯一の産地である。セレベスやニューギニアに隔離分布するとされるが、同じ変種であるかどうかについては今後詳細な研究が必要とさ

れている (Umemoto *et al.*, 2016; 横田ら, 2016)。なお、本変種は裸名のままであったため、基準標本が指定されていなかったが、Umemoto *et al.* (2016)によって選定基準標本が指定された。選定基準標本は、宮古島の自生地のものである。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと個体数が少ない。宮古島と伊良部島の自生地の一部は公園として整備されており、公園整備の過程で誤って伐採されたことが確認されている。

保全対策 : 生育地の保全。苗木増殖。

備考 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005年)。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫・宮城康一, 1975. 宮古群島の植物. “沖縄県立自然公園候補地学術調査報告 (宮古群島)”, 沖縄自然研究会 (編), 沖縄県, 31-70.

Umemoto, H., C.-H. Park, C.-X. Fu, T. Ito, M. Yokota & G. Kokubugata, 2016. Taxonomic reconsideration of *Celtis biondii* var. *insularis* in the Miyako Island Group of the Ryukyus based on morphological and molecular data. *Journal of Phytogeography and Taxonomy*, 63(2): 67-75.

横田昌嗣・阿部篤志・佐藤宣子, 2016. 宮古諸島から新たに見つかった維管束植物. 宮古島市総合博物館紀要, (20): 121-128.

執筆者名 : 横田昌嗣*・新里孝和*・洲鎌栄徳*・横田昌嗣(追補)・佐藤宣子(追補)・國府方吾郎(追補)

和名 : ムクイヌビワ

分類 : クワ科 (APG科名: クワ科)

学名 : *Ficus irisana* Elmer

方言名 : ウフバームク (沖縄島: 田港)

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の高木。葉は短柄があり、卵状楕円形、長さ8~12 cm、3行脈をもち、表面はざらつく。無花果は腋生し、球形、径8~10 mmで、黄紅色に熟する。

分布域 (県外) : 台湾、フィリピン、セレベス。

県内の分布 : 沖縄島、北大東島、南大東島、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 主として低山地の石灰岩地帯の自然林内に生える。

生育状況 : 御嶽林など、保存状態の比較的良好な森林に点在するが、沖縄島と北大東島、西表島では個体数が少なく、開発により消失する恐れがある。石垣島北部では個体数が多いが、開発に伴って減少している。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : 自生地の開発。森林伐採。

保全対策 : 県・市町村天然記念物指定による生育地の保全。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 新納義馬・新城和治・新島義龍・宮城朝章・島袋 曠・大嶺 徹・西銘盛光・日越国昭・佐久本敏, 1995. 大宜味村の植生. “大宜味村文化財調査報告書第4集, 大宜味村の自然・大宜味村動植物調査報告書”, 大宜味村教育委員会, 17-196.

新城和治・新納義馬・新島義龍・宮城朝章・島袋 曠・大嶺 徹・日越国昭・佐久本敏, 1995. 大宜味村の植物相. “大宜味村文化財調査報告書第4集, 大宜味村の自然・大宜味村動植物調査報告書”, 大宜味村教育委員会, 197-252.

執筆者名 : 新里孝和*

和名 : **ニオウヤブマオ**
分類 : イラクサ科 (APG 科名: イラクサ科)
学名 : *Boehmeria gigantea* Satake
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 1~1.5 m に達する多年草。茎は太く単立し、径 5~10 mm。葉は対生、葉身は卵円形またはやや円形、長さ 15~26 cm、短鋭尖頭、基部は円形または浅心形、縁に粗くて大きい鋸歯があり、上面は粗毛がありざらざらする。雌花の集団は葉腋に長さ 10~15 cm の円錐花序をなす。

分布域 (県外) : 本州 (山口県)、九州、種子島、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島。

県内の分布 : 栗国島。

生育環境 : 海崖上のテラス状になった窪地に土壌の堆積したところや、ソテツ群落中に生える。

生育状況 : 1996 年 6 月の調査で栗国島から初めて発見された。栗国島の海岸のごく限られた所に生育し、個体数は少ない。2015 年の調査で、これまで知られていた自生地 1 ヶ所で生育が再確認されると共に、新たな自生地 1 ヶ所が確認されている (阿部ら, 2016)。

学術的価値 : 沖縄県唯一の産地で、分布域の南限地でもある。

減少の要因 : 自生地の開発。

保全対策 : 本種の生育地は海崖上の狭い範囲で、一帯はヤマコンニャク (絶滅危惧 I A 類 (CR)) の生育が既に知られている (天野, 1981)。生育地全体の保全が必要である。

文献 : 天野鉄夫, 1981. 栗国島植物目録. 栗国村教育委員会, 39pp.
阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 II (栗国島・渡名喜島). 日本植物園協会誌, (51): 80-85.

執筆者名 : 新里孝和*・新城和治*・立石庸一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : **ヤエヤマラセイタソウ**
分類 : イラクサ科 (APG 科名: イラクサ科)
学名 : *Boehmeria yaeyamensis* Hatusima
カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 低木状の常緑多年草。茎は単立、または束生して群生状になる。葉は対生し、2~8 cm の葉柄をもち、葉身は卵状円形、長さ 4~10 cm、下面に粗毛を密生する。

県内の分布 : 石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 海岸や低地の主に石灰岩地の岩隙や、日当りのよい原野に生える。

生育状況 : 石垣島と与那国島では数ヶ所に産し、小規模な群落をつくるが、自生地は限られる。西表島では現状不明。

学術的価値 : 八重山諸島の固有種である。

減少の要因 : 自生地の開発。ヤギ・ウシ・ウマなどの放牧による食害。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : Hatusima, S., 1979. A new species of *Boehmeria* from the Ryukyus. J. Phytogeogr. Taxon., 27(1): 34.
初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新発見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.
前津栄信・松島昭司, 1999. 安良の植物. “石垣島古郷安良の原風景—その歴史と自然—”, 石垣市

総務部市史編集室（編），石垣市，129-226.

執筆者名：横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名：ランダイミズ

分類：イラクサ科（APG 科名：イラクサ科）

学名：*Elatostema platyphyllum* Wedd.

カテゴリー：絶滅危惧 I A 類（CR） 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I B 類（EN）

形態の特徴：常緑の多年草。茎は長さ 50～100 cm になり、粗毛がある。葉は互生し、ゆがんだ倒披針状長楕円形、長さ 10～22 cm。雌雄異株で、雄の集散花序は頭状で、径 1～2.5 cm、多花をつけ、花被片は長さ 2 mm、雌花序は小形。瘦果は広卵形。

分布域（県外）：台湾、中国南部、ヒマラヤ。

県内の分布：西表島。

生育環境：川沿いの水の滴り落ちる崖や、湿った林床に群落をつくる。

生育状況：自生地は 1ヶ所知られるだけである。国立公園内であり、島の中央部であるため開発や採集の恐れはないが、ごく狭い範囲に産し、個体数は限られている。

学術的価値：分布域の北限で、国内唯一の産地である。

減少の要因：もともと自生地と個体数が限られている。

備考：雌雄異株で、現在までのところ、西表島では雌株しか見つかっていない。無性生殖や無配生殖を行っているとすれば、遺伝的多様性に乏しく環境変動に対して脆弱である可能性がある。本種をヒロハノキミズ *E. edile* C. B. Robinson とする見解（初島，1999）が発表されている。竹富町希少野生動植物種（2017年）。

文献：Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 1: 37-45.

初島住彦，1999. 琉球植物新報. 沖縄生物学会誌，(37)：107-108.

執筆者名：横田昌嗣

和名：クニガミサンショウヅル

分類：イラクサ科（APG 科名：イラクサ科）

学名：*Elatostema suzukii* Yamazaki

カテゴリー：準絶滅危惧（NT） 環境省カテゴリー：準絶滅危惧（NT）

形態の特徴：常緑の多年草。茎は斜上し、長さ 6～12 cm、基部は匍匐して根を出す。葉は 2 列に互生し、短柄があり、くさび状長楕円形、長さ 3～3.5 mm、上面は青緑色でやや光沢があり、下面は淡白色。花は小形で緑白色、雌雄異花で雄花は頭状花序をなし、雌花は集散花序をなす。

県内の分布：沖縄島北部。

生育環境：山地の上流の水辺近くの岩上など、湿気の多い所に生える。

生育状況：金武町・恩納村以北（本部半島を除く）の渓流部に限って生育している。ダム建設によりいくつかの生育地が消失した。

学術的価値：沖縄島の固有種である。

減少の要因：森林伐採。ダム建設による自生地の水没。

- 備 考 : 本種には著しい染色体数変異 ($2n=16, 26, 38, 39, 52$) が知られており (Yamashiro *et al.*, 2000)、低数性二倍体 ($2n=16$) は外部形態では通常の二倍体 ($2n=26$) と区別がつかないが、生物学的には独立種である可能性がある。なお、本種の三倍体は沖縄島北部で複数回起源したことが明らかになっており (Tamaki *et al.*, 2001)、倍数体の多起源が証明されたまれな例である。
- 文 献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成5年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 羽地大川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 103-13.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成6年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 平成7年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-7.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 大保ダム建設発生土の処分候補地に係る生物環境調査データ (陸域・海域). 沖縄建設弘済会, 3-14, 117-135, 277-286, 349-373.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 平成8年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 奥間川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-9, 99-12.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 億首川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 99-110.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 与那川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-10, 101-17.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 座津武川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-8, 87-95.
Tamaki, K., T. Denda & M. Yokota, 2001. Origin of triploids of *Elatostema suzukii* (Urticaceae) on Okinawa Island, the Ryukyus. J. Pl. Res. 114: 377-380.
Yamashiro, T., T. Kanemoto, T. Denda & M. Yokota, 2000. Chromosome number variation in *Elatostema suzukii* (Urticaceae), a species endemic to Okinawa Island, the Ryukyus. Acta Phytotax. Geobot., 51: 21-29.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ヨナクニトキホコリ
分 類 : イラクサ科 (APG 科名: イラクサ科)
学 名 : *Elatostema yonakuniense* Hatusima
カ テ ゴ リ : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 の 特 徴 : 常緑の多年草。茎は高さ 15~18 cm、基部は匍匐し、上部は直立、8~10 枚の葉を互生する。葉は長さ 2~4 cm、上半分に 2~4 個の鋸歯がある。雌雄同株または異株で、雄の集散花序は腋生し、4~8 花をつけ、雌の集散花序は頭状で、径 2~3 mm。

県 内 の 分 布 : 石垣島、与那国島。

生 育 環 境 : 低地の主に石灰岩地の陰湿な林内の岩上に生える。

生 育 状 況 : 与那国島では、これまで 2ヶ所の自生地が知られている。基準産地であった 1ヶ所は開発により消失したと思われていたが、2005年に幼個体が 1個体残存していることが確認された。他の 1ヶ所はごく狭い範囲に限られ、個体数は極めて少ない。近くまで開発が進んでおり、赤土砂の堆積で生育環境が悪化し、シマミズなどの類似の環境に生える種との競争により減少しており、状況は更に悪化している。石垣島では、今回の調査で新たに発見され、3ヶ所で確認されているが、個体数と自生地は、いずれの場所でも限られている。

学 術 的 価 値 : 与那国島と石垣島の固有種である。なお、台湾に産する *Elatostema microcephalanthum* タマザキウワバミソウと同種とする意見がある (Tseng & Hu, 2015)。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。河川への赤土砂の流入と堆積。
 保全対策 : 自生地の保全と人工増殖。与那国島ではかなり危機的な状況にあり、人工増殖を検討する必要がある。
 備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2017年)。

文献 : Hatusima, S., 1965. New or noteworthy urticaceous plants from Japan and Formosa II. J. Geobot., 12: 34-38.
 初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新発見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.
 Tseng, Y.-H. & Hu, J.-M., 2015. Taxonomic revision of *Elatostema* J. R. Forst. & G. Forst. (Urticaceae) in Taiwan. *Taiwania* 60(1): 23-32.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : ケイタオミズ (アリサンサンショウソウ)
 分類 : イラクサ科 (APG 科名: イラクサ科)
 学名 : *Pellionia keitaoensis* Yamamoto
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の小型の多年草。茎はやや匍匐し、先は斜上し、高さ 30 cm になる。若い茎には粗毛が散生する。葉は互生し、ゆがんだ長楕円形から卵状長楕円形、長さ 6~8 cm、幅 1.5~2.8 cm、鋭尖頭、鈍脚、下面は無毛または有毛、鋸歯は 5~8 対。花は雌雄異株または同株で、雄花序は腋生する集散花序で、径 1~1.5 cm、花梗は長さ 1~1.5 cm、花は径 4 mm、雌花序は腋生する球状の集散花序で、径 3~5 mm。

分布域 (県外) : 台湾。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 空中湿度の高い常緑樹林の陰湿な林床に生える。

生育状況 : 西表島の数ヶ所に点々と産するが、個体数は少ない。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。主要な自生地の幾つかは、観光客が通る歩道や登山道となっており、踏みつけの影響が危惧される。

備考 : 初島 (1975) によると、キミズとオオサンショウソウの雑種起源の種と考えられており、形態変異が大きいために指摘されている。本種については、分類学的な再検討が必要である。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : Hatusima, S., 1956. New or noteworthy plants from the Ryukyu Islands and Formosa. *Sci. Bull. Agric. Home Econ. Div., Univ. Ryukyus, Okinawa*, (3): 19-33.
 初島住彦, 1975. 琉球植物誌 (追加・訂正). 沖縄生物教育研究会, 那覇, 875.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : サンショウソウ
 分類 : イラクサ科 (APG 科名: イラクサ科)
 学名 : *Pellionia minima* Makino
 カテゴリ : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリ: 該当なし

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎は斜上し、高さ約 15 cm、葉は 2 列に配列し、歪状楕円形、オオサンショウソウ *P. radicans* に比べて小さく、長さ 1 cm、上面は青緑色、中肋にそって淡緑色を帯びる。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、種子島、屋久島、奄美大島。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 常緑広葉樹林の腐植質の豊富な林床に生える。

生育状況 : 国頭村普久川などの数河川の上流部に限って生育し、生育地、個体数とも少ない。

学術的価値 : 分布域の南限である。

減少の要因 : 森林伐採。ダム建設による水没。

執筆者名 : 横田昌嗣*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

和名 : **オオサンショウソウ**

分類 : イラクサ科 (APG 科名: イラクサ科)

学名 : *Pellionia radicans* (Sieb. et Zucc.) Wedd.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は匍匐し、長さ 30~50 cm、葉は 2 列に配列し、歪状楕円形、長さ 2~6 cm、上面は深緑色、時に斑紋が入り、下面は淡白色。雌雄異株または同株で、花序は腋生し、雄花序は集散花序、径 1~1.5 cm、雌花序は球状の集散花序、径 3~5 mm、瘦果は楕円形、長さ 0.8 mm 位。

分布域(県外) : 本州(近畿以西)、四国、九州、薩摩黒島、屋久島、トカラ列島、奄美大島、台湾、中国。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。

生育環境 : 山地の林下の湿潤地に生える。

生育状況 : 沖縄島では北部 3 村では確認されておらず、名護市や恩納村の限られた場所に少数個体が出現するだけで、極めてまれである。西表島から報告されたものは、ケイタオミズの可能性があり、現状不明。

減少の要因 : 自生地の開発。森林伐採。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

和名 : **ミヤマミズ**

分類 : イラクサ科 (APG 科名: イラクサ科)

学名 : *Pilea petiolaris* (Sieb. et Zucc.) Blume

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は長さ 40~80 cm、無毛。葉は対生し、狭卵形~長楕円形、長さ 6~15 cm、低い鋸歯があり、鈍脚~楔脚、3 脈がある。雌雄同株で、雄花序と雌花序をつけ、花序は密な集散状、長さ 1~4 cm。雌花の花被は広卵形、3 中裂する。瘦果は広卵形、長さ 1.3~1.5 mm。

分布域(県外) : 本州(関東以西)、四国、九州、屋久島、台湾、中国中~南部。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の陰湿な林床に生える。沖縄島では石灰岩地に、西表島では非石灰岩地に産する。

生育状況 : 沖縄島の 1 ヶ所、西表島の 2 ヶ所からごく最近(山崎, 1995) 報告されたが、現状は不明である。

学 術 的 価 値 : 琉球列島では産地に限られる。
 減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。
 備 考 : 普通種のシヤマミズ *P. brevicornuta* によく似ており、これまで混同されていた。

文 献 : 山崎 敬, 1995. ミヤマミズ琉球に分布. 植物研究雑誌, 70: 177.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣

和 名 : ニンドウバノヤドリギ
 分 類 : ヤドリギ科 (APG 科名: オオバヤドリギ科)
 学 名 : *Scurrula longicerifolius* (Hayata) Danser
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形 態 の 特 徴 : 樹上に寄生する常緑低木。オオバヤドリギ *S. yadoriki* (Sieb. ex Maxim.) Danser に類似するが、それより花被は短く長さ 2~2.5 cm。葉は対生し、鈍頭、円脚、革質で厚く、下面は灰褐色~赤褐色。

分 布 域 (県 外) : 台湾。

県 内 の 分 布 : 石垣島、西表島。

生 育 環 境 : 低地から山地のイタジイやエゴノキなどの樹上に寄生する。

生 育 状 況 : 石垣島の屋良部半島で発見されている (立石ら, 2004) ほか、最近於茂登岳周辺でも確認されている。西表島では島内に広く点々と分布するが、個体数は少ない。以前確認された個体が枯死したり、伐採されたりして、確認できる個体数は減少している。

学 術 的 価 値 : 台湾との共通種で、日本では産地に限られる。

減 少 の 要 因 : もともと個体数が少ない。

備 考 : 本種をシナヤドリギモドキ *Taxillus pseudochinensis* (Yamamoto) Danser とする見解 (初島, 1999) が近年発表されている。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文 献 : Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", University of the Ryukyus, Naha, 1: 37-45.
 初島住彦, 1999. 琉球植物新報. 沖縄生物学会誌, (37) : 107-108.
 立石庸一・松村俊一・山城 考・新城和治, 2004. 琉球列島植物分布資料 17. 沖縄生物学会誌, (42) : 61-67.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・松村俊一*・加島幹男*・横田昌嗣(追補)

和 名 : リュウキュウツチトリモチ
 分 類 : ツチトリモチ科 (APG 科名: ツチトリモチ科)
 学 名 : *Balanophora fungosa* J. R. et G. Forst. (= *B. kuroiwai* Makino)
 方 言 名 : アカバンカー (沖縄島: 知念)、ヒーソクワ、ポーラーグサ (久高島)、ミミキリボーズ (伊計島)
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 多年生の寄生植物。根茎には皮目がなく、地上に露出して多数の大きな根茎支に分岐する。雌雄同株。12月中旬~1月、根茎支から高さ 8~15 cm の花茎を 1~8 個出す。鱗片葉はオレンジ色で、はじめは花茎に密着しているが、さかりをすぎると次第に反り返って開出する。花穂は球形から短楕

円形で雌花を密につけ、帯紅色、まれに赤味がかったピンクを呈し、下縁部に雄花が密集する。雄花は柄が長く伸び、通常数個の繊細な苞があり、花被は4裂して楕円形の花被片となり、やがて外側に反り返る。雄ずい群はほぼ球状、花糸は1個に合着して太く短く、葯は4個で、不規則に裂開して白色の花粉を出す。雌花は無数、小棍体の間に埋もれているので外側からは見えない。子房は大きくて紡錘形、オレンジ色、花柱は花のさかりになると伸びて小棍体より細毛状に伸びる。柱頭ははじめオレンジ色だが、受粉後は茶褐色になり、やがては黒化する。

- 分布域 (県外) :** 台湾南部、フィリピン、ミクロネシア、セレベス、ニューギニア、オーストラリア北東部、メラネシア。
- 県内の分布 :** 沖縄島、伊計島、久高島、宮古島、石垣島、竹富島、西表島、与那国島、尖閣諸島(魚釣島、久場島)。
- 生育環境 :** 海岸～低地の自然林の林床で、クロヨナ、リュウキュウガキ、オオバギなどの根に寄生する。
- 生育状況 :** 保存状態の良い御嶽林を中心に各地に点在する。その存在は、阿久沢(1976)による調査、1977～1982年に行われた沖縄県内の御嶽林調査(川上・天野, 1979; 宮城, 1979; 日越, 1980; 川上・日越, 1981; 新島, 1981)、およびその後の調査(伊波, 1988; 前津・松島, 1999; 立石・新城, 1999)で継続的に確認されている。石垣島の低地ではやや普通に見られ、白花品も観察される。
- 学術的価値 :** 分布域の北限である。
- 減少の要因 :** 自生地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。
- 備考 :** 従来は琉球列島の固有種 *B. kuroiwai* とみなされ、本データブックの旧版でもその意見を採用していたが、最近では上記したような広い分布域を持つ *B. fungosa* subsp. *fungosa* に合一するのが定説である(Hansen, 1972, 1982; Murata, 1988)。亜種 subsp. *indica* が、フィリピン(ルソン島)、中国南部、インドシナ、タイ、ミャンマー、インド、スリランカ、マレーシア半島部、スマトラ、ジャワなど種の分布域の西側から知られており、東側に広がるリュウキュウツチトリモチと分布域を2分する(Hansen, 1972, 1982; Murata, 1988)。こちらは雌雄異株で、1個の雄花に対応して1個の大型の苞があり、花被片は長楕円形で雄ずい群が楕円形であることなどが異なる(Murata, 1988)。宮古島市自然環境保全条例保全種(2005年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。
- 文献 :** 阿久沢栄太郎, 1976. ヤッコソウ科ツチトリモチ科植物発生地現況一覧. ヤッコソウとツチトリモチを保護する会本部, 東京都, 236pp.
- 阿久沢栄太郎, 1982. キイレツチトリモチとその人工増殖. ヤッコソウとツチトリモチを保護する会本部, 東京都, 124pp.
- 天野鉄夫, 1982. 斎場御嶽及びその周辺の植物. “沖縄県自然環境保全地域指定候補地学術調査報告, 知花グスク・斎場御嶽とその周辺地域”, 沖縄県, 77-90.
- Hansen, B., 1972. The genus *Balanophora*, a taxonomic monograph. Dansk Bot. Arkiv, 28: 1-188.
- Hansen, B., 1982. The Balanophoraceae of the Pacific. Acta Phytotax. Geobot. 33: 92-102.
- 日越国昭, 1981. 知念村の主な御願所の植生. “沖縄県天然記念物調査シリーズ第20集, 沖縄県社寺・御嶽林調査報告”, 沖縄県教育委員会(編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 165-186.
- Huang, S. F. & T. C. Huang, 1996. Balanophoraceae. “Flora of Taiwan, 2nd ed.”, T. C. Huang et al. (eds.), Editorial Committee of the Flora of Taiwan Second Edition, Taipei, Vol. 2: 287-291.
- 伊波善勇, 1988. 与勝の植物. 沖縄県立与勝高等学校, 勝連町, 260pp.
- 川上 勲・天野鉄夫, 1979. 狩俣御嶽及びその周辺の植物相の特徴. “沖縄県自然環境保全地域指定候補地学術調査報告, 東平安名岬・狩俣御嶽”, 沖縄県, 63-76.
- 川上 勲・日越国昭, 1981. 城辺町の主な御願所の植生. “沖縄県天然記念物調査シリーズ第21集, 沖縄県社寺・御嶽林調査報告”, 沖縄県教育委員会(編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 67-91.
- Kawakita, A. and M. Kato, 2002. Floral biology and unique pollination system of root holoparasites, *Balanophora kuroiwai* and *B. tobiracola* (Balanophoraceae). Amer. J. Bot., 89: 1164-1170.
- 前津栄信・松島昭司, 1999. 安良の植物. “石垣島古郷安良の原風景—その歴史と自然—”, 石垣市総務部市史編集室(編), 石垣市, 129-226.
- 宮城康一, 1979. 与那城村・勝連村の御願所の植生. “沖縄県天然記念物調査シリーズ第18集, 沖縄県社寺・御嶽林調査報告”, 沖縄県教育委員会(編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 15-26.

Murata, J., 1988. Morphology and distribution of *Balanophora fungosa* J. R. et G. Forst. (Balanophoraceae). J. Jpn. Bot., 63: 201-210.

新島義龍, 1981. 竹富町竹富島の主な御願所林の植生. “沖縄県天然記念物調査シリーズ第 21 集 沖縄県社寺・御嶽林調査報告”, 沖縄県教育委員会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 195-204.

玉城松栄, 1966. *Balanophora fungosa* var. *kuroiawai* Makino (リュウキュウツチトリモチ) の新産地. 沖縄生物学会誌, 3 (5) : 45-46.

立石庸一・新城和治, 1999. 斎場御嶽の植物. “国指定史跡斎場御嶽整備事業報告書 (発掘調査・資料編)”, 知念村教育委員会 (編), 知念村教育委員会, 43-84.

立石庸一・佐藤寛之・齊藤由紀子・天野正晴・杉山已次・中村元紀・宮城愛・田場美沙基・富永篤, 2016. 沖縄県の離島・へき地における自然教育のための基礎資料の充実Ⅷ: うるま市伊計島の植物相. 琉球大学教育学部紀要, (88): 283-305.

執筆者名 : 立石庸一*・川上 勲*・横田昌嗣(追補)

和名 : キイレツチトリモチ

分類 : ツチトリモチ科 (APG 科名: ツチトリモチ科)

学名 : *Balanophora wrightii* Makino (= *B. tobiracola* Makino)

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年生の寄生植物。根茎は皮目がなく、1 個の根茎から 3~10 個の花茎が出る。雌雄同株。11 月頃、根茎から伸びて高さ 3~11 cm の花茎に雄花と雌花が一緒につく。花穂は長卵形で先端が細く尖り、黄色。雄花は花穂の表面に散生しているのが見えるが、雌花は花穂を被っている小棍体の間に埋もれていて外からは見えない。雄花は短柄があり、花被が 3 裂して、柄のない 3 個の葯を現わして白色の花粉を出し、花後は茶褐色やがて黒色に変色する。雌花は花被がなく、子房は紡錘形で大きくオレンジ色、小棍体の間から花柱を伸ばして柱頭を現わし、受粉する。

分布域 (県外) : 九州 (長崎・熊本・宮崎・鹿児島県)、種子島、屋久島、トカラ列島 (宝島)、奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島、台湾。

県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島、伊江島、久米島、多良間島?、石垣島、竹富島、西表島。

生育環境 : 海岸~低地の自然林の林床で、トベラ、シャリンバイ、ネズミモチ、ハマヒサカキなどの根に寄生する。

生育状況 : 保存状態の良い御嶽林などに点在し、沖縄島と石垣島、西表島では最近も 2~数ヶ所の生育地が確認されている。

学術的価値 : 琉球列島から九州南部を経て、九州西部地域に分布し、九州東部には分布しない「九州西廻り分布植物」の一つに挙げられる (中西, 1996)。琉球列島の植物相の成立史を解明するために重要な例である。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 阿久沢栄太郎, 1976. ヤッコソウ科ツチトリモチ科植物発生地現況一覧. ヤッコソウとツチトリモチを保護する会本部, 東京都, 236pp.

阿久沢栄太郎, 1982. キイレツチトリモチとその人工増殖. ヤッコソウとツチトリモチを保護する会本部, 東京都, 124pp.

Hansen, B., 1972. The genus *Balanophora*, a taxonomic monograph. Dansk Bot. Arkiv, 28: 1-188.

Huang, S. F. & T.C. Huang, 1996. Balanophoraceae. “Flora of Taiwan, 2nd ed.”, T.C. Huang *et al.* (eds.), Editorial Committee of the Flora of Taiwan Second Edition, Taipei, Vol. 2: 287-291.

中西弘樹, 1996. 九州西廻り分布植物: 定義、構成、起源. 植物分類・地理, 47: 113-124.

新納義馬・宮城朝章・佐久本敏, 1974. 伊江島の植生. “沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告”,

沖縄自然研究会（編），沖縄県，那覇，7-120.

Ying, S. S., 1990. Miscellaneous notes on the Flora of Taiwan (XIII). Mem. Coll. Agric. Natl. Taiwan Univ., 30(2): 53-72.

執筆者名 : 立石庸一*・横田昌嗣(追補)

和名 : ミズヒキ

分類 : タデ科 (APG 科名: タデ科)

学名 : *Antenoron filiforme* (Thunb.) Roberty et Vautier

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 全株粗毛を有する多年草。茎は単一あるいは少し分枝し、高さ 30~90 cm、節部は肥厚する。葉は楕円形で、長さ 6~15 cm、托葉は鞘状。茎頂や葉腋に生じた総状花序は細く、長さ 20~40 cm、赤色の小花をまばらに多数つける。

分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、種子島、屋久島、奄美大島、中国、ヒマラヤ。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島。

生育環境 : 低地から山地の日当りのよいやや湿気のある所や、陰湿な谷の林床に生える。

生育状況 : 沖縄島では北部から中部にかけて 4ヶ所に知られ、そのうち北部の 1ヶ所では 2016 年に生育が確認されている。石垣島の現状は不明。

減少の要因 : 自生地の開発。

文献 : 伊波善勇・伊礼洋我・池原直樹・兼城洋邦・渡嘉敷玲子，1986. 山内谷の植物. “沖縄市自然調査報告書 (1)”，沖縄市教育委員会，52pp.

新城和治・新納義馬・新島義龍・宮城朝章・島袋 曠・大嶺 徹・日越国昭・佐久本徹，1995. 大宜味村の植物相. “大宜味村文化財調査報告書第 4 集，大宜味村の自然・大宜味村動植物調査報告書”，大宜味村教育委員会，197-252.

執筆者名 : 新城和治*・新里孝和*・横田昌嗣(追補)・比嘉清文(追補)

和名 : ナツノウナギツカミ

分類 : タデ科 (APG 科名: タデ科)

学名 : *Persicaria dichotoma* (Blume) Masam.

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。茎は斜上し長さ 20~50 cm、断面は四角形、稜に逆刺があり、下部は匍匐して根を出す。葉は長楕円状倒披針形、長さ 5~10 cm、縁に剛毛がある。花は淡紅色。

分布域 (県外) : 種子島、中之島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、台湾、インド、マレーシア。

県内の分布 : 沖縄諸島、八重山諸島。

生育環境 : 主として山間の湿地や放棄水田に生える。

生育状況 : 局所的に多くの個体を産する場所もあるが、全体としては生育地の開発で減少している。

減少の要因 : 自生地の開発 (農地造成、湿地の埋立など)。除草剤の使用。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 新城和治*・新里孝和*・横田昌嗣(追補)

和名 : ホソバノウナギツカミ
 分類 : タデ科 (APG 科名: タデ科)
 学名 : *Persicaria hastato-auriculata* (Makino) Nakai
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。茎は小逆刺があり、斜上し、高さ 30~80 cm に達し、下部は匍匐し、節から根を出す。葉は膜質、披針形、長さ 4~11 cm、縁に微細剛毛がある。花は淡紅白色。
 分布域 (県外) : 本州、四国、九州、朝鮮、台湾、中国、ヒマラヤ、フィリピン、スリランカ。
 県内の分布 : 沖縄諸島、西表島、与那国島?。
 生育環境 : 湿地または浅水中に生える。
 生育状況 : 土地造成 (農地改良事業など)、除草剤散布などにより減少しつつある。最近、西表島からも報告されている (赤井, 2017)。
 減少の要因 : 自生地の開発。農薬散布。
 備考 : 与那国島に産するとの報告があるが、同定については再検討が必要とされる (赤井, 2015)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究 (与那国島・石垣島). “事業年報 (平成 27 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44.
 赤井賢成, 2017. 西表島植物誌編纂事業. “事業年報 (平成 28 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 43-45.

執筆者名 : 新城和治*・新里孝和*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : ダイトウサクラタデ
 分類 : タデ科 (APG 科名: タデ科)
 学名 : *Persicaria japonica* (Meisn.) Nakai ex Ohki var. *taitoinsularis* (Masam.) Masam.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は斜上し、高さ 60cm に達する。葉は披針形、長さ 5~11cm、幅 7~22mm、上面は葉縁を除いて無毛、下面の中肋上に短毛があり、葉鞘の縁は有毛。花序は長さ 3.5~7cm、花は白色、花被片は 5 個、長さ 2~3mm、雄蕊は 6 個、柱頭は 2 個。瘦果は凸レンズ状。
 分布域 (県外) : ミクロネシア。
 県内の分布 : 北大東島、南大東島。
 生育環境 : 湿地に生える。
 生育状況 : 北大東島では 3ヶ所、南大東島では 2ヶ所で確認されているが、湿地の埋立、外来種 (ボタンウキクサ、ホテイアオイ) の繁茂、除草剤の散布により個体数は減少している。いずれの自生地でも個体数は少なく、絶滅の恐れがある。
 学術的価値 : 大東諸島が基準産地で、日本では唯一の産地である。ミクロネシア系の種で、植物地理学上貴重である。
 減少の要因 : 自生地の開発。外来種との競合。もともと自生地が限られている。除草剤の使用。
 備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2017 年)

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : アラゲタデ
分類 : タデ科 (APG 科名: タデ科)
学名 : *Persicaria tomentosa* Willd.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は斜上し、高さ 60~100 cm に達する。葉は披針形、長さ 5~10 cm、両面に白色の絹毛を密布する。花は白色。
分布域(県外) : 台湾、熱帯アジア、アフリカ。
県内の分布 : 北大東島、南大東島。
生育環境 : 湿地に生える。
生育状況 : 北大東島では 3 ヶ所に産するが、1 ヶ所は湿地の埋め立てにより自生地の大半が失われた。南大東島では小規模な群落が 4 ヶ所に認められるが、湿地の埋立、外来種(ボタンウキクサ、ホテイアオイ)の繁茂、除草剤の散布により個体数は減少している。いずれの自生地でも個体数は少なく、絶滅の恐れがある。
学術的価値 : 分布域の北限地で、日本では唯一の産地である。
減少の要因 : 自生地の開発。外来種との競合。もともと自生地が限られている。除草剤の使用。
備考 : 国内希少野生動物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動物 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。**Persicaria attenuata* として評価。
文献 : 西浜良修, 2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—。南大東村教育委員会, 77pp.
執筆者名 : 横田昌嗣*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : オキナワマツバボタン
分類 : スベリヒユ科 (APG 科名: スベリヒユ科)
学名 : *Portulaca okinawensis* Walker et Tawada var. *okinawensis*
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 多肉質の常緑の多年草。茎は高さ 5~10 cm。葉は長楕円形、鈍頭、長さ 3~5 mm。花は頂生し、径約 11 mm、花弁は 5 枚、黄~橙黄色。
分布域(県外) : 奄美大島、加計呂麻島、請島、徳之島。
県内の分布 : 沖縄島、久米島、渡名喜島、屋嘉比島、阿嘉島、慶留間島、粟国島。
生育環境 : 海岸のサンゴ礁岩上に小群状に張りつくように生える。
生育状況 : 生育地や個体数は限られる。沖縄島の主要な自生地 2 ヶ所は、観光地になっており、観光客による踏みつけで悪影響を受けている。久米島では 2 ヶ所、渡名喜島では 1 ヶ所、慶留間諸島では数ヶ所で確認されている。粟国島の現状は不明。
学術的価値 : オキナワマツバボタンはこれまで奄美諸島(奄美大島、加計呂麻島、徳之島)と沖縄諸島に分布する固有種とされていたが(Walker & Tawada, 1951)、諸島間で形態および遺伝的に分化が進んでいることが判り、奄美諸島のものは変種 var. *amamiensis* として区別されたため(Kokubugata et al., 2013, 2016)、変種としては沖縄諸島固有である。
減少の要因 : 自生地の開発。人間の踏みつけ。もともと自生地が限られている。
文献 : 石川 敦・石田 仁, 1988. 琉球列島植物分布資料 5. 沖縄生物学会誌, (26) : 31-34.

Kokubugata, G., K. Nakamura, Y. Hirayama & M. Yokota, 2013. Taxonomic reexamination of *Portulaca okinawensis* (Portulacaceae) in the Ryukyu Archipelago of Japan based on molecular and morphological data. *Phytotaxa*, 117(1): 11-22.

Kokubugata, G., T. Ito & M. Yokota, 2016. Confirmation of the Occurrence of *Portulaca okinawensis* var. *amamiensis* (Portulacaceae) in Kakeroma Island of the Ryukyus Archipelago, Japan using Morphological and Molecular Data. *Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. B*, 42(2): 67-71.

新納義馬・新城和治・宮城康一・日越国昭, 1985. 恩納村文化財調査報告書第6集 沖縄県指定天然記念物万座毛石灰岩植物群落調査報告. 恩納村教育委員会, 64pp.

Walker, E. H. & Tawada, S., 1951. A new species of *Portulaca* from Okinawa. *Journal of the Washington Academy of Sciences* 41: 138.

阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査II (栗国島・渡名喜島). *日本植物園協会誌*, (51): 80-85.

執筆者名 : 新城和治*・新里孝和*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : ヒメハマナデシコ

分類 : ナデシコ科 (APG 科名: ナデシコ科)

学名 : *Dianthus kiusianus* Makino

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年草。茎は直立し、高さ 20~40 cm。葉は狭長楕円形~倒披針形、長さ 1~40 cm、上面は緑色で光沢がある。花は紅紫色で集散花序につく。

分布域(県外) : 本州(和歌山県)、八丈島、四国(愛媛県)、九州、種子島、トカラ列島、喜界島、奄美大島、加計呂麻島、請島、徳之島。

県内の分布 : 伊江島、西表島。

生育環境 : 海岸の日当りのよい岩場や原野に生える。

生育状況 : 伊江島ではごく狭い範囲に数個体を産するに過ぎない。西表島の現状は不明。

学術的価値 : 分布域の南限地である。

減少の要因 : 自生地の開発。園芸用の採集。もともと自生地が限られている。

保全対策 : 生育地の保全と増殖による復元。現状では危機的な状況にあるため、人工増殖を検討する必要がある。

文献 : 初島住彦・宮城康一, 1974. 伊江島の植物. “沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告, 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島”, 沖縄県, 57-76.

新里孝和・嵩原建二, 2002. 伊江島の植物図鑑. 伊江村教育委員会, 201pp.

島袋 曠・日越国昭・宮城康一, 1981. 伊江村の主な御願所の植生. “沖縄県天然記念物シリーズ第21集, 沖縄県社寺・御嶽林調査報告IV”, 沖縄県教育委員会, 1-10.

執筆者名 : 新里孝和*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : カワラナデシコ

分類 : ナデシコ科 (APG 科名: ナデシコ科)

学名 : *Dianthus superbus* L. var. *longicalycinus* (Maxim.) Williams

方言名 : ウチングワ、ナディシク (沖縄島: 首里)

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年草。茎は高さ 30~60 cm。葉は線状披針形、長さ 4~7 cm、粉白色を帯びる。花は径約 4 cm、淡紅色または白色。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、朝鮮、中国、台湾。

県内の分布 : 久米島、渡名喜島。

生育環境 : 海浜の砂浜や山地の草原に生える。

生育状況 : 久米島では以前知られた生育地では確認されない。渡名喜島では数ヶ所に産するが、個体数は少ない。

減少の要因 : 自生地の開発。園芸用の採集。もともと自生地が限られている。生育環境が競合する移入種の増加。

保全対策 : 本種の存続には草原の維持が必要であるが、渡名喜島ではギンネムが侵入しており、ギンネムの駆除が必要である。

備考 : 久米島町指定天然記念物(カワラナデシコ)(1972年)。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄県, 1-39.
初島住彦, 1994. 渡名喜島の植物. 鹿児島の植物(鹿児島植物同好会会誌), (13): 21-41.
宮脇 昭・仲田栄二, 2001. 外来植生の在来植生に対する影響と対策の検討. “渡名喜島伝統集落周辺域における自然的歴史的景観の保存活用調査”, (財)日本ナショナルトラスト, 東京, 37-46, 77-93.
阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査II(栗国島・渡名喜島). 日本植物園協会誌, (51): 80-85.

執筆者名 : 横田昌嗣*・新城和治*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : ハマツメクサ
分類 : ナデシコ科 (APG 科名: ナデシコ科)
学名 : *Sagina maxima* A. Gray
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。茎は高さ 10~25 cm。根葉は束生し、多肉質、針形、長さ 2~5 cm、茎葉は線形、長さ 5~10 mm。花は白色で葉腋に単生する。

分布域(県外) : 樺太、北海道、本州、四国、九州、奄美諸島、喜界島、朝鮮、台湾、中国。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 海浜の砂地に小群状に生える。

生育状況 : 東アジアに広く分布するが、琉球列島での生育地は狭く、個体数も限られている。

減少の要因 : 自生地の開発(海岸砂防堤などの造成)。

備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。

執筆者名 : 立石庸一*・横田昌嗣(追補)

和名 : オカヒジキ
分類 : アカザ科 (APG 科名: ヒユ科)
学名 : *Salsola komarovii* Iljin
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 一年草で茎は匍匐する。葉は多肉質で線状円柱形、長さ1~2 cm、径2 cmくらいで刺端。花は腋生、単立する。花被片は5個で披針形、白色に淡黄色の線がある。
- 分布域(県外) : 千島、樺太、北海道、本州、四国、九州、種子島、屋久島。
- 県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、屋我地島、与那国島。
- 生育環境 : 台風や大潮時に冠水する海岸の砂泥地に生える。
- 生育状況 : 沖縄島の本部町では1994年に小群落が、屋我地島では1993年に1個体が見られた。伊是名島では2004年に小群落が確認された。
- 学術的価値 : 分布域の南限である。
- 減少の要因 : 自生地の開発(採砂・護岸工事)。

執筆者名 : 新城和治*・仲田栄二*

- 和名 : **インドヒモカズラ**
- 分類 : ヒユ科 (APG科名: ヒユ科)
- 学名 : *Deeringia polysperma* (Roxb.) Miq.
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

- 形態の特徴 : 長さ5 mになる常緑のつる性亜低木。葉は互生し、卵状披針形~披針形、長さ5~13 cm。花序は腋生し、花冠は緑白色、径約4 mm。液果は白色、球形、径4 mm、種子は黒色、径1 mm。
- 分布域(県外) : 台湾、中国南部、インド、マレーシア。
- 県内の分布 : 宮古島、大神島、来間島、石垣島、西表島、小浜島、波照間島。
- 生育環境 : 低地の石灰岩地に生える。
- 生育状況 : 石垣島の3ヶ所で少数個体が確認されているが、そのうちの1ヶ所は開発で失われた。今回の調査で宮古島では3ヶ所で、来間島では2ヶ所で、西表島では1ヶ所で確認されている。来間島の1ヶ所は開発が進んでおり、絶滅が危惧される。ごく最近になって小浜島の1ヶ所で新たに確認された。大神島と波照間島の現状は不明。
- 学術的価値 : 分布域の北限である。沖縄県産のものは、国外のものと形態的にやや異なる可能性が指摘(初島, 1975)されており、研究が必要である。
- 減少の要因 : 低地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。
- 備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町特別希少野生動植物種(2017)。

文献 : 初島住彦, 1975. 琉球植物誌(追加・訂正). 沖縄生物教育研究会, 那覇, 259-260.

執筆者名 : 横田昌嗣*・川上 勲*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・佐藤宣子(追補)・加島幹男(追補)

- 和名 : **クロボウモドキ**
- 分類 : バンレイシ科 (APG科名: バンレイシ科)
- 学名 : *Polyalthia liukuensis* Hatusima
- 方言名 : アカンギ(波照間島)
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の高木。幹は直立し、黒褐色。葉は革質、葉身は長楕円形、長さ15~25 cm、上面は光沢があ

る。花は夏～秋に咲き、花被片は黄緑色、長さ 10 cm、果実は赤色を経て、冬～春に黒色に熟し、種子は枕形、長さ 2～3 cm。

- 分布域（県外）：台湾（蘭嶼）。
- 県内の分布：西表島、波照間島。
- 生育環境：低地の琉球石灰岩地の自然林内に生える。
- 生育状況：ごく限られた場所に分布する。波照間島では 1ヶ所に小群状に生え、かつては保存状況は良好であったが、近年の台風による風害で生育地の環境が悪化している。西表島では 3ヶ所で確認されており、そのうち 1ヶ所では十数個体が開花結実しており、他の 1ヶ所では数個体の開花結実個体が確認されている。西表島の 3ヶ所の自生地では、ダム建設や農地造成が進んでおり、生育環境が悪化しており、既に多くの個体が失われた可能性がある。
- 学術的価値：熱帯系のバンレイシ科のアジアでの北限自生地である。本種は *Polyalthia* 属の種として記載され (Hatusima, 1979)、以後近年まで *Polyalthia* 属の種として取り扱われていたが、近年の分子系統学的な研究によって、*Polyalthia* 属を複数の属に細分する見解が提出され、本種をインドからオーストラリア北部にかけて分布する *Monoon* 属に移す分類学的見解が発表されている (Xu *et al.*, 2012)。その場合、本種の学名は *Monoon liukiunense* (Hatus.) B. Xue *et* R. M. K. Saunders となる。*Monoon* 属としても、本種は属の分布域の北限に位置し、生物地理学上貴重である。
- 減少の要因：自生地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。
- 保全対策：本種の自生地は天然記念物に指定するなどして、保護する必要がある。
- 備考：竹富町特別希少野生動植物種（2017）。

- 文献：Hatusima, S., 1979. A new species of *Polyalthia* (Annonaceae) from the Ryukyus. *J. Geobot.*, 26(4): 86-87.
 Xue, B., Y. C. F. Su, D. C. Thomas & R. M. K. Saunders., 2012. Pruning the polyphyletic genus *Polyalthia* (Annonaceae) and resurrecting the genus *Monoon*. *Taxon*, 61(5): 1021-1039.
 宮城康一・新城和治, 1986. 琉球列島植物分布資料 3. 沖縄生物学会誌, (24) : 73-74.
 新納義馬, 1981. 竹富町波照間島の御嶽林. “沖縄県天然記念物調査シリーズ第 21 集, 沖縄県社寺・御嶽林調査報告”, 沖縄県教育委員会, 247-267.

執筆者名：新里孝和*・安田恵子*・加島幹男*・横田昌嗣(追補)

- 和名：ケスナヅル
- 分類：クスノキ科 (APG 科名: クスノキ科)
- 学名：*Cassytha filiformis* L. var. *duipraticola* Hatusima
- 方言名：ホーダイグサ (伊是名島)、ニーナシカンジャ (沖縄島/スナヅル・イトスナヅルを含む)
- カテゴリー：絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー：絶滅危惧II類 (VU)

- 形態の特徴：つる性の寄生植物。茎はスナヅルより細く径 1 mm 以下で、匍匐し、全株褐毛が多く、黄緑色。花序は長さ約 1 cm、花は 2～5 個。果実は球形で小さく、径約 5 mm。
- 県内の分布：伊平屋島、伊是名島、沖縄島。
- 生育環境：やや乾燥した日当りのよい草地や低木林の林縁に生え、オオマツバシバやシバニッケイなどに寄生する。
- 生育状況：沖縄島では北部から中部に数ヶ所の自生が知られるが、個体数は少ない。伊是名島では数ヶ所に産し、やや個体数は多い。伊平屋島では、数ヶ所に産する。いずれの場所でも個体数は限られており、開発（ゴルフ場、道路建設、公共施設建設など）で生育地が減少しつつある。
- 学術的価値：かつては沖縄諸島とオーストラリアに隔離分布する植物地理学上の貴重種とされていたが、近年の分子系統学的な研究によってオーストラリア産のものは異なり、スナヅルに近いことが判明している (Kokubugata *et al.*, 2012)。スナヅルと異なり、海岸よりはやや内陸に入った乾燥した低木林

の低木に寄生し、茎はスナヅルより細く、毛が多いことで区別される。分布域が沖縄諸島に限られ、固有変種であることから、スナヅルと明確に区別できるものであるのか、今後の詳細な研究が必要である。

減少の要因 : 自生地の開発 (ゴルフ場、農林道など)。もともと自生地が限られている。

保全対策 : 生育地の保全。

文献 : Hatusima, S., 1976. On some species of the Lauraceae from Japan and Taiwan (3). *J. Geobot.*, 24(2): 35-38.
 Kokubugata, G., K. Nakamura, P. I. Forster, G. W. Wilson, A. E. Holland, Y. Hirayama & M. Yokota, 2012. *Cassytha pubescens* and *C. glabella* (Lauraceae) are not disjunctly distributed between Australia and the Ryukyu Archipelago of Japan. evidence from morphological and molecular data. *Australian Systematic Botany*, 25: 364-373.
 仲田栄二 (編), 1995. ふるさとの草木, 伊是名諸島の植物図鑑. 伊是名村教育委員会, 119pp.
 阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 (伊是名島・久米島). “事業年報 (平成 26 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.

執筆者名 : 横田昌嗣*・新里孝和*・横田昌嗣(追補)

和名 : イトスナヅル

分類 : クスノキ科 (APG 科名: クスノキ科)

学名 : *Cassytha pergracilis* Hatusima

方言名 : ニーナシカンジャ (沖縄島/スナヅル・ケスナヅルを含む)

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : つる性の寄生植物。茎はケスナヅルより細く、径 0.3~0.5 mm、無毛、帯赤褐色。穂状花序は 2~3 花をつけ、長さ約 1 cm。花は乳白色、長さ 1 mm。核果は広楕円形、長さ約 3.5 mm、黒熟する。

県内の分布 : 伊是名島、渡嘉敷島、久米島。

生育環境 : リュウキュウマツ林域の乾燥した、日当たりの良いやせた土地に生え、オオマツバシバやイガクサに限って寄生する (Kokubugata & Yokota, 2012)。スナヅルやケスナヅルと異なり、植物体にアントシアン系の色素を持ち (Murai *et al.*, 2008)、通常は赤褐色を呈する。

生育状況 : 伊是名島ではケスナヅルとほぼ同所的に生える場所があるが、生育地がより限られ、個体数はさらに少ない。久米島の現状は不明で、絶滅した可能性が高い。今回の調査で渡嘉敷島で初めて生育が確認されたが、1ヶ所で確認されただけで、個体数は極めて少ない。

学術的価値 : かつては沖縄諸島とオーストラリアに隔離分布する種と見なされていたが、近年の分子系統学的な研究によりオーストラリア固有の *C. glabella* R. Br. とは別種で、沖縄島の固有種であることが判っている (Kokubugata *et al.*, 2012)。近縁種はオーストラリアからインドにかけて点々と分布する *C. capillaris* Meisn. で、当初考えられていたオーストラリア要素の種ではないにしても、*C. capillaris* の分布域からはずれた著しい隔離分布を示し、植物地理学上の貴重種と考えられる。

減少の要因 : 自生地の開発 (原野開発、森林伐採、土砂の採取)。もともと自生地と個体数が限られている。

保全対策 : 生育地の保全。

備考 : 伊是名島の自生地の一つは沖縄県指定の天然記念物として保護されている。

文献 : Hatusima, S., 1971. On some species of the Lauraceae from Japan and Taiwan (2). *J. Geobot.*, 19(1-2): 25-28.
 Hatusima, S., 1976. On some species of the Lauraceae from Japan and Taiwan (3). *J. Geobot.*, 24(2): 35-38.
 初島住彦, 1978. 日本新分布植物. 北陸の植物, 26 (3) : 70-71.
 初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄県, 1-39.

Kokubugata, G., K. Nakamura, P.I. Forster, G.W. Wilson, A. E. Holland, Y. Hirayama & M. Yokota, 2012. *Cassytha pubescens* and *C. glabella* (Lauraceae) are not disjunctly distributed between Australia and the Ryukyu Archipelago of Japan. evidence from morphological and molecular data. Australian Systematic Botany, 25: 364-373.

Kokubugata, G. & M. Yokota, 2012. Host specificity of *Cassytha filiformis* and *C. pergracilis* (Lauraceae) in the Ryukyu Archipelago. Bull. Natl. Mus. Sci., Ser. B, 38(2): 47-53.

Murai, Y., G. Kokubugata, M. Yokota, J. Kitajima & T. Iwashina, 2008. Flavonoids and anthocyanins from six *Cassytha* taxa (Lauraceae) as taxonomic markers. Biochemical Systematics and Ecology 36(9): 745-748.

仲田栄二, 1974. 伊平屋・伊是名諸島の植物. “伊平屋列島文化誌”, 仲田清英 (編), 41-107.

阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 (伊是名島・久米島). “事業年報 (平成 26 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.

執筆者名 : 横田昌嗣*・新里孝和*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・國府方吾郎(追補)

和名 : マルバニツケイ (コウチニツケイ)

分類 : クスノキ科 (APG 科名: クスノキ科)

学名 : *Cinnamomum daphnoides* Sieb. et Zucc.

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 常緑小高木。若枝は 4 稜形で細毛を密生する。葉は対生または互生し、倒卵形または長楕円形で長さ 3~6 cm、幅 1.2~3 cm。花序は長梗を有する。果実は楕円形、黒紫色に熟する。

分布域 (県外) : 九州、薩南諸島、種子島、屋久島、トカラ列島、奄美大島。

県内の分布 : 硫黄島。

生育環境 : 海岸林と山頂部の低木林中に生える。

生育状況 : 硫黄島では生育地はごく限られるが、群落を形成し、個体数はやや多い。硫黄島は、1967 年以降は火山活動のため無人島となっており、自生地が開発される恐れはない。

学術的価値 : 沖縄県での唯一の産地で、分布域の南限である。また、琉球列島から九州南部を経て、九州西部地域に分布し、九州東部には分布しない「九州西廻り分布植物」の一つに挙げられる (中西, 1996)。琉球列島の植物相の成立史を解明するために重要な例である。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。自生地は活火山の火口周辺の斜面に限られ、活火山は活動を続けているため、今後大規模な噴火などが起これば自生地が消失する恐れがある。

保全対策 : 生育地の保全。

文献 : 中西弘樹, 1996. 九州西廻り分布植物: 定義、構成、起源. 植物分類・地理, 47: 113-124.

立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2001. 沖縄県硫黄島の植物相とその構成種の散布様式. 沖縄生物学会誌, (39) : 49-76.

立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2001. 沖縄県硫黄島で見出された分類学的あるいは植物地理学的に注目される維管束植物. 沖縄生物学会誌, (39) : 77-92.

立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2002. 硫黄島の植物相. “沖縄県史資料編 13 硫黄島”, 沖縄県文化振興会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 57-104.

執筆者名 : 新里孝和*・新城和治*・横田昌嗣(追補)

和名 : オキナワヤマコウバシ (オキナワコウバシ)

分類 : クスノキ科 (APG 科名: クスノキ科)

- 学 名 : *Lindera communis* Hemsl. var. *okinawensis* Hatusima
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態の特徴 : 常緑の小高木。若枝ははじめ伏毛があるが後に無毛となる。葉は倒披針状長楕円形、長さ4~8 cm、上面は無毛、下面は灰白色。傘形花序をつけ、総花梗は長さ2~3 cm、小花梗は長さ2 mm。
- 県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 沖縄島では中部と南部の主として石灰岩地の低地の林縁や林内に生える。石垣島と西表島では非石灰岩地に生えるが、自生地、個体数ともきわめて少ない。西表島では1980年代に1度だけ確認されているが、近年は見つかっていない。
- 生育状況 : 生育地が限られ、個体数も少ない。ゴルフ場や道路の建設で、自生地の消滅が進んでいる。
- 学術的価値 : 沖縄島の固有変種である。
- 減少の要因 : 自生地の開発。森林の伐採。もともと自生地と個体数が限られている。
- 保全対策 : 生育地の保全と増殖。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。
- 文献 : Hatusima, S., 1971. On some species of the Lauraceae from Japan and Taiwan (2). J. Geobot., 19(1-2): 25-28.
- 執筆者名 : 新里孝和*・横田昌嗣(追補)

- 和 名 : **ダイトウシロダモ**
- 分類 : クスノキ科 (APG科名: クスノキ科)
- 学 名 : *Neolitsea sericea* (Blume) Koidz. var. *argentea* Hatusima
- カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)
- 形態の特徴 : 常緑の中高木。幹は直立し、高さ10 mに達する。葉は小枝の先に束生し、葉身は長楕円形、長さ7~15 cm、下面は白色を帯び、葉柄は長さ2~4 cm、果実は倒卵形で赤熟し、シロダモより大きく、長さ1.5~1.8 cm。
- 県内の分布 : 北大東島、南大東島。
- 生育環境 : 石灰岩地の常緑樹林内に生える。
- 生育状況 : 幕や神社の森などにわずかに残っているだけで、島の開拓に伴う森林の減少で個体数はごく少ない。
- 学術的価値 : 北大東島、南大東島の固有変種。
- 減少の要因 : 自生地の開発。森林の伐採。もともと自生地と個体数が限られている。
- 保全対策 : 生育地の保存指定。島全体の森林面積を増やす必要がある。
- 文献 : Hatusima, S., 1976. On some species of the Lauraceae from Japan and Taiwan (3). J. Geobot., 24(2): 35-38.
 西浜良修, 2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—。南大東村教育委員会, 77pp.
- 執筆者名 : 新里孝和*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)・城間盛男(追補)

- 和 名 : **テングノハナ**
- 分類 : ハスノハギリ科 (APG科名: ハスノハギリ科)
- 学 名 : *Illigera luzonensis* (Presl) Merr.
- カテゴリ : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリ: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

- 形態の特徴** : 常緑のつる性植物。茎の下部は地上を這って根や枝を頻繁に出し、上部は他物にからまり、高さ 10 m に達する。葉は長い葉柄をもつ 3 出複葉で、小葉は卵形から円形、長さ 5~10 cm、頂端は微突形から鋭劣形、基部は円形または心形、葉枕がある。散房花序は腋生し、花は春と秋に咲き、午前中に開き午後には閉じ、帯紫赤色、長さ 8~10 mm、両性花。果実は側方に翼が発達し、長さ 2~3 cm、幅 4~5 cm。
- 分布域（県外）** : 台湾、フィリピン。
- 県内の分布** : 石垣島。
- 生育環境** : 海岸林に生える。
- 生育状況** : 生育地は 3 ヶ所しか知られておらず、個体数も少なかったが、自生地の多くは開発により消失し、現在確認される個体群は、1 ヶ所の 2 個体に過ぎない（早川ら, 2015）。
- 学術的価値** : 分布域の北限地である。石垣島の集団は葉の両面に粘性のある毛を密生することから、フィリピンの集団とは形態的に差異があり、異なる分類群である可能性がある。また、分子系統学的な研究で石垣島とフィリピンの個体群は、遺伝的に異なる可能性が示唆されている（早川ら, 2015）。
- 減少の要因** : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。
- 保全対策** : 海岸林の保全。個体数は危機的な状況にあるので、人工増殖を計る必要がある。
- 備考** : 石垣市自然環境保全条例保全種（2015 年）。

- 文献** : 大井次三郎, 1937. テングノハナ石垣島に出づ. 植物分類地理, 6(1) : 56.
早川宗志・楠本良延・西田智子・前津栄信, 2015. 石垣島産テングノハナ（ハスノハギリ科）の花
期と系統的背景. 分類, 15(2) : 147-157.

執筆者名 : 立石庸一*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名** : リュウキュウヒキノカサ
- 分類** : キンポウゲ科 (APG 科名: キンポウゲ科)
- 学名** : *Ranunculus extorris* Hance var. *luchuensis* (Nakai) Tamura
- カテゴリー** : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形態の特徴** : 高さ 15~30 cm の多年草。ひげ状にのびる根のほかにも数本の紡錘形に肥大した根がある。根出葉は分裂しないか 3~5 浅~深裂し、葉柄は長さ 2~5 cm。花茎は 1~5 本でて、その先端に直径 12~17 mm の黄色花をつける。花弁は 5 枚あり、倒卵形、長さ 6~7 mm、光沢があり、基部に蜜腺がある。集合果は広楕円形、長さ 4~7 mm、一つ一つの瘦果は円形で長さ 1.2 mm、少し曲がった花柱を残す。
- 分布域（県外）** : 喜界島、徳之島、沖永良部島。
- 県内の分布** : 沖縄島北部、伊江島、瀬底島。
- 生育環境** : 海岸や低地の原野の湿ったところや、畑の畦の草地に生える。
- 生育状況** : 沖縄島本部半島と伊江島に限定され、個体数も少ない。伊江島では、ゆりの丘に群生地があったが、1993~5 年にこの一帯が「テッポウユリの公園（リリーフィールド公園）」をつくるために開発され、全滅してしまった。現在は米軍演習地の中に細々と残っているにすぎない。本部半島では 2 ヶ所に生育が確認されているが、畑の畦の草地に生え、個体数はきわめて少ない。しばしば除草剤が散布され、個体数が減少している。瀬底島からも記録があるが（高良, 2004）、現状不明。沖縄島の本部町からは、八重咲きの固有品種が記載されている（高良, 2004）。
- 学術的価値** : 琉球列島の固有変種で、県内では希産種である。
- 減少の要因** : 自生地の開発。農薬の使用。もともと自生地と個体数が少ない。
- 備考** : 本州（関東以西）から九州の日当りの良い草地に生え、中国、台湾、朝鮮に分布するヒキノカサ *R. extorris* の変種で、これに比べ全体が大きく、根出葉は分裂しないものが多い。

文 献 : 初島住彦・宮城康一, 1974. 伊江島の植物. “沖縄海岸国立公園拡張候補地学術調査報告 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島”, 沖縄県, 57-76.
 新里孝和・嵩原建二, 2002. 伊江島の植物図鑑. 伊江村教育委員会, 201pp.
 高良拓夫, 2004. リュウキュウヒキノカサの一品種ヤエリュウキュウヒキノカサ (新称). 植物地理分類研究, 52 : 89.

執筆者名 : 立石庸一*・高良拓夫*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ウマノアシガタ

分 類 : キンポウゲ科 (APG 科名: キンポウゲ科)

学 名 : *Ranunculus japonicus* Thunb.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 30~60 cm の多年草。全体に開出した長毛があり、根茎は短い。根出葉は数個、長柄があり、葉身は円心形、長さ 2.5~7 cm、掌状に 3~5 中~深裂し、裂片はさらに 2~3 裂する。花は枝分かれした長い花柄の先につき、直径約 2 cm、5 枚の花弁は黄色、広倒卵形で舟形、長さ 10~12 mm、光沢がある。集合果は球形で、一つ一つの瘦果は倒卵形、長さ 2.5 mm、周囲に縁取りがあり、先端に残る花柱はごく短く、先は曲がらない。

分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、朝鮮、台湾、中国。

県内の分布 : 沖縄島北部、瀬底島、伊江島。

生育環境 : 日当りのよい原野や露岩地、集落周辺の草地に生える。

生育状況 : 本部半島と伊江島に生育地が限定され、個体数もきわめて少ない。伊江島ではゆりの丘(リリーフイールド公園)にわずかに見られたが、開発のため、前記リュウキュウヒキノカサとともに消失してしまった。個体数が少ないので、採集や、開発などによって消失する恐れがある。瀬底島では近年は確認されない。

学術的価値 : 琉球列島では隔離分布し、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと個体数が少ない。自生地の開発。園芸用の採集。

保全対策 : 自生地の保全のためには、草地の維持が必要で、適切な時期に刈取などを行う必要がある。

文 献 : 初島住彦・宮城康一, 1974. 伊江島の植物. “沖縄海岸国立公園拡張候補地学術調査報告 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島”, 沖縄県, 57-76.

執筆者名 : 立石庸一*・新城和治*・横田昌嗣(追補)

和 名 : アキカラマツ

分 類 : キンポウゲ科 (APG 科名: キンポウゲ科)

学 名 : *Thalictrum mimus* L. var. *hypoleucum* (Sieb. et Zucc.) Miq.

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は高さ 15~30 cm。葉は 1~2 回三出複葉で、小葉は広卵形~円形、長さ 1 cm。円錐花序は頂生し、数花をつける。花は淡黄緑色で、萼片は長楕円形、長さ 2 mm。瘦果は 2~6 個つき、狭倒卵形。

分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、トカラ列島（臥蛇島）、朝鮮、中国東北部。
県内の分布：沖縄島北部。
生育環境：山地の自然林内の滝の崖面に生える。
生育状況：自生地は1ヶ所のみ知られる。自生地は開発の恐れはないが、極めて個体数は少なく、十数個体しか確認されていない。採集されれば、容易に絶滅する。
学術的価値：本来温帯系の植物で、琉球列島では希産種である。奄美大島と沖永良部島の報告は疑問視されており、琉球列島での確実な産地は上記の1ヶ所だけだが、そこは他県における生育環境とは全く異なる。また、植物体の各部分が小形で、形態について詳しい調査が必要である。
減少の要因：もともと自生地と個体数が限られている。

文献：横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

執筆者名：横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名：オオツヅラフジ
分類：ツヅラフジ科 (APG 科名: ツヅラフジ科)
学名：*Sinomenium acutum* (Thunb.) Rehd. et Wilson
カテゴリー：準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：落葉性の藤本。葉は互生し、長い葉柄をもち、葉身は5~7脈があり、卵円形または円形で長さ6~15 cm、裏面は通常無毛。夏時に白色の小花をつけた円錐花序をつける。
分布域（県外）：本州（関東南部以西）、四国、九州、薩摩黒島、屋久島、種子島、奄美大島、喜界島、台湾、中国。
県内の分布：沖縄島、宮古島。
生育環境：沖縄島では、北部、本部半島、南部の石灰岩地帯の林内や林縁にまれに見られる。宮古島でも自生地と個体数は極めて限られる。
生育状況：自生地、個体数とも少ない。
減少の要因：自生地の開発。もともと自生地が限られている。

執筆者名：新城和治*・川上 勲*・横田昌嗣(追補)

和名：ジュンサイ
分類：スイレン科 (APG 科名: ジュンサイ科)
学名：*Brasenia schreberii* J. F. Gmelin
カテゴリー：絶滅 (EX) 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：浮葉性の多年生水草。葉身中部に葉柄がつく盾形で、楕円形、長さ5~12 mm、水面に浮かび、葉裏は紫色。茎や葉の裏面、若芽などが透明な粘質物に覆われている。花は1~1.6 cmで紫色。
分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、種子島、東南アジア、熱帯アフリカ、オーストラリア、北アメリカ、キューバ。
県内の分布：沖縄島中部（御殿敷）。
生育環境：池や沼に生える。
生育状況：唯一の自生地は軍用地で、生育状況は現在不明であるが、絶滅した可能性が高い。
学術的価値：県内唯一の産地である。

減少の要因 : 生育地の開発。もともと自生地が限られている。

執筆者名 : 新城和治*・新島義龍*

和名 : ハンゲシヨウ

分類 : ドクダミ科 (APG 科名: ドクダミ科)

学名 : *Saururus chinensis* (Lour.) Baill.

方言名 : ヒーラーグサ (沖縄島)

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 50 cm 内外の多年草。全株に独特の臭気がある。葉は互生し、卵状心形、長さ 9~15 cm、夏頃には一部が黄白色になる。穂状花序は腋生し、小花を多数つける。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美諸島、朝鮮、台湾、中国、インドシナ半島、インド、フィリピン。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、久米島、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、小浜島。

生育環境 : 海岸近くの水辺、湿地、廃田などに生える。

生育状況 : 沖縄島では北部から中部にかけて数ヶ所で確認されている。久米島では自生地は 1ヶ所に限られるが、個体数は多い。宮古島では、数ヶ所で確認されている。西表島では、数ヶ所で確認されている。局所的に多くの個体が生育する場所もあるが、全体としては湿地の開発に伴って生育環境が減少している。

減少の要因 : 自生地の開発。

備考 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 知念美香, 1993. 石西礁湖小島嶼の植物相。沖縄島嶼研究, (11) : 75-105.

仲田栄二 (編), 1995. ふるさとの草木, 伊是名諸島の植物図鑑。伊是名村教育委員会, 119pp.

執筆者名 : 新城和治*・新島義龍*・川上 勲*・横田昌嗣(追補)

和名 : ケナシサダソウ

分類 : コシヨウ科 (APG 科名: コシヨウ科)

学名 : *Peperomia japonica* Makino f. *okinawensis* (Yamazaki) Hatusima

カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多肉質の多年草。サダソウに比べ全株無毛またはほとんど無毛で葉の表面には光沢がある。

分布域 (県外) : 九州南部、徳之島、沖永良部島。

県内の分布 : 伊江島、沖縄島北部、北大東島、南大東島。

生育環境 : 石灰岩地の岩上に生える。

生育状況 : 有毛型のサダソウは沖縄県内の各地に普通に見られるが、無毛型のケナシサダソウは自生地、個体数とも極めて少ない。伊江島、北大東島、南大東島ではケナシサダソウだけが個体群を形成するが、沖縄島北部ではサダソウとケナシサダソウがごく接近して生えている場所がある。

学術的価値 : 分布域の南限で、基準産地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 本品種を独立種オキナワスナゴシヨウ *P. okinawensis* とする意見がある (Yamazaki, 1992)。

文 献 : Yamazaki, T., 1992. A new species of *Peperomia* from the Ryukyus. J. Jpn. Bot., 67: 15-18.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

和 名 : コウシュンウマノズクサ

分 類 : ウマノズクサ科 (APG 科名: ウマノズクサ科)

学 名 : *Aristolochia tubiflora* Dunn

方 言 名 : ゴッコゴギー (宮古島)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形 態 の 特 徴 : 全株無毛のつる性多年草。葉身は卵形で長さ 6~12 cm、上面は光沢があり下面は淡白色。花は筒形、基部は丸くふくれ、径 4 mm 程度、黄褐色、先端は唇状になり、卵状長楕円形、長さ 30 mm 程度、茶褐色。室果は倒卵状広楕円形、長さ 3~4 cm、幅 2 cm 程度。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、フィリピン、マレーシア、インド。

県 内 の 分 布 : 宮古島、池間島、大神島、伊良部島、来間島、魚釣島。

生 育 環 境 : 海岸や低地の明るい林縁部に生える。

生 育 状 況 : 宮古諸島では、点々と広く分布するが、個体数は限られる。魚釣島の現状は不明。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。

減 少 の 要 因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られている。

備 考 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。

文 献 : 初島住彦・天野鉄夫・宮城康一, 1975. 宮古群島の植物. 沖縄自然研究会 (編), 沖縄県自然公園候補地学術調査報告 (宮古群島), 沖縄県, 31-70.

執 筆 者 名 : 新城和治*・新島義龍*・洲鎌栄徳*・横田昌嗣(追補)

和 名 : オモロカンアオイ

分 類 : ウマノズクサ科 (APG 科名: ウマノズクサ科)

学 名 : *Asarum dissitum* F. Maek. ex Hatusima

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形 態 の 特 徴 : 常緑の多年草。葉身は卵心形で長さ 6~11 cm、上面は無毛で、淡緑の小斑が散在し、下面は脈上に毛がある。萼筒は楕円体で長さは 1 cm 内外、先から 1/3 くらいのところで軽くくびれて、中細身になる。雄蕊は 6 個、雌蕊は 3 個。

県 内 の 分 布 : 石垣島。

生 育 環 境 : 高地の自然林の林床に生える。

生 育 状 況 : 自生地は限られる。かつては自生地内では、至る所で見られたが、最近では歩道沿いなどの目につくところでは採集により個体数は著しく減少している。

学 術 的 価 値 : 石垣島の固有種である。琉球列島における隔離による種分化の顕著な例として、学術上貴重である。

減 少 の 要 因 : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が限られている。採集により個体数は減少しているが、人跡未踏の場所にはまだかなりの個体数が残されているので、NT と判定する。

文献 : Hatusima, S. & E. Yamahata, 1988. Illegitimately published taxa of *Asarum* from Japan. J. Phytogeogr. Taxon., 36: 1-8.

執筆者名 : 新城和治*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

和名 : **エクボサイシン (エクボカンアオイ)**

分類 : ウマノスズクサ科 (APG 科名: ウマノスズクサ科)

学名 : *Asarum gelasinum* (F. Maek.) Hatusima

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。葉身は卵心形で長さ 10 cm 内外、裏面は帯紫色。萼筒は短く 1 cm 内外で、口輪がなく広く開口する。雄蕊は 6 個、雌蕊は 3~4 個。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 島内に広く分布するが、歩道沿いなどの人通りが多くて目につきやすい場所では、個体数は急減しており、場所によってはほとんど見ることができなくなった自生地もある。

学術的価値 : 西表島の固有種である。琉球列島における隔離による種分化の顕著な例として、学術上貴重である。

減少の要因 : 園芸用の採集。採集により個体数は減少しているが、人跡未踏の場所にはまだかなりの個体数が残されているので、NT と判定する。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : Hatusima, S. & E. Yamahata, 1988. Illegitimately published taxa of *Asarum* from Japan. J. Phytogeogr. Taxon., 36: 1-8.

執筆者名 : 新城和治*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

和名 : **オナガサイシン (カツウダケカンアオイ)**

分類 : ウマノスズクサ科 (APG 科名: ウマノスズクサ科)

学名 : *Asarum leptophyllum* Hayata

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。株全体に毛が多い。葉身は卵状楕円形、まれに三角形で長さ 7~18 cm、先は鋭頭。萼片 3 枚が寄りそろって萼筒をつくり、先が尾状になり外側には白毛が密生する。雄蕊は 9~10 個、雌蕊は 6 個。

分布域(県外) : 台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 石灰岩地の林床や石灰岩の岩隙に生える。

生育状況 : 自生地はごく狭い範囲に限られ、個体数は極めて少ない。

学術的価値 : 分布域の北限であり、著しい隔離分布を示し、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地が限られている。

備考 : 自生地は沖縄県指定の天然保護区域として保護されているが、最近歩道建設が無秩序に進んでおり、歩道周辺を中心に採集が進んでいる。特定国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。特定国内希少野生動植物 (オナガサイシン) (2017 年)。

執筆者名 : 新城和治*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

和名 : モノドラカンアオイ

分類 : ウマノスズクサ科 (APG 科名: ウマノスズクサ科)

学名 : *Asarum monodoriflorum* Hatusima et Yamahata

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。葉身は卵心形、裏面は帯紫色で、脈上に短毛がある。萼片が萼筒よりも大きく、萼片の内側に密毛がある。雄蕊は 12 個、雌蕊は 6 個。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : ごく限られた地域の山地の林床に生える。

生育状況 : 自生地は 1 ヶ所のごく狭い範囲に限られるうえ、採集により個体数は激減している。以前は点々と個体が確認されたが、最近ほとんど見かけることがなくなった。

学術的価値 : 西表島の固有種である。

減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 特定国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。特定国内希少野生動植物 (2018 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Critically Endangered (CR)。

文献 : Hatusima, S. & E. Yamahata, 1989. Illegitimately published taxa of *Asarum* from Japan (II). J. Phytogeogr. Taxon., 37: 71-73.

執筆者名 : 新城和治*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヒナカンアオイ

分類 : ウマノスズクサ科 (APG 科名: ウマノスズクサ科)

学名 : *Asarum okinawensis* Hatusima

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。沖縄県産の種では最も小形の種類。葉の表面は深緑色で毛がなく、卵心形で長さ 5~6 cm くらい。萼筒は長さ 7 mm くらいで上部にくびれがない。雄蕊は 12 個、雌蕊は 6 個。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の石灰岩地帯の林床や石灰岩の岩隙に生える。自生地は 1 ヶ所のみで、個体数は極めて少ない。

生育状況 : 個体数は激減し、現在はごく少数の個体が確認されているだけである。消失したもののうち数個体は、自生する岩と共に割り取られ持ち去られたものである。

学術的価値 : 沖縄島の固有種である。

減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 自生地は沖縄県指定の天然保護区域として保護されているが、最近歩道建設が無秩序に進んでおり、歩道周辺を中心に採集が進んでいる。特定国内希少野生動植物種に指定されており、採集や無許可の譲渡などは法律で禁じられている。特定国内希少野生動植物 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Critically Endangered (CR)。

文献 : Hatusima, S., 1968. Five new species of *Asarum* from southern Kyushu and the Ryukyus. J. Jpn. Bot., 43: 429-434.

執筆者名 : 新城和治*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

和名 : センカクカンアオイ (センカクアオイ)

分類 : ウマノスズクサ科 (APG 科名: ウマノスズクサ科)

学名 : *Asarum senkakuinsulare* Hatusima

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。葉身は卵心形、長さ 10~17 cm 内外。暗緑色で両面ともに毛がなく表面に光沢がある。雄蕊は 12 個、雌蕊は 6 個。

県内の分布 : 魚釣島。

生育環境 : 山地の林床に生える。

生育状況 : もともと極めて狭い範囲に産し、個体数は極めて少ない。1991 年と 1999 年の調査では、自生地を訪れてはいないものの、野生化ヤギの増殖により魚釣島の海岸から山頂まで至るところで林床の攪乱が確認されたことから (横畑・横田・太田, 2009)、本種の絶滅が危惧される。

学術的価値 : 魚釣島の固有種である。

減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が限られる。野生化ヤギによる踏みつけと森林の破壊。

保全対策 : 野生化ヤギの駆除が急務である。

文献 : Hatusima, S., 1976. A new species of *Asarum* from the Ryukyus. *J. Geobot.*, 24: 39-40.

横畑泰志・横田昌嗣・太田英利, 2009. 尖閣諸島魚釣島の生物相と野生化ヤギ問題. “IPSHU 研究報告シリーズ研究報告 No. 42 (松尾雅嗣教授退職記念論文集)”, 広島大学平和科学センター, 広島市, 307-326.

執筆者名 : 新城和治*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヤエヤマカンアオイ

分類 : ウマノスズクサ科 (APG 科名: ウマノスズクサ科)

学名 : *Asarum yaeyamensis* Hatusima

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。沖縄県産の種の中では最も大形になる種類。葉身は卵心形、長さ 15 cm、全体に毛がなく革質で、上面に光沢がある。花は大形で、赤褐色、雄蕊は 12 個、雌蕊は 6 個。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 山地の林床や溪流沿いの崖に生える。

生育状況 : 自生地は 1 ヶ所のみで、ごく狭い範囲に少数個体が生える。他の 1 ヶ所に産するという記述がある文献 (水谷ら, 2004) が見つかったが、2016 年にその場所を踏査したものの、カンアオイ属の種は全く確認することができなかった。

学術的価値 : 西表島の固有種である。ただし最近、台湾に本種が産するという報告 (Lu *et al.*, 2009) がある。

減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地に限られる。

備考 : 特定国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。特定国内希少野生動植物 (2018 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : Hatusima, S., 1968. Five new species of *Asarum* from southern Kyushu and the Ryukyus. *J. Jpn. Bot.*, 43: 429-

434.

Lu, C.-T., C.-W. Chen & J.-C. Wang, 2009. *Asarum yaeyamense* Hatusima (Aristolochiaceae) newly found in northern Taiwan. *Taiwan J. For. Sci.* 24(3): 149-57.

水谷高幸・松羽研・田中孝幸, 2004. 琉球列島に自生するアオイボクロ *Nervilia aragoana* の保護を目的とした生態学的研究. 九州東海大学農学部紀要, 23: 51-60.

執筆者名 : 新城和治*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

和名 : **サキシマヒサカキ**

分類 : ツバキ科 (APG 科名: サカキ科)

学名 : *Eurya sakishimensis* Hatusima

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 4~5 m になる常緑の小高木。小枝は多少有毛で、不規則な縦条がある。葉は互生し、うすい革質、長楕円状楕円形か卵状披針形で微鋸歯があり、上面は無毛で光沢がある。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の常緑樹林に生える。

生育状況 : 自生地は点在するが、個体数は限られる。

学術的価値 : 石垣島、西表島の固有種である。

減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地が限られている。

備考 : ハマヒサカキと区別が微妙な個体があり、今後詳細な研究が必要である。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : Hatusima, S., 1960. Taxonomic study of the genus *Eurya* from the Ryukyu Archipelago. *Mem. Fac. Agr. Kyushu Univ.*, 14: 21-26.

執筆者名 : 横田昌嗣*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)

和名 : **クニガミヒサカキ**

分類 : ツバキ科 (APG 科名: サカキ科)

学名 : *Eurya zigzag* Masam.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の小高木。全株無毛で、小枝は緑色で稜があり、ジグザグに屈曲する。葉は互生し、硬い革質、楕円形~長楕円状披針形、長さ 4~7 cm、微鋸歯があり、葉柄は赤色を帯びる。花は小型、白色または淡紅色。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の明るい林床や、川沿いの崖に生える。

生育状況 : 現在は国頭村・東村・大宜味村に数ヶ所に知られるが、個体数は極めて少ない。恩納村の 1ヶ所からも採集されているが、米軍の射爆場であるため調査することができず、現状不明。

学術的価値 : 沖縄島の固有種である。

減少の要因 : 森林の伐採。ダム建設による自生地の水没。

備考 : 本種を石垣島、西表島に産するヤエヤマヒサカキ *E. yaeyamensis* と同種とする見解があるが、葉や花の形態は全く異なっており、両者は明らかに別種である。IUCN カテゴリー: Critically

Endangered (CR)。

- 文 献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 与那川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-10, 101-117.
横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和 名 : センカクオトギリ

分 類 : オトギリソウ科 (APG 科名 : オトギリソウ科)

学 名 : *Hypericum senkakuinsulare* Hatusima

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 の 特 徴 : 高さ 60 cm になる常緑の低木。枝を多く分け、樹皮は赤褐色。葉は対生し、長さ 2.3~3.5 cm、楕円形~長楕円形で上面に多数の明点がある。花は黄色で径 4 cm 内外。

県 内 の 分 布 : 魚釣島。

生 育 環 境 : 山頂の断崖の風衝地に生える。

生 育 状 況 : 自生地はごく狭い範囲に限られ、個体数は極めて少ない。1991 年の調査では、自生地の周辺で野生化ヤギが確認されており、食害が危惧される。

学 術 的 価 値 : 魚釣島の固有種である。国内に産するオトギリソウ属の種では、唯一木本となる種である。

減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が限られる。野生化ヤギによる食害。園芸用の採集。

保 全 対 策 : 野生化ヤギの駆除が急務である。

- 文 献 : 新納義馬・玉城松栄・新城和治・宮城康一, 1971. 尖閣列島の植物. “尖閣列島学術調査報告”, 琉球大学, 37-84.
Hatusima, S., 1987. New or noteworthy plants from Japan. J. Phytogeogr. Taxon., 35(2): 63-68.
Hatusima, S., 1993. A new woody *Hypericum* from the Ryukyus. J. Geobot., 21: 2-3.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ジャニンジン

分 類 : アブラナ科 (APG 科名: アブラナ科)

学 名 : *Cardamine impatiens* L.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 一年草。茎は細く、直立して高さ 10~80 cm になる。葉は互生して、質の薄い奇数羽状複葉、2~9 対の側小葉はさらに切れ込み、葉柄の基部に小さな耳片がある。花は茎頂や葉腋の総状花序につき、花弁は 4 個で緑白色、長楕円形へら形で、長さ 2~3.5 mm。果実は長さ 15~25 mm で線形の長角果になり、2 室に多数の種子を入れる。

分 布 域 (県 外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、ユーラシアの温帯~亜熱帯。

県 内 の 分 布 : 伊平屋島、沖縄島。

- 生育環境 : 木陰や水湿地に生える。
生育状況 : 沖縄島からは、1887年に本部半島、1938年に名護市で記録されており、伊平屋島からは1924年に採集された標本があるが、以後は全く見られていなかった。ところが、2005年1月に沖縄島南部で比較的多くの個体が見出された。
学術的価値 : 沖縄島北部と沖縄島周辺の離島に共通する数少ない大陸要素植物の一つとして貴重である。
減少の要因 : 生育地の開発。

執筆者名 : 立石庸一*・高良拓夫*

-
- 和名 : リュウキュウベンケイ
分類 : ベンケイソウ科 (APG 科名: ベンケイソウ科)
学名 : *Kalanchoe integra* (Medik.) O. Ktze.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 野生絶滅 (EW)

- 形態の特徴 : 高さ 30~100 cm になる多肉の多年草。葉は有柄、へら状長楕円形で、しばしば 3 裂し、鈍鋸歯縁、長さ 5~20 cm。散房花序に黄色の花を多数つける。花冠はつぼ形で上向き、先で 4 裂する。
分布域 (県外) : 沖縄島、与論島、台湾、中国南部、インドシナ、マレーシア、インド。
県内の分布 : 沖縄島、伊江島、宮古島、多良間島。
生育環境 : 近年全く確認されていないので、生育環境は判らないが、おそらく日当たりの良い低地に生える。台湾や東南アジアでは、海岸から内陸部の山地まで、蘚苔類が生えた湿った崖に生育することを見ることが多い。
生育状況 : 伊良部島の 1ヶ所で確認されている (宇座・下地, 2003) が、生育状況の記述から判断すると栽培品が逸出した可能性が高い。その他では近年はまったく確認されておらず現状不明、沖縄県では既に絶滅した可能性がある。
減少の要因 : 自生地の開発。もともと個体数が少ない。
備考 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。

文献 : 宇座 正・下地俊充, 2003. リュウキュウベンケイの現状と課題. 熱帯植物調査研究年報 (海洋博覧会記念公園管理財団), 24: 59-66.

執筆者名 : 新城和治*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : オオクサアジサイ
分類 : ユキノシタ科 (APG 科名: アジサイ科)
学名 : *Cardiandra alternifolia* Sieb. et Zucc. subsp. *mollendorffii* (Hance) Hara et H. Ohba
カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

- 形態の特徴 : 多年草。茎は高さ 30~60 cm、多少溝があり、上部に微毛を散生する。葉は長楕円状披針形~長卵状楕円形、長さ 10~18 cm で先はとがる。無毛または粗毛が散生する。頂生の円錐花序には淡紅色の花をつける。中性花には花弁状の 2 個の萼片がある。
分布域 (県外) : 台湾、中国中部。
県内の分布 : 西表島。
生育環境 : 陰湿な樹林内の湿った崖に生える。
生育状況 : 自生地は 2 河川の流域に点在するが、個体数は少ない。

- 学 術 的 価 値 : 西表島は国内唯一の産地である。東アジアの温帯系の種で植物地理学上貴重である。奄美大島に産するアマミクサアジサイ *C. amamioshimensis* と同種とする見解があるが、アマミクサアジサイは花弁状の萼片がある中性花を欠くので、本種とは明瞭に異なる。
- 減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が少ない。
- 備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文 献 : Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 1: 37-45.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

和 名 : オキナワヒメウツギ

分 類 : ユキノシタ科 (APG科名: アジサイ科)

学 名 : *Deutzia naseana* Nakai var. *amanoi* (Hatusima) Hatusima ex H. Ohba

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形 態 の 特 徴 : 落葉性の低木。基本変種のオオシマウツギと比べて、葉は卵円形で長さ 2~3 cm と小さく、総状花序は 3~7 花をつけ少ない。

県 内 の 分 布 : 沖縄島南部。

生 育 環 境 : 日当たりの良い石灰岩地の岩壁に生える。

生 育 状 況 : 自生地が数ヶ所に限られ、個体数も少ない。

学 術 的 価 値 : 沖縄島の固有変種。

減 少 の 要 因 : 自生地の開発。もともと個体数が少ない。

備 考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2018年)。南城市指定天然記念物 (オキナワヒメウツギ群落) (1993年)。

文 献 : Ohba, H. & S. Akiyama, 1992. A taxonomic revision of *Deutzia* (Saxifragaceae, *s.l.*) in the Ryukyu Islands, S. Japan. J. Jpn. Bot., 67: 154-165.

平田義浩, 1989. 佐敷町産種子植物. "佐敷町史, 三自然", 佐敷町史編集委員会 (編), 佐敷町, 93-196.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ヤエヤマヒメウツギ

分 類 : ユキノシタ科 (APG科名: アジサイ科)

学 名 : *Deutzia yaeyamensis* Ohwi

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類 (EN)

形 態 の 特 徴 : 高さ 1~2 m になる落葉性低木。枝条は褐色で無毛。葉は楕円形~卵形で、長さ 5~13 cm、膜質、星状毛が下面にやや密生する。円錐花序は頂生し、白色の 5~10 花をつける。

県 内 の 分 布 : 西表島。

生 育 環 境 : 川沿いなどの陽当たりの良い崖に生える。

生 育 状 況 : 自生地は西表島の各地に点在するが、個体数は少ない。

学 術 的 価 値 : 西表島の固有種である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。
備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2016 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Endangered (EN)。
文献 : Ohba, H. & S. Akiyama, 1992. A taxonomic revision of *Deutzia* (Saxifragaceae, *s.l.*) in the Ryukyu Islands, S. Japan. J. Jpn. Bot., 67: 154-165.
執筆者名 : 横田昌嗣*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

和名 : トカラアジサイ
分類 : ユキノシタ科 (APG 科名: アジサイ科)
学名 : *Hydrangea kawagoeana* Koidz.
方言名 : イビキ (伊平屋島)
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 1~2 m の落葉性常緑低木。葉は対生し、膜状洋紙質で長楕円状披針形~長楕円形、長さ 5~12 cm で両面は光滑があり、粗に鋸歯がある。5~6 月頃、枝の先に偽散形状に花をつける。結実しない花 (無性花) は白色の花弁状萼 4 枚が目立ち、結実する花は小さく多い。
分布域 (県外) : 屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、沖永良部島。
県内の分布 : 伊平屋島。
生育環境 : 山地の樹下に生える。
生育状況 : 県内では自生地が限られ、個体数が少ない。主要な自生地の一つは、ダム建設により消失した。
減少の要因 : もともと自生地が限られている。ダム建設による自生地の水没。
備考 : 北琉球と中琉球に産するトカラアジサイと、石垣島と西表島に産するヤエヤマコンテリギ *H. yaeyamensis* は、台湾と中国大陸に産するカラコンテリギ *H. chinensis* と共に同種とされることもあるが、これらはいずれも外部形態や染色体数が異なり (Akiyama, 1989)、それぞれ独立種と考えられる。竹富町希少野生動植物種(カラコンテリギ) (2017 年)。
文献 : Akiyama, S., 1989. Chromosome numbers of the species in *Hydrangea chinensis*-complex in the Ryukyu Islands. J. Jpn. Bot., 64: 353-360.
執筆者名 : 横田昌嗣*・新島義龍*・山城 考*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : キンミズヒキ
分類 : バラ科 (APG 科名: バラ科)
学名 : *Agrimonia pilosa* Ledeb.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 全体に毛の多い多年草。根茎は肥厚、茎は分岐し、高さ 30~80 cm になる。葉は 3~9 個の小葉からなる奇数羽状複葉で裏面に腺点があり、頂小葉は菱状長楕円形~菱状倒卵形で、多くは先が尖り、葉柄の基部には半卵形で先が尖った大型の托葉がある。花は黄色で、枝先の総状花序に多数つき、直径 6~11 mm、花弁は 5 枚、倒卵形~狭倒卵形で大きく、長さ 2.5~6 mm。雄しべは 8~15 本。果時の萼筒は倒円錐形で、短毛があり、上縁に長さ 3 mm の上向きに展開したかぎ状の刺があり、これで動物の体毛や衣服にくっついて散布される。

分布域（県外）：シベリア、ヨーロッパ、北海道、本州、四国、九州、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、朝鮮、中国、オーストラリア。
 県内の分布：沖縄島、久米島、宮古島、石垣島。
 生育環境：山地の林床に生える。
 生育状況：1887年4月に沖縄島で田代安定により採集され（Ito & Matsumura, 1899; Koidzumi, 1913）、1930年代までは時折採集されているが、近年は確認されていない。
 減少の要因：生育地の開発。もともと自生地が限られている。
 備考：奄美諸島では高地にやや普通に生える。

文献：Koidzumi, G., 1913. *Conspectus Rosacearum Japonicarum*. J. Coll. Sci. Tokyo Imp. Univ, 34(2): 1-312.
 Ito, T. & J. Matsumura, 1899. *Tentamen Florae Lutchuensis. Sectio prima. Plantae Dicotyledoneae polypetalae*. J. Coll. Sci. Univ. Tokyo, 12: 263-541.

執筆者名：立石庸一*・横田昌嗣(追補)

和名：テンノウメ
 分類：バラ科（APG科名：バラ科）
 学名：*Osteomeles anthyllidifolia* (Smith) Lindl.
 方言名：イソボーギー、イソボーギー（宮古島）
 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU） 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

形態の特徴：つる状の小低木。小枝には毛がある。葉は羽状複葉で長さ10 cm以下。数個の花を枝先の散房花序につける。花は径1 cm、白色。果実は黒紫色に熟す。
 分布域（県外）：小笠原、屋久島、奄美諸島、台湾（蘭嶼）、中国西南部、ハワイ、ポリネシア。
 県内の分布：沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島。
 生育環境：海岸の隆起石灰岩上に生える。
 生育状況：もともとは各地にやや普通に見られたが、近年は採集により個体数が減少している。
 減少の要因：盆栽用の乱獲。
 保全対策：苗木増殖した株を普及することにより園芸用の採集を防止する。
 備考：宮古島市自然環境保全条例保全種（2005年）。石垣市自然環境保全条例保全種（2015年）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。

文献：阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣，2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査Ⅱ（栗国島・渡名喜島）. 日本植物園協会誌, (51): 80-85.

執筆者名：新里孝和*・新島義龍*・洲鎌栄徳*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名：リンボク
 分類：バラ科（APG科名：バラ科）
 学名：*Prunus spinulosa* Sieb. et Zucc.
 方言名：ヤマザクラ（沖縄島：世富慶、久志）
 カテゴリー：絶滅危惧ⅠB類（EN） 環境省カテゴリー：該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の高木。葉は互生し、長楕円形～卵状楕円形で長さ6～10 cm、うすい革質で光沢がある。幼木の葉は刺状鋸歯縁であるが、老木では全縁。葉身の基部には蜜腺2個がある。白色の小花を総状花序につける。
- 分布域(県外) : 本州(西南部)、四国、九州、台湾、中国南部。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 山地の林内に生える。
- 生育状況 : 自生地は限られ、個体数は極めて少ない。
- 減少の要因 : 森林の伐採。もともと個体数が少ない。
- 保全対策 : 生育地の保全。

文献 : 比嘉 寿・新里孝和, 2003. 名護市の植生と植物相, 名護市の植物目録, “名護市天然記念物調査シリーズ第5集, 名護市の自然”, 名護市教育委員会, 49-139.

執筆者名 : 新里孝和*・新島義龍*

-
- 和名 : **アリサンバライチゴ**
- 分類 : バラ科 (APG 科名: バラ科)
- 学名 : *Rubus rosaefolius* Smith var. *formosanus* Cardot
- カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の小低木。株全体に柔らかい毛と腺毛を密生。葉は互生し、奇数羽状複葉。径3 cm内外の白色花を多数つけ、果実は赤熟。リュウキュウバライチゴ *R. rosaefolius* subsp. *maximowiczii* に比べ小葉は卵状楕円形で幅広く、葉の両面に毛が多い。
- 分布域(県外) : 台湾。
- 県内の分布 : 与那国島。
- 生育環境 : 人為的な影響の強い二次林の林縁、耕作地や牧場の端に生える。
- 生育状況 : 自生地は限られ、個体数は少ない。
- 学術的価値 : 県内で唯一の産地である。
- 減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られている。
- 保全対策 : 自生地の維持のためには、人為的な管理が必要である。

文献 : 初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新知見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.
与那国町教育委員会, 1995. 与那国島の植物. 与那国町教育委員会, 336pp.

執筆者名 : 新里孝和*・新島義龍*

-
- 和名 : **タイワンウラジロイチゴ**
- 分類 : バラ科 (APG 科名: バラ科)
- 学名 : *Rubus swinhoei* Hance
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

- 形態の特徴 : 常緑のつる性低木。つるには刺が散生し、地面を這うように伸びる。葉は互生し、洋紙質で卵状～卵状披針形で不斉鋸歯縁があり、先の方は次第にとがる。花は白色で、枝先にできる散房花序に3～

5花を付け、果実は黒紫色に熟す。

- 分布域（県外）：台湾、中国南部。
 県内の分布：石垣島。
 生育環境：高地の日当りのよい林縁に生える。
 生育状況：自生地は限られ、個体数が少ない。
 学術的価値：分布域の北限である。
 減少の要因：もともと自生地と個体数が限られている。
 保全対策：生育地の保全。
 備考：沖縄島北部には、変種のクワノハイチゴ var. *nesiotus* (Focke) Kitam. が分布する。
- 執筆者名：新里孝和*・新島義龍*

- 和名：オキナワウラジロイチゴ（ホザキイチゴ）
 分類：バラ科（APG科名：バラ科）
 学名：*Rubus utchinensis* Koidz.
 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU） 環境省カテゴリー：該当なし

- 形態の特徴：半つる性の低木。全株に褐色の毛が密生する。葉は革質で卵形～卵円形、長さ4.5～8 cmくらい。花は白色で、枝先の総状花序に多数集まって咲く。
- 県内の分布：沖縄島北部。
 生育環境：日当りのよい山地の林縁や風衝地に生える。
 生育状況：沖縄島北部（本部半島を含む）の数ヶ所に自生が知られるが、個体数は少ない。自生地の一つは県指定の天然保護区域であるが、歩道沿いの個体は踏みつけや刈り取りの影響を受けている。
 学術的価値：沖縄島の固有種である。
 減少の要因：もともと自生地と個体数が限られている。
 保全対策：生育地の保全。マント群落の刈り払いを軽減する。
 備考：ハウロクイチゴ *R. sieboldii* とクワノハイチゴ *R. swinhoei* var. *nesiotus* の雑種起源とみなされているが、本部半島では種子により繁殖している可能性がある。
- 執筆者名：新里孝和*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

- 和名：ヤエヤマネムノキ
 分類：マメ科（APG科名：マメ科）
 学名：*Albizia retusa* Benth.
 方言名：ハマクワ、バマクワ（石垣島、西表島）
 カテゴリー：絶滅危惧ⅠB類（EN） 環境省カテゴリー：絶滅危惧ⅠB類（EN）

- 形態の特徴：高さ15 mに達する落葉高木。葉は2回偶数羽状複葉で、4～6対の羽片が対生し、その各々に4～8対の小葉が対生してつく。小葉は無毛で卵状楕円形または倒卵形、先端が円く、長さ2～4 cm、幅1～2 cmあり、裏面は緑白色を帯びる。花は柄の先に15個ほど頭状に集まってつき、5～8月に開花する。花はピンクで小さく、柄があり、5枚の花弁が合着して筒状の花冠になり、多数の長い糸状の雄蕊と1本の雌蕊とが花冠から跳び出す。
- 分布域（県外）：台湾、タイ、マレーシア、ミクロネシア、カロリン、ニューヘブリデス、オーストラリア北部。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、内離島、嘉弥真島、小浜島、西表島。
生育環境 : 東南アジアでは低山の降雨林や二次林の中に見られるが、沖縄では海岸林内あるいは海岸に近い明るい二次林内や林縁に生える。
生育状況 : 沖縄島では許田の海岸付近に数本生えているのみであり、八重山でもまれである。海岸付近に生えることが多いので、護岸工事や道路敷設工事などによって伐採される危険がある。特に沖縄島許田のものは民有地の中にあり、名護市の天然記念物に指定されてはいるが、保護のための適切な処置が必要である。
学術的価値 : 沖縄県が分布域の北限で、また数も少ないので貴重である。
減少の要因 : もともと自生地が限られる。自生地の開発。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 知念美香, 1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究, (11) : 75-105.

執筆者名 : 立石庸一*・松村俊一*

和名 : ガランピネムチャ (リュウキュウカワラケツメイ)
分類 : マメ科 (APG科名: マメ科)
学名 : *Chamaecrista garambiensis* (Hosokawa) Ohashi, Tateishi et Nemoto (= *Cassia mimosoides* L. var. *pacifica* (Ohwi) Tawada)
カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類 (EN)

形態の特徴 : 小形の多年草。茎は斜上し、高さ10~20 cmになる。葉は互生し、狭長楕円形で長さ3~6 cmになる偶数羽状複葉、15~40対の小葉は線形で長さ3~8 mm、葉柄の上側に皿状の蜜腺が1個ある。花は黄色で、葉腋に1~3個つき、径15~25 mm、花弁は5個、雄蕊は9本。豆果は線形で扁平、長さ2.5~4.5 cm。

分布域(県外) : 台湾南部。
県内の分布 : 宮古島、石垣島、西表島。
生育環境 : 海岸の断崖上や原野の風衝地など、風が強く、高茎の植物の生育が押さえられるようなところに散生する。
生育状況 : 宮古島では2017年に1ヶ所で少数個体が確認されている。西表島では1950年代末に採集されているが、最近では観察されていない。最も豊富に生育していた石垣島でも、最近ではごく限られた地域にしか見られなくなってしまった。
学術的価値 : 台湾南部と先島諸島のごく限られた地域に生育が限られる。台湾南部と琉球の風衝地には共通あるいは各々に独特の固有種が多く、ガランピネムチャもその一種である。これらの種は台湾や琉球における植物の種分化や植物相の成立を考察する上で特に重要である。
減少の要因 : 公園や農耕地、放牧地などへの開発。もともと自生地が限られる。外来種との競合。
備考 : 世界の熱帯~亜熱帯に広く分布するカワラケツメイ (*Chamaecrista mimosoides* (L.) Greene, = *Cassia mimosoides* L.) のシノニムとされたり (初島・天野, 1958; 初島, 1971)、その変種とされたりもした (多和田, 1964) が、ガランピネムチャは植物体が小形で、花が大きく、雄蕊が9本 (*C. mimosoides* は10本) などの特徴があり、独立種とすべきである。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。IUCNカテゴリー: Least Concern (LC)*。**Chamaecrista pratensis* として評価。

文献 : 初島住彦, 1971. 琉球植物誌. 沖縄生物教育研究会, 那覇, 940pp. 初島住彦・天野鉄夫, 1958. 沖縄植物目録. 琉球大学研究普及部, 那覇市, 192pp. 多和田真淳, 1964. 琉球植物見聞録. 沖縄生物学会誌, 1 (2) : 76-79.

執筆者名 : 立石庸一*・松村俊一*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・佐藤宣子(追補)

和名 : ガクタヌキマメ

分類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)

学名 : *Crotalaria calycina* Schrank

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 高さ 30~90 cm に達する一年草。全株に絹毛が生える。葉は 1 小葉で長さ 4~9 cm、線形~披針形。総状花序は頂生し、2~12 花をつける。萼は褐色の絹毛を密生し、長さ 2~3 cm、花冠は淡黄色で萼より短い。豆果は線状長楕円形で長さ約 1.5 cm、無毛、20~30 種子を入れる。

分布域 (県外) : 台湾、中国、東南アジア、西アジア、アフリカ、オーストラリア北部。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 原野に生える。

生育状況 : 石垣島では 1970 年代まで、西表島では 1910 年代に採集の記録があるが、最近は全く観察されておらず、現状は不明。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 立石庸一*

和名 : ヤエヤマタヌキマメ

分類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)

学名 : *Crotalaria montana* B. Heyne ex Roth (= *C. linifolia* auct. non L. f.)

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 高さ 20 cm~1 m に達する直立の一年草。葉は単葉でほとんど柄がなく、線形~狭倒卵状楕円形、長さ 2~3 cm、幅は 3~7 mm。花は長さ 5~7 mm の蝶形花で、茎頂の長さ 2~10 cm の総状花序に多数がしかし疎らにつく。花弁は鮮黄色で、萼より短い。豆果は楕円形の袋状で黒く熟し、長さ 5~6 mm、萼と同長ないし萼よりやや長く、無毛、黒色の光沢のある種子を多数含む。

分布域 (県外) : 台湾、中国、インドシナ、インド、マレーシア、インドネシア、ニューギニア、オーストラリア北部。

県内の分布 : 久米島、石垣島、西表島。

生育環境 : 草原や道端、牧場や耕作地の周辺などの、やや二次的な環境に生える。

生育状況 : 1980 年代の初めまでは折々見られ、標本の記録もあるが、最近はまれになった。西表島では 2ヶ所で 2017 年に確認されている。久米島と石垣島の現状は不明。

学術的価値 : 分布域の北限に当たる。

減少の要因 : 生育地の開発。遷移の進行。除草剤の使用。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄県, 1-39.

執筆者名 : 立石庸一*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : エダウチタヌキマメ (ダエンタヌキマメ)

分類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)

学名 : *Crotalaria uncinella* Lam. subsp. *elliptica* (Roxb.) Polhill (= *C. uncinella* auct. non Lam. ; = *C. elliptica* Roxb.)

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 高さ 20~60 cm の多年草、または茎下部が木化して亜低木状になり、枝の上部はしばしば横臥する。葉は 3 小葉で、1~1.5 cm の柄があり、小葉は狭楕円形から倒卵形、頂小葉は長さ 1.5~2.5 cm。花は枝の先や葉腋にできる総状花序に数~10 個ほどつき、長さ 5~7 mm の黄色の蝶形花で、花弁は萼より長い。豆果は楕円形で長さ 5~6 mm、幅約 4 mm、短毛で覆われ、2 種子を含む。

分布域 (県外) : 台湾南部、中国東南部 (広東、海南、広西)、ベトナム、タイ。

県内の分布 : 伊是名島。

生育環境 : 海崖上または斜面上部の風衝地。

生育状況 : 島内のごく限られた地域に自生し、個体数は極めて少ない。現在確認されている自生地は 4 ヶ所だけである。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内では唯一の自生地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 大東諸島、沖縄島、宮古島も分布地に挙げられているが、伊是名島も含め 4 島とも帰化による分布とされた (島袋, 1990, 1997)。しかし、伊是名島の生育地の状況を台湾以南での自生地の状況に照らすと、伊是名島での分布は元来の自生と判断するのが適切である (立石ら, 2004)。一方、他の 3 島からの記録は標本等による確かな裏付けができない。そもそも記録そのものに誤りがあるのかも知れない (立石ら, 2004)。基本亜種 (subsp. *uncinella*) は熱帯東アフリカからマダガスカル、マスカレン諸島に分布する。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。*種 *Crotalaria uncinella* として評価。

文献 : 島袋敬一, 1990. 琉球列島維管束植物集覧. ひるぎ社, 那覇, 794pp.

島袋敬一, 1997. 琉球列島維管束植物集覧 [改訂版]. 九州大学出版会, 福岡, 855pp.

立石庸一・松村俊一・山城 考・新城和治, 2004. 琉球列島植物分布資料 17. 沖縄生物学会誌, (42) : 61-67.

阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 (伊是名島・久米島). “事業年報 (平成 26 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.

執筆者名 : 立石庸一*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ナハキハギ

分類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)

学名 : *Dendrolobium umbellatum* (L.) Benth.

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 3~6 m の低木または小高木。葉は 3 小葉からなる。小葉は若時には両面とも伏した白毛があるが、のち脱落して裏面の脈上に残るのみになり、中肋と側脈が目立つ。花は白色の蝶形花で、散形花序に 10 個内外つき、6~7 月を中心に開花する。果実はやや木質の節果、長さ 2~4 cm 程になり、節で折れて 3~5 個の小節果がばらばらになって落ち、小節果ごとに 1 個含まれる種子が散布される。

- 分布域（県外）：台湾、中国、東南アジア、インド、太平洋諸島、オーストラリア、アフリカの沿海地。
- 県内の分布：沖縄島、石垣島、小浜島、内離島、西表島。
- 生育環境：海岸あるいは海岸付近の岩が多い斜面に生える。
- 生育状況：沖縄島では那覇市漫湖一帯の数ヶ所と今帰仁村に比較的大きな個体群があり、その各々の生育は良好である。八重山でも分布は局所的である。海岸付近に生えるため、護岸工事や道路拡張工事等による生育地の破壊の危険に常にさらされている。那覇市漫湖一帯の個体群では、埋立等によって生育地がせばめられてきた可能性がある。周囲がすっかり埋め立てられてしまったガーナー森の個体群では芽生えが少なく、今後の個体群の維持に不安がある。小浜島では、2014年に少数個体が確認されている。
- 学術的価値：分布域の北限である。
- 減少の要因：もともと自生地が限られている。自生地の埋立。護岸工事。
- 備考：那覇市ガーナー森の個体群は、1974年に那覇市の天然記念物に指定されている。今帰仁村指定天然記念物（仲宗根垣畑原のナハキハギ群落）（2003年）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。
- 文献：知念美香，1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究, (11) : 75-105.
 長嶺晴美・金城あや子・親盛啓介・中村博幸，1983. ナハキハギの調査と観察. 沖生教研会誌, 16: 15-16.
 Ohashi, H., 1998. *Dendrolobium* (Leguminosae-Papilionoideae: Desmodieae) in the Philippines. J. Jpn. Bot., 92: 248-258.
- 執筆者名：立石庸一*・新城和治*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

- 和名：ヌスビトハギ
- 分類：マメ科 (APG科名: マメ科)
- 学名：*Desmodium podocarpum* DC. subsp. *oxyphyllum* (DC.) Ohashi (= *D. oxyphyllum* DC.)
- カテゴリー：絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー：該当なし

- 形態の特徴：多年草。茎は高さ30～120 cmになる。葉は3小葉からなり、頂小葉は卵形で先端が次第に尖る。7～9月、茎の先端および上部の葉腋に総状あるいは円錐状の花序を出し、紅紫色を帯びた小さな蝶形花をつける。果実は節果で2種子を含む。各々1種子を入れた小節果は下側の縫合腺が種子の前後で深くくびれて半月形になる。小節果の表面には鈎毛があり、この鈎毛で小節果ごとに動物の体毛や衣服などに付着して散布される。
- 分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、薩南諸島、種子島、屋久島、奄美諸島、朝鮮、中国、台湾、ヒマラヤ、ミャンマー。
- 県内の分布：沖縄島（本部半島）。
- 生育環境：平地から山地の獣道や山道など、動物や人の歩行する道に沿った明るい林縁や道端、草地等に生える。生育地は人的な影響をよく受け、不安定なところである。
- 生育状況：かつては山原にまれではなかったようだが、現在はほとんど見られなくなった。確実な産地は本部半島の1ヶ所だけと思われる。
- 学術的価値：日本本土、特に本州以南ではごく普通の植物だが、沖縄県では少ない。日華区系要素の一つと考えられており、日華区系や琉球列島の植物相の成立を考える上で興味深い。
- 減少の要因：開発などによる生育地の破壊。
- 保全対策：自生地は観光地であるので、歩道沿いの個体は刈り取りにより減少する可能性があり、除草には配慮が必要である。
- 備考：自生地は県指定の天然保護区域である。

執筆者名 : 立石庸一*

和名 : ノアズキ (ヒメクズ)
分類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)
学名 : *Dunbaria villosa* (Thunb.) Makino (= *D. podocarpa* auct. non Kurz)
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : つる性の多年草で、全体にビロード状の毛と赤褐色の腺点がある。葉は互生して 3 小葉からなる。小葉は広卵状菱形で先は伸びるが鈍頭に終わり、長さ幅ともに 1~3 cm。花は葉腋の総状花序に 1~数個つく。5 枚の花弁は黄色、最も外側にある旗弁は大型でやや歪んだ円形、左右非相称、幅 15~18 mm、内面基部に 1 対の耳形の突起がある。最も内側にある 1 対の竜骨弁は伸長して反転するが、上下の縁同士が接着して筒状になり、10 本の雄蕊と 1 本の雌蕊を包む。果実は扁平な広線形で、長さ 4.5~5.5 cm、短毛を密生し、5~8 個の種子を入れる。

分布域 (県外) : 本州 (宮城県南部以西)、四国、九州、奄美大島、朝鮮、中国、台湾、ベトナム、タイ、ビルマ、インド、インドネシア、フィリピン。

県内の分布 : 伊江島、沖縄島中部。

生育環境 : 日当たりのよいやや湿った野原や林縁に生える。

生育状況 : 伊江島からは 1951 年に城山で、1974 年 5 月に灯台付近で、また沖縄島からは沖縄市知花で 1936 年 8 月に採集されているが、以後は全く記録がない。伊江島では 1994 年以降、重点的に調査を行っているが全く見出されていない。絶滅している可能性もある。

学術的価値 : 沖縄島北部と沖縄島周辺の離島に共通する数少ない大陸要素植物の一つとして貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 伊江島から 1974 年 5 月に発見され、当初はノアズキ (ヒメクズ) として琉球新産の報告がされた (初島・宮城, 1974)。ノアズキはさらにそれ以前にも伊江島のほか沖縄島中部でも採集されていることが分かったが、これら沖縄諸島産は初島 (1975) により、中国南部から東南アジアに分布するカイナンノアズキ *Dunbaria podocarpa* に訂正された。それ以来、琉球の植物目録類では常にカイナンノアズキとされ、本レッドデータブックでもそう扱ってきた。しかし、伊江島産の花を解剖したところ、カイナンノアズキとは明らかに異なり、ノアズキとよく一致していることが分かった。

文献 : 初島住彦, 1975. 琉球植物誌 (追加・訂正). 沖縄生物教育研究会, 那覇, 881.
初島住彦・宮城康一, 1974. 伊江島の植物. “沖縄海岸国立公園拡張候補地学術調査報告”, 沖縄自然研究会 (編), 沖縄自然研究会, 那覇, 57-76.
Maesen, L. J. G. van der, 1998. Revision of the genus *Dunbaria* Wight & Arn. (Leguminosae-Papilionoideae). Wageningen Agric. Univ. Papers, Backhuys Publishers, Leiden, 98(1): 1-109.

執筆者名 : 立石庸一*

和名 : コウシュンモダマ
分類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)
学名 : *Entada phaseoloides* (L.) Merr. (= *Entada koshunensis* Hayata et Kanehira)
方言名 : ウジルカンダ、スバガーニー (沖縄島: 伊部)
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 極めて大形の常緑つる性木本。全株全く無毛。葉は 2 回偶数羽状複葉で、葉軸の先端は 2 分岐する巻ひげで終わる。羽片は 2 対あり、そのそれぞれに 3 または 4 対の小葉が対生してつく。小葉はや

や歪んだ長楕円形または倒卵形、革質で光沢がある。5～7月頃、林冠の若枝の葉腋に長さ12～25 cmの穂状花序を出し、黄緑色の小さな放射相称花を密につける。豆果は木質で線形、長さ80～120 cm、幅7～12 cmにおよぶ。種子は茶褐色で非常に硬く、円形から広楕円形で、中央が山形に膨らみ、長さ3～5 cm、幅3～4.5 cmである。子葉の間に空隙によって海水に浮き、海流によって漂流し海岸に漂着しているものを時折見かける。

- 分布域（県外）** : 台湾南部。
- 県内の分布** : 沖縄島、石垣島、小浜島、西表島、与那国島。
- 生育環境** : 山地や低地の溪流に面した陰湿な斜面に生え、他の高木にからみついて林冠におよぶ。
- 生育状況** : 沖縄島では現在、北部の1ヶ所だけしか見られないが、石垣島や西表島では比較的多い。
- 学術的価値** : 琉球のものは台湾の個体と共にモダマとは異なる形質を持つ。モダマとの関係を明らかにするためには現在の個体群は貴重である。
- 減少の要因** : 自生地の開発。ダム建設や河川改修。装飾用に行われる果実や茎の採集。
- 備考** : 琉球列島のものは近年、モダマ *E. phaseoloides* (L.) Merr. に統一されていたが、小葉数や種子の形態および分子マーカーを用いた解析の結果、モダマは日本では屋久島と奄美大島に限られ、沖縄島と八重山諸島のものはこれとは異なり、コウシュンモダマであることが明らかになった(脇田ら, 2005)。モダマは、1羽片につき小葉が1～2対であり、種子も大型で長さ5～6.5 cm、幅4～6 cm、扁平で中央が山形に膨らまないなどの特徴でコウシュンモダマとは異なる。分子系統学的な研究の結果、コウシュンモダマの学名を *E. phaseoloides* (L.) Merr. に、モダマの学名を *E. tonkinensis* Gagnep. とすべきであることが報告された (Wakita *et al.*, 2008, Tateishi *et al.*, 2008)。
- 文献** : 立石庸一・松村俊一・山城 考・新城和治, 2004. 琉球列島植物分布資料17. 沖縄生物学会誌, (42) : 61-67.
 脇田悟寿・與座(仲本) 優子・来間和菜・傳田哲郎・立石庸一, 2005. 琉球列島のモダマ類. 分類, 5 (1) : 9-20.
 Wakita, N., Y. Tateishi, T. Ohi-Toma, J. Murata & T. Kajita, 2008. Two species of *Entada* in Japan as evidenced by cpDNA phylogeny. *Acta Phytotax. Geobot.* 59(3): 183-193.
 Tateishi, Y., N. Wakita & T. Kajita, 2008. Taxonomic revision of the genus *Entada* (Leguminosae) in the Ryukyu Islands, Japan. *Acta Phytotax. Geobot.* 59(3): 194-210.
- 執筆者名** : 立石庸一*・松村俊一*・山城 考*・横田昌嗣(追補)

和名 : リュウキュウミヤマトベラ (台湾ミヤマトベラ)

分類 : マメ科 (APG科名: マメ科)

学名 : *Euchresta formosana* (Hayata) Ohwi

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の低木。茎は高さ1～2 mになり、時に分枝する。葉は奇数羽状複葉で、小葉は3～5対、長さ8～11 cm、長楕円形～披針状長楕円形。総状花序は頂生し、多数の花を密につける。花弁は長さ1.5 cm、白色、萼筒は長さ7 mm。豆果は楕円形で、長さ1.5～2 cm、黒紫色に熟し、果皮は薄く1個の種子を含む。

分布域（県外） : 台湾、フィリピン、ジャワ。

県内の分布 : 沖縄島北部(国頭村、大宜味村、本部半島)、西表島。

生育環境 : 自然林内の陰湿な斜面に生える。

生育状況 : 沖縄島では3ヶ所、西表島では数ヶ所の自生が知られるが、いずれもごく狭い範囲に限られ、個体数は少ない。西表島の自生地の多くは国立公園内にあるが、牧場から逃げ出したウシによる食害で大きな被害を受けた自生地がある。その後、ウシは駆除されたが、個体数は回復していない。沖縄島の1ヶ所ではすぐ横を通る林道により、乾燥化が進み、生育環境が悪化している。沖縄島の他の

2ヶ所の現状は不明。

- 学 術 的 価 値 : 分布域の北限で、琉球列島では希産種である。
- 減 少 の 要 因 : 自然林の伐採。林道建設。野生化したウシによる食害。もともと自生地と個体数が限られている。
- 備 考 : 竹富町特別希少野生動植物種 (2017)。
- 文 献 : 新里孝和, 1994. 与那演習林の樹木. “琉球大学農学部附属演習林創設 40 周年記念誌”, 琉球大学農学部附属演習林, 125-139.
横田昌嗣・島袋敬一, 1990. 琉球列島植物分布資料 7. 沖縄生物学会誌, (27) : 53-55.
- 執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

-
- 和 名 : ソロハギ
- 分 類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)
- 学 名 : *Flemingia strobilifera* (L.) R. Br. ex Aiton
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー: 絶滅 (EX)

- 形 態 の 特 徴 : 高さ 1.5 m に達する小低木。葉は 1 小葉からなり、小葉は卵形または楕円形で先端は尖り、葉脈が目立ち、裏面には多くの腺点がある。枝の先および葉腋に集散花序を出す。これは 3~5 花からなり、これがさらに総状について大形の複合花序になる。各々の集散花序の基部には大形で広腎臓形をした葉状の苞があり、集散花序を覆っている。花は淡黄色の蝶形花で旗弁に赤色の脈が目立つ。
- 分 布 域 (県 外) : 台湾、中国、東南アジア、インド、ヒマラヤ、西インド諸島。
- 県 内 の 分 布 : 伊江島、宮古島、石垣島、西表島。
- 生 育 環 境 : 原野や林縁に生える。
- 生 育 状 況 : 伊江島で 1994~1995 年にかけて行った調査では全く発見できなかった。その他の島でも最近の記録はない。絶滅したと考えられる。生育地である原野の農耕地や放牧地等への開発が進んだことによると考えられる。
- 学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。
- 減 少 の 要 因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られている。
- 備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執 筆 者 名 : 立石庸一*

-
- 和 名 : ミヤコジマツルマメ
- 分 類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)
- 学 名 : *Glycine koidzumii* Ohwi
- カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形 態 の 特 徴 : やや小型の匍匐するつる性多年草。葉は互生し、長い柄があり、3 個の小葉からなる羽状複葉で、小葉は狭楕円形ないし楕円形、円形または倒卵状楕円形で、長さ 1.2~2 cm、裏面に伏毛が生える。9 月、葉腋の長さ 3~8 cm 程の総状花序に数~10 個の花をつける。花は発達した 5 枚の花弁を持った蝶形花で、青紫色、長さ 8 mm ほど。この通常の花 (開放花) の他に閉鎖花もつける。これは葉腋に 1 個だけつくことが多いが、総状花序の下部に 2~数個ずつつくこともある。閉鎖花の花弁はあまり発達せず、萼の外に出ることはない。雄蕊も非常に小さく、もともと 10 本あるうちの 1~3 本ほどしか発達せず、わずかに発達した雄蕊の葯の中で花粉が発芽して、花粉管を隣接する雌蕊の柱頭に

伸ばす。つまり閉じた花の中で自家受粉が行われる。したがって、ミヤコジマツルマメの豆果には開放花由来のものと閉鎖花由来のものがあることになる。どちらも線形で扁平なよく似た莢になるが、開放花由来の方は基部に残る萼が幅広いので区別できる。さらに開放花由来の方がやや大きくて種子の数も多く、長さ1.8~2.6 cm、種子数で3~6個、これに対し閉鎖花由来の豆果は長さ1.5~2.4 cm、種子数2~5個である。

- 県内の分布** : 宮古島、来間島、伊良部島、下地島、石垣島(平久保)、黒島。
- 生育環境** : 海岸の海蝕崖肩状部のテラス状の岩場の堆積土壌が薄い風衝地で、高茎の草本や木本の発達の悪いところに生える。
- 生育状況** : 展望台などの設置により、海蝕崖上のもともとの生育地は減少しているが、海岸段丘面や海崖上部の公園化によって敷かれた芝生に入り込んで旺盛に広がっているところもある。例えば宮古島の東平安名岬では、1978年頃は岬の先端に通じる車道の周辺には全く見られなかった(新納・川上, 1979)が、車道沿いに芝生が張られてからはそこに入り込んだものが豊富に見られるようになった(立石・新城, 1994)。本種は地面に這いつくように匍匐しているため芝刈りから免れられるからだろう(立石・新城, 1994)。黒島では、2014年に1ヶ所で少数個体が新たに確認された。
- 学術的価値** : 先島諸島の固有種だが、ボウコツルマメ *G. tabacina* などの近縁種との関係を考慮すると、かつてはアジア東南部に広く分布したものが、海崖の風衝地に遭存的に残ったものである可能性も考えられる(立石, 1995)。琉球列島の植物相の成立史を解明する手がかりとなる貴重な植物の一つである。
- 減少の要因** : 公園や展望台などの敷設工事、護岸工事。もともと自生地が限られている。
- 備考** : ミヤコジマツルマメはボウコツルマメによく似ており、これに合一されることがしばしばあった(Hatusima, 1974)。しかし、ボウコツルマメでは多くは線形ないし披針形の小葉だが、楕円形ないし狭楕円形の小葉も混ざり、大雑把に言って2形の小葉が混ざっているように見えるのに対し、ミヤコジマツルマメでは狭楕円形ないし楕円形、円形または倒卵状楕円形で一個体群の中であまり変異がない。これは、ボウコツルマメでは成長とともに展開してくる葉の形が異なることによる。さらに、ミヤコジマツルマメは果実が小さく胚珠も少なく、花卉の色や萼の形態も異なる(立石・新城, 1994; 立石, 1995)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

- 文献** : Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 1: 37-45.
 新納義馬・川上 勲, 1979. 宮古島東平安名岬の植生. "沖縄県自然環境保全地域指定候補地学術調査報告東平安名岬・狩俣御嶽", 沖縄県, 17-43.
 立石庸一, 1995. 琉球マメ科植物相の再検討—まずはボウコツルマメ・ミヤコジマツルマメ群から. 植物分類・地理, 46: 216-218.
 立石庸一・新城和治, 1994. ミヤコジマツルマメの現況調査と収集. "農林水産ジーンバンク事業の希少生物等の遺伝資源調査収集委託事業成果報告書", 農林水産技術情報協会, 東京, 1-25.
 山崎仁也・横田昌嗣・知念美香・仲宗根忠樹・比嘉清文・加島幹男, 2016. 鳩間島・新城(上地・下地)島・黒島の植物相(Flora). 鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書, 沖縄県立博物館・美術館, 13-68.

執筆者名 : 洲鎌栄徳*・立石庸一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

- 和名** : ホソバツルマメ
- 分類** : マメ科 (APG科名: マメ科)
- 学名** : *Glycine max* (L.) Merr. subsp. *formosana* (Hosokawa) Tateishi et Ohashi
- カテゴリー** : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : つる性の一年草。茎は直径0.5~2 mmと細く、他物に巻きついたり、地面を匍匐したりする。葉は3小葉、小葉は線形~披針形~狭卵形、両面に開出毛があり、頂小葉は長さ2~6 cm、幅0.3~1.5 cm。総状花序は葉腋に出て、長さ1~2 cm、5~12花をつける。花は淡紫色で長さ5 mmほどの蝶形

花。ときに閉鎖花も1又は2~3個が葉腋につく。豆果は線形で種子と種子の間が少しくびれ、開放花由来のものも閉鎖花由来のものも長さ1.4~2 cm、幅3.5~5 mm、褐色の長毛を密生し、熟して乾くと2片に裂開し、2~3個の種子を飛ばす。種子は暗褐色または黒色、楕円形で長さ2.3~4 mm、幅1.8~2.5 mm、厚さ1.2~2.2 mm。

- 分布域(県外) : 台湾北・中部。
- 県内の分布 : 沖縄島南部。
- 生育環境 : 日当たりのよい野原や道端に生える。
- 生育状況 : 沖縄島南部の数ヶ所で1950年代から80年代にかけて散見されていたが、それ以後は確認されていない。
- 学術的価値 : ダイズはツルマメのような野生形から栽培化されたものとされている。ダイズの起源をより明確にするために、ホソバツルマメやツルマメの野生株の変異を明らかにすることは極めて重要である。また、品種改良のための遺伝子の給源とする有用遺伝資源としても重要である。
- 減少の要因 : 生育地の開発。もともと自生地が限られている。
- 備考 : ダイズ *Glycine max* (L.) Merr. の野生形の一つで、ダイズの亜種とされる。沖縄島南部のものは従来、やはりダイズの亜種で日本列島から朝鮮、中国、ロシア極東部に分布する野生形のツルマメ subsp. *soja* (Sieb. & Zucc.) Ohashi とされ、本土産が帰化したものと考えられていた(初島・天野, 1994)。しかし、沖縄島南部産は全体に小型で、ツルマメより小葉が小さく幅狭く、花や豆果もやや小さく、台湾北部産のホソバツルマメ *G. max* subsp. *formosana* によく一致する。本土産のツルマメも沖縄島に帰化しているのがまれに見られるが、こちらは全体に大きくて小葉は卵形~狭卵形になり、沖縄島南部産のものとは明らかに異なる。ダイズ・ツルマメ類はミヤコジマツルマメ *G. koidzumii* やボウコツルマメ *G. tabacina* とともにダイズ属に含まれる。しかし、この2種とは異なる亜属 subgenus *Soja* に分類される。また、沖縄島南部から報告され、本レッドデータブック(初版)では未決定種としていたウスバハギカズラ *Galactia tenuiflora* (Klein ex Willd.) Wight & Arn. (= (Walker, 1976) *G. formosana* Matsum.) は、本種の同定違いである。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 90.
 Tateishi, Y. and H. Ohashi, 1992. Taxonomic studies on *Glycine* of Taiwan. J. Jpn. Bot., 67(3): 127-147.
 Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 1159pp.

執筆者名 : 立石庸一*・洲鎌栄徳*

和名 : **ボウコツルマメ**
 分類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)
 学名 : *Glycine tabacina* (Labill.) Benth.
 カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : やや小形の匍匐するつる性多年草。葉は3個の小葉からなる羽状複葉で、互生し、長い柄があり、小葉は長楕円状披針形~卵形、広楕円形または線形、茎下部のものは広倒卵形、長さ1~4 cm、幅4~10 mm、脈は明瞭。9月頃、葉腋に出る総状花序は直立し、4~12個の花をつける。花は青紫色~紅紫色の蝶形花で、長さ6~7 mm。さらに、総状花序の柄の基部や葉腋に花卉の退化した小さな閉鎖花を1個ずつつける。普通の花(開放花)が受精してできたものも閉鎖花に由来するものも、豆果はどちらも線形~長楕円形、扁平でよく似ているが、開放花由来の方は基部に残る萼が幅広いので区別できる。さらに開放花由来の方がやや大きくて種子の数も多く、長さ2~3 cm、5~8種子を含む。これに対し閉鎖花由来の豆果は長さ1.2~2.5 cm、種子数4~6個である。

分布域(県外) : 沖永良部島、台湾(澎湖諸島)、フィリピン、太平洋諸島、オーストラリア。
 県内の分布 : 伊江島、屋那覇島。

- 生育環境** : 海岸の断崖上の風衝草原および琉球石灰岩上に生える。
- 生育状況** : 伊江島では上記のような環境に点々と生育地が知られるが、このような生育地は展望台や公園などの工事のためにしばしば破壊されている。その一方で、公園や展望台にはられた芝生の中に入りこみ旺盛な繁殖をしているところ（伊江島：湧出、リリーフィールド公園）がしばしばあるのは皮肉である。2016年に屋那覇島の原野にわずかに生育していることが新たに確認された。
- 学術的価値** : オーストラリアから太平洋諸島、台湾（澎湖諸島）そして琉球列島では伊江島、沖永良部島と島伝いに跳び跳びに分布しており、琉球列島の植物相の成因を考察する上で貴重な例である。
- 減少の要因** : 公園や展望台などの敷設工事、護岸工事。
- 備考** : 成長とともに展開してくる葉の形が異なることにより、小葉の形の変異が大きくなり、そのため近縁種との区別が難しく、しばしば混同されることになった（Tateishi & Ohashi, 1992；立石, 1995）。琉球や台湾ではボウコツルマメは近縁のミヤコジマツルマメ *G. koidzumii* Ohwi とともに、いわゆる低島と呼ばれる比較的平坦な島か、山のあるいわゆる高島でも岬などの海崖の上縁の風の吹き抜ける岩場か風衝草原状のところに生えている。このようなところは土壌が薄く、強風が吹くため高茎の草本や木本の生育が押さえられ、匍匐性のボウコツルマメやミヤコジマツルマメの生存が可能であったのだろう。この2種の琉球や台湾における分布は遺存的なものと考えられる（立石, 1995）。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。**Glycine latifolia* として評価。
- 文献** : 初島住彦・宮城康一, 1974. 伊江島の植物. “沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島”, 沖縄県, 57-76.
Tateishi, Y. and H. Ohashi, 1992. Taxonomic studies on *Glycine* of Taiwan. J. Jpn. Bot., 67(3): 127-147.
立石庸一, 1995. 琉球マメ科植物相の再検討—まずはボウコツルマメ・ミヤコジマツルマメ群から. 植物分類・地理, 46: 216-218.
新里孝和・高原建二, 2002. 伊江島の植物図鑑. 伊江村教育委員会, 201pp.

執筆者名 : 立石庸一*・洲鎌栄徳*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

- 和名** : タシロマメ (タイハイヨウテツボク、シロヨナ)
- 分類** : マメ科 (APG 科名: マメ科)
- 学名** : *Intsia bijuga* (Colebr.) O. Ktze.
- 方言名** : ビヌッフカバ、フィヌキウカバ、ヤイヤマシタン (石垣島)
- カテゴリー** : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形態の特徴** : 高さ 20 m 以上に達する常緑高木。葉は 1~2 対まれに 3 対の小葉からなる偶数羽状複葉で、小葉は広楕円形または楕円形、円頭または凹頭、長さ 7~15 cm、幅 4~9 cm、革質で厚く、光沢がある。5~6 月、枝先に円錐状の花序が頂生し、白色または淡紅色の花をつける。花弁は元々 5 枚だが、1 枚だけが大きく発達し、他の花弁は退化してしまう。豆果は長さ 10~25 cm になり、長楕円形または広線形、扁平で黒褐色に熟し、3~6 個の平たい種子を入れる。
- 分布域 (県外)** : 台湾、中国南部、東南アジア、インド、ポリネシア、オーストラリア、マダガスカル。
- 県内の分布** : 石垣島、西表島。
- 生育環境** : 海岸や河口近くの岩が多い斜面に生える。波打ち際近くの砂質の平地や、ときにマングローブ林内にも生える。
- 生育状況** : 石垣島では 2ヶ所にそれぞれ数十個体と数個体が、西表島では 1ヶ所にわずかな個体が見られるに過ぎない。材が堅く、またシロアリの害に強いいため、建築材や家具材として有用である。そのため古くから伐採・利用され、明治初期までには激減してしまった。
- 学術的価値** : 分布域の北限である。
- 減少の要因** : もともと自生地が限られている。建築材用の採集。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動物植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Vulnerable (VU)。

執筆者名 : 立石庸一*・前津栄信*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)

和名 : ハマエンドウ
分類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)
学名 : *Lathyrus japonicus* Willd.
方言名 : ハマインドー (久米島)
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 全体に粉白色を帯びる多年草。長い地下茎がある。地上茎の下部は長く地表を這い、上部は斜上し、長さ 1 m に達する。葉は 8~12 個の小葉からなる偶数羽状複葉で、葉軸の先端は巻ひげとなり、小葉は卵形~長楕円形、長さ 1.5~4 cm、托葉は大形で三角状卵形。葉腋に長い柄のある総状花序を出し、3~6 花をつける。花はやや大形の蝶形花で、長さ 2.5~3 cm、紅紫色から後に青紫色に変わる。豆果は長楕円形で長さ 5 cm 前後、黒褐色に熟す。

分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、種子島、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、与論島、北半球の暖帯~亜寒帯、チリ。

県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島、久米島、与那国島。

生育環境 : 海岸の砂浜あるいは砂地の草原などに生える。

生育状況 : 沖縄島では 1 ヶ所で少数個体が確認されているが、その他の島の状況は不明。沖縄県で現在も確実に自生が確認されている唯一の自生地は、現在は良好な状態にあるが、今後活発になることが予想される軍事演習により消失する可能性がある。

学術的価値 : 北半球では分布域の南限になる。北方系の植物が琉球列島を点々と南下している例として植物地理学的に貴重である。

減少の要因 : 護岸工事や開発など。もともと自生地が少ない。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄県, 1-39.
横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

執筆者名 : 立石庸一*・横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ワニグチモダマ
分類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)
学名 : *Mucuna gigantea* (Willd.) DC.
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : つる性の常緑木本。葉は 3 小葉からなる。小葉は質厚く、頂小葉は卵状長楕円形または卵形、長さ 6~18 cm、先端は急に鋭く尖り、3~5 対の側脈がある。葉腋から長い柄のある散房花序を下垂し、9~30 個の花をつける。花は 1~3 月に開き、淡黄緑色または緑白色で、長さ 3~4 cm。豆果は長楕円形で扁平、長さ 8~14 cm、幅 3.5~5.5 cm、縫合線に沿ってこれを狭むように翼が発達する。種子は 1~5 個含まれるが、扁平で円形、径 2~3 cm、臍は非常に長く、外周の 3/4 に達する。

分布域 (県外) : 奄美大島、徳之島、沖永良部島、小笠原、台湾南部、中国南部 (海南島)、東南アジア、太平洋諸島、

インド、オーストラリア北部。

- 県内の分布 : 沖縄島南部、宮古島、石垣島、小浜島、新城島（上地島）、西表島。
 生育環境 : 海岸林の中の高木に巻きつく。種子が海水に浮いて漂流し、散布される。
 生育状況 : 石垣島や西表島の海岸に比較的多かったが、護岸工事や海岸道路の敷設のため海岸林が伐採され、生育地が減少している。沖縄島南部では、わずかに確認されていた個体は、道路拡張工事で消失し、絶滅したものと思われる。宮古島では、数ヶ所で確認されている。
 減少の要因 : 海岸林の開発。送粉者であるオオコウモリの行動を抑制することによる送粉の欠如。
 備考 : 竹富町希少野生動植物種（2017年）。

- 文献 : Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 1: 37-45.
 Ohashi, H. & Y. Tateishi, 1976. *Mucuna macrocarpa* and *M. gigantea* (Leguminosae) in Japan and Formosa. J. Jpn. Bot., 51: 161-168.
 Tateishi, Y. & H. Ohashi, 1981. Eastern Asiatic species of *Mucuna* (Leguminosae). Bot. Mag. Tokyo, 94: 91-105.
 山崎仁也・横田昌嗣・知念美香・仲宗根忠樹・比嘉清文・加島幹男, 2016. 鳩間島・新城（上地・下地）島・黒島の植物相（Flora）. 鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書, 沖縄県立博物館・美術館, 13-68.

執筆者名 : 立石庸一*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・佐藤宣子(追補)

- 和名 : ウチワツナギ
 分類 : マメ科 (APG科名: マメ科)
 学名 : *Phyllodium pulchellum* (L.) Desv.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類 (EN)

- 形態の特徴 : 高さ 0.5~2.5 m になる常緑低木。葉は 3 小葉からなる奇数羽状複葉で、頂小葉は卵状楕円形、長さ 6~9 cm、側小葉は小さく、頂小葉の半分の長さにすぎず、有毛の脈が両面ともに目立つ。偽総状花序は各節に 5~6 花を束生し、その基部に葉状の苞がある。苞は長柄の先に 2 個の側小葉と針状に退化した頂小葉をつける。花は白色または淡紫色の蝶形花で、長さ 6~7 mm。果実は節果で、2 小節果からなり、長さ 7~8 mm。
 分布域(県外) : 台湾、中国、東南アジア、インド、スリランカ、ヒマラヤ、オーストラリア北部。
 県内の分布 : 沖縄島、伊江島。
 生育環境 : 山野の草原や林縁に生える。
 生育状況 : 自生地の農耕地や放牧地等への開発が進み、沖縄島南部ではまれになった。伊江島からは最近(1994~1995年)の調査ではまったく発見できなかった。
 学術的価値 : 沖縄諸島に跳び離れて分布し、分布域の北限であることから、植物地理学的に重要である。
 減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られている。
 備考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。
 文献 : 平田義浩, 1989. 佐敷町産種子植物. "佐敷町史, 三 自然", 佐敷町史編集委員会(編), 佐敷町, 93-196.

執筆者名 : 立石庸一*

和名 : ヤエヤマシタン
分類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)
学名 : *Pterocarpus indicus* Willd. f. *echinatus* (Pers.) Rojo (= *Pterocarpus vidaliamus* Rolfe)
方言名 : シタン (石垣島)
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR) (シタンとして)

形態の特徴 : 高さ 25 m にも達する落葉高木。葉は 5~9 (~11) 枚の奇数または偶数の小葉からなる羽状複葉で、小葉は互生し、広卵形~卵形、卵状楕円形または長楕円形、先端は尖り、長さ 6~15 cm、無毛で光沢がある。4~5 月、総状または円錐状の花序を出し、黄色の蝶形花を多数つける。豆果はほぼ円形で扁平、径 4~5.5 cm、周囲に幅 1~2 cm の薄い紙質の翼を持ち、中央部には長い刺があり、裂開せず、中に含まれる 1 (~2) 個の種子は豆果に包まれたまま発芽する。

分布域 (県外) : フィリピン、インドネシア (セレベス、小スンダ列島、アンボン)。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 海岸から山地の林内に生える。

生育状況 : かつては石垣島に豊富に生育していたらしいが、伐採・利用され、明治初期には僅かになってしまった (立石, 1994)。現在では、胸高直径 10 cm を越え開花・結実能を持った自生個体は、平久保に 4 本、川平に 1 本 (平久保から移植されたものという説もある)、川原に 1 本残っているのが知られていたが、2005 年に野底で 1 本発見され、7 本が確認されている。平久保や川原、野底では豆果がよく着き、実生が多数見られる。最近、石垣島ではシタンヒメヨコバイが大量発生して、自生株はじめ島内に植えられている植栽株の葉から樹液を吸い、そのため葉が黄変、落葉して衰弱しているもの多くなってきた。平久保の個体は、近年樹勢が急激に衰えているので、枯死する恐れがあり、保全対策が必要である。

学術的価値 : 石垣島は約 20 種あるシタン属の分布域の北限である。またヤエヤマシタンは母種のインドシタン *P. indicus* の分布域の中で特異な分布をしており、生物地理学的に、石垣島の自生個体は極めて重要である。

減少の要因 : 心材は暗紫紅色で光沢があつて美しく、赤木、黄木あるいは紅木とよばれ、いわゆる紫檀の 1 種として家具や細工物、楽器などに利用された。この心材を採るために大径木が盛んに伐採された (立石, 1994)。

備考 : ヤエヤマシタンは従来、中国から東南アジアに分布するインドシタン *P. indicus* と同種と考えられてきた。しかし、インドシタンの豆果には刺がなく、花の形態もやや異なるので、ヤエヤマシタンをインドシタンの品種とする説 (Rojo, 1972) を採用した。研究の進展によっては、さらに高次のカテゴリーに位置づける必要が出てくるかもしれない。石垣島平久保の 2 本は国の天然記念物に指定されている。国指定天然記念物 (平久保のヤエヤマシタン) (1972 年)、石垣市指定天然記念物 (野底のヤエヤマシタン自生地) (2006 年)。

保全対策 : 自生個体の探索を進め、自生個体を生育地ぐるみで保護するとともに、島内で植栽されている個体の由来・系統を調べ、その上で島内に生育している個体間の交雑を進め、遺伝子の多様性を高める。

文献 : 新本光孝・新里孝和・仲里長浩・石垣長健, 1999. 亜熱帯沖縄における天然林の資源植物学的研究 (IV) 平久保のヤエヤマシタンについて. 琉球大学農学部学術報告, 46: 169-181.

Rojo, J. P., 1972. *Pterocarpus* (Leguminosae-Papilionaceae) revised for the world. *Phaerog. Monograph. 5*, Verlag von J. Cramer, Lehre., 119 pp, 14 figs.

立石庸一, 1994. ヤエヤマシタンの現況. 沖縄生物学会通信, 54: 3-4.

石垣市教育委員会文化課 (編), 2006. 平久保のヤエヤマシタン—天然記念物保護増殖事業報告書一. 石垣市教育委員会, 105pp.

執筆者名 : 立石庸一*・松村俊一*・前津栄信*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : タデハギ
 分類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)
 学名 : *Tadehagi triquetrum* (L.) Ohashi
 カテゴリ : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリ: 絶滅危惧 I A類 (CR)
- 形態の特徴 : 高さ 2 m に達する常緑低木または半低木。互生する葉は 1 小葉からなり、葉柄は長さ 1~4 cm あって両側に幅 1~6 mm の翼が発達し、その縁に白い軟毛が疎らに生える。小葉は長楕円形または狭卵形、先端は尖り、長さ 6~20 cm。枝端あるいは葉腋に長さ 15~30 cm の偽総状花序を出し、多数の花をつける。花は紅紫色の蝶形花で、長さ 6~7 mm。果実は長さ 2.5~3.5 cm の節果で、5~8 個の小節果に分かれ、全体が長い軟毛で密におおわれる。
- 分布域 (県外) : 台湾、中国、東南アジア、インド、イラン。
 県内の分布 : 石垣島。
 生育環境 : 原野や林縁や疎林の明るい林床に生える。
 生育状況 : 1954 年に石垣島北部の牧場で発見され、琉球新産として報告された (初島・天野, 1958)。もともと多いものではないが、最近の記録はない。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。生育地の開発。
 備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。IUCN カテゴリ: Least Concern (LC)*。**Tadehagi rodgeri* として評価。
- 文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1958. 沖縄植物目録. 琉球大学研究普及部, 那覇市, 192pp.
- 執筆者名 : 立石庸一*

- 和名 : ホソバフジボグサ
 分類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)
 学名 : *Uraria picta* (Jacq.) Desv. ex DC.
 カテゴリ : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリ: 絶滅危惧 I A類 (CR)
- 形態の特徴 : 多年草または半低木。高さ 1 m に達し、茎や花序などに鉤毛がある。葉は 5~7 (~9) 小葉からなる奇数羽状複葉で、小葉は線形~線状狭卵形 (茎下部の葉では頂小葉が楕円形~広卵形など幅の広いものも混ざる)、長さ 7~15 cm、幅 7~15 mm。花は蝶形で青紫色、直立した茎の上部に密集して長さ 15~25 cm ほどの穂状の偽総状花序をつくり、開花前は密生した苞でおおわれる。苞は卵形または狭卵形で長さ 10~15 cm、各々に 2 花を抱くが開花とともに落下する。果実は 3~5 個の小節果で、節のところでジグザグに折れ曲がり、小節果の長さはほぼ 3 mm、幅 2.5 mm。
- 分布域 (県外) : 台湾、中国、東南アジア。
 県内の分布 : 宮古島、石垣島、西表島、小浜島。
 生育環境 : 日当たりのよい原野に生える。
 生育状況 : もともとまれなものだったが、最近では西表島 1 ヶ所で確認されたが、その後は西表島では確認されていない。ごく最近になって宮古島の 1 ヶ所で 1 個体の生育が確認されており (佐藤, 2012)、この個体が国内で現在確認される唯一の個体である。自生地はリュウキュウマツを主体とした二次林の林床で、遷移の進行で林床が暗くなり、生育環境が悪化している。
 学術的価値 : 分布域の北限である。
 減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。遷移の進行。
 備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2017 年)。宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。石垣市自然環境保全条例保全種

(2015年)。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文 献 : 佐藤宣子, 2012. 宮古島で確認されたホソバフジボグサについて. 宮古島市総合博物館紀要, (16): 53-56.

執 筆 者 名 : 立石庸一*・川上 勲*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)・佐藤宣子(追補)・阿部篤志(追補)

和 名 : コチョウインゲン

分 類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)

学 名 : *Vigna adenantha* (G. F. Meyer) Marechal, Mascherpa et Stainier

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形 態 の 特 徴 : つる性の多年草。葉は互生し、3小葉からなる奇数羽状複葉で長い柄がある。花は11~2月頃、葉腋の長い柄のある総状花序の上部に数個ずつつく淡紫色で大形の蝶形花、旗弁は径3~3.5 cmもあり、2枚の竜骨弁は縁同士でくっついて筒状になり、これが長く伸びて更に螺旋に3回転する。果実は線形で扁平の豆果になり、種子は子葉の間にある空隙によって海水に浮く。

分 布 域 (県 外) : 世界の熱帯・亜熱帯地域。

県 内 の 分 布 : 石垣島、西表島、小浜島。

生 育 環 境 : 低地または海岸の低木林内、ときに山地の林縁に生える。

生 育 状 況 : 石垣島のごく限られた場所でしか知られていなかったが、最近分布が広がっている。西表島の野原崎付近でも発見された(立石, 1988)。このものは海流によって漂着した種子がもともとも知れない。現在はよく定着している。石垣島でも西表島でも、生育は比較的良好だが、個体群は平地の道端にあるので、道路舗装工事や拡張工事などによって、生育地が破壊されてしまうことがある。2014年に小浜島に大きな個体群があることが判った。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限であり、琉球列島の植物相の成立を考える上で貴重な種である。

減 少 の 要 因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文 献 : Tateishi, Y., 1984. Contribution to the genus *Vigna* (Leguminosae) in Taiwan I. Sci. Rep. Tohoku Univ. ser. 4 (Biology), 38: 335-350.

立石庸一, 1988. コチョウインゲンの台湾と琉球における分布とその要因. 植物研究雑誌, 63: 313-318.

執 筆 者 名 : 立石庸一*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和 名 : サクヤアカササゲ

分 類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)

学 名 : *Vigna vexillata* (L.) A. Rich.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形 態 の 特 徴 : つる性の多年草。葉は3小葉からなる奇数羽状複葉。小葉は楕円形で両面に長毛がやや密にはえる。托葉は底着だが基部の両端は耳状にやや伸びる。4~10月、葉腋から長い柄のある総状花序を出し上部に1~2個の大形の蝶形花をつける。花は淡赤紫色で、直径が2~3 cm、2枚の竜骨弁は縁同士が合着して筒状になり、先端はやや長く伸びてくちばし状になって、やや捻れ、右側の竜骨弁に低い距がある。豆果は線形で、長さ6~8 cm、長い毛が密生し、20前後の種子を入れる。

- 分布域（県外）：世界の熱帯・亜熱帯地域。
- 県内の分布：沖縄島北部。
- 生育環境：他の地域では平地から山地の川岸の草地、林縁や道端などかなり幅が広いが、沖縄島では海岸の断崖上部の平坦な風衝草地や、これよりやや内陸側の土壌がよく堆積したところの草地に生える。
- 生育状況：ごく狭い範囲に僅かに見られる。自生地は1ヶ所だけで、数個体が確認されるだけである。観光客や写真撮影者による過度の踏みつけで、生育環境が悪化している。
- 学術的価値：沖縄島の生育地は日本で唯一の産地であり、さらにその個体は典型的な *Vigna vexillata* と比べて、花や豆果、種子が小さいなど、形態もやや異なり、その分類学的取り扱いには検討の余地があることから、極めて重要な個体群である。
- 減少の要因：もともと自生地が限られている。観光客の踏みつけによる自生地の環境変化。
- 備考：自生地は県指定の天然記念物で、景勝地である。この種は分布が広く、また地域的な変異も大きい。そのため、変種として認識されている地域個体群も多い。アカササゲ var. *tsushimensis* Matsum. もその一つで、これは九州から朝鮮半島、中国、台湾に分布する。サクヤアカササゲに比べて、花や果実、種子が大きく、小葉も狭卵形で形が異なる（中島，1968）。
- 備考：国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物（2017年）。
- 文献：中島邦雄，1968. サクヤアカササゲについて. 植物研究雑誌，43: 247-248.
新納義馬・新城和治・宮城康一・日越国昭，1985. 恩納村文化財調査報告書第6集 沖縄県指定天然記念物万座毛石灰岩植物群落調査報告. 恩納村教育委員会，64pp.
- 執筆者名：立石庸一*・山城 考*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲間正和(追補)

- 和名：エノキフジ
- 分類：トウダイグサ科（APG科名：トウダイグサ科）
- 学名：*Discocleidion ulmifolium* (Mull.-Arg.) Pax et Hoffmann
- カテゴリー：絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR)
- 形態の特徴：雌雄異株の常緑の高木または小高木。葉は卵状長楕円形、長さ 6.5~10 cm。雄花は葉より長い円錐花序、雌花のつく総状花序は葉より短い。
- 分布域（県外）：奄美大島、徳之島、台湾。
- 県内の分布：伊平屋島、伊是名島、久米島、宮古島、石垣島、西表島。
- 生育環境：伊是名島では、山地のモクタチバナヤブニッケイ林の林縁にショウロウクサギやアカメガシワなどと混生する。しばしば伐採跡地の二次林を構成し、遷移が進行すると衰退し、消失する場合がある。
- 生育状況：伊是名島では1ヶ所のごく狭い範囲に50個体以下を産する。伊平屋島の自生地はダム建設で消失したとされていたが、最近道路の拡張による攪乱でかなり回復している。宮古島では2ヶ所で少数個体が確認されているが、史跡や観光地の中にあり、定期的な草刈りでしばしば伐採されている。公園整備や開発により消失する恐れがある。他の島の現状は不明。
- 学術的価値：奄美大島が分布域の北限である。
- 減少の要因：自生地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。遷移の進行。
- 備考：伊是名村保護植物（1995）。宮古島市自然環境保全条例保全種（2005年）。石垣市自然環境保全条例保全種（2015年）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。
- 文献：仲田栄二（編），1995. ふるさとの草木，伊是名諸島の植物図鑑. 伊是名村教育委員会，119pp.
阿部篤志・仲宗根忠樹，2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査（伊是名島・久米島）. “事

業年報（平成26年度）”，沖縄美ら島財団総合研究センター，27-34.

執筆者名： 新城和治*・仲田栄二*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名： リュウキュウダイゲキ
分類： トウダイグサ科 (APG科名: トウダイグサ科)
学名： *Euphorbia liukuensis* Hayata
カテゴリー： 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー： 該当なし

形態の特徴： 無毛の多年草。茎はよく分枝して枝は地を這うように伸びる。根は太く直根状で長い。葉は対生して小さく、長さ0.5~1 cm、卵状楕円形。多数の雄花と1個の雌花が小さな杯状花序をつくり、これが葉5~1腋に集散状につく。
分布域(県外)： 沖永良部島。
県内の分布： 宮古島、伊良部島、与那国島。
生育環境： 原野または乾いた隆起石灰岩上に生える。
生育状況： 与那国島では島内の各地に産し、比較的個体数が多いが、一部の個体は自衛隊基地建設で失われた可能性がある。2005年に伊良部島で少数個体が確認されているが、最近では観察されない。宮古島では絶滅した恐れがある。
学術的価値： 分布域の北限である。
減少の要因： 自生地の開発。もともと個体数と自生地が少ない。
備考： 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005年)。

執筆者名： 横田昌嗣*・伊波善勇*・川上 勲*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名： ボロジノニシキソウ
分類： トウダイグサ科 (APG科名: トウダイグサ科)
学名： *Euphorbia sparrmanni* Boiss.
カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴： 常緑の多年草。茎はよく分枝して地上を這い、高さ10~25 cmになり、全株無毛で粉白色を帯び、傷つけると白い乳液を出す。葉は対生し、卵状楕円形、長さ1.5 cm内外、短い葉柄があり、密生する。雄花と雌花が杯状花序をつくり、これが集散状に腋生または頂生する。
分布域(県外)： マリアナ群島、オーストラリア。
県内の分布： 北大東島、南大東島。
生育環境： 日当たりの強い海岸の石灰岩の岩場に生える。
生育状況： 南大東島では数ヶ所に多数の個体が生育しているが、北大東島では2ヶ所に数個体が生育しているだけである。北大東島で現在建設中の道路が建設されると、北大東島の個体群は絶滅する可能性が極めて高い。
学術的価値： ミクロネシア系の植物で、隔離分布し、植物地理学上貴重である。海外のものとは形態的に異なることが指摘されており、詳細な研究が必要である。
減少の要因： 海岸の開発。もともと自生地と個体数が少ない。
備考： 南大東島の自生地の一つは、国指定の天然記念物として保護されている。国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2017年)。

文献 : 西銘盛光・横田昌嗣, 1996. 南大東島海岸植物群落内における観察所建設の影響調査報告書. 沖縄県教育庁文化課紀要, (12) : 47-62.
西浜良修, 2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—. 南大東村教育委員会, 77pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : **ダイトウセイシボク**
分類 : トウダイグサ科 (APG 科名: トウダイグサ科)
学名 : *Excoecaria formosana* (Hayata) Hayata var. *daitoinsularis* (Hatusima) Hatusima
方言名 : ハブギ、カブレギ (北大東島)
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧II類 (VU)

形態の特徴 : 高さ 1~2 m の常緑低木。葉は花序付近をのぞき互生、長さ 10 cm 内外、薄い革質で、倒披針形または倒披針状楕円形、托葉は三角形。穂状花序は腋生し、上方に雄花を、下部に 2~3 個の雌花をつける。樹液は有毒。
県内の分布 : 北大東島、南大東島。
生育環境 : 自然林と二次林の林内に自生する。
生育状況 : 大東諸島の森林は伐採が進み、自生地となる場所はごく限られ、個体数は少ない。
学術的価値 : 大東諸島の固有変種で、基本変種は台湾とインドシナに産し、植物地理学上貴重である。
減少の要因 : 森林の開発 (道路の新設・拡張や農地整備・開墾など)。もともと自生地と個体数が少ない。
保全対策 : 島の森林面積を増やし、生育可能な場所を増やす。

文献 : Hatusima, S., 1956. New or noteworthy plants from the Ryukyu Islands and Formosa. Sci. Bull. Agric. Home Econ. Div., Univ. Ryukyus, Okinawa, (3): 19-33.
横田昌嗣・宮城康一, 1992. 大東諸島の植物相。“ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書”, 沖縄県教育委員会, 17-42.
西浜良修, 2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—. 南大東村教育委員会, 77pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和名 : **ヤマアイ**
分類 : トウダイグサ科 (APG 科名: トウダイグサ科)
学名 : *Mercurialis leiocarpa* Sieb. et Zucc.
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 30~90 cm に達する多年草。根茎は横走し、茎は直立単生する。葉は下部の 2~3 節にはなく、上部に数対が対生し、卵状楕円形で長さ 10 cm 前後、縁に鋸歯がある。雌雄異株。葉腋に長い穂状花序を出し、小さな雄花または雌花をつける。
分布域(県外) : 本州、四国、九州、種子島、宝島、奄美大島、徳之島、台湾、朝鮮、中国、インドシナ。
県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島北部、西表島。
生育環境 : 山地林内の多湿な半日陰な場所に散発的にみられる。
生育状況 : 沖縄島北部では起伏の陰しい古生層石灰岩地の林床に自生するが、個体数は少ない。伊平屋島では 1ヶ所に少数個体を産する。西表島の現状は不明。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。

執筆者名 : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : アカハダコバンノキ

分類 : トウダイグサ科 (APG 科名: トウダイグサ科)

学名 : *Margaritaria indica* (Dalzell) Airy Shaw

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 高さ 10 m に達する落葉性の小高木。樹皮は赤色を帯び、小枝に皮目が目立つ。葉は 2 列に互生し、長楕円形～楕円状卵形、長さ 4～15 cm、側脈は 6～9 対、葉柄は長さ 6～8 mm、托葉は披針形、長さ 3 mm、やや鋸歯縁。雄花は葉腋または小枝上に生じ、緑色、径 2 mm、小花梗は長さ 4～10 mm。雌花はやや大形、萼片は 4 個。果実は偏球形、鈍三角形、径 8 mm、褐色。

分布域(県外) : 徳之島、台湾、中国南部、インド、マレーシア。

県内の分布 : 沖縄島(北部～中部)、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の自然林に生える。

生育状況 : 沖縄島では数ヶ所に自生することが知られるが、まれである。大宜味村大保川と名護市羽地大川の自生地のは大半はダム建設により失われたが、移植が試みられている。西表島では今回の調査で 1ヶ所で 1 個体が確認された。石垣島では 1ヶ所で 2005 年に数個体が確認されているが、林道建設による森林の破壊で自生地の環境が損なわれている可能性がある。

学術的価値 : 分布域の北限に近い集団である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。ダム建設による水没。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.

沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 与那川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-10, 101-117.

新里孝和, 1994. 与那演習林の樹木. “琉球大学農学部附属演習林創設 40 周年記念誌”, 琉球大学農学部附属演習林, 125-139.

執筆者名 : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ハナコミカンボク

分類 : トウダイグサ科 (APG 科名: トウダイグサ科)

学名 : *Phyllanthus leptoclados* Benth. (= *P. liukiensis* Matsum. ex Hayata)

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 高さ 20～40 cm の無毛の小低木。枝は分枝多く、小枝は有稜で径 1 mm、茎頂に多く、側方の落下枝は長さ 7～10 cm、径 0.5 mm。葉は卵状楕円形、長さ 7～13 mm、幅 4～6 mm。室果は球形、径 3 mm。

分布域(県外) : 中国南部(香港)。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 海岸の石灰岩地の岩隙や林床に生える。

生育状況 : 自生地は 1ヶ所だけに限られている。自生地は保護されているにもかかわらず、開発によって個体数は減少している。今回、沖縄島南部にも生育するとの情報が得られたが、自生地が私有地のため

立入が認められず、確認することができなかった。

- 学 術 的 価 値 : 自生地は沖縄県の天然記念物に指定されている。中国南部にあり台湾にはなく、沖縄に隔離分布し、植物地理学上重要である。
- 減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が限られている。
- 備 考 : 香港の *P. leptoclados* から区別して、独立種 *P. liukiensis* とする意見もある (Kurosawa, 2001)。

- 文 献 : Kurosawa, T., 2001. Taxonomy and distribution of Japanese *Phyllanthus* (Euphorbiaceae). Acta Phytotax. Geobot., 52: 11-33.
- 新納義馬・新城和治・宮城康一・日越国昭, 1985. 恩納村文化財調査報告書第6集 沖縄県指定天然記念物万座毛石灰岩植物群落調査報告. 恩納村教育委員会, 64pp.

執 筆 者 名 : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

- 和 名 : ドナンコバンノキ
- 分 類 : トウダイグサ科 (APG 科名: トウダイグサ科)
- 学 名 : *Phyllanthus oligospermus* Hayata subsp. *donanensis* T. Kuros.
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 の 特 徴 : 高さ 1.5~2 m の落葉低木。葉は互生、無毛で、小枝に 10~18 個つき、葉身は楕円形、長さ 2~5 cm、幅 1.3~2.7 cm。雌雄同株で、9 月~1 月、葉腋に数~10 花を束生する。雄花は葉腋に 5~7 個つき、萼片は 4~5、楕円形、長さ 1.8~2 mm、黄緑色、雄蕊は (2~) 3~4 本。雌花は葉腋に 1~3 個、萼片は 4~5 個で早落性、楕円形、長さ 1.4~2 mm。果実は球形の液果で、直径 7~8 mm、暗赤色に熟し、小果柄は長さ 2~4 mm で先に行くにしたがって太くなる。種子は 6 個、半月三稜形で長さ約 3 mm、褐色。

県 内 の 分 布 : 与那国島 (固有)。

生 育 環 境 : 標高 50~100 m の常緑樹林の林縁に生える。

生 育 状 況 : 5ヶ所でそれぞれ僅かな個体が生育するのみである。1970年代から何回か採集されてはいるが、命名者が1ヶ所の生育地で行った1999年11月の調査では、僅か7開花個体を確認したのみであったという (Kurosawa, 2001)。最も個体数が多かった1ヶ所では、道路拡幅工事のため、個体数が激減している。他の2ヶ所では、近年は確認できない。

学 術 的 価 値 : 与那国島に固有で、しかも限られた地点にのみ見られる、個体数も非常に少ないと推定される。

減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が少ない。

備 考 : 2001年に記載された与那国島固有の亜種である。台湾に分布する母亜種 subsp. *oligospermus* は、雄蕊の数が3~5個、雌花の萼片が5~6個、種子数4~5個と異なる。また、日本列島のコバンノキ *P. blaxuosus* とは、雄花の萼片が黄緑色で数が多く (4~5個)、雄蕊の数も多い (コバンノキは雄花の萼片は暗赤色で4個、雄蕊が2 (~3) 個) などで簡単に区別できる (Kurosawa, 2001)。

- 文 献 : Kurosawa, T., 2001. Taxonomy and distribution of Japanese *Phyllanthus* (Euphorbiaceae). Acta Phytotax. Geobot., 52: 11-33.

執 筆 者 名 : 立石庸一*・山城 考*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

- 和 名 : シラキ
- 分 類 : トウダイグサ科 (APG 科名: トウダイグサ科)
- 学 名 : *Sapium japonicum* (Sieb. et Zucc.) Pax et Hoffmann

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ4~5 mの落葉小高木。樹皮は灰白色。葉は互生し、広卵形、長さ5~15 cm、幅4~10 cm、有柄、上面鮮緑色、下面は帯粉白色。室果は三角状球形、長さ1 cmくらい。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、屋久島、奄美大島、徳之島、朝鮮、中国中部。

県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島北部、西表島。

生育環境 : 高地林内に生え、まれである。

生育状況 : 沖縄島北部では数ヶ所で確認されているが、林道建設や森林伐採により自生地が失われている。奄美諸島と比べ、生育不良である。伊平屋島と西表島では極めてまれで、近年は確認されていない。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと個体数が少ない。

備考 : 奄美諸島と沖縄県のシラキを日本本土のものとして、シラキ *S. japonicum* var. *ryukyuense* と呼び、本土産をアツバシラキ *S. japonicum* var. *japonicum* とする意見がある(山崎, 2000)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 奥間川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-9, 99-112.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 与那川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-10, 101-117.
山崎 敬, 2000. 琉球のシラキについて. 植物研究雑誌, 75 : 67.

執筆者名 : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和名 : タチバナ

分類 : ミカン科 (APG 科名: ミカン科)

学名 : *Citrus tachibana* (Makino) T. Tanaka

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 高さ4 m内外の小高木。枝条は密生し、腋生する小刺があり、小枝は緑色である。葉柄に狭翼がある。花は腋生または頂生で、単出または双出。果実は扇球形で径2~2.5 cm、黄熟する。

分布域(県外) : 本州(中部以西)、四国、九州、薩摩黒島、種子島、屋久島、トカラ列島、奄美大島、済州島、台湾(海拔100 m以上)。

県内の分布 : 沖縄島、北大東島、南大東島、石垣島、魚釣島。

生育環境 : 海に近い常緑樹林内に自生する。

生育状況 : 北大東島では数ヶ所、南大東島では数ヶ所にそれぞれ少数個体が知られるだけである。沖縄島、石垣島、魚釣島の現状は不明。魚釣島では野生化したヤギによる食害が心配される。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。野生化ヤギによる食害(魚釣島)。

保全対策 : 自生地の保全。人工増殖。魚釣島では野生化ヤギの駆除が急務である。

備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 城間盛男, 2011. 北大東島の植物図鑑. 北大東村教育委員会, 101pp.
西浜良修, 2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—. 南大東村教育委員会, 77pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・伊波善勇*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

-
- 和名 : ハナシンボウギ
 分類 : ミカン科 (APG 科名: ミカン科)
 学名 : *Glycosmis citrifolia* (Willd.) Lindl.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし
- 形態の特徴 : 高さ 1~5 m に達する小高木。葉は奇数羽状複葉で変化にとむ。液果は球形、帯紅色または帯赤色、径 1 cm くらい、中に 5 mm の種子 1 個を有する。
- 分布域 (県外) : 台湾、中国南部、東南アジア。
- 県内の分布 : 沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、黒島、波照間島。
- 生育環境 : 低地林内の石灰岩地に生え、しばしば牧場で見られる。
- 生育状況 : それぞれの島で数ヶ所に少数個体を産するだけである。石垣島では空港建設で一部の自生地が失われたが、移植が試みられている。
- 学術的価値 : 沖縄島が分布域の北限である。
- 減少の要因 : 低地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。
- 保全対策 : 生育地の保全。
- 備考 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文献 : 山崎仁也・横田昌嗣・知念美香・仲宗根忠樹・比嘉清文・加島幹男, 2016. 鳩間島・新城 (上地・下地) 島・黒島の植物相 (Flora). “鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書”, 沖縄県立博物館・美術館, 13-68.
- 執筆者名 : 新里孝和*・伊波善勇*・川上 勲*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

-
- 和名 : ヒレザンショウ
 分類 : ミカン科 (APG 科名: ミカン科)
 学名 : *Zanthoxylum beecheyanum* K. Koch
 方言名 : センスルギー (沖縄島: 首里)
 カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし
- 形態の特徴 : 常緑低木。高さ 1~2 m。小枝の節部と葉柄基部に長さ 1~2 mm の 1 対の刺がある。葉は奇数羽状複葉、葉柄と羽軸に翼がある。室果はやや球形、径 3 mm、種子は黒色で光沢がある。
- 分布域 (県外) : 小笠原 (父島)。
- 県内の分布 : 沖縄諸島、北大東島、南大東島、宮古諸島、八重山諸島。
- 生育環境 : サンゴ礁石灰岩地域の岩上に生える。
- 生育状況 : 大きく成長したものは盗掘され、小さなものが散発的にみられる。
- 学術的価値 : 小笠原、大東諸島、沖縄諸島に隔離分布し、植物地理学上重要である。
- 減少の要因 : 庭木・盆栽用の盗掘。生育地の開発。
- 保全対策 : 生育地の保全。増殖による園芸利用。
- 備考 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文献 : 宮脇 昭・仲田栄二, 2001. 外来植生の在来植生に対する影響と対策の検討. “渡名喜島伝統集落周辺域における自然的歴史的景観の保存活用調査”, (財)日本ナショナルトラスト, 東京, 37-46, 77-

93.

新里孝和・高原建二，2002. 伊江島の植物図鑑. 伊江村教育委員会，201pp.

執筆者名 : 新里孝和*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和名 : シマイヌザンショウ
分類 : ミカン科 (APG 科名: ミカン科)
学名 : *Zanthoxylum schinifolium* Sieb. et Zucc. var. *okinawense* (Nakai) Hatusima
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 高さ 2~4 m に達する落葉低木。小枝には長さ 3~12 mm の刺がある。葉は長さ 8~20 cm、6~11 対の小葉からなり、小葉は披針形、長さ 1~4 cm。雌雄異株で、枝先に散房花序をつけ、多数の花を集める。花弁は白色、雄花のものは長さ約 1.5 mm、雌花では 2 mm。
分布域(県外) : 奄美大島、徳之島。
県内の分布 : 沖縄島。
生育環境 : 低地の林縁部に生える。
生育状況 : 1ヶ所で確認されているが、極めてまれである。
学術的価値 : 琉球列島の固有変種。
減少の要因 : 低地林の伐採・開発。もともと自生地が限られている。
保全対策 : 里山林の維持。

執筆者名 : 新里孝和*・伊波善勇*

和名 : ササキカズラ
分類 : キントラノオ科 (APG 科名: キントラノオ科)
学名 : *Ryssopterys timoriensis* (DC.) Blume ex Juss.
カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 多年生のつる植物。茎は径 2.5 mm くらい。葉は対生し、卵円形、長さ 10~15 cm、心脚、全縁、葉柄は長さ 3 cm、上部に 2 個の腺体がある。花は散房花序に 15 個ほどつき、径 1.5~2.5 mm、黄色。翼果は半倒卵形、長さ 3 cm、幅 1.5 cm、はじめ絹毛を有す。
分布域(県外) : 台湾(蘭嶼)、フィリピン、マレーシア、カロリン群島(パラオ)。
県内の分布 : 沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、新城島(下地島)、与那国島、波照間島。
生育環境 : 海岸から山地の林縁に生える。とくに、マングローブ林の構成種となり、河口付近の林縁に生える。
生育状況 : 沖縄島では近年確認されていない。石垣島では 3ヶ所で確認されているが、その内 1ヶ所は開発で消失し、他の 1ヶ所は絶滅寸前である。今回の調査で新城島の 1ヶ所で数個体生育することが初めて確認された。他の島の現状は不明。
学術的価値 : 沖縄島が分布域の北限である。
減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。
備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物(2017年)。宮古島市自然環境保全条例保全種(2005年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文 献 : 山崎仁也・横田昌嗣・知念美香・仲宗根忠樹・比嘉清文・加島幹男, 2016. 鳩間島・新城(上地・下地)島・黒島の植物相(Flora). “鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書”, 沖縄県立博物館・美術館, 13-68.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和 名 : コウシュンカズラ

分 類 : キントラノオ科 (APG 科名: キントラノオ科)

学 名 : *Tristellateia australasiae* A.Rich.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧類 (NT)

形態の特徴 : 常緑のつる性木本。葉は対生し、長楕円状卵形、長さ 5~14cm、葉柄の基部に 1~2 個の蜜腺がある。総状花序は頂生し、長さ 5~15cm、花は黄色、径 2cm、萼片は 5 個、花弁は長楕円形~長楕円状卵形、5 個、短い距がある。雄蕊は 10 個、長さ 3~4mm、心皮は 3 個、果実は星状、直径 12mm。

分布域(県外) : 台湾、マレーシア、オーストラリア北部、太平洋諸島の熱帯。

県内の分布 : 沖縄島北部、宮古島、伊良部島、石垣島、西表島、小浜島、与那国島。

生育環境 : マングローブの林縁や海岸林に生える。

生育状況 : 宮古島では 2 ヶ所、石垣島では 2 ヶ所、西表島では数ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。2014 年に小浜島でも確認された。沖縄島、伊良部島、与那国島の現状は不明。

学術的価値 : 分布域の北限である。マレーシア要素の植物で、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が限られる。園芸用の採集。

備考 : 海外産の栽培種がしばしば植栽されているが、遺伝的汚染を伴う交雑が起こる可能性があるため、自生地周辺での栽培や植栽には注意が必要である。宮古島市自然環境保全条例保全種(2005 年)。竹富町希少野生動物種(2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣

和 名 : シンチクヒメハギ

分 類 : ヒメハギ科 (APG 科名: ヒメハギ科)

学 名 : *Polygala chinensis* L.

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠB類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態の特徴 : 高さ 10~20 cm に達する多年草。茎はわずかに粗毛があり、下部で多少分枝する。葉は短い葉柄があり、葉身は楕円形で厚質、全縁。花は葉腋に葉に隠れるようにつき、ほとんど無柄、長さ約 2.5 mm、青色または淡紫色。

分布域(県外) : 奄美大島、徳之島、台湾、中国、フィリピン、インドネシア、カロリン群島(パラオ島)。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、久米島、座間味島、沖縄島、石垣島、西表島、小浜島。

生育環境 : 原野やリュウキュウマツの低木林の開けた日当りのよい場所に生える。

生育状況 : 各地とも遷移が進行して草丈の高い草本におおわれ、発育不良である。伊平屋島では 2012 年に 1 ヶ所で確認されたが、その後ダム建設工事で絶滅した。伊是名島では数ヶ所に産する。沖縄島では 2012 年と 2017 年に 2 ヶ所で確認されている。石垣島の現状は不明。西表島では数ヶ所で記録されており、そのうち 1 ヶ所では 2005 年に生育が確認されているが、他の 1 ヶ所は、開発により失われた。その他の生育地では、近年は確認されない。2014 年に小浜島の 1 ヶ所で少数個体が確認されている。座間味島では、2015 年に 1 ヶ所で確認されている。

学術的価値 : 奄美大島が分布域の北限である。

減少の要因 : 原野の開発。道路工事。もともと自生地が限られている。遷移の進行。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 (伊是名島・久米島). “事業年報 (平成 26 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.

Abe, A., T. Nakasone & G. Kokubugata, 2016. Noteworthy collection records of *Lipocarpha microcephala* (Cyperaceae) and *Polygala chinensis* (Polygalaceae) from Kume Island of the Ryukyus, Japan. Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. B, 42(2): 73-76.

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : リュウキュウヒメハギ

分類 : ヒメハギ科 (APG 科名: ヒメハギ科)

学名 : *Polygala longifolia* Poir.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 一年草または二年草。全株無臭。茎はときに疎らに分枝し、高さ 25~40 cm。葉は線形で、長さ 15~20 mm、柄は短い。総状花序は枝に頂生し、長さ 20 cm に達する。花は 2.5~3 mm、2 個の萼片は帯緑白色、3 個の花弁は淡紫紅色で、中央の 1 個は先が 2 裂する。

分布域 (県外) : 中国南部、インドシナ、インド、マレーシア。

県内の分布 : 久米島。

生育環境 : 低木林の明るい林床や原野に生える。

生育状況 : 1960 年代以降長らく現状が不明であったが、2005 年頃に 3 ヶ所で少数個体が生育していることが確認された。その後、その内の 2 ヶ所では遷移が進行し、樹木や草本が繁茂して、確認できなくなった。現在も確認できるのは 1 ヶ所だけであるが、やはり遷移の進行により生育環境は悪化し、衰退傾向にある。

学術的価値 : 東南アジアに分布し、台湾に分布しておらず、植物地理学上貴重である。久米島は分布域の北限で、国内唯一の産地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。遷移の進行。コバナヒメハギなどの外来種との競合。

保全対策 : 個体数は危機的な状況にあり、人工増殖を検討する必要がある。自生地の遷移の進行を止めるための人為的な管理が必要である。

備考 : 久米島で最近確認された自生地では、いずれもハイゴケ *Hypnum plumaeforme* Wils. (山口富美夫博士同定) と混生することが確認されている。国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2017 年)。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄県, 1-39.

阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 (伊是名島・久米島). “事業年報 (平成 26 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.

執筆者名 : 横田昌嗣*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : ヌルデ

分類 : ウルシ科 (APG 科名: ウルシ科)

学 名 : *Rhus javanica* L. var. *roxburghii* (DC.) Rehd. et Wilson
 カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ: 該当なし

形態の特徴 : タイワンフシノキ *R. javanica* の変種で、葉軸に顕著な翼をもつことで異なる。
 分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、奄美大島、徳之島、朝鮮、満州、中国、台湾、インドネシア、ヒマラヤ。
 県内の分布 : 沖縄島、久米島、石垣島。
 生育環境 : 低地や産地の林縁に生える。遷移の進行により、他の樹木に被覆されれば、衰退する。
 生育状況 : 久米島では 2005 年に低地の林縁で数個体が確認され、2016 年の調査でも一部の個体は確認されているが、道路沿いの草刈りで個体の一部が刈り取られていた。沖縄島では 1ヶ所で少数個体が確認されているだけで、極めてまれである。石垣島では山林のすそ野や海岸近くの平野にまれに生えるが、生育不良で枯死寸前である。
 学術的価値 : 日華区系要素の種で、植物地理学上貴重である。
 減少の要因 : 山地開発、道路工事、伐採。もともと自生地と個体数が少ない。遷移の進行。
 備考 : 奄美大島ではやや普通に生える。

執筆者名 : 立石庸一*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和 名 : リュウキュウツルマサキ
 分類 : ニシキギ科 (APG 科名: ニシキギ科)
 学 名 : *Euonymus fortunei* (Turcz.) Hand.-Mazz. var. *australiukiensis* (Hatusima) Hatusima
 カテゴリ : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリ: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 地表を這うか気根で樹幹や岩上によじ登る常緑のつる性低木。枝は緑色で、一・二年枝には細かい凸点がある。葉は対生するが、ときに互生、3 輪生あるいは枝頂に集まる。葉は革質で楕円形ないし長楕円形、長さ 1.5~6 cm、縁に低い鋸歯があり、長さ 0.3~1 cm の葉柄には微細な粒状の突起がある。花は葉腋の集散花序に 7~15 花つき、淡緑色、花弁は 4 個、雄蕊も 4 個、果実は球形の朔果、直径 5~6 mm。
 分布域 (県外) : 奄美大島、徳之島、朝鮮、中国。
 県内の分布 : 石垣島、西表島。
 生育環境 : 限られた高地の林内に生える。
 生育状況 : 自生地の多くは国立公園または史跡名勝に指定されており、大規模な開発の恐れはなく、特に個体数が減少しているわけではないが、もともと自生地は限られ、個体数が少ない。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。
 保全対策 : 生育地の保全を図る必要がある。
 備考 : 基本種ツルマサキと区別しない意見がある。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 新里孝和*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和 名 : オキナワツゲ
 分類 : ツゲ科 (APG 科名: ツゲ科)
 学 名 : *Buxus liukiensis* (Makino) Makino
 方言名 : ウコールギー (沖縄島: 首里/タイワンアサマツゲを含む)

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU） 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

形態の特徴：常緑の小高木で樹皮は灰白色。1年枝は四角形。葉は対生し、革質、卵状長楕円形、長さ3～6 cm、若葉は緑褐色。雌雄同株。短い総状花序は腋生し、下部に雄花を頂端に雌花をつけ、花弁はなく、萼片が雄花に4個、雌花に6個ある。室果は球形、長さ6 mmほどで光沢がない。

分布域（県外）：喜界島、沖永良部島、与論島、台湾。

県内の分布：沖縄島、屋嘉比島、渡名喜島、北大東島、南大東島、宮古島、石垣島、西表島？、与那国島。

生育環境：大東諸島では石灰岩地の林内に生えるが、石垣島では高地の非石灰岩地の林内に生える。

生育状況：石垣島では極所的に群生する所があるが、自生地は数ヶ所に限られる。与那国島では1ヶ所に群生し、生育状態は良好であることが2005年に確認されている。大東諸島ではまれである。宮古島では2016年に野生状態で生育することが確認されている（横田ら、2016）。西表島では石灰岩地1ヶ所で少数個体が確認されているが、野生かどうか不明。他の島の現状は不明。しばしば植栽されるので、本来の自生かどうか判断が難しい場合がある。

減少の要因：庭木として利用されるための採集。森林の伐採。

備考：竹富町希少野生動植物種（2017年）。

文献：初島住彦・金井弘夫、1974. 与那国島植物新発見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.
横田昌嗣・阿部篤志・佐藤宣子、2016. 宮古諸島から新たに見つかった維管束植物. 宮古島市総合博物館紀要, (29) : 121-128.

執筆者名：横田昌嗣*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・佐藤宣子(追補)・加島幹男(追補)

和名：タイワンアサマツゲ

分類：ツゲ科 (APG 科名: ツゲ科)

学名：*Buxus microphylla* Sieb. et Zucc. subsp. *sinica* (Rehd. et Wils.) Hatusima

方言名：ウコールギー（沖縄島：首里／オキナワツゲを含む）

カテゴリー：絶滅危惧ⅠA類（CR） 環境省カテゴリー：絶滅危惧ⅠA類（CR）

形態の特徴：高さ6 mに達する常緑の小高木。樹皮は灰白色、小枝は四角形で微毛がある。葉は対生し、全縁で革質、卵状楕円形、長さ1.5～3 cm、幅0.7～1.7 cm、若葉は緑色。雌雄同株。花は淡黄色で、腋生または頂生する花序の下部に雄花が、頂端に雌花がつく。花弁がなく、萼片が雄花に4個、雌花に6個ある。室果はやや球形で長さ約1 cm、光沢がある。

分布域（県外）：台湾、中国。

県内の分布：沖縄島北部、魚釣島。

生育環境：山地の林内に生える。

生育状況：沖縄島では極めてまれで、数ヶ所で記録されているが個体数は少ない。現在確認されている確実な自生地は2ヶ所のみであるが、その一部は米軍演習地の拡大により伐採された可能性がある。魚釣島の現状は不明。

学術的価値：隔離分布し、県内の自生地は極限されている。

減少の要因：もともと自生地と個体数が限られている。山地の開発。庭木としての盗掘。野生化ヤギによる食害（魚釣島）。軍事演習による自然林荒廃。

保全対策：生育地の保全。盗掘防止の啓蒙。魚釣島では野生化ヤギの駆除が急務である。

備考：基本亜種のヒメツゲは小形で高さはふつう1 m以下、枝も細く、葉も小さく、長さ1.5～2 cm。その変種のツゲ（アサマツゲ）*B. microphylla* var. *japonica* (Mull. -Arg. ex Miq.) Rehd. et Wilson はやや大きく、高さ2～3 m、ときに4 m、小枝は太く、葉は長さ1～3 cmで大きく厚い。タイワンアサマツゲはツゲとともに庭木やくしなどの用材として古くから利用されている。

- 文 献 : 初島住彦, 1991. 魚釣島の植物地理. 鹿児島県の植物 (鹿児島植物同好会誌), (11) : 62-66.
 新城和治・新島義龍・宮城朝章・島袋 曠・翁長丈子・兼本 正, 1992. 沖縄島北部脊梁山地東側地域における林齢による植生の比較研究. “特殊鳥類等生息環境調査”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 1-122.
 新里孝和, 1994. 与那演習林の樹木. “琉球大学農学部附属演習林創設 40 周年記念誌”, 琉球大学農学部附属演習林, 125-139.

執 筆 者 名 : 新里孝和*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和 名 : クサミズキ

分 類 : クロタキカズラ科 (APG 科名: クロタキカズラ科)

学 名 : *Nothapodytes foetida* (Wight) Sleumer

方 言 名 : ハタブラーキ (石垣島: 川平)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形 態 の 特 徴 : 高さ 5 m に達する常緑小高木。枝は灰白色で中空、皮目は著しい。葉は互生、4 cm 内外の葉柄があり、葉身は洋紙質、倒卵状楕円形～楕円形、全縁、長さ 10～17 cm、幅 6～9 cm。頂生の円錐花序に小形の両性花を多数つける。花は淡緑色で直径 3～4 mm。果実は楕円形で長さ 1～2 cm、紫黒色に熟す。

分布域 (県外) : 台湾(蘭嶼、緑島)、カンボジア、スリランカ、インド。

県 内 の 分 布 : 石垣島、西表島、与那国島。

生 育 環 境 : 海岸林の林内に生える。

生 育 状 況 : 海岸林と低地林に生え、石灰岩地でも非石灰岩地でも見られる。自生地の多くは開発が進んでおり、自生地が減少している。石垣島では数ヶ所、西表島では 4 ヶ所、与那国島では 1 ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。

学 術 的 価 値 : フィリピンと台湾本土に分布せず、インド、カンボジアから蘭嶼、緑島、八重山と跳び跳びに分布し、植物地理学的に興味深い種である。分布域の北限。制癌作用のあるカンプトテシンを含むため、原料として利用されている。奄美大島のもは最近新種ワダツミノキ *N. amamianus* として区別された (Nagamasu & Kato, 2004)。

減 少 の 要 因 : もともと個体数と自生地が限られている。自生地の開発。薬用の採集。

保 全 対 策 : 生育地の保全。御嶽林など可能な限り保存する。増殖による利用の啓発。

備 考 : 竹富町特別希少野生動植物種 (2017)。

- 文 献 : Nagamasu, H. & M. Kato, 2004. *Nothapodytes amamianus* (Icacinaeae), a new species from the Ryukyu Islands. *Acta Phytotax. Geobot.*, 55: 75-78.

執 筆 者 名 : 新里孝和*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ヤエヤマハマナツメ

分 類 : クロウメモドキ科 (APG 科名: クロウメモドキ科)

学 名 : *Colubrina asiatica* (L.) Brongn.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

- 形態の特徴** : 常緑のつる性または斜上する低木。葉は互生し、卵形、3行脈があり、長さ5~9 cm、幅2~6 cm、葉柄は長さ8~12 mm。集散花序は腋生し、長さ1 cm、花は黄緑色を帯び、径4 mm、萼は5裂し、花弁は5個、三角形、雄蕊は5個。室果は球形、径7~9 mm。
- 分布域(県外)** : 沖永良部島、台湾、中国南部、インド、インドネシア、フィリピン、ポリネシア、オーストラリア、アフリカ。
- 県内の分布** : 宮古島、伊良部島、石垣島、小浜島、西表島、黒島、竹富島。
- 生育環境** : 海岸林の林縁に生える。
- 生育状況** : 宮古島では数ヶ所で、伊良部島では2015年に1ヶ所で確認されている。石垣島と西表島ではそれぞれ数ヶ所の自生地が知られるが、個体数は少ない。黒島では狭い範囲であるが、多くの個体がある。竹富島では1ヶ所で、小浜島では1ヶ所で少数個体が確認された。自生地は海岸であるので、開発により容易に消失する恐れがある。
- 減少の要因** : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。
- 備考** : 宮古島市自然環境保全条例保全種(2005年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。
- 文献** : 知念美香, 1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究, (11) :75-105.
山崎仁也・横田昌嗣・知念美香・仲宗根忠樹・比嘉清文・加島幹男, 2016. 鳩間島・新城(上地・下地)島・黒島の植物相(Flora). “鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書”, 沖縄県立博物館・美術館, 13-68.
- 執筆者名** : 横田昌嗣*・小林史郎*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・佐藤宣子(追補)・阿部篤志(追補)

-
- 和名** : クニガミクロウメモドキ
- 分類** : クロウメモドキ科 (APG科名: クロウメモドキ科)
- 学名** : *Rhamnus calcicola* Hatusima
- カテゴリー** : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴** : 高さ1.5 mの落葉低木。1年枝はやや対生、帯褐色で多少稜があり、先端に刺がある。葉は対生、長さ3~5 cm、幅1.5~2 cm。果実は倒卵形、長さ5 mmくらい。
- 県内の分布** : 沖縄島北部。
- 生育環境** : 海岸に面した琉球石灰岩地に生える。
- 生育状況** : 生育地は1ヶ所だけで、近年は確認されておらず、ほとんど絶滅状態と思われる。
- 学術的価値** : ヒメクロウメモドキ *R. kanagusukii* Makino とリュウキュウクロウメモドキ *R. liukiensis* (Wilson) Koidz. の雑種起源と考えられている。沖縄島の固有種である。
- 減少の要因** : 盆栽用の盗掘。もともと自生地と個体数が少ない。
- 備考** : 自生地は県指定の天然記念物である。
- 文献** : Hatusima, S., 1956. New or noteworthy plants from the Ryukyu Islands and Formosa. Sci. Bull. Agric. Home Econ. Div., Univ. Ryukyus, Okinawa, (3): 19-33.
新納義馬・新城和治・宮城康一・日越国昭, 1985. 恩納村文化財調査報告書第6集 沖縄県指定天然記念物万座毛石灰岩植物群落調査報告. 恩納村教育委員会, 64pp.
- 執筆者名** : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名** : ヒメクロウメモドキ
- 分類** : クロウメモドキ科 (APG科名: クロウメモドキ科)

学 名 : *Rhamnus kanagusukii* Makino

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR)

環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 高さ 3 m に達する落葉小低木。小枝は灰紫色で長枝の先端は刺となる。葉は対生し、長楕円形、長さ 1~4 cm、幅 0.3~1.2 cm、ほぼ全縁、側脈は 2~3 対。雌雄異株。花は葉腋に単生し、淡緑白色、花梗は長さ 5 mm くらい、萼片は 4 個、長さ 1.5 mm。果実は広倒卵形、長さ 3 mm で暗赤色に熟す。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 海岸近くの石灰岩の崖に生える。

生育状況 : 自生地は 1 ヶ所だけで、個体数は極めて少ない。2011 年と 2014 年にそれぞれ別の場所で複数個体が確認されている。

学術的価値 : 沖縄島の固有種である。本種が台湾にも産するという意見があるが (Liu *et al.*, 1993)、台湾のものは別種とする意見もあり、分子系統学的な研究が待たれる。

減少の要因 : 盆栽用の盗掘。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 自生地は県指定の天然記念物である。国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2017 年)。

文献 : 新納義馬・新城和治・宮城康一・日越国昭, 1985. 恩納村文化財調査報告書第 6 集 沖縄県指定天然記念物万座毛石灰岩植物群落調査報告. 恩納村教育委員会, 64pp.

Liu, Y.-C., F.-Y. Lu, C.-H. Ou & C.-M. Wang, 1993. Rhamnaceae. "Flora of Taiwan, ed. 2, Vol. 3", Editorial Committee of the Flora of Taiwan, National Taiwan University, Taipei, 680-695.

執筆者名 : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・比嘉清文(追補)

和 名 : ハマヤブガラシ

分 類 : ブドウ科 (APG 科名: ブドウ科)

学 名 : *Cayratia maritima* B.R.Jackes

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR)

環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 長さ数 m になる常緑のつる性草本。巻きひげは 2~3 裂し、無毛。葉は 3 小葉からなり、頂小葉は卵形~菱形、長さ 2~5cm、幅 1.5~2.5cm、側小葉は斜形、上面は無毛、下面は脈上を除いて無毛、小円鋸歯縁~鋸歯縁、葉柄は長さ 2~4cm、托葉は 2 個。集散花序は腋生し、3~5 個に分枝する。花は淡黄色、果実は偏球形、黒熟する。

分布域(県外) : 台湾(緑島)、インドネシア、ニューギニア、オーストラリア。

県内の分布 : 新城島(上地島)。

生育環境 : 海岸林の林縁や疎林内に生え、樹上に這い上がる。

生育状況 : 自生地は 1 ヶ所のみで、局所的には旺盛に繁茂しているが、個体数は極めて少ない。

学術的価値 : 比較的最近記載された種で (Jackes, 1987)、分布域の北限であり、国内で唯一の自生地である。本種の分布域は、南半球に集中しており、北半球では台湾と新城島だけに産し、著しい隔離分布を示し、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。放牧されたウシやヤギによる食害。

備考 : 山崎ら (2016) では、本種を外来種としているが、これは誤りであり、野生種と考えられる。

文献 : Hsu, T.-W., C.-S. Kuoh, 1999. *Cayratia maritima* B.R.Jackes (Vitaceae), a new addition to the flora of Taiwan. Bot. Bull. Acad. Sin. 40: 329-332.

Jackes, B.R., 1987. Revision of the Australia Vitaceae, 2. *Cayratia* Juss. *Austrobaileya*, 2(4): 365-379.

山崎仁也・横田昌嗣・知念美香・仲宗根忠樹・比嘉清文・加島幹男, 2016. 鳩間島・新城(上地)・下

地) 島・黒島の植物相 (Flora) . 鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書, 沖縄県立博物館・美術館, 13-68.

執筆者名 : 横田昌嗣・仲宗根忠樹

和名 : ツタ
分類 : ブドウ科 (APG 科名: ブドウ科)
学名 : *Parthenocissus tricuspidata* (Sieb. et Zucc.) Planch.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 落葉性のつる性木本。葉の反対側からでる巻きひげは枝分れして先端に吸盤がある。葉は長い柄があって互生し、3つに深く切れこみ、短枝のものでは3裂、長さ、幅とも6~10 cm。短枝の先に散房花序をだし小形の黄緑色の花を多数つける。液果は球形で紫黒色に熟す。
分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、朝鮮、中国。
県内の分布 : 魚釣島。
生育環境 : 山地の崖に生える。
生育状況 : 魚釣島では野生化したヤギが多く、食害が進んでいるものと思われる。
学術的価値 : 北海道から九州まで分布するものが、琉球列島では魚釣島のみ分布する点で植物地理学的に興味深い。
減少の要因 : 野生化ヤギによる食害。もともと自生地と個体数が限られている。
保全対策 : 野生化ヤギの駆除が急務である。

文献 : 初島住彦, 1991. 魚釣島の植物地理. 鹿児島島の植物 (鹿児島植物同好会会誌), (11) : 62-66.

執筆者名 : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和名 : ナガバコバンモチ
分類 : ホルトノキ科 (APG 科名: ホルトノキ科)
学名 : *Elaeocarpus multiflorus* (Trucz.) F. Villar
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑高木。葉は枝先に集まってつき、葉柄は長さ2~4 cm、葉身は倒卵状楕円形、長さ7~12 cm、幅3~6 cm。葉腋から長さ5~9 cmの総状花序を出す。核果は楕円形で長さ1.5 cm、碧色に熟する。
分布域(県外) : 台湾 (蘭嶼)、フィリピン。
県内の分布 : 石垣島、西表島。
生育環境 : 山地の陰湿な常緑広葉樹林に生える。
生育状況 : 西表島では各地に点在するが、個体数は少ない。石垣島ではまれである。いずれも成熟個体は少なく、確認の多くは幼木である。
学術的価値 : 分布域の北限であり、国内で唯一の産地である。
減少の要因 : 森林の伐採。ゴルフ場建設。もともと個体数が少ない。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

執筆者名 : 新城和治*・伊波善勇*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)

和名 : アツバウオトリギ
 分類 : シナノキ科 (APG 科名: アオイ科)
 学名 : *Grewia biloba* G. Don
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 1 m 未満の小低木で、ときに匍匐する。葉は鋸歯があり、菱状倒卵形から卵形ときに円形、長さ 1.5~15 cm、幅 1~7 cm、星状軟毛がある。葉腋に散形花序を出し、数個の花をつける。萼片は 5 枚、長さ 4~8 mm、花弁は 5 枚で目立たない。雄蕊は多数。果実は 4 つの分果にわかれるが、そのうちの 1~3 個は熟さないことがある。分果は扁球であり、熟すると暗褐色。

分布域 (県外) : 台湾、中国、朝鮮。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 海岸近くの風衝地に生える。

生育状況 : 自生地は 1 ヶ所のみで、個体数は極めて少ない。

学術的価値 : 国内で唯一の生育地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。

保全対策 : 本種の自生地は観光地であり、遊歩道の脇に自生しているため、公園として整備・管理する場合、刈り取られることの無いよう配慮が必要である。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。ヒシバウオトリギ *G. rhombifolia* Kanehira et Sasaki とする意見もある (山崎, 1986, 1989)。石垣島では、これら 2 種は雌雄異株の可能性があり、今後分類学的に詳しく調査する必要がある。国内希少野生動植物 (2018 年)。

文献 : Hatusima, S., 1987. New or noteworthy plants from Japan. *J. Phytogeogr. Taxon.*, 35(2): 63-68.
 山崎 敬, 1986. 高等植物分布資料 (117), ヒシバウオトリギ. 植物研究雑誌, 61 : 73.
 山崎 敬, 1989. ウオトリギ属. “日本の野生植物木本”, 佐竹義輔他 (編), 平凡社, 東京, 67.

執筆者名 : 横田昌嗣*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)

和名 : ラセンソウ
 分類 : シナノキ科 (APG 科名: アオイ科)
 学名 : *Triumfetta japonica* Makino
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 60~120 cm になる一年草。葉は長さ 4~13 cm、幅 1.5~6 cm、先は長くとがり、基部は円心形、質薄くて、表裏脈上に粗い毛があり、1~4 cm の柄がある。花は葉腋に数個ずつつき、黄色で直径約 5 mm。萼片は 5 個、長披針形で先端に突起がある。花弁は 5 個、倒卵状長楕円形で萼片より短い。雄蕊は 10 個。果実は球形で直径 6~7 mm、かぎ状になった刺毛が密生し、動物や衣服などにくっついて散布される。

分布域 (県外) : 本州 (関東以西)、四国、九州、屋久島、トカラ列島、奄美大島、朝鮮、フィリピン。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 道端や畑地に生える。

生育状況 : 沖縄島北部で 1939 年 10 月に採集された (Sonohara *et al.*, 1952 ; Walker, 1976) のが唯一の記録で、現状は全くわからない。

文 献 : Sonohara, S., S. Tawada, T. Amano and E. H. Walker, 1952. Flora of Okinawa. US Civil Administration of the Ryukyu Islands, Naha, 237pp.
Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 1159pp.

執 筆 者 名 : 立石庸一*

和 名 : ハテルマカズラ (コンペイトウヅルを含む)
分 類 : シナノキ科 (APG 科名: アオイ科)
学 名 : *Triumfetta procumbens* G. Forst.
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 地を這って広がる常緑低木。茎全体に星状毛が密生する。葉は互生、葉柄は長さ1~3.5 cm、葉身は広卵形または卵円形、ときに浅く3裂し、長さ1~3 cm、幅1~4 cm、上面は星状毛を散生し、下面は星状毛を密生する。葉腋またはその反対側から長さ1~2 cmの花序を伸ばし、1~3花をつける。花卉は黄色で5枚、倒長卵形、長さ8~10.2 mm。果実は球形、径1.0~1.2 cm、有毛の刺が全面に多数ある。葉の下面と果実の刺の毛の少ないものは、変種コンペイトウヅル(ケナシハテルマカズラ) var. *repens* (Blume) Hatusimaとして区別される。

分 布 域 (県 外) : 硫黄島、フィリピン、ポリネシア、ミクロネシア、メラネシア、インド洋、マレーシア、オーストラリア、ココス島、セイシェル諸島。

県 内 の 分 布 : 慶良間諸島(慶伊瀬島)、宮古島、多良間島、水納島、石垣島、黒島、新城島(上地島)、西表島、与那国島、波照間島。変種コンペイトウヅルは伊良部島、多良間島から記録されている。

生 育 環 境 : 海岸の砂浜に生え、ときに隆起サンゴ礁の岩上に生えることがある。

生 育 状 況 : 慶伊瀬島では1894年(明治26年)に確認されているものの(Makino, 1896; Hatusima, 1987)、その後100年以上確認されていなかったが、2016年の調査で多数の個体が生育していることが確認された。宮古島では2008年に1ヶ所で、多良間島1ヶ所と水納島1ヶ所では2009年、新城島(上地島)1ヶ所では2013年、波照間島1ヶ所では2015年に確認されている。石垣島では2ヶ所で記録されているが、今回の調査では発見できなかった。黒島、西表島、与那国島の現状は不明である。ケナシハテルマカズラは、2009年に多良間島の1ヶ所で確認されたが、伊良部島では発見できなかった。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。マレーシアやミクロネシアに関わりのある種であり、植物地理学上貴重である。

減 少 の 要 因 : もともと自生地が限られている。自然海岸(砂浜)の減少。

備 考 : 宮古島市自然環境保全条例保全種(2005年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文 献 : Makino, T., 1896. Mr. Hisashi Kuroiwa's collection of Liukiu plants. Bot. Mag. Tokyo, 10(114): 55-60.
Hatusima, S., 1987. New or noteworthy plants from Japan. J. Phytogeogr. Taxon., 35(2): 63-68.
初島住彦・天野鉄夫・宮城康一, 1975. 宮古群島の植物. “沖縄県立自然公園候補地学術調査報告(宮古群島)”, 沖縄自然研究会(編), 沖縄県, 31-70.
知念美香, 1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究, (11): 75-105.
山崎仁也・横田昌嗣・知念美香・仲宗根忠樹・比嘉清文・加島幹男, 2016. 鳩間島・新城(上地・下地)島・黒島の植物相(Flora). “鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書”, 沖縄県立博物館・美術館, 13-68.
横田昌嗣・阿部篤志・佐藤宣子, 2016. 宮古諸島から新たに見つかった維管束植物. 宮古島市総合博物館紀要, (29): 121-128.

執筆者名 : 新城和治*・立石庸一*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)・佐藤宣子(追補)

和名 : センカクトロロアオイ

分類 : アオイ科 (APG 科名: アオイ科)

学名 : *Abelmoschus moschatus* (L.) Medik. var. *betulifolius* (Mast.) Hochr.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 高さ 1.5 m になる直立する一年草。葉は互生して長柄があり卵状円形～卵形、長さは 6～15 cm、様々な程度に 3～5 (～多) 裂する。花は大形で直径 10 cm くらい、花弁は 5 個、黄色で基部内面は紫色。果実は長楕円状卵形、長さ 5～7 cm、剛毛が密生する。

分布域 (県外) : インドシナ、マレーシア。

県内の分布 : 魚釣島、西表島?。

生育環境 : 海岸の低木林内に生える。

生育状況 : 自生地は 1 ヶ所のみで、もともと個体数は少ない上、魚釣島では野生化したヤギが多く、食害が進んでいるものと思われ、絶滅が危惧される。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : 野生化ヤギによる食害。もともと個体数が少ない。

保全対策 : 野生化ヤギの駆除が急務である。

備考 : リュウキュウトロロアオイの変種で、葉や茎に毛が少なく、果実に剛毛が多く、中央が太くふくらんでいる点で基本変種と区別されるが、分類学的な再検討が必要である。よく似たものは、最近西表島でも確認されている。基本変種は台湾、インドシナ、インド、マレーシア、太平洋諸島に広く分布する。

文献 : 初島住彦, 1991. 魚釣島の植物地理. 鹿児島県の植物 (鹿児島植物同好会会誌), (11) : 62-66.

新納義馬・新城和治, 1980. 植物調査. “尖閣諸島調査報告書, 学術調査編”, 沖縄開発庁, 155-244.

執筆者名 : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)・加島幹男(追補)

和名 : コショウノキ

分類 : ジンチョウゲ科 (APG 科名: ジンチョウゲ科)

学名 : *Daphne kiusiana* Miq.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 1 m に達する常緑小低木で、かさ状の樹冠をつくる。樹皮は暗褐色。葉は互生し、柔らかい革質で光沢があり、倒披針形、長さ 4～16 cm、幅 1.5～4 cm。雌雄異株で、頭状花序は前年枝の先端につき、10 花ほどをつける。花は白色、萼筒は外面に細毛があり、長さ 8～10 mm、先は 5 裂する。液果は球状楕円形、橙赤色に熟し、径 1 cm、かむと辛い。

分布域 (県外) : 本州 (関東南部および京都府以西)、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之島。

県内の分布 : 伊平屋島、魚釣島。

生育環境 : 山頂部の明るい林床に生える。

生育状況 : 伊平屋島ではこれまで 1 ヶ所でのみ確認されていたが、2017 年に新たに 1 ヶ所で確認された。いずれの自生地でも個体数は少ない。魚釣島の現状は不明で、魚釣島では野生化したヤギによる食害が進んでいる可能性が高い。

学 術 的 価 値 : 琉球列島では隔離分布し、植物地理学上貴重である。

減 少 の 要 因 : 自生地の開発。野生化ヤギによる食害（魚釣島）。

保 全 対 策 : 魚釣島では野生化ヤギの駆除が急務である。

文 献 : 初島住彦, 1991. 魚釣島の植物地理. 鹿児島島の植物（鹿児島植物同好会誌）, (11) : 62-66.

執 筆 者 名 : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和 名 : **アキグミ（マルバアキグミ）**

分 類 : グミ科（APG 科名：グミ科）

学 名 : *Elaeagnus umbellata* Thunb.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類（CR） 環境省カテゴリー： 該当なし

形 態 の 特 徴 : 4～5 m に達する落葉低木。若木の枝に刺がある。葉は楕円形、長さ 3～7 cm、全縁、下面に銀色の鱗片を密布する。花は葉腋に単生または数個束生し、淡黄色で長さ 1.2 cm。果実はやや球形、長さ 6～8 mm で赤熟する。

分 布 域（県外） : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、奄美大島、徳之島、朝鮮、中国。

県 内 の 分 布 : 粟国島。

生 育 環 境 : 風衝地の低木林内に生える。

生 育 状 況 : ごく限られた地域に生え、個体数は少ない。

学 術 的 価 値 : 県内では粟国島だけに分布する希産種である。

減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が限られている。生育地の遷移の進行による環境の変化。

保 全 対 策 : 自生地の保全。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種（2017 年）。

文 献 : 天野鉄夫, 1981. 粟国島植物目録. 粟国村教育委員会, 39pp.

阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 II（粟国島・渡名喜島）. 日本植物園協会誌, (51) : 80-85.

執 筆 者 名 : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和 名 : **クスドイゲ**

分 類 : イイギリ科（APG 科名：ヤナギ科）

学 名 : *Xylosma congestum* (Lour.) Merr.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類（CR） 環境省カテゴリー： 該当なし

形 態 の 特 徴 : 常緑の小高木。若木では小枝が鋭い刺に変化する。樹皮は暗褐色で鱗片状に剥離する。葉は長さ 4～8 cm、幅 3～5 cm、卵形～長楕円状卵形、葉柄は長さ 2～5 mm。雌雄異株で、雌花、雄花とも黄緑色で小さく、花弁を欠く。液果は球形、径 5 mm。

分 布 域（県外） : 本州（近畿以西）、四国、九州、台湾、朝鮮、中国、フィリピン、インドシナ。

県 内 の 分 布 : 伊平屋島、沖縄島、石垣島、魚釣島。

生 育 環 境 : 海岸や山地の常緑広葉樹林に生える。

生 育 状 況 : 石垣島の標本（初島住彦 No. 33365 ; 池田豪憲 No. 5109）が琉球大学理学部の標本庫（RYU）に、魚

釣島の標本（多和田眞淳 No. 17）が国立科学博物館（TNS）に所蔵されているが、近年は確認されておらず、現状は不明。他の島の現状は不明である。

- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。野生化ヤギによる食害（魚釣島）。
 備考 : 上記の標本では、本種の特徴である棘が発達しておらず、また花や果実もつけていないことから、同定に疑問が残る。今後状態の良い標本を用いて、再検討する必要がある。

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : アマミスミレ

分類 : スミレ科 (APG 科名: スミレ科)

学名 : *Viola amamiana* Hatusima

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : ごく小型の常緑多年草で、地下茎は長く地中を横走して分枝し、地上茎は長さ 2~8mm、5 葉程度をロゼット状につける。葉は卵形~卵状楕円形、長さ 5~7mm、幅 4~5mm、無毛、葉柄は長さ 1cm。花は乳白色、下側の花弁 3 枚の中央には紫色の条が入る。

分布域 (県外) : 奄美大島。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 常緑樹林内の水がしたたり落ちる陰湿な崖に生える。

生育状況 : 自生地は 1 ヶ所のごく狭い範囲に限られている。園芸目的の採集により、発見当時と比べると個体数が半減している。

学術的価値 : 沖縄島は分布域の南限である。奄美大島の個体群とは、葉の上面が無毛であることで明瞭に異なっている。本種はヤクシマスミレ類に近縁と考えられていたが (浜, 1975)、分子系統学的な研究によりツクシマスミレ類に最も近縁であることが明らかになっている (Nakamura *et al.*, 2015)。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。

備考 : IUCN カテゴリー: Critically Endangered (CR)。

文献 : 浜栄助, 1975. 原色日本のスミレ. 誠文堂新光社。

Nakamura, K., T. Denda, G. Kokubugata, C.-J. Huang, C.-I. Peng & M. Yokota, 2015. Phylogeny and biogeography of the *Viola iwagawae-tashiroi* species complex (Violaceae, section *Plagiostigma*) endemic to the Ryukyu Archipelago, Japan. *Pl. Syst. Evol.*, 301: 337-351.

執筆者名 : 横田昌嗣・豊見山元・比嘉清文

和名 : ヤクシマスミレ

分類 : スミレ科 (APG 科名: スミレ科)

学名 : *Viola iwagawai* Makino

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 小型の常緑多年草で、地下茎は短く、地中を浅く横走する細くて長い根を多数出し、その所々から新個体を生ずる。葉は根生し、長い柄があり、葉身は長さ幅とも 0.4~1.4 cm、三角形から心臓形まで変化にとみ、基部は心形。花は白く、淡紫色の条が入る。

分布域 (県外) : 屋久島、奄美大島、徳之島。

県内の分布 : 沖縄島北部。

- 生育環境 : 屋久島や奄美諸島では山地のコケの多い陰湿な林床に見られるが、沖縄島では山地の溪流沿いの岩上に群生する。
- 生育状況 : 沖縄島北部(国頭村、東村、大宜味村)の6河川にだけ生育し、そのうち1河川ではダム建設により絶滅した。他の地域でもダム建設により自生地が多くが水没し、残されている個体数は極めて少ない。
- 学術的価値 : 分布域の南限である。琉球列島でのヤクシマスミレ類とヤエヤマスミレ類の分子系統地理学的な研究(Nakamura *et al.*, 2015)により、島嶼間の分岐年代や進化の過程がかなり明らかになっており、沖縄島北部のものは、屋久島や奄美諸島のものと遺伝的にやや異なることが判っている。
- 減少の要因 : ダムの建設。森林伐採。もともと自生地と個体数が限られる。
- 備考 : ヤエヤマスミレ、イリオモテスミレ、イシガキスミレはよく似ており、連続した変異が有り区別しにくい場合がある。

- 文献 : 浜 栄助, 1975. 原色日本のスミレ. 誠文堂新光社.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成5年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成6年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.
Nakamura, K., T. Denda, G. Kokubugata, C.-J. Huang, C.-I. Peng & M. Yokota, 2015. Phylogeny and biogeography of the *Viola iwagawae-tashiroi* species complex (Violaceae, section *Plagiostigma*) endemic to the Ryukyu Archipelago, Japan. *Pl. Syst. Evol.*, 301: 337-351.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : シマジリスミレ
- 分類 : スミレ科 (APG科名: スミレ科)
- 学名 : *Viola okinawensis* Nakajima et Hama
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。有茎で、葉は長さ1~2.5 cm、幅1~2 cm、光沢が有り卵形心臟形~円状心臟形、基部は心脚で側辺部が重なって巻き込んでいるものが多い。花色は淡紫色から白色。柱頭は円柱形で、先端は有毛。
- 県内の分布 : 沖縄島南部。
- 生育環境 : 内陸の切り立った石灰岩のやや日陰の壁の窪や割れ目に生える。
- 生育状況 : 限定された2ヶ所に分布するが、1ヶ所では生育が確認されたものの、他の1ヶ所は立入をすることができず、現状不明。近隣に運動公園や神社ができており、また新たに自衛隊施設の拡張計画もあり、生育環境が悪化している。
- 学術的価値 : 沖縄島の固有種である。近縁種は日本の中部以北に分布するエゾノタチツボスミレやアイヌタチツボスミレである。
- 減少の要因 : 地域の開発。もともと自生地と個体数が限られている。
- 備考 : 本種は正式には記載されておらず、裸名のままである。
- 文献 : 浜 栄助, 1975. 原色日本のスミレ. 誠文堂新光社, 東京, 280pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : オリヅルスミレ

分類 : スミレ科 (APG 科名: スミレ科)

学名 : *Viola stoloniflora* Yokota et Higa

カテゴリー : 野生絶滅 (EW) 環境省カテゴリー: 野生絶滅 (EW)

形態の特徴 : 小形の常緑多年草で、数個の葉を根際から出す。葉柄は長さ 1 cm ほどで微毛を密生し、葉身は円心形で長さ 1 cm 内外になり、裏面の脈上に細毛がある。花は白色で 2 月から 4 月に開く。長いストロンを出し、新個体や花をつける。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 溪流沿いの土手のコケに混じって生える。辺野喜川の自生地ではヤクシマスミレに比べ水の流れに浸ることなくやや高いところに位置していた。

生育状況 : 基準産地の辺野喜川では絶滅。1994 年に新たな自生地 (約 20 個体) が沖縄島北部より発見されていたが、その後は個体を全く確認することができない。自然災害により崖崩れで消失したか、盗掘にあった可能性がある。

学術的価値 : 日本のスミレの中で特殊な形態をもつ東南アジア系のウラジロスミレ亜節の種。沖縄島の固有種である。

減少の要因 : ダムの建設。もともと個体数は極めて少なく、山地の湿った夏でも涼しい環境でしか生育できない。

備考 : 1994 年に発見された個体群は、葉や花序が無毛で、典型品とは明らかに異なる。

文献 : Yokota, M., S. Higa, H. Yoshioka & K. Shimabuku, 1988. *Viola stoloniflora* (Violaceae), a new species from the Ryukyus. Bot. Mag. Tokyo, 101: 1-8.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : イシガキスミレ

分類 : スミレ科 (APG 科名: スミレ科)

学名 : *Viola tashiroi* Makino var. *tairae* Nakajima

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : ヤエヤマスミレによく似るが、葉は三角状で基部が切形で、葉縁はほとんど無毛である点で異なる。花はヤエヤマスミレより小型で、ヤクシマスミレにやや近い。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 溪流の岩上に生える。

生育状況 : 基準産地の 1 河川のごく限られた地域だけで生育が確認されており、個体数は少ない。盗掘品が販売されており、絶滅が危惧される。

学術的価値 : 石垣島の 1 河川の固有変種。石垣島の他の河川にはヤエヤマスミレが自生する。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。園芸用の採集。

備考 : ヤエヤマスミレとは、葉の形態以外に柱頭の形態でも異なる。遺伝的にはヤエヤマスミレと区別することができ、沖縄島のヤクシマスミレとヤエヤマスミレの中間的な位置にあることが判っている (Nakamura *et al.*, 2015)。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。

文献 : 浜 栄助, 1975. 原色日本のスミレ. 誠文堂新光社, 東京, 280pp.

中島邦雄, 1970. 琉球植物覚書 (三). 北陸の植物, 18 (1) : 7-14.

Nakamura, K., T. Denda, G. Kokubugata, C.-J. Huang, C.-I. Peng & M. Yokota, 2015. Phylogeny and biogeography of the *Viola iwagawae-tashiroi* species complex (Violaceae, section *Plagiostigma*) endemic to the Ryukyu Archipelago, Japan. *Pl. Syst. Evol.*, 301: 337-351.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : オキナワスマレ

分類 : スミレ科 (APG 科名: スミレ科)

学名 : *Viola utchinensis* Koidz.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。有茎種で、葉は厚く光沢があり、よく似たシマジリスミレに比べ、葉面は平滑で基部の側片は重ならないことが多い。花色は淡青紫色が多いが、白色に近い個体もある。柱頭は3角形で、無毛。

県内の分布 : 沖縄島中部。

生育環境 : 海岸の波打ち際から崖の上までの直射光のあたる石灰岩の割れ目や窪みに生える。

生育状況 : 極めて限定された地域にのみ分布し、個体数は極めて少ない。

学術的価値 : 沖縄島の固有種である。国内産ではオリヅルスミレと共にウラジロスミレ亜節に属し、数少ない東南アジア系の種である。

減少の要因 : 採集による。もともと自生地が限られている。

備考 : 自生地は県指定の天然記念物である。IUCN カテゴリー: Critically Endangered (CR)。

文献 : 浜 栄助, 1975. 原色日本のスミレ. 誠文堂新光社, 東京, 280pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*

和名 : シマバラソウ (ヤンバルミゾハコベ)

分類 : ミゾハコベ科 (APG 科名: ミゾハコベ科)

学名 : *Bergia serrata* Blanco

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。茎は直立し、高さ 10~30 cm に達する。葉は線形または披針形で、長さ 1~2 cm、鋭頭、漸尖脚、無柄である。花は葉腋に輪生状に束生する。

分布域 (県外) : 九州、与論島、台湾、熱帯アジア、オーストラリア、アフリカ。

県内の分布 : 伊是名島、沖縄島。

生育環境 : 水田に生える。

生育状況 : 伊是名島の稲作田 (湿田、乾田) に群生しているのが 1992 年に観察された後、永らく確認されていなかったが、2016 年に再確認された (赤井, 2017)。沖縄島の現状は不明。

減少の要因 : 自生地の開発 (農地の基盤整備で、水田がサトウキビ畑に転化されている)。

文献 : 赤井賢成, 2017. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究 II. “事業年報 (平成 28 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 40-42.

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : コウトウシュウカイドウ

分類 : シュウカイドウ科 (APG科名: シュウカイドウ科)

学名 : *Begonia fenicis* Merr.

方言名 : スン (西表島)、パッパ (与那国島)

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は這い、マルヤマシュウカイドウ *B. formosana* のように立ち上がらない。葉は腎形で、葉緑に細かい鋸歯があり、大きな欠刻がない。花は淡桃色～白色。

分布域(県外) : 台湾 (蘭嶼、緑島)、フィリピン。

県内の分布 : 石垣島?、西表島、与那国島。

生育環境 : マルヤマシュウカイドウに比べ低地に分布し、やや乾いた砂岩や琉球石灰岩の岩上に生える。与那国島では直射光の当たる風の強い崖にも生える。

生育状況 : 自生地は疎らに点在し、小群落を形成する。西表島ではやや多く、すぐに絶滅する恐れはないが、与那国島では数ヶ所で確認されている。石垣島に産することは既に知られているが (初島・天野, 1994)、石垣島での生育は確認されないままであった。今回の調査で石垣島の1ヶ所に生育すること確認されたが、人家の近くで植栽または逸出の可能性はある。

学術的価値 : 分布域の北限である。この種の分布域全体で遺伝的多様性を調べた結果、西表島と与那国島の遺伝的多様性が最も高いことが判っており、熱帯系の植物の最終氷期のレフュジアとして南琉球が重要な役割を持っていたことが指摘されている (Nakamura *et al.*, 2014)。

減少の要因 : もともと自生地は少ない。園芸用の採集。自生地の開発。

備考 : 西表島や与那国島では食用に供されていた。竹富町希少野生動物植物種 (2017年)。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 136.

Nakamura, K., G. Kokubugata, R. Rubite, C.-J. Huang, Y. Kono, H.-A. Yang, A. Feliciano, M. Labuguen, M. Yokota & C.-I Peng, 2014. In situ glacial survival at the northern limit of tropical insular Asia by a lowland herb *Begonia fenicis* (Begoniaceae). *Bot. J. Linn. Soc.*, 174(3): 305-325.

赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究 (与那国島・石垣島). 事業年報 (平成 27 年度), 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : イシガキカラスウリ

分類 : ウリ科 (APG科名: ウリ科)

学名 : *Trichosanthes ishigakiensis* Walker

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 全株無毛の常緑のつる性多年草。茎は径 5~10 mm、やや白色を帯び暗褐色の皮目がある。葉は幼植物では浅く 3 裂、成葉は五角状広卵形、膜質、長さ 3~10 cm、幅 2~9 cm、心脚、両面にわずかに微毛が散生し、掌状脈は両面に凸出する。果実は楕円形、長さ 10 cm 内外で、黄色に熟する。

県内の分布 : 宮古島、石垣島、西表島。

生育環境 : やや開けた林縁や陰湿な自然林内に生える。

生育状況 : 宮古島では 1ヶ所のごく狭い範囲に生育する。石垣島では数ヶ所で知られているが、最近は減少している。西表島では、高地を中心に数ヶ所に産するが、開花・結実する個体はまれである。

学 術 的 価 値 : 先島諸島の固有種である。
減 少 の 要 因 : 山地の開発。もともと自生地が限られている。
備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。
文 献 : 初島住彦・天野鉄夫・宮城康一, 1975. 宮古群島の植物. “沖縄県立自然公園候補地学術調査報告 (宮古群島)”, 沖縄自然研究会 (編), 沖縄県, 31-70.
執 筆 者 名 : 新城和治*・川上 勲*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和 名 : ヒメミソハギ
分 類 : ミソハギ科 (APG 科名: ミソハギ科)
学 名 : *Ammannia multiflora* Roxb.
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 全株無毛の一年草。茎は四角形、多数分枝し高さ 20~30 cm になる。葉は対生し、葉身は披針状長楕円形、長さ 2~5 cm、幅 10 mm 内外、基部の両側は耳状に張り出し茎を抱く。葉腋に小さな岐散花序をつけ、花は径 1.5 cm 内外、室果は球形で光沢があり、紫紅色を帯びる。
分 布 域 (県 外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、アジア、アフリカ、オーストラリア。
県 内 の 分 布 : 伊是名島、沖縄島、石垣島。
生 育 環 境 : 水田や水湿地に生える。
生 育 状 況 : 水田や湿地の減少にともない、個体数も減少している。沖縄島では 2ヶ所に現存するが、個体数は少ない。最近見かけるものは、外来種のホソバヒメミソハギ *Ammannia coccinea* Rottb.が多くなっている。最近、石垣島からも報告されている (赤井, 2017)。
減 少 の 要 因 : 湿地・池沼・河川の開発・埋立。もともと自生地が限られている。農業散布。外来種ホソバヒメミソハギとの競合。
備 考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。
文 献 : 赤井賢成, 2017. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究 II. “事業年報 (平成 28 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 40-42.
執 筆 者 名 : 立石庸一*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ミズガンピ
分 類 : ミソハギ科 (APG 科名: ミソハギ科)
学 名 : *Pemphis acidula* J. R. et G. Forst.
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 高さ 1 m くらいの常緑性低木。枝はよく分岐して岩上を這うように伸び、枝や花序に灰白色の短毛を密布する。葉は対生、無柄、厚い肉質、長楕円形、長さ 1.5~2.5 cm、幅 0.5~1 cm、1 脈があり、鈍頭、鋭脚、全縁。花は腋生で、単生し、花梗は長さ 6~10 mm。萼筒は鐘形で先端は浅裂し、花冠は白色または紅色で径 1 cm くらい、花弁は 6 個で卵形、雄蕊は 12 個。室果は稜角を有する倒卵形、革質、長さ 6 mm くらい。
分 布 域 (県 外) : 奄美諸島、台湾、東南アジア、オーストラリア、ポリネシア、アフリカ。
県 内 の 分 布 : 沖縄諸島、大東諸島、宮古諸島、八重山諸島。
生 育 環 境 : 海岸の隆起サンゴ礁の飛沫帯の岩上に群生する。

- 生育状況 : かつては海岸岩場によくみられたが、庭木その他園芸用に盗掘によって個体数が減り、生育環境も損なわれている。久米島の1ヶ所では、埋立により大きな群落が消滅している。西表島の1ヶ所では、河川上流から流入した土砂の堆積で内湾部の陸化が進み、ミズガンピ群落は衰退している。鳩間島では、野生化しているヤギにより食害を受けており、2017年時点ではほぼ絶滅状態になっている。
- 学術的価値 : 熱帯要素の樹種で、琉球列島は分布の北限となっており、熱帯域の沿岸植生の重要な構成種である。
- 減少の要因 : 沿岸域の開発。園芸用の盗掘。
- 備考 : 宮古島市天指定天然記念物（水納島パナリのミズガンピ）（1974年）。宮古島市自然環境保全条例保全種（2005年）。石垣市自然環境保全条例保全種（2015年）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。
- 保全対策 : ミズガンピその他植物地理学上の重要種、及び多種の熱帯性樹種からなる沿岸域植生を保全する。
- 文献 : 西浜良修, 2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—。南大東村教育委員会, 77pp.

執筆者名 : 新里孝和*・新城和治*・横田昌嗣(追補)

和名 : ミズキカシグサ
 分類 : ミソハギ科 (APG 科名: ミソハギ科)
 学名 : *Rotala leptopetala* (Blume) Koehne var. *littorea* (Miq.) Koehne
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

- 形態の特徴 : 無毛の一年草。茎は軟弱でやや円く、下部は倒伏して節から根を出し、上部は直立して分枝し、高さ 20 ~ 30 cm、葉は対生し、披針状長楕円形~広線形、長さ 1~2 cm、円脚。花は腋生し、無柄、長さ 0.7 mm、萼裂片は 4 個、花弁は倒披針形。室果は球形、径 2 mm。
- 分布域(県外) : 本州(中南部)、四国、九州、薩摩黒島、宝島、奄美大島、徳之島、朝鮮。
- 県内の分布 : 沖縄島、座間味島、与那国島。
- 生育環境 : 水田、湿地、水溜りの周辺に生える。
- 生育状況 : 沖縄島では 1951 年以降は記録されていなかったが、1999 年に大宜味村のイグサの水田で確認された。座間味島では 1970 年代に採集された標本があるが、現状は不明。
- 減少の要因 : 生育環境の改変(湿地の減少)。もともと個体数が少ない。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。**Rotala rosea*として評価。

執筆者名 : 立石庸一*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : マヤプシキ(ハマザクロ)
 分類 : ハマザクロ科 (APG 科名: ミソハギ科)
 学名 : *Sonneratia alba* J. Smith
 方言名 : マザプス、マヤプシキ(西表島)
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

- 形態の特徴 : 全株無毛の常緑小高木で、県内では高さ 13 m になる。木質の気根を泥中から多数林立させる。小枝は中空で対生、節は肥大する。葉は卵形~卵状円形、対生し、長さ 5~8 cm、中肋は両面にやや凸出する。花は小枝の先に単生し、夕方に開く。花弁を欠き、径 4~5 cm で白色、雄蕊は多数で萼裂片の間につく。

分布域（県外）： 熱帯アジア、ミクロネシア、オーストラリア、東アフリカ。
県内の分布： 石垣島、西表島、小浜島。
生育環境： マングローブ林内に生える。
生育状況： 石垣島では2ヶ所、小浜島では1ヶ所の自生地が知られる。石垣島では1ヶ所で絶滅したが、他の1ヶ所では少数個体が生育している。西表島では2ヶ所に産し、個体数はやや多い。小浜島では1ヶ所に産し、個体数は少ない。
学術的価値： 分布域の北限である。
減少の要因： 河口域の開発。もともと自生地が限られている。
備考： 竹富町希少野生動植物種（2017年）。IUCN カテゴリー： Least Concern (LC)。

文献： 西平守孝, 1975. 八重山の潮間帯—1975. 琉大海洋保全研究会, 190pp.
西平守孝, 1978. 西表の潮間帯—1978. 沖縄県自然保護課, 158pp.

執筆者名： 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名： ゴバンノアシ
分類： サガリバナ科 (APG 科名: サガリバナ科)
学名： *Barringtonia asiatica* (L.) Kurz
カテゴリー： 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴： 材質の柔らかい常緑の高木で高さ8~15 mになる。葉は倒卵形~倒卵状長楕円形、長さ30 cm内外、表面は光沢があり、両面無毛。短い総状花序に少数の花をつける。花弁は4個で白色、長楕円形で長さ7~8 cm、早落性。雄蕊は細長くてきわめて多数、長さ10~12 cm、下部は白色で上方に行くに従い紫色を帯びる。果実は四角形で4~5稜があり長さ8~14 cm、幅8~12 cm、碁盤の脚に似る。

分布域（県外）： 台湾、スリランカ、マレーシア、ミクロネシア、ポリネシア、オーストラリア。
県内の分布： 石垣島、西表島、新城島（下地島）、黒島、小浜島、波照間島、与那国島。
生育環境： 海岸林内に生える。
生育状況： 自生地は数ヶ所知られるが、多くは果実が漂着した直後の幼個体であり、開花結実する個体は極めて少ない。今回の調査で黒島で1個体、新城島（下地島）で1個体、小浜島の2ヶ所で各1個体新たに確認された。黒島、新城島、小浜島の各1個体は成熟個体と考えられる。多良間村水納島では、樹高1m程度の幼木が数年間にわたって確認されていたが（横田ら, 2016）、この個体は枯死して定着しなかった。
学術的価値： 分布域の北限である。
減少の要因： 鑑賞用の採集。海岸の開発。もともと自生地・個体数が限られている。
備考： 石垣島では植栽された1個体が石垣市の名木として登録されていたが、最近枯死した。石垣市自然環境保全条例保全種（2015年）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。IUCN カテゴリー： Lower Risk/least concern (LC)。

文献： 山崎仁也・横田昌嗣・知念美香・仲宗根忠樹・比嘉清文・加島幹男, 2016. 鳩間島・新城（上地・下地）島・黒島の植物相 (Flora). “鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書”, 沖縄県立博物館・美術館, 13-68.
横田昌嗣・阿部篤志・佐藤宣子, 2016. 宮古諸島から新たに見つかった維管束植物. 宮古島市総合博物館紀要, (29): 121-128.

執筆者名： 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)・佐藤宣子(追補)・加

島幹男(追補)

- 和名 : コバノミヤマノボタン
- 分類 : ノボタン科 (APG 科名: ノボタン科)
- 学名 : *Bredia okinawensis* (Matsum.) H. L. Li
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態の特徴 : 高さ 0.5~1 m の低木。葉は対生し、うすい革質、長楕円形、長さ 4~9 cm、3 行脈が目立つ。集散花序は頂生し、3~7 花をつける。花弁は 4 枚で美しい桃紅色。室果は洋梨形で径 5~6 mm。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 山地の自然林の明るい林床、林道沿いの斜面、川沿いの崖などに生える。
- 生育状況 : 北部地域 (国頭村から恩納村まで) の非石灰岩山地に分布する。
- 学術的価値 : 沖縄島北部の固有種である。コバノミヤマノボタンは、ヤエヤマノボタン *B. yaeyamensis* と共に、ヤエヤマノボタン属 *Tashiroea* としてハシカンボク属 *Bredia* から独立させる意見があり (Ito & Matsumura, 1899)、ハシカンボク属では特異な種群として知られる。
- 減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。ダム建設による水没。
- 保全対策 : 生育地の保全。
- 文献 : Ito, T. & J. Matsumura, 1899. Tentamen Florae Lutchuensis. Sectio Prima: Plantae Dicotyledoneae Polypetalae. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo, 12(4): 263-541.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成 5 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 羽地大川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 103-113.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成 6 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 平成 7 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-7.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 大保ダム建設発生土の処分候補地に係る生物環境調査データ (陸域・海域). 沖縄建設弘済会, 3-14, 117-135, 277-286, 349-373.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 平成 8 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 奥間川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-9, 99-12.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 与那川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-10, 101-117.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 座津武川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-8, 87-95.
- 執筆者名 : 新城和治*・新里孝和*・横田昌嗣(補遺)

- 和名 : ヒメノボタン
- 分類 : ノボタン科 (APG 科名: ノボタン科)
- 学名 : *Osbeckia chinensis* L.

- カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 II 類 (VU)
- 形態の特徴：高さ 30~50 cm の多年草。茎はわずかに分枝し直立、4 稜形。葉は対生、狭長楕円形、長さ 3~6 cm、3~5 行脈があり、両面に剛毛を密布する。花は枝先に 2~5 個集まって咲き、紫紅色で、直径約 4 cm。
- 分布域 (県外)：本州、四国、九州、種子島、屋久島、口之永良部島、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、インド、マレーシア、オーストラリア。
- 県内の分布：伊平屋島、沖縄島、久米島、石垣島、西表島。
- 生育環境：低地の山すその日当りのよい原野、水田の畦、牧場などに生える。
- 生育状況：沖縄島では国頭村の 1ヶ所で確認されており、西表島では 1980 年代前半に牧場で少数個体が確認されているが、今回の調査ではいずれも確認できなかった。他の島の現状は不明で、絶滅した可能性がある。
- 学術的価値：熱帯地域を中心として分布し、琉球列島では希産種である。
- 減少の要因：自生地の開発 (原野、畑地、道路など、開発し易い所に自生地がある)。園芸用の採集。遷移の進行。外来種との競合。
- 保全対策：生育地の保全。
- 備考：竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 執筆者名：新城和治*・新里孝和*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名：ヒルギモドキ
- 分類：シクンシ科 (APG 科名: シクンシ科)
- 学名：*Lumnitzera racemosa* Willd.
- カテゴリー：絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR)
- 形態の特徴：常緑の小高木。葉は互生して、枝先に束生し、長さ 2.5~7 cm、肉質で狭卵形、漸尖脚、円頭または凹頭で、葉柄は 2 cm くらい。総状花序は腋生し、長さ 2~6 cm。花卉は 5 個、白色で長楕円形、長さ約 4 mm。果実は緑色で長楕円形、長さ約 1.5 cm で、頂端に萼歯が残る。
- 分布域 (県外)：台湾、フィリピン、中国南部、インド、スリランカ、インドシナ、マレーシア、ニューギニア、オーストラリア北部、ニューカレドニア。
- 県内の分布：沖縄島、久米島、石垣島、小浜島、西表島、与那国島。
- 生育環境：河口や入江の汽水域の砂泥地に生えるマングローブ植物で、最も陸側の環境に生える。
- 生育状況：沖縄島では数ヶ所に産し、非常に少ない。久米島、小浜島、与那国島の現状は不明。石垣島と西表島では以前はやや多かったが、道路拡幅工事などで自生地が大規模に消失しており、見かけることは少なくなっている。
- 学術的価値：分布域の北限である。
- 減少の要因：マングローブ湿地の埋立。
- 備考：宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。
- 文献：天野鉄夫・新納義馬, 1980. 億首川の紅樹林及びその周辺の植物. “沖縄県自然環境保全地域指定候補地学術調査報告, 伊是名城跡・大浦川のマングローブ林・億首川のマングローブ林”, 沖縄自然研究会 (編), 沖縄県, 79-100.
国吉真隆, 1983. 沖縄島におけるヒルギモドキの新産地. 沖縄生物学会誌, (21) : 73-74.
西平守孝, 1974. 沖縄の潮間帯—1974, 琉大海洋保全研究会, 262pp.
西平守孝, 1975. 八重山の潮間帯—1975. 琉大海洋保全研究会, 190pp.

西平守孝, 1978. 西表の潮間帯—1978. 沖縄県自然保護課, 158pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・横田昌嗣(追補)

和名 : テリハモモタマナ

分類 : シクンシ科 (APG 科名: シクンシ科)

学名 : *Terminalia nitens* Presl

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 高さ 15 m に達する高木。樹皮は厚く、帯黄色で平滑、小枝は灰色で上方に曲り無毛。葉は小枝の先端に東生し、倒卵形～倒卵状披針形で、長さ 10～15 cm、幅 4～5 cm、葉柄は 1～1.5 cm である。

分布域(県外) : フィリピン。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 海岸林に生える。

生育状況 : 西表島で 1960 年代に 2 回採集された記録があるだけで、近年は全く確認されていない。その標本は、鹿児島大学総合博物館 (KAG) に収蔵されている。本種の西表島での採集者に採集時の状況を聞き、その情報を元に採集地周辺を踏査したが、見つけることはできなかった。現在も残存している可能性もあるが、自生地は開拓による森林伐採で失われた可能性がある。

学術的価値 : 分布域の北限で、日本で唯一の産地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Vulnerable (VU)。

文献 : 初島住彦, 1964. テリハモモタマナ (新称) 琉球に産す。北陸の植物, 13: 26-27.

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・横田昌嗣(追補)・加島幹男(追補)

和名 : ケミズキンバイ

分類 : アカバナ科 (APG 科名: アカバナ科)

学名 : *Ludwigia adscendens* (L.) Hara

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 水中に生える多年草。茎は水上を這い、長さ 30～60 cm になる。葉は狭長楕円形～倒卵状楕円形、上面は無毛で光沢がある。花は葉腋に 1 個ずつつき、径 2～3 cm、白色で中心部は黄色を帯びる。果実は円柱状で長さ 3～5 cm、明瞭な縦稜がある。

分布域(県外) : 台湾、熱帯アジア。

県内の分布 : 沖縄島、北大東島、南大東島、池間島、宮古島、来間島、石垣島。

生育環境 : 沼沢地に生える。

生育状況 : 南・北大東島ではそれぞれ数ヶ所の自生地が知られているが、湿地の埋立により自生地が消失している。宮古島には数ヶ所に産するが、自生地と個体数が減少している。池間島では、2017 年に 1 ヶ所で確認されている。石垣島では極めてまれで 1 ヶ所のみで確認されているが、現状は不明。沖縄島の現状は不明。

減少の要因 : 湿地・池沼・河川の開発。もともと自生地が少ない。

文 献 : 横田昌嗣・阿部篤志・佐藤宣子, 2016. 宮古諸島から新たに見つかった維管束植物. 宮古島市総合博物館紀要, (29): 121-128.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)・佐藤宣子(追補)・城間盛男(追補)

和 名 : **ウスゲチヨウジタデ**

分 類 : アカバナ科 (APG 科名: アカバナ科)

学 名 : *Ludwigia epilobioides* Maxim. subsp. *greatrexxii* (Hara) Raven

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 一年草。茎は直立して多くの枝を分け、葉とともに細毛が多い。葉は披針形～長楕円状披針形で長さ7～8 cm。花は葉腋に1個ずつつき、花弁はふつう5個あって、倒卵形、長さ約4 mm。

分布域(県外) : 本州(関東以西)、九州、奄美大島、与論島。

県内の分布 : 宮古島、石垣島、西表島。

生育環境 : 水田や湿地に生える。

生育状況 : 水田の減少で自生地は減っている。個体数は少ない。西表島では、本種の生育環境の一部に外来種のヒレタゴボウ(アメリカミズキンバイ)が侵入しており(赤井, 2017)、本種やキダチキンバイとの競合や交雑が危惧される。2016年に宮古島の1ヶ所で確認されているが、除草剤の散布や湿地の埋立で、絶滅寸前である。

減少の要因 : 土地改変による湿地や水田の減少。外来種との競合。

備考 : 基本亜種のチヨウジタデに比べ、若枝に毛が多く、花はやや大きく、葉は秋期に紅葉しない。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文 献 : 横田昌嗣・阿部篤志・佐藤宣子, 2016. 宮古諸島から新たに見つかった維管束植物. 宮古島市総合博物館紀要, (29): 121-128.

赤井賢成, 2017. 西表島植物誌編纂事業. “事業年報(平成28年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 43-45.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・佐藤宣子(追補)

和 名 : **ナガバアリノトウグサ(ホソバアリノトウグサ)**

分 類 : アリノトウグサ科 (APG 科名: アリノトウグサ科)

学 名 : *Haloragis chinensis* (Lour.) Merr.

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎は直立して分枝し、高さ10～25 cmになる。葉は対生し、上方のものは時に互生し、披針状長楕円形～披針形、長さ1～2 cm、両側に4～5対の鋸歯があり、表面に圧毛を散生し、鋭頭、円脚、やや無柄。花序は頂生または上部の葉腋から生じ、花は長さ2 mm、無柄、萼筒は鐘状、裂片は狭三角形、長さ0.5 mm、花弁は長さ1 mm。果実は半球形、長さ13 mm、8肋がある。

分布域(県外) : 中国南部、インド、インドシナ。

県内の分布 : 伊是名島、沖縄島。

生育環境 : 日当たりがよく土壌の少ない草地に生える。沖縄県では、オオマツバシバと混生して出現する。

生育状況 : 伊是名島では、自生地に観光道路が建設されて減少した。2017年にも確認されたが、ごく狭い範囲に少数個体が残されるだけである。沖縄島では名護市と恩納村の各1ヶ所で1930年代に記録された

後見つかっていなかったが、2004年に恩納村の3ヶ所で発見されている。その内の2ヶ所は道路建設により2005年に消失した。名護市の1ヶ所でも確認されたが、米軍基地建設のため大部分の自生地が消失した。

- 学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。
- 減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。遷移の進行。
- 備 考 : 種子島(馬毛島)には和名が同じで本種とは別種のタネガシマアリノトウグサ(別名ナガバアリノトウグサ、ホソバアリノトウグサ) *H. walkeri* が分布する。
- 執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)・國府方吾郎(追補)

- 和 名 : **ホザキノフサモ (キンギョモ)**
- 分 類 : アリノトウグサ科 (APG 科名: アリノトウグサ科)
- 学 名 : *Myriophyllum spicatum* L.
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形 態 の 特 徴 : 常緑の沈水性多年草。茎は所々で分枝し、流水中では長さ1~2 mになる。葉は細裂した羽状複葉で各節に4個輪生し、長さ1.5~3 cmになる。雌雄同株。花序は穂状で水面からとび出して直立し、長さ3~10 cm。水上部の各節の葉はごく小さな苞に退化することが他種と異なる。
- 分 布 域 (県 外) : 北海道、本州、四国、九州、種子島、奄美大島、台湾、ユーラシア。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄島、宮古島、石垣島、西表島。
- 生 育 環 境 : 湧水池や水路などの水中に生える。
- 生 育 状 況 : 現状は不明。
- 学 術 的 価 値 : 湿地・池沼・河川の開発。もともと自生地が少ない。
- 備 考 : 近年、北アメリカに帰化し、各地で異常繁茂し、駆除されている。竹富町希少野生動植物種(2017年)。IUCNカテゴリー: Least Concern (LC)。

- 執 筆 者 名 : 立石庸一*・豊見山元*

- 和 名 : **ミツバウコギ**
- 分 類 : ウコギ科 (APG 科名: ウコギ科)
- 学 名 : *Eleutherococcus trifolius* (L.) S.Y.Hu
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形 態 の 特 徴 : 長さ数 m に達する常緑のつる性木本。長枝は長く這い、短枝は側生し、少数の葉をつけ、枝と葉柄に反曲する棘がある。葉は互生し、3出葉、頂小葉は楕円状倒卵形~楕円状披針形、長さ4~8cm、幅2.5cm、側小葉はやや斜形、小鋸歯縁、葉柄は長さ2~6cm。複集散花序は頂生し、3~10個の集散花序からなり、各集散花序は多数の花をつけ、花梗は長さ2~7cm。花は単黄緑色、花弁は三角状、長さ2mm、雄蕊は5個、果実は偏球形。
- 分 布 域 (県 外) : 台湾、フィリピン、中国南部、ネパール。
- 県 内 の 分 布 : 宮古島。
- 生 育 環 境 : 低地の自然度の高い御嶽林内に生育し、常緑広葉樹林内の林床や樹上を這い、林冠で開花・結実する。
- 生 育 状 況 : 自生地は1ヶ所のみで、ごく狭い範囲に少数個体を産するだけである。
- 学 術 的 価 値 : 分布域の北限で、国内では唯一の自生地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。

文献 : 佐藤宣子・阿部篤志・横田昌嗣, 2016. ミツバウコギ. “琉球の樹木”, 大川智史・林将之 (編著), p. 446. 文一総合出版, 東京.

執筆者名 : 横田昌嗣・佐藤宣子・阿部篤志

和名 : アオキ

分類 : ミズキ科 (APG 科名: アオキ科)

学名 : *Aucuba japonica* Thunb.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 3~4 m の低木、全株無毛。葉身は厚く光沢があり、楕円状卵形、長さ 8~20 cm、疎鋸歯縁、葉柄は長さ 1~5 cm。雌雄異株。

分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之島。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 奄美諸島では非石灰岩地にやや普通に生えるが、沖縄県では山地の古生層石灰岩地帯の自然林に生える。

生育状況 : 大宜味村と本部半島の山地の一部に限定され、個体数も少ない。

学術的価値 : 分布域の南限である。琉球列島と南九州のものは二倍体で (Kurosawa, 1971)、遺伝的にも区別できる (Ohi *et al.*, 2003) ことから、固有変種のナンゴクアオキ *A. japonica* Thunb. var. *australis* H. Hara et S. Kurosawa として、四倍体のアオキと区別されることが多い。ナンゴクアオキに、ヒゴアオキの学名 *A. japonica* Thunb. var. *ovoidea* Koidzumi が用いられることがある。

減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地が限られている。

保全対策 : 生育地の保全。

備考 : 本部半島の自生地の大半は、沖縄県指定の天然保護区域である。

文献 : Kurosawa, S., 1971. Cytotaxonomical studies on the genus *Aucuba*. *J. Jpn. Bot.*, 46: 231-238.

Ohi, T., Kajita, T. & J. Murata., 2003. Distinct geographic structure as evidenced by chloroplast DNA haplotypes and ploidy level in Japanese *Aucuba* (Aucubaceae). *Amer. J. Bot.*, 90(11): 1645-1652.

執筆者名 : 新城和治*・新里孝和*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヤエヤマヤマボウシ

分類 : ミズキ科 (APG 科名: ミズキ科)

学名 : *Cornus hongkongensis* Hemsl.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 落葉高木。幹は直立あるいは斜上する。葉は枝先に対生し、葉身は楕円形、長さ 5~12 cm、やや全縁、葉柄は長さ約 1 cm。短枝の先に長い柄を伸ばし頭状花序をつける。花序の基部にある総苞は大形で総苞片は 4 枚、へら形で長さ約 2 cm、花弁のように見える。頭状花序は径約 1 cm、緑黄色の小さな花を密集する。果実は黄熟し、萼筒は肥厚して互いに合着し、球形の集合果となる。

分布域 (県外) : 中国南部。

県内の分布 : 石垣島、西表島

- 生育環境 : 低地から高地までの自然林に生える。
- 生育状況 : 石垣島では限られた地域に点在し、個体数は少ない。西表島では数ヶ所に産するが、やはり個体数は少ない。
- 学術的価値 : 分布域の北限で、国内唯一の産地である。
- 減少の要因 : もともと自生地が限られている。道路建設。森林伐採。
- 保全対策 : 生育地の保全。
- 備考 : 中国のものとは形態が異なり、独立種 *C. yaeyamensis* Hatusima とする意見 (初島・天野, 1994)、台湾と中国に分布する *Benthamidia sinensis* (Nakai) Yamazaki とする意見 (山崎, 2000)、中国や台湾に産するヤマボウシの亜種 *C. kousa* Buerger ex Hance subsp. *chinensis* (Osborn) Q. Y. Xiang とする意見 (Xiang & Boufford, 2005) 等様々な取扱が提唱されており、今後詳細な研究が必要である。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。
- 文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 160.
小林史郎・横田昌嗣, 2001. 琉球列島植物分布資料 16. 沖縄生物学会誌, (39) : 99-102.
山崎 敬, 2000. ヤエヤマヤマボウシについて. 植物研究雑誌, 75 (6) : 373-374.
Xiang, Q. Y. & D. E. Boufford, 2005. Cornaceae. Flora of China, 14: 206-221.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・小林史郎*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・加島幹男(追補)

- 和名 : ムニンハマウド
- 分類 : セリ科 (APG 科名: セリ科)
- 学名 : *Angelica japonica* A. Gray var. *boninensis* (Tuyama) Yamazaki
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形態の特徴 : 多年草。茎は高さ1~1.5 mくらい、上部で枝を分ける。葉は1~2回3出羽状複葉で光沢があり、小葉は卵形で鋸歯がある。頂生する大形の複散形花序に多数の花をつける。花は小さく、白色。果実は広楕円形で両端がへこみ、両翼は広い。
- 分布域(県外) : 小笠原。
- 県内の分布 : 北大東島、南大東島。
- 生育環境 : 海岸のサンゴ石灰岩の岩場に生える。
- 生育状況 : 海岸に点々と分布するが、個体数は少ない。
- 学術的価値 : 隔離分布し、植物地理学上貴重である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。
- 備考 : 基本変種のハマウド *A. japonica* var. *japonica* に比べてやや小さく、茎の下部の葉の鋸歯が鈍いなどの点で異なる。基本変種は本州 (関東以西) ~奄美諸島、台湾、朝鮮南部に分布する。大東諸島を除く沖縄島以南の琉球列島と台湾北部には別の変種のナンゴクハマウド var. *hirsutiflora* (Liu, Chao et Chuang) Yamazaki が分布する。これは葉が大きく、小葉が三角状広卵形、果実がやや小形で、翼がやや厚いなどの特徴がある (山崎, 1990)。大東諸島の個体群は、ムニンハマウドではなく、ハマウドに形態的にも遺伝的にも近いとする研究がある (Seo *et al.*, 2005)。
- 文献 : Seo, A., F. Nobushima & N. Murakami, 2005. Genetic status of *Angelica japonica* var. *boninensis* (Umbelliferae) distributed in the Bonin and the Daito Island. Acta Phytotax. Geobot., 56(2): 173-182.
山崎 敬, 1990. ハマウド・ムニンハマウド・ナンゴクハマウドについて. 植物研究雑誌, 65: 220-224.
西浜良修, 2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—. 南大東村教育委員会, 77pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)

和名 : モミジチドメ (タカサゴノチドメ)

分類 : セリ科 (APG 科名: セリ科)

学名 : *Hydrocotyle batrachium* Hance

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は細く、長く匍匐し、地表を這うか他の植物にからまって斜上する。葉は円状腎形、長さ1~2.5 cm、幅1~3 cm、3~5深裂し、下面は有毛。散形花序は単生し、約10花をつけ、花梗は長さ5~10 mm、花は小さく、白色、花弁は5個、卵形。果実はやや円形、径1.5 mm。

分布域(県外) : 台湾、中国中部~南部、インドシナ。

県内の分布 : 沖縄島南部、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 低地の湿地、放棄水田、水田の畦道、湿った原野などに生える。

生育状況 : 沖縄島の現状は不明。石垣島では2ヶ所、西表島では3ヶ所、与那国島では2ヶ所の自生地が知られているが、いずれの自生地でも個体数は少ない。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究(与那国島・石垣島). “事業年報(平成27年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・安田恵子*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)

和名 : ウマノミツバ

分類 : セリ科 (APG 科名: セリ科)

学名 : *Sanicula chinensis* Bunge

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年生草。茎は直立し、枝を叉状に分枝し、高さ30~100 cmになる。葉は2形、根生葉はやや円形、径2~10 cm、3 (~5) 裂し、葉柄は葉身より長い。茎葉は通常3裂し、下方のものは長柄があるが、上方のものは短柄。枝の先に小さな散形花序を出し、両性花と雄花を混生する。花は白色で小さい。果実は卵形で表面は鉤刺で被われる。

分布域(県外) : ウスリー、千島、樺太、北海道、本州、四国、九州、奄美大島、徳之島、朝鮮、中国。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地林下に生える。

生育状況 : 沖縄県では極めてまれで、近年は全く確認されていない。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヒメウマノミツバ
 分類 : セリ科 (APG 科名: セリ科)
 学名 : *Sanicula lamelligera* Hance
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 小形の多年草。茎は高さ 5~30 cm。葉は 2 形あり、根生葉は多数あって細長い柄を有し、葉身は円心形、径 0.5~5 cm で 3 全裂し、頂小葉は有柄で倒卵状くさび形、茎葉は数個あって、下方のものは 3 裂するが、上方に行くに従い小さくなり、分裂せず、線状披針形になる。花は白色または淡紅色で、枝先の小さな複散形花序に 4~7 個つく。果実は長楕円形、長さ 2.5 mm 内外、表面には刺毛を密生する。

分布域 (県外) : 屋久島、種子島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、台湾、中国南部。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の谷間の水辺や、高地のリュウキュウチク林の林床などやや湿り気のある所に生える。

生育状況 : 沖縄島では 4ヶ所、石垣島では 1ヶ所、西表島では 2ヶ所の自生地が知られるが、個体数は少ない。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 紀伊半島には、変種のキイウマノミツバが分布する。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.
 横田昌嗣・宮城康一, 1988. 琉球列島植物分布資料 6. 沖縄生物学会誌, (26) : 35-37.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)

和名 : シマイワウチワ (シマイワカガミ、ランダイイワウメ)
 分類 : イワウメ科 (APG 科名: イワウメ科)
 学名 : *Shortia rotundifolia* (Maxim.) Makino
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 小形の常緑多年生草。根茎は径 2~4 mm、地中を短く横走する。葉は長さ 3~7 cm の柄を有して根生状に出て、葉身は円形~卵円形、薄い革質、両面無毛で表面は光沢がある。花冠は白色~淡紅色、鐘形で 5 裂し、仮雄蕊がない。

分布域 (県外) : 台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。

生育環境 : 山地の崖地に生える。

生育状況 : 沖縄島北部 (国頭村、東村、大宜味村) では数ヶ所、西表島では点々と数ヶ所の自生地があるが、個体数は少ない。

学術的価値 : 台湾では高地に生える。分布域の北限であり、東アジアの温帯系の種で、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : 森林伐採。ダム建設による水没。園芸用の採集。

備考 : 奄美大島には品種のアマイワウチワ *S. rotundifolia* (Maxim.) Makino f. *amamiana* (Ohwi) T. Yamazaki を産する。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成 5 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成 6 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.

沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 奥間川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-9, 99-12.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : リュウキュウアセビ

分類 : ツツジ科 (APG 科名: ツツジ科)

学名 : *Pieris koidzumiana* Ohwi

カテゴリー : 野生絶滅 (EW) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 高さ 1.5~3 m の常緑低木。葉身は倒披針形で革質、長さ 4~8 cm、上部から 1/3 までに少数の鈍鋸歯があり、表面は濃い緑色で光沢があり、基部は 3~6 mm の葉柄に翼状に流れる。枝先に円錐花序を垂らし、多数の花をつける。花冠は白色で、筒状つぼ形で、長さ約 1 cm、先は浅く 5 裂し、雄蕊は 10 本、葯の背面に刺状突起がある。果実は扁球形の朔果で径 5 mm。

分布域 (県外) : 奄美大島。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の溪谷の岩地に生える。

生育状況 : 沖縄島北部の 1ヶ所にのみ産し、自生地は国指定天然記念物として保護されてきたが、1983 年に幼体が 1 株確認されたのを最後に絶滅した。

学術的価値 : 琉球列島の固有種である。

減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地が限られている。

保全対策 : 奄美大島産のものは、沖縄県産のものとともにリュウキュウアセビと呼ばれていたが、遺伝的に異なることが判り、現在は別種のアマミアセビ *Pieris amamioshimensis* Setoguchi et Y. Maeda と呼ばれることがある (Setoguchi & Maeda, 2010)。奄美大島産のものが沖縄県にも導入されており、人工増殖をはかる場合、自生地の明らかな株を基に増殖する必要がある。

備考 : 園芸植物として普及している。奄美大島でも盗掘によりほぼ絶滅状態だという。

文献 : Setoguchi, H. & Y. Maeda, 2010. A new species of *Pieris* (Ericaceae) from Amamioshima, Ryukyu Islands, Japan. Acta Phytotax. Geobot. 60(3): 159-162.

執筆者名 : 新里孝和*・澤岬安喜*・横田昌嗣(追補)

和名 : サキシマツツジ

分類 : ツツジ科 (APG 科名: ツツジ科)

学名 : *Rhododendron amanoi* Ohwi var. *amanoi*

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 4 m くらいの常緑性の低木。枝は灰褐色を呈し、小枝はよく分岐し剛毛を密生する。葉は互生、葉身は卵状楕円形または長楕円形~広披針形、長さ 7~10 cm、幅 2.5~6 cm、全縁で毛縁、鋭頭、鋭脚または鈍脚、両面には圧剛毛を散生し、下面は脈上に剛毛を布き、側脈は 4~5 対で細脈とともに下面に少し突出する。葉柄は長さ通常 5~12 mm で腺毛を密生する。花芽の芽鱗は外方のものは背面に長い圧粗毛があり、内方のものは大きく長さ 2 cm くらいで背面と辺縁に腺状微毛をふき粘る。花は小枝の先端に 1~2 個つき、有梗、小梗は長さ 1~1.5 cm で開出した腺質粗毛を密布する。萼は基部まで 5 裂し、裂片は線状披針形~披針形、長さ 7~8 mm、背面と辺縁に開出腺毛を有する。花冠は赤色で径 4~5 cm、裂片は広卵形で円頭、雄蕊は 10 個で長さ 4 cm くらいとなり、下面には微毛があり、葯は暗紫色で長さ 2 mm くらい、花柱は雄蕊より長く、長さ 4.5 cm くらいで花冠よりや

や超出し、子房は直立した淡黄金色の腺状粗毛を密布する。室果は狭卵形で長さ1 cm くらい。

- 県内の分布 : 石垣島、西表島。
 生育環境 : 低地から山地の溪岸に生える。
 生育状況 : 西表島では限られた河川の流域に産するが、自生地と個体数は限られている。石垣島では極めてまれで、1 河川の流域で確認されている。
 学術的価値 : 石垣島、西表島の固有種である。
 減少の要因 : もともと自生地が限られ、個体数が少ない。園芸用の採集。
 保全対策 : 自生地と個体群の保全。園芸等の観賞用としては挿し木や実生繁殖のよるものを用いるよう啓蒙する。
 備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
 執筆者名 : 新里孝和*・澤岷安喜*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : クメジマツツジ
 分類 : ツツジ科 (APG 科名: ツツジ科)
 学名 : *Rhododendron amanoi* Ohwi var. *glandulistylum* Hatusima
 カテゴリー : 野生絶滅 (EW) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 高さ3 m くらいの常緑性の低木で、基本変種のサキシマツツジに比べて花柱の下部に腺毛があることで異なる。
 県内の分布 : 久米島。
 生育環境 : 低地から山地の溪岸。
 生育状況 : 久米島の1 河川の溪岸に少数個体が生育していたようであるが、園芸用に盗掘され、現在は生存個体を確認することができない。
 学術的価値 : 久米島の固有変種としてまた植物地理学上も重要である。
 減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。
 保全対策 : 久米島で栽培されている本種の株を増殖し、それを植え戻して自生地の復元を図ることが重要であるが、その際に株の由来をきちんと確認する必要がある。
 備考 : 本変種をサキシマツツジの異名とする意見がある。
 文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄県, 1-39.

執筆者名 : 新里孝和*・澤岷安喜*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : セイシカ
 分類 : ツツジ科 (APG 科名: ツツジ科)
 学名 : *Rhododendron latoucheae* Franch.
 方言名 : ミキ、ミーキ (西表島)
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 高さ2~6 m の常緑小高木。葉は枝先に接近して互生し、葉身は長楕円形で無毛、長さ5~11 cm、幅2~5 cm、表面は光沢がある。花は枝先に2~4 個つき、花冠は淡紫紅色で上部内面に紅紫色の斑点があり、筒状鐘形、径4~5 cm、5 中裂し、雄蕊は10 本。

分布域（県外）：台湾、中国南部。
県内の分布：石垣島、西表島。
生育環境：岩が多い山地林内に生える。
生育状況：石垣島では数ヶ所に産し、個体数は少ない。西表島では島内に広く分布し、自生地のは大半は国立公園内にあるため開発の恐れは少なく、すぐに絶滅する恐れはないが、自生地は点在し、個体数は少ない。
減少の要因：園芸用の採集。森林の伐採（石垣島）。
保全対策：増殖による園芸利用の啓発。生育地の保全。
備考：奄美大島に産するものは花柱に毛があるため、変種アミセイシカ *R. latoucheae* Franch. var. *amamiense* Ohwi として区別されている。石垣市自然環境保全条例保全種（2015年）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。

執筆者名：新里孝和*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)

和名：ケラマツツジ
分類：ツツジ科（APG科名：ツツジ科）
学名：*Rhododendron scabrum* G. Don
方言名：キラマチチジ（沖縄島：首里）
カテゴリー：絶滅危惧ⅠB類（EN） 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

形態の特徴：高さ1~2mの常緑低木。若枝は偏平な褐色剛毛が密に生える。葉は互生し、長楕円形で、長さ3~12cm、幅2~5cm、表面は濃い緑色で両面に剛毛がある。枝先に2~4個の花をつける。花冠は赤朱色、上側内面に濃い斑点があり、径4.5~6cm、5中裂し、雄蕊は10本。萼片は楕円形または卵形で、縁辺に長毛と短い腺毛を混生する。

分布域（県外）：奄美大島、加計呂麻島、沖永良部島。
県内の分布：沖縄島、渡嘉敷島、座間味島。
生育環境：海岸の風衝草原や山地の溪谷に生える。
生育状況：かつては普通に見られる種であったが、近年は園芸用に採集され、個体数が激減している。
学術的価値：琉球列島の固有種である。
減少の要因：園芸用の採集。森林伐採。自生地の開発。ダム建設による水没。もともと自生地と個体数が限られる。
保全対策：増殖による園芸利用の啓発。

執筆者名：新里孝和*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)

和名：タイワンヤマツツジ（シナヤマツツジ）
分類：ツツジ科（APG科名：ツツジ科）
学名：*Rhododendron simsii* Planch. var. *simsii*
方言名：キカゾ、キガゾ（西表島）
カテゴリー：絶滅危惧ⅠB類（EN） 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：高さ1~2mの常緑低木。若枝には伏した扁平の短剛毛が密生する。葉は小さく倒広披針形~長楕円形~倒卵形、長さ1.5~4.5cm、幅0.7~2.5cmで両面に伏した堅い毛がある。枝先の1個の花芽から2~3個の花が開く。花冠は朱色または紅紫色、上側の内面に濃色の斑点があり、漏斗形で径3

～4 cm、5中裂し、雄蕊は10本。

- 分布域（県外）：奄美大島、加計呂麻島、徳之島、台湾、中国南部。
 県内の分布：伊平屋島、伊是名島、沖縄島、石垣島、西表島。
 生育環境：低地から山地の疎林や風衝地に生える。
 生育状況：かつてはやや普通に見られたが、園芸用に採集され、自生地が減少している。
 減少の要因：園芸用の採集。自然林の伐採。もともと自生地と個体数が限られる。
 保全対策：生育地の保全。増殖による園芸利用の啓発。
 備考：石垣市自然環境保全条例保全種（2015年）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。

執筆者名：新里孝和*・澤岷安喜*・横田昌嗣(追補)

- 和名：センカクツツジ
 分類：ツツジ科 (APG科名：ツツジ科)
 学名：*Rhododendron simsii* Planch. var. *tawadae* (Ohwi) Hatusima
 カテゴリー：絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A類 (CR)

- 形態の特徴：高さ1 mに達する常緑低木。若枝は扁平な剛毛が密生する。葉は倒卵形で、長さ2～2.8 cm、幅0.9～1.5 cm、両面に長い毛がある。花は枝先に2個つき、3～5月に咲き、淡紫紅色で上側内面に濃色の斑点があり、径2～3 cm、5中裂する。
 県内の分布：魚釣島。
 生育環境：山頂付近の風衝地の岩場に生える。
 生育状況：1991年に少数個体の生育が確認されているが、その後は現地調査がなされていない。急増している野生化ヤギにより直接食害をうけたり、植生全体が衰退して生育環境が悪化している可能性が高い。
 学術的価値：魚釣島の固有変種である。
 減少の要因：もともと自生地と個体数が少ない。野生化ヤギによる食害と自生地の破壊。
 保全対策：野生化ヤギの駆除が急務である。

文献：初島住彦，1991. 魚釣島の植物地理. 鹿児島島の植物（鹿児島植物同好会誌），（11）：62-66.

執筆者名：新城和治*・澤岷安喜*・横田昌嗣(追補)

- 和名：シナマンリョウ（シナヤブコウジ、シナタチバナ）
 分類：ヤブコウジ科 (APG科名：サクラソウ科)
 学名：*Ardisia chinensis* Benth.
 カテゴリー：絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 II類 (VU)

- 形態の特徴：常緑の小低木。地下茎は地中を横走り、傾上する地上茎を出す。地上茎は高さ30～20 cmで分岐しない。葉は互生し、やや革質、倒卵形～狭倒卵形、長さ2～10 cm、幅1.5～4 cm。散房花序は腋生または頂生し、少数花をつけ、花梗は長さ2～3 cm、萼片は3角状披針形、長さ1 mm、花冠は白色、5深裂し、裂片は卵形、長さ3～4 mm、雄蕊は5個、子房は球形。果実は球形、径4～5 mm。
 分布域（県外）：徳之島、台湾、中国南部。
 県内の分布：西表島。
 生育環境：高地の陰湿な林床に生える。

- 生育状況 : 自生地は1ヶ所知られるだけで、ごく狭い範囲に限られ、個体数はきわめて少ない。
学術的価値 : 著しい隔離分布を示し、植物地理学上貴重である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。
保全対策 : 本種の自生地は国立公園の特別保護区域にあり、改変される恐れはない。

文献 : 小林史郎, 1999. 八重山諸島新産のウエマツソウとシナヤブコウジ. 植物分類・地理, 50: 248-250.

執筆者名 : 横田昌嗣*・小林史郎*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)

和名 : カラタチバナ
分類 : ヤブコウジ科 (APG 科名: サクラソウ科)
学名 : *Ardisia crispa* (Thunb.) DC.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑小低木。茎は直立して高さ 20~100 cm、粒状の毛がある。葉は互生し、披針形または披針状楕円形で、長さ 7~21 cm、幅 2~4 cm、鋭頭、縁に波状の鋸歯があり、鋸歯と鋸歯の間に内腺点がある。葉腋または早落性の鱗片葉の腋に散形花序を出し、花序の柄は長さ 4~7 cm、粒状の褐色微毛があり、先に 10 個ほどの花をつける。花は白色で、径 7~8 mm、花冠は 5 裂する。果実は球形で径 6~7 mm、赤く熟す。
分布域(県外) : 本州(関東南部以西)、四国、九州、薩南諸島、屋久島、口之永良部島、トカラ列島、台湾、中国。
県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島。
生育環境 : 山地の自然林に生える。
生育状況 : 沖縄島と石垣島にそれぞれ 1 ヶ所の自生地が知られ、今回の調査でも確認されたが、自生地は狭い範囲に限られ、個体数は極めて少ない。
学術的価値 : 琉球列島では北琉球に点々と分布するが、中琉球と南琉球では沖縄県にだけ希産する。
減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。

文献 : 横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岨安喜*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ヤブコウジ
分類 : ヤブコウジ科 (APG 科名: サクラソウ科)
学名 : *Ardisia japonica* (Hornsted) Blume
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑小低木。茎の下部は匍匐し、上部は斜上して高さ 10~30 cm になる。茎と葉柄に粒状の毛がある。葉は互生し長楕円形で長さ 4~13 cm、幅 2~5 cm、縁は細鋸歯がある。花序は散形状、葉または鱗片葉の腋に出て、2~5 花をつける。花は白色で径 6~8 cm、下垂する。果実は球形で径 5~6 cm、赤く熟す。
分布域(県外) : 北海道(奥尻島)、本州、四国、九州、薩摩黒島、屋久島、種子島、トカラ列島、朝鮮、台湾、中国。
県内の分布 : 魚釣島。

- 生育環境 : 自然林内に生える。
 生育状況 : 1991年の最後の調査でも確認されていない。急増している野生化ヤギの食害をうけ、絶滅した可能性がある。
 学術的価値 : 琉球列島では北琉球に点々と分布するが、中琉球と南琉球では魚釣島にだけ希産する。魚釣島が台湾や中国大陆と陸続きであったときに渡来したと思われ、北琉球以北の分布域とは大きく離れていることから、由来が異なる可能性があり、植物地理学上貴重である。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。野生化ヤギによる食害。
 保全対策 : 野生化ヤギの駆除が急務である。

文献 : 初島住彦, 1991. 魚釣島の植物地理. 鹿児島県の植物 (鹿児島植物同好会誌), (11) : 62-66.

執筆者名 : 新城和治*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : イズセンリョウ
 分類 : ヤブコウジ科 (APG科名: サクラソウ科)
 学名 : *Maesa japonica* (Thunb.) Moritzi ex Zoll.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の低木。茎下部はしばしば地を這い、節から根を出す。普通に見られるシマイズセンリョウ *M. montana* とは、葉緑に粗鋸歯が疎らにあるかまたは全緑であり、花冠は浅く5裂し、裂片は小さく、筒部が長い点で異なる。
 分布域(県外) : 本州(関東南部以西)、四国、九州、薩摩黒島、種子島、悪石島、台湾、中国、インドシナ。
 県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島北部。
 生育環境 : 高地の林床に生える。
 生育状況 : 沖縄島では極めてまれで、これまで2ヶ所に知られているが、個体数は非常に少ない。1ヶ所は森林伐採で消失した恐れがある。伊平屋島の現状は不明。
 学術的価値 : 琉球列島では北琉球に点々と分布するが、中琉球と南琉球では沖縄県にだけ希産し、植物地理学上貴重である。
 減少の要因 : 森林開発。もともと自生地と個体数が限られる。

文献 : 横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : ツルマンリョウ
 分類 : ヤブコウジ科 (APG科名: サクラソウ科)
 学名 : *Myrsine stolonifera* (Koidz.) Walker
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

- 形態の特徴 : 常緑の匍匐するつる性低木。地上茎は長さ1 m、匍匐枝は分枝し、全株無毛。葉は互生し、やや革質、長楕円形～狭倒卵形、長さ3~8 cm、幅1~3 cm、葉柄は長さ5~10 mm。花は葉腋に数個束生し、萼裂片は長さ1 mm、花冠の裂片は長さ2.5 mm。果実は球形、径5 mm、赤色。
 分布域(県外) : 本州(奈良県、広島県、山口県)、屋久島、台湾、中国。

- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 雲霧帯の常緑広葉樹林内の林床に生える。
- 生育状況 : 国頭村の1ヶ所で1度採集されただけである。発見時は1坪ほどの面積に群生していた(小林, 1983)という。自生地は国指定の天然保護区域として保護されており、開発の恐れはない。本種が沖縄島に産することが報告されて以降、本種の探索がずっと続いているが、今回の調査でも発見することはできなかった。
- 学術的価値 : 隔離分布を示す種で、琉球列島では数少ない自生地であり、植物地理学上貴重である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。
- 備考 : 小林(1983)によって引用されている証拠標本の一部は、琉球大学理学部植物標本室(RYU)に所蔵されている。本州の自生地の多くでは、国または県指定の天然記念物として自生地が保護されている。
- 文献 : 小林元男, 1983. ツルマンリョウ-琉球の新産地. レポート日本の植物, 20: 184.

執筆者名 : 横田昌嗣

-
- 和名 : **ホザキザクラ**
- 分類 : サクラソウ科 (APG科名: サクラソウ科)
- 学名 : *Stimpsonia chamaedrioides* C. Wright ex A. Gray
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類 (EN)

- 形態の特徴 : 高さ3~15 cmの一年草。全体に腺毛を密生する。根生葉は卵形~楕円形、長さ1~2 cm、縁に不ぞろいの鋸歯がある。ロゼット状に展開した根生葉の間から1~2本の花茎を伸ばすが、これにも葉をつける。茎葉は互生し、下部のものは柄があって楕円形または卵形、上部のものでは柄がなく卵円形で小さくなる。花は上部の葉腋に1個ずつつくが、葉が上部に行くほど小さくなりやがて苞に移行してしまうので、全体として総状花序状になる。花冠は白色で径約5 mm、上部は5中裂し、裂片の先はへこむ。
- 分布域(県外) : 本州(山口県)、屋久島、奄美大島、台湾、中国南部。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 山地の日当たりの良い原野に生える。
- 生育状況 : 極めてまれで、1ヶ所に産することが知られていただけだったが、近年はその自生地では遷移が進んで環境が変化し、永らく確認されていなかった。以前確認されていた場所の樹木を伐採して明るい環境にしたところ、最近出現するようになった。奄美大島でも、同様に遷移の進行で衰退しつつある。
- 減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られている。遷移の進行。
- 保全対策 : 生育環境の維持のため、定期的な除草などの管理が必要である。

執筆者名 : 立石庸一*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

-
- 和名 : **センカクハマサジ**
- 分類 : イソマツ科 (APG科名: イソマツ科)
- 学名 : *Limonium senkakuense* Yamazaki
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

- 形態の特徴** : 多年草。根生葉は倒卵状披針形で毛がなく、質厚く革質、長さ5~10 cm、幅1.8~3.6 cm、先は円形もしくは短突起があり、縁は全縁。根生葉の間から伸びた花茎は25~50 cmになり、上部はよく枝分かれして小穂を多数つける。萼は筒状で、わずかに5裂するとされる。
- 県内の分布** : 魚釣島。
- 生育環境** : 海岸の岩上に生える。
- 生育状況** : 自生地は狭い範囲の1ヶ所に限られる。本種が確認されたのは、1979年の1度だけであり（新納・新城, 1980）、その後は確認されていない。近年急増している野生化ヤギによる食害で絶滅した可能性が高い。
- 学術的価値** : 魚釣島の固有種である。タイワンハマサジに極めて近縁なもので、分類学的な再検討が必要である。
- 減少の要因** : 野生化ヤギによる食害。もともと自生地と個体数が限られている。
- 保全対策** : 野生化ヤギの駆除が急務である。

文献 : 新納義馬・新城和治, 1980. 植物調査. “尖閣諸島調査報告書（学術調査編）”, 沖縄開発庁, 155-244.
Yamazaki, T., 1991. A new species of *Limonium* from Ryukyu. J. Jpn. Bot., 66: 131-133.

執筆者名 : 新城和治*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)

和名 : **タイワンハマサジ**
分類 : イソマツ科 (APG 科名: イソマツ科)
学名 : *Limonium sinense* (Girard) O. Ktze.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) **環境省カテゴリー**: 絶滅危惧 I A類 (CR)

- 形態の特徴** : 多年草。根生葉は倒卵状披針形で毛がなく、革質、全縁でしばしば波打ち、先は短突起があり、長さ2~23 cm、幅0.4~5 cm。根生葉の間から、高さ6~75 cmの花茎を1~数本のぼす。花茎はよく分枝して多数の小穂を集散状につける。イソマツと比べ、花茎が斜上する傾向が強く、より先端に小穂が集密する。花弁は黄色。萼筒は白色、高杯型で、縦方向に5本の肋が発達し、花後も花序上に宿存して種子を包む。果実は果皮が薄く、長さ3 mm。
- 分布域（県外）** : 台湾、中国南部。
- 県内の分布** : 西表島（仲御神島）。
- 生育環境** : 海岸の岩上に生える。
- 生育状況** : 1994年に生育が確認されている。自生地は国の天然記念物に指定されており、許可なく上陸することは認められていないので開発や採集の恐れはないが、不安定な立地に生え、個体数も少ないので環境変化により絶滅する恐れがある。
- 減少の要因** : もともと自生地と個体数が少ない。
- 備考** : 竹富町希少野生動植物種（2017年）。

執筆者名 : 新城和治*・松村俊一*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)・比嘉清文(追補)

和名 : **イソマツ（種内分類群を含む）**
分類 : イソマツ科 (APG 科名: イソマツ科)
学名 : *Limonium wrightii* (Hance) O. Ktze.
方言名 : ウミマーチ（沖縄島、伊平屋島、久米島）、ガラスヌパン（石垣島）
カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) **環境省カテゴリー**: 絶滅危惧 II類 (VU)

形態の特徴 : 小低木状の常緑多年草。茎の長さは長いもので30 cmにおよぶ。葉は茎の上部に集まってつき、毛がなく、革質、全縁、倒卵状披針形で長さ1~10 cm、幅2~13 mm、先は円形もしくは短突起がある。葉の間から高さ1.5~33 cmの多数に分枝した花茎を1~数本伸ばし、多数の小穂をつける。花冠は基部から5裂する。萼筒は筒状もしくは高杯型で、縦方向に5本の肋が発達し、花後も花序上に宿存して種子を包む。

分布域(県外) : 伊豆七島、小笠原、火山列島、屋久島、トカラ列島、奄美諸島、台湾、フィリピン(バタン諸島)。

県内の分布 : 沖縄諸島、大東諸島、宮古諸島、八重山諸島。

生育環境 : 海岸の岩場に生える。

生育状況 : 海岸の隆起石灰岩上に群落が見られたが、大規模な薬用の採集で減少しつつある。

減少の要因 : 薬用の採集。海岸の開発。

備考 : 花の色には変異があり(Matsumura *et al.*, 2006)、基本変種の黄花のウコンイソマツ var. *wrightii* は奄美諸島南部と沖縄諸島に分布し、var. *arbusculum* (Maxim.) Hara イソマツ(狭義)は淡紅紫色の花であり、奄美諸島北部や宮古諸島、八重山諸島に分布する。また、淡黄色品のウスジロイソマツ f. *albo-lutescens* Hatusima が大東諸島に産する。いずれも採集により減少している。本種の基準産地は沖縄県で、日本と台湾の固有種と考えられていたが、最近フィリピンにも狭義のイソマツが分布することが報告されている(Nakamura *et al.*, 2013)。宮古島市自然環境保全条例保全種(2005年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新発見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.
宮城康一, 1992. 沖大東島の植物相と現存植生. 沖縄生物学会誌, (30) : 65-70.
Matsumura, S. I., J. Yokoyama, Y. Tateishi. & M. Maki, 2006. Intraspecific variation of flower colour and its distribution within a sea lavender, *Limonium wrightii* (Plumbaginaceae), in the northwestern Pacific Islands. J. Pl. Res., 119: 625-632.
Nakamura, K., R. R. Rubite, G. Kokubugata, Y. Kono, M. Yokota & C.-I Peng, 2013. First record of the genus *Limonium* (Plumbaginaceae) from the Malesian region. Phytotaxa, 152 (1): 56-58.
赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究(与那国島・石垣島). “事業年報(平成27年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44.

執筆者名 : 新城和治*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)

和名 : コバノアカテツ
分類 : アカテツ科 (APG 科名: アカテツ科)
学名 : *Planchonella obovata* (R. Br.) Pierre var. *dubia* (Koidz. ex Nakai) Hatusima
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧II類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の低木ないし高木。小枝や花序に褐色の短伏毛を密生する。葉は互生し、狭倒卵形または狭長楕円形で、裏面は小枝と同様の毛を密布し、革質。花は葉腋または葉痕の腋に束生し、径5~6 mm、灰白色。液果は長楕円形で長さ1.2 mm前後、黒藍色に熟す。

分布域(県外) : 小笠原。

県内の分布 : 北大東島、南大東島。

生育環境 : 石灰岩地の崖や林内に生える。

生育状況 : 自生地は狭い面積が残るだけで、個体数は極めて少ない。

学術的価値 : 大東諸島と小笠原諸島に隔離分布し、植物地理学上の貴重種である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。森林の伐採。

備考 : 基本変種のアカテツに比べて葉が小さく細い。アカテツはトカラ列島から琉球、小笠原、中国、熱帯アジア、太平洋諸島に分布する。大東諸島では、基本種のアカテツと区別が難しい個体があり、変異は連続しているようで、小笠原諸島から記載されたコバノアカテツと同一のものであるのか、詳細な研究が必要である。

文献 : 初島住彦, 1973. 大東島の植物. “大東島天然記念物特別調査報告”, 文化庁, 9-42.
西浜良修, 2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—. 南大東村教育委員会, 77pp.

執筆者名 : 新城和治*・澤岬安喜*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヤワラケガキ

分類 : カキノキ科 (APG 科名: カキノキ科)

学名 : *Diospyros eriantha* Champ. ex Benth.

方言名 : ダマキダ (与那国島)

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 高さ 3~6 m の常緑小高木。分枝が多く、1 年枝は細くて有毛。葉は互生し、やや薄い革質、披針状長楕円形で長さ 7~10 cm、幅 1.5~3 cm、裏面の脈上に毛がある。花は葉腋に単生し、淡黄白色、4 数性。果実は卵状楕円形で密に毛があり、長さ 1.5~2 cm、黒く熟す。

分布域(県外) : 台湾、中国南部、スマトラ、ボルネオ。

県内の分布 : 西表島、与那国島。

生育環境 : 山地のやや乾いた常緑樹林内に生える。

生育状況 : 与那国島の自生地の 1 ヶ所は県指定の天然記念物として保護されている。島内の数ヶ所に点在するが、個体数は少ない。本種はこれまで国内では与那国島にのみ産することが知られていたが、2007 年に西表島にも産することが判った。ごく狭い範囲の 1 ヶ所に数個体を産するだけである。

学術的価値 : 分布域の東限で、国内で唯一の産地である。

減少の要因 : 自生地が限られている。森林伐採。

文献 : 初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新発見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.
与那国町教育委員会, 1995. 与那国島の植物. 与那国町教育委員会, 336pp.

執筆者名 : 新城和治*・澤岬安喜*・横田昌嗣(追補)・加島幹男(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : コニシハイノキ

分類 : ハイノキ科 (APG 科名: ハイノキ科)

学名 : *Symplocos cochinchinensis* (Lour.) S. Moore subsp. *laurina* (Retz.) Nooteboom

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑高木。葉は広倒披針形~長楕円状倒披針形、長さ 18~22 cm、幅 5~7 cm。腋生の穂状花序は有毛、花冠は乳白色。果実は球形で径 4~5 mm。

分布域(県外) : 台湾、中国南部、インドシナ。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 山地の川沿いの岩の多い自然林に生える。

生育状況 : 西表島の川沿いの自然林に点々と産する。自生地の大半は国立公園内にあり、開発の恐れはないが、群落を作ることはなく、個体数は少ない。
学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 1: 37-45.
Nagamasu, H., 1993. The Symplocaceae of Japan. Contributions from the Biological Laboratory, Kyoto University, 28: 173-260.

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : トゲイボタ
分類 : モクセイ科 (APG 科名: モクセイ科)
学名 : *Ligustrum tamakii* Hatusima
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 分枝の多い匍匐性の常緑低木。高さ 15~25 cm、小枝は淡褐色、先端はしばしば針状となる。葉は対生し、倒卵状楕円形~楕円形、長さ 1~1.5 cm。枝頂に穂状花序を出し、3~4 段、各段に 5~6 花ずつつける。花冠は鐘形で白色、先は 4 裂し、筒部は長さ 2 mm、裂片の長さ 2 mm。

県内の分布 : 渡名喜島、伊良部島、与那国島。

生育環境 : 海岸または山地の風衝地の岩場に生える。

生育状況 : 与那国島では 2ヶ所のごく狭い範囲に群生するが、そのうち 1ヶ所一部は放牧された馬に踏みあらされている。伊良部島では 2002 年に 1ヶ所のごく少数個体が見つかる。渡名喜島は 2ヶ所に産することが知られていたが、2005 年の時点で 1ヶ所は遷移の進行により消失したことが確認され、他の 1ヶ所では良好な生育状況の個体群が確認されている。

学術的価値 : 沖縄県の固有種である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。牛馬による踏みつけ。遷移の進行。

文献 : Hatusima, S., 1977. A new species of *Ligustrum* from the Ryukyus. J. Geobot., 24(3): 54-56.
初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新知見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岨安喜*・仲田栄二*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヤエヤマヒイラギ (イリオモテヒイラギ)
分類 : モクセイ科 (APG 科名: モクセイ科)
学名 : *Osmanthus heterophyllus* (G. Don) P. S. +Green var. *iriomotensis* Hatusima
カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 2~3 m の常緑小高木。葉は対生し、幼木の葉は披針形で全縁、ときに縁に鋭い刺を持ち、成木では倒卵形ないし楕円形、長さ 2~5 cm、幅 1~2.5 cm、縁に鋸歯がない。基本変種のヒイラギに比べて全体に小さく、葉は縁にふつう刺状の突起がない。雌雄異株。花は白色で小さく 12 月に葉腋に束生する。花冠は 4 裂して径 5 mm 前後。

- 県内の分布 : 西表島。
- 生育環境 : 高地の自然林に生える。
- 生育状況 : 3ヶ所の自生地が知られ、いずれの自生地も国立公園内にあり開発の恐れはないが、自生地は限られ、個体数は少ない。
- 学術的価値 : 西表島の固有変種。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。
- 備考 : 基本変種は本州（関東以西）～屋久島、台湾に分布する。本種を独立種 *O. iriomotensis* Yamazaki とする意見がある（山崎，1994）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。
- 文献 : 山崎 敬，1994. 琉球からのヒイラギ属の1新種と1新変種. 植物研究雑誌，69: 222-225.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岨安喜*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **ナタオレノキ**
- 分類 : モクセイ科 (APG科名: モクセイ科)
- 学名 : *Osmanthus insularis* Koidz.
- カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑小高木。葉は対生し、葉身は長楕円形あるいは長楕円状楕円形で、両端は鋭尖形、長さ 5～11 cm、幅 1.5～2 cm、全縁である。花は葉腋に束生し白花で10月に咲く。
- 分布域(県外) : 本州（福井県以西）、八丈島、小笠原、四国、九州、種子島、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、台湾、朝鮮（巨文島）。
- 県内の分布 : 渡名喜島、石垣島、西表島、与那国島、魚釣島。
- 生育環境 : 山地や時に海岸の自然林に生える。
- 生育状況 : 渡名喜島では、今回の調査で初めて確認された（阿部ら，2016）。石垣島では海岸から山地まで、点々と産することが確認されている。西表島ではまれで、個体数は少ないが、2017年にも確認されている。与那国島の現状は不明。魚釣島では、急増している野生化ヤギの影響で、食害を受けたり、自生地が悪影響を受けている可能性があるが、現状不明。
- 減少の要因 : 森林の伐採。もともと個体数が少ない。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種（2017年）。
- 文献 : 山崎 敬，1994. 琉球からのヒイラギ属の1新種と1新変種. 植物研究雑誌，69: 222-225.
阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣，2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査II（粟国島・渡名喜島）. 日本植物園協会誌，(51): 80-85.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

- 和名 : **ヤナギバモクセイ**
- 分類 : モクセイ科 (APG科名: モクセイ科)
- 学名 : *Osmanthus okinawensis* Hatusima
- 方言名 : ウヌハカギー（沖縄島: 与那）
- カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧I B類 (EN)

- 形態の特徴 : 高さ3～5mの常緑小高木。小枝は灰白色で皮目を散生する。葉は硬い革質で倒披針形～長楕円状倒

披針形、長さ5~7.5 cm、幅1~2.5 cm。花は10月に咲き、白色、葉腋に数個がまとまってつき、花冠は4裂する。

- 県内の分布 : 沖縄島北部。
生育環境 : 山地の稜線部の風衝地や明るい林内に生える。
生育状況 : 国頭村、東村、大宜味村の数ヶ所に点在して自生するが、個体数は少ない。
学術的価値 : 沖縄島の固有種。
減少の要因 : 森林伐採。園芸用の採集。もともと自生地が限られている。
備考 : 本種をナタオレノキの変種 *Osmanthus insularis* Koidz. var. *okinawensis* (Hatusima) Yamazaki とする意見がある (山崎, 1994)。
文献 : 山崎 敬, 1994. 琉球からのヒイラギ属の1新種と1新変種. 植物研究雑誌, 69: 222-225.

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岨安喜*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : リュウキュウホウライカズラ
分類 : マチン科 (APG 科名: マチン科)
学名 : *Gardneria liukuensis* Hatusima
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

- 形態の特徴 : 常緑の藤本。葉は対生で革質、若木の葉は線状長楕円形~線状披針形で先が尖る。花枝の葉は卵形~卵状披針形、長さ5~7 cm、幅3~4 cm。花序は腋生で、2~3花をつける。花冠は白色、5深裂し、裂片は反り返り、内面に短毛が密生する。果実は球形の液果で径約1 cm、赤く熟する。
分布域(県外) : 喜界島、沖永良部島。
県内の分布 : 沖縄島北部、渡名喜島。
生育環境 : 山地の岩上や樹上に生える。
生育状況 : 沖縄島北部(国頭村、本部半島)には数ヶ所の自生地が限られるが、個体数は少ない。渡名喜島では、2015年に1ヶ所で少数個体が確認されている(阿部ら, 2016)。
学術的価値 : 琉球列島の固有種。本種をホウライカズラ *Gardneria nutans* Sieb. et Zucc. と同種とする意見がある。
減少の要因 : 山地の開発。自生地と個体数が限られている。

- 文献 : Hatusima, S., 1977. Japanese species of *Gardneria*. J. Geobot., 24(4): 76-78.
阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査Ⅱ(栗国島・渡名喜島). 日本植物園協会誌, (51): 80-85.

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

-
- 和名 : タイワンチトセカズラ
分類 : マチン科 (APG 科名: マチン科)
学名 : *Gardneria shimadae* Hayata
カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

- 形態の特徴 : 常緑の藤本。葉は長楕円形~長楕円状披針形、長さ8~11 cm、幅2.5~3.5 cm、乾くと黒変する。

- 分布域（県外）：台湾。
- 県内の分布：宮古島、伊良部島、来間島？。
- 生育環境：山頂部の林内に生える。
- 生育状況：宮古島では2ヶ所、伊良部島では1ヶ所の自生地が知られる。自生地は限られ、個体数は少ない。宮古島と伊良部島の各1ヶ所は、自生地が公園として整備されており、刈り取りにより個体数が減少している。宮古島の他の1ヶ所は、今回の調査で新たに発見されたが、開発により失われる可能性がある。来間島にも産するという情報が得られたが、今回の調査では確認することができなかった。
- 学術的価値：分布域の北限であり、日本で唯一の産地である。
- 減少の要因：山地の開発。自生地と個体数が限られている。

- 文献：初島住彦・天野鉄夫・宮城康一, 1975. 宮古群島の植物. “沖縄県立自然公園候補地学術調査報告（宮古群島）”, 沖縄自然研究会（編）, 沖縄県, 31-70.
Hatusima, S., 1977. Japanese species of *Gardneria*. J. Geobot., 24(4): 76-78.

執筆者名：横田昌嗣*・澤岬安喜*・川上 勲*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・佐藤宣子(追補)

- 和名：ミヤココケリンドウ
- 分類：リンドウ科 (APG 科名: リンドウ科)
- 学名：*Gentiana takushii* Yamazaki
- カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形態の特徴：ごく小型の二年草。茎は単一または分枝し、乳頭状突起があり、高さ3~5 cm、ロゼット葉を欠く。葉は対生し、無柄、卵形、長さ3~10 mm、幅2~5 mm、葉先は尖らない。花は各々の茎頂に単生し、萼は長さ4~6 mm、筒形、花冠は青色、筒形、長さ6 mm、5裂し、裂片の間に小裂片があり、小裂片の先は浅く2裂する。雄蕊は5個、長さ3 mm。室果は長さ10 mm。
- 県内の分布：宮古島、伊良部島、下地島。
- 生育環境：大潮の満潮時には海水に浸かるような海岸の砂が溜まった隆起サンゴ礁の岩上に生える。
- 生育状況：宮古島では2ヶ所にごく少数の個体が確認されるだけである。周辺にはゴルフ場やホテルの建設が進んでおり、生育可能な環境は減少している。伊良部島では1ヶ所、下地島では4ヶ所で確認されているが、確認できる個体数は非常に少ない。
- 学術的価値：最近になって (Yamazaki, 2000) 記載された宮古諸島の固有種である。リンドウ属は東アジアでは温帯域に産する種がほとんどであり、琉球列島の植物相を特徴づける種として貴重である。
- 減少の要因：もともと自生地と個体数が限られる。自生地の開発。
- 保全対策：自生地の保全。
- 備考：近縁なリュウキュウコケリンドウ *G. squarrosa* Ledeb. var. *liukiensis* Hatusima は、屋久島、宝島、喜界島、徳之島、沖永良部島に分布する。

- 文献：Yamazaki, T., 2000. A new species of *Gentiana* from the Ryukyus. J. Jpn. Bot., 75: 280-281.
横田昌嗣・阿部篤志・佐藤宣子, 2016. 宮古諸島から新たに見つかった維管束植物. 宮古島市総合博物館紀要, (29): 121-128.

執筆者名：横田昌嗣*・澤岬安喜*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・國府方吾郎(追補)・佐藤宣子(追補)

- 和名：シマアケボノソウ

分類 : リンドウ科 (APG 科名: リンドウ科)
学名 : *Swertia makinoana* F. Maek.
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根生葉は6~8個、倒卵状楕円形~広卵形、長さ7~20 cm、幅3~8 cm、葉柄は長さ1~3 cm。茎葉は2~4対、長さ20 cm、幅6.5 cmになる。円錐花序は頂生し、長さ10~45 cm。花は半開し、萼は鐘形、5深裂し、長さ4~13 mm、幅3~4.5 mm、花冠は白色、上面に密に黒紫褐色の斑点がはいり、5深裂し、裂片は長さ20~32 mm、幅10~15 mm、蜜腺点は裂片の基部にある。雄蕊は5個、長さ13~20 mm、葯は長さ5~6 mm、雌蕊は長さ15~20 mm。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 海岸から山地まで幅広い環境に生育し、崖の壁面や明るい林床に生える。

生育状況 : 石垣島では3ヶ所、西表島では数ヶ所の自生地が知られるが、個体数は少ない。

学術的価値 : 八重山諸島の固有種である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。森林伐採。

備考 : 九州南部から沖縄諸島にかけて分布するヘツカリンドウ *S. tashiroi* (Maxim.) Makino と混同され、しばしば同種として扱われてきたが、花冠裂片の大きさや色、花冠裂片の蜜腺点の位置などで明瞭に異なる別種である。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : Maekawa, F., 1936. *Swertia tashiroi* Makino and its allies. J. Jpn. Bot., 12: 156-161.

執筆者名 : 横田昌嗣*・小林史郎*・加島幹男*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ヒメシロアサザ
分類 : ミツガシワ科 (APG 科名: ミツガシワ科)
学名 : *Nymphoides coreana* (Lev.) Hara
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 水生の多年草。葉柄は1~10 cm、葉身は水面に浮かび、円形或いは卵形で深裂し、縁は全縁、径2~5 cm くらいで、下面は淡い赤紫色である。花は夏期に咲き、花冠は白色で径約8 mm、5深裂し、裂片の縁に短毛がある。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、種子島、朝鮮、中国。

県内の分布 : 宮古島、石垣島、西表島、嘉弥真島、与那国島。

生育環境 : 池や水田などの水中に生える。

生育状況 : 宮古島の現状は不明。石垣島は数ヶ所、西表島は1ヶ所、与那国島は3ヶ所で生育が確認されているが、個体数は少ない。嘉弥真島でも個体数は少ない。

減少の要因 : 水田や池の埋立。除草剤の散布。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 知念美香, 1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究, (11) : 75-105.
赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究(与那国島・石垣島). “事業年報(平成27年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44.

執筆者名 : 立石庸一*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : ゴムカズラ
 分類 : キョウチクトウ科 (APG 科名: キョウチクトウ科)
 学名 : *Ecdysanthera utilis* Hayata et Kawakami
 方言名 : ギチギチカツア (西表島)
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の藤本。小枝は褐色で、灰白色の皮目がある。葉は対生し、長楕円形～卵形、長さ 5～9 cm、幅 2.5～3.5 cm。花序は枝の先端について 3 分岐し、小さな花を疎らにつける。花冠は黄白色で 5 裂し、径約 2.5 cm。果実は 2 個の袋果が対をなして約 180 度に開出し、各々の分果は線状円柱形で長さ 15～19 cm。
 分布域 (県外) : 台湾、中国南部 (広東省、海南島)、インドシナ、インド。
 県内の分布 : 石垣島、西表島。
 生育環境 : 山地の林内に生え、高木に這い上がり、葉や花実は高木の梢の方でつける。
 生育状況 : 西表島では数ヶ所で自生が確認されているが、個体数は少ない。西表島の自生地の大半は国立公園内にあり、開発の恐れは少ない。石垣島の現状は不明。
 学術的価値 : 分布域の北限である。
 減少の要因 : 低地林の開発。もともと自生地が限られ個体数が少ない。
 備考 : 樹液を固めるとゴムの代用となるが、品質が劣るので現在は利用されない。ゴムとしての利用が絶滅の要因になっているかどうかは不明。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岨安喜*・加島幹男*・横田昌嗣(追補)

和名 : シマソケイ
 分類 : キョウチクトウ科 (APG 科名: キョウチクトウ科)
 学名 : *Ochrosia oppositifolia* (Lam.) K. Schum.
 方言名 : ヤマフクン (石垣島)
 カテゴリー : 絶滅危惧ⅠB類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の小高木。葉は 3～6 枚輪生し、広倒披針状へら形～へら状倒卵形、長さ 7～20 cm、幅 4～8 cm。枝先に複集散花序を出し多数の花をつける。花冠は白色で長さ約 1 cm、多肉質、5 裂して裂片は平開する。果実は 2 分果が対生し、その各々は長楕円形、長さ約 6 cm、幅約 3 cm、橙黄色に熟する。材は有用。
 分布域 (県外) : スリランカ、アンダマン諸島、マレーシア、ミクロネシア。
 県内の分布 : 宮古島、伊良部島、石垣島、西表島。
 生育環境 : 海岸近くや低地の林内に生える。
 生育状況 : 自生地は少なく個体数も少ない。宮古島では 1 ヶ所に数個体を産することが確認されている。西表島では 2 ヶ所で生育が確認されているが、1 ヶ所は自生地のすぐ近くまで開発されて生育環境が悪化し、以前確認されていた成熟個体は枯死してしまい、稚樹だけが残っている。石垣島では 1973 年に確認された後、永らく現状が不明であったが、2017 年に 1 ヶ所で数個体の成熟個体が確認された。ただし、一部の個体は道路工事で伐採された。伊良部島では生育は確認できなかった。
 学術的価値 : 分布域の北限である。
 減少の要因 : 低地林の伐採。材木の採取。自生地と個体数が限られている。
 備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岨安喜*・加島幹男*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・松島昭司(追補)

和名 : マメヅタカズラ
分類 : ガガイモ科 (APG 科名: キョウチクトウ科)
学名 : *Dischidia formosana* Maxim.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 樹上に着生する繊細な匍匐性の着生多年草。全株無毛、茎は細く、直径 1 mm 内外、節から出る着生根で樹幹にはりつく。葉は互生し多肉質で粉白色を帯び、広卵形～円形で先端はくぼみ、長さ 1 cm くらい。葉腋に出した花序に 4～5 花をつける。花は乳白色で長さ約 4 mm、花冠は壺形では 5 裂、裂片の内面に密毛がある。

分布域 (県外) : 台湾。
県内の分布 : 魚釣島。
生育環境 : 山頂付近の雲霧帯の樹上や岩上にへばりつくように着生する。
生育状況 : ごく狭い範囲に数個体があるだけである。魚釣島では野生化ヤギの増殖により、森林生態系が大きく悪影響を受けており (横畑・横田, 2000 ; Yokohata *et al.*, 2003 ; 横畑ら, 2009)、本種を初め魚釣島に産する種の生育環境の悪化と絶滅が危惧される。
学術的価値 : 分布域の北限であり、国内で唯一の産地であり、植物地理学上貴重である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。野生化ヤギの食害による森林の荒廃。
保全対策 : 野生化ヤギの駆除が急務である。

文献 : Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 1: 37-45.
初島住彦, 1991. 魚釣島の植物地理. 鹿児島県の植物 (鹿児島植物同好会誌), (11) : 62-66.
横畑泰志・横田昌嗣, 2000. 尖閣諸島魚釣島の野生化ヤギ問題について. 野生生物保護, 5(1-2): 1-12.
Yokohata, Y., Y. Ikeda, M. Yokota & H. Ishizaki, 2003. Effects of introduced goats on the ecosystem of Uotsurijima in the Senkaku Islands, Japan, as assessed by remote-sensing techniques. Bios. Conserv. 5(1): 39-46.
横畑泰志・横田昌嗣・太田英利, 2009. 尖閣諸島魚釣島の生物相と野生化ヤギ問題. "IPSHU 研究報告シリーズ研究報告 No. 42 (松尾雅嗣教授退職記念論文集)", 広島大学平和科学研究センター, 広島市, 307-326.

執筆者名 : 立石庸一*・山城 考*・横田昌嗣(追補)

和名 : キジヨラン
分類 : ガガイモ科 (APG 科名: キョウチクトウ科)
学名 : *Marsdenia tomentosa* Morren et Decne.
カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の藤本で小枝は灰緑色で初めは圧毛があるが、後には無毛となる。葉は円心形で厚質、長さ 6～11 cm、全縁、上面は無毛で緑色、下面は淡緑色で圧毛がある。花は葉腋の集散花序につくが、その柄は長さ 1～2.5 cm、花冠は鐘状で 5 中裂し、径 4 mm ほど、花筒の喉部は密に毛が生える。

分布域 (県外) : 本州 (関東以南西南)、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、朝鮮南部。
県内の分布 : 沖縄島北～中部、伊江島。
生育環境 : 山地の林内に木にからみついて生える。

- 生育状況 : 沖縄島では、非石灰岩地にも生育するが、主として石灰岩地に生育し、自生地は限られ個体数は少ない。伊江島でも発見されている（立石ら，2004）。
- 学術的価値 : 分布域の南限である。
- 減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地が限られている。

- 文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所，1997. 大保ダム建設発生土の処分候補地に係る生物環境調査データ（陸域・海域）. 沖縄建設弘済会，3-14，117-135，277-286，349-373.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所，1998. 奥間川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，3-9，99-12.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所，1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，5-13，151-168.
 立石庸一・松村俊一・山城 考・新城和治，2004. 琉球列島植物分布資料 17. 沖縄生物学会誌，(42) : 61-67.

執筆者名 : 立石庸一*・山城 考*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : ケナシツルモウリンカ
- 分類 : ガガイモ科 (APG 科名: キョウチクトウ科)
- 学名 : *Tylophora tanakae* Maxim. var. *glabrescens* Hatusima ex Yamazaki
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

- 形態の特徴 : つる性の多年草。全株ほとんど無毛で、茎は長さ 30～100 cm に達する。葉は対生し、卵状楕円形～楕円形、長さ 2～7.5 cm。葉腋に散形状の集散花序を出し、やや疎らに花をつける。花は淡黄色で直径約 5 mm、5 深裂する。
- 分布域 (県外) : 宇治群島、トカラ列島 (平島)。
- 県内の分布 : 北大東島、南大東島、宮古島、与那国島。
- 生育環境 : 海岸の草原から山地部の林縁まで、幅広い環境に生える。
- 生育状況 : 自生地は少なく、個体数も少ない。南・北大東島ではそれぞれ数ヶ所で少数個体が確認されている。与那国島では、2011 年に 1ヶ所で少数個体が確認されている。宮古島の現状は不明。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。
- 備考 : 伊豆七島、九州から琉球に分布する基本変種ツルモウリンカの無毛形である。基準産地は、北大東島である。宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。

- 文献 : 横田昌嗣・宮城康一，1992. 大東諸島の植物相. “ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書”，沖縄県教育委員会，17-42.
 西浜良修，2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—。南大東村教育委員会，77pp.

執筆者名 : 立石庸一*・山城 考*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : スズサイコ
- 分類 : ガガイモ科 (APG 科名: キョウチクトウ科)
- 学名 : *Vincetoxicum pycnostelma* Kitag. (= *Cynanchum paniculatum* (Bunge) Kitag.)
- カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

- 形態の特徴 : 高さ 50 cm になる多年草。茎は直立し無毛。葉は洋紙質、狭披針形～線形で両端がとがり、長さ 6

～12 cm、幅 4～15 mm、辺縁に毛があり、ざらつく。集散花序は枝の上方の葉腋に疎らにつく。花冠は黄褐色で5深裂し、裂片は開出する。

- 分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、馬毛島、徳之島、朝鮮、中国。
県内の分布：久米島。
生育環境：低地の日当たりのよい草地に生える。
生育状況：県内では久米島のみから記録されており、証拠標本は鹿児島大学総合研究博物館（KAG）に収蔵されているが、近年は全く確認されていない。草地や原野の多くが、土地改良やダム建設で失われており、絶滅した可能性がある。
減少の要因：低地の開発。土地改良。もともと自生地と個体数が少ない。
文献：初島住彦・天野鉄夫，1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”，沖縄県，1-39.

執筆者名：立石庸一*・山城 考*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名：ヨナクニカモメヅル
分類：ガガイモ科（APG科名：キョウチクトウ科）
学名：*Vincetoxicum yonakuniense* (Hatusima) Yamashiro et Tateishi
カテゴリー：絶滅危惧 I A類（CR） 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A類（CR）

- 形態の特徴：葉柄上部を除き、全株無毛の藤本。葉は対生、卵状楕円形、側脈は2～3対あり下面に突出。腋生の集散花序に4～5花をつけ、花冠は乳白色、径2 cmくらい、5深裂し、裂片は三角状披針形。
県内の分布：与那国島、魚釣島。
生育環境：低地の林縁に生える。
生育状況：与那国島の3ヶ所で確認されているが、個体数は極めて少ない。1979年に採集された標本を元に魚釣島からも報告されているが（Yamashiro *et al.*, 2003）、魚釣島の現状は不明で、野生化ヤギの増殖による森林生態系の荒廃と食害により絶滅している可能性がある。
学術的価値：沖縄県の固有種である。
減少の要因：低地林の伐採。道路工事。もともと個体数が極めて少ない。野生化したヤギの食害による森林の荒廃（魚釣島）。
保全対策：与那国島では、林道の拡幅工事によって一部の個体や自生地が失われている。魚釣島では野生化ヤギの駆除が急務である。
文献：初島住彦・金井弘夫，1974. 与那国島植物新発見. 国立科学博物館専報，(7)：115-120.
Hatusima, S., 1977. A new species of *Cynanchum* from the Ryukyus. J. Geobot., 25(2): 26-27.
Yamashiro, T., Y. Tateishi & M. Maki, 2003. *Vincetoxicum yonakuniense*, a new combination of Asclepiadaceae and its new distribution record on Senkaku Islands, Ryukyu. Archipelago. Acta Phytotax. Geobot., 54(1): 31-36.

執筆者名：立石庸一*・山城 考*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名：ヤエヤマハシカグサ
分類：アカネ科（APG科名：アカネ科）
学名：*Hedyotis auricularia* L.
カテゴリー：絶滅危惧 I A類（CR） 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A類（CR）

- 形態の特徴 : 多年草。高さ30~50 cm、小枝は白い粗毛が密生する。葉は対生し、葉身は長楕円状披針形で長さ3~8 cm、表面は無毛、裏面は粉末状の短毛がある。花は葉腋に多数束生し、花冠は白色。果実は球形。
- 分布域(県外) : 中国南部、ヒマラヤ、インド、ジャワ、オーストラリア。
- 県内の分布 : 与那国島。
- 生育環境 : 山裾の草地に生える。
- 生育状況 : 1970年代に数回採集されているが、その後確認されいない。今回の調査でも数回にわたって、かつて採集された場所をかなり綿密に踏査したが、見つけることはできなかった。絶滅した可能性がある。
- 学術的価値 : 分布域の北限であり、日本での唯一の産地である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。遷移の進行。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新知見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : オオソナレムグラ
- 分類 : アカネ科 (APG科名: アカネ科)
- 学名 : *Hedyotis strigulosa* Bartl. var. *luxurians* (Hatusima) Yamazaki
- カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。ソナレムグラ *H. strigulosa* Bartl. に似るが、根茎は太く、径5 mmになり、茎は匍匐するかやや直立し、長さ20~40 cmになり、節間は長さ2.5~4 cm。葉は対生し、革質、長さ3~4.5 cm。花は頭状にやや密集することで異なる。
- 県内の分布 : 北大東島、南大東島、沖大東島。
- 生育環境 : 海岸の隆起石灰岩の岩上に生える。
- 生育状況 : もともとはやや普通に生える種であるが、近年は港や公園、臨海道路などの建設が進み、自生地と個体数が減少している。南大東島の自生地の一つは、国指定の天然記念物として保護されている。
- 学術的価値 : 大東諸島の固有変種。
- 減少の要因 : 自生地の開発。道路建設。

文献 : 初島住彦, 1961. 日本及び台湾産フタバムグラ属数種について. 植物研究雑誌, 36: 296-298.
 宮城康一, 1992. 沖大東島の植物相と現存植生. 沖縄生物学会誌, (30): 65-70.
 西銘盛光・横田昌嗣, 1996. 南大東島海岸植物群落内における観察所建設の影響調査報告書. 沖縄県教育庁文化課紀要, (12): 47-62.
 山崎 敬, 1983. フタバムグラ、シマフタバムグラとその近縁種について. 植物研究雑誌, 58: 281-286.
 西浜良修, 2004. “隆起環礁の島—南大東島の植物—”, 南大東村教育委員会, 77pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : ヒロハケニオイグサ

分類 : アカネ科 (APG 科名: アカネ科)
学名 : *Hydiotis verticillata* (L.) Lam.
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。全体に粗毛を密生し、葉は披針形～楕円状披針形で、長さ 2～6 cm、幅 4～8 mm。花は白色、蒴果は卵円形で毛がある。
分布域(県外) : 台湾、中国南部、インド、マレーシア。
県内の分布 : 久米島、慶良間諸島(座間味島)、西表島。
生育環境 : 常緑樹林の明るい林床、道路の法面やわだちの中、湿った林縁などのやや明るい環境に生える。
生育状況 : 産地・個体数とも少ない。久米島では、島内各地の数ヶ所で確認されている。西表島では、2ヶ所で確認されているが、個体数は極めて少ない。座間味島では 1972 年に標本が採集されてるが、現状は不明。
減少の要因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。除草剤の使用。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄県, 1-39.

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ニコゲルリミノキ
分類 : アカネ科 (APG 科名: アカネ科)
学名 : *Lasianthus bunzanensis* H. Shimizu
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 常緑低木。葉は楕円形～倒楕円形、長さ 7～10 cm、幅 3～5 cm、鋭尖頭、表面は黄緑色である。花は葉腋に数個つき、白色、萼裂片は三角形で小さい。
分布域(県外) : 台湾、フィリピン。
県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。
生育環境 : 山地の陰湿な林内に生える。
生育状況 : 沖縄島北部では 4 河川の流域に産するが、極めてまれである。西表島では島内に広く分布するが、個体数は少ない。
減少の要因 : 森林の伐採(沖縄島)。もともと個体数が少ない。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 亀島 修, 1991. ニコゲルリミノキ西表島に産す. 沖縄生物学会誌, (29) : 53-54.
横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.
横田昌嗣・豊見山元, 1993. 琉球列島植物分布資料 11. 沖縄生物学会誌, (31) : 67-69.

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヤエヤマアオキ

分 類 : アカネ科 (APG 科名: アカネ科)
 学 名 : *Morinda citrifolia* L.
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 高さ 3~10 m に達する常緑性の小高木、小枝は太く 4 稜形。葉は対生、革質、楕円形~長楕円形、長さ 12 ~25 cm、鋭尖頭から鋭頭または鈍頭、全縁、表面は光沢がある。葉柄は長さ 1 cm 以下、托葉は大きく広楕円形~半円形、鋭頭、全裂または 2~3 裂する。頭状花序は 1 対の葉と 1 つおきに葉と対生してつき、花梗は長さ 1~3 cm、密花をつけ、卵円形または円形、径 1~1.5 cm、萼筒は切頭、花冠は白色、長さとは径は 1 cm くらい、裂片は 5 個、葯は一部抽出する。液質の集合果は卵円形、白色または帯緑白色に熟し、径 3~6 cm、潮流によって散布される。

分布域 (県外) : 小笠原、台湾、中国南部、インド、マレーシア、オーストラリア、ポリネシア。

県内の分布 : 沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島。

生育環境 : 海岸の主に砂地の比較的照度の低い林内に生育し、林分の低木層を形成する。

生育状況 : 生育地と個体数とも沖縄諸島では少なく、八重山諸島では広く分布する。以前は海岸に普通に見られたが、近年は盗掘により激減している。

学術的価値 : 熱帯要素の樹種で、沖縄諸島は北限地となっており、多種の熱帯性樹種からなる海岸植生の重要な構成種である。

減少の要因 : 沿岸域の護岸工事やその他の開発により、また近年、本種は薬用及び染料植物資源として注目され、盗掘で急速に個体数が減少している。

保全対策 : 挿し木や種子繁殖が可能なので、盗掘を防止するためには、薬用作物として畑地で増殖、栽培し、自然の生育地及び個体群を保護する必要がある。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 新里孝和*・前津栄信*

和 名 : ハシカグサ

分 類 : アカネ科 (APG 科名: アカネ科)

学 名 : *Neanotis hirsuta* (L. f.) W. H. Lewis

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠB類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年草。茎は分枝して広がり、長さ 40 cm くらいに達し、無毛またはわずかに毛がある。葉は対生し、葉身は狭卵形~卵形で長さ 1.5~6 cm、幅 5~20 mm、先は鋭頭、基部は鋭尖形、表面はわずかに毛があり、裏面は無毛または粗毛を散生する。花は葉腋に 1~2 個つき、白色、花冠は長さ 3~4 mm。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、トカラ列島、中国、ヒマラヤ、東南アジア。

県内の分布 : 沖縄島、西表島。

生育環境 : 山地の川の中州の中や、川辺の斜面に生える。

生育状況 : 沖縄島では 1 ヶ所で記録されているが、今回の調査では確認できなかった。西表島では 2 ヶ所に産することが知られており、その内の 1 ヶ所では 2005 年に少数個体が確認されている。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。自生地の開発。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ヒジハリノキ (シナミサオノキ)

分 類 : アカネ科 (APG 科名: アカネ科)
学 名 : *Randia sinensis* (Lour.) Romer et Schult.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 高さ 1~4 m の常緑低木。枝に小枝の変形した 1 対の開出した太い刺がある。葉は対生、長楕円形~楕円形、長さ 3~10 cm、幅 1~4 cm。集散花序は頂生し、多数の花を密につける。花冠は白色、筒部は細く、長さ 15~20 mm、内面に軟毛が生え、先は 5 裂または 4 裂する。花は夜間にクチナシのような芳香を放つ。果実は球形の液果で径約 8 mm、黒く熟す。

分布域(県外) : 台湾、中国南部。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 低地林内の石灰岩地域に生える。

生育状況 : 自生地は近接した 3ヶ所のみ知られ、個体数は少ない。その内 1ヶ所は空港建設により失われたが、近隣の場所に移植が試みられている。最も大きな自生地は、国指定史跡に指定されているが、史跡管理のための過度の植生の伐採には注意する必要がある。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。

減少の要因 : 低地林の開発。もともと自生地と個体数が限られている。

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岷安喜*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ヘツカニガキ
分 類 : アカネ科 (APG 科名: アカネ科)
学 名 : *Sinoadina racemosa* (Sieb. et Zucc.) Ridsdale
カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 20 m に達する落葉高木。若枝には微毛があるが、のち無毛となる。葉は対生、葉身は卵形から卵状長楕円形、長さ 5~10 cm、幅 4~7 cm、急鋭尖頭、円脚~切脚または浅心脚、全縁、うすい革質、両面にはじめ微毛があるが上面は後に無毛となり光沢がある。葉柄は長さ 3~6 cm で無毛。托葉は合生し、早落性。頭状花序は数個集まって長さ 5~6 cm の総状花序となり、頭状花序は径 1.5 cm くらい、褐色毛がある。萼裂片は 4~6 個、棍棒状、長さ 1 mm、褐色毛がある。花冠は淡黄白色、筒状漏斗形、長さ 7 mm くらい、外面に短毛を密生し、裂片は 5 個、卵形、長さ 0.5 mm くらい。朔果はくさび形、長さ 3 mm くらい。

分布域(県外) : 四国、九州南部、種子島、屋久島、徳之島、台湾、中国(中部~南部)。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島北~中部、久米島。

生育環境 : 低地から山地の森林に点在するが、林縁など明るいところにも生育する。

生育状況 : 最近、沖縄島北部と中部の数ヶ所では 2004 年に、伊平屋島と伊是名島では 2005 年に確認されているが、いずれの生育地でも個体数は少ない。久米島では、2016 年に 1ヶ所で数個体が確認されている。

学術的価値 : 常緑樹の多い琉球列島産アカネ科では数少ない落葉樹で、南日本、琉球から台湾、中国にわたって分布する樹種として希少である。

減少の要因 : 生育地の開発、伐採、碎石。石灰岩地によく生育し、碎石産業によって個体数が減少するとともに生育環境の変化、消失が危惧される。

保全対策 : 生育地の保全。

文 献 : 新里孝和・澤岷安喜, 1979. 名護市の御嶽林. “名護市天然記念物調査報告 2”, 名護市教育委員会, 179pp.

執筆者名 : 新城和治*・新里孝和*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ナガバアサガオ

分類 : ヒルガオ科 (APG 科名: ヒルガオ科)

学名 : *Aniseia martinicensis* (Jacq.) Choisy

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑のつる性多年草で、全株無毛。葉は長楕円形で長さ 5~7 cm、幅 1.3~1.5 cm、先は通常凹入し、基部はくさび形。花は葉腋に 1 個つき、花冠は鐘形で白色、直径 2.5 cm くらい。

分布域(県外) : フィリピン、インド、マレーシア、ポリネシア、熱帯アフリカ。

県内の分布 : 北大東島、南大東島?。

生育環境 : 島の中央部の湿地帯に生える。

生育状況 : 北大東島の自生地は 4ヶ所のみで個体数は極めて少ない。自生地は埋立により面積が急減している。今回の調査で南大東島の 1ヶ所でも確認された。ただし、南大東島へは、北大東島産の種子を蒔いたという情報もあり、本来の野生かどうか疑問が残る。

学術的価値 : 分布域の北限であり、国内で唯一の産地である。

減少の要因 : 湿地・池沼の開発と埋立。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : 新納義馬・新城和治・新島義龍・宮城朝章, 1997. 北大東島の池・湿地帯の植生. “特殊鳥類等生息環境調査, 伊平屋島・久米島・南大東島・北大東島湿地編”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 153-161.

執筆者名 : 横田昌嗣*・新城和治*・松村俊一・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : ハマネナシカズラ

分類 : ヒルガオ科 (APG 科名: ヒルガオ科)

学名 : *Cuscuta chinensis* Lam.

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : つる性寄生植物。茎は糸状で無毛。鱗片葉は三角状卵形。花は短い柄の先に数個密集する。花冠は白色で、長さ約 2.5 mm、中程まで 5 裂し、花柱は 2 個、マメダオシによく似るが、果実が花冠より短く、熟すと花冠の基部をやぶってふくれるので区別がつく。

分布域(県外) : 本州中部、四国、九州、朝鮮、台湾、中国、東南アジア、オーストラリア、アフリカ。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島。

生育環境 : 海浜の半安定帯から安定帯にかけて生育し、ハマゴウなどに寄生する。

生育状況 : 現在確認されるものは、ほとんどは外来種のアメリカナシカズラ *C. campestris* Yuncker で、本種は近年は全く確認されていない。

減少の要因 : 生育地の開発。もともと個体数が極めて少ない。外来種との競合。

執筆者名 : 立石庸一*・新納義馬*・横田昌嗣(追補)

和名 : マルバアサガオガラクサ

分類 : ヒルガオ科 (APG 科名: ヒルガオ科)

学 名 : *Evolvulus alsinoides* (L.) L.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類 (EN)

形態の特徴 : 多年草。茎は匍匐または斜上し、長さ 20~80 cm、葉とともに銀色の長毛を密生する。葉は広卵形~広卵状披針形。花冠は淡青色、車輪状で 5 浅裂し、径 6~8 mm。

分布域(県外) : 台湾、中国南部、マレーシア、インド、東南アジア。

県内の分布 : 石垣島、与那国島。

生育環境 : 海岸近くの原野や牧場に生える。

生育状況 : 自生地は限られ、個体数は少ない。

減少の要因 : 海岸近くの低地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 変種のアサガオガラクサ var. *decumbens* (R.Br.) Ooststr. は、伊是名島、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島に分布し、台湾、中国南部、東南アジアに産する。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 与那国町教育委員会, 1995. 与那国島の植物. 与那国町教育委員会, 336pp.

執筆者名 : 新城和治*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和 名 : アツバアサガオ

分類 : ヒルガオ科 (APG 科名: ヒルガオ科)

学 名 : *Ipomoea stolonifera* (Cyrillo) J. F. Gmelin

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 匍匐性の多年草。全株無毛。葉は厚く、卵状長楕円形~長楕円形、全縁または 3~5 裂し、長さ 1.5~3.5 cm、幅 6~20 mm。花は長さ 2.5 cm くらいの柄の先に 1~3 個つく。花冠は漏斗形、白色で基部は黄色、長さ 4~5 cm。

分布域(県外) : 九州南部、種子島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島、台湾、熱帯アジア。

県内の分布 : 伊平屋島、野甫島、沖縄島、伊江島、座間味島、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 自然度の高い海岸の砂浜に生える。

生育状況 : 砂浜の減少と人や車による踏みつけにより個体数は減少している。沖縄島、伊平屋島、野甫島、伊江島、石垣島、西表島ではそれぞれ 1ヶ所で確認されているが、西表島は自生地の改変で絶滅した可能性がある。他の島の現状は不明。

減少の要因 : 海岸の開発。砂の採取。人や車による踏みつけ。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 新城和治*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和 名 : オオバケアサガオ

分類 : ヒルガオ科 (APG 科名: ヒルガオ科)

学 名 : *Lepistemon binectariferum* (Wall.) O. Ktze. var. *trichocarpum* (Gagnep.) Ooststr.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : つる性の多年草。茎は葉柄とともに開出する長毛がある。葉は卵形~卵円形、長さ 5~12 cm、両面に長い軟毛がある。集散花序は腋生し、多数または少数の花を密につける。花は小さく、花冠は淡

黄色、壺形、長さ1~1.5 cm。

- 分布域（県外）：台湾（蘭嶼）、フィリピン、マレーシア。
 県内の分布：石垣島、西表島、与那国島。
 生育環境：低地の原野、耕作地、二次林の林縁部に生え、やや攪乱された環境を好む。
 生育状況：与那国島では人里近くの林縁や草地に点々とはえ、数ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。石垣島からの報告（立石ら、2004）は、他種の誤認であることが判ったが、2005年に新たに見つかった。
 学術的価値：分布域の北限である。
 減少の要因：低地の開発。もともと自生地が限られている。

文献：立石庸一・松村俊一・山城 考・新城和治，2004. 琉球列島植物分布資料 17. 沖縄生物学会誌，(42)：61-67.

執筆者名：新城和治*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名：オオバハマアサガオ
 分類：ヒルガオ科 (APG 科名：ヒルガオ科)
 学名：*Stictocardia tiliifolia* (Desr.) Hallier f.
 カテゴリー：絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー：該当なし

- 形態の特徴：大形のつる性多年草。葉は卵形または円形、長さ6~15 cm。花は葉腋に単生し、花冠は広い漏斗形、径5~6 cm、紅紫色。果実は花後伸長した萼に完全に包まれる。
 分布域（県外）：小笠原、台湾、熱帯アジア、マレーシア。
 県内の分布：宮古島、石垣島、西表島。
 生育環境：低地や海岸の低木林の林縁に生える。
 生育状況：石垣島北部の海岸の数ヶ所と西表島の1ヶ所で確認されている。宮古島については、1973年に採集された標本があるが、現状は不明。
 学術的価値：分布域の北限である。
 減少の要因：自生地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。
 備考：竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献：知念美香，1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究，(11)：75-105.
 前津栄信・松島昭司，1999. 安良の植物. “石垣島古郷安良の原風景—その歴史と自然—”，石垣市総務部市史編集室（編），石垣市，129-226.

執筆者名：新城和治*・北原 孝*・前津栄信*・横田昌嗣(追補)

和名：トゲミノイヌチシャ
 分類：ムラサキ科 (APG 科名：ムラサキ科)
 学名：*Cordia cumingiana* Vidal
 カテゴリー：絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A類 (CR)

- 形態の特徴：約7 mに達する落葉性の小高木。葉は卵状披針形~楕円形、頂端は鋭形から鋭先形、基部は鈍形、

長さ9~15 cm、幅2.5~8 cm両面に粗毛が生える。枝先に集散花序をつけ多数の花を密につける。花冠は白色、筒状で先は5裂する。萼筒は縦方向に10本の肋があり、長さ約4 mmで、花筒部を包む。核果は白色半透明の液果、楕円形で長さ13 mm、幅8 mm。種子は1(~2)個、斜楕円形で、斜めの大きな針状突起が数個ある。

- 分布域(県外) : 台湾、フィリピン。
県内の分布 : 石垣島、西表島、魚釣島。
生育環境 : 低地部の森林に生えるが、群生することはない。
生育状況 : 石垣島では2005年に1個体が確認されたが、その後道路拡張工事で伐採されて消失し、その後新たな個体は見つかっていない。今回の調査で西表島では3ヶ所で確認されており、その内の1ヶ所では複数個体が確認されている。魚釣島の現状は不明。
学術的価値 : 分布域の北限である。台湾と琉球列島の集団は、フィリピンから記載された *C. cumingiana* とは異なる種 *C. aspera* G. Forst. subsp. *kanehirae* (Hayata) H. Y. Liu とする見解 (Liu, 1998) もあり、分類学的再検討が必要である。
減少の要因 : 自生地と個体数が限られている。野生化ヤギによる食害と植生の破壊(魚釣島)。
備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。
文献 : Liu, H.-Y., 1998. An enumeration of Taiwan Boraginaceae. *Taiwania*, 43(2): 123-131.

執筆者名 : 立石庸一*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・加島幹男(追補)

和名 : カキバチシャノキ
分類 : ムラサキ科 (APG科名: ムラサキ科)
学名 : *Cordia dichotoma* G. Forst.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 落葉性の中高木。葉は互生、卵形~円心形、長さ9~12cm、幅4.5cm、葉柄は長さ3~4cm。集散花序は頂生または腋生し、花は淡黄色、花冠は径7mm、5裂し、雄蕊は5個、子房は卵形、核果は球形、径1.2cm、黒熟する。
分布域(県外) : 奄美大島、喜界島、与論島、台湾、インド、タイ、中国南部、インドシナ、マレーシア、オーストラリア。
県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島、小浜島。
生育環境 : 海岸林や低地(特に石灰岩地)の常緑樹広葉樹林に生える。
生育状況 : 西表島では数ヶ所に点々と産するが、群落を作ることはなく個体数は少ない。小浜島では1個体が確認されている。沖縄島北部では数回確認されているが、近年は確認されていない。石垣島の現状は不明。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。低地に生えるため、自生地が開発で失われている。

執筆者名 : 横田昌嗣・加島幹男・阿部篤志

和名 : シマスナビキソウ(タイワンルリソウ)
分類 : ムラサキ科 (APG科名: ムラサキ科)
学名 : *Cynoglossum lanceolatum* Forssk. var. *formosanum* (Nakai) Hara
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形態の特徴** : 一～二年草。茎は高さ 30～50 cm、全株に短い圧毛が密に生えて灰白色を呈し、ざらつく。根生葉は倒披針形、長さ 10～14 cm、茎葉は披針状長楕円形～披針形。花序は総状で花を密につけ、長さ 10～20 cm。花は淡青色で花冠は径約 3 mm、先は 5 裂。果実は 4 分果からなり、全面にかぎ状の刺がある。
- 分布域 (県外)** : 九州、奄美大島、徳之島、与論島、台湾、中国南部、インド、アラビア、アフリカ。
- 県内の分布** : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、慶良間諸島、西表島。
- 生育環境** : 海岸や低地の草原や林縁に生える。崖崩れの跡地や崩壊地で見られることもあり、やや攪乱された環境を好むようで、遷移が進んで樹木に覆われると衰退する。
- 生育状況** : 沖縄島で 1938 年に、伊平屋島で 1958 年に、伊是名島で 1973 年に、慶良間諸島で 1960 年にそれぞれ採集されているが、その後は確認されておらず、現状は不明。2002 年に西表島で採集された標本があるが、その場所では現在は見られない。道路脇であるため、工事用の資材と共に持ち込まれた可能性がある。
- 減少の要因** : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。遷移の進行。
- 備考** : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 立石庸一*・新城和治*・横田昌嗣(追補)

- 和名** : リュウキュウチシャノキ
- 分類** : ムラサキ科 (APG 科名: ムラサキ科)
- 学名** : *Ehretia dichotoma* Blume
- カテゴリー** : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) **環境省カテゴリー**: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

- 形態の特徴** : 常緑高木。葉は卵状長楕円形でほぼ全縁、長さ 10～12 cm、幅 4～5.5 cm。集散花序は頂生し、花は白色、花冠は漏斗形、径約 3 mm、5 裂して裂片は反りかえる。果実は球形で径約 4 mm、赤褐色に熟する。
- 分布域 (県外)** : 台湾 (蘭嶼)、フィリピン、マレーシア、オーストラリア。
- 県内の分布** : 宮古島、石垣島、西表島、竹富島、波照間島、鳩間島、小浜島。
- 生育環境** : 低地や海岸の主として石灰岩地の常緑樹林に生える。
- 生育状況** : 石垣島と西表島では数ヶ所で確認されているが、道路脇に生える個体はしばしば伐採されている。石垣島の自生地の一つは県指定の天然記念物として保護されていたが、枯死した。今回の調査で宮古島からも成熟個体が発見されたが、道路脇に生育するため、2017 年に大半が伐採された。竹富島では、2017 年に 2 ヶ所で十数個体が確認された。鳩間島では 2017 年に 1 ヶ所で 2 個体が確認された。波照間島では 2015 年に確認された。小浜島の現状は不明。いずれの島でも個体数は少ない。
- 学術的価値** : 分布域の北限である。
- 減少の要因** : 低地林の開発。道路工事。自生地と個体数が限られている。
- 保全対策** : 自生地の保全。
- 備考** : 沖縄県指定天然記念物 (宮島御嶽のリュウキュウチシャノキ) (1959 年)、沖縄県指定天然記念物 (小浜御嶽のリュウキュウチシャノキ) (1959 年)。竹富町特別希少野生動植物種 (2017)。

- 文献** : Shinjo, K., 1977. Flora of Hatoma Island, the Yaeyama Islands. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.," Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 3: 29-40.
横田昌嗣・阿部篤志・佐藤宣子, 2016. 宮古諸島から新たに見つかった維管束植物. 宮古島市総合博物館紀要, (29): 121-128.

執筆者名 : 新里孝和*・新城和治*・小林史郎*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・松島昭司(追補)・佐藤宣子(追補)

和名 : ナンバンリリソウ
分類 : ムラサキ科 (APG 科名: ムラサキ科)
学名 : *Heliotropium indicum* L.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 15~50 cm に達する一年草。茎は直立し分枝して粗毛がある。葉は対生または互生、卵形~卵状楕円形で上面は縮れ、縁は波状。渦巻状の穂状花序は頂生または葉と対生し、花は花序の片側につき下方から開花する。花冠は淡青色、管状で上部は浅く 5 裂し、外側に毛がある。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、ヒマラヤ。
県内の分布 : 沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島。
生育環境 : 日当たりのよい低地部に生える。
生育状況 : 与那国島で 1984 年に、宮古島で 1973 年に確認されているが、現状は不明。他の島についても現状は不明。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 天野鉄夫・新納義馬, 1980. 億首川の紅樹林及びその周辺の植物. “沖縄県自然環境保全地域指定候補地学術調査報告, 伊是名城跡・大浦川のマングローブ林・億首川のマングローブ林”, 沖縄自然研究会 (編), 沖縄県, 79-100.
池原直樹, 1989. 沖縄植物野外活用図鑑 第 8 巻. 新星図書出版, 166.

執筆者名 : 立石庸一*・新納義馬*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヒルギダマシ
分類 : クマツヅラ科 (APG 科名: キツネノマゴ科)
学名 : *Avicennia marina* (Forssk.) Vierh.
方言名 : カネプシ (西表島)
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の小高木。根は泥地内を水平に走り、多数の呼吸根を泥土上に直立させる。小枝はまるく 4 縦稜があり無毛、若枝には鱗片状の毛が密生して灰白色になる。葉は対生し、革質、倒卵状長楕円形で全縁、長さ 4~8 cm、表面は無毛で光沢があるが裏面は粒状毛が密生して灰白色を呈する。雌雄異株。花序は葉腋または枝先につき、数個の花を頭状につける。花冠は黄色で筒部は長さ 1 mm、先は 4 裂して径 4~5 mm。果実は卵円形、長さ 1.5~2.5 cm、灰白色に熟す。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、東南アジア、太平洋諸島、オーストラリア、東アフリカ。
県内の分布 : 宮古島、石垣島、小浜島、西表島。
生育環境 : マングローブ林の前面部に生える。
生育状況 : 西表島東南部と石垣島西部ではやや多く、石垣島についてはラムサール条約登録湿地に指定され保全されているため、絶滅の恐れは少ないが、宮古島と小浜島では個体数が限られる、開発により消失する恐れがある。沖縄島の 2 ヶ所では、人為的に植えられたものが繁殖し、広がっている。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : 道路工事。埋め立て。上流域からの土砂流出による陸化。
備考 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

保全対策 : 生育地の保全。本来の自生地では保全対策が必要であるが、分布しない島嶼に新たに導入することは、避けるべきである。

文献 : 西平守孝, 1975. 八重山の潮間帯—1975. 琉大海洋保全研究会, 190pp.
 西平守孝, 1976. 宮古の潮間帯—1976, 琉大海洋保全研究会, 162pp.
 西平守孝, 1978. 西表の潮間帯—1978. 沖縄県自然保護課, 158pp.
 知念美香, 1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究, (11) : 75-105.

執筆者名 : 新里孝和*・新納義馬*・洲鎌栄徳*・横田昌嗣(追補)

和名 : **ホウライムラサキ**

分類 : クマツヅラ科 (APG 科名: シソ科)

学名 : *Callicarpa formosana* Rolfe

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) **環境省カテゴリー**: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 高さ 3~5 m に達する落葉低木。小枝には淡黄褐色の軟毛がある。葉は対生し、卵状長楕円形~楕円形、長さ 5~17 cm、幅 3~9 cm、8~9 対の側脈があり、表面は毛が散生してざらつき、裏面は黄褐色の星状毛と腺点がある。集散花序は腋生し、長くて細い柄があり密に多花をつける、花冠は紅紫色で 4 裂し径 1.5 mm くらい。果実は球形、径 2~3 mm、紫紅色に熟する。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、フィリピン。

県内の分布 : 沖縄島中部。

生育環境 : 低地の明るい林内や林縁に生える。

生育状況 : 自生地は 1ヶ所のみで、個体数は極めて少ない。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。

減少の要因 : 低地の開発。ダム建設による水没。公園整備での過度の伐採。もともと自生地と個体数が限られている。

保全対策 : 生育地の保全。個体数が極めて少ないので、人工増殖を検討する必要がある。自生地の一部は、城趾公園や多目的広場として整備されており、公園管理の過程で林縁にある本種が伐採される事例が 2017 年に確認されている。公園の管理者に管理方法を周知する必要がある。

執筆者名 : 新里孝和*・新城和治*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : **オキナワヤブムラサキ**

分類 : クマツヅラ科 (APG 科名: シソ科)

学名 : *Callicarpa oshimensis* Hayata var. *okinawensis* (Nakai) Hatusima

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) **環境省カテゴリー**: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 高さ 2~3 m の落葉低木。小枝は灰白色で星状毛がある。葉は対生し、菱形状卵形、長さ 2.5~7 cm、幅 1.5~4 cm。花冠は筒状で、淡紅紫色、長さ約 3 mm。果実は球形で紫色に熟し、径約 2.5 mm。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の尾根部や斜面の明るい林内に生える。

生育状況 : 国頭村、東村、大宜味村の特に高海拔地に点在し、個体数は少ない。

学術的価値 : 沖縄島の固有変種で、基本種オオシمامラサキ、オキナワヤブムラサキおよびイリオモテムラサキは、琉球列島の島嶼間で分化しており、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地と個体数が限られている。

保全対策 : 生育地の保全。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 羽地大川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 103-113.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 大保ダム建設発生土の処分候補地に係る生物環境調査データ (陸域・海域). 沖縄建設弘済会, 3-14, 117-135, 277-286, 349-373.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 奥間川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-9, 99-12.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 与那川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-10, 101-117.

執筆者名 : 新里孝和*・新城和治*・横田昌嗣(追補)

和名 : ホソバムラサキ

分類 : クマツヅラ科 (APG 科名: シソ科)

学名 : *Callicarpa pilosissima* Maxim.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 3~5m になる常緑の低木、茎は生長しながら花と果実をつける。小枝と葉には密に淡黄褐色の軟毛が生える。葉は対生し、柔らかく、狭披針形、長さ 10~18cm、幅 2~3cm、葉柄は長さ 1cm 以下。集散花序は葉腋に生じ、径 2~3cm、総花梗は長さ 1~4cm、密に多花をつける。花は淡紅紫色~桃色、花冠は長さ 2mm、雄蕊は長さ 5~8mm、果実は球形、径 4mm、淡紅紫色。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 山地の日当たりの良い常緑樹林の林縁に生える。

生育状況 : 1ヶ所に 1 個体を産するだけである。この個体は良く開花・結実するが、周囲には幼植物は見られない。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内では唯一の産地である。西表島と台湾との植物相の共通性を示しており、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。

文献 : 島袋ときわ・加島幹男・阿部篤志・横田昌嗣・大川智史, 2016. ホソバムラサキ. “琉球の樹木”, 大川智史・林将之 (編著), p. 406. 文一総合出版, 東京.

執筆者名 : 横田昌嗣・加島幹男・阿部篤志

和名 : ハマクサギ

分類 : クマツヅラ科 (APG 科名: シソ科)

学名 : *Premna microphylla* Turcz.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 落葉小高木。葉は対生し、卵状楕円形~広卵形、長さ 6~13 cm、幅 3~8 cm、全縁だが若木のものには数個の大きな鋸歯があり、もむと臭気がある。円錐花序は頂生し、小形の花を疎らにつける。花

冠は淡黄色、筒状で上部は4裂し、長さ5~10 mm。果実は球形で径約4 mm、黒紫色に熟す。

- 分布域（県外）： 本州（近畿以西）、四国、九州、屋久島、種子島、奄美大島、台湾、中国。
 県内の分布： 魚釣島。
 生育環境： 低地や海岸林の林内に生える。
 生育状況： 奄美大島では場所によってはやや普通であるが、魚釣島の現状は不明で、急増している野生化ヤギによる食害や森林生態系への悪影響で絶滅している恐れがある。
 減少の要因： もともと自生地と個体数が限られている。野生化ヤギによる食害。
 保全対策： 野生化ヤギの駆除が急務である。
 備考： 竹富町希少野生動植物種（2017年）。
 文献： 初島住彦，1991. 魚釣島の植物地理. 鹿児島島の植物（鹿児島植物同好会誌），（11）：62-66.

執筆者名： 新城和治*・横田昌嗣(追補)

- 和名： **ルゾンハマクサギ**
 分類： クマツヅラ科（APG科名： シソ科）
 学名： *Premna nauseosa* Blanco
 カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類（VU） 環境省カテゴリー： 該当なし

形態の特徴： 常緑の小高木。小枝は扁平形で圧毛がある。葉は対生し、楕円形~卵状長楕円形、長さ6~13 cm、もめば悪臭があり、膜質で乾けば暗褐色となる。枝先にでた花序は散房状で上が平らになり、淡褐色の毛が密生し、多数の花をつける。花冠は淡緑色、鐘状で基部は細い筒となり、長さ約3 mm。果実は球形で、径4~5 mm、暗紫色に熟す。

- 分布域（県外）： 台湾、フィリピン。
 県内の分布： 石垣島、西表島。
 生育環境： 海岸林や低地林に生える。
 生育状況： 石垣島と西表島にそれぞれ数ヶ所の自生地が点在し、個体数は少ない。道路沿いに生える個体は、伐採される恐れがある。
 学術的価値： 分布域の北限である。
 減少の要因： 森林伐採。道路工事。もともと個体数が少ない。
 備考： 竹富町希少野生動植物種（2017年）。

執筆者名： 新城和治*・新納義馬*・横田昌嗣(追補)

- 和名： **ヤエヤマハマゴウ**
 分類： クマツヅラ科（APG科名： シソ科）
 学名： *Vitex bicolor* Willd.
 方言名： ホガギー（沖縄島：首里／ミツバハマゴウも含む）
 カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類（VU） 環境省カテゴリー： 絶滅危惧ⅠA類（CR）

形態の特徴： 高さ2~5 mに達する低木。葉は通常5小葉、まれに3小葉。小葉は披針状楕円形で小葉柄がある。円錐花序は頂生し、花冠は漏斗状で淡紅紫色、長さ5~10 mm。果実は球形で径約5 mm。
 分布域（県外）： マレーシア、ミクロネシア、ポリネシア。

県内の分布 : 沖縄島北部?、石垣島、西表島、内離島、竹富島。
生育環境 : 海岸部の低地に生える。
生育状況 : 初島・天野 (1994) は沖縄島の名護市から記録しているが、現状は不明。石垣島は1ヶ所、西表島は4ヶ所の自生地があり、その内1ヶ所は県指定の天然記念物となっている。西表島の1ヶ所は道路工事による伐採で消失した。今回の調査で、竹富島の1ヶ所に成熟個体があることが新たに確認された。
学術的価値 : 分布域の北限であり、マレーシア系の種で、植物地理学上貴重である。
減少の要因 : 低地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。
備考 : 沖縄県指定天然記念物 (船浮のヤエヤマハマゴウ) (1959年)。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。
文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 186.
宮城康一・新城和治, 1986. 琉球列島植物分布資料3. 沖縄生物学会誌, (24) : 73-74.
横田昌嗣・新城和治・比嘉清文, 1997. 琉球列島植物分布資料14. 沖縄生物学会誌, (35) : 49-54.
執筆者名 : 新城和治*・横田昌嗣(追補)・松島昭司(追補)

和名 : オオニンジンボク
分類 : クマツヅラ科 (APG科名: シソ科)
学名 : *Vitex quinata* (Lour.) F. N. Williams
カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 樹高13 mに達する常緑の高木。葉は掌状複葉で、5小葉からなり、小葉は有柄で、卵状長楕円形、長さ9~11 cm。円錐花序は頂生し、長さ約10 cm、多数の花をつける。萼は鐘形、花冠は円筒形で、淡黄色、5裂し、外面に密毛がある。雄蕊は4個。果実は球形、径約6 mm、黒色に熟する。
分布域(県外) : 台湾、中国南部、インド、インドシナ、フィリピン、マレーシア。
県内の分布 : 石垣島、西表島。
生育環境 : 山地から低地の陰湿な自然林内に生える。
生育状況 : これまで西表島の島内各地に10ヶ所以上、石垣島で3ヶ所の自生地が点々と知られるが、各地とも個体数は極めて少ない。県内では小形の未成熟個体が多い。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : 自然林の伐採。もともと自生地と個体数が少ない。

文献 : Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 1: 37-45.
備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015年)。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。
執筆者名 : 横田昌嗣*・新城和治*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・加島幹男(追補)

和名 : アワゴケ
分類 : アワゴケ科 (APG科名: オオバコ科)
学名 : *Callitriche japonica* Englemann ex Hegelm.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴** : 繊弱な無毛の一年草。茎は下部で分枝して斜上し、長さ1~4 cm、所々で根を出す。葉は対生、倒卵形、全縁、長さ2~5 mm、やわらかくて3行脈がある。雌雄同株。葉腋ごとに雄花か雌花のいずれか、あるいは両方1個ずつつく。雄花も雌花も黄緑色で小さい。花柱は斜開するか緩やかに下に曲がる。果実はほとんど柄がなく、円状心形で先端がへこんで軍配形を呈し、縁に翼状の稜が4本ある。
- 分布域(県外)** : 北海道南部、本州、四国、九州、種子島、屋久島?、中之島、宝島?、奄美大島?、朝鮮南部、台湾北部。
- 県内の分布** : 伊平屋島、沖縄島、久米島、石垣島、与那国島。
- 生育環境** : 流れの辺や水田の畦などの湿ったところに生える。
- 生育状況** : 田代安定により沖縄島と石垣島で1887年に初めて見出され(Ito & Matsumura, 1899)、坂口(1924)やSonohara *et al.* (1952)では「普通」とされている。しかし、1960年代後半から70年代前半に久米島(初島・天野, 1974)と伊平屋島(山田, 1972; 仲田, 1974)、与那国島(藤本, 1972)で採集された記録があるが、最近の確認されていない。
- 減少の要因** : 水田の耕地整理やサトウキビ畑等への転換による生育地の消失。もともと自生地が少ない。

- 文献** : 藤本義昭, 1972. 与那国島の生物(1). 甲南出版, 神戸, 108pp.
 初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄自然研究会編, 沖縄県, 11-39.
 Ito, T. and J. Matsumura, 1899. Tentamen Florae Lutchuensis I. J. Coll. Sci. Univ. Tokyo, 12: 263-541.
 仲田栄二, 1974. 伊平屋・伊是名諸島の植物. “伊平屋列島文化誌”, 仲田清英(編), 41-107.
 坂口總一郎, 1924. 沖縄植物總目録. 石塚書店, 首里, 152pp.
 Sonohara, S., S. Tawada, T. Amano and E. H. Walker, 1952. Flora of Okinawa. US Civil Administration of the Ryukyu Islands, Naha, 237pp.
 山田哲夫, 1972. 伊平屋・伊是名島(沖縄)採集植物目録. 北陸の植物, 20(3): 70-81.

執筆者名 : 立石庸一*・新納義馬*

- 和名** : ミズハコベ
- 分類** : アワゴケ科 (APG科名: オオバコ科)
- 学名** : *Callitriche palustris* L.
- カテゴリー** : 絶滅危惧 I B類 (EN) **環境省カテゴリー**: 該当なし

- 形態の特徴** : 水中性の繊細な一年草。茎は細く、分枝をくり返して伸長し、葉を疎らに対生し、水中葉と水上葉の2形がある。水中葉は線形で長さ7~15 mm、1脈があり、水上葉はへら形または倒卵状長楕円形で長さ6~12 mm、3脈がある。雌雄同株、葉腋ごとに雄花か雌花のどちらか1花をつけ、どちらも淡黄緑色で小さい。果実はほとんど柄がなく、楕円形または倒卵状楕円形で先はわずかにへこんで軍配形を呈し、4稜があり、長さ1~1.4 mm。
- 分布域(県外)** : カムチャッカ、千島、樺太、北海道、本州、四国、九州、種子島、屋久島、口永良部島、トカラ列島(口之島、中之島)、喜界島、沖永良部島、朝鮮、中国、および北半球の温帯域。
- 県内の分布** : 沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島。
- 生育環境** : 水田や湿地の浅水中に生える。
- 生育状況** : 琉球の植物誌や目録類では、琉球列島の各島に分布するとされているが、沖縄県では久米島で1967年に採られた標本以外は、それを裏付けるものがなかった。しかし、2005年1月に、沖縄島北・中部のイネやタイモ、イグサの水田でそれぞれ比較的多くの個体が発見された。
- 減少の要因** : 水田の耕地整理やサトウキビ畑等への転換による生育地の消失。改良による遊水池や湧水地などの消失。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執 筆 者 名 : 立石庸一*・新納義馬*・北原 孝*

和 名 : キランソウ (テリハキランソウ)

分 類 : シソ科 (APG 科名: シソ科)

学 名 : *Ajuga decumbens* Thunb.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 小型の多年草。茎の下部は地を這い、節から根を出し、上部は斜上し、高さ 3~5 cm、粗毛を密生し、根生葉は広倒披針形、葉柄との区別がなく、縁に鈍い波状の鋸歯があり、時に紫色を帯びる。花は葉腋につき、花冠は紫色、長さ 12 mm くらい、上唇は 2 裂、下唇は 3 裂する。

分 布 域 (県 外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、朝鮮、中国。

県 内 の 分 布 : 沖縄島北部。

生 育 環 境 : 低地から山地の草地に生える。

生 育 状 況 : 最近沖縄島の 1 ヶ所で少数個体が確認されている。

減 少 の 要 因 : 自生地の開発。もともと極めてまれである。

備 考 : 奄美大島でも少ない。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・新納義馬*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ヤエヤマジュウニヒトエ (ヤエヤマキランソウ)

分 類 : シソ科 (APG 科名: シソ科)

学 名 : *Ajuga taiwanensis* Nakai ex Murata

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 多年草。茎は基部から 1~数本の枝を斜にだし、高さ 5~15 cm。葉は対生し、倒卵状長楕円形~倒披針状、長さ葉柄とともに 5~15 cm、幅 1.5~3 cm、縁に波状の鋸歯がある。花は対生する葉の腋に 1~数個ずつつくので、輪生状に見える。花冠は淡紅色またはやや白色。

分 布 域 (県 外) : トカラ列島 (中之島)、沖永良部島、台湾、中国南部、フィリピン。

県 内 の 分 布 : 久米島、石垣島、西表島、与那国島。

生 育 環 境 : 低地のやや明るい林床に生える。

生 育 状 況 : 自生地は点在し、個体数は少ない。久米島では 4 ヶ所、石垣島では 5 ヶ所、西表島では 2 ヶ所で確認されているが、西表島の 1 ヶ所は道路工事で消失した。久米島では、公園や城跡に生育している場合があり、過度の草刈りで一部の個体が消失している。与那国島の現状は不明。

減 少 の 要 因 : 低地の開発。もともと生育地が限られている。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・小林史郎*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・國府方吾郎(追補)・加島幹男(追補)

和 名 : ヤマトウバナ

分 類 : シソ科 (APG 科名: シソ科)

学 名 : *Clinopodium multicaule* (Maxim.) O. Ktze.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年草。茎は束生し、高さ 10~30 cm。葉は対生し、長楕円形~卵形、長さ 2~5 cm、幅 1~2 cm、裏面に腺点が疎らにある。花序は短く普通は茎の先に 1 個だけつく。花冠は上下 2 唇に分かれ、白色で長さ 8~9 mm、萼は長さ約 6 mm、疎らに短毛が生え、上唇の裂片は鈍頭。

分布域(県外) : 本州(神奈川県以西)、四国、九州、屋久島、韓国。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の木陰に生える。

生育状況 : 1964 年に沖縄島北部の山地で発見された(山崎, 1992)。自生地は限られており、個体数は少ない。

学術的価値 : 分布域の南限である。

減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地が限られている。

文献 : 山崎 敬, 1992. ヤマトウバナ琉球に分布. 植物研究雑誌, 67 (4) : 243.

執筆者名 : 立石庸一*・新城和治*

和 名 : ケサヤバナ

分類 : シソ科 (APG 科名: シソ科)

学 名 : *Coleus scutellarioides* (L.) Benth. var. *crispipilus* (Merr.) Keng

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 高さ 30~50 cm の多年草。葉は多肉質、卵円形~菱形状卵形、長さ 4~6 cm、両面に白い短毛を密生する。花序は頂生して穂状になり、多数の花をつける。花冠は紅紫色、下部は筒状、上部は 2 唇に分かれ、下唇は 3 裂する。

分布域(県外) : 台湾(蘭嶼、緑島)、フィリピン、マレーシア。

県内の分布 : 与那国島。

生育環境 : 海岸の隆起サンゴ礁上やアダン林の林縁に生える。

生育状況 : 自生地は 3 ヶ所知られるが、面積はごく限られており、個体数は極めて少ない。一部の自生地は道路脇にあり、除草などで刈り取られる恐れがある。

学術的価値 : 分布域の北限であり、日本で唯一の産地である。

減少の要因 : 海岸部の開発。もともと自生地と個体数が少ない。道路工事。公園の草刈り。

保全対策 : 自生地の保全。公園や道路の除草の際、注意する必要がある。

文献 : 初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新発見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.

池原直樹, 1989. 沖縄植物野外活用図鑑 第 8 巻. 新星図書出版, 185.

与那国町教育委員会, 1995. 与那国島の植物. 与那国町教育委員会, 336pp.

執筆者名 : 新城和治*・池原直樹*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・村松 稔(追補)

和 名 : ヒメキセワタ

分類 : シソ科 (APG 科名: シソ科)

学 名 : *Lamium chinense* Benth. var. *tuberiferum* (Makino) Murata

カテゴリー：絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴：高さ10~25 cmの短命な多年草。地下に球茎があり、糸状の地下茎を出してその先にまた球茎をつくる。葉は対生し、三角状円形~長楕円形、長さ1~3 cm、幅1~2 cm。花は茎上部の葉腋に1~3個ずつつき、長さ15~20 mm、萼は等しく5中裂し、10脈がある。花冠は淡紅色で長さ1.5~2 cm、2唇形で、下唇は大きく開出して長さ約1 cm。

分布域(県外)：九州南部、種子島、宝島、奄美大島、台湾。

県内の分布：久米島。

生育環境：低地の明るい林床や林縁の草地に生える。

生育状況：久米島では1960年代に確認された後、永らく見つかっていなかったが、2014年に1ヶ所で再発見され、2015年にもう1ヶ所で、2017年に更に別の1ヶ所で発見された。いずれの自生地も定期的に除草がされている場所で、除草がされなくなると、遷移が進行して衰退する恐れがある。その一方で、過度の除草は開花結実に大きな影響を与えることが考えられることから、除草の時期や方法については、地域の住民と相談して適切に管理する必要がある。

減少の要因：草地の開発。もともと自生地が限られている。遷移の進行。外来種との競合。

文献：初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄県, 1-39.
阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査(伊是名島・久米島). “事業年報(平成26年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.

執筆者名：横田昌嗣*・高良拓夫*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名：イヌコウジュ

分類：シソ科 (APG科名: シソ科)

学名：*Mosla punctulata* (S. G. Gmelin) Nakai

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：一年草。茎は四角で、直立して高さ20~60 cmになり、紅紫色を帯びることが多い。葉は対生、葉身は1~2 cmの柄があり、狭卵形~卵形で、長さ2~4 cm、6~13個の低い鋸歯があり、表面は短い毛がありややざらつき、下面に腺点を密生する。総状花序は頂生し、円筒形。小花柄は2~4 mm、苞はこれより短い。花冠は淡紅紫色で長さ3~4 mm。

分布域(県外)：北海道、本州、四国、九州、種子島、屋久島、朝鮮、中国、台湾。

県内の分布：沖縄島、石垣島、西表島、小浜島、嘉弥真島、与那国島。

生育環境：低地の原野や、二次林の明るい林床に生える。

生育状況：西表島では2ヶ所で、与那国島では1ヶ所で少数の個体が確認された。小浜島と嘉弥真島でも標本の記録がある。他の島の現状は不明。

減少の要因：草地の開発。もともと個体数が少ない。

備考：竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献：知念美香, 1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究, (11): 75-105.

執筆者名：立石庸一*・横田昌嗣(追補)

和名 : クラルオドリコソウ
 分類 : シソ科 (APG 科名: シソ科)
 学名 : *Paraphlomis javanica* (Blume) Prain
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 1~1.5 m になる多年草。茎は丈夫で、断面が 4 角形、下部にいくにしたがい葉をつけない。葉は対生、最長 8 cm にもなる長い葉柄があり、葉身は楕円形または倒卵形、大きさは通常長さ 7~15 cm、幅 3~8 cm だが、ときに長さ 30 cm、幅 14 cm に及ぶものがあり、鋭~鋭尖頭、基部は次第に細くなるか切形、縁は粗い鋸歯がある。花はほとんど柄がなく、葉腋に多数集まってつき、直径 3 cm ほどの団散状花序をなす。萼は狭鐘形で先は 5 裂、花冠は黄色または淡黄色で長さ 1.5~2 cm、2 唇形で上唇は直立、下唇は水平に広がり 3 裂、外面に長毛が生える。果実は 4 分果からなり、分果は倒卵形で長さ約 6 mm。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、インドシナ、ヒマラヤ、フィリピン、マレーシア。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 不明。

生育状況 : 1935 年に石垣島で採集されているほかは、八重山諸島からの確実な確認情報はない。

学術的価値 : 分布域の北限に当たる。

備考 : Masamune (1955) により西表島および石垣島が分布地として、ただし後者は疑問符つきで報告された。以後、沖縄の植物目録・植物誌では、これに典拠を置いてクラルオドリコソウを所載してきた。1935 年に石垣島で正宗自身によって採られた標本が台湾大学 (TAI) にあるが、これには花や実がついておらず、同定に若干の不安が残る (Walker, 1976)。

文献 : Masamune, G., 1955. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VII). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 4(1): 45-134.
 Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 1159pp.

執筆者名 : 立石庸一*・横田昌嗣*

和名 : ユキミソウ (ミゾコウジュ)
 分類 : シソ科 (APG 科名: シソ科)
 学名 : *Salvia plebeia* R. Br.
 カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 一年草。茎は直立し、高さ 30~70 cm。葉は長楕円形で根生葉は長い柄があり、花時には枯れ、茎葉は短い柄があり、葉身は長さ 3~6 cm、幅 1~2 cm。花序は頂生して円錐状になり、長さ 8~10 cm になる。花冠は淡紫色、長さ 4~5 mm。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、種子島、奄美大島、加計呂麻島、朝鮮、台湾、マレーシア、インド。

県内の分布 : 沖縄島南部、宮古島、石垣島、竹富島、小浜島、西表島、与那国島。

生育環境 : 湿った草地、耕作地の畦に生える。

生育状況 : 小浜島と与那国島ではそれぞれ 1 ヶ所で少数個体が、西表島と石垣島ではそれぞれ数ヶ所で確認されている。今回の調査で宮古島と竹富島のそれぞれ 1 ヶ所で初めて確認された。他の島の現状は不明。

減少の要因 : 湿地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : 赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究 (与那国島・石垣島). “事業年報 (平成 27 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44.

執 筆 者 名 : 立石庸一*・北原 孝*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志 (追補)・佐藤宣子(追補)

和 名 : コナミキ

分 類 : シソ科 (APG 科名: シソ科)

学 名 : *Scutellaria guilielmi* A. Gray

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧II類 (VU)

形 態 の 特 徴 : 多年草。茎は基部で分枝し、細く直立し、高さ 20~30 cm、地下に細長い走出枝を伸ばす。葉は対生して開出毛があり、茎の下部のものは円心形で径 1~2 cm、上方の葉は卵円形~卵形、長さ 1~1.5 cm。花は葉腋に単生し、白色~帯紫淡紅色、長さ 7~8 mm。

分布域 (県外) : 本州 (千葉県以西)、四国、九州、種子島、屋久島、宝島、奄美大島、徳之島、沖永良部島。

県 内 の 分 布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島。

生 育 環 境 : 低地の草地に生える。

生 育 状 況 : 沖縄島では本部半島の 2 ヶ所で 1997 年と 2004 年に確認されており、その内の 1 ヶ所では 2016 年にも確認されている。今回の調査で伊平屋島では 1 ヶ所で、伊是名島では 1 ヶ所で確認されている。

学 術 的 価 値 : 分布域の南限である。

減 少 の 要 因 : 草地の開発。もともと自生地が限られている。

執 筆 者 名 : 立石庸一*・新城和治*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和 名 : ケナシイヌゴマ (リュウキュウイヌゴマ)

分 類 : シソ科 (APG 科名: シソ科)

学 名 : *Stachys riederi* Chamisso var. *japonica* (Miq.) Hara (= *S. tashiroi* Hayata)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 細長い地下茎をひく多年草。茎は直立し、4 稜があり、高さ 40~70 cm。葉は三角状披針形、長さ 4~8 cm、幅 1~2.5 cm、ごく短い柄がある。萼は長さ 6~8 mm、5 裂して裂片の先は刺状にとがり開出する。花冠は淡紅色、長さ 12~15 mm、下唇は 3 裂して紅色の細点がある。分果は長さ約 1.7 mm。

分布域 (県外) : 九州、朝鮮、中国、ウスリー。

県 内 の 分 布 : 沖縄島。

生 育 環 境 : やや湿った畑地に生える。

生 育 状 況 : 沖縄島中部で散見されており、宜野湾市で 1984 年に採集された標本がある。池原 (1989) には、沖縄島で 1982 年に撮影された写真が掲載されている。沖縄島南部の 1 ヶ所で 2015 年に数十個体が確認されている。そこは墓地の周辺のため定期的な除草がされており、そのことで本種が維持されていると思われ、除草がなされなくなると遷移の進行で衰退する可能性が高い。伊江島からも目撃の記録がある (初島・宮城, 1974) が、近年は確認されていない。

学 術 的 価 値 : 種の分布域の南限である。

減 少 の 要 因 : 自生地の開発。遷移の進行。外来種との競合。

備 考 : 古い時代に侵入した帰化植物の可能性が指摘されている (初島, 1971; 初島・天野, 1994)。1887 年に田代安定によって沖縄島で採集された標本がある。これは現在のところ本種の異名となっている。

る *S. tashiroi* Hayata リュウキュウイヌゴマのタイプ標本である (Hayata, 1919)。 *Stachys riederi* は種としてはシベリアからカムチャッカ、千島、樺太、中国、朝鮮、日本と、極東に広く分布するが、茎や葉および萼に生える粗い刺状の剛毛の量に地理的な変異がある。北海道～九州に分布するイヌゴマ var. *intermedia* (Kudo) Kitamura は、茎の稜や葉の裏面および萼に、短い下向きの粗い刺状の剛毛があつて、ざらざらする。エゾイヌゴマ var. *villosa* (Kudo) Hara は、開出する粗い剛毛が多いもので、北海道から千島、樺太、朝鮮に分布する。一方、ケナシイヌゴマ var. *japonica* は、この毛のほとんどない無毛形で、種の分布域の最南部を占めている。

- 文 献 : 初島住彦, 1971. 琉球植物誌. 沖縄生物教育研究会, 那覇, 940pp.
 初島住彦・天野鉄夫, 1994. “増補訂正琉球植物目録”, 沖縄生物学会, 西原町, 393pp.
 初島住彦・宮城康一, 1974. 伊江島の植物. “沖縄海岸国立公園拡張候補地学術調査報告”, 沖縄自然研究会 (編), 沖縄自然研究会, 那覇, 57-76.
 Hayata, B., 1919. *Icones Plantarum Formosanarum*, vol. 8. 164pp.
 池原直樹, 1989. イヌゴマ. “沖縄植物野外活用図鑑”, 新星図書出版, 那覇, 8 : 199.

執 筆 者 名 : 立石庸一*・高良拓夫*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ヤエヤマズコウジュ

分 類 : シソ科 (APG 科名: シソ科)

学 名 : *Suzukia luchuensis* Kudo

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧II類 (VU)

形 態 の 特 徴 : 匍匐性の常緑多年草。葉は対生し、やや多肉質で卵円形～円形、円鋸歯があり、長さ1～3 cm、両面に白い長毛がある。花は頂生もしくは上方の葉腋に単生し、花冠は紅色、長さ10～13 mm、筒部は長さ8 mm程で裂片は大形、上唇は倒卵形で多少かぶと形になり、下唇は3裂する。

分布域 (県外) : 台湾 (緑島)

県 内 の 分 布 : 沖縄島、伊計島、久米島、黒島、新城島 (上地島、下地島)、与那国島。

生 育 環 境 : 海岸の隆起石灰岩上もしくは海岸近くの原野に生える。

生 育 状 況 : 沖縄島では2ヶ所に産する。沖縄島南部でも確認されている (平田, 1989) が、現在は生育が確認されない。伊計島では1ヶ所に少数個体がある。久米島では数ヶ所に小規模な群落が現存するが、1ヶ所では道路建設により生育環境が攪乱され、個体数は激減している。黒島では2ヶ所で、新城島では少数ヶ所で確認されている (山崎ら, 2016)。与那国島では島内の各地に産し、すぐに絶滅する恐れはないが、自生地は空港建設や海岸の開発で徐々に減少している。

学 術 的 価 値 : 沖縄県と台湾 (緑島) の固有種である。シキクソウ属 *Suzukia* は、台湾と琉球の範囲に分布する2種からなる固有属であり、植物地理学上重要である。

減 少 の 要 因 : 海岸低地の開発。もともと自生地が限られている。

備 考 : 本種が台湾に産することは、最近になって報告された (Hsieh, 2000)。台湾には他に、近縁なシキクソウ *S. shikikunensis* Kudo を産する。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

- 文 献 : 知念美香, 1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究, (11) : 75-105.
 平田義浩, 1989. 佐敷町産種子植物. “佐敷町史, 三自然”, 佐敷町史編集委員会 (編), 佐敷町, 93-196.
 Hsieh, T.-H., 2000. *Suzukia* Kudo (Lamiaceae) in Taiwan. *Taiwania*, 45: 217-225.
 Maki, M., T. Yamashiro & S. Matsumura, 2003. High levels of genetic diversity in island populations of the island endemic *Suzukia luchuensis* (Labiatae). *Heredity*, 91(3): 300-306.
 阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 (伊是名島・久米島). “事

業年報（平成26年度）”，沖縄美ら島財団総合研究センター，27-34.

山崎仁也・横田昌嗣・知念美香・仲宗根忠樹・比嘉清文・加島幹男，2016. 鳩間島・新城（上地・下地）島・黒島の植物相（Flora）. “鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書”，沖縄県立博物館・美術館，13-68.

立石庸一・佐藤寛之・齊藤由紀子・天野正晴・杉山巳次・中村元紀・宮城愛・田場美沙基・富永篤，2016. 沖縄県の離島・へき地における自然教育のための基礎資料の充実Ⅷ：うるま市伊計島の植物相. 琉球大学教育学部紀要，(88)：283-305.

執筆者名：横田昌嗣*・松村俊一*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名：アツバクコ

分類：ナス科 (APG 科名: ナス科)

学名：*Lycium sandwicense* A. Gray

カテゴリー：準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：やや匍匐する全株無毛の常緑低木。枝は密に分枝し、小枝は小形のこぶ状突起を有し灰白色。葉は互生する、多くはごく短い短枝に数個束生し、へら形、多肉質、長さ1.2~2 cm、幅4 mm くらい。花は短枝の先に1個つき白色~淡紫色、漏斗形で長さ約6 mm、先は4~5裂する。果実は球形の液果で径8 mm 程、赤く熟す。

分布域(県外)：小笠原、ハワイ。

県内の分布：北大東島、南大東島。

生育環境：海岸の岩場に生える。

生育状況：特殊な立地に限って生え、個体数は多くない。すぐに絶滅する恐れはないが、海岸の開発で生育地は減少しつつある。

学術的価値：著しい隔離分布を示し、植物地理学上貴重である。

減少の要因：海岸の開発。薬用・園芸用の採集。もともと自生地が限られている。

備考：南大東島の自生地の1ヶ所は国指定の天然記念物である。

文献：西銘盛光・横田昌嗣，1996. 南大東島海岸植物群落内における観察所建設の影響調査報告書. 沖縄県教育庁文化課紀要，(12)：47-62.

西浜良修，2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—。南大東村教育委員会，77pp.

執筆者名：横田昌嗣*・新城和治*・横田昌嗣(追補)

和名：オキナワヒヨドリジョウゴ (ムラサキヒヨドリジョウゴ)

分類：ナス科 (APG 科名: ナス科)

学名：*Solanum kayamae* Yamazaki

カテゴリー：絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：つる性の多年草。全株に長軟毛を密生する。葉は卵形~狭卵形、長さ2~8 cm、下部の葉は3~5浅~中裂する。花は頂生の三叉状に分岐する散房花序につき、花冠は紫色で5裂し、径約1 cm。果実は球形の液果で径7~8 mm、赤く熟す。

分布域(県外)：奄美大島、沖永良部島。

県内の分布：伊平屋島、沖縄島(中部~南部)、伊計島、伊江島、久米島。

- 生育環境 : 海岸の林縁や林内に生える。
- 生育状況 : 沖縄島と伊平屋島では極めてまれである。伊江島と久米島の現状は不明。伊計島でも確認されている(立石ら, 2016)。
- 学術的価値 : 沖縄県は基準産地で、中琉球の固有種である。
- 減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。
- 備考 : 最近までヒヨドリジョウゴと見なされていたが、1993年に沖縄島の固有種として記載された(山崎, 1993)。伊平屋島、伊江島、久米島、および奄美諸島の分布については、ヒヨドリジョウゴの可能性も残されており、標本に基づく詳細な研究が必要である。
- 文献 : 山崎 敬, 1993. 沖縄からナス属の1新種オキナワヒヨドリジョウゴ. 植物研究雑誌, 68: 339-341.
立石庸一・佐藤寛之・齊藤由紀子・天野正晴・杉山巳次・中村元紀・宮城愛・田場美沙基・富永篤, 2016. 沖縄県の離島・へき地における自然教育のための基礎資料の充実Ⅷ: うるま市伊計島の植物相. 琉球大学教育学部紀要, (88): 283-305.
- 執筆者名 : 立石庸一*・山城 考*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : イラブナスビ
- 分類 : ナス科 (APG 科名: ナス科)
- 学名 : *Solanum miyakojimense* Yamazaki et Takushi
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)
- 形態の特徴 : 常緑の小低木。茎はやや匍匐し、高さ 30 cm になり、円柱形の棘が多い。葉は広卵形、長さ 1.5~4 cm、質厚く両面に星状毛を密布し、脈上に棘がある。花序は短く、1~2 花をつけ、萼は長さ 3 mm、浅裂して裂片は小さい。花冠は長さ 4 mm、帯紫白色、液果は球形、径 8~10 mm、橙赤色に熟する。
- 県内の分布 : 宮古島、伊良部島、来間島。
- 生育環境 : 海岸のモンパノキヤクサトベラが優占する低木林の林縁の岩場に生える。
- 生育状況 : 宮古島では 1ヶ所で記録されているが、近年は確認されていない。伊良部島では狭い範囲の 2ヶ所で確認されているが、個体数はごく少ない。今回の調査では、来間島では確認することができなかった。
- 県外の分布 : 台湾。
- 学術的価値 : 宮古諸島は基準産地で、分布域の北限である。八重山諸島からは記録されておらず、植物地理学上重要である。
- 減少の要因 : 生育環境が特殊で、もともと自生地と個体数が少ない。宮古島は遊歩道の整備で絶滅した可能性がある。
- 備考 : 熱帯アジアに広く分布するテンジクナスビ *S. indicum* とされて来たが(初島・天野, 1967; 初島ら, 1975)、異論(多和田, 1975)もあり、葉や刺、萼の形態や花冠の色などから、独立種として区別されている(Yamazaki & Takushi, 1991)。台湾からは、最近になって報告された(Hsu *et al.*, 2007)。宮古島市指定天然記念物(イラブナスビ)(1994年)。
- 文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1967. 改訂沖縄植物目録. 沖縄生物教育研究会. 那覇市. 218pp.
初島住彦・天野鉄夫・宮城康一, 1975. 宮古群島の植物. “沖縄県立自然公園候補地学術調査報告(宮古群島)”, 沖縄自然研究会(編), 沖縄県, 31-70.
多和田真淳, 1975. 琉球植物見聞録(八). 北陸の植物, 22: 54-57.
宇座 正・下地俊充, 2003. イラブナスビの生育調査について. 熱帯植物調査研究年報(海洋博覧会記念公園管理財団), 24: 67-72.
Yamazaki, T. & A. Takushi, 1991. A new species of *Solanum* from Ryukyus. J. Jpn. Bot., 66: 46-48.

Hsu, T.-W., C.-I. Peng, J.-J. Peng & T.-Y. Chiang, 2007. Confirmation of the distribution of *Solanum miyakojimense* Yamazaki & Takushi (Solanaceae) in Taiwan. *Taiwania*, 52(2): 190-193.

執筆者名 : 立石庸一*・洲鎌栄徳*・川上 勲*・横田昌嗣(追補)・佐藤宣子(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ゴマクサ

分類 : ゴマノハグサ科 (APG 科名: ハマウツボ科)

学名 : *Centranthera chevalieri* Bonati

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 半寄生の一年草。茎は直立して高さ 20~50 cm。葉は茎の下部では対生、上部では互生し、質厚く、披針形または広線形、長さ 2~5 cm、両面に剛毛が生える。花は葉腋に単生し、茎上部になると葉が小さくなり、苞に移行するので茎上部は総状花序となる。花冠は黄色、筒形で先は唇形となり、上唇は 2 裂、下唇は 3 裂する。

分布域(県外) : 本州(関東以西)、四国、九州、種子島、屋久島、口之永良部島、徳之島、朝鮮、台湾、中国、インドシナ。

県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 湿り気のある原野に生える。

生育状況 : 沖縄島では以前は点々と数ヶ所に自生することが記録されているが、最近では恩納村と金武町の各 1ヶ所で少数個体が確認されているだけである。金武町の自生地はダム建設で絶滅した可能性が高い。他の島の現状は不明。

減少の要因 : 湿地の埋立。ダム建設による自生地の消失。もともと生育地が限られている。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 億首川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 99-110.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : エナシシソクサ

分類 : ゴマノハグサ科 (APG 科名: オオバコ科)

学名 : *Limnophila fragrans* (G. Forst.) Seem.

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 芳香がある常緑の多年草。茎は匍匐または斜上し、長さ約 20 cm。葉は対生し、長楕円形で、長さ 1~2 cm、幅 4~5 cm、裏面に腺点が密生する。花は葉腋に単生し無柄。花冠は白色で、時にわずかに紫紅色を帯び、筒状で先は唇形となる。果実は卵円形で長さ 3 mm 程。

分布域(県外) : マレーシア、ポリネシア、オーストラリア。

県内の分布 : 西表島、石垣島、小浜島、与那国島?

生育環境 : 日当たりのよい湿地や水田の水路に生える。

生育状況 : 自生地は西表島では 4ヶ所、石垣島では 2ヶ所に知られるだけで、個体数は極めて少ない。数ヶ所の水田では、除草剤の散布で絶滅した。今回の調査で小浜島にもわずかに生育することが確認された。京都大学理学部の標本庫 (KYO) には、与那国島の標本があるが、近年の調査では与那国島では本種は確認されていない。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。マレーシア系の植物で、著しい隔離分布を示し、植物

地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。湿地の埋立。除草剤の散布。

保全対策 : 水田では過度の除草剤の使用を避ける。湿地の保全。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 小林史郎・横田昌嗣, 2001. 琉球列島植物分布資料 16. 沖縄生物学会誌, (39) : 99-102.

執筆者名 : 横田昌嗣*・小林史郎*・北原 孝*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ヒメサギゴケ

分類 : ゴマノハグサ科 (APG科名: ハエドクソウ科)

学名 : *Mazus goodenifolius* (Hornem.) Pennell

カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の短命な多年草。茎は直立して高さ 5~15 cm。葉はほとんど根生で倒卵状長楕円形、縁は大きく切れこんだ鋸歯があり、長さ 2~5 cm、幅 1~2 cm。花茎の先に総状花序を出し、少数の花を疎らにつける。花冠は淡青色~黄白色、長さ 7~10 mm、上唇は卵形で、下唇の約半分で先は 2 浅裂し、下唇は大きく、3 裂する。

分布域(県外) : 九州南部(宮崎県)、屋久島、奄美大島、台湾、中国西部、ヒマラヤ、ニューギニア。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の溪流沿いの岩上に生える。

生育状況 : 大宜味村 1ヶ所、名護市に 4ヶ所、宜野座村に 2ヶ所の自生地が知られるが、個体数は極めて少ない。その内宜野座村と名護市の各 1ヶ所はダム建設で自生地の大部分が水没した。

減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地が限られている。ダム建設による自生地の水没。

備考 : 屋久島では約 50 年間生育が確認されず絶滅が危惧されていたが、最近再発見されている(梅本ら, 2016)。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 羽地大川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 103-113.

横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

阿部篤志, 2015. 大宜味村中央部石灰岩山地における希少植物調査(最終報告). 事業年報(平成 25 年度), 沖縄美ら島財団総合研究センター, 34-49.

梅本巴菜・横田昌嗣・國府方吾郎, 2016. 屋久島におけるヒメサギゴケ(ハエドクソウ科)の再発見. 沖縄生物学会誌, (54) : 33-37.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・國府方吾郎(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : スズメノハコベ

分類 : ゴマノハグサ科 (APG科名: ハマウツボ科)

学名 : *Microcarpaea minima* (Koenig) Merr.

カテゴリー : 絶滅危惧 II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II類 (VU)

形態の特徴 : 匍匐する一年草。茎は四角形、よく分枝し、節部から根を出す。葉は対生し柄がなく、線状披針形

または狭長楕円形、長さ2~5 mm。花は葉腋に1個ずつつき、花冠は白色~淡紅色で長さ2 mm、筒形で5脈があり、先端は上方1/2まで2唇に分裂し、上唇は舌状で裂けず、下唇は3裂する。

分布域(県外) : 本州(関東以西)、四国、九州、種子島、屋久島、徳之島、沖永良部島、朝鮮、台湾、中国、東南アジア、インド、マレーシア、オーストラリア。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 水田や水路などの水湿地に生える。

生育状況 : 沖縄島ではまれ。八重山諸島ではやや多いが、水田の減少、除草剤の使用などで減少している。

減少の要因 : 湿地開発。もともと個体数が少ない。除草剤の散布。

備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*

和名 : カントラノオ(ハマトラノオ)

分類 : ゴマノハグサ科(APG科名: オオバコ科)

学名 : *Pseudolysimachion sieboldianum* (Miq.) Yamazaki

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類(CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は斜上して長さ20~40 cmになる。葉は対生し、柄がなく基部は茎を抱き、やや肉質、長楕円形~倒卵状楕円形、長さ4~9 cm、幅1.5~4.5 cm。総状花序は茎の先に頂生し、多くの花を密につける。花冠は青紫色で長さ6 mm、下部は筒状、上部は4深裂して、裂片は広く開いて杯状になる。

分布域(県外) : 九州南西部、薩摩黒島、臥蛇島、奄美大島、徳之島。

県内の分布 : 座間味島。

生育環境 : 海岸の岩場や崩壊地、草地に生える。

生育状況 : 座間味島では、1923年に採集された記録があるが、2004年の調査では全く確認することができず、現状は不明。

減少の要因 : 海岸低地の開発。もともと自生地が限られている。

備考 : 奄美諸島でも自生地は局所的である。

執筆者名 : 横田昌嗣*・新城和治*

和名 : ヒキヨモギ

分類 : ゴマノハグサ科(APG科名: ハマウツボ科)

学名 : *Siphonostegia chinensis* Benth.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 半寄生の一年草。茎は直立し、上部は分枝し剛強で高さ30~70 cm、短毛が密生する。葉は対生し、卵形、長さ1.5~5 cm、3片ほどの広線形の裂片に深く裂け、下方の裂片はさらに裂ける。花は枝の上部の葉腋に単生し、花冠は黄色で筒状、長さ2.5~2.8 cm、上部は2唇形で上唇の先は細くなり、先端は2裂する。

分布域(県外) : 南千島、北海道、本州、四国、九州、朝鮮、台湾、中国、インドシナ。

県内の分布 : 沖縄島、久米島、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 日当たりのよい原野に生える。

生育状況 : 現状は不明。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと個体数が少ない。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 立石庸一*・新城和治*

和名 : ツルウリクサ

分類 : ゴマノハグサ科 (APG 科名: アゼナ科)

学名 : *Torenia concolor* Lindl. var. *formosana* Yamazaki

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 匍匐性の短命な多年草。葉は対生で卵形、長さ 1.5~2.2 cm、花は茎上部の葉腋に単生し、花冠は紫色で長さ 2.5 cm くらい、筒状で先は唇形となり、上唇は直立して 2 裂し、下唇は大きく 3 片に裂ける。

分布域 (県外) : 奄美大島、請島、台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部、宮古島。

生育環境 : 低地の林縁、湿った草原、道路の法面などのやや明るい環境に生える。

生育状況 : 沖縄島の 1ヶ所では絶滅、他の 1ヶ所は現状不明。宮古島の現状は不明で、絶滅した可能性が高い。

減少の要因 : 低地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。

備考 : 台湾や奄美大島では山地の明るい林床や林道沿いの草地などに生える。

文献 : 池原直樹, 1979. 沖縄植物野外活用図鑑 第 5 巻. 新星図書出版, 151.

執筆者名 : 立石庸一*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

和名 : リュウキュウスズカケ

分類 : ゴマノハグサ科 (APG 科名: オオバコ科)

学名 : *Veronicastrum liukiense* (Ohwi) Yamazaki

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は基部から分枝して地上を這い、長さ 30~100 cm に達する。葉は互生し、卵形~卵状披針形、長さ 4~12 cm、幅 2~5.5 cm。穂状花序は腋生または頂生し、長さ 4~6 cm、多数の花を密につける。花冠は紅紫色で長さ 7 mm ほど、下部は長さ 3.5 mm ほどの花筒となり、上部は 4 裂する。

分布域 (県外) : 奄美大島、喜界島。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 沖縄島の生育環境は不明。奄美諸島では山地の陰湿な林床や、海岸近くの湿った草地に生える。

生育状況 : 沖縄島の 1ヶ所が基準産地である (Ohwi, 1934) が、基準標本の採集後全く見つかっていなかった。2015 年に東村で 1 個体が発見されたが、栽培植物が多く植えられた人家の周辺に生育しており、移入の可能性が高い。沖縄県では、絶滅した可能性がある。

学術的価値 : 琉球列島の固有種である。

減少の要因 : 森林の開発。もともと個体数と生育地が限られている。

文献 : Ohwi, J., 1934. *Plantae novae Japonicae*. Fedde's Repert. Sp. Nov., 36: 39-58.

執筆者名 : 横田昌嗣*・新城和治*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ミヤコジマソウ (ヒロハサギゴケ)

分類 : キツネノマゴ科 (APG 科名: キツネノマゴ科)

学名 : *Hemigraphis reptans* (Forst.) T. Anders

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は匍匐し、節から根を出す。葉は対生し、卵状広楕円形～円形、長さ1～2 cm、両面に軟毛がある。穂状花序は2～3花をつけ、花は径1 cm、紫色を帯びた白色、雄蕊は4個。果実は線状長楕円形。

分布域(県外) : 台湾(蘭嶼)、フィリピン、インドネシア、ニューギニア、ポリネシア。

県内の分布 : 宮古島、大神島。

生育環境 : 海岸林の林床や石灰岩上に生える。

生育状況 : 自生地は宮古島では数ヶ所、大神島では1ヶ所しかなく、それぞれごく狭い範囲に限られた個体が生育するだけである。宮古島の自生地の2ヶ所は港の近くであり、開発により減少しており、絶滅する恐れがある。大神島に産することは、安谷屋ら(1982)で報告されているが、2012年に再確認された。

学術的価値 : 分布域の北限であり、国内で唯一の産地である。ポリネシア系の植物で、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。園芸用の採集。

備考 : 宮古諸島では近年各地で栽培されており、本来の自生かどうか判断が難しい場合がある。宮古島市指定天然記念物(ミヤコジマソウ)(2012年)。

文献 : 安谷屋昭・久貝勝盛・川上 勲, 1982. 平良市の天然記念物—調査報告集—, 平良市教育委員会(編), 平良市教育委員会, 62 pp.

初島住彦・天野鉄夫・宮城康一, 1975. 宮古群島の植物. “沖縄県立自然公園候補地学術調査報告(宮古群島)”, 沖縄自然研究会(編), 沖縄県, 31-70.

横田昌嗣・阿部篤志・佐藤宣子, 2016. 宮古諸島から新たに見つかった維管束植物. 宮古島市総合博物館紀要, (29): 121-128.

執筆者名 : 横田昌嗣*・川上 勲*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・佐藤宣子(追補)

和名 : オギノツメ

分類 : キツネノマゴ科 (APG 科名: キツネノマゴ科)

学名 : *Hygrophila salicifolia* (Vahl) Nees

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年草。根茎は地中を這い、節から地上茎を出す。地上茎は高さ30～50 cm、鈍い4稜がある。葉は対生し、線状披針形、長さ4～10 cm、幅5～15 mm。花は柄がなく葉腋に数個束生する。花冠は淡紫色、長さ10～13 mm、外面に軟毛があり、下部は筒形、上部は唇形、上唇は浅く2裂し、下唇はやや深く3裂する。

分布域(県外) : 本州(静岡県以西)、四国、九州、種子島、中之島、奄美大島、徳之島、東南アジア、インド。

県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島、西表島。

生育環境 : 湿地に生える。

生育状況 : 西表島の1ヶ所で2017年に数個体が確認されている。その他の島の現状は不明。
減少の要因 : 自生地の開発。もともと個体数が少ない。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・新城和治*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : ナガミカズラ
分類 : イワタバコ科 (APG科名: イワタバコ科)
学名 : *Aeschynanthus acuminatus* Wall. ex DC.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 多年生藤本。葉は対生し、多肉質、楕円形で全縁、鋭尖頭である。花は腋生の散房花序をつくり、花冠は黄白色、鐘形で上部は2唇に分かれ、上唇はさらに2裂、下唇は3裂する。果実は長さ15 cm程の細長い先の尖った円筒形の蒴果で2片に裂開し、長い毛束を両端につけた小さな種子を多数とばす。

分布域(県外) : 台湾、中国南部、ヒマラヤ、インドシナ。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 高地の樹幹や岩上に生える。

生育状況 : 1973年に約1 m²の広がり1個体が発見されたが、その後は確認されていなかった。2004年に最初の個体とは異なる場所で新たな個体が発見された(小林・國府方, 2005)が、自生地では開花・結実は観察されていない。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内では唯一の産地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が極めて少ない。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。台湾では、低地から山地の常緑樹林内にやや普通に生える。国内希少野生動植物 (2015年)。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 1: 37-45.
小林史郎・國府方吾郎, 2005. 日本産ナガミカズラ属の再発見. 分類, 4 (2) : 43-44.

執筆者名 : 横田昌嗣*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)

和名 : ミズビワソウ (ヤエヤマイワタバコ)
分類 : イワタバコ科 (APG科名: イワタバコ科)
学名 : *Cyrtandra yaeyamae* Ohwi
カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ2~3mになる常緑の低木、茎は径2~3cm。葉は対生または互生し、茎の上部に集まってつき、倒卵状長楕円形、長さ25cm、幅10~18cm、葉柄は長さ4~5cm。集散花序は腋生し、5~8花をつけ、総包は卵状披針形、長さ3~3.5cm、花冠は乳白色、長さ2.5cm、液果は長楕円形、長さ1.2~1.5cm。

県内の分布 : 西表島(固有)。

生育環境 : 溪谷の陰湿な林内に生える。

生育状況 : 西表島の数河川の流域で確認されているが、個体数は限られている。

- 学 術 的 価 値 : 西表島の固有種である。ミズビワソウ属は太平洋の熱帯・亜熱帯域に分布し (Clark *et al.*, 2009)、中国大陸には産しない。西表島とマレーシアやミクロネシアとのつながりを示す種として、植物地理学上貴重である。
- 減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が限られる。自生地の大半は国立公園内にあるが、遊歩道の建設や園芸用の採集により減少している。
- 備 考 : フィリピン (バタン島) に産する *Cyrtandra cumingii* C. B. Clarke の変種 var. *yaeyamae* (Ohwi) Hatusima とする意見があるが、この学名は裸名のままである。竹富町希少野生動物種 (2017 年)。
- 文 献 : 國府方吾郎・D.A. Madulid, 2000. バタン島産及び西表島産ミズビワソウ (イワタバコ科) の染色体学的比較研究. 沖縄生物学会誌, (38): 27-31.
Clark, J.R., W.L. Wagner & E.H. Roalson, 2009. Patterns of diversification and ancestral range reconstruction in the southeast Asian-Pacific angiosperm lineage *Cyrtandra* (Gesneriaceae). *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 53: 982-994.
- 執 筆 者 名 : 横田昌嗣

-
- 和 名 : ツノギリソウ
分 類 : イワタバコ科 (APG 科名: イワタバコ科)
学 名 : *Hemiboea bicornuta* (Hayata) Ohwi
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形 態 の 特 徴 : 高さ 30~100cm になる柔らかい常緑の多年生草本、全株無毛。葉は対生し、鎌状の長楕円状倒披針形、長さ 10~20cm、幅 2.5~4cm、葉柄は長さ 2~4cm。通常 2 花をつけ、花梗は長さ 1.5~2.5cm、萼は 5 深裂し、萼裂片は長楕円形、長さ 8mm、花冠は白色、円筒状鐘形、長さ 2~4cm、内面に赤色の細点が入る。室果は円筒形、長さ 2cm、幅 4mm、種子は多数で微小。
- 分 布 域 (県 外) : 台湾。
- 県 内 の 分 布 : 石垣島、西表島、与那国島。
- 生 育 環 境 : 山地の水がしたたり落ちるような陰湿な崖や岩場に生える。
- 生 育 状 況 : 西表島では数ヶ所で確認されているが、自生地と個体数は限られている。石垣島では数ヶ所で確認されているが、もっとも大きな個体群は県立公園の建設で失われた。与那国島の現状は不明。
- 学 術 的 価 値 : ツノギリソウ属は沖縄県、台湾、中国南部に分布するが、沖縄県は分布域の北限で、中国大陸とのつながりを示す種として植物地理学上注目される。
- 減 少 の 要 因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が限られる。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣

-
- 和 名 : タイワンシシラン
分 類 : イワタバコ科 (APG 科名: イワタバコ科)
学 名 : *Lysionotus apicidens* (Hance) Yamazaki
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

- 形 態 の 特 徴 : 樹幹や岩上に着生する常緑の小低木。茎は幹や岩に着生するコケの中を這い、疎らに枝を出す。葉は対生、または 3~4 枚が輪生し、長楕円形倒披針形~楕円形で、縁は鋭い鋸歯が目立ち、表面の主脈の部分はへこむ。枝の上部の葉腋に白色の花をつけ、花は筒状で上部が唇形になり、上唇が 2 裂、下唇が 3 裂する。

- 分布域（県外）：台湾。
- 県内の分布：沖縄島北部。
- 生育環境：山地の岩上にコケとともに生える。
- 生育状況：県内では極めてまれで、1994年に初めて報告された（山崎，1994）。これまで狭い範囲に3ヶ所の自生地が知られているだけである。その内の2ヶ所は登山道沿いにあり、踏みつけや採集により個体数が減少している。
- 減少の要因：もともと自生地と個体数が極めて少ない。
- 備考：台湾では花は淡紅色であるが、沖縄島のもは3ヶ所ともすべての個体の花色はわずかに紫色を帯びた白色である。分子系統学的な研究では、日本本土のシシンラン *L. pauciflorus* Maxim. と沖縄・台湾のタイワンシシンランは遺伝的に多少分化しているものの、中国大陸産のシシンランの形態的および遺伝的変異が大きく（Kokubugata *et al.*, 2011）、シシンランとタイワンシシンランは一つの種にまとめるべきだという。
- 文献：伊波善勇，1996. 本部町における特筆される植物。“本部町動植物総合調査報告書，植物相”，本部町立博物館（編），本部町教育委員会，153-243。
山崎 敬，1994. タイワンシシンラン琉球に分布. 植物研究雑誌，69: 114-115。
Kokubugata, G., Y. Hirayama, C.-I Peng, M. Yokota & M. Moller, 2011. Phylogeographic aspects of *Lysionotus pauciflorus sensu lato* (Gesneriaceae) in the China, Japan and Taiwan region: phylogenetic and morphological relationships and taxonomic consequences. *Pl. Syst. Evol.*, 292(3-4): 177-188.
- 執筆者名：横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

- 和名：マツムラソウ
- 分類：イワタバコ科 (APG 科名: イワタバコ科)
- 学名：*Titanotrichum oldhami* (Hemsl.) Soler.
- カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：絶滅危惧ⅠA類 (CR)
- 形態の特徴：常緑の多年草。全株に柔らかい粗毛があり、茎は長さ15～30 cmになる。葉は対生し、卵状長楕円形、長さ5～22 cm、葉柄は長さ0.5～3 cm。総状花序を頂生し、多花をつける一方、花を欠き、多数の無性芽をつけた穂状花序をしばしば葉腋から下垂させることがある。花は黄色で、花冠の内面には赤い斑紋があり、萼は5深裂し、長さ7～13 mm、花冠は漏斗状で、長さ3.5 cm。室果は長さ8 mm。
- 分布域（県外）：台湾、中国南部。
- 県内の分布：西表島、石垣島。
- 生育環境：常緑広葉樹林内の川沿いの水のしたたり落ちる湿った崖面に着生する。
- 生育状況：西表島では数河川の流域に点々と産することが知られるが、各地とも個体数は極めて少ない。石垣島では1ヶ所に数個体を産するだけである。
- 学術的価値：単型属をなす特異な種である。分布域の東限であり、日本で唯一の産地である。
- 減少の要因：園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。
- 備考：西表島には、遺伝的に台湾北部中央のものに類似した個体群と、台湾中南部産に類似した個体群があり、遺伝的に多様であることが報告されている（Wang *et al.*, 2004）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。
- 文献：Wang, C.-N., M. Moeller & Q. C. B. Cronk, 2004. Population genetic structure of *Titanotrichum oldhami* (Gesneriaceae), a subtropical bulbiferous plant with mixed sexual and asexual reproduction. *Annals of Botany*, 93: 201-209.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : ハマウツボ

分類 : ハマウツボ科 (APG 科名: ハマウツボ科)

学名 : *Orobanche coerulescens* Stephan ex Willd.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 主としてカワラヨモギの根に寄生する一年草。茎は単一で太く、花穂とともに高さ 10~35 cm になる。葉は鱗片状で小さく、疎らに着き、茎・葉とも黄褐色を呈する。花序は穂状または総状、萼は 4 裂、花冠の裂片は 2 唇形。室果は 2 室、多数の球形の微細種子を有する。

分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、宝島、奄美大島、喜界島、朝鮮、台湾、中国、東南アジア。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、久米島。

生育環境 : 海岸の砂地に生える。

生育状況 : 久米島で 1981 年に確認されているが、以後の現状は不明。伊平屋島では 2008 年に 1 ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。伊是名島と沖縄島の現状は不明。

減少の要因 : 海浜の護岸工事などによる環境の変容。もともと自生地が少ない。

文献 : 池原直樹, 1989. 沖縄植物野外活用図鑑 第 8 巻. 新星図書出版, 230-231.

執筆者名 : 立石庸一*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)

和名 : ホザキミミカキグサ

分類 : タヌキモ科 (APG 科名: タヌキモ科)

学名 : *Utricularia caerulea* L.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年生の小さな食虫植物。地下茎は糸状で地中を這い、その所々から地上葉と直立する花茎を出す。地上葉はへら形で長さ 2~3.5 mm、やや束になってつく。花茎の基部に葉の変形したひげ根のような仮根を束生し、それに少数の捕虫袋をつける。花茎は高さ 10~30 cm、淡紫色のほとんど柄のない花を 4~10 個つける。

分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、馬毛島、台湾、中国南部、東南アジア、オーストラリア。

県内の分布 : 伊是名島。

生育環境 : 陽当たりの良い湿地、水田の畦に生える。

生育状況 : 懸命に探索を行ったが、見つけることはできなかった。現状は不明で、絶滅した恐れがある。

減少の要因 : 水田、湿地の埋立。もともと自生地が少ない。

執筆者名 : 横田昌嗣*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ミカワタヌキモ (イトタヌキモ)

分類 : タヌキモ科 (APG 科名: タヌキモ科)

学名 : *Utricularia exoleta* R. Br.

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU） 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

形態の特徴：多年生の食虫植物。茎は糸状で水面すれすれの泥土上を這うか、または水中を漂い、先端は渦巻状に巻く。水中葉は疎らに生じ、小形で1～2回2分裂し、細い裂片に捕虫袋を疎らにつける。花は黄色で小さく、高さ5～8 cmの花茎に1～3個つく。

分布域（県外）：本州（東海以西）、九州、屋久島、徳之島、台湾、中国南部、ヒマラヤ、アフリカ、オーストラリア。

県内の分布：伊是名島、沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境：湿地、池沼、水田に生える。

生育状況：西表島では2ヶ所に、石垣島では2ヶ所に産する。伊是名島の現状は不明。沖縄島では数ヶ所に産するが、多くの自生地は水田の埋立や湿地の開発で失われている。沖縄島中部では、北アメリカ原産のオオバナイトタヌキモ *U. gibba* L. とと思われるものが逸出しており、本種と交雑したり競合する恐れがある。

減少の要因：湿地や水田の埋立。もともと自生地が少ない。

備考：竹富町希少野生動植物種（2017年）。IUCNカテゴリー：Least Concern (LC)*。**Utricularia gibba* として評価。

保全対策：湿地、池沼、水田の保全。帰化種の駆除。

文献：赤井賢成，2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究（与那国島・石垣島）. “事業年報（平成27年度）”，沖縄美ら島財団総合研究センター，39-44.

執筆者名：横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名：イヌタヌキモ

分類：タヌキモ科（APG科名：タヌキモ科）

学名：*Utricularia tenuicaulis* Miki

カテゴリー：絶滅危惧ⅠB類（EN） 環境省カテゴリー：準絶滅危惧（NT）

形態の特徴：水中に浮遊する多年生の食虫植物。茎の中心に気道はなく、呼吸枝もない。水中葉は羽状に細裂し、裂片は1平面に配列し、捕虫袋をつける。花茎は太く、長さ10～30 cm、花弁は黄色。果実は球形、径4 mm。

分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、種子島、沖永良部島、与論島。

県内の分布：沖縄島、久米島、宮古島、石垣島。

生育環境：池や沼の淡水中に生える。

生育状況：沖縄島では2ヶ所で確認されている。石垣島では1ヶ所で確認されているが、栽培品の逸出の可能性がある。他の島の現状は不明。

減少の要因：池や沼などの減少。もともと自生地と個体数が限られている。

備考：IUCNカテゴリー：Least Concern (LC)*。**Utricularia australis* として評価。

執筆者名：横田昌嗣*・北原 孝*

和名：ハマジンチョウ

分類：ハマジンチョウ科（APG科名：ゴマノハグサ科）

学名：*Myoporum bontioides* (Sieb. et Zucc.) A. Gray

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU） 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

- 形態の特徴** : 高さ1~2 mの常緑低木。茎は直立して柔らかく、よく分枝する。葉は互生し、多肉質で葉身は長楕円形~楕円形、長さ5~10 cm。花は漏斗形で淡紫色を帯び、内面に赤褐色の斑があり、葉腋に1~3個束生し、横向きに開く。
- 分布域(県外)** : 本州(三重県)、九州(西南部)、屋久島、種子島、奄美大島、台湾、中国南部、インドシナ。
- 県内の分布** : 伊是名島、沖縄島、石垣島、西表島、小浜島?。
- 生育環境** : 海岸の湿地に生える。
- 生育状況** : 伊是名島では1ヶ所の海岸の砂浜に数個体があるだけだが、急激に衰退している。沖縄島中~南部では数ヶ所に点々と産するが、現在確認できる自生地は南城市佐敷字富祖崎だけである。南城市佐敷字富祖崎のハマジンチョウ群落では、205株が記録(伊禮, 1989)されていたが、埋立により減少している。西表島船浦にも数個体あるが、海中道路の建設で砂が堆積し生育環境が悪化している。石垣島の現状は不明。今回の調査で小浜島の1ヶ所で少数個体が確認されたが、植栽品の恐れがある。
- 学術的価値** : 熱帯性の植物で、日本では希産種である。
- 減少の要因** : 自生地の埋立。もともと自生地が少ない。
- 備考** : 南城市佐敷字富祖崎のハマジンチョウ群落は、規模が大きく県指定天然記念物になっている。最近では海岸部の道路や公園の緑化のために植栽されている。沖縄県指定天然記念物(佐敷町富祖崎海岸のハマジンチョウ群落)(1959年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。
- 文献** : 伊禮青勝, 1989. ハマジンチョウ・メヒルギ群落. “佐敷町史, 三自然”, 佐敷町史編集委員会(編), 佐敷町, 263-276.
小林史郎・横田昌嗣, 2001. 琉球列島植物分布資料 16. 沖縄生物学会誌, (39) : 99-102.
仲田栄二(編), 1995. ふるさとの草木, 伊是名諸島の植物図鑑. 伊是名村教育委員会, 119pp.
横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.
横田昌嗣・新城和治・比嘉清文, 1997. 琉球列島植物分布資料 14. 沖縄生物学会誌, (35) : 49-54.
- 執筆者名** : 横田昌嗣*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

-
- 和名** : タイワンツクバネウツギ
- 分類** : スイカズラ科 (APG 科名: スイカズラ科)
- 学名** : *Abelia chinensis* R. Br. var. *ionandra* (Hayata) Masam.
- カテゴリー** : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

- 形態の特徴** : 密に枝を分枝する高さ1~2 mの常緑低木。葉は対生し、卵形~楕円形で、長さ0.7~2 cm。花は枝先に多数つき、萼片は5個、花冠は白色でほぼ放射相称ラッパ形。瘦果は細長い紡錘形で萼片が残り、つくばね状になる。
- 分布域(県外)** : 奄美大島、台湾。
- 県内の分布** : 沖縄島、石垣島。
- 生育環境** : 山地の岩上に生える。
- 生育状況** : 石垣島では1ヶ所、沖縄島では1ヶ所に生育が知られるが、沖縄島では絶滅したとされ(Hatusima, 1974)、石垣島では2010年の調査で少数個体が確認された。奄美大島では園芸用の採集で絶滅寸前である。
- 学術的価値** : 県内では分布が限られ、台湾産とはやや花の形態が異なる。
- 減少の要因** : もともと生育地が限られている。園芸用の採集。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。

文献 : Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 1: 37-45.

執筆者名 : 新城和治*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)・比嘉清文(追補)

和名 : ヒメスイカズラ

分類 : スイカズラ科 (APG 科名: スイカズラ科)

学名 : *Lonicera japonica* Thunb. var. *miyagusukiana* Makino

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態の特徴 : 常緑または半落葉性の低木。茎はつる性で岩上を這い、小枝を分枝し長さ 1~2 m になる。葉は対生、常緑で革質、脈が目立ち、卵形~長楕円形で、全縁である。花は白色、茎頂近くの葉腋につき、花冠外面に下向きの伏毛が生え、これに腺点が混じる。

分布域(県外) : 徳之島、沖永良部島。

県内の分布 : 沖縄島、伊江島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 海崖または石灰岩地域の断崖などの風衝地に生える。

生育状況 : 沖縄島では 3 ヶ所に少数個体が知られるが、個体数は少ない。1 ヶ所は開発で失われた可能性がある。伊江島では最近確認された(立石ら, 2004)。石垣島では 2 ヶ所に産するが、現状は不明。与那国島では数ヶ所に産し、個体数はやや多い。宮古島と西表島の現状は不明。

学術的価値 : 琉球列島の固有変種。スイカズラと異なり、四倍体であることが判っている (Denda *et al.*, 2007)。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。

文献 : 新 敏夫・新納義馬, 1969. 与那国島の植物相. 鹿児島大学理科報告, (18) : 71-111.

池原直樹, 1989. 沖縄植物野外活用図鑑 第 9 巻. 新星図書出版, 25.

立石庸一・松村俊一・山城 考・新城和治, 2004. 琉球列島植物分布資料 17. 沖縄生物学会誌, (42) : 61-67.

Denda T., A. Kojya & M. Yokota, 2007. Chromosomal studies of insular endemic *Lonicera japonica* Thunb. var. *miyagusukiana* Makino (Caprifoliaceae) in the Ryukyu Archipelago of Japan. *Caryologia* 60(4): 331-337.

執筆者名 : 新城和治*・宮城朝章*・山城 考*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : サイヨウシャジン

分類 : キキョウ科 (APG 科名: キキョウ科)

学名 : *Adenophora triphylla* (Thunb.) DC.

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 全株無毛で高さ 20~60 cm になる多年草。根茎は太く白色。茎葉は普通 3~4 個ずつ輪生する。花は淡紫色、茎頂の円錐花序につく。花冠の先はややすぼまってつぼ形になり、花柱が長くとび出る。

分布域(県外) : 本州(中国)、四国、九州、種子島、口之永良部島、奄美大島、徳之島、喜界島、沖永良部島、台湾、中国。

県内の分布 : 沖縄島北部、久米島、粟国島、渡名喜島、慶良間諸島。

生育環境 : 日当たりのよい低地の原野から山地の草地に生える。

生育状況 : 沖縄島北部、久米島、粟国島、渡名喜島、慶良間諸島の各地で確認されているが、個体数は少ない。
減少の要因 : もともと個体数が少ない。生育地の開発。遷移の進行。

文献 : 新城和治・宮城康一, 1988. 沖縄島国頭地域の植物相. “国頭郡天然記念物緊急調査”, 沖縄県教育委員会, 117-193.

執筆者名 : 新城和治*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)

和名 : タチミゾカクシ (アブノメミゾカクシ)

分類 : キキョウ科 (APG 科名: キキョウ科)

学名 : *Lobelia alsinoides* Lam.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 一年草または越年草。茎は基部がやや匍匐し、上部は直立または斜上し、時に疎らに分枝して、長さ 10 ~ 30 cm になる。葉は互生し、広披針形~卵形、長さ 0.5~2 cm、葉腋に 1 花をつける。花は青紫色で、花冠は深く 5 裂し、長さ 5~8 mm。室果は長さ 3 mm、球状倒卵形で、長さ 2 cm の柄がある。

分布域 (県外) : 九州 (福岡県)、台湾、中国南部、インド、インドシナ、マレーシア。

県内の分布 : 沖縄島、宮古島。

生育環境 : 日当たりのよい小面積の湿地、林道のわだちの中、小川の湿った岩上、水田の畦などの明るい環境に生える。

生育状況 : 沖縄島ではかつては国頭村から那覇市までの広い範囲に自生地が点々と知られたが、現在は恩納村と金武町の数ヶ所に産するだけである。自生地の遷移が進んで衰退したり、自生地の開発が進んで、減少している。宮古島の現状は不明で、絶滅した可能性がある。

減少の要因 : 湿地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。遷移の進行。

文献 : 横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : マルバハタケムシロ

分類 : キキョウ科 (APG 科名: キキョウ科)

学名 : *Lobelia lochooensis* Koidz.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 小形の常緑多年草。茎は匍匐し、多数の葉を密に互生する。葉は円形~倒卵形、長さ 5~7 mm、光沢がある。花は腋生し、淡青紫色~白色、萼は長さ 3 mm、花冠は 5 裂し、長さ 8~9 mm。朔果は長さ 4 mm。

分布域 (県外) : 奄美大島。

県内の分布 : 沖縄島南部 (那覇市小禄)、久米島。

生育環境 : 海岸近くの日当たりのよい湿地、湿った崖、水田の畦などに生える。奄美大島では、海岸近くのリュウキュウチク林の林床に生える場合がある。

生育状況 : 沖縄島では既に絶滅したと思われる。基準産地である久米島からは、1929 年に初めて報告され、基準標本には水田の畦に生えると記されている。その後は水田を中心に探索が続いたが、発見されな

- いままの状態が続いた。2005年に3ヶ所に生育していることが確認され、さらに久米島の別の1ヶ所でも確認されている。
- 学 術 的 価 値 : 琉球列島の固有種で、近縁種はオーストラリアに分布し (Murata, 1992; Kokubugata *et al.*, 2012)、植物地理学上貴重である。
- 減 少 の 要 因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。
- 保 全 対 策 : 自生地は天然記念物などに指定して保全する必要がある。
- 備 考 : 奄美大島では数ヶ所に産するが、少ない。
- 文 献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄県, 1-39.
Murata, J., 1992. Morphology and chromosome number of *Lobelia lochoensis* Koidz. J. Jpn. Bot., 67: 282 - 285.
Kokubugata, G., K. Nakamura, P. I. Forster, Y. Hirayama & M. Yokota, 2012. Verification of antitropical distribution of *Lobelia* species (Campanulaceae) between the Ryukyu Archipelago of Japan and Oceania based on molecular data. Australian Journal of Botany, 60: 417-428.
阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 (伊是名島・久米島). “事業年報 (平成 26 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.
- 執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・新城和治・山城 考*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

- 和 名 : マルバミゾカクシ
- 分 類 : キキョウ科 (APG 科名: キキョウ科)
- 学 名 : *Lobelia zeylanica* L.
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)
- 形 態 の 特 徴 : 常緑の多年草。茎は匍匐し、長さ 20~90 cm になり、先端部は斜上する。葉は卵形~広卵形、長さ 1~6 cm、心脚~切脚、下面に微毛がある。花は腋生し、淡青紫色、花冠は 5 裂し、長さ 5~9 mm。室果は長楕円状卵形、長さ 3~7 mm。
- 分 布 域 (県 外) : 台湾、中国南部、インド、マレーシア、ミクロネシア。
- 県 内 の 分 布 : 与那国島。
- 生 育 環 境 : 低地の自然林や二次林の湿った林床や水田の畦に生える。
- 生 育 状 況 : 4 ヶ所に自生することが確認されているが、個体数は極めて少ない。自生地の近くまで開発が進んでいる。外来種との競合や遷移の進行で減少している生育地がある。
- 学 術 的 価 値 : 日本では唯一の産地で、分布域の北限である。
- 減 少 の 要 因 : 自生地の開発。水田の減少。遷移の進行。もともと自生地と個体数が少ない。
- 備 考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。
- 文 献 : 横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.
- 執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・村松 稔(追補)

- 和 名 : ナガバハグマ
- 分 類 : キク科 (APG 科名: キク科)
- 学 名 : *Ainsliaea oblonga* Koidz.

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU） 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

形態の特徴：高さ20～40 cmになる常緑の多年草。葉は長い柄があり、葉は10個程度が茎の中部からやや下方に集まってつき、葉身は長楕円状披針形で先は尖る。頭花は白色の3小花からなり、茎の先に総状につく。

県内の分布：沖縄島北部、西表島。

生育環境：山地溪岸に生える。

生育状況：国頭村、東村、大宜味村、名護市、宜野座村の限られた河川の中流域に生え、大部分の自生地はダム建設により消失している。西表島のものは、オキナワテイショウの葉がやや狭葉になったもので、沖縄島北部のナガバハグマとは異なる。

学術的価値：沖縄県の固有種。

減少の要因：ダムの建設。森林の伐採。もともと自生地と個体数が限られている。

備考：沖縄島北部のものと西表島のものは、形態的に大きく異なり、分類学的な再検討が必要である。変種のオオナガバハグマ *A. oblonga* var. *latifolia* は奄美大島に産する。竹富町希少野生動植物種（2017年）。

文献：沖縄総合事務局北部ダム事務所，1995．平成5年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ．沖縄建設弘済会，1-6．
沖縄総合事務局北部ダム事務所，1995．平成6年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ．沖縄建設弘済会，1-6．
沖縄総合事務局北部ダム事務所，1997．平成7年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ．沖縄建設弘済会，1-7．
沖縄総合事務局北部ダム事務所，1998．平成8年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ．沖縄建設弘済会，1-6．
沖縄総合事務局北部ダム事務所，1998．奥間川生物環境調査データ．沖縄建設弘済会，3-9，99-112．
沖縄総合事務局北部ダム事務所，1998．大保川生物環境調査データ．沖縄建設弘済会，5-13，151-168．
沖縄総合事務局北部ダム事務所，1998．座津武川生物環境調査データ．北部ダム事務所，3-8，87-95．
横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智，1997．琉球列島植物分布資料15．沖縄生物学会誌，(35)：55-64．
横田昌嗣・新城和治・島袋敬一，1990．琉球列島植物分布資料7．沖縄生物学会誌，(27)：53-55．

執筆者名：横田昌嗣*・宮城朝章*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名：ワタヨモギ

分類：キク科 (APG科名: キク科)

学名：*Artemisia gilvescens* Miq.

カテゴリー：絶滅危惧ⅠA類（CR） 環境省カテゴリー：絶滅危惧ⅠB類（EN）

形態の特徴：常緑の多年草。茎は長さ30 cmになり、密に綿毛をふく。葉は長さ6～7 cm、幅2.8～4.5 cm、3中裂し、上面に白色の腺点がある。円錐花序は細長く、頭花筒状、長さ4 mm、幅2 mm、密に綿毛をふく。

分布域（県外）：本州、四国、中国。

県内の分布：渡名喜島。

- 生育環境 : 海岸に近い原野や集落周辺の草地に生える。
- 生育状況 : 数ヶ所に小規模な集団を形成する。
- 学術的価値 : 分布域の南限であり、著しい隔離分布を示し、植物地理学上貴重である。日本全体で減少しており、国内で本種が現存するのは、渡名喜島と徳島県だけである(小川, 2003)という。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。ギンネムの侵入による原野の消失。ニシヨモギとの交雑による遺伝的汚染。
- 保全対策 : 渡名喜島は沖縄県では数少ないギンネムが侵入していない島嶼であったが、ごく最近導入され、島内の各地にギンネム林が広がりつつある。海岸近くの原野などに生育する植物にとっては、ギンネムの侵入は生育地の消失につながる。ギンネムの分布域が拡大しない間に、駆除することが重要である。ニシヨモギとの交雑個体も見つかっており、ワタヨモギ自生地周辺のニシヨモギを除去する必要があるかも知れない。
- 文献 : 小川 誠, 2003. ワタヨモギ. “レッドデータプランツ”, 矢原徹一(監修), 山と溪谷社, 東京, 23.
阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査Ⅱ(粟国島・渡名喜島). 日本植物園協会誌, (51): 80-85.

執筆者名 : 横田昌嗣*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

- 和名 : **イソノギク**
- 分類 : キク科 (APG 科名: キク科)
- 学名 : *Aster asa-grayi* Makino
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は分枝し、斜上または地上を這い、長さ 15~50 cm になる。花をつけない茎は短く、先にさじ形の根生葉をロゼット状につける。茎葉は互生し、へら形、やや多肉質で毛が散生する。頭花は白色、花茎の先端に単生または散房状につく。
- 分布域(県外) : 奄美大島、加計呂麻島、徳之島、沖永良部島。
- 県内の分布 : 沖縄島中部。
- 生育環境 : 海岸の岩上、断崖上に生える。
- 生育状況 : 恩納村の 2ヶ所のみ知られる。個体数は少ない。
- 学術的価値 : 琉球列島の固有種である。奄美諸島のものは、花が淡紫色を帯びる。
- 減少の要因 : 観光客による踏みつけ。園芸用の採集。もともと生育地が限られている。
- 備考 : 唯一の自生地は県指定の天然記念物である。

執筆者名 : 横田昌嗣*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **オキナワギク**
- 分類 : キク科 (APG 科名: キク科)
- 学名 : *Aster miyagii* Koidz.
- カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

- 形態の特徴 : 匍枝を出して繁殖する常緑の多年草。匍枝は細く、地上を這い節部から根と共に根生葉を出す。根生葉はロゼット状につき、円形~倒卵形で両面に粗毛があり、花時にも残っている。頭花は径 2~2.5 cm、淡青紫色、茎または枝の先につく。

分布域（県外）：奄美大島、加計呂麻島、請島、徳之島。
県内の分布：沖縄島北部、藪地島。
生育環境：沖縄島北部の主に東海岸の海辺の岩上や崖に生える。
生育状況：1980年頃までは、国頭村から名護市の海岸岩上に群生しているのが見られたが、最近はめっきり減少している。最近、藪地島からも報告されている（佐藤ら，2017）
学術的価値：中琉球の固有種であり、沖縄島は分布域の南限である。
減少の要因：護岸・道路工事。園芸用の採集。
備考：IUCN カテゴリー：Vulnerable (VU)。

文献：新納義馬・島袋 曠，1974. 沖縄島北部（国頭村）東海岸の植生，“沖縄海岸国立公園拡張候補地学術調査報告，国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島”，沖縄県，17-35.
佐藤寛之・立石庸一・齊藤由紀子・天野正晴・中村元紀・杉山巳次，2017. 沖縄県の離島・へき地における自然教育のための基礎資料の充実Ⅸ：うるま市藪地島の植物相．琉球大学教育学部紀要，(91)：53-74.

執筆者名：横田昌嗣*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)

和名：ヨナグニイソノギク
分類：キク科 (APG 科名：キク科)
学名：*Aster walkeri* Kitam.
カテゴリー：絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：茎は下部から分枝して斜上、高さ15 cmくらいになる常緑の多年草。根生葉はやや肉質でへら形、両面とも茎とともに軟毛を密につける。茎葉は長楕円形、茎上部になるほど小さくなる。頭花は淡紫色で、直径3 cm前後、枝先に単生する。
県内の分布：与那国島。
生育環境：海岸の断崖地に生える。
生育状況：与那国島の数ヶ所にわずかに見られる。台風による崖崩れで消失した自生地がある。2005年に最も個体数の多い集団が新たに発見された。
学術的価値：与那国島の固有種。
減少の要因：もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然災害による自生地の消失。

文献：初島住彦・金井弘夫，1974. 与那国島植物新知見．国立科学博物館専報，(7)：115-120.
与那国町教育委員会，1995. 与那国島の植物．与那国町教育委員会，336pp.

執筆者名：横田昌嗣*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)

和名：タウコギ
分類：キク科 (APG 科名：キク科)
学名：*Bidens tripartita* L.
カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：一年草。茎は直立、分枝し高さ20～150 cmに達する。葉は対生で3～5裂し、裂片は鋸歯のある卵状披針形。黄色の頭花を茎頂や葉腋から出た花柄の先につけ、舌状花はない。

分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、奄美諸島、アジア、ヨーロッパ、北アメリカ、オーストラリア。
 県内の分布：沖縄島。
 生育環境：水田の畦や湿地に生える。
 生育状況：本部半島と名護市の水田の数ヶ所で確認されている。
 減少の要因：水田や湿地の減少。もともと自生地が少ない。除草剤の使用。
 備考：奄美大島では林道の湿ったわだちなどに普通に生えるが、沖縄島ではまれである。IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。

執筆者名：横田昌嗣*・宮城朝章*

和名：タカサゴアザミ
 分類：キク科 (APG 科名: キク科)
 学名：*Cirsium japonicum* DC. var. *australe* Kitam.
 カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴：高さ 50~100 cm に達する多年草。根生葉は倒卵状狭長楕円形、葉縁は 5~6 対に羽状に分裂し、茎葉は長楕円形で、基部は茎を抱く。頭花は枝先につき、球形で紫色または紅色を帯びる。
 分布域（県外）：台湾、中国。
 県内の分布：魚釣島。
 生育環境：海岸に生える。
 生育状況：魚釣島の 1ヶ所から記録（新納ら, 1971；新納・新城, 1980）されているが、その後確認されていない。
 学術的価値：魚釣島に隔離分布し、中国大陸と魚釣島の植物相の共通性を示す植物である。日本で唯一の産地である。
 減少の要因：野生化したヤギによる食害。もともと自生地が限られている。
 保全対策：野生化ヤギの駆除が急務である。

文献：初島住彦, 1991. 魚釣島の植物地理. 鹿児島島の植物 (鹿児島植物同好会会誌), (11) : 62-66.
 新納義馬・新城和治, 1980. 植物調査. “尖閣諸島調査報告書, 学術調査編”, 沖縄開発庁, 155-244.
 新納義馬・玉城松栄・新城和治・宮城康一, 1971. 尖閣列島の植物. “尖閣列島学術調査報告”, 琉球大学, 37-84.

執筆者名：新城和治*・宮城朝章*

和名：キクバイズハハコ
 分類：キク科 (APG 科名: キク科)
 学名：*Conyza aegyptiaca* (L.) Aiton
 カテゴリー：絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴：一年草。全株に灰白色の粗毛を密につけ、茎は直立し上方で分枝して、高さ 20~60 cm になる。根生葉は長楕円状披針形だが花時には枯れ、茎葉は長楕円形で縁は羽状に裂ける。頭花は黄色で直径 1.5 cm 前後、枝先に数個集まってつく。
 分布域（県外）：台湾、中国南部、インド、マレーシア、オーストラリア、アフリカ。

県内の分布 : 宮古島、石垣島、西表島、与那国島。
生育環境 : 日当たりのよい低地の草地に生える。
生育状況 : 与那国島で最近確認されているが、個体数は極めて少ない。他の島の現状は不明。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : 生育地の開発。もともと自生地が限られている。
備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 池原直樹, 1989. 沖縄植物野外活用図鑑 第9巻. 新星図書出版, 59.

執筆者名 : 横田昌嗣*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

和名 : **ネバリイズハハコ**
分類 : キク科 (APG 科名: キク科)
学名 : *Conyza leucantha* (D. Don) Ludlow et Raven
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 高さ 30~80 cm に達する一~二年草。全株に白色粉状の腺毛を密生して粘り気がある。茎葉は長楕円状倒披針形で先は尖る。頭花は淡黄色、枝先に多数集まり、まばらな散房状につく。
分布域 (県外) : 台湾、中国、ヒマラヤ、東南アジア、オーストラリア。
県内の分布 : 西表島、与那国島。
生育環境 : 日当たりのよい低地の草地に生える。
生育状況 : 与那国島で最近確認されているが、個体数は少ない。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : 生育地の開発。もともと自生地が限られている。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 池原直樹, 1989. 沖縄植物野外活用図鑑 第9巻. 新星図書出版, 60.

執筆者名 : 横田昌嗣*・池原直樹*

和名 : **ダイトウワダン**
分類 : キク科 (APG 科名: キク科)
学名 : *Crepidiastrum lanceolatum* Nakai var. *daitoense* (Tawada) Hatusima
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は木質化し、大きなものは高さ 15~20 cm になり、葉腋から多数の枝を放射状に出す。葉は枝先に根生状につき、葉身は倒卵状披針形で表面には多少光沢がある。
県内の分布 : 北大東島、南大東島。
生育環境 : 日当たりのよい岩場に生える。
生育状況 : 南大東島では数ヶ所に、北大東島では 3ヶ所に産するが、個体数は少ない。
学術的価値 : 大東諸島の固有変種。
減少の要因 : もともと個体数が限られている。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2017 年)。

文献 : 横田昌嗣・宮城康一, 1992. 大東諸島の植物相. “ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書”, 沖縄県教育委員会, 17-42.
城間盛男, 2011. 北大東島の植物図鑑. 北大東村教育委員会, 101pp.
西浜良修, 2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—. 南大東村教育委員会, 77pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・宮城朝章*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)

和名 : **モクビャッコウ**

分類 : キク科 (APG 科名: キク科)

学名 : *Crossostephium chinense* (L.) Makino

方言名 : イシヂク (沖縄)

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 高さ 30~80 cm に達する常緑の小低木。全体に灰白色の短毛を密につけ白色を帯びる。茎はよく分枝し、傘状になる。頭花は直径約 5 mm、淡黄色で球形、茎頂や葉腋に総状または円錐状につく。

分布域 (県外) : 悪石島、奄美諸島、硫黄島、台湾、中国南部、フィリピン。

県内の分布 : 沖縄諸島、大東諸島、宮古諸島、八重山諸島。

生育環境 : 海岸の波しぶきがかかる隆起石灰岩の上に生える。

生育状況 : かつては小島嶼にも普通に見られたが、現在はいずれの産地でも個体数が急減している。西表島では極めてまれで、1ヶ所に少数個体を産するだけである。

減少の要因 : 園芸用の採集。自生地の開発。

備考 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (モクビャッコウ) (2005 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 知念美香, 1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究, (11) : 75-105.
宮城康一, 1992. 沖大東島の植物相と現存植生. 沖縄生物学会誌, (30) : 65-70.
赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究 (与那国島・石垣島). “事業年報 (平成 27 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44.
山崎仁也・横田昌嗣・知念美香・仲宗根忠樹・比嘉清文・加島幹男, 2016. 鳩間島・新城 (上地・下地) 島・黒島の植物相 (Flora). “鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書”, 沖縄県立博物館・美術館, 13-68.

執筆者名 : 新城和治*・宮城朝章*・洲鎌栄徳*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : **サワヒヨドリ**

分類 : キク科 (APG 科名: キク科)

学名 : *Eupatorium lindleyanum* DC.

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 全体に粗毛を密につける多年草。茎は直立し、単一または上方で疎らに分枝し、高さ 30~100 cm に達する。葉は対生し、ほとんど柄がなく、披針形で 3 行脈が目立ち、あらい鋸歯がある。頭花は淡赤褐色、茎や枝の先に密な散房花序をつくる。

- 分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、奄美大島、種子島、屋久島、徳之島、沖永良部島、与論島、朝鮮、台湾、中国、ベトナム、マレーシア、タイ、インド。
- 県内の分布：伊平屋島、沖縄島北部、久米島。
- 生育環境：日当たりのよい湿地に生える。
- 生育状況：伊平屋島（新納・新城，1959）、伊平屋田名池のヒメガマーハイキビ群落中（玉城・島袋，1971）、今帰仁城跡、伊平屋島（仲田，1974）、国頭（新城・宮城，1988）で記録されているが、近年は確認されていない。絶滅した可能性がある。
- 減少の要因：生育地の土地利用による改変。外来種との競合。もともと自生地が限られている。
- 文献：仲田栄二，1974. 伊平屋・伊是名諸島の植物. “伊平屋列島文化誌”，仲田清英（編），41-107.
新納義馬・新城和治，1959. 伊平屋・伊是名諸島の植物. 琉球大学文理学部紀要（理学編），（3）：81-105.
新城和治・宮城康一，1988. 沖縄島国頭地域の植物相. “国頭郡天然記念物緊急調査”，沖縄県教育委員会，117-193.
玉城松栄・島袋敬一，1971. 琉球列島の湿地植生. 沖縄生物学会誌，（7）：19-26.

執筆者名：横田昌嗣*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名：ヤナギニガナ（アツバニガナ）
- 分類：キク科（APG科名：キク科）
- 学名：*Ixeris laevigata* (Blume) Sch. Bip. ex Maxim.
- カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU） 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

- 形態の特徴：常緑の多年草。根茎は短く、数枚の葉を根生する。葉は無毛で、披針形、羽状に浅裂し、微鋸歯が疎らにあり、長さ8～30 cm。花茎は15～30 cmになり、散房状に多数の頭状花序をつける。頭花は黄色で、10個程度の舌状花をつけ、花冠は長さ7 mm。果実は長さ4 mm、長さ3 mmの冠毛がある。
- 分布域（県外）：九州南部、口之永良部島、中国南部（海南島）、フィリピン、インドシナ、マレーシア。
- 県内の分布：沖縄島北部、西表島。
- 生育環境：主な生育地は溪流沿いの日当たりのよい湿った岩上であるが、沖縄島北部（国頭村、大宜味村）の2ヶ所では、例外的に二次林の明るい林床や路傍の草地に生えることがある。
- 生育状況：沖縄島北部では数河川の溪流沿いに自生地が知られるが、個体数は非常に少ない。西表島では1河川の2ヶ所で確認されているが、極めてまれである。
- 学術的価値：マレーシア系の植物で、日本では希産種である。
- 減少の要因：ダム建設による自生地の水没。自然林の伐採。もともと自生地と個体数が少ない。
- 備考：竹富町希少野生動植物種（2017年）。

- 文献：沖縄総合事務局北部ダム事務所，1995. 平成5年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所，1995. 平成6年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所，1997. 大保ダム建設発生土の処分候補地に係る生物環境調査データ（陸域・海域）. 沖縄建設弘済会，3-14，117-135，277-286，349-373.
沖縄総合事務局北部ダム事務所，1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，5-13，151-168.
横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智，1997. 琉球列島植物分布資料15. 沖縄生物学会誌，（35）：55-64.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*

和名 : コケセンボンギク

分類 : キク科 (APG 科名: キク科)

学名 : *Lagenophora lanata* A. Cunn.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 小形の多年草。根生葉はロゼット状で平開し、倒卵形～広へら形、葉縁には波状のきょ歯があり、軟毛を布す。頭花は白色で小形、花茎の先に1個ずつつく。

分布域(県外) : 本州(広島県)、九州西南部、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、インド、マレーシア、オーストラリア。

県内の分布 : 沖縄島、久米島、石垣島、西表島、嘉弥真島。

生育環境 : 低地から山地の草原や林縁に生える。

生育状況 : 久米島で1957年に記録されているが、2005年の調査では確認されなかった。沖縄島北部では、1948年に茶畑で、1951年に山地で採集された記録があるが、2004年の調査では確認することはできなかった。石垣島では1972年と1974年に記録されているが、再発見できなかった。西表島の現状は不明。2013年に嘉弥真島の1ヶ所でごく少数個体が発見された。

学術的価値 : コケタンポポと共にオーストラリア系の種で(Nakamura *et al.*, 2012)、植物地理学上重要である。

減少の要因 : 生育地の土地利用による改変。もともと自生地が少ない。競合する帰化植物の繁茂。

備考 : 奄美大島ではかつては数ヶ所で記録されているが、最近では1ヶ所に少数個体を産するだけである。石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄自然研究会編, 沖縄県, 11-39.

Nakamura, K., T. Denda, G. Kokubugata, P. Forster, G. Wilson, C.I Peng & M. Yokota, 2012. Molecular phylogeography reveals an antitropical distribution and local diversification of *Solenogyne* (Asteraceae) in the Ryukyu Archipelago of Japan and Australia. *Biol. J. Linn. Soc.*, 105(1): 197-217.

執筆者名 : 横田昌嗣*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : サワオグルマ

分類 : キク科 (APG 科名: キク科)

学名 : *Senecio pierotii* Miq.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 全株白色の綿毛を密布する多年草。茎は軟く、中空で直立し、高さ30～80 cmになる。葉はへら状披針形、肉質で厚い。頭花は黄色、茎の先に散房状または仮傘形状につく。

分布域(県外) : 本州、四国、九州。

県内の分布 : 伊平屋島。

生育環境 : 湿地、原野に生える。

生育状況 : 伊平屋島で1974年に確認されている。今回の調査でも探索が試みられたが、確認することができず、現状は不明。絶滅した恐れがある。

学術的価値 : 分布域の南限である。

減少の要因 : 低地の開発。外来種との競合。もともと自生地が少ない。

文献 : 仲田栄二, 1974. 伊平屋・伊是名諸島の植物. “伊平屋列島文化誌”, 仲田清英 (編), 41-107.

執筆者名 : 立石庸一*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : コケタンポポ

分類 : キク科 (APG 科名: キク科)

学名 : *Solenogyne mikadoi* Koidz.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 小形の常緑多年草。根茎は短く、多数の葉を根生する。葉は倒披針状楔形、羽状に裂け、両面に微毛がある。頭状花序は花茎に1個つき、径1.5 mm、白色～淡黄色で、数個の管状花をつける。果実は長さ1.5 mmで、無毛。

分布域(県外) : 奄美大島、徳之島。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。

生育環境 : 典型的な溪流植物で、洪水時に容易に水没するような河川の中流域の日当たりのよい湿った岩上に生える。

生育状況 : 沖縄島北部では5河川、西表島では1河川に自生が確認されているが、各地とも自生地は狭い範囲に限られ、個体数は少ない。自生地の1ヶ所(国頭村タナガーグムイ)は国の天然記念物に指定されているが、上流側にあるダムによる水量調節で生育地が乾燥化し、観光客による踏みつけの影響もあり、個体数が激減している。西表島の自生地の上流側には、取水施設が作られ、取水が始まっていることから、水量の減少で自生地が乾燥して衰退しつつある。取水の規模が大きくなると、洪水の頻度の減少が起こって、非溪流生の植物が溪流帯に侵入して、コケタンポポなどの溪流植物の生育環境が奪われる恐れがある。

学術的価値 : 琉球列島の固有種である。コケタンポポ属は世界に数種知られるが、他のすべての種はオーストラリア東部に産し、7000 km以上離れた著しい隔離分布を示す。分子系統地理学的な研究から、コケタンポポはオーストラリアの祖先種から238万年前に分化し、西表島から奄美大島へと琉球列島を北上し、コケタンポポの島嶼間隔離は33万年前に起こったことが推定されている(Nakamura *et al.*, 2012)。

減少の要因 : ダム建設による自生地の水没と乾燥化。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : IUCN カテゴリー: Vulnerable (VU)。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成5年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.

沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成6年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.

横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

横田昌嗣・島袋敬一, 1990. 琉球列島植物分布資料7. 沖縄生物学会誌, (27) : 53-55.

Nakamura, K., T. Denda, G. Kokubugata, P. Forster, G. Wilson, C.I Peng & M. Yokota, 2012. Molecular phylogeography reveals an antitropical distribution and local diversification of *Solenogyne* (Asteraceae) in the Ryukyu Archipelago of Japan and Australia. *Biol. J. Linn. Soc.*, 105(1): 197-217.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : アオヤギソウ (アオヤギバナ)
 分類 : キク科 (APG 科名: キク科)
 学名 : *Solidago yokusaiana* Makino
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 夏緑性の多年草。茎は高さ 20~50 cm になり、多数の葉をつける。根生葉は披針形、長さ 4~7 cm、花時には消失する。茎葉は互生し、線状披針形。頭状花序は茎の先に集まってつき、黄色で、径 1.5 cm、舌状花と管状花からなる。舌状花の花冠は長さ 5~6 mm。瘦果は長さ 3.5 mm、冠毛は長さ 4~5 mm。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島。

県内の分布 : 沖縄島北部 (国頭村、東村、大宜味村)。

生育環境 : 典型的な溪流植物で、洪水時に容易に水没するような河川の中流域の日当たりのよい岩上や崖に生える。

生育状況 : 自生地は 6 河川が知られるが、3 河川 (辺野喜川、大保川) では既にダム建設により絶滅し、残る 4 河川ともごく狭い範囲にごく少数の個体が残るだけであり、2 河川では外来種のアメリハマグルマが自生地に侵入し、生育環境が脅かされている。

学術的価値 : 分布域の南限であり、琉球列島では唯一の産地である。

減少の要因 : ダム建設による自生地の水没。外来種との競合。もともと自生地と個体数が少ない。

文献 : 比嘉清文, 1983 . 琉球植物分布メモ. 沖縄生物学会誌, (21) : 79-80.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995 . 平成 5 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995 . 平成 6 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
 横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997 . 琉球列島植物分布資料 15 . 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : ウリカワ
 分類 : オモダカ科 (APG 科名: オモダカ科)
 学名 : *Sagittaria pygmaea* Miq.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年草。葉はすべて根生し、沈水性、線形で上部は基部よりも少し広がるためへら形になり、長さ 10 ~15 cm。花は白色、水面より上に伸びた花茎の上部に雄花が 3 個ずつ 1~2 段に輪生し、下方に雌花が 1~2 個つく。

分布域 (県外) : 北海道西南部、本州、四国、九州、奄美諸島、朝鮮、中国、台湾。

県内の分布 : 沖縄島、西表島、与那国島。

生育環境 : 水田、湿地に生える。

生育状況 : 2005 年に沖縄島中部で確認されているが、他の島については現状不明。

減少の要因 : 沼地、水田の減少。外来種との競合。除草剤の使用。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 立石庸一*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : マルミスブタ (オオスブタ)

分類 : トチカガミ科 (APG 科名: トチカガミ科)

学名 : *Blyxa aubertii* L. C. Richard

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 一年生の沈水植物。茎はほとんど伸びず、葉は根生して株をつくり、線形、長さ 10~30 cm。時に植物体全体が紫紅色を帯びる個体がある。花は白色で葉腋の花柄につくが、萼筒が細長くのびて水面に達し、3 個の花弁を開く。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島、朝鮮、中国、台湾、インド、マダガスカル、マレーシア、オーストラリア。

県内の分布 : 沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島。

生育環境 : 池、水田や流れの少ない川床などの浅い淡水中に生える。

生育状況 : 沖縄島では北~中部の数ヶ所で、与那国島では 1 ヶ所で、石垣島では数ヶ所で確認されている。他の島の現状は不明。

減少の要因 : 池沼、水田の減少。除草剤の使用。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : 赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究 (与那国島・石垣島)。“事業年報 (平成 27 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : コスブタ (スブタ)

分類 : トチカガミ科 (APG 科名: トチカガミ科)

学名 : *Blyxa echinosperma* (Clarke) Hook. f.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 一年生の沈水植物。茎はほとんど伸長せず、葉は根生して株をつくる。葉は線形で長さ 10~30 cm。花は葉腋に出た花柄につく。萼筒が水深に応じて細長く伸び、3 個の白色の花弁を水面に開く。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、トカラ列島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、台湾、中国、インド、東南アジア。

県内の分布 : 沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島。

生育環境 : 沼や水田の浅い淡水中に生える。

生育状況 : 個体数は少なく、水田や水路などに散在する。

減少の要因 : 池沼、水田の減少。除草剤の使用。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヤナギスブタ

分類 : トチカガミ科 (APG 科名: トチカガミ科)
 学名 : *Blyxa japonica* (Miq.) Maxim. ex Asch. et Gurke
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 沈水性の一年草。茎は水中に伸長して分枝し、長さ 30 cm になる。葉は互生し、長さ 3~5 cm、紫褐色を帯び、縁に細かい鋸歯がある。花は葉腋の柄のない苞鞘につつまれ、萼筒が水面まで伸びて 3 個の白色の花弁をひろげる。
 分布域 (県外) : 本州、四国、九州、種子島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島、朝鮮、台湾、インド、東南アジア。
 県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
 生育環境 : 水田や水路の水中に生える。
 生育状況 : 沖縄島中部の 1 ヶ所で確認されているが、2004 年の調査では確認されなかった。この自生地は、ゴルフ場建設で失われた。他の島の現状は不明。
 減少の要因 : 池沼、水田の減少。除草剤や肥料の流入による環境悪化。
 備考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : ウミシヨウブ
 分類 : トチカガミ科 (APG 科名: トチカガミ科)
 学名 : *Enhalus acoroides* (L. f.) Royle
 カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 浅海に生える常緑の沈水植物。根茎は横走して分枝し、腐った葉の長い繊維で密におおわれ、葉を束生する。葉はひも状、長さ 60~90 cm、幅 1.2~1.8 cm、細歯縁。雌雄同株で、萼片と花弁は広卵形、3 個、雄花の雄蕊は 3 個、雌花の子房は卵円形。
 分布域 (県外) : インドシナ、フィリピン、インドネシア、マレーシア、ミクロネシア、ニューギニア、オーストラリア北部、アフリカ東部、紅海。
 県内の分布 : 石垣島、西表島、与那国島。
 生育環境 : 砂地の浅海に群生する。
 生育状況 : 西表島では大規模な群落が発達するが、海岸の開発、海水の汚染などにより今後減少する恐れがある。西表島の一部の自生地では、生育面積が減少しているが、アオウミガメの食害による減少が指摘されている (竹山ら, 2014)。石垣島は、自生地に隣接する陸域部分にゴルフ場やリゾート施設が建設されており、陸域の開発の影響を受けている可能性がある。与那国島の現状は不明。
 学術的価値 : 分布域の北限であり、琉球列島の植物相を特徴づける植物の一つである。
 減少の要因 : 浅海の開発。海水の汚染。アオウミガメによる食害。
 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : 当真 武, 1999. 琉球列島の海草—I 種類と分布. 沖縄生物学会誌, (37) : 75-92.
 Tsuda, R. T. & S. Kamura, 1990. Comparative review on the floristics, phytogeography, seasonal aspect and assemblage patterns of the seagrass flora in Micronesia and the Ryukyu Islands. *Galaxea*, 9: 79-93.
 竹山佳奈・河野裕美・蔵持登士江・岩崎彩加・村上智一・木村賢史・鶴飼亮行・中瀬浩太, 2014. 西表島北西部における熱帯性海草ウミシヨウブの広域分布および生育環境条件について. 土木学会論文集, B3 (海洋開発), 70(2): I_1068-I_1073.
 大場達之・宮田昌彦, 2007. 日本海草図譜. 北海道大学出版会, 114pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)

和名 : トゲウミヒルモ (旧和名:ヒメウミヒルモ)

分類 : トチカガミ科 (APG科名: トチカガミ科)

学名 : *Halophila decipiens* Ostenf.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 海底の砂泥地に生える多年草。根茎は分枝し、各節から根を出す。葉は卵状楕円形で薄く、長さ 1 cm 前後、細長い柄があり、葉縁に突起がある。雌雄異株またはまれに同株。雄花は 1~2 cm の花柄があり、花被片は 3 個あって透明。雌花は柄がなく、萼筒が少し伸びて先が 3 裂する。ウミヒルモ *H. ovalis* に似るが、葉が細長く、葉縁に突起があることで異なる。

分布域(県外) : 台湾、香港、フィリピン、タイ、マレーシア、マリアナ諸島、インド、アフリカ、オーストラリア。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 浅海(水深 17~30 m くらいまで)の砂地に生える。

生育状況 : 瀬底島と金武湾から記録されているが、生育地は少ない。生育地の状況は Tsuda & Kamura (1990) に示されている。

学術的価値 : 長崎県大村湾からも記録されたので(中西ら, 2008)、分布域の北限ではなくなったが、隔離分布をするので植物地理学上貴重である。減少の要因: 自生地の開発。もともと自生地が限られる。海水の汚濁。浚渫。海砂の採取。

備考 : *H. ovata* Gaudich. と同定する意見(島袋, 1990)があるが、誤同定と考えられる。ヒメウミヒルモの和名は、*H. minor* (Zoll.) Hartog に用いられることがあり、混乱する恐れがある。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : 島袋敬一, 1990. 琉球列島維管束植物集覧. ひるぎ社, 那覇, 794pp.

当真 武, 1997. 海草の新記録情報と図鑑等に関するコメント. 沖縄生物学会誌, (35) : 71-74.

当真 武, 1999. 琉球列島の海草—I 種類と分布. 沖縄生物学会誌, (37) : 75-92.

Tsuda, R. T. & S. Kamura, 1990. Comparative review on the floristics, phytogeography, seasonal aspect and assemblage patterns of the seagrass flora in Micronesia and the Ryukyu Islands. *Galaxea*, 9: 79-93.

中西弘樹・吉岡一也・小林 業, 2008. 長崎県大村湾におけるウミヒルモ属 *Halophila* 植物(トチカガミ科)の分布. 植物地理・分類研究, 56: 17-19.

大場達之・宮田昌彦, 2007. 日本海草図譜. 北海道大学出版会, 114pp.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : オオウミヒルモ

分類 : トチカガミ科 (APG科名: トチカガミ科)

学名 : *Halophila major* (Zoll.) Miq.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 海底の砂泥地に生える多年草。根茎は分枝し、各節から根を出す。葉身は広楕円形~卵状楕円形、長さ 15~25mm、幅 9~11mm、全縁、側脈は 18~22 対、葉縁の透明細胞は 1 列、葉柄は長さ 15~30mm、紅色を帯びる。雌雄異株。雄花は 5~6mm の苞鞘があり、花被片は 3 個、長さ 3~4mm、雌花の子房は長さ 1.5~2mm。ウミヒルモ *H. ovalis* に似るが、葉は広楕円形、側脈は 18~22 対、葉柄は強く紅色を帯びる点で、葉が楕円形、側脈が 12~16 対で、葉柄は紅色をほとんど帯びないウミヒルモと

区別することができる。

- 分布域（県外）： 本州（千葉県、和歌山県）、四国、九州、種子島、トカラ列島、奄美大島、西太平洋地域に広く分布。
 県内の分布： 沖縄島、石垣島、西表島。
 生育環境： 潮間帯下部から浅海（水深2mより深いところ）の砂泥地に生える。
 生育状況： 沖縄島、石垣島、西表島のそれぞれ数ヶ所から記録されているが、生育地は少ない。生育地の状況は Kuo *et al.* (2006) と大場・宮田 (2006) に示されている。
 減少の要因： 自生地の開発。もともと自生地に限られる。海水の汚濁。浚渫。海砂の採取。
 備考： これまで国内に産する葉が全縁のウミヒルモ類はすべてウミヒルモ *H. ovalis* とされていたが、複数の隠蔽種が含まれていることが判り、細分された。竹富町希少野生動植物種(ウミヒルモ) (2017年)。IUCN カテゴリー： Least Concern (LC)。
 文献： Kuo, J., Z. Kanamoto, H. Iizumi & H. Mukai, 2006. Seagrasses of the genus *Halophila* Thouars (Hydrocharitaceae) from Japan. *Acta Phytotax. Geobot.*, 57(2): 129-154.
 大場達之・宮田昌彦, 2007. 日本海草図譜。北海道大学出版会, 114pp.

執筆者名： 横田昌嗣

- 和名： ヒメウミヒルモ
 分類： トチカガミ科 (APG 科名： トチカガミ科)
 学名： *Halophila minor* (Zoll.) den Hartog
 カテゴリー： 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー： 該当なし

- 形態の特徴： 海底の砂泥地に生える多年草。根茎は分枝し、各節から根を出す。葉身は狭倒卵形～倒卵形、長さ5～13mm、幅4～5.5mm、全縁、側脈は5～12対、葉縁の透明細胞は1列、葉柄は長さ7～25mm。雌雄異株。雄花は2.5～4mmの苞鞘があり、花被片は3個。2.5～3.5mm、雌花の子房は長さ1～1.5mm。ウミヒルモ *H. ovalis* に似るが、葉が倒卵形で、側脈が5～12対である点で、葉が楕円形で、側脈が12～16対あるウミヒルモと区別できる。
 分布域（県外）： 奄美大島、台湾、フィリピン、東南アジア、ミクロネシア、アフリカ、オーストラリア。
 県内の分布： 沖縄島、屋我地島、西表島。
 生育環境： 潮間帯下部から浅海（水深2～11m）の砂泥地に生える。
 生育状況： 沖縄島周辺と西表島から記録されているが、生育地は限られている。生育地の状況は Kuo *et al.* (2006) と大場・宮田 (2006) に示されているが、分布情報は十分には集積されておらず、今後増える可能性がある。
 学術的価値： 現在のところ国内では奄美大島と沖縄県だけから記録されており、希少である。
 減少の要因： 自生地の開発。もともと自生地に限られる。海水の汚濁。浚渫。海砂の採取。
 備考： これまで国内に産する葉が全縁のウミヒルモ類はすべてウミヒルモ *H. ovalis* とされていたが、複数の隠蔽種が含まれていることが判り、細分された。ヒメウミヒルモの和名は *H. decipiens* Ostenf. に対して用いられることがあり、沖縄県版レッドデータブックの旧版でもこの取扱に従ってきたが、今回の改訂でヒメウミヒルモの和名は *H. minor* に用いることとし、*H. decipiens* はトゲウミヒルモと呼ぶことに改める。竹富町希少野生動植物種(ウミヒルモ) (2017年)。IUCN カテゴリー： Least Concern (LC)。
 文献： Kuo, J., Z. Kanamoto, H. Iizumi & H. Mukai, 2006. Seagrasses of the genus *Halophila* Thouars (Hydrocharitaceae) from Japan. *Acta Phytotax. Geobot.*, 57(2): 129-154.
 大場達之・宮田昌彦, 2007. 日本海草図譜。北海道大学出版会, 114pp.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : ホソウミヒルモ

分類 : トチカガミ科 (APG科名: トチカガミ科)

学名 : *Halophila okinawensis* J.Kuo

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 海底の砂泥地に生える多年草。根茎は分枝し、各節から根を出す。葉身は線形〜へら形、長さ12〜16mm、幅1.5〜4.5mm、全縁、側脈は4〜7対、葉縁の透明細胞は2列、葉柄は長さ5〜15mm。雌雄異株。雄花は3〜5.5mmの苞鞘があり、花被片は3個、長さ2.5〜3mm、雌花の子房は長さ1.5mm。ウミヒルモ *H. ovalis* に似るが、葉が細長く、葉縁の透明細胞が2列で、側脈は4〜7対である点で、葉が卵形〜楕円形で、葉縁の透明細胞が1列で、側脈が12〜16対あるウミヒルモと区別することができる。

分布域(県外) : ハワイ。

県内の分布 : 沖縄島、瀬底島。

生育環境 : 浅海(水深4mより深いところ)の砂泥地に生える。

生育状況 : 沖縄島の2ヶ所と瀬底島から記録されているが、生育地はごく少ない。生育地の状況はKuo *et al.* (2006)と大場・宮田(2006)に示されている。

学術的価値 : 金武湾が基準産地で、現在のところ国内では沖縄県だけから記録されている。ハワイに隔離分布し、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られる。海水の汚濁。浚渫。海砂の採取。

備考 : これまで国内に産する葉が全縁のウミヒルモ類はすべてウミヒルモ *H. ovalis* とされていたが、複数の隠蔽種が含まれていることが判り、細分された。竹富町希少野生動植物種(ウミヒルモ)(2017年)。IUCNカテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : Kuo, J., Z. Kanamoto, H. Iizumi & H. Mukai, 2006. Seagrasses of the genus *Halophila* Thouars (Hydrocharitaceae) from Japan. *Acta Phytotax. Geobot.*, 57(2): 129-154.
大場達之・宮田昌彦, 2007. 日本海草図譜. 北海道大学出版会, 114pp.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : トチカガミ

分類 : トチカガミ科 (APG科名: トチカガミ科)

学名 : *Hydrocharis dubia* (Blume) Backer

カテゴリー : 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 沈水性の多年草。茎は水面を横に這う。葉は長い柄があり、葉身は円心形で径4〜7cm、裏面の中央に気泡があり、水面に浮かぶ。雄花は長い柄がある苞鞘の中に約5個ずつつき、花柄が伸びて1花ずつ水面で開く。雌花は柄のない苞鞘に1個だけつき、花柄が伸びて水面に開花する。両方とも花弁は3個で白色。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、台湾、東南アジア、オーストラリア。

県内の分布 : 宮古島。

生育環境 : 沼、池、水田などの淡水中に生える。

生育状況 : 1980年代まで生育していたが、近年はまったく確認されていない。2016年にかつて知られた自生地を丹念に調査したが、見つけることはできなかった。

学 術 的 価 値 : 隔離分布し、県内では唯一の産地である。
減 少 の 要 因 : 池沼、水田の減少。もともと自生地に限られる。河川の改修。水質の悪化。帰化植物との競合。
備 考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文 献 : 初島住彦・天野鉄夫・宮城康一, 1975. 宮古群島の植物. “沖縄県立自然公園候補地学術調査報告(宮古群島)”, 沖縄自然研究会(編), 沖縄県, 31-70。

執 筆 者 名 : 新城和治*・洲鎌栄徳*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和 名 : オオミズオオバコ (ミズオオバコ)
分 類 : トチカガミ科 (APG 科名: トチカガミ科)
学 名 : *Ottelia alismoides* (L.) Pers.
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形 態 の 特 徴 : 沈水生の一年草。葉はオオバコの葉に似てすべて根生し、葉柄があり、葉身は楕円形～広卵形で縁に波状のしわがある。しかし葉の形や大きさは水深によって大きく変化し、長さ 10～30 cm、西表島では 50 cm にもなるものがある。花は白色の両性花で長い柄のある苞鞘の中に 1 個ずつつき、水面上で開花し、雄蕊は 6 個。
分 布 域 (県 外) : 本州、四国、九州、種子島、奄美大島、沖永良部島、台湾、マレーシア、北アフリカ、インド、オーストラリア。
県 内 の 分 布 : 沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島。
生 育 環 境 : 水田や流れの緩やかな水路などの浅い水中に生える。
生 育 状 況 : 各地に点々と産するが、埋立により生育地が減少している。
減 少 の 要 因 : 池沼、水田の減少。除草剤の使用。もともと自生地に限られる。
備 考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文 献 : 赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究 (与那国島・石垣島). “事業年報 (平成 27 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和 名 : マツバウミジグサ
分 類 : アマモ科 (APG 科名: ベニアマモ科)
学 名 : *Halodule pinifolia* (Miki) den Hartog
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形 態 の 特 徴 : 海底の砂泥地に生える多年草。根茎は分枝し、各節から 1 本の直立茎と 2～4 本の根を出す。葉身は長線形、長さ 5～17cm、幅 0.5～2mm、3 脈があり、先端は楕円状、不規則な短い鋸歯がある。葉鞘は扁平で、長さ 1.5～3cm。雌雄異株、花は葉の基部から出る花梗に単生する。
分 布 域 (県 外) : フィリピン、ベトナム、インド、タイ、インドネシア、マレーシア、ニューギニア、オーストラリア、ミクロネシア、ポリネシア、北アメリカ太平洋沿岸。
県 内 の 分 布 : 沖縄島、宮古島、石垣島、西表島。
生 育 環 境 : 潮下帯上部から深いところに生え、ホソバウミジグサより深い場所に生える。
生 育 状 況 : 沖縄県では浅海の埋立が進んでおり、本種の分布情報が十分には得られないまま、自生地が消失し

ている。

学 術 的 価 値 : 沖縄島は基準産地であり、分布域の北限である。

減 少 の 要 因 : 自生地の開発。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文 献 : 大場達之・宮田昌彦, 2007. 日本海草図譜. 北海道大学出版会, 114pp.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣

和 名 : **ホソバウミジグサ**

分 類 : アマモ科 (APG 科名: ベニアマモ科)

学 名 : *Halodule tridentata* (Steinh.) Unger

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 海底の砂泥地に生える多年草。根茎は分枝し、各節から1本の直立茎と2~4本の根を出す。葉身は長線形、長さ3.5~8cm、幅0.5~1mm、3脈があり、先端は中央部と両縁が突出して3尖頭となり、不規則な短い鋸歯がある。葉鞘は扁平で、長さ1~2cm。雌雄異株、花は葉の基部から出る花梗に2個着く。

分 布 域 (県 外) : インド洋、太平洋の熱帯域に広く分布する。

県 内 の 分 布 : 沖縄島、宮古島、石垣島、西表島。

生 育 環 境 : 潮間帯上部に生え、干潮時には空中に露出する。

生 育 状 況 : 沖縄県では浅海の埋立が進んでおり、本種の分布情報が十分には得られないまま、自生地が消失している。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。

減 少 の 要 因 : 自生地の開発。

備 考 : ホソバウミジグサは、これまでウミジグサ (ニラウミジグサ) の葉が細い型として認識されていたが、最近独立種として取り扱われることが多くなった。ニラウミジグサとの雑種は、ホソニラウミジグサ *H. x linearifolia* Ohba et Miyata と呼ばれ、沖縄島が基準産地とされるが、裸名のままである。

文 献 : 大場達之・宮田昌彦, 2007. 日本海草図譜. 北海道大学出版会, 114pp.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣

和 名 : **ウミジグサ (ニラウミジグサ)**

分 類 : アマモ科 (APG 科名: ベニアマモ科)

学 名 : *Halodule uninervis* (Forssk.) Asch.

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形 態 の 特 徴 : 海底の砂泥地に生える多年草。根茎は分枝し、各節から1本の直立茎と2~4本の根を出す。葉は線形、長さ5~12cm、幅2.2~3mm、鎌状に曲がることが多く、3脈があり、先端は中央部と両縁が突出して3尖頭となり、不規則な短い鋸歯がある。葉鞘は扁平で、長さ1~4cm。雌雄異株、花は葉の基部から出る花梗に2個つく。

分 布 域 (県 外) : インド洋、太平洋の熱帯域に広く分布。

県内の分布 : 沖縄島、宮古島、石垣島、西表島。
 生育環境 : 潮下帯上部に生え、大潮の干潮時にも干上がることはない。
 生育状況 : 沖縄県では浅海の埋立が進んでおり、本種の分布情報が十分には得られないまま、自生地が消失している。
 学術的価値 : 分布域の北限である。
 減少の要因 : 自生地の開発。
 備考 : ニラウミジグサとの雑種は、ホソニラウミジグサ H. x *linearifolia* Ohba et Miyata と呼ばれ、沖縄島が基準産地とされるが、裸名のままである。マツバウミジグサとの雑種は、マツニラウミジグサ H. x *serratifolia* Ohba et Miyata と呼ばれ、石垣島が基準産地とされるが、裸名のままである。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
 文献 : 大場達之・宮田昌彦, 2007. 日本海草図譜, 北海道大学出版会, 114pp.
 執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : シオニラ (ボウバアマモ)
 分類 : アマモ科 (APG 科名: ベニアマモ科)
 学名 : *Syringodium isoetifolium* (Asch.) Dandy
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 海底の砂泥地に生える多年草。根茎は分枝し、各節から 1 本の直立茎と 1~数本の根を出す。葉は直立茎に 2~4 枚が互生する。葉身は円筒形、長さ 10~30cm、幅 2mm 程度、先端は平頭または小突頭。葉鞘は円筒形。雌雄異花、集散花序は直立茎の端部につき、2 列に包葉と花を着ける。雌花には 2 枚の心皮があり、雄花には 2 個の葯がある。
 分布域 (県外) : 奄美大島以南、インド洋、太平洋中部~西部の熱帯域に広く分布。
 県内の分布 : 沖縄島、宮古島、石垣島、西表島。
 生育環境 : 潮下帯上部に生える。
 生育状況 : 局所的には個体数は多いが、埋立などにより多くの自生地が失われている。
 減少の要因 : 自生地の開発。
 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 大場達之・宮田昌彦, 2007. 日本海草図譜, 北海道大学出版会, 114pp.
 執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : ミズヒキモ
 分類 : ヒルムシロ科 (APG 科名: ヒルムシロ科)
 学名 : *Potamogeton octandrus* Poir. var. *miduhikimo* (Makino) Hara
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 沈水性の多年草。茎は細長く、よく分枝する。葉は 2 形で、浮葉は長楕円形、沈水葉は糸状。流水中では沈水葉だけのことが多いが、花時には必ず浮葉を出す。花は花被がなく、水上に伸び出した穂状花序に集まってつく。果実には短い花柱が残り、背面の稜にはごく小さな突起があるだけで、とさか状とはならない。

分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、馬毛島、奄美大島、朝鮮、中国、インド。
県内の分布：沖縄島、西表島、与那国島。
生育環境：水田や水路などの淡水中に生える。
生育状況：与那国島では数ヶ所に産することが2004年に確認されているが、個体数は少ない。西表島でも1ヶ所で確認されているが（比嘉，1983）、現状不明。沖縄島では確認することができず、現状不明。
減少の要因：池沼、水田の減少。除草剤の使用。
備考：竹富町希少野生動植物種(2017年)。IUCNカテゴリー：Least Concern (LC)*。*種 *Potamogeton octandrus* として評価。

文献：比嘉清文，1983. 琉球植物分布メモ I. 沖縄生物学会誌，(21)：79-80.

執筆者名：横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名：リュウノヒゲモ
分類：ヒルムシロ科 (APG 科名：ヒルムシロ科)
学名：*Potamogeton pectinatus* L.
カテゴリー：絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴：沈水性の多年草。茎は細く、多く分枝する。葉はすべて沈水葉で、狭線形、長さ5~10 cm、基部は托葉と合着して葉鞘となり、茎を抱く。花は長い柄のある穂状花序に疎らにつく。花が終わると柄はらせんに巻いて果実を水中に引き込む。

分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、喜界島、沖永良部島、世界の温帯~熱帯。
県内の分布：沖縄島、久米島、南大東島、与那国島。
生育環境：淡水~汽水域の水中に生える。
生育状況：与那国島では田原川の水源地の小川に生えているのが1959年に発見された。一時、水路の改修のために1973年までには全滅した（初島・金井，1974）とされていたが、近年他の場所で再確認された。沖縄島では1987年に観察されている（池原，1989）が、まれである。南大東島では大池にやや豊産することが、2000年に確認されている。
減少の要因：河川の改修。もともと自生地が少ない。
備考：IUCNカテゴリー：Least Concern (LC)。

文献：初島住彦・金井弘夫，1974. 与那国島植物新発見. 国立科学博物館専報，(7)：115-120.
池原直樹，1989. 沖縄植物野外活用図鑑 第9巻. 新星図書出版，101.

執筆者名：横田昌嗣*・北原 孝*・尾川原正司*・横田昌嗣(追補)

和名：イトモ
分類：ヒルムシロ科 (APG 科名：ヒルムシロ科)
学名：*Potamogeton pusillus* L.
カテゴリー：絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴：小形の多年草。茎も葉も非常に細い。葉はすべて沈水葉で狭線形、長さ2~6 cm。花は小さく、水上に伸び出した長い柄の先にかたまつてつき、短い穂状花序をつくる。

- 分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、世界の温帯～暖帯。
県内の分布：沖縄島、渡名喜島、宮古島、石垣島。
生育環境：池や流水中に生える。
生育状況：沖縄島と石垣島では各1ヶ所で記録があるが、現状は不明。他の島では近年は全く見つかって折らず、現状は不明。
減少の要因：自生地の埋立。もともと自生地が少ない。
備考：竹富町希少野生動植物種（2017年）。IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。

執筆者名：横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名：カワツルモ
分類：ヒルムシロ科 (APG 科名: カワツルモ科)
学名：*Ruppia maritima* L.
カテゴリー：絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)

- 形態の特徴：沈水性の繊細な多年草。茎も葉もきわめて細い。葉は狭線形、長さ5～10 cm。葉腋から伸びた細い花柄の先に、小形の花を2個だけつける。
分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、種子島、奄美大島、世界中に広く分布。
県内の分布：沖縄島北～中部、石垣島、西表島、与那国島。
生育環境：河口部の汽水域に生える。
生育状況：沖縄島では国頭村、本部半島、中城湾の各1ヶ所に産することが知られているが、現在も生育が確認されるのは本部半島と中城湾だけである。石垣島では1ヶ所で確認されているが、河川の開発と水質の悪化で減少している。与那国島では1ヶ所で確認されている。西表島の現状は不明。
減少の要因：水質の悪化。河川の開発。
備考：本種には、果実が斜形になる var. *japonica* と、斜形にならない var. *maritima* が区別されており（角野, 1994）、本部半島のもは var. *japonica* であることが確認されている。本部半島の自生地は、沖縄県指定の天然記念物として保護されている。竹富町希少野生動植物種（2017年）。IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。

- 文献：角野康郎, 1994. 日本水草図鑑. 文一総合出版, 48.
香村真徳・久場安次, 1976. 天然記念物「塩川」の植物. “塩川動態調査報告”, 沖縄県教育委員会, 38-67.
大場達之・宮田昌彦, 2007. 日本海草図譜. 北海道大学出版会, 114pp.

執筆者名：横田昌嗣*・北原 孝*・尾川原正司*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名：イトクズモ
分類：ヒルムシロ科 (APG 科名: ヒルムシロ科)
学名：*Zannichellia palustris* L.
カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 II 類 (VU)

- 形態の特徴：沈水性の多年草。茎や葉はきわめて細い。葉は2～3個ずつ輪生状につき、狭線形で長さ5 cm、糸くずのようである。雌雄同株で、雄花と雌花が1個ずつ同じ葉腋にならんでつく。受粉は水中でおこる。雌蕊の花柱の先はラップ状に広がっていて、水中に落ちてくる花粉を受け止める。果実は長

さ約 2 mm で三日月形、背面に波形の稜がある。

- 分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、朝鮮。
県内の分布：沖縄島、西表島、与那国島。
生育環境：淡水または汽水中に生える。
生育状況：近年は確認されておらず、現状は不明。
減少の要因：自生地の埋立。水質の悪化。もともと自生地が限られている。
備考：竹富町希少野生動植物種（2017年）。IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。

文献：大場達之・宮田昌彦，2007. 日本海草図譜. 北海道大学出版会，114pp.

執筆者名：横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名：コアマモ
分類：ヒルムシロ科 (APG 科名：アマモ科)
学名：*Zostera japonica* Asch. et Graebn.
カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：該当なし

- 形態の特徴：浅海に生える沈水植物。根茎は横走して分岐し、葉を2列に互生し、節間は1~3 cm。葉は狭線形、長さ4~30 cm、幅1~1.5 mm、全縁、3脈があり、鈍頭、基部にある葉鞘は長さ1.2~6 cm、辺縁は内曲する。肉穂花序は鞘状苞に包まれ、雌雄同株で、花は2列に互生し、雄花は花序の先端につき、葯は1個、雌花は花序の中央につき、子房は1個。種子は長楕円形、長さ2 cm。
分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、種子島、奄美大島、サハリン、カムチャッカ、中国南部、ベトナム、北アメリカ西岸。
県内の分布：沖縄島、宮古島、石垣島、西表島。
生育環境：砂地の浅海に生え、汽水域にも生えることがある。
生育状況：自生地は沖縄島で十数ヶ所知られるが、その大半はごく小規模な群落で、50 m 四方以上の群落は数ヶ所しか確認されていない。宮古島1ヶ所、石垣島1ヶ所知られるが、量は少ない。西表島の現状は不明。浅海の埋立、海水の汚染により急激に減少している。
学術的価値：琉球列島では限られた分布を示し、植物地理学上貴重である。
減少の要因：浅海の埋立。海水の汚染。
備考：竹富町希少野生動植物種（2017年）。IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。

文献：環境省，2003. 平成14年度ジュゴンと藻場の広域的調査報告書. 環境省，308pp.
環境省，2004. 平成15年度ジュゴンと藻場の広域的調査報告書. 環境省，255pp.
当真 武，1999. 琉球列島の海草—I 種類と分布. 沖縄生物学会誌，(37)：75-92.
Tsuda, R. T. & S. Kamura, 1990. Comparative review on the floristics, phytogeography, seasonal aspect and assemblage patterns of the seagrass flora in Micronesia and the Ryukyu Islands. *Galaxea*, 9: 79-93.

執筆者名：横田昌嗣

-
- 和名：イトトリゲモ
分類：イバラモ科 (APG 科名：トチカガミ科)
学名：*Najas japonica* Nakai

カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴：繊細な沈水植物。茎は分枝し、葉は5輪生し、長さ1.5 cm、幅0.2 mm、葉縁に小さい歯牙があり、葉鞘は長さ1.5 mm、円形で歯牙がある。雌雄同株で、雄花に苞鞘があるが、雌花にはない。果実は披針形で、長さ2 mm、幅0.5 mm、表面の細胞は長線形。

分布域(県外)：本州、四国、九州、中国東北部。

県内の分布：石垣島、西表島、与那国島、小浜島。

生育環境：低地の池や水田の水中に生える。

生育状況：イバラモ属の他種(ホッスモ、トリゲモ、サガミトリゲモなど)と混生し、形態が類似しているの
で混同されていたが、最近になって自生が確認された(内山, 1992)。自生地となる池や水田は埋立
が進んでおり、イバラモ属の他種を含め、急激に減少している。西表島の水田で2017年に発見され
ている。

学術的価値：分布域の南限である。

減少の要因：溜池や水田の埋立。もともと自生地が少ない。農薬の散布。

備考：IUCNカテゴリー：Least Concern (LC)*。**Najas gracillima*として評価。

文献：内山 寛, 1992. 沖縄・八重山諸島のイバラモ属植物. 水草研究会会報, 48: 6-8.
赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究(与那国島・石垣島).
“事業年報(平成27年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44.

執筆者名：横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名：イバラモ

分類：イバラモ科 (APG 科名: トチカガミ科)

学名：*Najas marina* L.

カテゴリー：絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：沈水植物。茎は棘を散生するかまたは平滑、太く、扁平で、よく分岐する。葉は硬く、対生または
輪生し、長さ2~4 cm、幅2~3 mm、各側9~11個の刺歯があり、葉鞘は広円形、全縁。雌雄異株。
果実は楕円形~長楕円形、長さ4~6 mm、種子の表面には凹点がある。

分布域(県外)：北海道、本州、四国、九州、種子島、喜界島、台湾、全世界。

県内の分布：南大東島、池間島。

生育環境：やや気水性の池沼の水中に生える。

生育状況：南大東島では、大池を中心に水路でつながった幾つかの池に産する。池間島では近年新たに報告さ
れた(佐々木, 2000)。南大東島の大池は国指定の天然記念物に指定されており、個体数はやや多い
が、他の池沼の多くは埋立が進み、生活排水の流入で一般的に生育環境が悪化している。池間島の
池は、埋立が進み、周辺の湿地と共に面積が減少している。

減少の要因：もともと自生地が限られる。池の埋立。水質悪化。農薬散布。

備考：IUCNカテゴリー：Least Concern (LC)。

文献：佐々木健志, 2000. 池間島から採集されたイバラモ *Najas marina* L. (Najadaceae)の記録. 沖縄生
物学会誌, (38) : 69-71.

執筆者名：横田昌嗣

和名 : トリゲモ
分類 : イバラモ科 (APG 科名: トチカガミ科)
学名 : *Najas minor* All.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 繊細な沈水植物。茎は細く、よく分岐する。葉は 3 輪生し、長さ 1~2 cm、幅 0.5 mm、葉縁に小さい歯牙があり、葉鞘は長さ 1.5 mm、半円形~切形で、縁に小歯牙がある。雌雄同株で、雄花に苞鞘があるが、雌花はなく、雄花の葯は 1 室。果実は披針形で、長さ 3 mm、幅 0.7 mm、表面の細胞は横長の長楕円形。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美諸島、世界の温帯~熱帯。

県内の分布 : 沖縄島、座間味島、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 低地のため池、水田、水路などの水中に生える。

生育状況 : 本種はかつてはやや普通に見られたが、近年は水田の減少とともに急減している。八重山諸島ではやや多いが、水田の開発や農薬散布などにより減少が著しい。石垣島と与那国島ではそれぞれ数ヶ所で記録されている。沖縄島ではまれである。座間味島と西表島では、2017 年にそれぞれ 1 ヶ所で確認されている。

減少の要因 : 池の埋立。水田の開発。農薬散布。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ホンゴウソウ
分類 : ホンゴウソウ科 (APG 科名: ホンゴウソウ科)
学名 : *Sciaphila japonica* Makino
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 多年生のごく小形の腐生植物。全体に紫褐色である。地上茎は極めて細く、高さ 3~13 cm。葉は鱗片状で、長さ 1.5 mm 前後。茎頂や枝先に各々 4~15 個の花を総状につける。雌花は花序の下部に、雄花は上部につく。雄蕊の葯隔には針状の突起がある。

分布域 (県外) : 本州 (関東以西)、四国、九州、種子島、屋久島。

県内の分布 : 沖縄島、久米島、石垣島、西表島、魚釣島。

生育環境 : 山地林内の落ち葉の間に生える。

生育状況 : 生育地が限られ、個体数も少ない。沖縄島、石垣島、西表島では近年もそれぞれ少数ヶ所で確認されているが、久米島と魚釣島の現状は不明。魚釣島では、野生化ヤギの影響で森林生態系が大きく変わっている可能性が高く、存続が危惧される。

学術的価値 : 分布域の南限である。

減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地が少ない。野生化ヤギの増殖による環境変化と踏みつけ。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : イシガキソウ

分類 : ホンゴウソウ科 (APG 科名: ホンゴウソウ科)

学名 : *Sciaphila multiflora* Giesen

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 多年生のごく小形の腐生植物。茎は高さ 5~8cm、分枝しないか、まれに分枝し、全体に赤紫色を帯び、葉はなく、10~15 花をつける。雌雄異花で、雄花は雌花と雌花の間につき、径 1mm、花被片は 6 個で、3 個は長く、3 個は短く、雄蕊は 3 個、短い花糸がある。雌花の花被片は雄花と同様で、心皮は 15~18 個。

分布域 (県外) : フィリピン、ニューギニア、ミクロネシア。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 海岸の常緑樹林の林床に生える。

生育状況 : 1ヶ所の自生地が知られており、2010年に約100個体の生育が確認されている。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の自生地である。マレーシア系の植物で、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。

文献 : Ohashi, H., H. Kato, S. Kobayashi & J. Murata, 2008. A revision of Triuridaceae of Japan. J. Jpn. Bot. 83: 20-35.

執筆者名 : 横田昌嗣・仲宗根忠樹

和名 : オモトソウ

分類 : ホンゴウソウ科 (APG 科名: ホンゴウソウ科)

学名 : *Sciaphila sugimotoi* Suetsugu et T.Nishioka

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年生のごく小型の腐生植物。茎は高さ 5~10cm、分枝しないか、時に基部で分枝し、全体に赤紫色を帯びる。葉は鱗片状で、長さ 1.5mm。茎上部に 5~7cm の花序をつけ、10~35 個の小さな花をつける。雄花は花序の上部に、雌花を下部につける。花は径 2mm、雄花の花被片は 6 個で等長、雄蕊は 3 個で、葯は 4 裂し、花糸はない。雌花の心皮は多数。

分布域 (県外) : なし。

県内の分布 : 石垣島 (固有)。

生育環境 : 低地の常緑樹林の陰湿な林床に生える。

生育状況 : 2ヶ所の自生地が知られているが、2017年の調査では1ヶ所で数個体が確認されただけで、他の1ヶ所では確認することができなかった。

学術的価値 : 2017年に記載された新種で (Suetsugu & Nishioka, 2017)、石垣島の固有種である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。

文献 : Suetsugu, K. & T. Nishioka, 2016. *Sciaphila sugimotoi* (Triuridaceae), a new mycoheterotrophic plant from Ishigaki Island, Japan. Phytotaxa, 314(2): 279-284.

執筆者名 : 横田昌嗣・阿部篤志

和名 : タカクマソウ

分類 : ホンゴウソウ科 (APG 科名: ホンゴウソウ科)

学名 : *Sciaphila takakumensis* Ohwi

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 多年生のごく小形の腐生植物。茎の高さ 5~10 cm、全体に赤紫色を帯びる。葉は鱗片状となり、卵形で長さ 1~2 mm。茎上部に長さ 2~5 cm ほどの総状花序を出し、4~10 個の小さな花をつける。この花序の上部には雄花が、下部には両性花がつく。

分布域 (県外) : 九州 (鹿児島県)。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地林内の落ち葉の間に生える。

生育状況 : 自生地は 3ヶ所知られるが、その内の 1ヶ所では近年は確認されない。現在生育が確認される他の 1ヶ所は私有地で、開発される恐れがある。他の 1ヶ所は登山道として整備され、踏みつけられる恐れがある。いずれの自生地も個体数はきわめて少ない。

学術的価値 : 分布域の南限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。

保全対策 : 生育地は天然記念物として指定し、保存する必要がある。

備考 : 自生地の一つは国指定の天然記念物である。

文献 : 島袋 曠・新島義龍・新城和治・宮城康一・宮城朝章・真志喜文子・日越国昭・天願敏男・新納義馬, 1988. 田港御願の植物群落. “国頭郡天然記念物緊急調査”, 沖縄県教育委員会, 25-58.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・仲間正和(追補)

和名 : ウエマツソウ

分類 : ホンゴウソウ科 (APG 科名: ホンゴウソウ科)

学名 : *Sciaphila tosaensis* Makino

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 多年生の小さな腐生植物。全体に赤紫色をおびる。茎の高さは 6~10 cm、葉は鱗片状で長さ約 3 mm。茎上部の総状花序に小さな 3~6 花をつけるが、このうち上部のものは雄花、下部のものは雌花である。

分布域 (県外) : 本州 (中部以西)、四国、九州、屋久島。

県内の分布 : 沖縄島、儀志布島、久米島、西表島。

生育環境 : 林床の落ち葉の間に生える。

生育状況 : 自生地は少なく、個体数もきわめて少ない。

減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 石川 敦・石田 仁, 1988. 琉球列島植物分布資料 5. 沖縄生物学会誌, (26) : 31-34.

小林史郎, 1999. 八重山諸島新産のウエマツソウとシナヤブコウジ. 植物分類・地理, 50: 248-250.

執筆者名 : 横田昌嗣*・小林史郎*

和名 : コショウジョウバカマ (ヒメショウジョウバカマ、シマショウジョウバカマ)

分類 : ユリ科 (APG 科名: シュロソウ科)

学名 : *Heloniopsis kawanoi* (Koidz.) Honda

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。根茎は短く、8~25枚の葉をロゼット状に根生する。根生葉は長さ1.5~6cm、狭いへら形。花茎は長さ4~15cmで、先端に白色の花を2~4個つける。

分布域(県外) : 奄美大島、徳之島。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の川沿いのやや湿った崖面に生える。

生育状況 : 生育場所が限られており、個体数も少ない。石垣島と西表島では比較的多いが、沖縄島では極めてまれで、国頭村と東村の4河川の5ヶ所にそれぞれ数個体確認されているだけである。

学術的価値 : 琉球列島の固有種。ショウジョウバカマ属は東アジアの温帯系の植物で、琉球列島の植物相の成立を考える上で貴重である。

減少の要因 : 森林の伐採。ダム建設による水没。園芸用の採集(最近採集品が販売されている)。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-188.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : オオシロショウジョウバカマ

分類 : ユリ科 (APG 科名: シュロソウ科)

学名 : *Heloniopsis leucantha* (Koidz.) Honda

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は太く、8~17枚の葉をロゼット状に根生する。根生葉はへら状倒披針形で長さ10~25cm。花茎は長さ7~27cm、先に7~20個の花を総状につける。花は白色で大きく、花被片は長さ15~20mmになる。

分布域(県外) : 徳之島。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島

生育環境 : 川沿いの湿った崖面に生える。

生育状況 : 沖縄島では恩納村以北(本部半島を除く)の十数ヶ所で確認されている。石垣島と西表島では、それぞれ数ヶ所で確認されているが、生育地は限られ、個体数は少ない。

学術的価値 : 琉球列島の固有種。

減少の要因 : 森林の伐採。ダム建設による水没。園芸用の採集。もともと自生地が限られている。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成5年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.

沖繩総合事務局北部ダム事務所, 1995. 羽地大川生物環境調査データ. 沖繩建設弘済会, 3-12, 103-113.

沖繩総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成6年度沖繩本島北部地域生物環境調査データ. 沖繩建設弘済会, 1-6.

沖繩総合事務局北部ダム事務所, 1997. 平成7年度沖繩本島北部地域生物環境調査データ. 沖繩建設弘済会, 1-7.

沖繩総合事務局北部ダム事務所, 1998. 平成8年度沖繩本島北部地域生物環境調査データ. 沖繩建設弘済会, 1-6.

沖繩総合事務局北部ダム事務所, 1998. 奥間川生物環境調査データ. 沖繩建設弘済会, 3-9, 99-112.

沖繩総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖繩建設弘済会, 5-13, 151-168.

沖繩総合事務局北部ダム事務所, 1998. 与那川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-10, 101-117.

横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖繩生物学会誌, (35) : 55-64.

横田昌嗣・宮城康一, 1988. 琉球列島植物分布資料 6. 沖繩生物学会誌, (26) : 35-37.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : キバナノヒメユリ (キバナスゲユリ)

分類 : ユリ科 (APG 科名: ユリ科)

学名 : *Lilium callosum* Sieb. et Zucc. var. *flaviflorum* Makino

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 多年草。茎は高さ 40~100 cm。葉は線形で柄がない。茎の上部に黄色~橙黄色の花を 2~9 個つける。花は横向きまたは斜め下向きに開き、花被片は長さ 3~4 cm で平開し、先が反りかえる。

分布域(県外) : 九州(長崎県)。

県内の分布 : 沖繩島、久米島、渡名喜島。

生育環境 : 低地の原野、日当たりの良い草地にはえる。

生育状況 : 沖繩島では北部で 2004 年に、南部 2ヶ所で最近も確認されているが、個体数はきわめて少ない。以前確認された場所の幾つかは、遷移が進み森林になったため消失している。那覇市の 1ヶ所では、保護活動が行われており、十数個体が維持されている。渡名喜島では 2004 年に 2ヶ所で確認されているが、遷移の進行で衰退しつつある。久米島では 3ヶ所で確認されていたが、その内の 2ヶ所では現在は確認されない。他の 1ヶ所では 2005 年に 50 個体以上が確認されたが、やはり遷移の進行で激減している。

減少の要因 : 土地開発。園芸用の採集。遷移の進行。公園の草刈り。もともと自生地が少ない。

保全対策 : 本種にとって最も深刻な減少の要因は、遷移の進行で、かつては茅場として利用されていた場所が刈り取りされなくなり、遷移が進行して減少している。本種の個体群を維持するためには、草原を維持するために適切な草刈りが必要である。人工増殖も検討する必要がある。

備考 : 基本変種ノヒメユリは花が赤橙色で、四国、九州、台湾、中国、朝鮮、アムールに分布する。日本産ユリ属の中で花のもっとも小さな種である。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖繩県, 1-39.

平田義浩, 1989. 佐敷町産種子植物. “佐敷町史, 三自然”, 佐敷町史編集委員会(編), 佐敷町, 93-196.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ヒメヤブラン

分類 : ユリ科 (APG 科名: クサスギカズラ科)

学名 : *Liriope minor* (Maxim.) Makino

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草で、根茎は太短く、長い匍枝を出す。葉は根生し、長さ 10~20 cm、幅 2~3 mm。花茎は長いものは高さ 20 cm に達し、先に淡紅紫色の花を疎らにつける。果皮が成長の途中で萎縮してしまうため、種子は露出して熟し、球形で黒紫色になる。

分布域(県外) : 北海道西南部、本州、四国、九州、トカラ列島、奄美諸島、台湾、朝鮮、中国、フィリピン。

県内の分布 : 沖縄島、粟国島、渡名喜島、久米島。

生育環境 : 海岸の草地や林縁に生える。

生育状況 : 沖縄島では名護市と金武町で 4ヶ所の自生地が知られるが、大半は米軍演習地で、開発される可能性がある。渡名喜島では 2005 年に 1ヶ所に少数が確認されている。久米島の現状は不明。粟国島では 2015 年に確認されている。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 天野鉄夫, 1981. 粟国島植物目録. 粟国村教育委員会, 39pp.

天野鉄夫・新納義馬, 1980. 億首川の紅樹林及びその周辺の植物. “沖縄県自然環境保全地域指定候補地学術調査報告, 伊是名城跡・大浦川のマングローブ林・億首川のマングローブ林”, 沖縄自然研究会 (編), 沖縄県, 79-100.

宮脇 昭・仲田栄二, 2001. 外来植生の在来植生に対する影響と対策の検討. “渡名喜島伝統集落周辺域における自然的歴史的景観の保存活用調査”, (財)日本ナショナルトラスト, 東京, 37-46, 77-93.

阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 II (粟国島・渡名喜島). 日本植物園協会誌, (51): 80-85.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : コヤブランモドキ

分類 : ユリ科 (APG 科名: クサスギカズラ科)

学名 : *Liriope muscari* (Decne.) L. H. Bailey var. *stolonifera* Hatusima

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、葉を束生し、しばしば地中に長い匍枝をだし、マット状の大きな群落を作る。葉は線形、長さ 60 cm になる。花茎は葉とほぼ同長で、花穂は長さ 20 cm になり、花を数個ずつ束生する。花は淡紫色、花被片は 6 個、楕円形、長さ 4 mm。果実は球形、黒熟する。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 海岸の風衝草原、海崖、海岸林の林床に生える。

生育状況 : 数ヶ所に自生することが確認されており、個体数は多いので、今すぐ絶滅する恐れはないが、自生地の一部はビーチとして利用され変更が進んでいる。他の自生地も開発の恐れがある。

- 学 術 的 価 値 : 石垣島の固有変種である。
- 減 少 の 要 因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。
- 保 全 対 策 : 自生地の一部は観光地となっているが、公園や景勝地として利用する際に自生地の保全を配慮する必要がある。
- 備 考 : 初島・天野 (1994) によって認識されたが、未記載である。基本変種のヤブランは、本州、四国、九州、琉球列島の他の島嶼、台湾、中国、フィリピンに分布するが、形態的な変異が大きく、本変種や、竹富町の小島嶼に産するコヤブランを含めて分類学的な再検討が必要である。
- 文 献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 305.
- 執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

-
- 和 名 : ヨナグニノシラン
- 分 類 : ユリ科 (APG 科名: クサスギカズラ科)
- 学 名 : *Ophiopogon reversus* C. C. Huang
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形 態 の 特 徴 : 常緑の多年草で、根茎は太短く、葉を束生する。葉は長さ 40~55 cm、幅 7~12 mm。花茎は長さ 15~30 cm で、先端部約 5 cm に白色の花を疎らにつけ、花茎の上部はノシランのように白色を帯びない。小花梗は長さ 2~4 mm、苞葉は長さ 4~11 mm、幅 1 mm。花被片はほぼ同形、長さ 6~7 mm、幅 1.5~2.5 mm、筒状部は長さ 1~1.5 mm でノシランより短く、葯は長さ 3 mm、黄色であり、淡緑色~黄緑色のノシランとは異なる。
- 分 布 域 (県 外) : 台湾、中国南部 (海南島)。
- 県 内 の 分 布 : 与那国島。
- 生 育 環 境 : 山地の常緑樹林の林床に生える。
- 生 育 状 況 : 2ヶ所で確認されているが、自生地はごく狭い範囲に限られる。類似する生育環境にはヤブランがより多く生育している。
- 学 術 的 価 値 : 日本で唯一の産地であり、分布の北限である。
- 減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が少ない。
- 保 全 対 策 : 自生地が限られるので、開発されないように保全する必要がある。また盗掘の恐れがあるので、自生地の詳細の公表は避けるべきである。
- 文 献 : Tanaka, N., 2001. Taxonomic notes on *Ophiopogon* (Convallariaceae) of East Asia (II). J. Jpn. Bot., 76: 151-165.
- 執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・横田昌嗣(追補)・村松稔(追補)

-
- 和 名 : アラガタオオサンキライ (アラガタサンキライ)
- 分 類 : ユリ科 (APG 科名: シオデ科)
- 学 名 : *Smilax bracteata* Presl var. *verruculosa* (Merr.) T. Koyama
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

- 形 態 の 特 徴 : 常緑のつる性低木。茎には太い棘が散生する。葉は卵状長楕円形~卵円形、長さ幅は 13 cm になり、葉柄は長さ 1~2.5 cm、托葉の先は巻ひげとなる。複散形花序は腋生し、雄花と雌花をつける。

液果は球形、径5 mm。基本変種のサツマサンキライと比べて、小枝に粒状突起を密布し、粗渋となることで異なる。

- 分布域（県外）：奄美大島、台湾、フィリピン、インドシナ、マレーシア。
- 県内の分布：沖縄島北部。
- 生育環境：山地の常緑樹林に生え、谷間の陰湿な林内や、やや海拔が高い地域の自然林で見られる。
- 生育状況：国頭村の10ヶ所以上で確認されているが、個体数は少ない。サツマサンキライと混生し、中間的な形態を示す個体もある。台湾では、やや海拔の高いところに生える (Koyama, 1978)。最近、鹿児島県奄美大島の2ヶ所でも確認することができた。
- 学術的価値：国内では中琉球の奄美大島と沖縄島に分布が限られ、南琉球に分布せず、植物地理学上重要である。
- 減少の要因：もともと自生地と個体数が限られている。森林の伐採。
- 備考：基本変種のサツマサンキライとよく似ているため、見過ごされている可能性がある。
- 文献：Koyama, T., 1978. Flora of Taiwan, Vol. 5. Epoch Publishing Co., Taipei, 113-114.

執筆者名：横田昌嗣*・山城 考*・新里孝和*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・比嘉清文(追補)

和名：タイワンホトトギス

分類：ユリ科 (APG 科名: ユリ科)

学名：*Tricyrtis formosana* Baker

カテゴリー：絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴：常緑の多年草。茎は高さ30 cmになり、数枚の葉をつける。葉は倒披針形、長さ10~20 cm、上面に光沢があり、斑点が入る。しばしば葉腋に無性芽をつける。総状花序は頂生し、数花を疎らにつける。花は淡紫色で、斑点が散生し、萼片と花弁は長さ2 cm。

- 分布域（県外）：台湾。
- 県内の分布：沖縄島北部、西表島。
- 生育環境：沖縄島では、山地上部の沢筋の明るい斜面や、集落周辺の水田の畦に生える。西表島では、山地の自然林内の滝の崖面に生える。
- 生育状況：沖縄島の自生地は1ヶ所のみ知られ、これまで知られた自生地は集落に近い水田の畦に生えていたことから栽培品が逸出した可能性が考えられたが、今回の調査で同じ集水域の山地上部にかなり広範囲にわたって生育することが判ったため、自生である可能性が高まった。西表島ではこれまでに5ヶ所で発見されている。西表島の自生地は国立公園内にあり開発の恐れはないが、非常に特殊な環境に限って生え、個体数もごく少ないので、採集により絶滅する可能性がある。
- 学術的価値：分布域の北限であり、西表島では数少ない東アジアの温帯系の種で、植物地理学上貴重である。西表島のものは、台湾に産する典型的なタイワンホトトギスとは形態が異なり、沖縄島のものも含めて詳しい調査が必要である。
- 減少の要因：園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。
- 備考：竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

- 文献：Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 1: 37-45.
- 初島住彦, 1975. 琉球植物誌 (追加・訂正). 沖縄生物教育研究会, 那覇, 907.

執筆者名：横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ルゾンヤマノイモ
分類 : ヤマノイモ科 (APG 科名: ヤマノイモ科)
学名 : *Dioscorea luzonensis* Schauer
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑のつる性多年草。地中に長さ 20 cm になる塊茎がある。茎は無刺で、幼个体では葉を互生するが、成熟个体では葉を対生する。葉は狭心形、5~7 脈があり、長さ 6~15 cm、無毛。雌雄異花で、花序は腋生し、多数の花をつける。室果は長さ 2 mm、翼がある。

分布域 (県外) : フィリピン。

県内の分布 : 北大東島、南大東島。

生育環境 : 石灰岩地の自然林内に生える。

生育状況 : かつてはかなりの个体数があったようであるが、地下茎を食用にするために乱獲され、現在は小形个体が残されるだけである。北大東島では 3 ヶ所、南大東島では 2 ヶ所の自生地が知られるだけである。

学術的価値 : 日本で唯一の産地であり、著しい隔離分布を示す。花や果実が確認されておらず、むかごで繁殖しているようで、分類学的な再調査が必要である。

減少の要因 : 自然林の開発。食用の採集。もともと自生地と个体数が少ない。

備考 : 北大東島の自生地は、国指定の天然記念物として保護されているが、自生地の近隣までサトウキビ畑の開墾が進み、生育環境は悪化している。

文献 : 初島住彦, 1973. 大東島の植物. “大東島天然記念物特別調査報告”, 文化庁, 9-42.
西浜良修, 2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—. 南大東村教育委員会, 77pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)・城間盛男(追補)

和名 : アケビドコロ
分類 : ヤマノイモ科 (APG 科名: ヤマノイモ科)
学名 : *Dioscorea pentaphylla* L.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : つる性の多年草。茎は稜があり、刺が少しあり、黄褐色の毛を密生し、しばしばむかごをつける。葉は 5 または 3 個の小葉からなる掌状複葉。花は沖縄島では 11 月上旬に咲き、小形で黄緑色、葉腋に出た総状花序にやや密につく。雄花序は枝の先の方につき、それより下方の葉腋に雌花序がつく。冬に葉腋に球形のむかごをつける。

分布域 (県外) : インドネシア、フィリピン、マレーシア、インド。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 低地の林縁に生える。

生育状況 : 2017 年に本部半島の 2 ヶ所で開花が確認されている。2 ヶ所とも雌花のみが確認されており、今までのところ雄花や果実は確認されていない。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内唯一の産地である。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られている。

執筆者名 : 横田昌嗣*・山城 考*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ヒナノシヤクジョウ
 分類 : ヒナノシヤクジョウ科 (APG 科名: ヒナノシヤクジョウ科)
 学名 : *Burmannia championii* Thwaites
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 白色小形の腐生の多年草。茎は高さ 3~15 cm になる。根茎は球状にふくれ、多数のひげ根がある。葉はすべて鱗片状で疎らに互生し、長さ 2~4 mm。花は白色で柄がなく、数個が茎の先に頭状に集まる。

分布域 (県外) : 本州 (関東以西)、四国、九州、屋久島、奄美大島、台湾、中国南部、マレーシア、インド、スリランカ。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地林内の落ち葉の間に生える。

生育状況 : 自生地は限られ、個体数は少ない。西表島では、近年 2ヶ所で確認されている。

減少の要因 : 森林伐採。もともと自生地が少ない。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
 新里孝和・比嘉 寿, 1976. 北明治山の植物. 沖縄生物学会誌, (14) : 99-110.

執筆者名 : 新里孝和*・比嘉清文*・加島幹男*

和名 : ミドリシヤクジョウ
 分類 : ヒナノシヤクジョウ科 (APG 科名: ヒナノシヤクジョウ科)
 学名 : *Burmannia coelestris* D. Don
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅 (EX)

形態の特徴 : 高さ 10~30 cm に達する一年草。葉は柄がなく、披針形、長さ 1.5~2.5 cm。花は枝の先に 1 ないし 3 個つき、淡青色で長さ 6~12 mm くらい、花筒の外側にやや幅の広い 3 個の翼がある。

分布域 (県外) : 中国南部、インドシナ、マレーシア、インド。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 水田の畦や陽当たりの良い湿地に生える。

生育状況 : 1940 年に採集された標本が鹿児島大学の標本室 (KAG) に所蔵されており、この 1ヶ所で記録されているだけで、近年はまったく確認されていない。発見地周辺で探索が行われているが、水田に除草剤が使われており、畦道にアメリカハマグルマが侵入し、発見は困難な状況になっており、絶滅した可能性が高い。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。腐生植物が多いヒナノシヤクジョウ科の中で、このミドリシヤクジョウは緑葉を持ち、光合成を行う数少ない種の一つである。

減少の要因 : もともと生育地が限られている。水田の減少。農薬の散布。帰化植物との競合。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 新里孝和*・比嘉清文*・横田昌嗣*・横田昌嗣(追補)

和名 : シロシヤクジョウ
 分類 : ヒナノシヤクジョウ科 (APG 科名: ヒナノシヤクジョウ科)

学 名 : *Burmannia cryptopetala* Makino

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 白色の腐生多年草。茎は長さ 6~15 cm、単立し、数花を密につける。花は乳白色で、花筒の外側に 3 個の翼がある。

分布域(県外) : 本州(近畿)、四国、九州、屋久島、種子島、奄美大島、台湾、中国南部(海南島)。

県内の分布 : 沖縄島北~中部、久米島、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地林内の落ち葉の間に生える。

生育状況 : 沖縄島と西表島では近年も確認されているが、久米島と石垣島の現状は不明。自生地はもともと少ない。梅雨時に限って出現するので発見が難しい。

減少の要因 : 自然林の伐採。もともと自生地が限られている。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 新里孝和・比嘉 寿, 1976. 北明治山の植物. 沖縄生物学会誌, (14) : 99-110.

執筆者名 : 新里孝和*・比嘉清文*

和 名 : ルリシヤクジョウ

分類 : ヒナノシヤクジョウ科 (APG 科名: ヒナノシヤクジョウ科)

学 名 : *Burmannia itoana* Makino

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 青紫色の腐生の多年草。茎は高さ 6~12 cm で直立し、先に 1~2 花をつける。花は青紫色で長さ 6~12 mm、花筒の外側に 3 個の翼がある。

分布域(県外) : 九州(鹿児島県)、屋久島、奄美大島、中国南部(海南島)。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の林内の落ち葉の間、特に高地の林床に生える。

生育状況 : 沖縄島では数ヶ所、石垣島では 1 ヶ所、西表島では数ヶ所で確認されているが、自生地は限られ、個体数が少ない。

減少の要因 : 自然林の開発。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 新里孝和・比嘉 寿, 1976. 北明治山の植物. 沖縄生物学会誌, (14) : 99-110.

執筆者名 : 新里孝和*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ホシザキシヤクジョウ

分類 : ヒナノシヤクジョウ科 (APG 科名: ヒナノシヤクジョウ科)

学 名 : *Oxygyne shinzatoi* (Hatusima) C. Abe et Akasawa (= *Saionia shinzatoi* Hatusima)

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 小形の地中生の腐生植物。根茎は長さ 2~3 cm、茎は単一または少し分枝し、長さ 1~1.5 cm、径 1 mm、鱗片を散生し、先端に 1~5 花をつける。花は青色、花被は 6 深裂し、長さ 5 mm、雄蕊は 3 個。

- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 山地中腹のリウキュウマツ、イジユ、ナカハラクロキなどが混生する二次林のやや乾いた林床に、樹木の根元に落ち葉に隠れるようにして生える。
- 生育状況 : 国頭村与那の琉球大学農学部演習林内の1ヶ所に、数個体の生育が知られているだけで、1970年代に2度採集された以降は確認されていなかったが、2004年9月に再発見された。自生地の植生遷移が進行して、最初に見つかった場所では確認できなかったが、隣接する別の場所で2個体が確認された。
- 学術的価値 : 単型属で沖縄島の固有種とされたが、近年はヒナノボンボリ属 *Oxygyne* に含められる (Abe & Akasawa, 1989)。ヒナノボンボリ属は西アフリカのカメルーンと日本 (本州、四国) に隔離分布しており、植物地理学上興味深い。
- 減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地と個体数が極めて少ない。
- 備考 : IUCN カテゴリー: Critically Endangered (CR)。

- 文献 : Hatusima, S., 1976. Two new species of Burmanniaceae from Japan. *J. Geobot.*, 24(1): 2-10.
 新里孝和, 1994. 与那演習林の樹木. “琉球大学農学部附属演習林創設40周年記念誌”, 琉球大学農学部附属演習林, 125-139.
 Abe, C. & Y. Akasawa, 1989. A new species of *Oxygyne* (Burmanniaceae) found in Shikoku, Japan. *J. Jpn. Bot.* 64(6): 161-164.

執筆者名 : 新里孝和*・比嘉清文*・横田昌嗣*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : タヌキアヤメ
- 分類 : タヌキアヤメ科 (APG科名: タヌキアヤメ科)
- 学名 : *Philydrum lanuginosum* Banks et Sol. ex J.Gaertn.
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 軟質の短命な多年草。葉は剣状で2列に互生し、長さ60 cmになる。穂状花序は長さ1 mに達し、単一で時に分枝し、綿毛をふき、上部に包葉を2列に互生し、包葉の葉腋に1~2花をつける。花は黄色、2唇形、長さ1.5 cm。室果は長楕円形、3裂する。
- 分布域(県外) : 九州南部、種子島、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、熱帯アジア、オーストラリア。
- 県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、小浜島、嘉弥真島。
- 生育環境 : 低地の湿地や放棄水田に生える。
- 生育状況 : かつては各地でやや普通に見られたが、水田の減少や遷移の進行で急減している。沖縄島、西表島、小浜島、嘉弥真島では今回の調査で生育が確認されたが、その他の島では1970年代前半までは確認されているが、その後は確認されておらず、現状不明。
- 減少の要因 : 水田の消失。遷移の進行。湿地の開発。
- 保全対策 : 自生地の保全。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 知念美香, 1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究, (11) : 75-105.

執筆者名 : 横田昌嗣*・新城和治*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : イグサ (イ、トウシンソウ)

分類 : イグサ科 (APG 科名: イグサ科)
学名 : *Juncus effusus* L. var. *decipiens* Buchenau
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年生草本。根茎は短く横走する。茎は円柱状、高さ 60 cm、幅 2 mm になり、茎の下部に鱗片状の葉を少数つける。集散花序は偽側生し、多数の花をつける。花は単生、長さ 2 mm、雄蕊は 3 個。室果は 3 室、卵形、長さ 2 mm、種子は長さ 0.5 mm。

分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、喜界島、台湾、ウスリー、中国東北部、朝鮮、北アメリカ。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島北～中部。

生育環境 : 低地の湿地や、高地の山間の湿地に生える。

生育状況 : 伊平屋島の現状は不明であるが、湿地や水田の埋立が進んでおり、生育環境は確実に減少している。伊是名島では 1974 年に採集された標本があるが、2005 年の調査では発見できなかった。沖縄島では数ヶ所で採集の記録はあるが、現在は 1 ヶ所で少数個体が確認されているだけで、多くの自生地の現状は不明。

減少の要因 : 湿地の埋立。森林の伐採。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 大宜味村や恩納村などでは、畳表用に栽培されていたが、その水田も転作によりほとんどが消失している。基本変種は、ヨーロッパ、西シベリア、北アメリカに分布する。形態変異が大きく、幾つかの種内分類群が記載されている。イグサに比べて茎と花梗が細く、花被片が線状披針形となるものはオキナワイ f. *filiformis* (Satake) Hatusima として区別されることがあり、沖縄島北部の 2 ヶ所で記録されている。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : タチコウガイゼキショウ
分類 : イグサ科 (APG 科名: イグサ科)
学名 : *Juncus krameri* Franch. et Sav.
カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年草で、根茎は短く横走する。茎は円筒状で直立し、高さ 30~60 cm になる。茎葉は 2~3 個、茎よりずっと短く、円筒形で単管質、隔膜は明瞭。花は 3~10 花が集まって頭花をつくり、これが茎の頂に集散状に多数つく。

分布域 (県外) : 千島、北海道、本州、四国、九州、朝鮮、中国北部。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、西表島。

生育環境 : 水田、低地と山地の湿地に生える。

生育状況 : 沖縄島では数ヶ所に産するが、他の島の現状は不明。生育地と個体数は限られている。

学術的価値 : 分布域の南限である。

減少の要因 : 水田の埋立。湿地の開発。もともと自生地が限られている。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*

和名 : コウガイゼキショウ (ヒラコウガイゼキショウ、ヒロハノコモチゼキショウ)
分類 : イグサ科 (APG 科名: イグサ科)
学名 : *Juncus leschenaultii* J. Gay ex Laharpe

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く横走り、茎を束生する。茎は高さ 40 cm になり、扁平、翼がある。葉は長さ 20 cm、幅 3 mm になり、扁平、剣状。集散花序は頂生し、多数の頭状花序をつける。頭状花序には数花をつける。花は長さ 4~5 mm、花被片は狭披針形、雄蕊は 3 個。室果は長さ 4~5 mm、披針形、3 稜がある。種子は倒卵形、長さ 0.6 mm。

分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、中之島、奄美大島、台湾、カムチャッカ、中国、朝鮮、インド。

県内の分布 : 沖縄島北部、久米島、石垣島、魚釣島。

生育環境 : 水田や湿地に生える。

生育状況 : 沖縄島では数ヶ所で採集されている。久米島では 1953 年採集の標本があるが、現状は不明。石垣島では 1973 年に採集された標本があるが、現状不明。魚釣島では 1975 年に採集された標本があるが、野生化ヤギによる食害や生育環境の悪化により絶滅した可能性がある。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。水田の埋立。湿地の開発。野生化ヤギによる食害と植生破壊 (魚釣島)。

保全対策 : 魚釣島では野生化ヤギの駆除が急務である。

備考 : 近縁なアオコウガイゼキショウ *J. papillosus* Franch. et Sav.、タチコウガイゼキショウ *J. kramerii* Franch. et Sav.、ハリコウガイゼキショウ *J. wallichianus* Laharpe などを含め、いずれの種についても分布情報は少ないため現状の評価は正確とは言えない。花などの状態の良い標本を用いて、今後再検討する必要がある。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*

和名 : スズメノヤリ

分類 : イグサ科 (APG 科名: イグサ科)

学名 : *Luzula capitata* (Miq.) Miq. ex Kom.

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は密に束生し、花茎は高さ 10~30 cm。根生する葉は線形、長さ 7~15 cm、幅 2~3 mm。頭状花序は単生し、花は長さ 3 mm、花被片は広披針形、雄蕊は長さ 2 mm。室果は卵形、3 稜があり、長さ 3 mm。種子は長さ 1.2 mm。

分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島 (帰化)、カムチャッカ、サハリン、東シベリア、中国、朝鮮。

県内の分布 : 沖縄島中部。

生育環境 : 湿地に生える。

生育状況 : 沖縄島中部で 1926 年に採集された標本 (高江洲宇盛採集、金城鉄郎 No. 1554) が琉球大学理学部標本室 (RYU) に所蔵されている (Walker, 1976) が、近年は全く採集されていない。

減少の要因 : 湿地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。

文献 : Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 303.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : ツユクサ

分類 : ツユクサ科 (APG 科名: ツユクサ科)
学名 : *Commelina communis* L. var. *communis*
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。茎の下部は匍伏して分枝し、上方は斜上して高さ 20~50 cm になる。葉腋から長さ 2~3 cm の花柄がでて、その先に総苞がつく。総苞は広心形で長さ 2~3 cm、中肋に沿って二つに折れ、外側は無毛または疎らに毛があり、内側に数個の蕾を包む。花は 1 個ずつ早朝に総苞の外に出て開き、1 日でしぼむ。花弁は 3 個で、上方の 2 個が青色で大きくよく目立ち、下方の 1 個は白色でごく小さい。雄蕊は 6 本で、2 本だけが完全で黄色、花柱とともに突出し、他の 4 本は仮雄蕊になる。
分布域 (県外) : ウスリー、樺太、北海道、本州、四国、九州、奄美大島、与論島、朝鮮、中国。
県内の分布 : 沖縄島北部。
生育環境 : 日本列島ではいたるところの日のよく当たる原野や湿地、荒地に普通に生える雑草であるが、沖縄島北部では山麓の山道沿いの林縁の日当たりのあまりよくない湿ったところに限られる。また、沖縄島では 4~5 月に開花・結実し、6 月に入り気温が高くなると枯死して姿が見えなくなるなど、夏に開花する本土のものとは比べ、生活史も異なることは興味深い。
生育状況 : 自生地は少なく、与那覇岳や嘉津宇岳の山麓の数ヶ所に限られる。
減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られる。
備考 : 法面の種子吹き付けや植栽などにともなって、他府県由来の個体群の侵入が見られ、これとの交雑による沖縄島の在来個体群への遺伝的汚染が憂慮される。

執筆者名 : 立石庸一*・新城和治*・横田昌嗣(追補)

和名 : ホソバツユクサ
分類 : ツユクサ科 (APG 科名: ツユクサ科)
学名 : *Commelina communis* L. var. *ludens* (Miq.) C. B. Clarke
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。基本変種のツユクサに比べ、葉の下面、総苞、葉鞘に毛が多い。
分布域 (県外) : 奄美大島、与論島、朝鮮。
県内の分布 : 沖縄島、伊江島、座間味島、渡名喜島。
生育環境 : 低地の林縁に生える。
生育状況 : 沖縄島北部と伊江島で、最近、生育が確認されている。
減少の要因 : 低地の開発。もともと自生地が限られている。

執筆者名 : 立石庸一*・山城 考*

和名 : ザルゾコミヨウガ
分類 : ツユクサ科 (APG 科名: ツユクサ科)
学名 : *Pollia secundiflora* (Blume) Bakh. f.
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は地中を横走する。茎は斜上し、高さ 55~110 cm、数葉を互生し、集散円錐花序を頂生する。葉は広楕円形、長さ 10~26 cm、幅 2.3~6 cm、鋭頭、やや無柄、両面に疎毛がある。花序は有毛、下部の苞は葉状、披針形、長さ 6.5~11 cm、小花梗は長さ 3.8 mm、萼片は 3 個、長さ

3.4~3.6 mm、幅 2.5~3.4 mm、花弁は3個、倒卵形、長さ4~5.6 mm、幅3.8~4.5 mm、稔性のある雄蕊は3個、葯は長さ1.3 mm、白色、花糸は4~6.8 mm、仮雄蕊は3個、不稔の葯は長さ0.6 mm、黄色、子房は楕円球状、長さ1.5 mm、花柱は長さ7 mm。果実は球形、径6 mm、青熟する。

- 分布域（県外）：台湾、中国南部、インド、ミャンマー、タイ、インドシナ、フィリピン、マレーシア。
 県内の分布：石垣島。
 生育環境：低地の常緑樹林の湿った林床に生える。
 生育状況：自生地は数ヶ所知られ、群生する場合があるが、自生地は開発される可能性があるところが多い。
 学術的価値：分布域の北限で、国内で唯一の産地である。
 減少の要因：もともと自生地が限られている。自生地の開発。コヤブミョウガとの雑種形成。
 備考：石垣島からは、ザルゾコミョウガに類似するナンゴクヤブミョウガ *P. hasskarlii* Rolla Rao が記録されている（初島，1975）。これは稔性のある雄蕊を6個持つことで前者と区別される。ところが、これまでナンゴクヤブミョウガと同定されていた石垣島産の標本の雄蕊数を調べたところ、3個であることがわかった。石垣島産の植物はザルゾコミョウガと見なすべきと考えられる。石垣島では、コヤブミョウガ *P. miranda* (Lev.) Hara と混生する場合があり、両種の雑種と思われるものが見つかっている。
- 文献：初島住彦，1975．琉球植物誌（追加・訂正）．沖縄生物教育研究会，那覇，768.

執筆者名：横田昌嗣*・北原 孝*・立石庸一*・横田昌嗣(追補)

- 和名：アmanoホシクサ
 分類：ホシクサ科 (APG 科名：ホシクサ科)
 学名：*Eriocaulon amanoanum* T. Koyama
 カテゴリ：絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ：絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形態の特徴：一年草。葉は多数がロゼット状に根生し、線形で軟質、長さ2~5 cm、幅1~3.5 mm。花茎は多数、長さ15~19 cm、5肋を有しねじれる。頭花は球形または半球形、白毛を密布する。種子は楕円形、表面に方眼網紋がある。
- 分布域（県外）：九州（宮崎県、鹿児島県）、奄美大島、徳之島。
 県内の分布：沖縄島。
 生育環境：水田に生える。
 生育状況：近年は全く確認されておらず、現状は不明。既に絶滅した可能性がある。
 学術的価値：沖縄島が分布域の南限で、基準産地である。
 減少の要因：水田、湿地、池沼、河川の開発、埋立。もともと自生地が少ない。

執筆者名：立石庸一*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

- 和名：オオホシクサ
 分類：ホシクサ科 (APG 科名：ホシクサ科)
 学名：*Eriocaulon buergerianum* Korn.
 カテゴリ：絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ：該当なし

- 形態の特徴：一年草。葉は線状披針形、長さ8~20 cm、幅5~8 mm。花茎は高さ15~30 cm、鞘は4~5 cm。頭花は半球形、初め微毛を密生するが後やや無毛となる。種子は楕円形で長さ1.3 mm内外。

分布域（県外）： 本州（中部以西）、四国、九州、種子島、奄美大島、徳之島、与論島、台湾、中国。
県内の分布： 沖縄島。
生育環境： 湿地や浅い池沼に生える。
生育状況： 近年は全く確認されておらず、現状は不明。既に絶滅した可能性がある。
減少の要因： 水田、湿地、池沼、河川の開発、埋立。もともと自生地が少ない。

執筆者名： 立石庸一*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

和名： **ホシクサ**
分類： ホシクサ科（APG科名： ホシクサ科）
学名： *Eriocaulon cinereum* R.Br.
カテゴリー： 絶滅危惧 I B 類（EN） 環境省カテゴリー： 該当なし

形態の特徴： 柔らかい一年草、茎は短く、狭線形の葉を束生し、葉は長さ2.5~8cm、幅1~2mm。花茎は細く長さ4~15cm、頭花は卵円形、長さ3~4mm、幅4mm、帯黄灰色または帯褐灰白色、総包片は長楕円形~倒卵状長楕円形、長さ1.5~2mm、雄花は長さ1.5~2mm、萼片はゆかし、3個、雄蕊は6個、葯は白色、雌花は長さ1.5~2mm、萼片は離生し、2個、線形、長さ1mm、花卉を欠く。
分布域（県外）： 本州、四国、九州、屋久島、奄美大島、朝鮮、台湾、中国、インド、マレーシア、オーストラリア。
県内の分布： 伊平屋島、沖縄島、石垣島、西表島。
生育環境： 日当たりの良い湿地や水田に生える。
生育状況： 沖縄島と西表島では、各1ヶ所の水田で現在も確認されているが、伊平屋島と石垣島では、過去の記録はあるものの、現状は不明。
減少の要因： 水田や湿地の開発。農薬の使用。もともと自生地と個体数が限られる。

執筆者名： 横田昌嗣

和名： **オキナワホシクサ**
分類： ホシクサ科（APG科名： ホシクサ科）
学名： *Eriocaulon miquelianum* Korn. var. *lutchuense* (Koidz.) T. Koyama
カテゴリー： 絶滅危惧 I A 類（CR） 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I B 類（EN）

形態の特徴： 一年草。葉は線状針先形、長さ17~20 cm、幅5~8 mm、9~11脈がある。花茎は長さ10~30 cm、5肋を有し多少ねじれる。種子は楕円形、帯緑黄色、上面に鉤状乳房突起を密生する。
分布域（県外）： 奄美大島、沖永良部島。
県内の分布： 沖縄島、久米島、石垣島。
生育環境： 湿地や水田に生える。
生育状況： 近年は全く確認されておらず、現状は不明。既に絶滅した可能性がある。
学術的価値： 琉球列島の固有変種。
減少の要因： 水田、湿地、池沼、河川の開発、埋立。もともと自生地が少ない。

執筆者名： 立石庸一*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : スイシャホシクサ
 分類 : ホシクサ科 (APG 科名: ホシクサ科)
 学名 : *Eriocaulon nigrum* Lecomte var. *suishaense* (Hayata) Hatusima et T. Koyama
 カテゴリ : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリ: 絶滅危惧 I A 類 (CR)
- 形態の特徴 : 一年草。葉は線形～線状披針形、長さ 2～7 cm、幅 3～5 mm、7～9 脈がある。花茎は多数、長さ 3～15 cm。頭花は扁球形、長さ 4 mm 内外。種子は広楕円形、淡褐色、長さ 0.5 mm 内外、縦線がある。
- 分布域(県外) : 徳之島、台湾。
- 県内の分布 : 沖縄島、久米島、石垣島、西表島、与那国島。
- 生育環境 : 湿地や水田の畦に生える。
- 生育状況 : 沖縄島では国頭村から恩納村にかけて点々と産するが、かつて知られた多くの自生地は開発により消失している。現存する自生地は沖縄島、石垣島、西表島の合計数ヶ所である。他の島の現状は不明。
- 減少の要因 : 湿地・水田・池沼・河川の開発・埋立。
- 備考 : 基本変種は中国南部、インドシナに分布する。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。IUCN カテゴリ: Least Concern (LC)*。**Eriocaulon truncatum* として評価。
- 文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 億首川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 99-110.
- 執筆者名 : 立石庸一*・池原直樹*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : ヤマヌカボ
 分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
 学名 : *Agrostis clavata* Trin. ex Spreng.
 カテゴリ : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリ: 該当なし
- 形態の特徴 : 高さ 30～70 cm になる繊細な多年草。根茎はほとんど発達せず、茎基部に翌年の新苗をつける。葉は扁平で柔らかく、長さ 10 cm、幅 3 mm ほど。円錐花序は長さ 12～20 cm になり、枝は細かくざらつき、花時には開出しているが花後は直立する。小穂は長さ約 2 mm、淡緑色で光沢があり、花序の枝先だけに疎らにつく。第一苞穎と第二苞穎はほとんど同長で、小花は第一苞穎の 3/4 ほど。護穎は苞穎より少し短い。内穎はごく小さく、長さ 0.5 mm 以下で、護穎の 1/4 以下。
- 分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、ユーラシアの温帯。
- 県内の分布 : 硫黄島、沖縄島。
- 生育環境 : 山地の林内に生える。
- 生育状況 : 沖縄島からは、最近では全く見られていないが、1997 年の硫黄島における総合調査により、同島のグスク岳斜面の低木林内で初めて発見された (立石ら, 2001a, b, 2002)。
- 学術的価値 : 分布域の南限である。
- 減少の要因 : 生育地の開発。
- 備考 : IUCN カテゴリ: Least Concern (LC)。
- 文献 : 立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2001a. 沖縄県硫黄島の植物相とその構成種の散布様式. 沖縄生物学会誌, (39) : 49-76.
 立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2001b. 沖縄県硫黄島で見出された分類学

のあるいは植物地理学的に注目される維管束植物. 沖縄生物学会誌, (39) : 77-92.

立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2002. 硫黄島島の植物相. “沖縄県史資料編 13 硫黄島島”, 沖縄県文化振興会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 57-104.

執筆者名 : 立石庸一*

和名 : オオマツバシバ

分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)

学名 : *Aristida takeoi* Ohwi

カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧1B類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。葉は密に束生し、糸状、長さ15~20cm、葉舌にひげ毛がある。稈は糸状、長さ30cm程度。円錐花序は頂生し、長さ20cm程度、枝は1~2個、長さ5~8cm、包穎は針状披針形、第1穎は長さ8mm、3脈、第2穎は長さ1.2mm、1脈、護穎はやや針形、長さ8mm、先端は長さ13mmのねじれた柄となる。

分布域(県外) : 奄美大島、徳之島。

県内の分布 : 沖縄島、伊平屋島、伊是名島、渡嘉敷島、座間味島、久米島、小浜島。

生育環境 : リュウキュウマツの低木林の林床や貧栄養の乾いた原野に生える。

生育状況 : 局所的に群生する場合があるが、自生地の多くは開発で消失している。

学術的価値 : 琉球列島の固有種で、これまで中琉球だけから報告されていたが、今回の調査で南琉球の小浜島からも見つけた。近縁種は小笠原のマツバシバ *A. boninensis* と台湾のタイワンマツバシバ *Aristida chinensis* で、琉球列島と周辺地域の植物相の関連を調べる上で貴重である。沖縄島や伊是名島では、オオマツバシバ群落は、イトスナヅルやナガバアリノトウグサなどの希少種の生育地となっている。

減少の要因 : 自生地の開発。一部の自生地では、外来種のアメリカハマグルマが侵入している。

執筆者名 : 横田昌嗣・阿部篤志

和名 : ビロードキビ

分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)

学名 : *Brachiaria villosa* (Lam.) A. Camus var. *villosa*

カテゴリー : 絶滅危惧I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧I B類 (EN)

形態の特徴 : 高さ15~25 cmの一年草。全体に開出する短い軟毛があり、稈は叢生して立ち、基部でよく分枝する。葉は披針形、長さ3~5 cm、幅5~8 mmほどで先は短く尖り、縁には軟毛に混ざって小刺針が並ぶ。花序は長さ2~5 cm、斜上する長さ2~3 cmの枝(総)を5~10個つける。総に2列に圧着する小穂は楕円形、長さ2.5~2.7 mm、第一苞穎があり、基部が広くて小穂の基部をとり巻き、長さは小穂の2/5~1/2。

分布域(県外) : 本州(紀伊半島)、四国、九州、中国中南部、台湾、インドネシア、インド。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 海岸付近の原野に生える。

生育状況 : 石垣島からは1920年代から1950年代まで、西表島では1923年に採集されているが、苞穎の無毛形(ラシャキビ)ともども最近では記録がない。

減少の要因 : 生育地の開発。

備 考 : 苞穎に毛のない形がラシャキビで、石垣島からビロードキビの変種 var. *glabrigluma* Ohwi として記載された (Ohwi, 1936)。しかし、これは有毛の基本形としばしば混生するので、区別する必要はないと考えられる。強いてするなら、無毛の一形ということで、品種 f. *glabrigluma* (Ohwi) Ohwi が適切であろう (Ohwi, 1942) という。

文 献 : Ohwi, J., 1936. Symbolae ad florum Asiae Orientalis 10. Acta Phytotax. Geobot., 5: 51.
Ohwi, J., 1942. Gramina Japonica, III. Act. Phytotax. Geobot., 11: 27-56.

執 筆 者 名 : 立石庸一*

和 名 : **イリオモテガヤ**

分 類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)

学 名 : *Chikusichloa brachyanthera* Ohwi

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。稈は直立して高さ 60~100 cm になる。葉は線形、長さ 30~40 cm、幅 4~5 mm、鞘はやや扁圧し、無毛。円錐花序は長さ 20~30 cm で、小穂を疎らにつける。小穂は 1 小花からなり、長さ 3 mm、包穎はなく、護穎は卵形で 5 脈がある。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 河川の中流域から下流域の河床やサガリバナ林の林床に生える。

生育状況 : 数河川の流域に産するが、自生地と個体数は少ない。

学術的価値 : 西表島の固有種である。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : 茨木 靖, 2000. 西表島固有イネ科水生植物イリオモテガヤ (*Chikusichloa brachyanthera* Ohwi) の生育環境. 水草研究会会報, 70: 20-21.
小林史郎・横田昌嗣, 2001. 琉球列島植物分布資料 16. 沖縄生物学会誌, (39) : 99-102.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **ビロードメヒシバ**

分 類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)

学 名 : *Digitaria mollicoma* (Kunth) Henrard

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態の特徴 : 多年草。稈は下部が倒伏、上部が斜上して、高さ 20~30 cm になる。葉は 3 cm 内外、線状披針形、波状縁で両面に絹毛を密生し、葉舌は膜質、鈍頭。稈の先に長さ 6 cm 内外の穂状花序をは 2~3 個つける。小穂は楕円形で長さ 1.5~2 mm、密に銀白毛がある。

分布域(県外) : 台湾、マレーシア。

県内の分布 : 久米島。

生育環境 : 海岸付近の原野や海岸林の林床に生える。

生育状況 : 初島・天野 (1974) によって報告された唯一の生育地は、ホテル建設により消失した。2005 年に生育地の近隣を調査したが発見されず、現状は不明で、既に絶滅した可能性が高い。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限で、国内では唯一の自生地である。マレーシア系の植物として植物地理学上貴重である。
減 少 の 要 因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られている。
備 考 : 初島住彦により 1967 年に久米島で採集された標本の一部は、国立科学博物館 (TNS) にある。
文 献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄自然研究会編, 沖縄県, 1-39.
執 筆 者 名 : 立石庸一*・横田昌嗣*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ヒトタバメヒシバ
分 類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学 名 : *Digitaria pruriens* (Fisch.) Buse
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 多年草。稈の下部は匍匐するが、上部は直立または斜上し、高さ 15~60 cm になる。葉は狭披針形で長さ 8~20 cm、幅 5~12 mm、葉鞘に長い開出毛がある。稈の先に 6~12 個の総状花序をつける。小穂は 3 mm 内外、前面辺縁のみ有毛。
分 布 域 (県 外) : 小笠原、ミクロネシア、ポリネシア、メラネシア、マレーシア。
県 内 の 分 布 : 北大東島、南大東島。
生 育 環 境 : 海に近い原野に生える。
生 育 状 況 : 近年は全く確認されておらず、現状不明。
学 術 的 価 値 : ポリネシア系の種で、隔離分布する。植物地理学上の貴重種で、県内では唯一の産地である。
減 少 の 要 因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られている。
備 考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。**Digitaria junghuhniana* として評価。

文 献 : 西銘盛光・横田昌嗣, 1996. 南大東島海岸植物群落内における観察所建設の影響調査報告書. 沖縄県教育庁文化課紀要, (12) : 47-62.
西浜良修, 2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—. 南大東村教育委員会, 77pp.
執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

和 名 : イゼナガヤ
分 類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学 名 : *Eriachne armiti* F. Muell.
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

形 態 の 特 徴 : 多年草。稈は密に束生して高さ 25 cm になり、節に白色の粗毛を密生する。葉舌には長い毛がある。円錐花序はやや密で長楕円状、長さ 3~4 cm、枝は短く、5~6 個、長さ 5 mm 以下で、1~2 花をつけ、花軸とともに白色の粗毛をつける。
分 布 域 (県 外) : ニューギニア、オーストラリア。
県 内 の 分 布 : 伊平屋島、伊是名島、渡嘉敷島、座間味島、沖縄島。
生 育 環 境 : 乾いた原野やリュウキュウマツ疎林の林床に生える。

- 生育状況 : 自生地は限られ、個体数は少ない。伊是名島、渡嘉敷島、座間味島では今回の調査でも確認された。沖縄島からは、ごく最近発見されたが、米軍基地の開発により自生地の大半は失われた。伊平屋島では近年は確認されておらず、現状不明。
- 学術的価値 : 分布域の北限で、国内唯一の産地である。オーストラリア系の植物で、著しい隔離分布を示し、植物地理学上貴重である。伊是名島のはオーストラリアのものと同形態が異なり、固有種 *E. tawadae* とする意見がある。
- 減少の要因 : 草地・草原の開発。もともと自生地が少ない。遷移の進行。外来種との競合。

- 文献 : 仲田栄二 (編), 1995. ふるさとの草木, 伊是名諸島の植物図鑑. 伊是名村教育委員会, 119pp.
阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 (伊是名島・久米島). “事業年報 (平成 26 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.

執筆者名 : 新城和治*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **アオシバ**
- 分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
- 学名 : *Garnotia acutigluma* (Steud.) Ohwi
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根はマット状になり、強く岩に付着する。茎は高さ 30~40 cm になり、数枚の葉をつける。葉は線状披針形、短毛があり、長さ 20~35 cm。円錐花序は細く、長さ 20 cm になり、多数の花をつける。小穂は長さ 3 mm、線状披針形、基部に短い毛束がある。
- 分布域 (県外) : 台湾、フィリピン、中国南部、インド、マレーシア、ニューギニア、ハワイ。
- 県内の分布 : 西表島。
- 生育環境 : 典型的な溪流植物で、洪水時には容易に水没するような河川の中流域の岩上に限って生える。
- 生育状況 : 自生地は 2ヶ所知られているが、その内の 1ヶ所 (クイラ川) では本種は全く確認されないことから誤りである可能性が高い。確実に自生する 1ヶ所 (後良川) では現状では、自生地の面積は狭い範囲に限られるが、局所的には個体数はやや多い。後良川にはダム建設の計画があり、建設されれば自生地の大半は水没することになっていたが、計画は回避され、後良川の流域は国立公園の特別保護地域に指定されたので、絶滅する可能性は少なくなった。
- 学術的価値 : 分布域の北限であり、日本で唯一の産地である。本種の分布域は広いが、著しい隔離分布を示し、いずれの地域でも希産種とされる。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

- 文献 : 横田昌嗣・宮城康一, 1988. 琉球列島植物分布資料 6. 沖縄生物学会誌, (26) : 35-37.
横田昌嗣・島袋敬一, 1990. 琉球列島植物分布資料 7. 沖縄生物学会誌, (27) : 53-55.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **ヤエガヤ**
- 分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
- 学名 : *Hackelochloa granularis* (L.) O. Ktze.
- カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴** : 高さ 20~60 cm の一年草。全体に多少ざらつき、茎は細く、基部で多少分枝する。葉は線状披針形、長さ 10 cm に達し、幅 3~12 mm ほどで剛毛が生える。穂状花序は細く、長さ 1~2 cm、小穂は 2 形で、柄のないものと有柄のもののが対になってつく。柄のない小穂は円形で直径 1 mm ほど、稔性があり、第一苞穎は球形で外面は小穴が散在する。有柄の小穂は長さ 2 mm に達し、卵形、雄性で柄は花序の軸に癒合する。
- 分布域(県外)** : トカラ列島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島、および台湾以南の旧世界の熱帯に広く分布。
- 県内の分布** : 沖縄諸島、八重山諸島。
- 生育環境** : 畑地周辺の草地に生える。
- 生育状況** : 1930 年代までは各島でよく記録されていたが、近年は見るのがまれになり、今回の調査では全く確認することができなかった。
- 減少の要因** : 耕地整理。外来種との競合。
- 備考** : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 立石庸一*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名** : **アカヒゲガヤ**
- 分類** : イネ科 (APG 科名: イネ科)
- 学名** : *Heteropogon contortus* (L.) P. Beauv. ex Romer et Schult.
- カテゴリー** : 絶滅危惧 I A 類 (CR) **環境省カテゴリー**: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

- 形態の特徴** : 束生する多年草。稈は斜上し高さ 30~100 cm になる。葉は下方に束生、披針形、長さ 3~8 cm、幅 4 mm 内外、無毛。総状花序は単一で頂生、第 4 穎は長さ 5~8 cm の太い芒をもつ。
- 分布域(県外)** : 九州 (天草)、台湾、全世界の熱帯地方。
- 県内の分布** : 沖縄島 (北部~南部)。
- 生育環境** : 原野や人里近くに生え、特に墓地の琉球石灰岩の岩隙に生えることが多い。
- 生育状況** : 自生地は沖縄島北部から南部まで点々と数ヶ所知られるが、現在も確認されるのは恩納村と那覇市の 4ヶ所だけである。
- 減少の要因** : もともと自生地が限られている。自生地の開発。外来種との競合。

執筆者名 : 横田昌嗣*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名** : **ケナシハイチゴザサ**
- 分類** : イネ科 (APG 科名: イネ科)
- 学名** : *Isachne lutchuensis* Hatusima et T. Koyama
- カテゴリー** : 絶滅危惧 I B 類 (EN) **環境省カテゴリー**: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形態の特徴** : 一~二年草。稈は細く、基部は膝曲して匍匐し、節部から下根する。葉は長さ 1~1.3 mm、口部の白毛をのぞき無毛。葉は辺縁は小さく上下に波打ってざらつく。円錐花序は疎らで長さ 2~5 cm、枝は 3~5 個、軸とともに無毛。
- 県内の分布** : 沖縄島北部、西表島。
- 生育環境** : 山地の湿地に生える。
- 生育状況** : 沖縄島北部では、2017 年 1ヶ所までに少数個体が確認されている。西表島では 2018 年に確認されている。

学 術 的 価 値 : 沖縄県の固有種である。
減 少 の 要 因 : 自然林の伐採による湿地の減少。もともと自生地が限られている。
備 考 : 竹富町希少野生動物植物種 (2017年)。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ハイチゴザサ
分 類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学 名 : *Isachne nipponensis* Ohwi
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 小形の一年草。稈の基部は長く匍匐して、節から根を出し、上部は立ち上がり、高さ5~10 cmになる。葉は披針形~披針状長楕円形、長さ1.5~3 cm、幅4~10 mm、上面はまれに長毛を1~2本散生する他は無毛、鞘は7~17 mm、縁に長い毛がある。円錐花序は長さ3~8 cm、疎らに小穂を生じ、広卵形、小穂は長さ1.5 mm、広楕円形~やや球形。
分 布 域 (県 外) : 本州 (関東以西)、四国、九州、朝鮮、台湾、中国。
県 内 の 分 布 : 沖縄島北部、西表島。
生 育 環 境 : 山地の湿地に生える。
生 育 状 況 : 沖縄島北部では2ヶ所で確認されているが、西表島の現状は不明。
減 少 の 要 因 : 自然林の伐採による湿地の減少。もともと自生地が限られている。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ヒメカモノハシ
分 類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学 名 : *Ischaemum indicum* (Houtt.) Merr.
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形 態 の 特 徴 : 多年草。稈は下部が湾曲して基部付近は地を這い、上部は斜上し、節に長毛が密生し、葉鞘にも毛がある。総状花序はふつう2個で、長さ3~5 cm、茎の先に直立する。小穂は柄のないものとあるものが2個ずつ対になって花軸の節につき、柄には長い毛があり、小花には長い芒がある。
分 布 域 (県 外) : 台湾、中国南部、インドシナ、インド。
県 内 の 分 布 : 石垣島。
生 育 環 境 : 海岸の琉球石灰岩の岩上や崖に生える。
生 育 状 況 : 1ヶ所のごく狭い範囲に生育し、個体数は極めて少ない。近年は台風時の潮害で植物体が痛んでいることを目にする事が多い。
減 少 の 要 因 : もともと自生地が限られている。
備 考 : 石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。IUCNカテゴリー: Least Concern (LC)*。*Polytrias indica* として評価。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・松島昭司(追補)

和 名 : コハナカモノハシ

分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学名 : *Ischaemum setaceum* Honda
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 小形の多年草。稈の下部は這い、節から根を出し、上部は直立して高さ 15~25 cm になり、節は有毛、葉鞘は無毛。葉は線状披針形、長さ 3~6 cm、幅 5 mm 内外。総状花序は 3~4 cm、節は太く、稜上に黄金色の長毛を密生する。
分布域(県外) : 台湾、フィリピン。
県内の分布 : 魚釣島。
生育環境 : 海岸の岩場に生える。
生育状況 : 魚釣島では野生化ヤギの増加で食害が進んでいることが考えられ、現状は不明。
学術的価値 : 分布域の北限で、日本では唯一の産地である。
減少の要因 : 野生化ヤギによる食害。もともと自生地が限られている。
保全対策 : 野生化ヤギの駆除が急務である。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : アシカキ
分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学名 : *Leersia japonica* Makino
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年草。稈は長い匍匐茎をのばして多数分枝し、上部は斜上して高さ 30~50 cm なり、節には下向きの剛毛を密生し、葉鞘にも硬い刺状の短毛があるので全体にざらつく。葉は長さ 5~15 cm、幅 4~8 mm。円錐花序は直立、長さ 5~10 cm、護穎の側脈は無毛で平滑、雄蕊は 6 本。
分布域(県外) : 本州、四国、九州、朝鮮、中国。
県内の分布 : 沖縄島南部。
生育環境 : 水辺に生える。
生育状況 : 近年は全く確認することができず、現状は不明。
減少の要因 : 湿地・池沼・河川の開発・埋立。外来種との競合。

執筆者名 : 新城和治*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

和名 : ミヤマササガヤ
分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学名 : *Microstegium nudum* (Trin.) A. Camus
カテゴリー : 絶滅危惧 II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 20~90 cm の多年草。稈の基部は地表を這って発根し、節は微細な毛に覆われる。葉は披針形で長さ 4~10 cm、幅 7~10 mm。花序は稈の先について 4~7 個の総からなり、総は細くて長さ 4~8 cm、淡緑色の小穂が中軸に圧着し、中軸の節間は長さ 6~7 mm で、小穂の柄のほぼ 2 倍の長さがある。小穂は長さ 3 mm ほどの柄をもつものと、ほとんど柄のないものが対になってつき、それぞれの柄の上端に短毛の環がある。小穂は長さ 4 mm、苞穎はともに小穂と同長。第二小花は両性で、2

裂した護穎の先から長さ 15~20 mm の芒が出る。

- 分布域（県外）： 本州（中部以西）、四国、九州、屋久島、台湾、中国、インドシナ、タイ、インド。
 県内の分布： 沖縄島。
 生育環境： 山地の林内に生える。
 生育状況： 1970年代までは沖縄島の中・北部で散発的に見られたが、最近はほとんど見られなくなった。
 減少の要因： 生育地の開発。外来種との競合。

執筆者名： 立石庸一*・横田昌嗣(追補)

- 和名： トキワススキ
 分類： イネ科 (APG 科名: イネ科)
 学名： *Miscanthus floridulus* (Labill.) Warb. ex K. Schum. et Lauterb.
 カテゴリ： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ： 該当なし

形態の特徴： 大型の多年草。太くて短い根茎があり、稈は束生して大きな株となり、直立、高さ 1.5~3.5 m。葉は平で長さ 30~80 cm、幅 15~35 mm、縁はひどくざらつき、中央脈は白色が目立ち、上面の基部近くに短毛が生える。花序は長さ 30~50 cm で幅の 2 倍以上になり、上部の総は下部のものより遥かに短い。総は多数で花序の中軸に散らばってつき、長さ 8~20 cm、これに柄の長い小穂と柄の短い小穂とが対になってつく。小穂は長さ 3~3.5 mm、基部には白色の長毛を束生する。

- 分布域（県外）： 本州（関東南部以西）、四国、九州、奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島、台湾、中国南部、インドシナ、マレーシア、ポリネシア。
 県内の分布： 沖縄諸島、八重山諸島。
 生育環境： 平地や丘陵地に生える。
 生育状況： かつては飼料または屋根葺き用として栽培されることが多かった。野生らしい個体群はあまり見られない。
 減少の要因： 耕地整理。開発。
 備考： 竹富町希少野生動植物種（2017年）。

執筆者名： 立石庸一*

- 和名： チャボチヂミザサ
 分類： イネ科 (APG 科名: イネ科)
 学名： *Oplismenus undulatifolius* (Ard.) P. Beauv. var. *microphyllus* (Honda) Ohwi
 カテゴリ： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ： 該当なし

形態の特徴： 小形の多年草。葉は長さ 1~3 cm。花序は稈の先についてほとんど枝を分けず、花軸の節に 1~3 個ずつ柄のない小穂がついて穂状花序状となる。

- 分布域（県外）： 本州、四国、九州、屋久島、奄美大島、徳之島、台湾、フィリピン、マレーシア、インド、ネパール。
 県内の分布： 沖縄島北部。
 生育環境： 山地溪岸に生える溪流植物である。
 生育状況： 限られた河川の中流域に生え、多くの自生地はダム建設により失われている。
 減少の要因： ダム建設による水没。自然林の伐採。外来種との競合。

備考 : 基本変種のチヂミザサは日本および琉球を含め、地中海沿岸から中央アジア、インド北部、さらに東アジアの広い地域に分布する。チャボチヂミザサはこの基本変種に比べ全体に毛が少なく、とくに花序の中軸は、節以外はほとんど無毛である点で区別できる。しかし両者の関係は今後検討を要する。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成 5 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成 6 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 平成 7 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-7.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 大保ダム建設発生土の処分候補地に係る生物環境調査データ (陸域・海域). 沖縄建設弘済会, 3-14, 117-135, 277-286, 349-373.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 平成 8 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 奥間川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-9, 99-112.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 億首川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 99-110.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 座津武川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-8, 87-95.

執筆者名 : 横田昌嗣*・池原直樹*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : **イネガヤ**
分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学名 : *Oryzopsis obtusa* O. Stapf
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 密に束生する多年草。稈は高さ 60~100 cm。葉は扁平で狭線形、やや光沢があり、辺縁はざらつく。円錐花序は狭総状、長さ 10~15 cm、穎果は長さ 4 mm くらい、両端はとがり黒褐色で光沢がある。
分布域 (県外) : 台湾、中国南部。
県内の分布 : 沖縄島北部。
生育環境 : 石灰岩地の林内に生え、自生地はごく接近した 2ヶ所のみが知られる。
生育状況 : ごく狭い範囲に生え、個体数は少ない。自生地は国立公園に指定されているが、自生地の 1ヶ所には遊歩道が建設され、個体数は減少している。他の 1ヶ所も登山道沿いにあり、小規模な開発でも絶滅の恐れがある。
学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。人による踏みつけ。違法な森林伐採。

執筆者名 : 新城和治*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

和名 : **オオヌカキビ**
分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学名 : *Panicum paludosum* Roxb.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形態の特徴 : 水生の多年草。稈は上向き高さ1 m になり、下部は水上に浮かぶか泥中に下根する。葉はざらついて長さ15~25 cm。円錐花序は鞘からわずかに抽出する。花枝は互生、時として輪生する。
- 分布域(県外) : 台湾、中国南部、インド、マレーシア、オーストラリア。
- 県内の分布 : 沖縄島、池間島。
- 生育環境 : 水田の畦や水辺に生える。
- 生育状況 : 池間島では1ヶ所で少数個体が生育することが知られていたが、自生地はサトウキビ畑となり、現在は確認できず絶滅した恐れがある。沖縄島ではごく最近記録されているが、自生地は水田で、開発される恐れがある。
- 学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。
- 減少の要因 : 湿地、池沼、水田の開発と埋立。もともと自生地が限られている。
- 備考 : 宮古島市自然環境保全条例保全種(2005年)。

- 文献 : 初島住彦, 1971. 琉球植物誌, 沖縄生物教育研究会, 那覇, 683.
水野 拓・高山正裕・阿部篤志, 2017. 沖縄島における絶滅危惧種オオヌカキビ(イネ科)の新記録. 沖縄生物学会誌, (55): 39-41.

執筆者名 : 横田昌嗣*・池原直樹*・川上 勲*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

- 和名 : アイアシ
- 分類 : イネ科 (APG科名: イネ科)
- 学名 : *Phacelurus latifolius* (Steud.) Ohwi
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 高さ80 cm内外の硬い多年草。稈は群生し、根はかたくて太く横に這う。葉は長さ20~40 cm、幅1~4 cm。花序は掌状に並んだ5~10個の穂状花序からなる。穂状花序は長さ10~25 cm、粉白色または汚紫色を帯びる。
- 分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、奄美大島、沖永良部島、朝鮮、中国。
- 県内の分布 : 鳩間島。
- 生育環境 : 海岸の砂浜に群生する。
- 生育状況 : 鳩間島の海岸の1ヶ所にハマオモト群落やモンパノキ群落、アダン群落に隣接して群生していた。2017年にかつて採集された場所を中心に島内を広く調査したが、発見することはできなかった。自生地の海岸植生はヤギの食害により荒廃が進み、外来種が侵入していることから、既に絶滅した可能性が高い。
- 学術的価値 : 分布域の南限であり、沖縄県で唯一の産地である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。海岸の開発。外来種との競合。野生化ヤギによる食害。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。

- 文献 : Shinjo, K., 1977. Flora of Hatoma Island, the Yaeyama Islands. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 3: 29-40.

執筆者名 : 新城和治*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

- 和名 : オキナワミゾイチゴツナギ

分 類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学 名 : *Poa acroleuca* Steud. var. *ryukyuensis* Koba et Tateoka
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 一年草または短命な多年草。茎は30~50 cm、葉は長さ10~15 cm、幅2~5 mm、小舌は長さ0.6~1.2 mm、有毛。円錐花序は10~15 cm、小穂は2~3花をつけ、長さ2~3 mm。外花穎は無毛または微毛がある。葯は長さ0.5~0.7 mm。沖縄島にも分布するミゾイチゴツナギに似るが、護穎の側面の脈間に毛が多ければミゾイチゴツナギ、ほぼ無毛ならばオキナワミゾイチゴツナギである。

県内の分布 : 沖縄島 (固有)。

生育環境 : 公園などの人為的な影響の強い草地に生える。

生育状況 : 名護市嘉津宇岳、中城村中城城跡、浦添市浦添城跡、那覇市首里城、南城市佐敷などで採集されているが、名護市嘉津宇岳と浦添市浦添城跡以外では近年は確認されていない。類似の生育環境には、近年ミゾイチゴツナギモドキ *Poa* sp. (池原, 1989) が帰化して旺盛に繁茂しており、生育環境の競合による本種の減少が危惧される。

学術的価値 : 沖縄島の固有変種である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。生育地の開発。帰化種との競合。除草剤の使用。過度の除草。遷移の進行。

保全対策 : 自生地はいずれも人的な影響の強いところである。遷移が進行して森林となると本種の生育環境が失われる可能性がある。生育環境の維持のためには定期的な除草が必要であるが、除草剤の使用は避ける必要がある。一方、自生地の一部は、世界文化遺産に指定されており、敷地内の管理のため過度の草刈りが行われており、かつて確認されていた自生地で最近確認できない事例が確認されている。

文 献 : 池原直樹, 1989. 沖縄植物野外活用図鑑 第9巻. 新星図書出版, 123.
Koba, H. & T. Tateoka, 1992. A new variety of *Poa acroleuca* (Poaceae) from Okinawa. *J. Jpn. Bot.*, 67: 201-206.

執筆者名 : 横田昌嗣

和 名 : コモロコシガヤ
分 類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学 名 : *Sorghum nitidum* (Vahl) Pers.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 大形の多年草。稈はやや単生、高さ90~120 cmになる。根茎は横走せず、節に密毛がある。葉は狭線形で長さ10~15 cm、刺毛状鋭先端、鞘の下部は円く、上部は有稜、喉部に長い絹毛を密生する。円錐花序は長さ10~30 cm。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、東南アジア。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 海岸近くの原野に生える。

生育状況 : 石垣島の数ヶ所で採集された記録があるが、2017年に確認されている自生地は1ヶ所だけである。自生地にはアメリカハマグルマや外来のイネ科が侵入しており、本種の生育環境が失われつつあり、危機的な現状である。

学術的価値 : 国内唯一の自生地で、分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。帰化種との競合。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヒメネズミノオ

分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)

学名 : *Sporobolus hancei* Rendle

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 多年草。根茎は短く、匍匐茎がなく、稈は根元から束になって出て、細くて直立し、高さ 15~30 cm、僅かに 1~3 節があるだけで、しかも稈の下部にあるため、葉は全て根元にかたまっている。葉身は長さ 3~8 cm、内側に巻いて糸状になり、幅 1~2 mm、葉鞘の上部に数本の毛がまばらに生えるほかは無毛、葉舌は発達しない。円錐花序は稈の先につき、幅の狭い円柱形で基部から先端まで小穂を密生し、しばしば穂状花序と見間違える。小穂は長さ 1.7~2 mm で 1 個の小花からなる。

分布域 (県外) : 九州南部 (鹿児島県南部)、奄美大島、加計呂麻島、徳之島、台湾、中国南部、フィリピン。

県内の分布 : 硫黄島、伊平屋島、伊是名島、久米島、渡嘉敷島、沖縄島、粟国島。

生育環境 : 海岸の砂地に生える。

生育状況 : 硫黄島の風衝の溶岩台地上の風衝地に生えているのが、1997 年の調査で確認された。沖縄島の現況は不明。伊平屋島では 2008 年から 2016 年にかけて 2 ヶ所で確認されている。粟国島では 2015 年に 1 ヶ所で確認されている (阿部ら, 2016)。今回の調査で、伊是名島では 1 ヶ所、久米島では 2 ヶ所、渡嘉敷島では 2 ヶ所で確認されている。

減少の要因 : 生育地の開発。

文献 : 天野鉄夫, 1981. 粟国島植物目録. 粟国村教育委員会, 39pp.

立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2001. 沖縄県硫黄島で見出された分類学的あるいは植物地理学的に注目される維管束植物. 沖縄生物学会誌, (39) : 77-92.

立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2002. 硫黄島の植物相. “沖縄県史資料編 13 硫黄島”, 沖縄県文化振興会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 57-104.

阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 (伊是名島・久米島). “事業年報 (平成 26 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.

阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 II (粟国島・渡名喜島). 日本植物園協会誌, (51) : 80-85.

執筆者名 : 立石庸一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : オニシバ

分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)

学名 : *Zoysia macrostachya* Franch. et Sav.

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年草で硬くて長い根茎が地中深く這うが、地表に匍匐茎はなく、根茎の節から稈を出し砂上に直立させる。稈は高さ 15~40 cm、よく分枝する。葉は長さ 3~8 cm、幅 2~5 mm、乾くと内側に巻いて筒状になり、先端は褐色の硬い刺になって、さわると痛い。葉鞘の口部に長い毛を密生し、葉舌も長毛の列になる。花序は長さ 6~8 mm、幅 5~7 mm の穂状で、柄のある小穂がすき間なく重なり、下部は最上部の葉鞘に包まれている。小穂は長さ 6~8 mm、幅 2~4 mm、1 小花からなる。

分布域 (県外) : 北海道 (西南部)、本州、四国、九州、奄美大島、沖永良部島、与論島、朝鮮半島南部。

県内の分布 : 伊平屋島、野甫島、沖縄島。

- 生育環境 : 海岸の砂地に生える。
生育状況 : 伊平屋島、野甫島、沖縄島北部～中部の海岸で最近も確認されているが、自生地は少ない。
学術的価値 : 分布の南限である。
減少の要因 : 護岸工事。砂浜の開発。

執筆者名 : 立石庸一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

-
- 和名 : コオニシバ
分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学名 : *Zoysia sinica* Hance var. *sinica*
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 10～20 cm の多年草で、根茎は地中を深く横に這い、節ごとに細くて硬い稈を地表に直立させる。葉身は平ら、または内側に巻き、長さ 3～8 cm、幅 1～3 mm、葉先は硬くなって刺状になるが、オニシバのようにはさわっても痛くない。総状花序は長さ 3～5 cm、柄は長く、最上部の葉鞘からぬけ出している。小穂は長さ 4～5 mm、1 小花からなる。

分布域(県外) : 九州(薩摩半島)、屋久島、種子島、トカラ列島(宝島)、奄美大島、加計呂麻島、喜界島、徳之島、台湾、中国東南部。

県内の分布 : 伊平屋島、野甫島、沖縄島、伊江島、渡名喜島、久米島、西表島。

- 生育環境 : 海岸砂浜に生える。
生育状況 : 沖縄島では 1930 年代までは確認されているが、最近では 1 ヶ所でわずかに見られるだけである。久米島では 1970 年代初め以降の記録がない。伊江島では海岸で生育の良好な個体群が確認されている。伊平屋島と野甫島では、現在も自生が確認されている。

減少の要因 : 護岸工事。

備考 : この変種ナガミノオニシバ var. *nipponica* Ohwi は本州(関東以西)、四国、九州、薩南諸島、トカラ列島および朝鮮、中国に分布し、小穂が大型で長さ 5～8 mm であることにより区別される。オニシバによく似るが、葉も稈も花序も細く、花序が明らかな柄によって最上部の葉鞘から僅かながら抜け出ていることなどで区別できる。

執筆者名 : 立石庸一*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : ニツパヤシ
分類 : ヤシ科 (APG 科名: ヤシ科)
学名 : *Nypa fruticans* Wurm
カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の小高木。根茎はマングローブ湿地の泥中を這い、径 50～70 cm、二叉分枝し、先端に数枚の葉を束生する。葉は羽状複葉で、長さ 5～7 m になり、直立する。花序は雌花序と雄花序の部分があり、葉束から出て長さ 80～100 cm になり、7～9 個の包葉があり、雌花序は球状の頭状花序で、花序の先端につき、雄花序は尾状花序、雌花序の下に 1～5 個につき、多数の花をつける。花被片は 6 個、線形、雄性花の雄蕊は 3 個、雌性花の心皮は 3 個。果実は集合果で、球状、径 15～30 cm、種子は卵形、長さ 4.5 cm。

分布域(県外) : インド、マレーシア、ミクロネシア。

県内の分布 : 西表島、内離島。

- 生育環境** : マングローブ湿地に生える。
- 生育状況** : 定着した自生地は2ヶ所が知られ、それぞれ個体数について詳しい調査がなされている。内離島の自生地の現状は1978年の状況(西平, 1980)と大きな変化はなく、結実個体も見られ生育状態は良好である。西表島船浦のヤシ川の自生地は国指定の天然記念物として保護されているが、上流側で大規模な森林伐採と農地開拓が行われており、流出した土砂が堆積して、大半の個体の根茎が埋まって生育状態は極めて悪い。1996年と1983年の状況(新島ら, 1983)と比べると、枯死個体が目立ち、個体数は半減している。一部は掘り採られたような跡があり、盗掘されている恐れがある。内離島の個体群では結実が見られるが、ヤシ川では開花するものの結実しないようである。西表島の2ヶ所の個体群の遺伝的変異性を調べた研究では(Sugai *et al.*, 2016)、個体群内では遺伝的変異がないことが判っており、漂着した種子由来の植物が栄養繁殖したものと考えられている。これらの2ヶ所の自生地の他、漂着した種子が発芽して生長している幼植物は、1ヶ所で確認されている。
- 学術的価値** : 唯一のヤシ科のマングローブ植物で、東南アジアの代表的なマングローブ植物の一つである。分布域の北限であり、マレーシア系の種で植物地理学上貴重である。茎が二叉分枝をする数少ない種子植物の一つで、植物学上貴重である。
- 減少の要因** : もともと自生地と個体数が少ない。土砂の堆積による生育環境の悪化。園芸用の採集。
- 保全対策** : 不稔に関する研究が必要である。ヤシ川の砂の堆積を防ぐ必要がある。
- 備考** : 国指定天然記念物(船浦のニッパヤシ群落)(1972年)。竹富町特別希少野生動物植物種(2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

- 文献** : 仲里長浩・花城良廣・後藤勝実, 1996. 沖縄に自生するニッパヤシ *Nypa fruticans* Wurm. I. 生育の現状. 九州東海大学紀要, 15: 49-54.
 新島義龍・新城和治・宮城康一・前津栄信・日越国昭・新納義馬, 1983. 西表島船浦のニッパヤシ群落. “西表島天然記念物緊急調査報告”, 沖縄県教育委員会, 41-49.
 西平守孝, 1978. 西表の潮間帯-1978. 沖縄県自然保護課, 158pp.
 Sugai, K., S. Watanabe, T. Kuishi, S. Imura, K. Ishigaki, M. Yokota, S. Yanagawa & Y. Suyama, 2016. Genetic consequences at the northern margin of the distribution of *Nypa fruticans* (Arecaceae) on Iriomote Island, Japan. *Conservation Genetics*, 17: 221-228.

執筆者名 : 新里孝和*・加島幹男*・横田昌嗣(追補)

- 和名** : ヤエヤマヤシ
- 分類** : ヤシ科 (APG科名: ヤシ科)
- 学名** : *Satakentia liukiensis* (Hatusima) H. E. Moore
- カテゴリー** : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 樹高25 mに達する常緑の高木。茎は円柱形で、径30~40 cm、先端に数葉を束生し、基部から多数の不定根を出す。葉は羽状複葉で、長さ5 mになり、葉鞘は赤色を帯び、筒状となり茎を包む。花序は肉穂状で、葉束の下部から出て長さ1 mになり、掌状に分枝し、多数の花をつける。花は単性で、花序軸の下部に雌性花が、中部から上部に雄性花がつく。雌性花の萼片と花弁はそれぞれ3個で、長さ4 mm、子房は長さ2 mm、雄性花の萼片と花弁は雌性花のものより小さく、雄蕊は6個。果実は長楕円形、長さ13 mm。

- 県内の分布** : 石垣島、西表島。
- 生育環境** : 低地から山地の自然林に生え、純林を作る。
- 生育状況** : 石垣島に1ヶ所(米原)、西表島に2ヶ所(星立、ウブンドル)の自生地が知られ、自生地はいずれも国指定の天然記念物になっており、今すぐ絶滅する恐れはないが、近年大形の成熟個体の枯死が目立ち、個体数は減少している。

- 学 術 的 価 値 : 八重山諸島の固有属で、単型属である。近縁な属は小笠原やミクロネシア、ニューギニアのノヤシ属 *Gulubia* で、これは台湾やフィリピンに分布しておらず、琉球列島の植物相の成立を知る上で貴重である。
- 減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用・食用・建築資材用の採集。台風や害虫の被害による枯死。
- 備 考 : 国指定天然記念物（ウブンドルのヤエヤマヤシ群落 1972 年、米原のヤエヤマヤシ群落）（1972 年）。竹富町希少野生動植物種（2017 年）。IUCN カテゴリー：Data Deficient (DD)。
- 保 全 対 策 : 成熟個体の枯死原因、個体群動態、病害虫防除などの調査研究が必要である。

- 文 献 : Hatusima, S, 1964. A new palm from the Ryukyus. Mem. Fac. Agr. Kagoshima Univ., 5: 39-42.
宮城康一・新城和治・新島義龍・前津栄信・日越国昭・新納義馬, 1983. 西表島星立天然保護区域のヤエヤマヤシ林の群落構造. “西表島天然記念物緊急調査報告”, 沖縄県教育委員会, 51-74.
新城和治・宮城康一・新島義龍・日越国昭・新納義馬, 1983. 西表島ウブンドルのヤエヤマヤシ群落. “西表島天然記念物緊急調査報告”, 沖縄県教育委員会, 11-40.

執 筆 者 名 : 新里孝和*・加島幹男*

-
- 和 名 : ヤマコンニャク
- 分 類 : サトイモ科 (APG 科名: サトイモ科)
- 学 名 : *Amorphophallus hirtus* N. E. Brown var. *kiusianus* (Makino) M. Hotta
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

- 形 態 の 特 徴 : 球茎は扁球形で径 3~5 cm。葉柄と花茎は高さ 30~80 cm、葉身は 3 全裂し、さらにそれぞれ 2 裂して、最終裂片は披針形~長楕円状披針形、先は尾状鋭尖頭、長さ 3~20 cm、幅 1.5~4.5 cm。仏炎苞は帯緑色、無毛、長卵形で鋭尖頭、長さは 13~20 cm、花序は長さ 13~17 mm、付属体は仏炎苞とほぼ同調。液果は球形、径約 5 mm、はじめは緑色でのち帯紫色となり碧色に熟す。
- 分 布 域 (県 外) : 四国 (高知県)、九州南部、種子島、屋久島、中之島、奄美大島、沖永良部島、台湾。
- 県 内 の 分 布 : 粟国島。
- 生 育 環 境 : 海岸近くの岩場のソテツ群落内や原野に生える。
- 生 育 状 況 : 1ヶ所に数十個体があることが 2015 年の調査でも確認されている (阿部ら, 2016)。最近の原野火災で個体数が減少したように思われる。自生地の近隣に道路建設計画があり、建設されると自生地の環境悪化が懸念される。
- 学 術 的 価 値 : 県内では粟国島だけに分布し、四国や九州産のものとは染色体数や液果の形、大きさを異にするという見解があり、今後の研究が必要である。
- 減 少 の 要 因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。自生地の火災による被害。園芸用の採集。
- 保 全 対 策 : 自生地の保全。

- 文 献 : 天野鉄夫, 1981. 粟国島植物目録. 粟国村教育委員会, 39pp.
初島住彦, 1975. 琉球植物誌 (追加・訂正). 沖縄生物教育研究会, 那覇, 759, 906.
阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 II (粟国島・渡名喜島). 日本植物園協会誌, (51): 80-85.

執 筆 者 名 : 新城和治*・新里孝和*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和 名 : オキナワテンナンショウ

分 類 : サトイモ科 (APG 科名: サトイモ科)
 学 名 : *Arisaema heterocephalum* Koidz. subsp. *okinawense* Ohashi et J. Murata
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 高さ約 70 cm に達する夏緑性の多年草。小葉は花をつけた個体で 11~19 枚あって鳥足状につき、小葉の葉身は披針形から楕円形で、長さ 10~20 cm、幅 2~4.5 cm である。雌雄異株。花序は雄株では花柄が長いので葉より高くつき、雌株では花柄が 1~3 cm と短いので、葉より低くつく。仏炎苞の舷部は筒部よりも長い。ほぼ同長で、内面は濃紫色を呈している。基本亜種のアマミテンナンショウは奄美大島と徳之島に分布し、オキナワテンナンショウより全体に小形で、小葉の数が多く、仏炎苞の舷部は内面が緑白色で、筒部よりやや短い。ほぼ同長である。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 古生層石灰岩地の林床に生える。

生育状況 : 確認されている自生地は 3 ヶ所のごく狭い地域に限られ、個体数は極めて少ない。

学術的価値 : 沖縄島の固有亜種である。

減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地が限られている。

備考 : 従来、アマミテンナンショウとして扱われてきたが、1980 年になってその亜種として区別された (Ohashi & Murata, 1980)。特定国内希少野生動植物種に指定されており、採集や無許可の譲渡などは法律で禁じられている。特定国内希少野生動植物 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Endangered (EN)。

文献 : Ohashi, H. & J. Murata, 1980. Taxonomy of the Japanese *Arisaema* (Araceae). J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sec. III, 12: 281-336.

執筆者名 : 新城和治*・仲田栄二*・横田昌嗣(追補)・比嘉清文(追補)

和 名 : オオハンゲ

分 類 : サトイモ科 (APG 科名: サトイモ科)

学 名 : *Pinellia tripartita* (Blume) Schott

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 夏緑性の多年草。地下に径 3 cm 程度の球茎があり、1~2 枚の葉をつける。葉身は 3 深裂~3 全裂、裂片は広卵形~狭卵形、長さ 8~20 cm、幅 2.5~12 cm、葉柄は長さ 30 cm になる。花茎は高さ 20~50 cm、仏炎苞は長さ 5~11 cm、肉穂花序の下部に雌花が、上部に雄花があり、中軸の先端は長く伸び、糸状となり、長さ 15~25 cm。

分布域(県外) : 本州(東海以西)、四国、九州、喜界島、奄美大島、徳之島、沖永良部島。

県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島北部、久米島、宮古島、伊良部島。

生育環境 : 海岸や山地の岩隙に生える。

生育状況 : 沖縄島では 2005 年に大宜味村の 1 ヶ所で少数個体が確認されている。伊平屋島と伊良部島では各 1 ヶ所で少数個体の存在が記録されている。宮古島では、2 ヶ所で新たに確認された。久米島では、2017 年に 1 ヶ所で少数個体が確認された。

学術的価値 : 分布域の南限である。沖縄県では隔離分布を示し、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : 自生地の開発。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 横田昌嗣・阿部篤志・佐藤宣子, 2016. 宮古諸島から新たに見つかった維管束植物. 宮古島市総合博物館紀要, (29): 121-128.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・佐藤宣子(追補)・比嘉清文(追補)

和名 : ユズノハカズラ

分類 : サトイモ科 (APG 科名: サトイモ科)

学名 : *Pothos chinensis* (Rafin.) Merr.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑のつる性多年草。茎は疎らに分岐し、葉を 2 列に互生する。葉は概形はミカン属の葉に似ており、卵状披針形～長楕円形、長さ 5～10 cm、葉柄は長さ 1～3 cm、幅 2～7 mm、扁平。肉穂花序は腋生し、楕円形、長さ 8 mm、基部に数枚の包葉がある。液果は広楕円形で、長さ 9 mm。

分布域(県外) : 台湾、中国南部。

県内の分布 : 北大東島、南大東島。

生育環境 : 自然林および二次林の樹幹や岩上に這い上がる。

生育状況 : 北大東島と南大東島の各々に 2 ヶ所の自生地が知られる。北大東島の 1 ヶ所は国の天然記念物に指定されているが、個体数は極めて少ない。他の 1 ヶ所は開発により消失する恐れがある。南大東島の 1 ヶ所は採取により絶滅し、他の 1 ヶ所でも今回の調査では生育が確認できなかった。

学術的価値 : 大東諸島が日本では唯一の産地で、分布域の北限である。著しい隔離分布を示し植物地理学上貴重である。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2016 年)。

文献 : 初島住彦, 1973. 大東島の植物. “大東島天然記念物特別調査報告”, 文化庁, 9-42.
西浜良修, 2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—. 南大東村教育委員会, 77pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)・城間盛男(追補)

和名 : サキシマハブカズラ

分類 : サトイモ科 (APG 科名: サトイモ科)

学名 : *Rhaphidophora kortharthii* Scott

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑のつる性草本。茎は無毛で、葉を互生する。葉は革質、上面に光沢があり、長さ 50 cm、幅 20 cm、葉柄は長さ 30 cm になり、羽状に深裂し、裂片は菱形、葉身の長さが数 cm 以下の幼葉は、成葉と形態が著しく異なり、円形、鈍頭、心脚、ほぼ無柄で、葉身は基物に付着するように接する。

分布域(県外) : 中国南部(海南島)、フィリピン、マレーシア、ジャワ、ボルネオ。

県内の分布 : 西表島、石垣島。

生育環境 : 山地の自然林に生え、陰湿な岩上や樹上に這い上がる。

生育状況 : 自生地は西表島では 5 ヶ所知られるが、ごく狭い範囲に少数個体を産するだけである。石垣島では 1 ヶ所でごく少数個体が確認されている。自生地の一部は、エコツアーの散策路になっており、利用客による踏みつけが危惧される。

学術的価値 : マレーシア系の種で、分布域の北限であり、著しい隔離分布を示し植物地理学上貴重である。

- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。踏みつけ。
- 備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2016 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文献 : 横田昌嗣・島袋敬一, 1986. 琉球列島植物分布資料 2. 沖縄生物学会誌, (24) : 71-72.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

- 和名 : ヒメハブカズラ
- 分類 : サトイモ科 (APG 科名: サトイモ科)
- 学名 : *Rhaphidophora liukuensis* Hatusima
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)
- 形態の特徴 : 岩や樹幹に付着して生える常緑のつる植物。葉身は長楕円形～披針形、長さ 17～30 cm、幅 5～11 cm。仏炎包は多肉質で長楕円形、淡黄白色。肉穂花序は円筒状で、長さ 8～9 cm、径約 1 cm。
- 分布域(県外) : 台湾(蘭嶼)、フィリピン。
- 県内の分布 : 石垣島、西表島。
- 生育環境 : 山地の溪谷やマングローブ林内に生える。
- 生育状況 : 自生地は石垣島に 1 ヶ所、西表島に 1 ヶ所知られるだけで、自生地は狭い範囲に限られており、個体数は少ない。西表島では開花・結実が見られるが、石垣島では観察されていない。
- 学術的価値 : 分布域の北限で、基準産地である。マレーシア要素の植物で、植物地理学上貴重である。
- 減少の要因 : 自生地と個体数が限られている。森林伐採。園芸用の採集。
- 備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2016 年)。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文献 : 初島住彦, 1962. 琉球列島産天南星科の一新種. 植物分類・地理, 20: 56-57.
- 執筆者名 : 新里孝和*・池原直樹*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : ヒメツルアダン
- 分類 : タコノキ科 (APG 科名: タコノキ科)
- 学名 : *Freycinetia williamsii* Merr.
- 方言名 : ガシヤングヌ
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)
- 形態の特徴 : 長さ約 10 m に達する常緑のつる性低木。小枝は径約 5～10 mm。葉は長さ 10～20 cm、幅 8～12 mm。花は白色、集合果は楕円形、長さ 2.5～3.5 cm。
- 分布域(県外) : 台湾(蘭嶼)、フィリピン。
- 県内の分布 : 西表島。
- 生育環境 : 低地の森林の樹木や岩上に着生し、下垂する。
- 生育状況 : 4 河川の流域に産するが、自生地は狭い範囲に限られ、個体数は少ない。
- 学術的価値 : 分布域の北限である。
- 減少の要因 : 森林伐採。園芸用の採集。もともと自生地が限られている。

備考 : 竹富町特別希少野生動植物種 (2017 年)。
文献 : 小林史郎・横田昌嗣, 2001. 琉球列島植物分布資料 16. 沖縄生物学会誌, (39) : 99-102.
横田昌嗣・新城和治・比嘉清文, 1997. 琉球列島植物分布資料 14. 沖縄生物学会誌, (35) : 49-54.
執筆者名 : 横田昌嗣*・小林史郎*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ヒメミクリ
分類 : ミクリ科 (APG 科名: ガマ科)
学名 : *Sparganium stenophyllum* Maxim. ex Meensch.
カテゴリー : 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年生の抽水～湿生植物。茎は高さ 50～70 cm、根茎は短く、匍匐枝を出す。葉は単一またはまれに分枝し、2～数葉をつける。葉は線形、鈍頭、背面に稜があり、茎より長く、幅 2～5 mm。花序は単一または分枝し、花序は筒状花序で、雌雄の区別があり、雄花序は数個が花茎の上部につき、雌花序は 1～4 個が花茎の下部につき、包葉がある。果序は径 1～1.5 cm、果実は倒卵状梨形、長さ 3.5～5 mm。
分布域 (県外) : ウスリー、中国東北部、北海道、本州、四国、九州、インド、オーストラリア、ニュージーランド。
県内の分布 : 沖縄島中部。
生育環境 : 日当たりのよい池の縁の水中に生える。
生育状況 : 戦前に 1 度沖縄市で採集された記録があるが、現在は米軍基地内のため確認ができない。基地内の開発により絶滅した可能性が高い。
学術的価値 : 琉球列島で唯一の産地である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。池や湿地の埋立。
備考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。**Sparganium subglobosum* として評価。

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・横田昌嗣(追補)

和名 : シラスゲ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Carex alopecuroides* D. Don
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。葉を密に束生し、細長い匍匐枝をだす。稈は長さ 50～70 cm、中央部に 1 葉をつける。葉は淡緑色、下面は粉白色を帯び、幅 5～10 mm。小穂は 4～6 個束生し、頂小穂は雄性、線状円筒形、長さ 3～6 cm、他は雌性、円筒形、長さ 3～7 cm。雌花の鱗片は卵状長楕円形、柱頭は 3 個、果胞は卵状長楕円形、長さ 3 mm、先は短いくちばし状となる。瘦果は卵状三角形。
分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、台湾、朝鮮、中国。
県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島、石垣島。
生育環境 : 山地の常緑樹林の林床に生える。奄美大島ではやや高地に生える。
生育状況 : 沖縄島北部の 1 ヶ所に生育することが 2014 年に確認された。自生地は林道沿いに限られており、拡幅工事が行われると消失する恐れがある。伊平屋島と石垣島は、現状不明。
減少の要因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : **アリサントマツリスゲ**

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Carex arisanensis* Hayata

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は束生し、高さ 30~50 cm。葉は幅 4~6 mm。穂状花序は 3~4 個、上部のものは接近し、下部のものは 1~2 個著しく離生し、雄花は頂生し、長さ 4~7 mm、その他は雌花で、卵状球形、長さ 6~10 mm、苞は長い鞘を持ち短葉があり、果胞は長さ 5.5~6.5 mm、先は長いくちばし状となる。瘦果は広卵形、長さ 3 mm。

分布域(県外) : 台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 高地の林内に生える。

生育状況 : 自生地は沖縄島北部に 2 ヶ所、石垣島に 2 ヶ所、西表島に 1 ヶ所知られているだけで、いずれもごく狭い範囲に生え、個体数は少ない。沖縄島の 1 ヶ所は、林道のわだちの中にあり、道路が改修されると消失する。西表島の自生地は、2005 年に新たに発見された。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : 森林伐採。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)

和名 : **リュウキュウヒエスゲ**

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Carex collifera* Ohwi

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は束生し、高さ 15~20 cm。葉は淡緑色、幅 2~3 mm、基部の葉鞘は褐色。小穂は 3~5 個で、接近または離れて生じ、頂生の雄花は長さ 3~7 cm、線形、他は雌花で長楕円形~卵形、果胞は苞の 2 倍長、先は長いくちばし状で 2 裂する。瘦果は卵状三角形、長さ 4 mm。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 高地の常緑樹樹林の林床に生える。

生育状況 : 沖縄島では 3 ヶ所の狭い範囲にごくわずかに産するだけである。

学術的価値 : 沖縄県の固有種である。

減少の要因 : 森林伐採。もともと自生地と自生地が限られている。

備考 : 石垣島にも産するとされてきた(初島, 1975; 初島・天野, 1994) が、石垣島のものは琉球大学理学部の標本室 (RYU) ではタツタカスゲ *C. tatsutakensis* Hayata と同定する見解が記された標本が所蔵されていた。ごく最近石垣島のはタイホクスゲ *C. taihokuensis* Hayata であるとの見解(堀内, 2005a, b) が発表された。局所的には豊産するという。石垣島のものを区別すると、リュウキュウヒエスゲは沖縄島固有ということになる。沖縄島産の個体を用いて染色体数が算定されている (Ohkawa & Yokota, 1998)。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。IUCN カテゴリー: Critically

Endangered (CR)。

- 文 献 : 初島住彦, 1975. 琉球植物誌 (追加・訂正). 沖縄生物教育研究会, 那覇, 721-722.
初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 261.
堀内 洋, 2005a. 日本及び中国大陸新産のカヤツリグサ科植物タイホクスゲ. 植物研究雑誌, 80(3) : 187-189.
堀内 洋, 2005b. 石垣島のリュウキュウヒエスゲ (カヤツリグサ科) の記録について. 植物研究雑誌, 80(3) : 190.
Ohkawa, T. & M. Yokota, 1998. Chromosome numbers and their variation patterns of *Carex* in the Ryukyu Islands. *Cytologia*, 63: 447-457.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **タイワンカンスゲ**
分 類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学 名 : *Carex longistipes* Hayata
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

- 形 態 の 特 徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、束生し、匍枝を出さない。花茎は長さ 20~30 cm、3 稜形。葉は扁平で、長さ 20~30 cm、幅 2~3 mm。小穂は 4~5 個が接してつき、雄花序は頂生し、線形、長さ 2~4 cm、雌花序は側生し、円筒形、長さ 1~3 cm、多数の花をやや疎らにつけ、最下部の包は端部に刺毛がある。雌花の鱗片は線状長楕円形、果胞は披針形、長さ 4~6 mm。瘦果は長楕円形、長さ 1.5 cm。
分 布 域 (県 外) : 台湾。
県 内 の 分 布 : 西表島。
生 育 環 境 : 山地の滝の崖面や溪流沿いの岩上に生える。
生 育 状 況 : 4 河川の流域に産することが知られるが、自生地は狭い範囲に限られ、個体数はごく少ない。
学 術 的 価 値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。
減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が少ない。
備 考 : これまで西表島産のチャイロスゲ *Carex fulvo-rubescens* Hayata と呼ばれていたものは、タイワンカンスゲ *C. longistipes* Hayata であることが指摘されている (勝山, 2005)。自生地の大半は、国立公園の特別保護地区に指定されているので、開発の恐れは少ない。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

- 文 献 : 勝山輝男, 2005. 日本のスゲ. 文一総合出版, 東京, 375pp.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **ホウザンスゲ**
分 類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学 名 : *Carex hoozanensis* Hayata
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧ⅠB類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

- 形 態 の 特 徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、束生し、匍枝はない。稈は長さ 5~20 cm、3 稜形。葉は稈よりずっと長く、幅 5~15 mm、オキナワスゲ *C. breviscapa* C. B. Clarke にやや似る。小穂は 2~3 個、長さ

1.5~3 cm、頂生する1個は雌性、線形、他は雄性、長楕円形。雌花の鱗片は卵形~長楕円形、長さ3 mm、柱頭は3個、果胞は倒卵形~楕円形、長さ7~8 mm、くちばしは短い。瘦果は倒卵形、長さ4~5 mm、鈍3稜形。

- 分布域(県外) : 台湾。
県内の分布 : 石垣島。
生育環境 : 山地の常緑樹林の林床に生える。
生育状況 : 自生地は1ヶ所で、ごく狭い範囲に限られ、個体数は少ない。
学術的価値 : 国内で唯一の自生地であり、琉球列島の植物相を特徴づける植物地理学上の貴重種である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。
保全対策 : 自生地は水源涵養保安林として保護されており、現在のところ開発の計画はないが、登山道沿いに生育しているので、登山道の改修や踏みつけの影響を受ける可能性がある。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : リュウキュウタチスゲ
分類 : カヤツリグサ科 (APG科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Carex maculata* Boott var. *tetsuoi* (Ohwi) T. Koyama
カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は束生し、高さ20~60 cm。葉はやや軟質、幅3~5 mm。小穂は3~4個、頂生のは雄性、長さ1~3 cm、その他は雌性、最下の苞は1~2個、果胞は著しく抽出し、扁三角形、無毛、長さ2.5 mm、広楕円形。瘦果は倒卵形、長さ1.5 mm。

- 県内の分布 : 沖縄島北部。
生育環境 : 山地林内に生える。
生育状況 : 自生地は1ヶ所が知られるだけで、個体数は少ない。
学術的価値 : 沖縄島の固有変種。
減少の要因 : 森林伐採。自生地が限られている。
備考 : 基本変種のタチスゲは沖縄島に産し、本州、四国、九州、朝鮮、台湾、中国、インドに広く分布する。IUCNカテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*

- 和名 : アオゴウソ
分類 : カヤツリグサ科 (APG科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Carex phacota* Spreng
カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 密に束生する常緑の多年草。高さ20~60 cm。葉は全体粉緑色で幅2~6 mm。小穂は3~5個、頂生の小穂は雄性、側小穂は雌性、円柱形で長さ2~6 cm、雌鱗片はさび色。果胞は楕円形で長さ3 mm前後、細かい突起を密生し、灰褐色~暗褐色。

- 分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、種子島、屋久島、中之島、宝島、奄美大島、朝鮮、台湾、中国、マレーシア、インド。

- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 常緑広葉樹林の谷間のやや暗い湿地に生える。
- 生育状況 : 名護市で山地谷部の湿地に株をつくり生育しているのが、1996年に確認された。その後、大宜味村と東村の各1ヶ所で確認され、名護市の別の1ヶ所でも確認されている。2004年には恩納村の1ヶ所でも確認されているが、恩納村の自生地はゴルフ場に隣接し、開発の恐れがある。沖縄市でも自生地が発見されたが、自生地はゴルフ場として開発され、アオゴウソが生える湿地そのものは残されたが、地形の改変による湿地環境の変化、ツルヒヨドリやアメリカハマグルマなどの外来植物の侵入、農薬・肥料の流入などで、元の個体群の数分の1にまで急減している。
- 学術的価値 : 沖縄県の唯一の産地である。
- 減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。外来種との競合。農薬の影響。
- 備考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。
- 文献 : 横田昌嗣・新城和治・比嘉清文, 1997. 琉球列島植物分布資料 14. 沖縄生物学会誌, (35) : 49-54.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・新城和治*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : コウボウシバ
- 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
- 学名 : *Carex pumila* Thunb.
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長い匍枝を出し、茎は高さ 10~20 cm、基部の葉鞘は暗紫褐色で少し糸網がある。葉は硬く、幅 2~4 mm。小穂は 4~6 個つき、上方の (1~) 2~3 個は雄性で線形、長さ 2~3 cm、汚血赤色。下方の 2~3 個は雌性で、長楕円形~円柱形、長さ 1.5~2 cm、ほぼ直立し、雌鱗片は一部血赤色を帯びる。果胞は卵状円錐形で 3 稜があり、長さ 6~8 mm で木質。
- 分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、種子島、屋久島、平島、宝島、奄美大島、東アジア、オーストラリア、ニュージーランド、チリ。
- 県内の分布 : 沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島。
- 生育環境 : 海岸砂地に生える。
- 生育状況 : 自生地は限られており、個体数は少ない。
- 減少の要因 : 海岸の開発。砂の採取。もともと自生地が限られている。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*

-
- 和名 : トックリスゲ
- 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
- 学名 : *Carex rhynchaenium* C.B.Clarke ex Merr.
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。葉は束生し、長さ 10~25cm、幅 1.5~3.5mm。花茎は束生する葉の中心からでて、長さ 4~10cm、オキナワスゲのように葉の間に埋もれてつき、総状花序は 3~4 個の小穂をつける。頂小穂は雄性、線形、長さ 1~2cm、側小穂は各節に単生し、雌性または雌雄性、細円柱形、長さ 1~2cm、苞は短い鞘があり、下方のものは葉状となる。果胞は細いトックリ形で、長さ 5.5~6.5mm、

幅 1.5mm、先は長さ 0.7~1mm の円柱状の嘴となる。瘦果は 3 稜のある披針状菱形、長さ 4~5mm。

- 分布域（県外）：台湾、フィリピン、ベトナム。
県内の分布：沖縄島北部。
生育環境：山地の常緑広葉樹林の林床に生える。
生育状況：自生地は 1ヶ所のみ知られ、個体数は 30 個体程度（勝山，2006）という。
学術的価値：分布域の北限で、国内で唯一の自生地である。沖縄島からベトナムにかけて隔離分布する種で、植物地理学上貴重である。
減少の要因：もともと自生地と個体数が少ない。

文献：勝山輝男，2006. 沖縄本島でトックリスゲ *Carex rhynchachaenium* を見出す. 植物地理・分類研究, 54(2): 154-156.

執筆者名：横田昌嗣

-
- 和名：オキナワヒメナキリ
分類：カヤツリグサ科（APG 科名：カヤツリグサ科）
学名：*Carex sacrosancta* Honda var. *tamakii* (T. Koyama) T. Koyama
カテゴリー：準絶滅危惧（NT） 環境省カテゴリー：準絶滅危惧（NT）

形態の特徴：常緑の多年草。根茎は短く匍匐し、多数の葉を束生し、茎は細く、高さ 40~60 cm、上方はざらつき、下部の包 1~2 個は短い葉状。葉は線形、硬質、長さ 35~50 cm、幅 2 mm、基部の鞘は濃褐色の繊維状となる。小穂は単一で、長楕円状円柱形、長さ 10~20 mm、径 2 mm で、3~4 個が疎らにつく。雌性鱗片は楕円形~卵形、長さ 20~22 mm、果胞は楕円状披針形、長さ 2.8~3.2 mm、瘦果は卵形、長さ 1.5 mm。

- 県内の分布：沖縄島北~中部、石垣島、西表島。
生育環境：山地の自然林の溪流沿いの岩上に生える。
生育状況：読谷村以北の地域（本部半島を除く）の限られた河川の中流域付近に産する。もともとはやや普通の種であるが、多くの河川に建設されたダムにより自生地が消失している。石垣島では 2 河川、西表島では 2 河川の流域に産するが、個体数は少ない。
学術的価値：沖縄島の固有変種である。
減少の要因：もともと自生地が限られている。ダム建設による自生地の水没。自然林の伐採。
備考：石垣島と西表島の個体については、分類学的な検討が必要である。基本変種のジングウスゲは本州、四国、九州、台湾、中国に分布する。

文献：沖縄総合事務局北部ダム事務所，1995. 平成 5 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所，1995. 羽地大川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，3-12, 103-113.
沖縄総合事務局北部ダム事務所，1995. 平成 6 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所，1997. 平成 7 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，1-7.
沖縄総合事務局北部ダム事務所，1997. 大保ダム建設発生土の処分候補地に係る生物環境調査データ（陸域・海域）. 沖縄建設弘済会，3-14, 117-135, 277-286, 349-373.
沖縄総合事務局北部ダム事務所，1998. 平成 8 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，1-6.

沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 奥間川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-9, 99-112.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 与那川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-10, 101-117.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 座津武川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-8, 87-95.
玉城松栄, 1964. 琉球産カヤツリグサ科の検索 [I]. 沖縄生物学会誌, 1 (1) : 14-21.
横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : サコスゲ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Carex sakonis* T. Koyama
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 束生して大きな株をつくる多年草。葉は深緑色で硬く、長さ 70~90 cm、幅 3.5~7 mm、基部の鞘部は帯紫褐色でのち繊維に分解する。花茎は高さ約 70 cm、三角柱形、2~5 個が小穂をつける。小穂は多く雌性で線状円錐形、長さ 4~8 cm、雌花部は雄花部より短いかまたは同長、雄花部は線形。果胞は倒披針状長楕円形、長さ 5.5~6.3 mm。

分布域(県外) : 宝島、奄美大島、徳之島。

県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島北部、久米島、来間島。

生育環境 : 海岸近くの岩場や低木林内に生える。

生育状況 : 沖縄島北部では 3ヶ所に産するが、道路工事の影響をうけ、個体数が減少しているように思われる。久米島では 2005 年に 1ヶ所で確認されている。伊平屋島では 2ヶ所で確認されているが、1ヶ所はダム建設でほぼ消失した。来間島では全く確認することができず、現状は不明である。

学術的価値 : 琉球列島の固有種で、分布域の南限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。

文献 : 玉城松栄, 1958. 琉球新産スゲ属三種に就いて. 琉球大学生物クラブ誌, 2 (1) : 2-6.

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : シオクゲ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Carex scabrifolia* Steud.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は匍枝を出し、茎は束生し、高さ 30~50 cm、3 稜形、基部の葉鞘は暗赤紫色、網状。葉は極めて長く、幅 1.5~2.5 mm、やや溝がある。小穂は 3~4 個、上方の 2~4 個は雄性、線形、長さ 2~4 cm、帯赤色、下方の 1~2 個は雌性、長楕円形~卵形、長さ 1~2 cm、包は葉状、茎より長く、雌穂の鱗片は卵状三角形。果胞は長楕円形、長さ 7~8 mm、短いくちばしがある。

分布域(県外) : ウスリー、北海道、本州、四国、九州、奄美大島、台湾、中国、朝鮮。

県内の分布 : 伊是名島、久米島、沖縄島、西表島、与那国島。

- 生育環境 : 水田、海岸の湿地または海水中に生える。
 生育状況 : 伊是名島と西表島ではそれぞれ1ヶ所の自生地が知られているが、まれである。沖縄島北部では2005年に1ヶ所で少数個体が確認されている。与那国島では2004年に1ヶ所で確認されている。他の島の現状は不明。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の埋立。
 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・北原 孝*

- 和名 : **チャガヤツリ**
 分類 : カヤツリグサ科 (APG科名: カヤツリグサ科)
 学名 : *Cyperus amuricus* Maxim.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 一年草。稈は束生し、長さ20~60 cm、3角柱形。葉は稈より短く、扁平、幅2~5 mm。複生する花序は長さ5~10 cm、苞は3~4個、枝は5~10個、穂状花序は卵形~長楕円形、長さ2~4 cm、幅10~15 mm、多数の小穂を密につけ、小穂は線形、長さ7~12 mm、10~16花をつけ、赤褐色、鱗片は広倒卵形、長さ1.5 mm。瘦果は長さ1 mm、倒卵状3稜形。
 分布域(県外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、台湾、ウスリー、アムール、中国東北部、朝鮮。
 県内の分布 : 沖縄島北部。
 生育環境 : 水田や湿地に生える。
 生育状況 : 1938年に上地文一により沖縄島東村有銘で採集された標本が琉球大学理学部の標本室(RYU)に保存されており、Walker(1976)により引用されているが、その後発見されてない。
 減少の要因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。

文献 : Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 260-261.

執筆者名 : 横田昌嗣

- 和名 : **オオホウキガヤツリ**
 分類 : カヤツリグサ科 (APG科名: カヤツリグサ科)
 学名 : *Cyperus digitatus* Roxb.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

- 形態の特徴 : 夏緑性の多年草。根茎は短く、球茎状。稈は歪んだ3角柱形、長さ60~150 cm、下部に葉がある。葉は扁平、幅5~15 mm、下面は有稜。複散形花序は長さ15~22 cm、小花序は4~9個、苞は2~3枚、枝は約7個、小穂は1~5個、密につき、線形、長さ6~8 mm、幅1~1.5 mm、鱗片は長楕円状楕円形、雄蕊は3個、柱頭は3個。瘦果は長楕円状楕円形。
 分布域(県外) : 台湾、インド、世界の熱帯と亜熱帯。
 県内の分布 : 沖縄島北部、宮古島、石垣島、西表島、与那国島。
 生育環境 : 低地の湿地や水田に生える。
 生育状況 : 沖縄島は1ヶ所、石垣島は2ヶ所、西表島は1ヶ所の自生地が知られているが、湿地の開発や水田の減少により急減している。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。
減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が限られている。湿地の開発。水田の埋立。除草剤の使用。
備 考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015年)。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・北原 孝*

和 名 : **オニクグ**
分 類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学 名 : *Cyperus javanicus* Houtt.
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、木質。稈は高さ 50~100 cm、幅 3~5 mm、鈍三角柱形。葉は革質、線形、幅 8~12 mm、多少灰緑色を帯びる。複散形花序は幅 7~15 cm、苞は 3~5 個、枝は長さ 7 cm、3~5 個の穂状花序を密生する。小穂は長楕円状卵形~広披針形、やや扁平、長さ 6~8 mm、幅 2~2.5 mm、鱗片は広卵形、長さ 2.5~3 mm、柱頭は 3 個。瘦果は長さ 1.5 mm、倒卵形~広倒卵形、3 稜形。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、インド、インドシナ、マレーシア、ミクロネシア、ハワイ、アフリカ。

県 内 の 分 布 : 沖縄島北部、座間味島、宮古島、石垣島、西表島、鳩間島、由布島、平西島、黒島、嘉弥真島、小浜島、与那国島、尖閣諸島 (魚釣島、久場島)。

生 育 環 境 : 海岸近くの湿地に生える。

生 育 状 況 : 沖縄島では 2005 年に 1 ヶ所で新たに確認された。座間味島では 2 ヶ所で確認されているがまれである。宮古島では 2 ヶ所、石垣島では 3 ヶ所、与那国島では 3 ヶ所で採集された記録がある。今回の調査で小浜島では 1 ヶ所、西表島では数ヶ所で確認された。鳩間島では、2017 年に 1 ヶ所で数個体が確認された。自生地は集落や海岸近くにあるため、護岸工事や埋立などで自生地が急速に失われている。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。

減 少 の 要 因 : 湿地の埋立。護岸工事。もともと自生地と個体数が限られている。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文 献 : 知念美香, 1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究, (11) : 75-105.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和 名 : **ヒメホウキガヤツリ**
分 類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学 名 : *Cyperus nutans* Vahl var. *subprolixus* (Kuk.) T. Koyama
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 の 特 徴 : 夏緑性の多年草。根茎は短く、球茎状。稈は高さ 50~100 cm、三角柱形。葉は稈より短く、幅 5~10 mm。複散形花序は長さ 10~20 cm、苞は 2~4 枚、花序より長く、枝は 5~10 個、長さ 15 cm になり、小花序は円筒状、長さ 2~3 cm、幅 5~10 mm、小穂は幅 2~2.5 mm、扁平、10~16 花をやや疎につけ、鱗片は長楕円状卵形、長さ 2 mm、雄蕊は 3 個、柱頭は 3 個。瘦果は長さ 2 mm、狭長楕円形、やや扁平状 3 稜形。

分布域（県外）：台湾、中国南部、インド、インドシナ、マレーシア、オーストラリア、アフリカ。
 県内の分布：阿嘉島、宮古島、石垣島、西表島、内離島、波照間島、与那国島。
 生育環境：低地の湿地や水田に生える。
 生育状況：阿嘉島では1ヶ所、宮古島では2ヶ所、石垣島では数ヶ所、西表島では数ヶ所、内離島と波照間島では各1ヶ所の自生地が知られているが、オオホウキガヤツリ *C. digitatus* Roxb. と同様に湿地の開発や水田の減少により急減している。
 学術的価値：分布域の北限である。
 減少の要因：もともと自生地と個体数が限られている。湿地の開発。水田の埋立。除草剤の使用。
 備考：石垣市自然環境保全条例保全種（2015年）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。
 文献：宮城康一, 1974. 慶良間列島の植物。“沖縄海岸国立公園拡張候補地学術調査報告書, 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島”, 沖縄自然研究会（編）, 沖縄県, 143-168.

執筆者名：横田昌嗣*・北原 孝*

和名：コウシュンスゲ
 分類：カヤツリグサ科（APG科名：カヤツリグサ科）
 学名：*Cyperus pedunculatus* (R. Br.) Kern
 カテゴリー：絶滅危惧 I A類（CR） 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A類（CR）

形態の特徴：小形の常緑の多年草。根茎は長く匍匐し、葉鞘は褐色、茎は長さ3~10 cm、三角形、6~10 cmの間隔で生ずる。葉はやや束生し、長さ7~12 cm、幅4~5 mm。花序は頭状花序で、包は3~5個、長さ2~7 cm、幅2~3 mm、穂状花序は卵円形~卵状球形、密な多数の小穂からなり、長さ8~15 mm、小穂は卵形、長さ4~5 mm、鱗片は4個、広卵形。瘦果は卵状披針形。
 分布域（県外）：台湾、熱帯アジア、オーストラリア北部。
 県内の分布：石垣島。
 生育環境：海岸の砂地の草原に生える。
 生育状況：距離的に接近した3ヶ所の自生地が知られるだけで、自生地はごく狭い範囲に限られる。今回の調査では全く確認することができず、現状不明。既に絶滅した可能性がある。
 学術的価値：分布域の北限で、日本で唯一の産地である。
 減少の要因：もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。砂の採集。
 備考：石垣市自然環境保全条例保全種（2015年）。

執筆者名：横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名：スナハマスゲ
 分類：カヤツリグサ科（APG科名：カヤツリグサ科）
 学名：*Cyperus stolonifer* Retz.
 カテゴリー：絶滅危惧 II類（VU） 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：常緑の多年草。根茎は長く横走し先端に塊根がある。稈は高さ10~30 cm。葉は稈より長いまたは同長、幅2~3 mm、鞘は褐色。
 分布域（県外）：台湾、中国南部、熱帯アジア、オーストラリア、アフリカ。

県内の分布 : 宮古島、石垣島、西表島、外離島、内離島、小浜島。
生育環境 : 海岸の砂浜に生える。
生育状況 : 西表島ではやや多く、いますぐ絶滅する恐れはないが、宮古島と石垣島では自生地は少なく、開発により消失する恐れがある。
学術的価値 : 分布域の北限である。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。
減少の要因 : 海岸の開発。海岸の砂の採取。自生地が限られている。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*

和名 : カガシラ (ヒメシンジュガヤ)
分類 : カヤツリグサ科 (APG科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Diplacrum caricinum* R. Br.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II類 (VU)

形態の特徴 : 小形の一年草。茎は単一または基部で分枝し、長さ 5~20 cm、3稜形、多数の葉を互生する。葉は線形、扁平、長さ 15~25 mm、幅 2~3 mm、鞘は長さ 3~10 mm。花序は数~十数個が腋生し、頭状、径 5 mm 以下、淡緑色、雌小穂は長さ 3~4 mm、短梗があり、鱗片は長楕円形、5~8 肋がある。瘦果は球形、径 1 mm、粗い網状模様がある。
分布域 (県外) : 本州、四国、九州、台湾、中国、インド、マレーシア、オーストラリア。
県内の分布 : 沖縄島、屋我地島、石垣島、西表島。
生育環境 : 低地の湿地や湿った裸地に生える。
生育状況 : 沖縄島 (名護市) と屋我地島では各 1ヶ所で 50 年以上前に採集されているが、現状は不明。2005 年に恩納村の 2ヶ所で新たに発見された。石垣島と西表島の現状は不明。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。湿地の埋立。自生地の開発。農薬の使用。帰化種との競合。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・横田昌嗣(追補)

和名 : オオハリイ
分類 : カヤツリグサ科 (APG科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Eleocharis congesta* D. Don var. *congesta*
カテゴリー : 絶滅危惧 II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草または多年草。根茎は発達せず、匍枝も欠く。稈は多数が束生し、円く糸状、高さ 8~25 cm、幅 0.8 mm、普通は少し外側に曲る。小穂は頂生し、密に多花をつけ、卵状長楕円形、長さ 6~8 mm、幅 2.5~2.8 mm、鱗片は卵形、長さ 2~2.5 mm、花柱基部は瘦果の幅の約 1.5 倍。瘦果は倒卵形、3稜形、長さ 1.2 mm、刺針は 6 個、瘦果の 2 倍の長さになる。
分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、与論島、中国、インドシナ、ヒマラヤ。
県内の分布 : 沖縄島、久米島、石垣島、与那国島。
生育環境 : 湿地や水田に生える。
生育状況 : 久米島、石垣島、与那国島ではそれぞれ 1ヶ所で 1970 年代に採集された標本があり、沖縄島では数ヶ所で採集されているが、自生地は湿地の開発で減少している。

減少の要因 : 湿地の開発。水田の減少。
備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。*種 *Eleocharis congesta* として評価。

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : ハライ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Eleocharis congesta* D. Don var. *japonica* (Miq.) T. Koyama
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。オオハライに似るが、稈は細く、幅 0.2~0.4 mm、真直にのび、高さ 6~20 cm になる。小穂は卵形~狭卵形、長さ 4~6 mm、幅 1.5~2 mm、鱗片は長さ 1~1.5 mm。瘦果は長さ 1 mm。
分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、宝島、奄美大島、徳之島、台湾、朝鮮、中国、インドシナ、インド、マレーシア。
県内の分布 : 沖縄島、宮古島、石垣島、西表島。
生育環境 : 基本変種のオオハライ var. *congesta* や変種ヤリハライ var. *subvivipara* (Bock.) T. Koyama と同様に、自生地は湿地の開発で減少している。
生育状況 : 沖縄島では数ヶ所で採集された記録があるが、その自生地のほとんどは開発が進んでおり、消失している可能性が高い。
減少の要因 : 湿地の開発。水田の減少。
備考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。*種 *Eleocharis congesta* として評価。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*

和名 : ミスミイ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Eleocharis fistulosa* (Poir.) Link
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、長い匍枝をだす。稈は束生し、鋭3稜形、高さ 40~80 cm、幅 2.5~4 mm、小穂は頂生し、密に多花をつけ、円柱形、長さ 2~3 cm、幅 3~4 mm、鱗片は広卵形、長さ 4~5 mm、柱頭は3個。瘦果は広倒卵形、長さ 1.5~2 mm、刺針は6個、柱基よりやや長い。
分布域(県外) : 本州(愛知県以西)、四国、九州、徳之島、沖永良部島、与論島、台湾、中国南部、インド、マレーシア、オーストラリア、熱帯アメリカ。
県内の分布 : 伊是名島、沖縄島、宮古島、池間島、石垣島、西表島、与那国島。
生育環境 : 湿地や水田に生える。
生育状況 : 伊是名島では1ヶ所、沖縄島では4ヶ所、石垣島では2ヶ所、西表島では1ヶ所の自生地が知られているが、自生地は開発が進んでいる。他の島の現状は不明。
減少の要因 : 湿地の開発。水田の減少。除草剤の使用。
備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 億首川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 99-110.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : タマハリイ

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Eleocharis geniculata* (L.) Romer et Schult.

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草または短命な多年草。根茎は発達せず、匍枝も欠く。稈は多数が束生し、円く糸状、高さ 7~40 cm、幅 0.2~0.4 mm。小穂は頂生し、密に多花をつけ、卵状球形~卵形、長さ 3~7 mm、幅 3~4 mm、鱗片は広楕円形、長さ 2 mm、雄蕊は 2 個、柱頭は 2 個。瘦果は広倒卵形、長さ 1 mm、刺針は 6~7 個、瘦果よりやや長く、表面に小刺がある。

分布域 (県外) : 台湾、熱帯。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、屋我地島、慶良間諸島 (座間味島、外地島)、久米島、南大東島、宮古島、石垣島、西表島、魚釣島。

生育環境 : 海岸に近い湿地や水田に生える。

生育状況 : 沖縄島では北部から南部まで数ヶ所で記録されており、他の島嶼でもそれぞれ 1~2 ヶ所の自生地が知られている。湿地の開発、水田の埋立、除草剤の使用などで減少している。

減少の要因 : 湿地の開発。水田の埋立。除草剤の使用。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : トクサイ

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Eleocharis ochrostachys* Steud.

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、長い匍枝をだす。稈は束生し、円柱形、高さ 50~80 cm、幅 2~3 mm。小穂は頂生し、密に多花をつけ、円柱形、長さ 1~2.5 cm、幅 3~4 mm、鱗片は長楕円状円形、長さ 4~5 mm、雄蕊は 2 個、柱頭は 3 個。瘦果は広倒卵形、長さ 1.5~2 mm、刺針は 6~7 個、瘦果より長く、表面に小刺がある。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、インド、マレーシア、マダガスカル。

県内の分布 : 沖縄島北部、屋我地島、大東諸島、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 低地の湿地や廃田に生える。

生育状況 : 沖縄島は 3 ヶ所、屋我地島は 1 ヶ所、石垣島は 2 ヶ所、西表島は 2 ヶ所の自生地が知られているが、自生地は開発が進んでいる。他の島の現状は不明。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : 湿地の開発。水田の減少。除草剤の使用。外来種との競合。

備考 : 西表島の自生地の一つは、国指定の天然保護区域として保護されているが、外来種のアメリカハマグルマが侵入している。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : カヤツリマツバイ
 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
 学名 : *Eleocharis retroflexa* (Poir.) Urban subsp. *chaetaria* (Romer et Schult.) T. Koyama
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は発達せず、匍枝も欠く。稈は多数が束生し、円く糸状、高さ 2.5~20 cm、幅 0.2~0.3 mm。小穂は頂生し、小形、長さ 3~5 mm、幅 1.5~2 mm、2~3 対の花をつけ、鱗片は卵形、長さ 2~2.5 mm、竜骨があり、雄蕊は 3 個、柱頭は 3 個。瘦果は倒卵形、鈍 3 稜形、長さ 1.2 mm、刺針は 6 個、瘦果と同長、表面に小刺がある。

分布域 (県外) : インドシナ、インド、ネパール、スリランカ、マレーシア。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 山地の湿地に生える。

生育状況 : 石垣島の 1ヶ所で 1951 年 (多和田眞淳採集、天野鉄夫 No. 6849) と 1958 年 (新納義馬 No. 2060) の 2 回採集されており、その標本が琉球大学理学部の標本室 (RYU) に所蔵されているが、近年は野外調査で見つかっておらず、現状は不明。既に絶滅した恐れがある。

学術的価値 : 分布域の北限であり、インド・マレーシア系の植物として植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : マシカクイ
 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
 学名 : *Eleocharis tetraquetra* Nees
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、時に匍枝をだす。稈は多数が束生し、鋭 4 稜形、高さ 40~60 cm、幅 1~2 mm。小穂は頂生し、密に多花をつけ、狭卵形~広披針形、長さ 8~17 mm、幅 3~5 mm、鱗片は長楕円形、鈍頭、長さ 3~4 mm、雄蕊は 3 個、柱頭は 3 個。瘦果は倒卵形、扁 3 稜形、長さ 1.5~2 mm、刺針は 6 個、柱基とほぼ同長、逆向する小刺針がつく。

分布域 (県外) : 本州 (中国地方)、四国、九州、屋久島、台湾、中国、インド、マレーシア、オーストラリア。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 湿地に生える。

生育状況 : 名護市の 2ヶ所で 1937 年と 1951 年に採集された他は記録がなかったが、2005 年に恩納村の 1ヶ所で発見された。その自生地は道路建設で消失した。

学術的価値 : 琉球列島では限られた分布を示し、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。湿地の埋立。

備考 : 恩納村の自生地は道路工事で消失したが、隣接した環境に生えるマネキシンジュガヤやヒメホタルイとともに近隣の類似の環境に移植が試みられている。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヒメヒラテンツキ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Fimbristylis autumnalis* (L.) Romer et Schult.
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。根茎を欠く。稈は束生し、高さ 30~40 cm、軟らかく、扁平。葉は稈より短く、軟弱、幅 1.5 ~2.5 mm、鞘は 2 列に互生する。花序は 2~3 回分岐し、多数の小穂を疎らにつけ、長さ 3~7 cm、苞は 2~3 個、線形、小穂は披針形~線状披針形、長さ 3~6 mm、幅 1.5 mm、7~16 花をつけ、鱗片は狭卵形~卵状長楕円形、長さ 1.5~2 mm、雄蕊は 1~2 個、柱頭は 3 個。瘦果は倒卵形、長さ 0.7 mm。
分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、中之島、奄美大島、徳之島、中国、朝鮮、北アメリカ。
県内の分布 : 石垣島、西表島。
生育環境 : 湿地や水田の畦に生える。
生育状況 : 西表島の 4 ヶ所で採集された標本があり、その内の 1 ヶ所では 2005 年に生育が確認されている。自生地にはアメリカハマグルマが侵入しており、競合が危惧される。石垣島の現状は不明。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。湿地の開発。水田の埋立。除草剤の使用。外来種との競合。
備考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)

和名 : オオアゼテンツキ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Fimbristylis bisumbellata* (Forssk.) Bubani
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎を欠く。稈は密に束生し、高さ 7~20 cm、幅 0.3~0.5 mm。葉は稈より短く、狭線形、長さ 3~11 cm、幅 0.5~1.5 mm。花序は 2~3 回分岐し、枝は 5~10 個、多数の小穂を疎らにつけ、苞は 2~3 個、線形、小穂は長楕円状卵形~狭長楕円形、長さ 3~5 mm、幅 1.5 mm、多数の花を密につけ、鱗片は広卵形、長さ 1.5~2 mm、柱頭は 2 個。瘦果は広倒卵形、長さ 0.8~1 mm。類似の環境に生えるヒデリコ *F. miliacea* (L.) Vahl subsp. *miliacea* に似るが、小穂が細長いので容易に識別できる。
分布域 (県外) : 台湾、インド、マレーシア、アフリカ。
県内の分布 : 伊是名島、沖縄島 (北部~南部)、宮古島。
生育環境 : 湿地や水田に生える。
生育状況 : 伊是名島では 1 ヶ所で、沖縄島では 6 ヶ所で採集されているが、沖縄島の自生地の多くは南部にあり、開発が進んでいることから減少が危惧される。宮古島の現状は不明。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。湿地の開発。水田の減少。除草剤の使用。
備考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・尾川原正司*・横田昌嗣(追補)

和名 : ツクシテンツキ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Fimbristylis dichotoma* (L.) Vahl subsp. *podocarpa* (Nees et Meyen) T. Koyama
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。基本亜種のテンツキに似て、根茎は発達せず、茎は密に束生し、高さ 25~60 cm。葉は扁平、茎と同長、幅 1~2 mm、有毛。小穂は卵形、長さ 8~15 mm、側小穂は長さ 2~7 cm の有毛の長梗があり、最下の苞は線形、有毛、花序よりも長い。鱗片は長楕円形、長さ 4 mm。瘦果は倒卵状三角形。

分布域(県外) : 九州、インド、マレーシア、太平洋諸島。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島。

生育環境 : 低地の日当たりのよい草地に生える。

生育状況 : 沖縄島では 3ヶ所、石垣島では 1ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。

備考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。*種 *Fimbristylis dichotoma* として評価。

文献 : Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 251.

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*

和名 : トモエバテンツキ

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Fimbristylis fimbristylodes* (F. Muell.) Druce

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 一年草。根茎を欠く。稈は束生し、高さ 7~12 cm、基部に葉をつける。葉は孤状に曲がり、開出し、長さ 2.5~4 cm、幅 1~2 mm。複生する花序は 3~10 個の小穂をつけ、長さ 1.5~4 cm、苞は 2~3 個、長さ 7~15 mm、小穂は披針形、扁平、長さ 5~10 mm、幅 1.5~2 mm、7~10 花をつけ、鱗片は卵形、長さ 3 mm、背面に小刺があり、雄蕊は 3 個、柱頭は 3 個。瘦果は倒卵形~広倒卵形、長さ 0.6~0.8 mm、幅 0.5~0.8 mm。

分布域(県外) : 朝鮮、ミャンマー、マレーシア、オーストラリア。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 近海の前野や牧場に生え、時にシオカゼテンツキと混生する。

生育状況 : 京都大学の植物標本庫 (KYO) に沖縄島と西表島で採集された標本が所蔵されている (Walker, 1976)。2017 年に石垣島の 3ヶ所で生育が確認された。沖縄島と西表島の現状は不明。

学術的価値 : 著しい隔離分布を示し、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 253.

執筆者名 : 横田昌嗣*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・松島昭司(追補)

和名 : ハナシテンツキ

分 類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学 名 : *Fimbristylis globulosa* (Retz.) Kunth
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎を欠く。稈は密に束生し、高さ 20~40 cm、扁 3 稜形。葉は葉鞘のみで葉身を欠き、葉鞘は 2~3 個、長さ 5 cm。花序は単一または分岐し、少数の小穂を疎らにつけ、苞は 2~3 個、小穂は球状楕円形~長楕円状卵形、長さ 4~8 mm、幅 3~4 mm、密に花をつけ、鱗片は長楕円形、長さ 2~2.5 mm、雄蕊は 2~3 個、柱頭は 2~3 個。瘦果は扁平、3 稜形、長さ 0.7 mm。

分布域(県外) : インドシナ、マレーシア、インド、スリランカ、ミクロネシア。

県内の分布 : 石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 低地の湿地や廃田に生える。

生育状況 : 石垣島では 3 ヶ所に産するが、個体数は極めて少ない。西表島では数ヶ所に産するが、外来種のアメリカハマグルマが侵入し、湿地の開発や水田の除草剤の使用で減少している。与那国島の現状は不明。

学術的価値 : インド・マレーシア系の植物で、八重山諸島の植物相を特徴づける貴重種である。本種はテンツキ属ではあるが、葉は退化しており、ハリイ属に似た特徴を示している。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。湿地の開発。除草剤の使用。外来種との競合。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・尾川原正司*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **チャイロテンツキ**
分 類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学 名 : *Fimbristylis leptoclada* Benth. var. *takamineana* (Ohwi) T. Koyama
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅 (EX)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。根茎はなく、茎は密に束生し、高さ 20~30 cm、わずかに稜があり、下部にやや無葉の 1 個の鞘がある。葉は扁平、長さ 10~20 cm、幅 1.5 mm、無毛、葉鞘は帯褐色で短い。花序は複生し、5~10 個の小穂からなり、包は長さ 2~3 cm、小包は鱗片状、枝は 2~4 個、長さ 2 cm 以下、小花序は 2~3 個の小穂からなり、小穂は長楕円形、長さ 4~6 mm、鱗片は楕円形、長さ 2 mm。瘦果は広倒卵形、長さ 0.7 mm。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 低地の湿地に生える。

生育状況 : 1938 年に 1 度だけ発見されているが、その後確認されていない。絶滅した可能性が極めて高い。

学術的価値 : 石垣島の固有変種である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。湿地や水田の開発。

備考 : 基本変種はフィリピン、マレー半島、マレーシアに分布する。

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **タイワンヒデリコ**
分 類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学 名 : *Fimbristylis miliacea* (L.) Vahl subsp. *koidzumiana* (Ohwi) T. Koyama
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草または多年草。根茎を欠く。稈は密に束生し、扁4稜形、高さ10~60 cm。葉は2列に互生し、幅1.5~2.5 mm。花序は数回分岐し、多数の小穂をつけ、苞は2~4個、小穂は卵円形、長さ3~5 mm、鱗片は卵形、長さ1 mm、雄蕊は1~2個、柱頭は3個。瘦果は倒卵形、長さ0.6 mm。基本亜種のヒデリコと比べ、小穂は大きく、長さ3~5 mmに達することで区別される。

分布域(県外) : 本州、口之島、徳之島、沖永良部島、台湾、インドシナ、グアム。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 水田に生える。

生育状況 : 沖縄島では北部の1ヶ所で記録されているだけで、まれである。石垣島と西表島では数ヶ所に産するが、水田の転用と除草剤の使用により、自生地は減少している。

減少の要因 : 水田の減少。除草剤の使用。外来種との競合。

備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)

和名 : **ウナズキテンツキ**

分類 : カヤツリグサ科 (APG科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Fimbristylis nutans* (Retz.) Vahl

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎を欠く。稈は密に束生し、高さ15~40 cm、幅0.5~1.5 mm、3~4稜形。葉は葉身を欠き、鱗片状または筒状、長さ3~5 cm。花序は1個の小穂からなり、苞は1個、卵形、長さ2~3 mm、小穂は卵形~長楕円状卵形、點頭して直角に折れ曲がり、長さ6~10 mm、幅2.5~3.5 mm、密に多花をつけ、鱗片は広卵形、長さ1.2 mm、雄蕊は1~2個、柱頭は3個。瘦果は倒卵形、長さ1.2 mm。

分布域(県外) : 台湾、中国南部、インド、マレーシア、ミクロネシア、オーストラリア。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 低地の湿地に生える。

生育状況 : 石垣島では1938年に1ヶ所で、西表島では1970年代に2ヶ所で採集された記録があるが、いずれも野外調査で確認することができない。西表島で1970年代に採集された場所は、水田か廃田と思われるが、現在は遷移が進んでアダン林やマングローブになっており、確認できない。石垣島では水田の開発が進んでいる。絶滅した恐れがある。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。湿地の減少。遷移の進行。

備考 : IUCNカテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : **イシガキイトテンツキ (ハリテンツキ)**

分類 : カヤツリグサ科 (APG科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Fimbristylis pauciflora* R. Br.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅 (EX)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎を欠く。稈は密に束生し、高さ5~20 cm、糸管状。葉は通常葉身を欠き、時に

針状の葉身があり、葉鞘は少数、長さ 1~3 cm。花序は 1 個の小穂を頂生し、苞は狭披針形、小穂は長楕円状楕円形~披針状長楕円形、長さ 4~6 mm、幅 1~1.2 mm、3~4 花をつけ、鱗片は披針状長楕円形、前縁、鈍頭、らせん状につき、少数、長さ 2.8~3 mm、幅 1~1.2 mm、柱頭は 3 個。瘦果は倒卵形、長さ 0.7~0.8 mm、幅 0.5 mm、表面に小じわがある。

- 分布域 (県外) : マレーシア、ミクロネシア、オーストラリア北部。
- 県内の分布 : 石垣島。
- 生育環境 : 山地の湿地に生える。
- 生育状況 : 石垣島の 1ヶ所で採集された記録があり (玉城, 1964)、その標本は鹿児島大学の標本室 (KAG) に所蔵されている (Walker, 1976)。その後自生地では見つかっておらず、現状不明。絶滅した可能性が高い。
- 学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。マレーシア系の植物として、植物地理学上貴重である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。湿地の開発。

文献 : 玉城松栄, 1964. 琉球産カヤツリグサ科の検索 [I]. 沖縄生物学会誌, 1 (2) : 66-71.
Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 252-253.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : カギテンツキ
- 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
- 学名 : *Fimbristylis schoenoides* (Retz.) Vahl
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短い。稈は束生し、高さ 5~40cm、幅 0.3~0.5mm、扁平で溝がある。葉は少数で、根生し、線状、長さ 2~16cm、幅 0.5~1mm。花序は 1~4 個の小穂からなり、頂生する小穂は 1 個で、側生する小穂は 1~3 個、卵形~楕円形、長さ 5~14mm、幅 3~5mm、多数の花をつけ、苞は 1~2 個、目立たない。鱗片は卵形~円形、長さ 3mm、雄蕊は 3 個、柱頭は 2 個。瘦果は倒卵形~円形、長さ 1.2~1.5mm、幅 1~1.1mm。

- 分布域 (県外) : 台湾、インド、中国南部、インドシナ、マレーシア、オーストラリア。
- 県内の分布 : 石垣島。
- 生育環境 : 低地の日当たりの良い湿地に生える。
- 生育状況 : 1ヶ所でごく少数個体が確認されているだけである。自生地周辺に外来種のアメリカハマグルマやヒマワリヒヨドリが侵入している。かつて湿地であった場所が、遷移の進行でアダン林に変わりつつある。2017 年の調査では、確認することができなかった。
- 学術的価値 : 分布域の北限で、日本では唯一の自生地である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。外来種との競合。遷移の進行。
- 備考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 横田昌嗣・北原孝

- 和名 : クロタマガヤツリ
- 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
- 学名 : *Fuirena ciliaris* (L) Roxb.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。根茎を欠く。稈は高さ 10~40 cm、鈍 3 稜形。葉は線形、扁平、軟質、有毛、長さ 5~15 cm、幅 3~7 mm。円錐花序は小穂の集団 1~3 個からなり、3~10 個の小穂が密につき、小穂は卵形~長楕円形、長さ 4~7 mm、幅 3 mm、密に多花をつけ、鱗片は楕円形、長さ 1.5 mm、有毛。瘦果は倒卵円形、鋭 3 稜形、長さ 0.7 mm、6 個の鱗片を持つ。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、平島、宝島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島、台湾、朝鮮、中国、インド、インドシナ、マレーシア。

県内の分布 : 伊是名島、沖縄島、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 低地の湿地や水田に生える。

生育状況 : 伊是名島 1 ヶ所、沖縄島 3 ヶ所、石垣島 2 ヶ所、西表島 2 ヶ所、与那国島 1 ヶ所で確認されているが、1970 年代前半以前の記録が多く、現在も自生が確認できるのは沖縄島や西表島などのごくわずかである。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。湿地の開発。水田の減少。除草剤の散布。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 億首川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 99-110.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : アンペラ

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Lepironia articulata* (Retz.) Domin

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は木質、匍匐する。稈は接してつき、長さ 40~150 cm、幅 2~7 mm、イヌクログワイ *Eleocharis dulcis* (Burm. f.) Trin. のように稈に隔壁があり、隔壁の間隔は 5~10 mm。葉は退化し、葉身はなく、葉鞘のみとなる。穂状花序は 1 個の小穂からなり、稈に続く苞は棒状、長さ 2~6 cm、小穂は偽束生し、卵円形~長楕円状楕円形、長さ 1~4 cm、幅 5~15 mm、雌花と雄花を含み、小穂の苞は広倒卵形~円形、長さ 4~6 mm、花被片は線状披針形、雄花の雄蕊は 1 個、雌花の柱頭は 2~3 個。瘦果は倒卵形~円形、長さ 3~4 mm、幅 2.5~3 mm。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、インド、インドネシア、マレーシア、マダガスカル、オーストラリア、ポリネシア。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 湿地に生える。

生育状況 : 西表島東部の 2 ヶ所で採集された記録があるが、最近では確認されていない。1970 年代の採集当時では、湿地に群生すると標本のラベルに書かれている。2017 年に西表島西部の 1 ヶ所で本種と思われるものが採取された。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。

備考 : 台湾では、畳表の材料として古い時代に東南アジアから導入された可能性がある (Koyama *et al.*, 2000) というが、西表島では野生状態で生育していた (初島, 1975) という。

文献 : 初島住彦, 1975. 琉球植物誌 (追加・訂正). 沖縄生物教育研究会, 那覇, 904.

Koyama, T., C.-S. Kuoh & W.-C. Leong, 2000. Cyperaceae. "Flora of Taiwan, ed. 2, Vol. 5", Editorial Committee of the Flora of Taiwan, National Taiwan University, Taipei, 191-317.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : ヒンジガヤツリ

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Lipocarpa microcephala* (R. Br.) Kunth

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。稈は密に束生し、高さ 5~30 cm、幅 1 mm、鈍 3 稜形、基部に少数の葉がある。葉は線形~やや糸状、幅 1~2 mm。頭状花序は 1 個が頂生し、幅 5~8 mm、やや 3 角形、1~4 個の小穂からなり、葉状の苞は 2~3 個、小穂は卵円形、長さ 3~5 mm、鱗片は広倒披針形、長さ 1~1.3 mm、雄蕊は 1~2 個、柱頭は 2~3 個。瘦果は披針形、鈍 3 稜形、長さ 1 mm、小鱗片 2 個に包まれる。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、台湾、中国、インド、マレーシア、オーストラリア。

県内の分布 : 沖縄島、久米島。

生育環境 : 湿地に生える。

生育状況 : 名護市で 1937 年に採集された標本 (金城鉄郎 No. 106) が琉球大学理学部の標本室 (RYU) に所蔵されているが、採集の記録はこれだけであった。2016 年に久米島で新たに発見されたが、自生地と個体数はごく限られている。

学術的価値 : 琉球列島では極めて限られた分布を示し、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。湿地の開発。水田の埋立。

文献 : Abe, A., T. Nakasone & G. Kokubugata, 2016. Noteworthy collection records of *Lipocarpa microcephala* (Cyperaceae) and *Polygala chinensis* (Polygalaceae) from Kume Island of the Ryukyus, Japan. Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. B, 42(2): 73-76.

執筆者名 : 横田昌嗣*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : アンペライ (ネビキグサ)

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Machaerina rubiginosa* (Spreng.) T. Koyama

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長く匍匐し、稈を密につける。稈は鈍 3 稜形、高さ 60~90 cm、中央部に 1 葉をつけ、下部に数葉を束生する。葉は線形、円筒形~やや扁平、幅 2~3 mm、やや粉白色を帯び、しばしば葉身を欠き鞘状となり、稈の葉は長さ 10~15 cm。複生する円錐花序はやや球形、稈の上部につき、長さ 6~10 mm、小花序は 3~5 個、小穂は長楕円状卵形、長さ 5~6 mm、6~7 花をつけ、鱗片は長楕円状卵形、雄蕊は 3 個。瘦果は長楕円形、鈍 3 稜形、長さ 3 mm、くちばしがある。

分布域 (県外) : 本州 (東海道以西)、四国、九州、屋久島、種子島、中之島、奄美大島。

県内の分布 : 伊是名島、沖縄島、久米島、南大東島、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 湿地に生える。

生育状況 : 伊是名島 1 ヶ所、沖縄島 4 ヶ所、南大東島 1 ヶ所の標本があり、南大東島では 2014 年に確認されているが、他の島では現在は確認されない。沖縄島の自生地はすべて開発により失われた可能性が高い。他の島の現状は不明。

学術的価値 : 分布域の南限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。湿地の開発。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : トラノハナヒゲ

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Rhynchospora brownii* Romer et Schult.

カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。稈は束生し、匍枝はない。稈は細く、高さ 60~90 cm、下部に多数の葉をつける。葉は幅 1.5~2.5 mm、狭線形、古くなった葉には、琥珀斑(豹紋)が現れるので、花が無い時でも識別できる。散房花序は 2~3 個、多数の小穂をやや密につけ、枝は長さ 4 cm、小穂は狭卵形、長さ 3~4.5 mm、少数花をつけ、鱗片は広卵形。瘦果は広倒卵形、長さ 2 mm、くちばしがあり、刺針は 6~7 個。

分布域(県外) : 本州(近畿以西)、四国、九州、屋久島、種子島、中之島、奄美大島、台湾、中国南部、インド、マレーシア、アフリカ。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、石垣島。

生育環境 : 山地の湿地や原野に生える。

生育状況 : 伊是名島では 1ヶ所で確認されている。沖縄島では名護市から沖縄市にかけての数ヶ所で確認されているが、まれである。他の島の現状は不明。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*

和名 : ミクリガヤ

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Rhynchospora malasica* C. B. Clarke

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は伸長し、短い匍枝をだす。稈は高さ 40~100 cm、3稜形、中央部に多数の葉をつける。葉は線形、扁平、幅 5~8 mm。頭状花序は頂生および腋生し、2~5 個、球形、径 1.5 cm、苞は葉状、長さ 7~15 mm、小穂は卵状披針形、扁平、長さ 6~7 mm、1 花をつけ、鱗片は長楕円状卵形~長楕円状広卵形、雄蕊は 2~3 個、柱頭は 2 個。瘦果は広倒卵形、長さ 2 mm、くちばしは線形、刺針は 6 個、長さ 4 mm。

分布域(県外) : 本州(東海道以西)、四国、九州、台湾、インドシナ、マレーシア。

県内の分布 : 沖縄島中部、石垣島。

生育環境 : 湿地に生える。

生育状況 : 沖縄島で採集された標本が京都大学の標本庫 (KYO) にある (Walker, 1976) が、この自生地は開発が進んでおり、既に絶滅した可能性が高い。石垣島では 1 河川の流域でのみ確認されており、2004 年までは確認されていたが、現在は遷移が進行し湿地が森林に変化したため確認することができなくなった。

学術的価値 : 琉球列島では極めて限られた分布を示し、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。湿地の開発。遷移の進行。

保全対策 : 自生地を文化財として指定し、保全することが必要である。

文献 : Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 265-266.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : **イヌノハナヒゲ**

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Rhynchospora rugosa* (Vahl) Gale

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。稈は束生し、匍枝はない。稈は細く、高さ 30~50 cm、全体に疎らに少数の葉を、稈の基部に束生状に多数の葉をつける。葉は幅 2~3.5 mm、狭線形。散房花序は 3~5 個が疎らにつき、小穂は広披針形、長さ 7~8 mm、2~4 花をつけ、鱗片は 4~5 個、長楕円状卵形、雄蕊は 2~3 個、柱頭は 2 個。瘦果は広倒卵形、長さ 2~2.2 mm、瘦果より短いくちばしがあり、刺針は 6~7 個、長さ 4~5.5 mm。

分布域(県外) : 本州(中部以西)、四国、九州、屋久島、種子島、台湾、朝鮮、中国、インド、マレーシア。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島。

生育環境 : 山地の湿地や原野に生える。

生育状況 : 伊是名島の 1ヶ所で自生が確認されているが、極めてまれである。伊平屋島 1ヶ所と沖縄島 1ヶ所で採集された標本が京都大学の標本庫(KYO)にある(Walker, 1976)が、現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。自生地の開発。

備考 : IUCN カテゴリー: Endangered (EN)*。**Rhynchospora modesti-lucennoi* として評価。

文献 : Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 265.

阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査(伊是名島・久米島)。“事業年報(平成 26 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : **ノグサ**

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Schoenus apogon* Romer et Schult.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。全体無毛で、茎は直立し、高さ 10~25 cm、1~2 葉がつく。根出葉は細く、幅 0.5 mm ほど、葉鞘は一部赤味を帯びる。分花序は 2~3 個あって、10 個以下の小穂を散状または頭状につける。小穂は長さ 4~6 mm、ときに赤色を帯びる。果実は球形、白色で長さ約 1 mm、長さ 2 mm 位の刺針が 6 本ある。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、種子島、口永良部島、奄美大島、徳之島、インドネシア、オーストラリア。

県内の分布 : 沖縄島、伊平屋島、久米島、栗国島、座間味島。

生育環境 : 原野や海崖の上の風当たりの強い草地に生える。

生育状況 : 栗国島では海崖の上の草地に小面積ではあるが群生しているのが確認された。久米島では2ヶ所で、
 沖縄島では1ヶ所で確認された。その他の島の現況は不明。
 減少の要因 : 生育地の開発。もともと自生地と個体数が限られる。

文献 : 天野鉄夫, 1981. 栗国島植物目録. 栗国村教育委員会, 39pp.
 阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査Ⅱ (栗国島・
 渡名喜島). 日本植物園協会誌, (51): 80-85.

執筆者名 : 新城和治*・立石庸一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : **イヘヤヒゲクサ**
 分類 : カヤツリグサ科 (APG科名: カヤツリグサ科)
 学名 : *Schoenus calostachyus* (R. Br.) Poir.
 カテゴリ : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリ: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は束生し匍枝を出さない。葉鞘は帯黒赤色で光沢があり、2列生に密に配列する。
 稈は高さ60~80 cm、硬く、無毛、円形で、中程に1~2枚の葉をつける。葉は短く、硬く、葉舌はない。
 花序は総状、小穂は5~10個、各節に単立または2~3個ずつつき、長さ2~2.5 cm、線状披針形、9~12個の鱗片を2列につける。
 分布域(県外) : マレーシア、ミクロネシア、オーストラリア。
 県内の分布 : 伊平屋島?、伊是名島。
 生育環境 : 山地(台地と丘陵)の乾燥した貧栄養の場所の矮性化したリュウキュウマツの疎林の草本層に出現し、
 オオマツバシバ、イゼナガヤ、クロガヤなどと混生する。
 生育状況 : 伊是名島では2004年に生育が確認されたが、自生地は1ヶ所の狭い範囲に限られ、個体数は少ない。
 伊平屋島の現状は不明。
 学術的価値 : 分布域の北限で、日本で唯一の産地である。
 減少の要因 : 道路工事(林道、観光道路などの工事、リュウキュウマツの盗掘などの環境圧がある)。もともと自
 生地が限られている。
 備考 : 伊是名島の自生地の一部は、県指定の天然記念物である。

文献 : 仲田栄二, 1974. 伊平屋・伊是名諸島の植物. “伊平屋列島文化誌”, 仲田清英(編), 54.
 仲田栄二, 1989. 伊是名諸島の植物. “伊是名村史(下巻)”, 伊是名村史編集委員会, 597.
 阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査(伊是名島・久米島). “事業
 年報(平成26年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・横田昌嗣(追補)

和名 : **ホタルイ**
 分類 : カヤツリグサ科 (APG科名: カヤツリグサ科)
 学名 : *Scirpus juncooides* Roxb. var. *hotarui* (Ohwi) Ohwi
 カテゴリ : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリ: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎はほとんどなく、匍枝はださない。稈は束生し、高さ15~60 cm、幅1.5 mm以下、
 3~4個の葉身のない葉鞘で包まれる。頭状花序は偽側生し、2~7個の小穂からなり、苞は長さ

5~15 cm、小穂は卵円形~狭卵形、長さ5~6 mm、鱗片は卵円形、長さ3~4 mm、柱頭は3個。瘦果は広倒卵形、長さ2 mm、刺針は5~6個、横しわがある。基本変種のイヌホタルイに似るが、稈は太さ1.5 mm以下で表面は平滑、小穂は卵円形、柱頭は3個であることで異なる。

分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、黒島、朝鮮、中国東北部、ハワイ(帰化)。

県内の分布 : 沖縄島(北部~中部)。

生育環境 : 山地の湿地に生える。

生育状況 : 確実に本種と同定される標本は、2ヶ所(Walker, 1976)で確認されているだけである。同様の環境には基本変種のイヌホタルイも生育しており、標本に基づく情報の集積が必要である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。湿地の開発。近縁種との競合。

備考 : イヌホタルイは、伊是名島、伊平屋島、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島の水田などにやや普通に産する。ホタルイは野生種であるが、イヌホタルイは移入種の可能性が指摘されている(Walker, 1976)。ホタルイとイヌホタルイの雑種が最近記録されており、不稔であることが知られている(Yashiro, 2004)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 246.

Yashiro, K., 2004. *Schoenoplectus × juncohotarui* Yashiro (Cyperaceae), a new hybrid from Chiba Prefecture, Central Japan. J. Jpn. Bot., 79: 96-100.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*

和名 : ヒメホタルイ

分類 : カヤツリグサ科 (APG科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Scirpus lineolatus* Franch. et Sav.

カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 夏緑性の多年草。根茎は細く、匍匐する。稈は稈の節から単生し、高さ7~30 cm、幅0.8~1.2 mm。葉は1~2個、葉身を欠き、葉鞘となり、稈の基部を包み、長さ5 cm。小穂は1個が偽束生し、長楕円状披針形~狭楕円形、長さ7~10 mm、幅2.5~3.5 mm、多花を密生し、苞は1個、円形、長さ1~4 cm、鱗片は長楕円形~楕円形、長さ3.8~4.5 mm、幅1.8~2 mm。瘦果は広倒卵形~楕円形、長さ1.7~2.2 mm、幅1.2~1.8 mm、柱頭は2個、刺針は4~5個、瘦果の2倍の長さになる。

分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、種子島、台湾。

県内の分布 : 沖縄島、宮古島、石垣島。

生育環境 : 湿地に生える。

生育状況 : 沖縄島の3ヶ所で確認されているが、そのうち1ヶ所は道路建設で2005年に失われた。宮古島では1ヶ所で確認されているが、現状は不明。石垣島の現状は不明。

学術的価値 : 琉球列島では限られた分布を示し、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。自生地の開発。

備考 : 沖縄島の唯一知られる自生地は2005年に開発により消失したため、隣接した環境に生えるマネキンジュガヤやマシカクイとともに近隣の類似の環境に移植が試みられている。

文献 : 玉城松栄, 1965. 琉球産カヤツリグサ科の検索 [I]. 沖縄生物学会誌, 2 (3) : 19-24.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*

和名 : イヌフトイ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Scirpus litoralis* Schrader
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、横走する。稈は疎らに束生し、円柱形、高さ 60~100 cm、幅 5~8 mm、基部は葉身のない葉鞘で包まれる。散形花序は偽側生、枝は 3~7 個、長さ 2~8 cm、1~3 個の小穂をつけ、稈に続く苞は 1 個、花序と同長、小穂は長楕円状卵形~楕円状卵形、長さ 7~12 mm、幅 3~4 mm、鱗片は長楕円状卵形~楕円形、長さ 3~4 mm、雄蕊は 2~3 個、柱頭は 2 個。瘦果は広倒卵形、長さ 2 mm、幅 1.5~1.7 mm、刺針は 3~4 個、広線形、瘦果よりやや長い。

分布域 (県外) : インド、マレーシア、ミクロネシア、オーストラリア、アフリカ、ヨーロッパ。

県内の分布 : 伊是名島、沖縄島、南大東島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 低地の湿地や池沼に生える。

生育状況 : 沖縄島では数ヶ所、石垣島と西表島では各 2 ヶ所、その他の島嶼では各 1 ヶ所で確認されているが、自生地の多くは開発で失われた可能性がある。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*

和名 : サンカクイ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Scirpus triqueter* L.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は細長く、横走する。稈はやや接して生じ、高さ 50~100 cm、基部の幅 2~7 mm、鋭 3 稜形、無葉または長さ 1~5 cm の葉をつける。花序は偽側生、4~5 個の小穂からなり、稈に続く苞は 1 個、3 稜形、長さ 2~5 cm、小穂は長楕円形~卵形、1~3 個ずつ集合し、長さ 7~12 mm、幅 5~7 mm、鱗片は長楕円形、長さ 4 mm、柱頭は 2 個。瘦果は広倒卵形、刺針は 3~5 個、長さ 2~2.5 mm。

分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、沖永良部島、与論島、ウスリー、中国、朝鮮、インド、マレーシア、南ヨーロッパ。

県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 低地の湿地や水田に生える。

生育状況 : 沖縄島 2 ヶ所 (Walker, 1976) と、1938 年に石垣島で採集された標本 (高嶺英言 195) があるが、いずれも 40 年以上前の記録であり、自生地は既に失われた可能性が高い。他の島の現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。水田の埋立。除草剤の使用。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 245.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*

和名 : ナガボフトイ (ナンゴクフトイ)
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Scirpus validus* Vahl
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は細長く、横走する。稈は接して生じ、高さ 70~200 cm、基部の幅 5~8 mm、円柱形、基部は葉身のない 3~5 個の葉鞘で包まれる。長側枝集散花序は偽側生、長さ 4~8 cm、枝は 3~8 個、長さ 1~6 cm、3~7 個の小穂をつけ、稈に続く苞は 1 個、円柱形、長さ 1~3 cm、小穂は卵形~卵状楕円形、2~3 個ずつ集合し、長さ 6~15 mm、幅 3~4 mm、密に多花をつけ、鱗片は卵形~楕円形、長さ 2.5~3.2 mm、柱頭は 2 個。瘦果は広倒卵形、刺針は 2~5 個、長さ 1.8~2.5 mm。

分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、種子島、中之島、悪石島、奄美大島、台湾、千島、朝鮮、中国、マレーシア、太平洋諸島、オーストラリア、北アメリカ、南アメリカ、ヨーロッパ。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 低地の湿地や池沼に生える。

生育状況 : 石垣島では 1ヶ所で確認されている。他の島の現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。自生地の開発。

備考 : フトイ *S. tabernaemontani* J.F.Gmelin と同種とする見解があり、分類の再検討と標本に基づく分布情報の確認が必要である。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : ホソバシンジュガヤ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Scleria biflora* Roxb.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 繊細な一年草。根茎はなく、茎は単立し、長さ 30~50 cm、細い 3 稜形、無毛、多くは他の植物によりかかって生える。葉は線形、長さ 5~15 cm、幅 1.5~2.5 mm、微毛縁。円錐花序の分花序は 2~3 個、長さ 1.5~2.5 cm、幅 1 cm、小穂を疎らにつけ、小穂は長さ 3~4 mm、雌花鱗片は広卵形、竜骨は緑色。瘦果は球形、白色、光沢があり、径 1.5 mm、方眼格子模様があり、微毛が生える。

分布域 (県外) : 奄美大島、台湾、中国南部、インド、マレー半島。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、石垣島、西表島、小浜島。

生育環境 : 海岸近くの湿地や原野、水田の畦に生える。

生育状況 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島の現状は不明。石垣島では 1ヶ所、西表島では数ヶ所の自生地が知られるが、個体数は極めて少ない。小浜島の 1ヶ所で少数個体が 2014 年に確認されている。

学術的価値 : 琉球列島は分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。除草剤使用。水田の放棄や埋立。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : 阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 (伊是名島・久米島). “事業年報 (平成 26 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・尾川原正司*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

- 和名 : ケシンジュガヤ
 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
 学名 : *Scleria rugosa* R. Br. var. *rugosa*
 カテゴリ : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリ: 該当なし
- 形態の特徴 : 一年草。根茎はなく、茎は単立または束生し、長さ 10~30 cm、湾曲し、3 稜形、平滑。葉は扁平、淡緑色、長さ 5~15 cm、幅 2~3 mm、有毛、鞘は無翼。円錐花序の分花序は 3~5 個、やや少数の小穂を生じ、長さ 7~15 mm、小胞は刺状、小穂は長さ 2~4 mm、多数の鱗片からなり、雌花鱗片は卵形。瘦果は球形、白色、光沢があり、径 1.5 mm、方眼格子模様があり、微毛が生える。
- 分布域 (県外) : 本州 (近畿以西)、四国、九州、屋久島、種子島、馬毛島、台湾、中国、スリランカ、マレーシア、オーストラリア、ニュージーランド。
- 県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 低地の湿地に生える。
- 生育状況 : 伊是名島では 1 ケ所、石垣島では 1 ケ所、西表島では 2 ケ所で発見されているが、個体数は極めて少ない。石垣島では 2005 年の農薬散布により、絶滅した可能性がある。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。除草剤使用。水田の開発。
- 備考 : 茎や葉が無毛の変種のマネキシングヤ var. *glabrescens* (Koidz.) Ohwi et T. Koyama は、最近沖縄島と石垣島で確認されているが、ケシンジュガヤと共に産地が限られており、絶滅寸前である。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文献 : 阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 (伊是名島・久米島). “事業年報 (平成 26 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・尾川原正司*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : マネキシングヤ
 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
 学名 : *Scleria rugosa* R. Br. var. *glabrescens* (Koidz.) Ohwi et T. Koyama
 カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ: 該当なし
- 形態の特徴 : 全株無毛またはほとんど無毛の一年草。茎は単立または束生し、高さ 10~30 cm、2~3 節がある。葉は長さ 5~15 cm、幅 2~3 mm、花序は各稈に 2~3 個つき、やや少数の花をつける。小穂は雄花と雌花に分かれる。瘦果は広楕円形~球形、径 1.5~2 mm、灰白色、表面に格子紋がある。
- 分布域 (県外) : 本州、四国、九州、朝鮮。
- 県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島。
- 生育環境 : 日当たりの良い湿地、原野、水田の畦に生える。
- 生育状況 : 沖縄島、石垣島とも自生地はそれぞれ 1 ケ所知られるだけである。沖縄島の自生地は道路建設により消失した。石垣島では、2005 年に除草剤の散布によってほぼ壊滅状態となった。
- 学術的価値 : 分布域の南限である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。自生地の開発。除草剤の散布。
- 備考 : 沖縄島の唯一知られる自生地は 2005 年に開発により消失したため、隣接した環境に生えるマシカクイやヒメホタルイとともに近隣の類似の環境に移植が試みられている。植物体に白色毛をふく基本変種のケシンジュガヤも同様な環境に生え、石垣島には両者が混生する自生地がある。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : クロミノシンジュガヤ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Scleria sumatrensis* Retz.
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 大形の常緑の多年草。根茎は短く這い、茎は直立し、3稜形、高さ 1~2 m になり、多数の葉をやや輪生状につける。葉は長さ 20~40 cm、幅 10~13 mm、上縁はざらつき、鞘の下部には 3 翼がある。円錐花序は頂生し、分花序は 5~8 個、多数の小穂を密につけ、長さ 4~5 cm、小包は短く針状、小穂は赤褐色、長さ 5~6 mm、少数の鱗片が 2 列に並ぶ。雌花の鱗片は卵形~広卵形、竜骨は緑色。瘦果は偏球形、帯青褐色、径 2 mm、表面に網状の模様があり、微毛が生える。

分布域(県外) : 台湾、インド、マレーシア、ミクロネシア。

県内の分布 : 北大東島、南大東島。

生育環境 : 低地の日当たりのよい湿地に生える。

生育状況 : 島中央部の湿地に生えるが、湿地の埋立が進み、生育地が激減している。

学術的価値 : 分布域の北限で、著しい隔離分布を示し、国内で唯一の産地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。湿地の埋立。

文献 : 新納義馬・新城和治・新島義龍・宮城朝章, 1997. 北大東島の池・湿地帯の植生. “特殊鳥類等生息環境調査, 伊平屋島・久米島・南大東島・北大東島湿地編”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 153-161. 横田昌嗣・宮城康一, 1992. 大東諸島の植物相. “ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書”, 沖縄県教育委員会, 17-42.

執筆者名 : 横田昌嗣*・新城和治*

和名 : イリオモテクマタケラン
分類 : ショウガ科 (APG 科名: ショウガ科)
学名 : *Alpinia flabellata* Ridley
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は高さ 1~3 m になり、数枚の葉をつける。葉は長楕円状披針形、長さ 30~40 cm、幅 4~8 cm、無毛。円錐花序は頂生、しばしば分枝し、多数の花をつける。花は小形で、花弁は長さ 14 mm、淡黄色、唇弁は長さ 4 mm。果実は球形で、径 5 mm、赤色~橙色に熟する。

分布域(県外) : 台湾(蘭嶼、緑島)、フィリピン。

県内の分布 : 石垣島、西表島、内離島。

生育環境 : 低地の自然林内に生える。

生育状況 : 西表島には各地に自生するが、石垣島では証拠標本は確認されておらず、現状不明。西表島ではすぐに絶滅する恐れはないが、自生地は人里に近い低地に限られ、開発により急激に減少する可能性がある。内離島の現状は不明。

学術的価値 : 分布域の北限で、マレーシア系の植物であり、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : 低地林の開発。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)

和名 : エンレイショウキラン
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Acanthephippium pictum* Fukuyama
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。台湾シヨウキラン *A. sylhetense* に似るが、葉に 5 脈があり、花は外面は黄色～黄緑色で、内面は濃赤色で光沢があり、萼片と花弁の先は反り返り、唇弁は淡黄色で、唇弁の中央裂片は長楕円形で、やや反り返ることなどで異なる。
 分布域(県外) : トカラ列島?、奄美大島?、徳之島?、台湾。
 県内の分布 : 沖縄島北部?、石垣島、西表島、与那国島。
 生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
 生育状況 : 石垣島では 3 ヶ所、西表島では数ヶ所で確認されているが、盗掘による減少が続いている。与那国島の現状は不明。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採。
 備考 : 鹿児島県の島嶼で記録されているものは、花による確認はなされていない。花が確認された個体は、これまでのところ沖縄島以北ではすべて台湾シヨウキランであり、エンレイショウキランの確実な分布域は八重山諸島に限られている。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町特別希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

和名 : タイワンアオイラン
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Acanthephippium striatum* Lindl.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅 (EX)

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は直立し、数個が接して並び、棍棒状で、長さ 5~15 cm、先に 1 葉をつける。葉は長楕円形、長さ 20~30 cm、幅 7~10 cm、5 脈がある。総状花序は側生し、3~5 花をつけ、下部は数枚の包葉で包まれる。花は白色で、淡紫色の細い線が入り、萼片と花弁は約半分癒合し筒状となり、長さ 3~4 cm、先は平開し、唇弁は白色で先端は紅紫色、長さ 3 cm、矢形で、先は浅く 3 裂する。蕊柱の基部は下方に長く伸びて、側花弁と癒合する。
 分布域(県外) : 屋久島、台湾、インド、タイ、インドシナ、ジャワ。
 県内の分布 : 沖縄島北部。
 生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
 生育状況 : かつて 1 ヶ所に十数個体が発見されたが、今回の調査で発見者と共に自生地の踏査を行ったが、全く生育が確認されなかった。既に絶滅した可能性が高い。
 学術的価値 : 沖縄県で唯一の産地であり、隔離分布を示し植物地理学上貴重である。
 減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。もともと自生地と個体数が少ない。
 備考 : 屋久島でも盗掘により絶滅したようである。

文献 : 豊見山元・播磨保治, 1992. 琉球列島植物分布資料 8. 沖縄生物学会誌, (30) : 75-77.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : タイワンショウキラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Acanthephippium sylhetense* Lindl.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は直立し、数個が接して並び、卵状円柱形で、長さ 10 cm、先に 2~3 葉をつける。葉は楕円形、長さ 20~30 cm、幅 7~10 cm、9 脈がある。総状花序は側生し、3~5 花をつけ、下部は数枚の包葉で包まれる。花は外面は淡黄色で、内面は赤紫色、萼片と花弁は基部で癒合し、先は平開し、長さ 4~4.5 cm、唇弁は白色で先端は黄色、長さ 4 cm、3 裂し、中央裂片は倒匙形、上面に 3 裂の板状突起があり、側裂片は広腎形、直立する。蕊柱の基部は下方に長く伸びて、側花弁と癒合する。

分布域(県外) : 屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、台湾、ヒマラヤ、タイ、インドシナ。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。沖縄島では主に石灰岩地に生えるが、非石灰岩地でも見られる。西表島では低地の非石灰岩地に生える。

生育状況 : 自生地は沖縄島では数ヶ所知られるだけで、個体数は極めて少ない。西表島では 1ヶ所に数個体が確認されていたが、自生地は盗掘とリュウキュウイノシシによる食害で消失し、現在は確認することができない。

減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。リュウキュウイノシシによる食害。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 開花する個体の割合が低く、開花期も短いため、生きた花の観察に基づく自生地の確認は十分ではない。これまでエンレイショウキランと混同されていたため、比較的最近になって(橋本, 1985)琉球列島に産することが知られた種である。竹富町特別希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 橋本 保, 1985. ラン科植物分類雑記(1). 筑波実験植物園研究報告, 3: 9-12.

横田昌嗣・豊見山元・比嘉清文・橋爪雅彦, 1994. 琉球列島植物分布資料 13. 沖縄生物学会誌, (32): 61-65.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・比嘉清文*・加島幹男*・横田昌嗣(追補)

和名 : オキナワチドリ

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Amitostigma lepidum* (Rchb. f.) Schltr.

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 小形の冬緑性の多年草。地中に長さ 1 cm 程度の楕円球状の塊根がある。茎は花序を含めて長さ 10 cm になり、基部に 2~3 葉を束生する。葉は長楕円形、長さ 4~6 cm。総状花序は頂生し、2~9 花をつける。花は淡紅紫色、萼片と花弁は長さ 5 mm、狭卵形、唇弁は長さ 10~13 mm、倒卵状円形、3 深裂し、中央裂片は先でさらに 2 浅裂し、上面に濃厚紫色の斑点が入る。

分布域(県外) : 九州(鹿児島県)、甌島、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、喜界島、沖永良部島。

県内の分布 : 硫黄島、伊平屋島、野甫島、伊是名島、沖縄島、藪地島、久米島、渡名喜島。

生育環境 : 海岸から山地までの日当たりのよい草地や岩隙に生える。

生育状況 : かつてはやや普通に見られたが、近年は個体数が激減している。

学 術 的 価 値 : 分布域の南限である。本種が属するヒナラン属は東アジアの温帯系の植物であり、琉球列島の植物相の成立を知る上で貴重である。

減 少 の 要 因 : 園芸用の採集。自生地の開発。ダム建設による水没。外来種との競合。もともと自生地が限られている。

文 献 : 立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2001. 沖縄県硫黄島で見出された分類学的あるいは植物地理学的に注目される維管束植物. 沖縄生物学会誌, (39) : 77-92.

立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2002. 硫黄島の植物相. “沖縄県史資料編 13 硫黄島”, 沖縄県文化振興会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 57-104.

佐藤寛之・立石庸一・齊藤由紀子・天野正晴・中村元紀・杉山巳次, 2017. 沖縄県の離島・へき地における自然教育のための基礎資料の充実IX : うるま市藪地島の植物相. 琉球大学教育学部紀要, (91) : 53-74.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・治井正一*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和 名 : キバナシュスラン

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Anoectochilus formosanus* Hayata

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 の 特 徴 : 小形の常緑の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 20 cm になり、3~4 葉を互生する。葉は広卵形、長さ 3.5~4.5 cm、上面は帯紫暗緑色で、通常脈上に白色または淡黄色の網目模様が入り、下面は帯赤紫色。総状花序は頂生し、3~5 花を疎らにつける。萼片は赤褐色、背萼片は長さ 6~7 mm、側萼片は長さ 8~10 mm、花弁は白色、長さ 8 mm、唇弁は長さ 18 mm、白色、先端は 2 裂して Y 字形となり、基部から中央にかけて櫛の歯状に 5~7 対の黄色の糸状突起があり、基部は短い距となる。

分布域 (県外) : 台湾。

県 内 の 分 布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生 育 環 境 : 高地の自然林の林床に生える。

生 育 状 況 : 石垣島は 2 ヶ所、西表島は 2 ヶ所の自生地が知られるが、自生地は狭い範囲に限られ、個体数は極めて少ない。石垣島ではかつてはかなりの個体数が見られたが、近年は乱獲により激減している。自生地の一つは、無線の中継施設の建設で、周辺は改変が進んでいる。沖縄島では 2004 年に 1 ヶ所ごく少数個体が、2013 年に別の 1 ヶ所で数十個体が新たに確認されたが、これらはその後盗掘によりすべて消失した。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。

減 少 の 要 因 : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。自然林の開発 (石垣島)。

備 考 : 特定国内希少野生動植物種に指定されており、採集や無許可の譲渡などは法律で禁じられている。特定国内希少野生動植物 (2016 年)。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・豊見山元*・新城和治*・横田昌嗣(追補)・比嘉清文(追補)・仲間正和(追補)

和 名 : オオギミラン (イナバラン)

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Anoectochilus inabai* Hayata

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 20 cm になる。葉は一様な緑色で、卵状長楕円形、長さ 4~5 cm。総状花序は頂生し、5 花程度を疎らにつける。萼片と花弁は長さ 6 mm、帯紫緑色で白色の網目状の斑紋が入り、唇弁は長さ 23 mm、白色、先端は 2 裂して Y 字形となり、基部から中央にかけて櫛の歯状に 5~9 対の糸状突起がある。

分布域 (県外) : 屋久島、台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 沖縄島では 3 ヶ所、西表島では 2 ヶ所の自生地が知られるが、個体数は極めて少ない。沖縄島では盗掘により絶滅寸前である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採。

備考 : 特定国内希少野生動植物種に指定されており、採集や無許可の譲渡などは法律で禁じられている。特定国内希少野生動植物 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲間正和(追補)

和名 : コウシュンシュスラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Anoectochilus koshunensis* Hayata

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 20 cm になり、3~4 葉を互生する。葉は広卵形、長さ 3.5~4.5 cm、上面は帯紫暗緑色で、通常脈上に白色または淡黄色の網目模様が入り、下面は帯赤紫色。総状花序は頂生し、3~5 花を疎らにつける。萼片は淡赤褐色、背萼片は長さ 6 mm、側萼片は長さ 8 mm、花弁は白色、長さ 6 mm、唇弁は長さ 12 mm、白色、先端は 2 裂して Y 字形となり、中央に 1 対の狭三角形の突起があり、基部に長さ 7 mm の 2 浅裂する距がある。

分布域 (県外) : 屋久島、台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 高地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 沖縄島は 2 ヶ所、石垣島は 1 ヶ所、西表島は 3 ヶ所の自生地が知られるが、いずれも個体数は極めて少ない。沖縄島では絶滅した可能性が指摘されていたが、1 ヶ所で 2016 年に少数個体が確認されている。

学術的価値 : 沖縄島には花が倒生する型と倒生しない型が知られ、他の産地のものとやや形態が異なる。

減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採 (沖縄島)。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2016 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Data Deficient (DD)。

文献 : 播磨保治, 1986. コウシュンシュスランを沖縄島で発見. 沖縄生物学会誌, (24) : 59-61.
豊見山元・播磨保治, 1992. 琉球列島植物分布資料 8. 沖縄生物学会誌, (30) : 75-77.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : タネガシマムヨウラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Aphyllorchis montana* Rchb. f.
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 葉を欠く腐生の多年草。茎は花序を含めて長さ 45~70 cm。総状花序は頂生し、10~20 花をつける。花は淡黄色で、外面に淡紫色の小点が入り、萼片と花弁は長さ 1~1.2 cm、長楕円形、唇弁は長さ 1 cm、幅 6 mm、中央に関節があり、関節より基部側は三角形、関節より先端側は卵形で、3 浅裂する。
分布域 (県外) : 九州 (鹿児島県)、屋久島、種子島、トカラ列島、請島、徳之島、台湾、中国南部、インド、スリランカ、タイ、フィリピン、ボルネオ。
県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。
生育環境 : 自然林の林床に生える。
生育状況 : 沖縄島では数ヶ所に点々と自生することが知られるが、個体数は少ない。石垣島と西表島では極めてまれで、石垣島では 1ヶ所で少数個体が確認されており、西表島では 1958 年と 1967 年の 2 回採集されているが、その後は確認されておらず、現状不明。
減少の要因 : 自然林の伐採。もともと自生地と個体数が少ない。
備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : ジンヤクラン
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Arachnis labrosa* (Lindl. et Paxton) Rchb. f.
カテゴリー : 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー: 絶滅 (EX)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は長さ 30~50 cm、葉を 2 列に互生する。葉は革質で、広線形、長さ 20 cm、先は 2 裂する。総状花序は腋生し、長さ 30~150 cm になり、時に分枝し、数~多花をつける。花は径 3 cm、黄緑色で、紅紫色の斑紋が入り、萼片と花弁は長さ 1.5~1.9 cm、線状倒披針形、唇弁は長さ 7~9 mm、舌状で、3 裂し、淡黄色で、上面に赤褐色の斑紋が入り、上面に 2 列の隆起があり、基部に円柱形の距がある。
分布域 (県外) : 台湾、中国南部、ヒマラヤ、タイ、ベトナム。
県内の分布 : 石垣島。
生育環境 : 山地の自然林内の樹幹に着生する。
生育状況 : かつて 1 度記録されただけで、近年は全く確認されていない。2016 年にかつて記録された自生地はかなり綿密に踏査を行ったが、再発見することはできなかった。
学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採。
備考 : 石垣島で採集された個体の花序と葉の標本は、鹿児島大学 (KAG) の標本庫に収蔵されている。

文献 : 初島住彦, 1975 . 琉球植物誌 (追加・訂正). 沖縄生物教育研究会, 那覇, 861.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・松島昭司(追補)

和名 : ナリヤラン
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

- 学 名 : *Arundina graminifolia* (D. Don) Hochr.
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)
- 形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は硬く、長さ 50~130 cm、15~25 葉を 2 列に互生し、基部は球状の偽球茎となる。葉は線状披針形、長さ 10~20 cm。総状花序は頂生し、単一または分枝し、5~8 花を順につける。花は淡紅紫色で、径 4 cm、萼片と花弁は長さ 3 cm、披針形、唇弁は長さ 3 cm、やや卵形、3 浅裂し、中央裂片は 2 浅裂し、側裂片は蕊柱を包み、唇弁の先端は紅紫色で、中央に黄色の細長い板状突起がある。
- 分布域(県外) : 台湾、中国南部、スリランカ、インド、タイ、マレーシア、タヒチ。
県内の分布 : 西表島、石垣島。
生育環境 : 低地の日当たりのよい草地に生える。放棄されたパイン畑、伐採跡地、山火事跡地などの人為的な環境にも多く見られるが、遷移が進んで森林になると消失する。
生育状況 : 石垣島では 1 ヶ所に産するだけであったが、自生地は開発され、現在は確認できない。西表島では島内に点々と産するが、採集と遷移の進行で個体数は減少している。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : 園芸用の採集。自生地の開発。遷移の進行。もともと自生地が限られている。
備考 : 本来は種子により旺盛に繁殖する。ハワイやフィジー諸島では栽培品が逸出している。沖縄島中部でも、近年野生化した個体が観察されている。西表島における本種の訪花昆虫については、Sugiura (2014) の報告がある。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動物植物種 (2017 年)。
- 文 献 : Sugiura, N., 2014. Pollination and floral ecology of *Arundina graminifolia* (Orchidaceae) at the northern border of the species' natural distribution. J. Pl. Res., 127: 131-139.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

-
- 和 名 : クスクスラン
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学 名 : *Bulbophyllum affine* Lindl.
カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)
- 形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。根茎は匍匐し、長さ 3~7 cm 間隔で偽球茎をつける。偽球茎は円柱形、長さ 2~4 cm、先に 1 葉をつける。葉は革質、線状長楕円形、長さ 10~18 cm、基部は葉柄状となる。花序は偽球茎の基部から出て、長さ 1.5 cm、1 花をつける。花は淡黄色~黄褐色で、紫色の数本の条線が入り、平開しない。萼片は長さ 1.7~2 cm、花弁は長さ 1.3~1.6 cm、唇弁は長さ 8~10 mm、卵形~三角状卵形、朱紅色、基部に関節がある。蕊柱の基部は下方に長く伸び、側萼片や唇弁と癒合する。
- 分布域(県外) : 奄美大島、台湾、中国南部、ヒマラヤ、タイ、インドシナ。
県内の分布 : 石垣島、西表島。
生育環境 : 空中湿度の高い自然林の樹幹に着生し、しばしば群生する。
生育状況 : 西表島では 4 ヶ所で記録があり、その内の 2 ヶ所は 2010 年以降に確認されている。石垣島では 1 ヶ所の狭い範囲に産し、もともと個体数は少なかったが、近年盗掘により著しく減少している。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。
備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動物植物種 (2017 年)。
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)・比嘉清文(追補)

和名 : マメツタラン
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Bulbophyllum drymoglossum* Maxim. ex Makino
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : ごく小形の常緑の多年草。根茎は糸状で、長く匍匐し、1~1.5 cm 間隔で1葉をつける。葉は楕円形~倒卵形、長さ7~10 mm、ほぼ無柄。総状花序は根茎から出て、1花をつけ、長さ1~1.5 cm。花は淡黄色、萼片は長さ6 mm、披針形、花弁は長さ3.5 mm、長楕円形、唇弁は長さ6 mm、卵状披針形、紅紫色の斑点が入り、基部に関節がある。蕊柱の基部は下方に伸び、唇弁と癒合する。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、屋久島、奄美大島、徳之島、朝鮮、台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島。

生育環境 : 山地の自然林の樹幹や岩上に着生する。

生育状況 : 国頭村、東村、大宜味村の数ヶ所で自生が確認されているが、個体数は少ない。石垣島の1ヶ所で2007年に確認された。

学術的価値 : 沖縄県では唯一の産地である。沖縄島の個体の唇弁は、他の産地のものと形態がやや異なっている。

減少の要因 : 自然林の伐採。園芸用の採集。ダム建設による水没(沖縄島)。もともと自生地が限られている。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・加島幹男(追補)・松島昭司(追補)

和名 : シコウラン
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Bulbophyllum macraei* (Lindl.) Rchb. f.
 カテゴリー : 絶滅危惧ⅠB類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。根茎は匍匐し、数 cm 間隔で偽球茎をつける。偽球茎は卵形、長さ1.5~2 cm、先に1葉をつける。葉は革質、長楕円形、長さ8~15 cm。散形花序は偽球茎の基部から生じ、長さ10~20 cm、2~6花をつける。花は淡黄色で、しばしば赤色を帯び、背萼片は長さ1.5~1.8 cm、側萼片は長さ3~5 cm、花弁は長さ6~7 mm、唇弁は長さ6~7 mm、披針形、下方に反り返り、基部に関節がある。

分布域(県外) : 屋久島、種子島、奄美大島、徳之島、台湾、スリランカ、インド。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の樹幹に着生する。

生育状況 : 沖縄島では数ヶ所、西表島では数ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。盗掘で現在もなお減少している。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : タマザキエビネ (ササバキエビネ)
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

- 学 名 : *Calanthe densiflora* Lindl.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)
- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は 10 cm 程度匍匐し、先は偽球茎となり、数葉を束生する。葉は狭長楕円形、長さ 40~50 cm。総状花序は偽球茎の基部から生じ、長さ 10~30 cm、多数の花を密につける。花は脱落する長い包葉で包まれ、黄色、半開し、萼片と花弁は長さ 1.5 cm、倒披針形、唇弁は 3 裂し、側裂片はやや三角形、中央裂片は四角形。
- 分布域 (県外) : 徳之島、台湾、中国南部、ヒマラヤ。
県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。
生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
生育状況 : 西表島では近年は全く確認されておらず、現状は不明。沖縄島では花をつけていない数個体が確認されているが、偽球茎が離れてつき、葉に関節があることから本種と同定されている (横田ら, 1997)。台湾では、匍匐する根茎で増殖してマット状の群落を作ることがあるが、沖縄島では 1 個体ずつが独立して、小型の数個体が点々と生育していた。この自生地を最近になって踏査したが、個体を確認することはできなかった。
- 学術的価値 : 県内で唯一の産地である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。
備考 : タマザキエビネの報告の中には、近縁なタイワンエビネが誤認されて含まれている可能性があり、標本に基づく再確認が必要である。竹富町特別希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文 献 : Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 1: 37-45.
横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

- 和 名 : カツウダケエビネ
分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学 名 : *Calanthe discolor* Lindl. f. *kanashiroi* (Fukuyama) Nakajima
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT) (エビネ *Calanthe discolor* Lindl. として)
- 形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は数個接して並び、2~5 葉を束生する。葉は倒披針形~長楕円形、長さ 18~25 cm。花茎は長さ 30~40 cm で、十数花をつける。花は径 3~4 cm、芳香があり、花弁と萼片は紫褐色~淡黄緑色で、唇弁は白色で 3 裂し、長さ 8~10 mm の距がある。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
生育環境 : 山地の石灰岩地の自然林の林床に生える。
生育状況 : 2ヶ所の自生地が知られる。1980 年代前半までは林床に足の踏み場もないほど群生した所があったが、近年は乱獲により激減し、ほとんど見ることはなくなった。
- 学術的価値 : 沖縄島の固有品種。基本品種のエビネは本州、四国、九州に分布し、沖縄島はエビネの分布域の南限に位置する。
減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地が限られている。
- 文 献 : 阿部篤志, 2015. 大宜味村中央部石灰岩山地における希少植物調査 (最終報告). 事業年報 (平成 25 年度), 沖縄美ら島財団総合研究センター, 34-49.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・比嘉清文(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : **タイワンエビネ**

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Calanthe formosana* Rolfe

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は数 cm 匍匐し、先は長卵形の偽球茎となり、3~6 葉を束生する。葉は倒披針形、上面にやや光沢があり、長さ 35~50 cm。総状花序は偽球茎の基部から生じ、長さ 35~45 cm、多数の花を密につける。花は脱落する長い包葉で包まれ、黄色、平開し、萼片と花弁は長さ 1.2 cm、楕円形、唇弁は長さ 8 mm、3 裂し、側裂片は四角形、中央裂片は四角形、基部上面に 2 個の突起があり、基部に長さ 9 mm の円柱形の距がある。

分布域(県外) : 台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島、石垣島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 沖縄島北部では 3ヶ所で確認されているが、乱獲により絶滅寸前である。西表島では数ヶ所に産するが、個体数は年々減少している。石垣島では 2003 年に花をつけていない少数個体が発見されたが、偽球茎の形態から本種と判断される。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採(沖縄島)。

備考 : 竹富町特別希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 横田昌嗣・島袋憲一, 1992. 琉球列島植物分布資料 10. 沖縄生物学会誌, (30) : 81-83.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・國府方吾郎(追補)

和名 : **レンギョウエビネ**

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Calanthe lyroglossa* Rchb. f.

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は数 cm 匍匐し、先は長卵形の偽球茎となり、3~6 葉を束生する。葉は線状長楕円形、上面に光沢はなく、黄緑色、長さ 30~40 cm。総状花序は偽球茎の基部から生じ、長さ 30~40 cm、多数の花を密につける。花は脱落する長い包葉で包まれ、黄色、半開し、萼片と花弁は長さ 8 mm、広卵形~楕円形、唇弁は長さ 5 mm、3 裂し、側裂片は小さく、鈍頭、中央裂片は腎形、基部に先端が膨らんだ長さ 4~5 mm の距がある。

分布域(県外) : 屋久島、種子島、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、フィリピン、タイ。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生え、特に苔むした倒木上に着生することが多い。

生育状況 : 以前はやや普通に見られる種であったが、近年は乱獲により減少し、現存する個体数は少ない。

減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。もともと個体数が少ない。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

和名 : オナガエビネ (オキナワエビネ、リュウキュウエビネ)

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Calanthe masuca* (D. Don) Lindl.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は数個接して並び、3~5葉を束生する。葉は長楕円形、長さ40~55 cm。花茎は長さ50~70 cmで、多数の花をつける。花は淡紫色~紅紫色、まれに白色で、萼片は長さ1.5~2 cm、長楕円形、花弁は長さ1.3~1.5 cm、倒卵形、唇弁は長さ1.2~1.5 cm、3裂し、側裂片は長楕円形、長さ4 mm、中央裂片は広扇形、基部に長さ2.5 cmの線状の距がある。

分布域(県外) : 甬島、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、インド、タイ。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 沖縄島では数ヶ所、石垣島では1ヶ所、西表島では2ヶ所で記録されている。かつては自生地には多数の個体が見られたが、現在は乱獲により激減し、個体数は非常に少なくなった。

減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。もともと自生地が限られている。ツルランとの交雑による遺伝的汚染。

備考 : ごく近縁な種は南アフリカやマダガスカルにも分布する。近縁種も含めて地理的分布が広く、地理的変異が大きく、学名については様々な見解がある。琉球列島と台湾産はオナガエビネ *Cal. textori* として区別されることがある。花序が細長く、花は赤紫色で、唇弁の裂片は細い型はオキナワエビネ (リュウキュウエビネ) *Cal. okinawensis* としてさらに細分されることがある。オナガエビネはツルランとしばしば混生し、両種間の雑種はユウヅルエビネ *Cal. dominii* と呼ばれる。花の色や形が変異に富み、個体ごとに異なるほどで、雑種個体群を含めて鑑賞目的に大量に盗掘されている。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

和名 : ツルラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Calanthe triplicata* (Willemet) Ames

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は数個接して並び、3~6葉を束生する。葉は卵状長楕円形、長さ40~50 cm。花茎は長さ50~80 cmで、密に多数の花をつける。花は白色で、萼片は長さ1.2~1.5 cm、倒卵形~楕円形、花弁は長さ1.2 cm、倒卵形、唇弁は長さ1.2 cm、基部上面に3個の黄色または赤色の隆起があり、3裂し、側裂片は長楕円形、長さ4 mm、中央裂片は2深裂し、基部に長さ1.5~2 cmの線状の距がある。

分布域(県外) : 屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、小笠原、台湾、インド、中国南部、フィリピン、タイ、インドシナ、マレーシア、ニューギニア、オーストラリア、グアム、ニューカレドニア、フィジー諸島、マダガスカル。

県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島、阿嘉島、石垣島、西表島、魚釣島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : かつては極めて普通に見られる種であったが、近年は乱獲により激減し、限られた地域以外ではほとんど見られなくなった。

減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。野生化ヤギの増殖による食害と森林破壊 (魚釣島)。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

和名 : アカバシユスラン (タネガシマカイロラン、リュウキュウカイロラン)

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Cheirostylis liukuensis* Masam.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎はやや肥厚して匍匐し、先は直立して、花序を含めて長さ 10~15 cm、5~7 葉を互生する。葉は卵形、長さ 1.5~3 cm、赤紫色を帯びる。総状花序は頂生し、2~8 花をつける。萼片と花弁は淡赤褐色、萼片は中央まで癒合し筒状となり、長さ 3~3.5 mm、花弁は披針形、長さ 3~3.5 mm、唇弁は白色で、基部に淡緑色~橙黄色の 1 対の斑点があり、長さ 5 mm、先は 2 裂して Y 字形になる。

分布域 (県外) : 甬島、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、加計呂麻島、沖永良部島。

県内の分布 : 沖縄島北部、久米島。

生育環境 : 山地の自然林のやや明るい林床に生える。

生育状況 : 沖縄島北部 (本部半島を含む) では数ヶ所で自生が確認されているが、いずれの場所でも個体数は少ない。久米島では近年確認されていない。

学術的価値 : 分布域の南限である。

減少の要因 : 自然林の伐採。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : アリサンムヨウラン (アノマラン、ヨシヒサラン)

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Cheirostylis takeoi* (Hayata) Schltr.

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎はやや肥厚して匍匐し、先は直立して、花序を含めて長さ 10~20 cm、2~5 葉を互生する。葉は卵形、長さ 2~4.5 cm、淡緑色。総状花序は頂生し、3~5 花をつける。花は平開せず、白色で、時にわずかに淡紅色を帯び、萼片は中央まで癒合し筒状となり、長さ 5~6 mm、花弁は長橢円状倒披針形、長さ 5~6 mm、唇弁は長さ 5~6 mm、舌状、全縁。

分布域 (県外) : 奄美大島、台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部、久米島。

生育環境 : 奄美大島では非石灰岩地に生えるが、沖縄島では山地の石灰岩地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 沖縄島では 3ヶ所に自生が知られるが、個体数は極めて少ない。久米島の現状は不明。

学術的価値 : 中琉球と台湾の固有種である。

減少の要因 : 自然林の伐採。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。

文献 : 阿部篤志, 2015. 大宜味村中央部石灰岩山地における希少植物調査 (最終報告). 事業年報 (平成 25 年度), 沖縄美ら島財団総合研究センター, 34-49.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : **バイケイラン (チクセツラン)**

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Corymborkis veratrifolia* (Reinw.) Blume

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 大型の常緑の多年草。茎は束生し、長さ 0.4~2 m になり、数~十数葉を互生する。葉は楕円形、暗緑色で、上面にやや光沢があり、長さ 20~35 cm。円錐花序は腋生し、多数の花をつける。花は白色、萼片と花弁は線状倒披針形、長さ 3.5~4 cm、唇弁は長さ 4 cm、基部は細長く、先端は楕円状円形。蕊柱は長さ 3 cm。

分布域(県外) : 台湾、小笠原、フィリピン、スリランカ、インド、タイ、インドシナ、マレーシア、ニューギニア、オーストラリア北部、フィジー諸島、サモア諸島。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 低地の自然林の陰湿な林床に生える。

生育状況 : 石垣島では数ヶ所で自生が確認されているが、自生地は開発により減少している。西表島では3ヶ所の自生地があるが、個体数は非常に少ない。

学術的価値 : 小笠原諸島と共に分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。園芸用の採集。ダム建設による水没(石垣島)。

備考 : 小笠原諸島のもはチクセツラン *C. subdensa* と呼んで区別されることがある。石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・比嘉清文*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : **オオスズムシラン**

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Cryptostylis arachnites* (Blume) Hassk.

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎はごく短く、1~2葉をつけ、根はやや肥厚する。葉は卵形~卵状楕円形、長さ 15 cm、上面はほぼぼーような緑色で、長さ 10 cm の葉柄がある。総状花序は頂生し、長さ 50 cm になり、10~18 花をつける。萼片と花弁は黄緑色、線形、萼片は長さ 1.3~1.7 cm、花弁は長さ 1.1 cm、唇弁は長さ 1.5~2 cm、狭卵形、橙色で、先端に赤褐色の細点が入る。

分布域(県外) : 台湾北部、中国南部、スリランカ、インド、タイ、インドシナ、マレーシア、ニューギニア、オーストラリア北部、ニューカレドニア、フィジー諸島。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 石垣島では1ヶ所、西表島では1ヶ所で確認されているが、いずれも現在は確認されない。

学術的価値 : 分布域の北限である。本属の種は、花がある種の雌のジガバチに擬態し、雄が花を雌と間違えて交尾しようとする際に花粉が媒介される疑似交尾現象を示すことが知られているが、日本産の種については確認されていない。昆虫と植物の共進化を探る上で生物学上貴重な存在である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自生地の開発(石垣島)。野生化したウシによる踏みつけと食害(西表島)。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物(2016年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文 献 : 嘉数清信, 1984. 沖縄の野生ラン7, オオスズムシラン. 月刊おきなわ緑と生活, 40: 58-59.
横田昌嗣・新城和治・比嘉清文, 1997. 琉球列島植物分布資料 14. 沖縄生物学会誌, (35): 49-54.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **タカオオスズムシラン**

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Cryptostylis taiwaniana* Masam.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎はごく短く、1~2葉をつけ、根はやや肥厚する。葉は卵形~卵状楕円形、長さ15cm、上面に暗緑色の斑点があり、長さ10cmの葉柄がある。総状花序は頂生し、長さ45cmになり、約20花をつける。花は径4cm、萼片と花弁は線形、帯紫緑色、萼片は長さ1.8cm、花弁は長さ1.1cm、唇弁は長さ2.5cm、楕円状菱形、橙色で、全面に赤褐色の細点が入る。

分布域(県外) : 台湾南部、フィリピン。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 山地の自然林の陰湿な林床に生える。

生育状況 : 自生地は1ヶ所知られるだけで、狭い範囲に約20個体を産するだけであったが、2015年には1個体が観察されるだけになり、国内希少野生動植物種に指定された後の2016年にはその個体も見つけることができなくなった。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物(2015年)。石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文 献 : 横田昌嗣, 1993. 西表島新産のオオスズムシラン属(ラン科)の1種について. 沖縄島嶼研究, (11): 33-41.

執筆者名 : 横田昌嗣

和 名 : **アキザキナギラン (オトメナギラン)**

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Cymbidium javanicum* Blume var. *aspidistrifolium* (Fukuyama) F. Maek.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は直立し、高さ30~55cmになり、数枚の葉を互生する。葉は長楕円状披針形、長さ5~20cm、薄い革質。総状花序は偽球茎の下部から出て、3~20花をつける。花は黄緑色で、萼片と花弁は長さ2~2.5cm、唇弁は長さ2cm、長楕円形、白色で上面に紅紫色の斑点が入り、下方に折れ曲がる。

分布域(県外) : 本州(和歌山県)、四国(高知県)、九州(長崎県、宮崎県、鹿児島県)、種子島、奄美大島、徳之島、台湾、インド、マレーシア。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

- 生育状況 : 沖縄島北部では、自生地は3ヶ所しかなく、個体数は極めて少ない。石垣島では1ヶ所にごく少数個体が確認されるだけで、花はまだ観察されていないが、植物体の形状から本種と同定される。
- 学術的価値 : 琉球列島では隔離分布を示し、植物地理学上貴重である。沖縄島と徳之島の個体は国内の他の産地と比べて特に大形で、やや形態が異なり、分類学的な再検討が必要である。
- 減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : **カンラン**
- 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
- 学名 : *Cymbidium kanran* Makino
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は小さく、数枚の葉をつける。葉は線形、長さ 40~60 cm。総状花序は葉より長く、数個の花をつける。花は径 5~7 cm、芳香があり、淡紫褐色~淡黄緑色で、萼片は長さ 3~4 cm、花弁は長さ 2~3 cm、唇弁は長さ 1.5~2 cm、3裂し、白色で紅紫色の斑点が入り、下方に折れ曲がる。
- 分布域(県外) : 本州(東海道以西)、四国、九州、屋久島、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
- 生育状況 : かつては沖縄島北部の各地に点々と産したようであるが、乱獲により現在はほとんど見られない。現在も個体が確認されるのは、2ヶ所程度である。
- 減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・比嘉清文(追補)

-
- 和名 : **ナギラン**
- 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
- 学名 : *Cymbidium lancifolium* Hook. f.
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は細長く、長さ約 10 cm になり、2~3 枚の葉をつける。葉は長さ約 10 cm で、長い葉柄があり、革質。総状花序は腋生し 2~4 花をつける。花は黄白色で、径 4 cm、萼片は長さ 2.5~3 cm、花弁は 2 cm、唇弁は長さ 1.3 cm、白色で上面に紅紫色の斑点が入り、下方に折れ曲がる。
- 分布域(県外) : 本州南部、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、インド、タイ、インドシナ、マレーシア、ニューギニア。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
- 生育状況 : 現在 5ヶ所の自生地が知られるが、いずれの場所でも個体数は極めて少ない。
- 減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : **ホウサイラン**
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Cymbidium sinense* (Andrews) Willd.
 カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は数個接してならび、卵状円錐形、長さ 5 cm、3~5 葉をつける。葉は線状倒披針形、長さ 30~50 cm、幅 2~3 cm。総状花序は直立し、10 花程度を疎らにつけ、長さ 60 cm になる。花は芳香があり、径 5~6 cm、紫褐色、萼片は長さ 3.5 cm、花弁は長さ 2.5 cm、唇弁は白色で上面に紅紫色の斑紋が入り、長さ 2 cm、浅く 3 裂し、先は下方に折れ曲がり、上面に 2 列の板状隆起がある。

分布域(県外) : 屋久島、台湾、中国南部。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 石垣島と西表島のそれぞれ 1 ヶ所で確認されているが、いずれも現在は自生地で確認されない。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。

文献 : 比嘉清文, 1983. 琉球植物分布メモ. 沖縄生物学会誌, (21) : 79-80.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・比嘉清文*

和名 : **オキナワセッコク**
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Dendrobium okinawense* Hatusima et Ida
 カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は束生し、細長く垂れ下がり、長さ 70 cm になる。葉は互生し、長さ 10~12 cm。総状花序は各節から出て、普通 2 花をつける。花は白色または淡紅色で、半開し、径 5~6 cm。萼片と花弁は長さ 4 cm、唇弁は長さ 3 cm で、上面に 2 本の板状突起があり、その上に軟毛を密生する。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の自然林内のイタジイやオキナワウラジロガシの大木の樹幹に着生する。

生育状況 : かつては沖縄島北部の高地にやや普通に見られたが、現在は国頭村、東村、大宜味村のごく限られた場所にわずかの個体が残るだけである。大宜味村では、絶滅した可能性がある。

学術的価値 : 沖縄島の固有種である。

減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。ダム建設による自生地の水没。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : セッコク *Den. moniliforme* と同種とする意見があるが、セッコクと比べて植物体と花が大形で、唇弁の形が異なる。最近台湾に産することが報告されているが (Chung & Lu, 2007)、唇弁の形態などが異なることから、オキナワセッコクであるかどうかは、詳細な比較研究が必要である。特定国内希少野生動植物種に指定されており、採集や無許可の譲渡などは法律で禁じられている。特定国内希少野生動植物 (2008 年)。

文献 : Hatusima, S. & R. Ida, 1970. A new *Dendrobium* from Isl. Okinawa. J. Geobot., 18(3-4): 77-79.

Chung, S.-W. & S.-Y. Lu, 2007. *Dendrobium okinawense* Hatusima & Ida (Orchidaceae): A newly recorded species in Taiwan. *Taiwania*, 52(1): 106-112, 2007

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : キバナノセッコク
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Dendrobium tosaense* Makino
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は束生し、細長く垂れ下がり、長さ 25~100 cm。葉は互生し、披針形、長さ 2~7 cm。総状花序は偽球茎の先の数節から出て、3~8 花をつける。花は淡黄緑色で、径 3 cm。萼片は長さ 12 ~15 mm、花弁は長さ 10~12 mm、唇弁は長さ 12~15 mm で、卵形、上面中央に紫褐色の斑紋がある。
分布域(県外) : 四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、台湾。
県内の分布 : 石垣島。
生育環境 : 山地の自然林の樹幹に着生する。
生育状況 : 奄美大島では点々と産するが、石垣島では近年は全く確認されておらず、現状不明。
学術的価値 : 沖縄県で唯一の産地である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採。
備考 : 中国南部に産する *Den. stricklandianum* と同種とする見解がある。

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

和名 : コカゲラン
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Didymoplexiella siamensis* (Rolfe ex Downie) Seidenf.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 葉を欠く小形の腐生の多年草。根は肥厚して塊根になる。茎は花序を含めて花時に長さ 10~30cm になり、淡褐色。総状花序は頂生し、20 個程度の花をつけ、1 個ずつ開花させる。背萼片と花弁と側萼片は半分程度が癒合して釣り鐘状となり、外面は赤褐色を帯び、内面は紫色を帯びた白色、長さ 5~8mm、唇弁は楔状さじ形、紫色、長さ 5~6mm、幅 2~3mm、基部上面に短い 2 個の隆起と中央部に棒状のディスクがある。薬柱は長さ 4mm、腹面に長さ 2mm の突起があり目立つ。花梗子房は長さ 0.4~1.4cm。
分布域(県外) : 屋久島、種子島、奄美大島、台湾、中国南部 (海南島、香港)、タイ、ベトナム。
県内の分布 : 久米島。
生育環境 : 山地の常緑広葉樹林の林床に生える。
生育状況 : 自生地は 1ヶ所のみで、個体数は 2017 年には 3 個体確認されただけである。
学術的価値 : 沖縄県では唯一の記録で、隔離分布を示す本種の分布域をつなぐもので、植物地理学上貴重である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。
備考 : 国内では屋久島で初めて見つか (前川、1977)、その後種子島で発見され、奄美大島からも 2017 年に初めて記録された。

文 献 : Hu, A.-Q., S.W. Gale, P. Kumar, G. Fischer & K.S. Pang, 2014, Taxonomic notes on *Didymoplexiella siamensis* and *Gastrodia peichatieniana*, two fully mycoheterotrophic orchids new to the flora of Hong Kong. *Ann. Bot. Fennici*, 51(1-2): 177-184.
前川文夫, 1977. コカゲラン (新称) の日本への分布. 植物研究雑誌, 52(2): 63-64.

執筆者名 : 横田昌嗣

和 名 : ユウレイラン

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Didymoplexis pallens* Griff.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 葉を欠く小形の腐生の多年草。根は肥厚して塊根になる。茎は花序を含めて花時に長さ 5~6 cm になる。総状花序は頂生し、数花をつける。花は白色で、背萼片と花弁は基部で癒合し、側萼片は互いに癒合し、萼片は楕円状長楕円形、長さ 1 cm、花弁はやや短く、唇弁は広楔状三角形、長さ 5 mm、幅 6 mm、先は切形、牙齒縁で、上面の中央に 3 個の黄色の乳頭状突起がある。蕊柱の先には短い翼がある。

分布域 (県外) : トカラ列島、奄美大島。

県内の分布 : 沖縄島北~中部、石垣島、西表島、魚釣島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 沖縄島では数ヶ所に点々と産し、石垣島では 1ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。西表島と魚釣島の現状は不明。魚釣島では、増殖した野生化ヤギによる食害と森林生態系の破壊により絶滅した可能性がある。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。野生化ヤギによる食害(西表島)。

備考 : 植物体は小形で、梅雨時の短い開花期にのみ出現するので発見が難しく、分布に関する情報は少ない。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ジョウロウラン

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Disperis siamensis* Rolfe ex Downie

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態の特徴 : 夏緑性のごく小形の多年草。地中に長楕円形の塊根がある。茎は花序を含めて長さ 6~17 cm、1~2 葉をつける。葉は卵形、長さ 1 cm。総状花序は頂生し、1~3 花をつける。花は藤色、背萼片は披針形、長さ 6 mm、側萼片は癒合し Y 字状になり、側萼片に短い距があり、花弁は長楕円状披針形、背萼片と花弁は癒合して胃状になり、唇弁は長さ 3 mm、黄色で、3 裂し、先端に付属物がある。

分布域 (県外) : 台湾 (蘭嶼)、フィリピン、タイ。

県内の分布 : 石垣島、西表島

生育環境 : 山地の自然林の暗い林床に生える。

生育状況 : 石垣島では 3ヶ所に産するが、その内の 1ヶ所では近年全く確認されていない。他の 2ヶ所でも個体数は極めて少ない。西表島では 1ヶ所から報告されている (前川, 1974) が、現状は不明。

学術的価値 : ジョウロウラン属の分布の中心はアフリカにあり、種および属の分布域の北限であり、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。
備考 : 植物体は小形で、夏の短い開花期にのみ出現するので発見が難しく、分布に関する情報は少ない。石垣市自然環境保全条例保全種（2015年）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。
文献 : 前川文夫, 1974. 西表島のジョウロウラン. 植物研究雑誌, 49: 307-308.
横田昌嗣・豊見山元・比嘉清文・橋爪雅彦, 1994. 琉球列島植物分布資料 13. 沖縄生物学会誌, (32) : 61-65.
執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

和名 : カキラン
分類 : ラン科 (APG科名: ラン科)
学名 : *Epipactis thunbergii* A. Gray
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 湿地や湿った原野に生える夏緑性の多年生草本。茎は高さ 30~50 cm、7~8 個の葉を 2 列に互生する。葉は卵状披針形、長さ 5~10 cm、茎の上部の葉は徐々に小さくなり苞状となる。頂生する総状花序は 10 花程度をつけ、萼は橙褐色、狭長卵形、長さ 12~15 mm、花弁は白色、卵形、長さ 12~15 mm、唇弁は白色で上面に紅紫色の細点があり、3 裂し、長さ 12~15 mm。室果は狭長楕円形、長さ 2 cm。
分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、種子島、奄美大島、徳之島、ウスリー、中国東北部、朝鮮。
県内の分布 : 硫黄島島。
生育環境 : やや乾いた日当たりの良い草原または低木林の明るい林床に生える。
生育状況 : 自生地は 1ヶ所知られるだけで、個体数はきわめて少ない。花や果実をつけた植物体は見つかっていない。硫黄島島は無人島であり、開発の可能性はないが、今回は調査を行うことができなかった。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。
備考 : 鹿児島県本土の一部、種子島、奄美大島、徳之島に産するものは、これまで花が確認されたものについてはすべて、唇弁が花弁化したペロリア型のイソマカキラン *E. thunbergii* f. *subconformis* Sakata であることから、硫黄島島のものはイソマカキランの可能性はある。奄美大島、徳之島、硫黄島島では、日本本土のカキランとやや異なり、やや乾いた原野に生える。

文献 : 立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2001. 沖縄県硫黄島島で見出された分類学的あるいは植物地理学的に注目される維管束植物. 沖縄生物学会誌, (39) : 77-92.
立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2002. 硫黄島島の植物相. “沖縄県史資料編 13 硫黄島島”, 沖縄県文化振興会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 57-104.
執筆者名 : 横田昌嗣*・立石庸一*・横田昌嗣(追補)

和名 : タシロラン
分類 : ラン科 (APG科名: ラン科)
学名 : *Epipogium roseum* (D. Don) Lindl.
カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 葉を欠く腐生の多年草。地中に長楕円形の球茎がある。茎は花序を含めて長さ 20~40 cm、乳白色。総状花序は頂生し、伸長中は點頭し、数~25 花をつける。花は乳白色で、淡紫色の細点がわずかに

- 入り、萼片と花弁は長さ7~12 mm、披針形、唇弁は長さ9~1.3 mm、卵形、基部に長さ4 mmの距がある。
- 分布域(県外) : 本州(関東以南西南)、四国、九州、台湾、東南アジア、オーストラリア、ニューカレドニア、アフリカ。
- 県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。石灰岩地でも非石灰岩地でも発生する。
- 生育状況 : 沖縄島では5ヶ所の自生地が知られるが、個体数は非常に少ない。その内、2ヶ所は開発される恐れがある。西表島では1938年に発見(Fukuyama, 1942)された以後永らく確認されていなかったが、2003年に2ヶ所で確認されている。石垣島でも最近確認されている。
- 学術的価値 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採(沖縄島)。
- 備考 : 近年分布域が拡大して北上しており、本州の各地で新産地が見つかった。竹富町希少野生動物種(2017年)。
- 文献 : Fukuyama, N., 1942. Orchidaceae liukiensis novae vel minus cognitae. I. Trans. Nat. Hist. Soc. Formos., 32: 241-244.
阿部篤志, 2015. 大宜味村中央部石灰岩山地における希少植物調査(最終報告). 事業年報(平成25年度), 沖縄美ら島財団総合研究センター, 34-49。
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・安田恵子*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

- 和名 : **オオオサラン(ホザキオサラン)**
- 分類 : ラン科 (APG科名: ラン科)
- 学名 : *Eria corneri* Rchb. f.
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類 (EN)

- 形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。根茎は匍匐し、偽球茎を5 mm程度の間隔でつける。偽球茎は長さ3~6 cm、角張った卵形、先に2葉をつける。葉は長楕円状倒披針形、長さ20~25 cm。総状花序は頂生し、長さ8~25 cm、5~16花をつける。花は淡黄白色、萼片は長さ8~11 mm、長楕円状披針形、花弁は長さ8~9 mm、線状長楕円形、唇弁は長さ1 cm、3裂し、側裂片は短く、中央裂片は三角形、上面に3~7本の板状の突起があり、先端は時に赤色を帯びる。
- 分布域(県外) : 屋久島、種子島、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、インドシナ。
- 県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島。
- 生育環境 : 山地の自然林の樹幹や岩上に着生する。沖縄島では主に石灰岩地に、石垣島では非石灰岩地に産する。
- 生育状況 : 沖縄島では数ヶ所、石垣島では3ヶ所で確認されているが、個体数は非常に少ない。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採。
- 備考 : 竹富町希少野生動物種(2017年)。
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・豊見山元(追補)・松島昭司(追補)

- 和名 : **リュウキュウセッコク**
- 分類 : ラン科 (APG科名: ラン科)
- 学名 : *Eria ovata* Lindl.
- カテゴリー : 絶滅危惧 II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類 (EN)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は束生し、長さ10~23 cm、円柱形、上部に4~7葉を互生する。葉は長さ12~17 cm、長楕円形。総状花序は腋生し、褐色の短毛が生え、長さ10~15 cm、花柄の短い多数の花をつける。花は淡黄白色、萼片と花弁は長さ10~12 mm、披針形、唇弁は長さ4 mm、卵形、基部上面に2本の赤色の隆起がある。
- 分布域(県外) : 台湾、フィリピン。
- 県内の分布 : 西表島、魚釣島。
- 生育環境 : 山地の自然林の樹幹に着生し、しばしばマット状の群落を作る。
- 生育状況 : 西表島では点々と自生するが、乱獲により個体数は年々減少している。魚釣島では高地の岩上や地上に生え、野生化ヤギによる食害されている恐れが高い。
- 学術的価値 : 分布域の北限である。
- 減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。西表島では、着生している樹木が倒壊している事例がかなり確認されている。野生化ヤギによる食害と森林生態系の破壊(魚釣島)。
- 保全対策 : 魚釣島では野生化ヤギの駆除が急務である
- 備考 : 奄美大島に産するとの報告があるが、疑問視されている。葉先が尖り、花序が無毛の型はフシナシオサラン *E. ovata* var. *retroflexa* と呼んで区別されることがあり、魚釣島と西表島に産する(Garay & Sweet, 1974)。石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。
- 文献 : Garay, L. A. & H. R. Sweet, 1974. Orchids of Southern Ryukyu Islands. Harvard University, 113-114.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)・加島幹男(追補)

- 和名 : オサラン
- 分類 : ラン科 (APG科名: ラン科)
- 学名 : *Eria reptans* (Franch. et Sav.) Makino
- カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形態の特徴 : ごく小形の夏緑性の多年草。偽球茎は接して数個並び、長楕円形、長さ1~2.5 cm、先に2葉をつける。葉は長楕円形、長さ3~8 cm。総状花序は頂生し、1~3花をつける。花は乳白色、萼片と花弁は長さ7~8 cm、広披針形、唇弁は黄色で、赤色を帯び、長さ9 mm、3裂し、側裂片は三角状卵形、中央裂片は円形、上面に2~3列の隆起がある。
- 分布域(県外) : 本州、四国、九州、屋久島、奄美大島、台湾。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 高地の樹上または岩上に着生する。奄美大島では山地の自然林の樹枝や岩上に着生し、しばしば群生する。
- 生育状況 : 1974年に前川文夫博士によって採集された標本が国立科学博物館(TNS)に収蔵することが確認された。花も果実もないうえ葉もなく、6個の偽球茎が連結しただけの不十分な標本であるが、他に類似した種がないことから本種と同定される。近年は全く確認されておらず、現状不明。
- 学術的価値 : 沖縄県で唯一の産地である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。園芸用の採集。
- 文献 : Garay, L. A. & H. R. Sweet, 1974. Orchids of Southern Ryukyu Islands. Harvard University, 111-113.

執筆者名 : 横田昌嗣

- 和名 : **ホソフデラン**
- 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
- 学名 : *Erythroides formosana* Schltr.
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)
- 形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は匍匐し、先端は直立し、長さ 30~60 cm、3~4 枚の葉を互生し、先端に総状花序をつける。葉は斜楕円形、長さ 5~10 cm、3 脈が目立つ。総状花序は長さ 20~40 cm、多花を密につける。花は赤褐色、萼片と花弁は長さ 5~6 mm、唇弁は 3 浅裂し、長さ 7 mm、白色で、基部は長さ 3 mm の距となり、距は先端が 2 浅裂し、内部には突起がない。
- 分布域 (県外) : 台湾。
- 県内の分布 : 石垣島。
- 生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
- 生育状況 : 1 ヶ所で少数個体が観察されただけである。その後、自生地は通信施設の建設で開発されたため、現在は見られない。
- 学術的価値 : 分布域の北限であり、日本で唯一の産地である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が極めて少ない。自然林の伐採。
- 備考 : 近年、携帯電話などの中継塔や通信施設が各地に建設されているが、雲霧帯や風衝地などの特殊で脆弱で局所的な環境に建設する際は、十分な環境影響評価が必要である。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。**Erythroides blumei* として評価。
- 文献 : 横田昌嗣, 1996. ミヤマウズラ. 週刊朝日百科, 植物の世界, 104: 244.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **エダウチャガラ**
- 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
- 学名 : *Eulophia graminea* Lindl.
- カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし
- 形態の特徴 : 冬緑性の多年草。偽球茎は球形で、長さ幅とも 4 cm になり、数葉をつけるが、花時は無葉。葉は線状披針形、長さ 30 cm。総状花序は腋生し、単一または分枝し、長さ 40 cm になり、疎らに多数の花をつける。花は紫褐色を帯びた黄緑色、萼片と花弁は長さ 1.2 cm、線状長楕円形、唇弁は白色で、淡赤色を帯び、長さ 1.2 cm、倒卵形、3 裂し側裂片は小さく、中央裂片は倒卵形、上面に糸状突起が密生し、基部に長さ 3 mm の 2 浅裂する距がある。
- 分布域 (県外) : 徳之島、台湾、中国南部、インドシナ、タイ、マレーシア、ヒマラヤ、インド、スリランカ。
- 県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、渡嘉敷島、阿嘉島、久米島、宮古島、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 日当たりのよい草地や原野に生える。芝生や路傍などの人為的な環境にも多く見られるが、遷移が進んで日当たりが悪くなると消失する。
- 生育状況 : 沖縄島では北部から南部まで点々と産するが、その他の島ではまれである。今回の調査で伊平屋島と伊是名島では、各 1 ヶ所で少数個体が観察された。
- 学術的価値 : 分布域のほぼ北限にあたる。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自生地の開発。遷移の進行。

文 献 : 宮城康一, 1974. 慶良間列島の植物. “沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告, 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島”, 沖縄県, 143-168.
新里孝和・比嘉 寿, 1976. 北明治山の植物. 沖縄生物学会誌, (14) : 99-110.
立石庸一・松村俊一・山城 考・新城和治, 2004. 琉球列島植物分布資料 17. 沖縄生物学会誌, (42) : 61-67.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・仲宗根忠樹(追補)・阿部篤志(追補)

和 名 : タカサゴヤガラ

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Eulophia taiwanensis* Hayata

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 冬緑性の多年草。偽球茎は卵形～球形、長さ 1.5～3 cm。葉は線形、長さ 30～50 cm。総状花序は数～15 花をつける。花は半開し、紫色を帯びた淡黄緑色、径 1.5 cm、萼片と花弁は長さ 11 mm、唇弁は長さ 1 cm、白色、3 浅裂し、上面に 3 列の長い板状突起と多数の糸状突起があり、距は長さ 4～5 mm。

分布域(県外) : 台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 日当たりのよい湿った草地や明るい林床に生える。

生育状況 : 4 ヶ所の自生地が知られるが、生育は狭い範囲に限られ、個体数は極めて少ない。その内 2 ヶ所では絶滅した恐れがある。

学術的価値 : 分布域の北限で、日本で唯一の産地である。

減少の要因 : 自生地の開発。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。遷移の進行。ゴルフ場建設。軍事基地の建設。

備 考 : エダウチヤガラ *E. graminea* に酷似しており混同されていたが、最近(横田・治井, 1993) になってから自生が確認された種である。IUCN カテゴリー: Endangered (EN)。

文 献 : 横田昌嗣・治井正一, 1993. 日本新産のタカサゴヤガラ(ラン科)について. 沖縄生物学会誌, (31) : 47-51.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・治井正一*・横田昌嗣(追補)

和 名 : イモネヤガラ

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Eulophia zollingeri* (Rchb. f.) J. J. Smith

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 無葉の多年草。偽球茎は楕円形、やや扁平で、長さ 10 cm になる。総状花序は長さ 40 cm になり、20～30 花をつける。花は紫褐色、萼片と花弁は長さ 17～20 mm、長楕円状卵形、唇弁は広楔状三角形、長さ 17 mm、3 裂し、側裂片は円形、中央裂片は三角形、上面に 2 個の隆起と短毛があり、基部に短い距がある。

分布域(県外) : 九州(宮崎県、鹿児島県)、屋久島、種子島、奄美大島、台湾、台湾、フィリピン、インド、タイ、インドシナ、マレーシア、ニューギニア。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、久米島、阿嘉島、石垣島。

- 生育環境 : 低地の自然林の林床に生える。
- 生育状況 : 沖縄島では北部から南部までの各地で、石垣島では2ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。伊平屋島では2ヶ所で、阿嘉島では1ヶ所で、久米島では1ヶ所で確認されているが、久米島では自生地の開発で絶滅した可能性がある。伊是名島の現状は不明。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。
- 備考 : 花と植物体に褐色の着色を欠き、全体が緑色を呈するものはミドリイモネヤガラ *E. zollingeri* f. *viride* と呼ばれ (Yokota, 1998)、沖縄島中部を基準産地として記載されているが、その自生地はゴルフ場建設で開発され、絶滅した可能性が高い。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015年)。
- 文献 : 宮城康一, 1974. 慶良間列島の植物. “沖縄海岸国立公園拡張候補地学術調査報告書, 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島”, 沖縄自然研究会 (編), 沖縄県, 143-168.
 新里孝和・比嘉 寿, 1976. 北明治山の植物. 沖縄生物学会誌, (14) : 99-110.
 Yokota, M., 1998. A new form of *Eulophia zollingeri* (Orchidaceae) from the Ryukyus. J. Phytogeogr. Taxon., 46: 183-185.
 横田昌嗣・島袋憲一, 1992. 琉球列島植物分布資料 10. 沖縄生物学会誌, (30) : 81-83.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : タカツラン
- 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
- 学名 : *Galeola altissima* (Blume) Rchb. f.
- カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

- 形態の特徴 : 無葉のつる性多年草。茎は紫色を帯びた黄色で、分枝し、長さ 20 m に達し、放射状に分枝するやや扁平な根で基物に付着する。円錐花序は腋生し、長さ 15~30 cm、分枝して多数の花をつける。花は橙黄色、萼片と花弁は長さ 1.2 cm、線状長楕円形、唇弁は長さ 1 cm、広倒卵形、上面中央に2個の有毛の突起がある。
- 分布域(県外) : 屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、台湾、フィリピン、インド、インドシナ、ジャワ。
- 県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島北部、石垣島、西表島、与那国島。
- 生育環境 : 山地の自然林の林床に生え、イタジイなどの樹幹に這い上がる。
- 生育状況 : 沖縄島では数ヶ所、石垣島では2ヶ所、西表島では2ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。与那国島では1971年に確認された後、見つかっていない。伊平屋島では、2012年に1ヶ所で確認されている。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。
- 備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015年)。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。**Erythrorchis altissima*として評価。
- 文献 : 新里孝和・比嘉 寿, 1976. 北明治山の植物. 沖縄生物学会誌, (14) : 99-110.
 横田昌嗣・宮城康一, 1988. 琉球列島植物分布資料 6. 沖縄生物学会誌, (26) : 35-37.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)・仲間正和(追補)

和名 : カシノキラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Gastrochilus japonicus* (Makino) Schltr.
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎は長さ 2~10 cm、葉を 2 列に互生する。葉は革質で、線状長楕円形、長さ 3~9 cm。散房状花序は腋生し、長さ 1~3 cm、4~10 花をつける。花は淡黄緑色で、萼片と花弁は長さ 4 mm、長楕円形、唇弁は長さ 4 mm、基部は囊状となり、先端は広三角形、白色で、基部に淡赤色の斑紋があり、先端に黄色の丸い斑紋がある。
分布域(県外) : 本州(関東以南西南)、四国、九州、屋久島、奄美大島、諸島、徳之島。
県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。
生育環境 : 山地の自然林の樹幹に着生する。
生育状況 : かつてはやや普通に見られたものと思われるが、現在は沖縄島の数ヶ所、石垣島の 3 ヶ所、西表島の数ヶ所に自生が確認されるだけで、個体数は少ない。
減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採(沖縄島)。もともと自生地が少ない。ダム建設による自生地の水没(沖縄島)。
備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・國府方吾郎(追補)

和名 : ツボミヤツシロラン
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Gastrodia clausa* T.-C. Hsu, S.-W. Chung & C.-M. Kuo
カテゴリー : 絶滅危惧ⅠB類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 葉を欠く腐生の多年草。地中に紡錘形の塊根がある。茎は花時長さ 2~4cm、花後伸長して長さ 14~43cmになる。総状花序は頂生し、1~6 花をつける。花は帯紫褐色、平開せず、萼片と花弁と唇弁は大部分癒合して筒状になり、萼片は長さ 9~13mm、花弁は斜卵形、唇弁は黄褐色で、長さ 3.5~4.5mm、卵状三角形、基部に 1 対の球形の突起がある。果実は円柱形、長さ 2~3.3cm。
分布域(県外) : 台湾。
県内の分布 : 沖縄島北部~中部。
生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
生育状況 : 沖縄島の数ヶ所に自生地が知られるだけである。
学術的価値 : 分布域の北限であり、沖縄県と台湾の植物相の高い類似性を示すものである。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。軍事演習。
備考 : 最近になって台湾から記載された種 (Hsu *et al.*, 2012) で、国内からは 2013 年に報告された (Suetsugu *et al.*, 2013)。花期が短く、花時には植物体が目立たず発見が難しい。果実期には植物体は伸長するのでやや見つけやすくなるが、正確な種の同定が困難であり、分布に関する正確な情報が少ない。

文献 : Hsu, T.-C., S.-W. Chung & C.-M. Kuo. 2012. Supplements to the Orchid Flora of Taiwan (VI). 2012. *Taiwania*, 57(3): 271-277.
Suetsugu, K., M. Nakama, T. Watanabe, H. Watanabe, T. Yamamoto & M. Yokota. 2013. First record of the mycoheterotrophic plant *Gastrodia clausa* (Orchidaceae) from Okinawa Island, Ryukyu Islands, Japan. *Acta Phytotax. Geobot.* 64(3): 155-158.

執筆者名 : 横田昌嗣

- 和名 : **コンジキヤガラ**
- 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
- 学名 : *Gastrodia javanica* (Blume) Lindl.
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態の特徴 : 葉を欠く腐生の多年草。地中に楕円形の塊根がある。茎は花序を含めて長さ 35~60 cm。総状花序は頂生し、4~18 花を疎らにつける。花は黄色、萼片と花弁は半分以上癒合して筒状になり、長さ 1 cm、花弁は円形で、長さ 2.5 mm、唇弁は長さ 8 mm、菱形状匙形。
- 分布域(県外) : 台湾、フィリピン、マレーシア。
- 県内の分布 : 石垣島、西表島、与那国島。
- 生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
- 生育状況 : 石垣島と西表島ではいずれも数ヶ所に産するが、個体数は少ない。与那国島の現状は不明。
- 学術的価値 : 分布域の北限である。マレーシア系の植物で、植物地理学上貴重である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。
- 備考 : 本種の植物体と花が緑青色を呈するものは、ヒスイヤガラ *G. javanica* f. *thalassina* Yokota と呼ばれ (Yokota, 1998)、石垣島固有である。石垣島の 1ヶ所に基本品種と共に産したが、公園整備のための森林伐採で絶滅した。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文献 : Yokota, M., 1998. A new form of *Gastrodia javanica* (Orchidaceae) from the Ryukyus. *Acta Phytotax. Geobot.*, 49(2): 147-150.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **ハルザキヤツシロラン (ヤンバルヤツシロランを含む)**
- 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
- 学名 : *Gastrodia nipponica* (Honda) Tuyama
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態の特徴 : 葉を欠く腐生の多年草。地中に紡錘形の塊根がある。茎は花時長さ 3.5~4 cm、花後伸長して長さ 20~ 30 cm になる。総状花序は頂生し、1~3 花をつける。花は帯紫褐色、萼片と花弁は大部分癒合して筒状になり、長さ 2.3 cm、唇弁は黄色で、長さ 9 mm、三角状広卵形、基部に 1 対の球形の突起がある。
- 分布域(県外) : 本州 (和歌山県)、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、喜界島。
- 県内の分布 : 沖縄島北~中部、西表島、与那国島。
- 生育環境 : 山地の自然林や二次林の林床に生える。
- 生育状況 : 沖縄島と西表島ではいずれも数ヶ所に点々と自生地が知られるが、個体数は少ない。与那国島では 1ヶ所に少数個体を産する。ハルザキヤツシロランに酷似するヤンバルヤツシロラン *G. nipponicoides* Suetsugu がごく最近新種記載された (Suetsugu, 2017)。ハルザキヤツシロランに似るが、花冠がやや短く、唇弁上面の板状隆起が 2 列と少なく、小嘴体を欠き、柱頭が薬柱の上部にある点で区別できると言うが、花を解剖しないと同定が難しいため、ハルザキヤツシロランとヤンバルヤツシロランの正確な分布情報はごく限られている。今のところ、ヤンバルヤツシロランの確実な自生地は、沖縄島北部に限られている。
- 学術的価値 : 分布域の南限である (ヤンバルヤツシロランは、沖縄島の固有種である)。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。ダム建設による水没 (沖縄島)。
備考 : 花期が短く、花時には植物体が目立たず発見が難しい。果実期には植物体は伸長するのでや見つけやすくなるが、正確な種の同定が困難であり、分布に関する正確な情報が少ない。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動物種 (2017 年)。
文献 : 横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.
Suetsugu, K., 2017. Two new species of *Gastrodia* (Gastrodieae, Epidendroideae, Orchidaceae) from Okinawa Island, Ryukyu Islands, Japan. *Phytotaxa*, 302(3): 251-258.
執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣 (追補)

和名 : ツツガタヤツシロラン
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Gastrodia okinawensis* Suetsugu
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 葉を欠く腐生の多年草。地中に紡錘形の塊根がある。茎は花時長さ 10~17cm、花後もほとんど伸長しない。総状花序は頂生し、1~4 花をつける。花は帯紫褐色、萼片と花弁は大部分癒合して筒状になり、長さ 18~21mm、唇弁は淡緑色で、長さ 10mm、菱形状楕円形、基部に 1 対の球形の突起がある。薬柱は長さ 7~8mm。
県内の分布 : 沖縄島北部。
生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
生育状況 : 沖縄島の基準産地 1 ヶ所と他に 1 ヶ所の自生地が知られるだけである。
学術的価値 : 学術的価値 : ごく最近になって記載された (Suetsugu, 2017) 沖縄県の固有種であり、沖縄島北部の生物多様性の高さを示すものとして貴重である。
学術的価値 : ごく最近になって記載された (Suetsugu, 2017) 沖縄県の固有種であり、沖縄島北部の生物多様性の高さを示すものとして貴重である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。軍事演習。
備考 : 花期が短く、花時には植物体が目立たず発見が難しい。果実期には正確な種の同定が困難であり、分布に関する正確な情報が少ない。
文献 : Suetsugu, K. 2017. Two new species of *Gastrodia* (Gastrodieae, Epidendroideae, Orchidaceae) from Okinawa Island, Ryukyu Islands, Japan. *Phytotaxa*, 302(3): 251-258.
執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : ナンゴクヤツシロラン
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Gastrodia shimizuana* Tuyama
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 葉を欠くごく小形の腐生の多年草。根茎はやや肥厚し、長さ 4~9 cm、幅 6~10 mm、三角形の葉鞘で包まれる。茎は直立し、花序を含めて長さ 4~8 cm、短い筒状の苞がある。総状花序は頂生し、1~6 花をつける。花は黄褐色、萼片と花弁は半分以上にわたって癒合し鐘形となり、先端は広く開き、径 13~14 mm、背萼片の遊離部は長さ 8.5~10 mm、広卵形、側萼片の遊離部は長さ 10.5~12.6

mm、幅 6.5~10 mm、広卵形、花弁の遊離部は円形~広卵形、長さ 3.3~4.6 mm、幅 3.5~5.1 mm。唇弁は 3 裂し、長さ 4.4~5.3 mm、中央裂片に 2 個の板状隆起があり、側裂片は半円状三角形、縁毛があり、上面はやや有毛、基部に 2 個の球形の隆起がある。蕊柱は長さ 4.2~4.5 mm、幅 4.1~4.5 mm。果実は長さ 25~34 mm、小果柄はハルザキヤツシロラン *G. nipponica* と同様、花後に伸長し、長さ 15~35 cm。種子は紡錘形、長さ 2.5~3 mm。

- 分布域 (県外) : 台湾。
- 県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。
- 生育環境 : 西表島では、山地の川沿いのオキナワウラジロガシなどの自然林の林床に生える。沖縄島では石灰岩地に生える。
- 生育状況 : 西表島で 1 度記録された (Tuyama, 1982) だけであったが、2001 年に 2 ヶ所で再発見された (Kobayashi & Yukawa, 2001)。その 2 ヶ所では数年にわたって開花が確認されたが、最近では確認されていない。沖縄島では古生層石灰岩地の 2 ヶ所で発見されたが (Suetsugu *et al.*, 2012)、個体数は少ない。
- 学術的価値 : 沖縄県と台湾の固有種で、両地域の植物相の類似性を示している。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が極めて少ない。
- 備考 : ハルザキヤツシロランと同様に開花期には発見が難しい。台湾にも産することが報告されている (Chung & Hsu, 2006)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文献 : Chung, S.-W. & T.-C. Hsu, 2006. *Gastrodia shimizuana*, a newly recorded of *Gastrodia* (Orchidaceae) in Taiwan. *Taiwania*, 51(1): 50-52.
 Kobayashi, S. & T. Yukawa, 2001. Rediscovery of *Gastrodia shimizuana* Tuyama (Orchidaceae) on Iriomote Island, Japan. *Acta Phytotax. Geobot.*, 52: 49-55.
 Suetsugu, K., M. Nakama, T. Watanabe, H. Watanabe & M. Yokota, 2012. The northernmost locality of *Gastrodia shimizuana* (Orchidaceae). *J. Jpn. Bot.*, 87(1): 67-69.
 Tuyama, T., 1982. A new *Gastrodia* from the Ryukyus. *Acta Phytotax. Geobot.*, 33: 380-382.

執筆者名 : 横田昌嗣*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)・仲間正和(追補)・阿部篤志(追補)

- 和名 : トサカメオトラン
- 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
- 学名 : *Geodorum densiflorum* (Lam.) Schltr.
- カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は偏球形、長さ 4~5 cm、2~3 葉を束生する。葉は線状長楕円形、長さ 20~50 cm。総状花序は腋生し、花時點頭して、密に多数の花をつけ、果実期には直立する。花は白色またはまれに淡紫色、萼片と花弁は長さ 1~1.1 cm、長楕円形、唇弁は長さ 1.1 cm、船形、上面に紫条があり、基部中央に黄色の突起がある。
- 分布域 (県外) : 台湾、フィリピン、インド、タイ、インドシナ、マレーシア、ニューギニア、ポリネシア、オーストラリア、ニューカレドニア、フィジー諸島。
- 県内の分布 : 沖縄島、阿嘉島、宮古島、伊良部島、下地島、多良間島、石垣島、西表島、鳩間島、小浜島、与那国島。
- 生育環境 : 山地の明るい林縁や草地に生える。遷移が進行して森林になると消失する。
- 生育状況 : 沖縄島、石垣島、西表島では以前はやや普通に見られたが、近年個体数は急激に減少している。阿嘉島では少数個体が確認されている (石川・石田, 1988)。宮古島では近年確認されていない。下地島と多良間島では少数個体が 2013 年に確認されている。小浜島では 2014 年に 1 ヶ所で数個体が確認されている。与那国島の現状は不明。
- 学術的価値 : 分布域の北限である。
- 減少の要因 : もともと自生地が少ない。園芸用の採集。自生地の開発。遷移の進行。

備考 : 花は白色が普通であるが、県内には極めてまれに紫色を帯びる個体がある。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : Shinjo, K., 1977. Flora of Hatoma Island, the Yaeyama Islands. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 3: 29-40.
石川 敦・石田 仁, 1988. 琉球列島植物分布資料 5. 沖縄生物学会誌, (26) : 31-34.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・佐藤宣子(追補)

和名 : ツユクサシスラン
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Goodyera foliosa* (Lindl.) Benth. ex Hook. f.
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎は長く匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 10~30 cm になり、やや疎らに 4~6 葉を互生する。葉は卵状楕円形~卵形、長さ 4~7 cm。総状花序は頂生し、短毛が多く、6~7 花をつけ、花より短い数個の包葉がある。花は半開し、紅色を帯びた淡緑褐色、萼片は長さ 7~9 mm、長楕円形~狭卵形、花弁は菱形状倒披針形、長さ 8~9 mm、唇弁は狭卵状嚢形、長さ 7~8 mm、基部は嚢状で上面に多数の短毛が生える。

分布域(県外) : 九州(五島列島、鹿児島県)、屋久島、トカラ列島。

県内の分布 : 沖縄島北部?、石垣島、西表島。

生育環境 : 高地の自然林の林床に生え、しばしば群生する。

生育状況 : 石垣島は 1ヶ所、西表島は 2ヶ所の自生地が確認されており、いずれも群生するのですぐに絶滅する恐れはないが、個体数は年々減少している。

学術的価値 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集(沖縄島)。自生地の開発(石垣島)。放牧されたウシによる踏みつけ(西表島)。

備考 : 植物体はクニガミシスラン *G. sonoharae* とよく似ており、花がないと区別できない。沖縄島北部の個体はすべてクニガミシスランである可能性がある。個体が多い割には開花する個体が少なく、分布に関する正確な情報は乏しい。クニガミシスランとの関係は、分類学的に再調査する必要がある。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ヤブミョウガラン
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Goodyera fumata* Thwaites
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 70 cm になり、4~6 葉を互生する。葉は広披針形、長さ 20 cm。総状花序は頂生し、多数の花をつけ、数個ずつ順次咲かせる。花は赤褐色、唇弁は淡黄褐色で先端は白色、萼片は長さ 7~8 mm、長楕円形~卵状長楕円形、花弁は長さ 7~8 mm、線状倒披針形、唇弁は長さ 7~8 mm、卵形で、先は尖り下方に反り返り、基部はやや嚢状になり、上面に短毛が生える。

分布域(県外) : 台湾、中国南部、フィリピン、スリランカ、インド、タイ、ジャワ。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の石灰岩地の林床に生える。
 生育状況 : 自生地は3ヶ所が知られるだけで、個体数は極めて少ない。その内1ヶ所では現在は全く発見されない。
 学術的価値 : 分布域の北限であり、日本で唯一の産地である。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。自生地の開発。採石。
 備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2017年)。

文献 : 横田昌嗣・新城和治・比嘉清文, 1997. 琉球列島植物分布資料 14. 沖縄生物学会誌, (35) : 49-54.
 阿部篤志, 2015. 大宜味村中央部石灰岩山地における希少植物調査 (最終報告). 事業年報 (平成25年度), 沖縄美ら島財団総合研究センター, 34-49.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ナンバンキンギンソウ
 分類 : ラン科 (APG科名: ラン科)
 学名 : *Goodyera grandis* (Blume) Blume
 カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧II類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 50 cm になり、数葉を互生する。葉は長さ 13~15 cm、斜卵状長楕円形~楕円形、葉脈の部分はやや濃緑色で、葉に網目状の淡い斑紋が入る。総状花序は頂生し、7~8月に多数の花を密につけ、花茎には3個程度の鱗状葉をつける。花は淡赤褐色で、唇弁は淡黄色、萼片は長さ7~9 mm、長楕円形、花弁は長さ7~8 mm、匙形、唇弁は長さ6~7 mm、卵状嚢形、先は尖り下方に反り返り、基部上面に短毛がある。

分布域(県外) : 徳之島、台湾、フィリピン、タイ、マレーシア、オーストラリア北部、サモア諸島。

県内の分布 : 沖縄島(北部~南部)、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。徳之島と沖縄島では石灰岩地に、石垣島と西表島では非石灰岩地に産する。

生育状況 : 沖縄島では4ヶ所、石垣島では数ヶ所、西表島では2ヶ所の自生地が確認されている。沖縄島ではときに群生する場合があるが、他の島嶼では個体数は少ない。個体数が多い場合でも、開花結実する個体は限定される。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。園芸用の採集。採石。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015年)。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 阿部篤志, 2015. 大宜味村中央部石灰岩山地における希少植物調査 (最終報告). 事業年報 (平成25年度), 沖縄美ら島財団総合研究センター, 34-49.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : カゴメラン
 分類 : ラン科 (APG科名: ラン科)
 学名 : *Goodyera hachijoensis* Yatabe var. *matsumurana* (Schltr.) Ohwi
 カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴** : 小形の常緑の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 15~30 cm になり、4~8 葉を互生する。葉は斜卵状楕円形~狭卵形、長さ 3~8 cm、脈に沿って網目状の白斑が入る。総状花序は頂生し、密に多数の花をつける。花は淡紅白色、萼片は長さ 3~4 mm、卵形~長楕円状卵形、花弁は長さ 3~4 mm、倒披針形、唇弁は長さ 3~4 mm、広卵形、基部は嚢状で、上面に毛が生え、黄色。
- 分布域(県外)** : 伊豆諸島、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島。
- 県内の分布** : 伊平屋島、沖縄島北部、阿嘉島、久米島、石垣島、西表島、内離島、魚釣島。
- 生育環境** : 山地の自然林の林床に生える。
- 生育状況** : かつては普通に見られたが、最近では極めてまれな種になった。
- 学術的価値** : 葉の中央に帯状の白斑が入る基本変種はハチジョウシユスラン(ヤクシマシユスラン)と呼ばれ、伊豆諸島の他に沖縄県内にも点々と産し、カゴメランと混生するが、個体数はより少ない。花の形、葉の形と斑紋などに地理的変異が多く、分類学的な再検討が必要である。
- 減少の要因** : 園芸用の採集。自然林の伐採。野生化ヤギによる食害(魚釣島)。
- 備考** : 石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。
- 保全対策** : 魚釣島では野生化ヤギの駆除が急務である。

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

-
- 和名** : ヒゲナガキンギンソウ
- 分類** : ラン科 (APG 科名: ラン科)
- 学名** : *Goodyera longibracteata* Hayata
- カテゴリー** : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴** : 常緑の多年草。植物体も花もナンバンキンギンソウ *G. grandis* に非常によく似ている。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 50 cm になる。葉は 6~8 枚つき、長さ 7~14 cm、斜卵状長楕円形~楕円形、ナンバンキンギンソウと異なりほぼ一様な緑色を呈する。総状花序は頂生し、2~4 月に多数の花を密につけ、花茎には 6 個程度の鱗状葉をつける。花は赤褐色で、唇弁は黄色、萼片は長楕円形、長さ 7~8 mm、萼片は線状匙形、長さ 7 mm、唇弁は卵状嚢形、長さ 6 mm、先は尖り下方に反り返り、基部上面に短毛がある。
- 分布域(県外)** : 台湾、フィリピン(バタン島)。
- 県内の分布** : 石垣島、西表島。
- 生育環境** : 山地の自然林の林床に生え、ナンバンキンギンソウと側所的に生えることがあるが、混生はしない。
- 生育状況** : 石垣島では 5ヶ所に産することが確認されているが、個体数は少ない。最も個体数の多い 1ヶ所は開発される恐れがある。石垣島の 1ヶ所では、おそらく薬用の採集により、群生していた集団がほぼ消失した。西表島では 2ヶ所に産し、個体数は極めて少ない。
- 学術的価値** : 分布域の北限である。
- 減少の要因** : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用・薬用の採集。自然林の伐採(石垣島)。
- 備考** : ナンバンキンギンソウに極めて似ており、近年になって県内に産することが認識された種(橋本ら、1991)である。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

- 文献** : 橋本 保・神田 淳・村川博実, 1991. カラー版野生ラン. 家の光協会, 295pp.
横田昌嗣・豊見山元・比嘉清文・橋爪雅彦, 1994. 琉球列島植物分布資料 13. 沖縄生物学会誌, (32) : 61-65.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・松島昭司(追補)

和名 : クニガミシュスラン
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Goodyera sonoharae* Fukuyama
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎は長く匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 10~15 cm になり、やや疎らに 5~8 葉を互生する。葉は卵形~卵状長楕円形、長さ 2~3 cm。総状花序は頂生し、短毛が多く、数花をつけ、花より長い数個の包葉がある。花はやや平開し、緑褐色を帯びた淡紅白色、萼片は長さ 6~7 mm、長楕円形~卵状長楕円形、花弁はやや菱形、長さ 6 mm、唇弁は狭卵状嚢形、長さ 4~5 mm、基部は嚢状で上面に多数の毛が生える。

分布域(県外) : 徳之島。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 原記載では 2ヶ所の産地が記録されている (Fukuyama, 1942)。本種と確認された個体群は、国頭村の 2ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。

学術的価値 : 沖縄島と徳之島の固有種である。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。自然林の伐採。園芸用の採集。

備考 : 琉球列島に広く産するツユクサシュスラン *G. foliosa* との関係が十分には理解されておらず、分類学的な再検討が必要である。

文献 : Fukuyama, N., 1942. Orchidaceae liukuensis novae vel minus cognitae. III. Trans. Nat. Hist. Soc. Formos., 32: 297-299.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : シュスラン
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Goodyera velutina* Maxim. ex Regel
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎は長く匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 10~15 cm になり、数葉を互生する。葉は長楕円状卵形~卵形、長さ 2~4 cm、濃緑色で普通紫色を帯び、中肋に沿って白条が入る。総状花序は頂生し、短毛が多く、4~15 花をつけ、花より短い包葉がある。花は半開し、赤褐色を帯びた白色、萼片は長さ 7~8 mm、狭卵形、花弁は広倒披針形、長さ 7~8 mm、唇弁は舌状嚢形、長さ 7~8 mm、基部は嚢状で上面に多数の毛が生える。

分布域(県外) : 本州(関東以西)、四国、九州、朝鮮、台湾、中国中部。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 自生地は 1ヶ所が知られるだけで、ごく狭い範囲に産し、個体数は少ない。

学術的価値 : 琉球列島で唯一の産地である。開花する成熟個体は少なく、花の詳細な観察はなされていない。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。

文献 : 比嘉清文, 1983. 琉球植物分布メモ. 沖縄生物学会誌, (21) : 79-80.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・比嘉清文*

和名 : シマシユスラン (オオシユスラン)

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Goodyera viridiflora* (Blume) Blume

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎はやや匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 8~20 cm になり、3~5 葉を互生する。葉は斜卵形~狭卵形、長さ 2~4 cm。総状花序は頂生し、1~5 花をつける。花は赤色を帯びた緑褐色、萼片と花弁は長さ 9~11 mm、萼片は長楕円形、花弁は倒披針状菱形、唇弁は長さ 9~11 mm、卵形、先端は尖り下方に反り返り、基部は囊状で、上面に短毛が密生する。

分布域 (県外) : 九州 (鹿児島県)、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、ヒマラヤ、タイ、フィリピン、マレーシア、ニューギニア、オーストラリア、ソロモン諸島、ニューカレドニア。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : かつてはやや普通に見られたが、近年は乱獲により急激に個体数が減少している。特に沖縄島では極めてまれで、ほとんど見かけない。

減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*

和名 : ダイサギソウ

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Habenaria dentata* (Sw.) Schltr.

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠB類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

形態の特徴 : 夏緑性の多年草。地中に楕円形の塊根がある。茎は花序を含めて長さ 30~60 cm、4~7 葉を互生する。葉は長楕円状披針形、長さ 7~10 cm、葉縁は白色。総状花序は頂生し、5~15 花を密につける。花は白色、萼片は長さ 1~1.2 cm、卵形、花弁は長さ 8~9 mm、披針形、唇弁は長さ 1.5 cm、扇形、3 裂し、側裂片は倒卵形で縁は細裂し、中央裂片は舌状、基部に長さ 3 cm の距がある。

分布域 (県外) : 本州 (千葉県)、四国、九州、種子島、中之島、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、フィリピン、インド、タイ、インドシナ。

県内の分布 : 沖縄島北~中部、石垣島、西表島。

生育環境 : 低地の日当たりのよい草地や原野に生える。遷移が進行して森林になると衰退する。

生育状況 : 沖縄島では数ヶ所、石垣島では数ヶ所、以前と比べると個体数は非常に減っている。沖縄島ではゴルフ場造成で消滅した自生地がある。西表島では 2ヶ所で確認されているが、近年は確認されていない。

減少の要因 : 園芸用の採集。自生地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。遷移の進行。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 新里孝和・比嘉 寿, 1976. 北明治山の植物. 沖縄生物学会誌, (14) : 99-110.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

和名 : タカサゴサギソウ

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Habenaria formosana* Schltr.

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 冬緑性または夏緑性の多年草。地中に楕円形の塊根がある。茎は花序を含めて長さ 20~30 cm、基部に 4~6 葉をロゼット状につける。葉は楕円形~長楕円状披針形、長さ 6~7 cm。総状花序は頂生し、多数の花を密につける。花は淡黄緑色、萼片は長楕円形、長さ 3~4 mm、花弁は長さ 4 mm、楕円形、唇弁は 3 裂し十字形となり、側裂片は長さ 5~8 mm、中央裂片は長さ 1.5~2 mm、基部に長さ 1~2 mm の距がある。

分布域(県外) : 奄美大島、徳之島、台湾。

県内の分布 : 沖縄島北~中部、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 低地から山地の自然林や二次林の明るいやや乾いた林床や林縁に生える。

生育状況 : 沖縄島では各地に産し、石垣島では 1 ヶ所、西表島では 3 ヶ所、与那国島では 1 ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。西表島では、かつて自生していたリュウキュウマツ林の遷移の進行で、個体数が減少している。与那国島では、今回の調査で初めて自生が確認された。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。遷移の進行。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究 (与那国島・石垣島). “事業年報 (平成 27 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : リュウキュウサギソウ (ナメラサギソウ)

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Habenaria longidenticulata* Hayata

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根は肥厚し、やや塊根状になる。茎は直立し、花序を含めて長さ 30~60 cm、茎の中央部付近に 5~7 葉を束生する。葉は倒卵状長楕円形、長さ 10~17 cm、黄緑色で、光沢はない。総状花序は頂生し、多数の花を密につける。花は淡緑色、萼片は卵状長楕円形、長さ 1.5 cm、花弁は糸状線形、基部で深く 2 裂し、長さ 3 cm、唇弁は長さ 3 cm、3 裂し、裂片は糸状線形、基部に長さ 1.5 cm の線形の距がある。

分布域(県外) : 宝島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。

生育環境 : 山地の自然林や二次林の湿った林床に生える。

生育状況 : 本来はやや普通に見られる種であるが、近年は自生地の数が減少している。

減少の要因 : 自然林の伐採。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 本種は東南アジアに広く産するイトヒキサギソウ *H. polytricha* に近縁で、同種と見なす意見もあるが、両者は明らかに別種である。竹富町特別希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : テツオサギソウ (ナガバサギソウ)

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Habenaria stenopetala* Lindl.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。地中に楕円形の塊根がある。茎は直立し、花序を含めて長さ 45~60 cm、茎の中央部付近に 5~8 葉を束生する。葉は狭長楕円形、長さ 12~15 cm、緑色で、やや光沢がある。総状花序は頂生し、20~25 花を密につける。花は淡緑白色、萼片は長楕円形~卵形、長さ 8~10 mm、花弁は線形、基部は耳状となり、長さ 8~10 mm、唇弁は長さ 1 cm、基部で 3 裂し、裂片は線形、基部に長さ 1.5~1.7 cm の線形の距がある。

分布域(県外) : 台湾、フィリピン、ヒマラヤ、タイ、ベトナム。

県内の分布 : 沖縄島北部?、石垣島、与那国島。

生育環境 : 低地から山地の自然林の陰湿な林床に生える。

生育状況 : 石垣島では数ヶ所、与那国島では 3ヶ所に産するが、個体数は少ない。石垣島では、県営公園が造成された際、大きな個体群が開発により消失した。沖縄島での現状は不明。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。園芸用の採集。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2017 年)。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 前津栄信・松島昭司, 1999. 安良の植物. “石垣島古郷安良の原風景—その歴史と自然—”, 石垣市総務部市史編集室(編), 石垣市, 129-226.

豊見山元, 1987. 琉球列島植物分布資料 4. 沖縄生物学会誌, (25) : 59-61.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : ニオイラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Haraella retrocalla* (Hayata) Kudo (= *Gastrochilus retrocallus* Hayata)

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : カシノキランに似た小形の常緑の多年草。茎は長さ 1~2cm、葉を 2 列に互生する。葉は革質で、鎌状長楕円形、長さ 3~7cm。総状花序は腋生し、長さ 3~6cm、1~4 花を順次開花させる。花は淡黄緑色で、萼片と花弁は長さ 8mm、倒卵形、唇弁は長さ 12~14mm、長方形状長楕円形、3 裂し、距を欠き、基部上面に基部に向いた三角形のカルスがあり、黄緑色で、中央部に淡赤褐色の斑紋があり、縁は細裂し、上面に軟毛がある。

分布域(県外) : 台湾。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 常緑樹林の樹幹に着生する。

生育状況 : 1980 年頃に少数個体が発見されているが、その後は確認されていない。

学術的価値 : ニオイラン属はカシノキラン属に含める意見もあるが、これまで台湾固有の単型属とされていた。西表島は、国内では唯一の産地である。ニオイランは、昆虫の雌に擬態し、雄が交尾行動を行おう

とする際に受粉される疑似交尾 pseudocopulation 現象が見られることが示唆されている種で (Endress, 1994; Christenhusz *et al.*, 2017)、植物が示す擬態の例として学術上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。園芸用の採集。

文献 : Endress, P.K., 1994. Diversity and evolutionary biology of tropical flowers. Cambridge Univ. Press, Cambridge, 511 pp.

Chase, M., M. Christenhusz & T. Mirenda, 2017. The Book of Orchids: A life-size guide to six hundred species from around the world. Ivy Press, London. 656 pp.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : オオカゲロウラン (テリハカゲロウラン)

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Hetaeria oblongifolia* (Blume) Blume

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎はやや匍匐し、先は直立し、長さ 20~25 cm、6~7 葉を互生する。葉は卵状披針形、長さ 5~9 cm、上面に光沢がある。頂生する総状花序は長さ 25 cm になり、密に 30~40 花をつける。花は平開せず、白色で、外面は淡緑褐色を帯び、萼片と花弁は長さ 4 mm、唇弁は長さ 3 mm、卵形、子房はねじれず、唇弁は花序の先端側に位置する。

分布域 (県外) : タイ、フィリピン、マレーシア、ニューギニア、オーストラリア、ニューカレドニア、フィジー諸島、サモア諸島。

県内の分布 : 石垣島、与那国島。

生育環境 : 自然林の林床に生える。

生育状況 : 石垣島では数ヶ所に、与那国島では 1ヶ所に産することが知られるが、いずれの自生地でも極めてまれで、個体数は少ない。

学術的価値 : 台湾に分布しておらず、分布域の北限である。マレーシア系の植物で、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自然林の伐採。園芸用の採集。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2017 年)。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。

文献 : 豊見山元, 1987. 琉球列島植物分布資料 4. 沖縄生物学会誌, (25) : 59-61.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ヤクシマアカシスラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Hetaeria yakusimensis* (Masam.) Masam.

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎はやや匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 10~30 cm、4~7 葉を互生する。葉は卵状楕円形~卵状披針形、長さ 3~8 cm、深緑色で、葉柄は赤色を帯びる。総状花序は頂生し、3~20 花をつける。萼片は赤褐色、長さ 3~4 mm、広卵形~長楕円形、花弁は白色、長さ 3~4 mm、卵形、唇弁は白色、長さ 3~4 mm、卵形で、基部は囊状となり、基部上面に 1 対の突起がある。

分布域 (県外) : 本州 (静岡県、和歌山県)、伊豆諸島、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之

島、台湾。

- 県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島。
生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
生育状況 : 沖縄島ではかつてはやや普通に見られたが、近年はごく限られた場所で見える程度にまで減少していった。石垣島では極めて少ない。
減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。
備考 : 最近、本種の分布域が拡大し、北上している。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : **サキシマスケロクラン**
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Lecanorchis flavicans* Fukuyama var. *flavicans*
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 葉を欠く腐生の多年草。茎は単一または基部で分枝し、長さ 20~30 cm、先端に数花を同時に咲かせる。萼片と花弁は長さ 13 mm、淡黄褐色、唇弁は長さ 14 mm、白色、3 裂し、縁は細裂し、中央裂片はほぼ円形で、上面全体に長毛が密生し、側裂片は三角形。変種のシラヒゲムヨウラン *L. flavicans* var. *acutiloba* に似るが、唇弁の基部と蕊柱との癒合が約 6 分の 1 と少ない点で異なるとされる。

- 県内の分布 : 石垣島、西表島。
生育環境 : 低地の自然林の林床に生える。
生育状況 : 西表島の仲良川で採集された標本を元に Fukuyama (1942) によって記載された種で、基準産地である西表島の 1 ヶ所以外には、確実な自生地は知られていなかったが、2017 年になって石垣島と西表島の各 1 ヶ所で生育が確認された。

- 学術的価値 : 八重山諸島の固有種である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。
備考 : 変種のシラヒゲムヨウランは、屋久島、奄美大島、沖縄島北部の山地に産し、沖縄島では 1 ヶ所で少数個体が確認されている。なお、サキシマスケロクランをオキナワムヨウラン *L. triloba* の異名とし、シラヒゲムヨウランを *L. vietnamica* とする意見がある (Suetsugu *et al.*, 2017) が、サキシマスケロクランはオキナワムヨウランそのものではないように思われ、生植物を用いた詳細な検討が必要と考えられる。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

- 文献 : Fukuyama, N., 1942. Orchidaceae liukuensis novae vel minus cognitae. I. Trans. Nat. Hist. Soc. Formos. 32(225): 241-244.
Hashimoto, T., 1990. A taxonomic review of the Japanese *Lecanorchis* (Orchidaceae). Ann. Tsukuba Bot. Gard., 9: 1-40.
Suetsugu, K., T.-C. Hsu & H. Fukunaga, 2017. The identity of *Lecanorchis flavicans* and *L. flavicans* var. *acutiloba* (Vanilloideae, Vanilloideae, Orchidaceae). Phytotaxa, 306(3): 217-222.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・松島昭司(追補)

-
- 和名 : **ヤエヤマスケロクラン**
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Lecanorchis japonica* Blume var. *tubiformis* Hashimoto
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 葉を欠く腐生の多年草。茎は長さ 20~40 cm、先端に数花を同時に咲かせる。萼片と花弁は長さ 16~17 mm、赤褐色、唇弁は長さ 15 mm、白色、3 裂し、中央裂片は横長四角形で、縁は細裂し、上面の中央に黄色の長毛が密生し、側裂片はほぼ鈍頭、唇弁の基部は約半分にわたって蕊柱と癒合する。キイムヨウラン *L. japonica* var. *kiiensis* に最も近いが、中央裂片と側裂片が短く、蕊柱の翼は半円形で歯牙がある点で異なるとされる。

県内の分布 : 西表島。
 生育環境 : 自然林の林床に生える。
 生育状況 : 基準産地とされる 1ヶ所は国立公園であり、開発の恐れはないが、現状は不明である。他の産地は知られていない。
 学術的価値 : 西表島の固有変種である。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。
 備考 : 基本変種のムヨウランは地理的変異が大きく、本州、四国、九州に産し、屋久島以南には分布していない。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : Hashimoto, T., 1990. A taxonomic review of the Japanese *Lecanorchis* (Orchidaceae). *Ann. Tsukuba Bot. Gard.*, 9: 1-40.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*

和 名 : クロムヨウラン (ムラサキムヨウラン)
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学 名 : *Lecanorchis nigricans* Honda
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 情報不足 (DD)

形態の特徴 : 葉を欠く腐生の多年草。茎は単一または基部で分枝し、長さ 15~30 cm、黒色、先端に数花を同時に咲かせる。萼片と花弁は長さ 17 mm、淡黄褐色、唇弁は長さ 13~15 mm、白色で先端は紫色を帯び、3 裂せず、ほぼ円形で、上面の先端に紫色の短毛がわずかに生え、唇弁は約半分にわたって蕊柱と癒合する。

分布域 (県外) : 本州 (紀伊半島)、四国、九州、屋久島、黒島、奄美大島、台湾。
 県内の分布 : 沖縄島、西表島。
 生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
 生育状況 : 沖縄島では少なくとも 1ヶ所で現存していることが確認されている。西表島では 1938 年に採集された記録があるが、現状は不明である。
 学術的価値 : 分布域のほぼ南限である。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自然林の伐採。
 備考 : これまでクロムヨウランと呼ばれていたものは、トサノクロムヨウラン *L. nigricans* Honda var. *patipetala* Y. Sawa であるとする見解が発表されている (Suetsugu *et al.*, 2018)。また、沖縄島北部のクロムヨウランをムロトムヨウラン *L. amethystea* Y. Sawa, H. Fukunaga et S. Sawa とする意見がある (福永ら, 2011)。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 福永裕一・阿部篤志・澤進一郎, 2011. ムロトムヨウラン (ラン科) を沖縄に記録する. *分類*, 11(2): 151-154.
 Hashimoto, T., 1990. A taxonomic review of the Japanese *Lecanorchis* (Orchidaceae). *Ann. Tsukuba Bot.*

Gard., 9: 1-40.

Suetsugu, K., C. Shimaoka, H. Fukunaga & S. Sawa, 2018. The taxonomic identity of three varieties of *Lecanorchis nigricans* (Vanillaceae, Vanilloideae, Orchidaceae) in Japan. *PhytoKeys*, 92: 17-35.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・比嘉清文(追補)

和名 : オキナワムヨウラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Lecanorchis triloba* J. J. Smith

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 葉を欠く腐生の多年草。茎は単一または分枝し、長さ 15~40 cm。茎の先に数花をつけ、1 花ずつ順に開花する。萼片と花弁は長さ 9 mm、暗紫褐色、唇弁は長さ 11 mm、白色、3 裂し、中央裂片はほぼ円形で、上面のほぼ全体に長毛が密生し、縁は細裂し、側裂片は鈍頭、唇弁の基部は蕊柱と癒合し、上面内部に短毛の生えた 1 対の隆起がある。

分布域(県外) : タイ、スマトラ、ジャワ、ボルネオ、ニューギニア。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : この属の種では最も多く産するが、自生地は点在し、個体数は少ない。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : 自然林の伐採。もともと自生地が限られている。

備考 : 植物体が目立たないため発見が難しいうえ、花がないと正確な同定ができないので、ムヨウラン属の他の種を含め生育状況に関する確実な情報が少ない。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 橋本 保, 1989. ラン科植物分類雑記 (4). 筑波実験植物園研究報告, 8: 1-9.

Hashimoto, T., 1990. A taxonomic review of the Japanese *Lecanorchis* (Orchidaceae). *Ann. Tsukuba Bot. Gard.*, 9: 1-40.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*

和名 : チケイラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Liparis bootanensis* Griff.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。偽球茎は卵形、長さ 1.5~3 cm、先に 1 葉をつける。葉は狭長楕円形、長さ 10~18 cm。総状花序は頂生し、長さ 15~25 cm、10~15 花をつける。花は淡黄緑色、萼片は線状長楕円形、長さ 6~7 mm、花弁は線形、長さ 6~7 mm、唇弁は長さ 5 mm、楔状倒卵形、下方に折れ曲がり、基部上面に 1 対の小さい突起がある。蕊柱の上部には 1 対の翼がある。

分布域(県外) : 四国、九州南部、屋久島、奄美大島、徳之島、台湾、フィリピン、中国南部、ヒマラヤ、タイ、インドシナ。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 自然林の陰湿な岩上や樹上に生える。

生育状況 : かつてはかなり普通に見られたが、近年は個体数が激減している。

減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。
備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*

和名 : **コ克蘭**
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Liparis nervosa* (Thunb.) Lindl.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は円柱形で、長さ 5~10 cm、数個が接して並ぶ。葉は茎の上部に 2~3 個つき、斜卵形~斜楕円形、長さ 5~12 cm。総状花序は頂生し、長さ 10~20 cm、5~10 花をつける。花は紫褐色~淡緑色、萼片は狭長楕円形、長さ 5 mm、花弁は倒披針状線形、長さ 5 mm、唇弁は長さ 5 mm、楔状倒卵形、微凹頭、下方に折れ曲がり、基部上面に 1 対の尖った突起がある。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、奄美大島、徳之島、台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 高地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 自生地は数ヶ所しかなく、個体数は少ない。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自然林の伐採。園芸用の採集。

備考 : 琉球列島に広く産するユウコ克蘭は、形態的な変異が大きく、本種との区別が難しい場合があり、分類の再検討が必要である。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*

和名 : **ササバラ**
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Liparis paradoxa* (Lindl.) Rchb. f.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 小形の夏緑性の多年草。偽球茎は卵球形、径 2 cm、新旧 2 個が接して並ぶ。葉は 2~3 枚が茎の先端につき、広披針形~披針状長楕円形、長さ 8~16 cm、縦しわがある。総状花序は頂生し、長さ 20~30 cm、10~20 花をつける。花は赤色を帯びた黄緑色、萼片は披針形~狭長楕円形、長さ 6 mm、花弁は線形、長さ 7 mm、唇弁は倒卵状楔形、下方に折れ曲がり、長さ 6 mm、基部上面に 1 対の突起がある。

分布域 (県外) : 本州 (関東以西)、四国、九州、屋久島、種子島、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、スリランカ、インド、タイ、インドシナ、グアム。

県内の分布 : 沖縄島北部、魚釣島。

生育環境 : 日当たりのよい草地に生える。遷移が進んで森林になると衰退する。

生育状況 : 沖縄島では 3ヶ所で確認されているが、極めてまれであり、現在も生育が確認されるのは 1ヶ所だけである。魚釣島の現状は不明で、増殖した野生化ヤギによる食害が危惧される。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。自生地の開発 (沖縄島)。遷移の進行。野生化したヤギによる食害と植生の破壊 (魚釣島)。

保全対策 : 魚釣島では、野生化ヤギの駆除が急務である。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : コバナチケイラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Liparis* sp. aff. *elegans* Lindl.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は斜卵形、長さ 2~3.5cm、幅 1~2cm、2~4 節があり、2 葉をつける。葉は線状倒披針形、長さ 5~10cm、幅 2~2.5cm。総状花序は頂生し、長さ 10~30cm、10~20 花をつける。花は黄緑色、萼片は線形、長さ 3.5mm、側花弁は披針形、長さ 4mm、唇弁は四角形、中央で折れ曲がり、先端は切形、基部に 1 対の球形のカルスがある。薬柱は長さ 2.5mm、翼はない。チケイランに似るが、花がずっと小型で、葉が 2 個であることで異なる。台湾のナカハララン *Liparis nakaharai* Hayata にも似るが、花ははるかに小さい。

分布域 (県外) : なし (今のところ、西表島のみ)。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 山地の常緑樹林の岩上や樹上に着生する。

生育状況 : 自生地は 1 ヶ所のみ確認されている。1990 年代初めに存在が知られるようになったが、その当時と比べると採集により個体数は激減している。

学術的価値 : 日本や台湾には近縁種は知られておらず、国内では唯一の自生地である。固有種の可能性もある。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : ボウラン (タカサゴボウランを含む)

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Luisia teres* (Thunb.) Blume

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は堅い円柱形で、しばしば分枝して束生し、長さ 15~30 cm になり、数~十数葉を互生する。葉は円柱形、径 3~4 mm、長さ 5~12 cm。総状花序は腋生し、長さ 0.5~1.5 cm、1~10 花をつける。花は黄緑色で、萼片と花弁には紫褐色の斑紋がわずかに入り、唇弁は大部分が紫褐色となり、萼片は楕円形、長さ 8~10 mm、花弁は長楕円形、長さ 10~13 mm、唇弁は長さ 10~13 mm、基部で 3 裂し、側裂片は小さく、中央裂片は長楕円形で、先は 2 浅裂する。

分布域 (県外) : 本州 (三重県、和歌山県)、四国、九州、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、座間味島、伊江島、久米島、渡名喜島、石垣島、与那国島。

生育環境 : 海岸から低地の日当たりのよい樹幹や岩壁に着生し、しばしばリュウキュウマツの樹幹上に生える。

生育状況 : 沖縄島では北部から中部にかけてかつては普通に見られたが、近年は個体数が激減している。今回の調査で伊平屋島、伊是名島、座間味島、伊江島、久米島、渡名喜島で現存が確認されている。石垣島では 2 ヶ所に希産する。

学術的価値 : 分布域の南限である。

減少の要因 : 森林の伐採。園芸用の採集。

備考 : 台湾には唇弁の先端の裂片が短く、唇弁が小さい変種のタカサゴボウラン *L. teres* (Thunb.) Blume var. *botanensis* (Fukuyama) T. P. Lin を産し、石垣島のはタカサゴボウランに相当する。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : ナンバンカゴメラン (ナンバンカモメラン)

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Macodes petola* (Blume) Lindl.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、3~6葉を互生し、花序を含めて長さ20~30 cmになる。葉は卵形、深緑色で、上面に銀白色の網目模様が入り、下面は緑白色、長さ5~6.5 cm。総状花序は頂生し、15~40花をつける。花は左右非対称で、淡黄緑色で、赤褐色を帯び、花被片の先は白色、萼片は長さ5~6 mm、卵形、花弁は長さ5 mm、三日月形、唇弁は長さ6 mm、3裂し、ねじれ、子房はねじれず、唇弁は花序の先端側に位置する。蕊柱はややねじれる。

分布域(県外) : フィリピン、インドシナ、マレー半島、スマトラ、ジャワ、ボルネオ。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 低地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 4ヶ所の自生地が知られるが、個体数は極めて少ない。最も個体数が多い1ヶ所は開発される恐れがある。他の3ヶ所では数個体が確認されているだけで、その内の1ヶ所では2017年の調査で個体が確認できなかった。

学術的価値 : 分布域の北限であり、国内唯一の産地である。マレーシア系の種で、中国大陸や台湾に分布しておらず、植物地理学上貴重である。海外産のものと異なり、西表島産のものは植物体や花に紫褐色の着色がなく、葉は深緑色、花は淡黄緑色であるため、容易に区別することができる。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採。

備考 : 特定国内希少野生動植物種に指定されており、採集や無許可の譲渡などは法律で禁じられている。特定国内希少野生動植物 (2016年)。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 横田昌嗣・島袋敬一, 1990. 琉球列島植物分布資料7. 沖縄生物学会誌, (27) : 53-55.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : カンダヒメラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Malaxis kandae* Hashimoto

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類 (EN)

形態の特徴 : 夏緑性の多年草。偽球茎は円柱形、長さ5~8 cm、5~6葉を互生する。葉は楕円形、長さ6~14 cm。総状花序は頂生し、長さ9~15 cm、やや疎らに17~40花をつけ、包葉は長さ3~5 mmで蕾より長い。花は帯紫緑色~濁紫色、萼片と花弁は長さ4 mm、萼片は広楕円形、花弁は線形、唇弁は長さ6 mm、三角状心臓形、先は2裂し、基部は耳状になり蕊柱を包む。

分布域(県外) : 台湾。

県内の分布 : 沖縄島(北部~中部)、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地のサガリバナ林などの湿った林床や湿地に生える。

生育状況 : 沖縄島では数ヶ所に自生が知られるが、個体数は少ない。石垣島では絶滅した恐れがある。西表島では2004年と2017年に発見されたが、2ヶ所に産するだけで、極めてまれである。

学術的価値 : 沖縄県の固有種である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採。遷移の進行。
備考 : 台湾のマツダヒメラン *M. matsudae* (Yamamoto) Hatusima に近縁で、近縁なオキナワヒメラン *M. purpurea* (Lindl.) O. Ktze. とともにマツダヒメランに含まれることがある。近年になってカンダヒメランやオキナワヒメランが認識されたため (Hashimoto, 1992)、分布に関する情報は十分でない。
文献 : Hashimoto, T., 1992. Novelties of the genus *Malaxis* to Japan. Ann. Tsukuba Bot. Gard., 11: 1-8.

執筆者名 : 横田昌嗣*・安田恵子*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : **ホザキヒメラン**
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Malaxis latifolia* J. E. Smith
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 夏緑性の多年草。偽球茎は円柱形、長さ 10 cm になり、4~5 葉を互生する。葉は楕円形、長さ 12~20 cm。総状花序は頂生し、長さ 20 cm になり、密に多数の花をつけ、包葉は長さ 4 mm。花は淡黄緑色で、赤紫色を帯び、径 5 mm、萼片と花弁は長さ 3 mm、萼片は長楕円形、花弁は線形、唇弁は長さ 2 mm、卵形、先は浅く 3 裂する。
分布域 (県外) : 台湾、フィリピン、インド、タイ、インドシナ、マレーシア、オーストラリア。
県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島、与那国島。
生育環境 : 山地の溪流沿いの岩上や林縁の湿った地上に生える。
生育状況 : 沖縄島では 1 ヶ所、石垣島では 2 ヶ所、西表島では数ヶ所の自生地が知られるが、個体数は少ない。与那国島の現状は不明。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採。
備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : **オキナワヒメラン**
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Malaxis purpurea* (Lindl.) O. Ktze.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 小形の夏緑性の多年草。偽球茎は円柱形、長さ 5~8 cm、3~4 葉を互生する。葉は卵状披針形、長さ 7~11 cm。総状花序は頂生し、長さ 10~25 cm になり、やや疎らに 20 花程度をつけ、包葉は蕾より短い。花は紫褐色、径 5 mm、萼片と花弁は長さ 4~5 mm、萼片は長楕円形、花弁は線形、唇弁は長さ 7 mm、狭卵形、先は 2 裂し、基部は耳状になり蕊柱を包む。
分布域 (県外) : フィリピン、スリランカ、ヒマラヤ、中国南部、タイ、インドシナ。
県内の分布 : 沖縄島北部。
生育環境 : 山地の明るい林床や草地に生える。遷移が進行して森林になると衰退する。
生育状況 : 数ヶ所で確認されているが、個体数は極めて少ない。最も個体数が多かった自生地の 1 ヶ所はゴルフ場造成のため破壊された。近年は全く確認されておらず、絶滅した可能性がある。

- 学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。
減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自生地の開発。
備 考 : 近年になって沖縄県に産することが認識された (Hashimoto, 1992) もので、分布に関する情報は十分でない。
文 献 : Hashimoto, T., 1992. Novelties of the genus *Malaxis* to Japan. Ann. Tsukuba Bot. Gard., 11: 1-8.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・治井正一*・横田昌嗣(追補)

- 和 名 : フウラン
分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学 名 : *Neofinetia falcata* (Thunb.) H. H. Hu (= *Vanda falcata* (Thunb.) Beer)
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

- 形 態 の 特 徴 : 小形の常緑の多年草。茎は長さ 5~15 cm、しばしば分枝し、多数の葉を 2 列に互生する。葉は革質、広線形、長さ 6~12 cm。総状花序は腋生し、長さ 5~7 cm、2~5 花をつける。花は白色で、琉球列島産では時に淡紅色を帯び、萼片と花弁は長さ 1 cm、倒披針状長楕円形、唇弁は長さ 7~9 mm、3 裂し、側裂片は半円形、中央裂片は狭卵形、基部に長さ 4~5 cm の湾曲する線形の距があり、夕方に芳香を発する。
分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、奄美大島、徳之島、朝鮮、中国南部。
県 内 の 分 布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、伊江島、北大東島。
生 育 環 境 : 低地の樹幹や岩上に生え、しばしば群生する。
生 育 状 況 : 伊平屋島と伊是名島では各 1 ヶ所にごく少数個体を産する。沖縄島では北部から南部まで点々と数ヶ所に産したが、現在は絶滅寸前である。北大東島では乱獲によりおそらく絶滅したものと思われる。
学 術 的 価 値 : 北大東島に本種が自生することは、最も近い沖縄島から約 400 km の海を隔てていてもラン科の微小な種子が風により散布されることを示しており、植物の分散能力を知る上で貴重である。本種をヒスイラン属 *Vanda* に移す見解は 1854 年に提唱されているが、これまで顧みられてこなかった。最近ヒスイラン属の種としての取り扱いが再度提唱されている (Gardiner, 2012)。ヒスイラン属としては、最も北にまで分布する種になる。
減 少 の 要 因 : 園芸用の採集。自生地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。

- 文 献 : 仲田栄二 (編), 1995. ふるさとの草木, 伊是名諸島の植物図鑑. 伊是名村教育委員会, 119pp.
Gardiner, L. M., 2012. New combinations in the genus *Vanda* (Orchidaceae). Phytotaxa, 61: 47-54.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・治井正一*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

- 和 名 : ヤエヤマヒツボクロ (アオイボクロ、ヤエヤマクマガイソウ)
分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学 名 : *Nervilia aragoana* Gaudich.
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

- 形 態 の 特 徴 : 冬緑性の多年草。地中に径 1~2 cm の球状の球茎があり、細長い根茎を伸ばし、先に球茎を作る。葉は 1 枚つき、花後に生じ、偏円心形、心脚、幅 10~20 cm、長さ 10~18 cm の葉柄がある。総状

花序は長さ 25~40 cm、5~13 花を疎らにつける。花は半開し、萼片と花弁は淡緑色、線状披針形、長さ 1.5~2.5 cm、唇弁は白色で上面に紫色の条が入り、長さ 1.5~2.5 cm、中央部付近で3裂し、側裂片は三角形、中央裂片は卵形、中央部に毛が生える。

- 分布域 (県外) : 台湾、フィリピン、中国南部、インド、タイ、インドシナ、マレーシア、グアム、ニューギニア、オーストラリア、ニューカレドニア、サモア諸島、フィジー諸島。
- 県内の分布 : 沖縄島北部、北大東島、宮古島、伊良部島、下地島、多良間島、水納島、石垣島、西表島、小浜島、竹富島、黒島、新城島 (上地島)、波照間島、与那国島。
- 生育環境 : 低地の海岸林や石灰岩地の林床に生える。
- 生育状況 : 沖縄島では 1ヶ所に産するだけで、絶滅寸前である。北大東島では、3ヶ所に少数個体を産する。宮古諸島と八重山諸島では各地にやや普通に産し、しばしば群生するが、自生地のある海岸林や石灰岩地は森林伐採やゴルフ場建設等で開発が進んでいる。今回の調査で、宮古島、下地島、水納島、竹富島、新城島にも産することが判った。
- 学術的価値 : 分布域の北限である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自生地の開発。
- 備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

- 文献 : 知念美香, 1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究, (11) : 75-105.
山崎仁也・横田昌嗣・知念美香・仲宗根忠樹・比嘉清文・加島幹男, 2016. 鳩間島・新城 (上地・下地) 島・黒島の植物相 (Flora). “鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書”, 沖縄県立博物館・美術館, 13-68.

- 執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)・佐藤宣子(追補)

-
- 和名 : **ムカゴサイシン (ムカゴサイシンモドキを含む)**
- 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
- 学名 : *Nervilia nipponica* Makino
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

- 形態の特徴 : ごく小形の夏緑性の多年草。地中に径 5~10 mm の球状の球茎があり、細長い根茎を伸ばし、先に球茎を作る。葉は花後に生じ、1枚だけつき、五~七角状円心形、心脚、幅 3.5~4.5 cm、長さ 2~5 cm の葉柄がある。花序は長さ 10~12 cm、1花をつける。花は半開し、萼片と花弁は紫褐色、線状披針形、長さ 1~1.2 cm、唇弁は白色で上面に紫色の毛の生えた細点があり、長さ 1 cm、中央部付近で3裂し、側裂片は小さく、中央裂片は倒卵形。
- 分布域 (県外) : 本州 (関東以西)、伊豆諸島、四国、九州、屋久島、奄美大島、徳之島、台湾。
- 県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島。
- 生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
- 生育状況 : 沖縄島では自生地は 5ヶ所が知られ、その内 2ヶ所ではやや多産するが、林道建設で森林が乾燥し、個体数は減少している。1ヶ所では個体数は極めて少なく、近年は確認されていない。石垣島では 1ヶ所のごく狭い範囲に少数個体を産するだけである。
- 学術的価値 : 隔離分布する植物地理学上の貴重種で、全国的にも希産種である。最近、ムカゴサイシンは形態的にほとんど区別がつかないが、遺伝的には大きく異なる隠蔽種を含むことが明らかになり (Gale et al., 2010)、従来のムカゴサイシンと新種のムカゴサイシンモドキ *N. futago* S. W. Gale et T. Yukawa が区別されている (Gale et al., 2015)。沖縄島北部の 1ヶ所で、Gale 博士が DNA 採取のためごく接近した場所に生えていた 2 個体を採取したところ、1 個体が従来のムカゴサイシンで、もう 1 個体がムカゴサイシンモドキで、両者は完全に混生する場合があることが判っている。また石垣島の 1ヶ所のものは、従来のムカゴサイシンであることが判っている。その他の自生地については、遺

伝子や形態（特に唇弁の形態）の観察がなされていないので、どちらの種であるのかは不明である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。園芸用の採集。

備考 : 近縁種の *N. punctata* (Blume) Makino はジャワに産する。

文献 : 中島邦雄, 1971. 台湾, 琉球, 小笠原および日本南部のラン科植物の分類学的研究 (予報). 沖縄生物学会誌, (8) : 72-84.
 阿部篤志, 2015. 大宜味村中央部石灰岩山地における希少植物調査 (最終報告). 事業年報 (平成25年度), 沖縄美ら島財団総合研究センター, 34-49.
 Gale, S. W., A. Maeda, C.-I. Chen & T. Yukawa, 2010. Inter-specific relationships and hierarchical spatial genetic structuring in *Nervilia nipponica*, an endangered orchid in Japan. *Journal of Plant Research*, 123: 625-637.
 Gale, S.W., J. Li, A. Kinoshita & T. Yukawa, 2015. Studies in Asian *Nervilia* (Orchidaceae) V: *Nervilia futago*, a cryptic new species from Southwest Japan confirmed by morphological, cytological, and molecular analyses. *Systematic Botany*, 40(2): 413-425.

執筆者名 : 横田昌嗣*・新城和治*・立石庸一*・高良拓夫*・横田昌嗣(追補)

和名 : ウズラバムカゴサイシン (新称)

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Nervilia* sp.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : ごく小形の夏緑性の多年草。地中に径 5~10mm の球状の球茎があり、細長い根茎を伸ばし、先に球茎を作る。葉は花と共に生じ、1 枚だけつき、五~七角状円心形、心脚、幅 2.5~3.5cm、上面に淡緑色の斑紋があり、下面は紫色を帯び、長さ 2~5cm の葉柄がある。花序は長さ 5cm、1 花をつける。花は平開し、萼片と花弁は淡緑色、線状披針形、長さ 8~9mm、唇弁は白色で上面に紫色の条が入り、長さ 1cm、三角形、基部は円脚、端部は鋭形、3 裂しない。薬柱は長さ 4mm。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の常緑樹林の林床に生える。

生育状況 : 自生地は 1 ヶ所のみ知られ、数集団が確認されているが、個体数は極めて少ない。

学術的価値 : 日本や台湾の周辺には、形態的に類似した種はなく、沖縄島北部の固有種と思われる。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : クスクスヨウラクラン (アリサンヨウラクラン)

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Oberonia arisanensis* Hayata

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : ごく小形の常緑の多年草。茎は下垂し、長さ 2.5~3.5 cm、葉を 2 列に接してつける。葉は線状半披針形、やや多肉質、長さ 2~4 cm。穂状花序は頂生し、糸状、長さ 10 cm、多数の花をつけ、包葉は三角状披針形、長さ 1.5 mm。花は淡赤褐色、萼片と花弁は長さ 0.8~1 mm、背萼片は倒卵状長楕円形、側萼片は三角状長楕円形、花弁は倒卵状長楕円形、唇弁は長さ 1.5 mm、3 裂し、側裂片は半卵形で外側の縁は細裂し、中央裂片は長楕円状倒卵形、先は 2 浅裂する。

分布域 (県外) : 徳之島、台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島、魚釣島。
生育環境 : 空中湿度の高い自然林内の樹幹に着生する。
生育状況 : 沖縄島北部では数ヶ所に自生が知られるが、群生することはない、個体数は極めて少ない。魚釣島では山頂部にやや多いが、個体数は限られている。西表島では極めてまれである。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : 自然林の伐採。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。
備考 : ヨウラクラン *O. japonica* との区別が微妙であり、分類学的な再調査が必要である。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
文献 : 横田昌嗣・豊見山元, 1994. 琉球列島植物分布資料 12. 沖縄生物学会誌, (32) : 57-59.
執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・豊見山元*

和名 : コカゲトンボ (新称)
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Peristylus elegans* Bl.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 小型の冬緑性の多年草。地中に楕円形の塊根があり、植物体は高さ 10~15cm、茎の中ほどに 3~5 個の葉を接近してつける。葉は線状披針形、長さ 4~10cm。総状花序は頂生し、3~10 花をつける。花は淡緑色で、背萼片と側花弁は胄状に集まり、卵形、長さ 2~2.5mm、側萼片は平開し、長さ 2.5~3mm、唇弁は 3 裂し、基部に長さ 5~8mm の距があり、中央裂片は三角状披針形、長さ 2~3mm、側裂片は平開し、線状披針形、長さ 4~5mm、薬柱は長さ 1.2mm。
分布域 (県外) : 台湾 (蘭嶼)、インド、インドシナ、スマトラ、ジャワ、ボルネオ。
県内の分布 : 石垣島、西表島。
生育環境 : 低地の陰湿な自然林の林床に生える。
生育状況 : 石垣島で 1 ヶ所、西表島で 2 ヶ所で確認されているが、個体数は極めて少ない。
学術的価値 : 分布域の北限であり、国内で唯一の自生地である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。
文献 : Hsu, T.-C., C.S. Leou, C.-L. Yeh, C.R. Yeh & S.-W. Chung, 2009. Supplements to the orchid flora of Taiwan (III): A newly recorded species, *Peristylus gracilis*. *Taiwania*, 54(4): 381-384.
執筆者名 : 横田昌嗣・豊見山元

和名 : ガンゼキラン
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Phaius flavus* (Blume) Lindl.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は卵状狭円錐形、長さ 3~5 cm、数個が接して並ぶ。葉は 3~5 枚が茎の先につき、狭楕円形~広倒披針形、長さ 20~40 cm。総状花序は偽球茎の基部から生じ、長さ 40~60 cm、5~18 花をつける。花は黄色、唇弁の先端は赤褐色、萼片と花弁は長さ 3~3.5 cm、狭長楕円形、唇弁は長さ 2.5 cm、楔状倒卵形、先端は 3 浅裂し、側裂片は半円形、中央裂片は円形、上面に数列の

板状隆起があり、基部に長さ7~8 mmの距がある。

- 分布域(県外) : 本州(伊豆諸島、紀伊半島)、四国、九州、屋久島、奄美大島、台湾、中国南部、スリランカ、インド、タイ、インドシナ、フィリピン、マレーシア、ニューギニア。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
- 生育状況 : 確実な自生地は3ヶ所が知られるが、いずれも乱獲により絶滅または絶滅寸前であり、現在も生育が確認されているのは1ヶ所だけである。
- 学術的価値 : 沖縄県で唯一の産地である。
- 減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。もともと自生地と個体数が少ない。
- 備考 : 日本や台湾産の個体は唇弁内が有毛であるが、東南アジア産の個体は無毛であり、やや異なる。
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

- 和名 : ヒメカクラン
- 分類 : ラン科 (APG科名: ラン科)
- 学名 : *Phaius mishmensis* (Lindl.) Rchb. f.
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は束生し、棒状で、長さ40~60 cm、数葉を疎らに互生する。葉は倒卵状長楕円形、上面にやや光沢があり、長さ20~30 cm。総状花序は偽球茎の途中から生じ、長さ8~30 cm、疎らに8花程度をつける。花は淡紅紫色、唇弁の上面には紅紫色の細点が多数入り、萼片と花弁は長さ3~3.5 cm、萼片は長楕円形、花弁は線状倒披針形、唇弁は長さ2.5~2.8 cm、先端は3浅裂し、側裂片は半卵形、中央裂片はやや四角形、小凹頭、中央に毛の生えた4列の板状突起があり、基部に長さ1 cmの距がある。

- 分布域(県外) : 台湾、中国南部、ヒマラヤ、タイ、フィリピン。
- 県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
- 生育状況 : 沖縄島では3ヶ所の自生地が知られ、そのうちの1ヶ所では1980年代前半まで少数個体が見られたが、乱獲により絶滅した。その他の1ヶ所は絶滅、他の1ヶ所は現状不明。石垣島では1ヶ所、西表島では2ヶ所の自生地が知られるが、いずれも個体数は極めて少ない。石垣島では近年個体数が急減している。
- 学術的価値 : 分布域の北限である。
- 減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。
- 備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物(2016年)。石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

- 文献 : Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 1: 37-45.
横田昌嗣・島袋憲一, 1992. 琉球列島植物分布資料10. 沖縄生物学会誌, (30) : 81-83.
横田昌嗣・豊見山元・比嘉清文・橋爪雅彦, 1994. 琉球列島植物分布資料13. 沖縄生物学会誌, (32) : 61-65.

- 執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・豊見山元*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : カクチョウラン (カクラン)

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学 名 : *Phaius tankervilleae* (Banks ex L'Her.) Blume
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は卵状円錐形、長さ 3~5 cm、数個が接して並ぶ。葉は 4~6 枚が茎の先につき、上面にやや光沢があり、長楕円状披針形、長さ 40~80 cm。総状花序は偽球茎の基部から生じ、長さ 60~120 cm、4~10 花をつける。花は外面は白色、内面は赤褐色、唇弁の先は紅紫色、基部は白色、萼片と花弁は長さ 4~6 cm、長楕円状披針形、唇弁は長さ 4~5 cm、菱形状広倒卵形、基部上面に 2 列の板状隆起があり、基部に 2 浅裂する長さ 6~10 mm の距がある。

分布域 (県外) : 屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、スリランカ、インド、タイ、インドシナ、フィリピン、マレーシア、ニューギニア、オーストラリア、ニューカレドニア、サモア諸島、フィジー諸島。

県内の分布 : 沖縄島 (北部~中部)、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の草地や自然林の明るい林床に生える。遷移が進んで森林になると衰退する。

生育状況 : かつては普通に見られる種であったが、近年は乱獲により激減しており、残された個体数はごく少ない。

減少の要因 : 園芸用の採集。自生地の開発。遷移の進行。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

和 名 : クニガミトンボソウ (ソノハラトンボ)

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Platanthera sonoharai* Masam.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 小形の夏緑性の多年草。地中に紡錘形の塊根がある。茎は高さ 15~25 cm になり、数枚の葉をつける。葉は茎下部の 1~2 枚は線状披針形で、長さ 8~13 cm、茎上部の葉は長さ 1.5 cm 程度。総状花序は頂生し、6~20 花をつける。花は径 7~8 mm、黄緑色。萼片と花弁は長さ 3~4 mm、唇弁は長さ 4~5 mm で、浅く 3 裂し、基部に長さ 4~10 mm の距がある。

分布域 (県外) : 台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部 (国頭村、東村、大宜味村)、西表島。

生育環境 : 典型的な溪流植物で、洪水時には水没するような河川の中流域の湿った岩上に生える。

生育状況 : 沖縄島では 6 河川に自生が知られているが、いずれの地域でも生育地は狭い範囲に限られ、個体数は極めて少ない。今回の調査では、以前に確認されていた 1 河川での生育が確認できなかった。他の 2 河川 (辺野喜川、大保川) ではダム建設で絶滅した。西表島では、1 河川で確認されており、1984 年に採集された花をつけた標本が国立科学博物館 (TNS) に収蔵されていることが判った。

学術的価値 : 沖縄島は分布域の北限である。東アジアの温帯系の種であり、琉球列島の植物相の成立を知る上で貴重である。沖縄県の固有種と考えられてきたが、最近台湾からも発見されている (鐘, 2008)。

減少の要因 : ダム建設による自生地の水没。自然林の伐採。もともと自生地が限られている。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2002 年)。

文 献 : 鐘詩文, 2008. 台湾野生蘭 下冊. 行政院農業委員會林務局, 台北, 222pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : イリオモテトンボソウ

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Platanthera stenoglossa* Hayata subsp. *iriomotensis* (Masam.) K. Inoue

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。地中に紡錘形の塊根がある。茎は花序を含めて長さ 20 cm になり、基部に 2~4 葉をつける。葉は卵形、長さ 3~7 cm。頂生する総状花序は、疎らに 5~10 花をつける。花は淡緑色、萼片と花弁は長さ 4~6 mm、唇弁は長さ 5~7 mm、基部に長さ 11 mm の距がある。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 山地の河川中流域の川沿いの湿った崖や岩上、河川源流部の水がしたたり落ちる滝の崖面、またはまれに波しぶきをかぶる海岸の湿った崖に生える。

生育状況 : 3 河川の中流域、この河川とは水系が異なる 1 河川の源流部、1 ヶ所の海崖に産することが今回の調査でも確認されたが、個体数は少ない。

学術的価値 : 西表島の固有亜種である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。

備考 : タイトントンボソウが小浜島に産するとの記述もあるため (初島, 1975)、2014 年に該当する場所の探索を行ったが、発見することはできなかった。基本亜種のタイトントンボソウは台湾に、別亜種のソハヤキトンボソウ *P. stenoglossa* Hayata subsp. *hottae* K. Inoue は本州 (紀伊半島) と九州 (宮崎県) に分布する。国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : Inoue, K., 1981. Notes on infraspecific taxa of *Platanthera stenoglossa* Hayata from Taiwan and Japan. *J. Jpn. Bot.*, 56: 120-127.

初島住彦, 1975. 琉球植物誌 (追加・訂正). 沖縄生物教育研究会, 那覇, 837.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ナゴラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Sedirea japonica* (Linden et Rchb. f.) Garay et Sweet (= *Phalaenopsis japonica* (Linden et Rchb. f.) Kocyan & Schuiteman)

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎は短く、2~6 葉を 2 列に接してつける。葉は革質、長楕円形、長さ 4~15 cm。総状花序は腋生し、長さ 6~12 cm、4~10 花をつける。花は乳白色で、側萼片の内面に数本の紫褐色の横縞が、唇弁の上面に紅紫色の斑点が入り、芳香があり、萼片と花弁は長さ 12 mm、長楕円形、唇弁は長さ 12 mm、倒卵形、3 浅裂し、側裂片は小さく、中央裂片はへら形、基部に円錐形の距がある。蕊柱は長さ 12 mm、基部は下方に伸長して脚部となり、側萼片と癒合する。

分布域 (県外) : 本州 (静岡県以西)、四国、九州、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、朝鮮。

県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島北部、久米島。

生育環境 : 自然林の樹幹や岩上に着生する。

生育状況 : 伊平屋島では絶滅寸前で、沖縄島では近年全く確認されていない。久米島の現状は不明。

学術的価値 : 分布域の南限である。ナゴラン属 *Sedirea* はナゴランをもとに 1974 年に設立され (Garay & Sweet,

1974)、日本とその周辺の固有属とされてきたが、1984年に2番目の種である *S. subparishii* が中国南部から記録された。最も近縁な属は東南アジアの *Aerides* 属で、ナゴラン属はこれらの近縁属の中で最も北にまで分布する。最近本種をコチョウラン属 *Phalaenopsis* に移す見解が発表されている (Kocyan & Schuiteman, 2014) が、コチョウラン属としても属の分布域の北限となる。

- 減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。もともと自生地と個体数が限られている。
- 備考 : 沖縄島では人工増殖した株を自生地に植え戻すことが試みられているが、由来のはっきりしない個体を安易に植え戻すことは遺伝的変異性を攪乱する恐れがあり、止めるべきである。
- 文献 : Garay, L. A. & H. R. Sweet, 1974. Orchids of Southern Ryukyu Islands. Harvard University, 149-150.
Kocyan, A. & A. Schuiteman, 2014. New combinations in *Aeridinae* (Orchidaceae). *Phytotaxa*, 161(1): 61-85.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : コウトウシラン
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Spathoglottis plicata* Blume
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は円錐形、長さ 2~7 cm、数個が接して並ぶ。葉は数枚が束生し、線状披針形、長さ 30~60 cm、縦しわがある。総状花序は偽球茎の下部から出て、長さ 50~75 cm、密に多数の花をつけ、数個ずつ順次咲かせる。花は紅紫色、萼片と花弁は長さ 1.7 cm、卵形~卵状長楕円形、唇弁は長さ 1.2 cm、基部で3裂し、側裂片は長楕円形、中央裂片はイチョウ形、小凹頭、中央部に1対の黄色の突起がある。
- 分布域(県外) : 台湾、フィリピン、スリランカ、インド、タイ、インドシナ、マレーシア、ニューギニア、オーストラリア、ソロモン諸島、ニューカレドニア、サモア諸島。
- 県内の分布 : 石垣島、西表島。
- 生育環境 : 日当たりのよい草地や川沿いの岩上に生える。林道の法面や伐採で生じた二次林の林縁部などの人為的な環境にしばしば群生するが、遷移が進行して森林になると消失する。
- 生育状況 : もともとは普通に見られたが、近年は個体数が減少している。石垣島では見ることは少なくなってきた。沖縄島北部では近年、道路の法面などに散発的に確認されているが、栽培品の逸出と考えられる。
- 学術的価値 : 分布域の北限である。
- 減少の要因 : 園芸用の採集。自生地の開発。遷移の進行。
- 備考 : 本来は種子により旺盛に繁殖する。沖縄島北部でも最近確認されているが、これは栽培品からの逸出と思われる。ハワイや熱帯アメリカにも広く野生化していることが知られる。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015年)。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : イリオモテムヨウラン
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Stereosandra javanica* Blume
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形態の特徴 : 葉を欠く腐生の多年草。地中に長楕円形の球茎がある。茎は長さ 15~30 cm。総状花序は球茎の先から生じ、10~15 花を疎らにつける。花は淡黄色で、萼片と花弁の先は紫色、萼片と花弁は大部分で接合して筒状になり、端部のみ半開し、長さ 6~7 mm、披針形、唇弁は長さ 7 mm、広披針形、基部上面に 1 対の小突起がある。
- 分布域(県外) : 台湾、中国南部、スリランカ、インド、インドシナ、マレーシア。
- 県内の分布 : 沖縄島北~中部、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
- 生育状況 : 沖縄島では極めてまれで、近年は生育が確認されない。石垣島と西表島ではそれぞれ数ヶ所に点々と産するが、個体数は少ない。
- 学術的価値 : 分布域の北限である。イリオモテラン属は単型属であるが、この属の染色体数は石垣島産の個体を用いて $2n=116$ という高い数であることが初めて明らかにされた (Aoyama & Yokota, 2012)。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。
- 備考 : 梅雨時の短い開花期にだけ出現するので、発見が難しく、分布に関する情報は十分ではない。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動物種 (2017 年)。

文献 : Aoyama, M. & M. Yokota, 2012. Cytological studies on *Stereosandra javanica*, a myco-heterotrophic orchid. *Acta Phytotax. Geobot.*, 62(2-3): 99-102.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

和名 : クモラン
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Taeniophyllum aphyllum* Makino
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : ごく小形の無葉の多年草。茎はごく短く、放射状に多数の根をつける。根はやや扁平で、緑白色、長さ 2~5 cm。総状花序は側生し、長さ 5~10 mm、1~5 花をつける。花は淡黄緑色、萼片と花弁は半分以上癒合して筒状になり、長さ 2 mm、遊離した部分は卵形、唇弁は長さ 1.5 mm、卵状船形、基部は短い距となる。
- 分布域(県外) : 本州(関東以西)、四国、九州、種子島、奄美大島、台湾、朝鮮。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 山地の自然林の樹幹に着生する。
- 生育状況 : 植物体が小形で発見しにくいので、分布に関する情報は少ないが、現在も自生が確認されているのは沖縄島北部でもごく限られた 2 河川の流域だけで、その地域の森林は大半が伐採されている。
- 学術的価値 : 沖縄県産の個体は本州から九州に産する個体と比べて大形で、根がより扁平になるなどの相違点があり、分類学的な再調査が必要である。
- 減少の要因 : 自然林の伐採。もともと自生地と個体数が限られている。
- 備考 : 本種を東南アジアに分布する *T. glandulosum* Blume とする見解がある。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・横田昌嗣(追補)・仲間正和(追補)

和名 : ヒメトケンラン
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Tainia laxiflora* Makino

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。偽球茎はやや離れて数個並び、円錐形、長さ 1~1.5 cm、先に 1 葉をつける。葉は狭長楕円形~披針形長楕円形、深緑色で、上面に淡緑白色の斑紋が入り、長さ 7~12 cm。総状花序は偽球茎の基部から生じ、長さ 20~30 cm、疎らに 2~5 花をつける。萼片と花弁は黄褐色、唇弁は黄色、萼片と花弁は長さ 12~15 mm、長楕円状披針形、唇弁は長さ 8~10 mm、広楕円状倒卵形、先端で 3 浅裂し、側裂片は卵形、中央裂片は横長楕円形、小凹頭、上面中央に 3 列の板状突起がある。

分布域 (県外) : 伊豆諸島、四国、九州、対馬、屋久島、種子島、中之島、奄美大島、徳之島。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 自然林や遷移の進んだ二次林の明るい湿った林床に生える。

生育状況 : かつてはやや普通に見られたが、現在は乱獲により個体数は非常に減っている。

学術的価値 : 日本の固有種で、分布域の南限である。本種は、 $2n=36$ の常染色体に加えて、個体により 0~9 個の付加染色体をもち、種内で著しい染色体数の変異を示すまれな植物として知られている (Tanaka & Matsuda, 1972)。

減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。

備考 : 台湾のルリダマアオイラン *T. piyananensis* Fukuyama を同種とする意見がある。

文献 : Tanaka, R. & T. Matsuda, 1972. A high occurrence of accessory chromosomal type in *Tainia laxiflora*, Orchidaceae. Bot. Mag. Tokyo, 85(1): 43-49.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : ハガクレナガミラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Thrixspermum fantasticum* L. O. Williams

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎は長さ 1~4 cm、葉を 2 列に接して互生する。葉は革質、長楕円形、長さ 2~5 cm。総状花序は腋生し、長さ 4~7 cm、数花を密につけ、1 個ずつ順次咲かせる。花は白色、唇弁には黄褐色の斑点が入り、萼片と花弁は長さ 4 mm、広楕円形、唇弁は長さ 3 mm、基部で 3 裂し、側裂片は斜楕円形、直立して蕊柱を包み、中央裂片は半円形、基部上面に毛の生えた 1 対の突起がある。

分布域 (県外) : 台湾、フィリピン。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 空中湿度の高い山地の自然林の樹枝上に着生する。

生育状況 : 3 河川の流域に産するが、個体数は非常に少ない。

学術的価値 : 分布域の北限であり、国内唯一の産地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自生地の開発。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2016 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 豊見山元・播磨保治, 1992. 琉球列島植物分布資料 8. 沖縄生物学会誌, (30) : 75-77.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : **イリオモテラン (ニューメンラン)**
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Trichoglottis ionosma* (Lindl.) J. J. Smith
 カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は堅く、直立し、しばしば分枝し、長さ 20~70 cm、多数の葉を 2 列に互生する。葉は厚い革質、線状長楕円形、凹頭、長さ 10~18 cm。総状花序は腋生し、単一または分枝し、長さ 20~30 cm、疎らに 7~20 花をつける。花は淡黄色で、内面に紫褐色の斑点が入り、唇弁は白色で、上面に紅紫色の小点が入り、萼片と花弁は長さ 1.7 cm、背萼片は卵状菱形、側萼片は倒卵形、花弁はへら形、唇弁は長さ 1.6 cm、基部で 3 浅裂し、側裂片は三角形、小さく直立し、中央裂片は菱形状船形、上面に毛が生え、先端は尖り、基部に短い距がある。

分布域 (県外) : 台湾、フィリピン。

県内の分布 : 石垣島、西表島、魚釣島。

生育環境 : 山地の自然林の樹幹に着生する。

生育状況 : 石垣島と西表島ではかつては点々と見られたようであるが、古くから観賞用に乱獲され、現在は絶滅寸前である。魚釣島では高地にやや普通に見られるが、野生化したヤギにより森林生態系が悪影響を受けており、将来絶滅する恐れがある。西表島では人工増殖した株を自生地に植え戻すことが試みられているが、由来のはっきりしない個体を安易に植え戻すことは遺伝的変異性を攪乱する恐れがあり、止めるべきである。

学術的価値 : 分布域の北限である。フィリピン産のものとは唇弁の形がやや異なり、琉球列島と台湾産のものを *T. luchuensis* とする意見がある。花被片の斑紋の量や形には個体変異があり、石垣島産の花被片に紫褐色の斑紋が大きくはいる型は、クロバナニューメンランと呼んで変種として区別する意見がある。

減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採 (石垣島)。野生化ヤギによる食害と森林生態系の破壊 (魚釣島)。

保全対策 : 魚釣島では野生化ヤギの駆除が急務である。

備考 : ニューメンランの和名は、入面蘭 (イリオモテラン) を音読みしたことに因む。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : **アコウネツタイラン**
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Tropidia calcarata* Ames
 カテゴリ : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリ: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎は細くて硬く、1~3 本が束生し、単一または分枝し、花序を含めて長さ 15~30 cm、2~5 葉をやや接して互生する。葉は長楕円状心形~披針形、洋紙質、暗緑色、長さ 7~12 cm、7 主脈があり、縦しわがある。総状花序は頂生し、8~15 花をやや密につけ、包葉は長さ 6~7 mm で子房と同長か長い。花は白色、唇弁の先端は濃黄色、萼片と花弁は長さ 6 mm、背萼片と花弁は披針形、側萼片は 2 個が癒合し船形、先は 2 浅裂し、唇弁は長さ 6 mm、卵状披針形、先端は折れ曲がり、基部は明瞭な距となる。

分布域 (県外) : 台湾、フィリピン。

県内の分布 : 沖縄島 (北部~南部)、石垣島、西表島。

生育環境 : 低地の自然林の林床に生え、石灰岩地を好む。
生育状況 : 沖縄島と石垣島ではそれぞれ数ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。西表島では近年は確認されておらず、現状は不明。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。園芸用の採集。
備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・比嘉清文(追補)

和名 : ヤクシマネッタイラン
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Tropidia nipponica* Masam.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎は細くて硬く、1~2 本が束生し、単一または分枝し、花序を含めて長さ 10~30 cm、1~4 葉を疎らに互生する。葉は卵状長楕円形~長楕円状披針形、洋紙質、暗緑色、長さ 6~10 cm、5 主脈があり、縦しわがある。総状花序は頂生し、6~10 花を密につけ、やや散形状で、包葉は長さ 1~3 mm で子房より短い。花は白色、唇弁の先端は濃黄色、萼片は長さ 6~8 mm、背萼片は倒卵形~倒卵状披針形、側萼片は 2 個が癒合し、倒卵状船形、花弁は長さ 6.5 mm、披針形、唇弁は長さ 5 mm、卵状披針形、先端は折れ曲がり、基部は囊状で距はほとんど目立たない。

分布域(県外) : 本州(伊豆諸島)、四国(高知県)、九州(対馬、壱岐、甬島)、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の陰湿な林床に生える。

生育状況 : 沖縄島は 2 ヶ所、石垣島は 1 ヶ所、西表島は 1 ヶ所の自生地が確認されているが、各地とも個体数は極めて少ない。

学術的価値 : 分布域の南限である。

減少の要因 : 自然林の伐採。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 伊豆諸島のものは、ハチジョウネッタイラン *T. nipponica* Masam. var. *hachijoensis* F.Maek. として区別されている。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 豊見山元, 1987. 琉球列島植物分布資料 4. 沖縄生物学会誌, (25) : 59-61.
横田昌嗣・豊見山元・比嘉清文・橋爪雅彦, 1994. 琉球列島植物分布資料 13. 沖縄生物学会誌, (32) : 61-65.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : コウトウヒスイラン
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Vanda lamellata* Lindl.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は長さ 20~40 cm、多数の葉を 2 列に互生する。葉は線状長楕円形、先は 2 裂し、

長さ 13~27 cm。総状花序は長さ 15~30 cm、8~15 花をつける。花は淡黄色、径 3~3.5 cm、萼片と花弁は長さ 15 mm、唇弁は長さ 8 mm、3 裂し、上面に 2~3 本の板状の隆起があり、中央裂片は長楕円形で先は 2 裂する。

- 分布域 (県外)** : 台湾 (蘭嶼)、フィリピン、マリアナ諸島、ボルネオ。
- 県内の分布** : 魚釣島。
- 生育環境** : 山地の自然林の樹幹に着生する。
- 生育状況** : 近年は全く確認されておらず、現状は不明であったが、最近神奈川県立生命の星・地球博物館 (KPM) に収蔵されている正宗巖敬博士関係の標本の中に、Y. Nakasone 採集 (1920 年代に宮古島などで活動した仲宗根善守氏?) の花序の標本があることが判った (勝山輝男氏, 私信)。この標本の唇弁の形態は、魚釣島に多く産するイリオモテランとは異なり、コウトウヒスイランの特徴を示していることから、本種と判断される。1920 年代には確実に自生していたと思われる。
- 学術的価値** : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。
- 減少の要因** : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。野生化ヤギの増殖による生育環境の悪化。
- 保全対策** : この種ばかりでなく、多くの希少種が見られる (横畑ら, 2009) 魚釣島の多様性と生態系を守るためには、野生化ヤギの駆除が喫緊の課題である。
- 備考** : 琉球列島からヒスイラン属を報告したのは初島・天野 (1958) が最初で、Masamune (1964) はその記録を踏襲し、現在は *Vanda lamellata* の異名とされる *V. yamiensis* Masamune et Segawa を尖閣列島から記録している。台北帝国大学で研究を行った正宗博士の基準標本を含む貴重な標本の一部は、神奈川県立生命の星・地球博物館 (KPM) にあることが判っている (Inoue *et al.*, 1998)。コウトウヒスイランの上記の標本は、正宗博士が台北帝国大学から持ち帰ったものと思われる。
- 文献** : 初島住彦・天野鉄夫, 1958. 沖縄植物目録, 琉球大学研究普及部, 那覇市, 192 pp.
 Inoue, K., T. Katsuyama, H. Takahashi & M. Akiyama, 1998. Recently rediscovered type materials of orchids described by Dr. Fukuyama and Dr. Masamune. *J. Jpn. Bot.* 73: 199-230.
 Masamune, G., 1964. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (X). *Sci. Rep. Kanazawa Univ.*, 9(9): 119-154.
 横畑泰志・横田昌嗣・太田英利, 2009. 尖閣諸島魚釣島の生物相と野生化ヤギ問題. “IPSHU 研究報告シリーズ研究報告 No. 42 (松尾雅嗣教授退職記念論文集)”, 広島大学平和科学センター, 広島市, 307-326.

執筆者名 : 横田昌嗣

- 和名** : ヤクシマヒメアリドオシラン
- 分類** : ラン科 (APG 科名: ラン科)
- 学名** : *Vexillabium yakushimense* (Yamamoto) F. Maek.
- カテゴリー** : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : ごく小形の常緑の多年草。茎は匍匐し、しばしば分枝し、先は直立し、花序を含めて長さ 5~10 cm、2~5 葉を互生する。葉は広卵形~卵円形、深緑色で、通常暗紫色を帯び、長さ 7~20 mm。総状花序は頂生し、1~3 花をつける。萼片と花弁は淡黄緑色で、赤褐色を帯び、唇弁は白色で、時に淡紅色を帯び、萼片は長さ 4~5 mm、背萼片は菱形卵形、側萼片は下半部が癒合し鐘状になり、長楕円状披針形、花弁は長さ 4~5 mm、斜披針形、唇弁は長さ 7~8 mm、T 字形で、先端は横長四角形、凹頭、上面基部に 1 対の突起があり、基部に長さ 1.5 mm の距がある。

- 分布域 (県外)** : 本州、四国、九州、屋久島、奄美大島、加計呂麻島、徳之島、朝鮮、台湾、フィリピン。
- 県内の分布** : 沖縄島北部。
- 生育環境** : 山地の自然林の陰湿な林床や川沿いの岩上に生える。

生育状況 : 数ヶ所に点々と産するが、個体数は少ない。
減少の要因 : 自然林の伐採。園芸用の採集。ダム建設による自生地の水没。
備考 : 本種については、分子系統地理学的な研究の試みがある (Saeki *et al.*, 2014)。

文献 : Saeki, I., A. Kitazawa, A. Abe, K. Minemoto & F. Koike, 2014. Phylogeography of a rare orchid, *Vexillabium yakushimense*: comparison of populations in central Honshu and the Nansei Island chain, Japan. *Pl. Syst. Evol.* 300: 1-12.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : ミソボシラン (トミヤマフタオラン)

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Vrydagzynea nuda* Blume

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 15~20 cm、3~11 葉を疎らに互生する。葉は卵状楕円形、長さ 25~50 mm。総状花序は頂生し、6~12 花をつける。花はほとんど開かず、黄緑色、わずかに褐色を帯び、萼片の先端は白色、萼片は長さ 6 mm、背萼片は長楕円状卵形、側萼片は広披針形、花弁は長さ 4.5 mm、長卵形、唇弁は長さ 3.5 cm、倒卵状半円形、基部に長さ 4.5 mm の距があり、距の中に柄がある球形の突起が 1 対ある。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、ジャワ。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 高地の自然林の陰湿な林床に生える。

生育状況 : 石垣島では自生地は 1 ヶ所が知られるだけで、個体数は少ない。自生地の一部は森林伐採や通信施設の建設により消失した。西表島では 1 ヶ所に少数個体を産することが確認されているが、2016 年の探索では発見することができなかった。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採。

備考 : 本種を *V. albida* (Blume) Blume あるいは *V. formosana* Hayata と同定する意見がある。国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : アオジクキヌラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Zeuxine affinis* (Lindl.) Benth. ex Hook. f.

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 小形の冬緑性の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 20~35 cm になり、4~8 葉を互生する。葉は広披針形~卵状披針形、長さ 2~4 cm。総状花序は頂生し、6~10 花をつけ、子房とともに白色の長毛が多い。花は白色、背萼片は長さ 4~5 mm、卵形、側萼片は斜卵形、長さ 4 mm、花弁は斜長楕円形、長さ 4~5 mm、唇弁は長さ 5 mm、幅 6 mm、Y 字形、上面に微小な乳頭状突起が密生し、先端の裂片は倒卵形、基部は囊状となり、上面基部に 1 対の突起がある。

- 分布域（県外）：台湾、ヒマラヤ、タイ、インドシナ。
 県内の分布：沖縄島（北部～中部）、石垣島。
 生育環境：山地の自然林の林床に生え、適湿の斜面から過湿の林床まで幅広い環境で見られる。
 生育状況：沖縄島では数ヶ所に点々と自生するが、個体数は少ない。石垣島では2ヶ所で少数個体が確認されている。
 学術的価値：分布域の北限である。
 減少の要因：もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。ダム建設による水没（沖縄島）。園芸用の採集。
 備考：ヤンバルキシラン *Z. parvifolia* (Ridley) Seidenfaden に酷似し、近年になって（橋本，1986）分布が確認された種で、分布に関する情報は十分ではない。ヤンバルキシランより開花期は1ヶ月程度遅い。
 文献：橋本 保，1986. ラン科植物分類雑記 (2). 筑波実験植物園研究報告, (5): 17-30.

執筆者名：横田昌嗣*・治井正一*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

- 和名：カゲロウラン
 分類：ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名： *Zeuxine agyokuana* Fukuyama
 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)

- 形態の特徴：小形の常緑の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ10～20 cm、4～5葉を互生する。葉は卵状披針形、濃緑色でビロード状、上面に光沢があり、長さ3～4.5 cm。総状花序は頂生し、10花前後をつける。萼片は赤色を帯びた黄褐色、花弁と唇弁は白色、唇弁はやや黄色を帯び、萼片と花弁は長さ4 mm、背萼片は卵状披針形、側萼片は線状披針形、花弁は線状倒披針形、唇弁は長さ3 mm、囊状卵形、上面基部に1対のかぎ形突起がある。
 分布域（県外）：本州(千葉県、静岡県、和歌山県)、四国、九州、屋久島、中之島、奄美大島、台湾。
 県内の分布：沖縄島北部、石垣島、西表島。
 生育環境：山地の自然林のやや乾いた林床に生える。
 生育状況：沖縄島では数ヶ所、石垣島では1ヶ所の自生地が知られるが、群生することはない、個体数は少ない。西表島では極めてまれで、現状は不明。
 減少の要因：もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。園芸用の採集。
 備考：本種は最近分布域を拡大させており、北上している。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015年)。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

執筆者名：横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

- 和名：イシガキキシラン
 分類：ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名： *Zeuxine flava* (Wall. ex Lindl.) Benth. ex Hook. f.
 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形態の特徴：小形の冬緑性の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ20～25 cmになり、3～4葉を互生する。葉は卵形～楕円形、長さ2～4 cm。総状花序は頂生し、密に10花前後をつける。萼片は

黄緑色で、やや赤褐色を帯び、唇弁は黄色、背萼片は長さ 4 mm、卵形、側萼片は斜卵形、長さ 3～3.5 mm、花弁は斜長楕円形、長さ 4 mm、唇弁は長さ 5 mm、Y 字形、先端の裂片は円形、基部は囊状となり、上面基部に 1 対の突起がある。

- 分布域 (県外) : 屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、台湾、スリランカ、ヒマラヤ、タイ、ボルネオ。
県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。
生育環境 : 山地の自然林や二次林の湿った林床に生える。
生育状況 : 沖縄島では数ヶ所、石垣島では数ヶ所、西表島では 3ヶ所の自生地が知られるが、個体数は多くはない。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。園芸用の採集。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

- 和名 : **オオキヌラン (センカクキヌラン)**
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Zeuxine nervosa* (Wall. ex Lindl.) Benth. ex Clark (= *Heterozeuxine nervosa* (Wall. ex Lindl.) T. Hashimoto)
カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 30 cm になり、4～5 葉を互生する。葉は卵状披針形、長さ 7 cm になり、しばしば中肋に白色の条が入る。頂生する総状花序は、やや疎らに 6～10 花をつける。花は半開し、淡黄緑色で、やや赤褐色を帯び、唇弁は白色、萼片と花弁は長さ 5 mm、背萼片は卵形、側萼片は長楕円形、花弁は斜卵形、唇弁は長さ 7 mm、Y 字形、先端の裂片は円形、基部は囊状となり、基部上面に 3～4 対の突起がある。

- 分布域 (県外) : 台湾、フィリピン、ヒマラヤ、タイ、インドシナ。
県内の分布 : 石垣島、魚釣島。
生育環境 : 自然林の湿った林床に生える。
生育状況 : 魚釣島ではごく狭い範囲に少数個体が生えるが、野生化したヤギによる食害の影響が心配される。石垣島では数ヶ所に産することが知られるが、いずれの自生地でも極めてまれで、ほとんどの自生地では近年は確認されていない。石垣島の 1ヶ所からは、タイトウキヌラン (豊見山, 1987) として報告されている。

- 学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : 園芸用の採集。自生地の開発。野生化ヤギによる食害 (魚釣島)。
保全対策 : 魚釣島では野生化ヤギの駆除が急務である。
備考 : タイトウキヌラン *Z. fluvida* Fukuyama は、本種と区別されることがあるが、台湾ではタイトウキヌランとオオキヌランが混生している自生地があることから、同一種の種内変異と考えるのが適切と思われる。オオキヌランとジャコウキヌランをジャコウキヌラン属 *Heterozeuxine* としてキヌラン属 (ホソバラン属) *Zeuxine* から独立させる意見がある (橋本, 1986)。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。

- 文献 : 橋本 保, 1986. ラン科植物分類雑記(2). 筑波実験植物園研究報告, (5): 17-30.
豊見山元, 1987. 琉球列島植物分布資料 4. 沖縄生物学会誌, (25): 59-61.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ジャコウキヌラン (ジャコウシュスラン)
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Zeuxine odorata* Fukuyama (= *Heterozeuxine odorata* (Fukuyama) T. Hashimoto)
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 30~50 cm、5~6 葉を互生する。葉は斜楕円形、長さ 5~10 cm。総状花序は頂生し、10~20 花をやや密につける。花は淡緑白色、半開し、萼片は卵状長楕円形、長さ 6~7 mm、花弁は広半卵形~斜鎌状楕円形、長さ 7 mm、唇弁は長さ 9 mm、Y 字状で、先端の裂片は円形、基部はやや囊状になる。

分布域 (県外) : 台湾 (蘭嶼)、フィリピン (バタン島)。

県内の分布 : 沖縄島中部、石垣島、与那国島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 沖縄島では 2 ヶ所、石垣島では数ヶ所、与那国島では 2 ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。沖縄島ではおそらく絶滅したものと思われる。

学術的価値 : 分布域の北限である。オオキヌランとジャコウキヌランをジャコウキヌラン属 *Heterozeuxine* としてキヌラン属 (ホソバラ属) *Zeuxine* から独立させる意見がある (橋本, 1986)。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採。

文献 : 橋本 保, 1986. ラン科植物分類雑記(2). 筑波実験植物園研究報告, (5): 17-30.
 前津栄信・松島昭司, 1999. 安良の植物. “石垣島古郷安良の原風景—その歴史と自然—”, 石垣市総務部市史編集室 (編), 石垣市, 129-226.
 豊見山元, 1987. 琉球列島植物分布資料 4. 沖縄生物学会誌, (25): 59-61.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : キヌラン (ホソバラ) (狭義)
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Zeuxine strateumatica* (L.) Schltr. var. *strateumatica*
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 落葉性の多年生草本。茎は花序と共に長さ 5~15cm、葉は数個つき、線形、長さ 2~5.5cm、幅 3~5mm。穂状花序は長さ 2~4cm、密に多花をつける。花は乳白色、半開またはやや平開し、背萼片は卵状長楕円形、長さ 5mm、側萼片はやや短い。側花弁は卵状長楕円形でやや斜形、長さ 5mm、唇弁は長さ 5mm、基部はやや囊状になり、先端はさじ形、上面に短毛が生え、濃黄色。室果は狭楕円形、長さ 5~6mm。

分布域 (県外) : 九州、奄美大島、アフガニスタン、インド、スリランカ、中国、台湾、フィリピン、マレーシア。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 日当たりの良い草地や道路の法面に生える。

生育状況 : 石垣島では 2 ヶ所、西表島では 3 ヶ所で生育が確認されているが、かつての自生地は遷移が進行して樹林や高茎草原となり、最近は見つかっていない。沖縄島の現状は不明。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が限られる。遷移の進行。

備考 : 基本変種の基準産地はアフガニスタンで、八重山諸島のものは、写真から判断するとアフガニスタンのものと区別できない。本種は芝生と共に持ち込まれ、北アメリカに帰化している。沖縄県と台湾の固有変種チクシキヌラン var. *rupicola* (Fukuyama) S. S. Ying は、唇弁が三角形で上面が無毛である点で異なり、沖縄県では普通に見られる。チクシキヌランは、比較的最近になって再認識さ

れたもので(橋本, 1986)、キヌランと呼ばれていた期間が長く、キヌラン(狭義)と混同されている場合がある。キヌランは、インドでは形態的に極めて多様で、二倍体から十倍体までの倍数性複合体と様々な異数体からなることが知られている(Mehra & Vij, 1972)が、日本産のキヌラン(狭義)とチクシキヌランについては、十分には調べられていない。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : Mehra, P.N. & S.P. Vij. 1972. Cytological Studies in the East Himalayan Orchidaceae - 1: Neottieae. *Caryologia*, 25(3): 237-251.
橋本保, 1986. ラン科植物分類雑記(2). 筑波実験植物園研究報告, 5: 17-30.

執筆者名 : 横田昌嗣

.....
〈情報不足 (DD)〉

和名 : ホソバノキミズ (オオキミズ)
分類 : イラクサ科 (APG 科名: イラクサ科)
学名 : *Elatostema lineolatum* Wight var. *majus* Wedd.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅 (EX)

形態の特徴 : 常緑の多年草。植物体全体に短毛を密生する。茎は直立し、上部で分枝して高さ 60 cm 程度になる。葉は互生し、長さ 6~13 cm、倒披針形で、先端は尾状に伸び、葉縁の先端に近い部分に数個の粗い鋸歯があり、葉柄は長さ 1 mm で短い。雌雄異株で、球状の花序を葉腋につける。花は径 1~2 mm、小花柄は長さ 1~2 mm、包葉は 3~4 枚つき、花被片は 4 枚、雄花の雄蕊は 4 個。

分布域(県外) : 奄美大島、台湾、中国中部~南部、ヒマラヤ、インドシナ。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の自然林の陰湿な林床に生える。沖縄島では石灰岩地に産する。

生育状況 : 沖縄島の 1ヶ所で 1887 年に採集された標本があることが報告(山崎, 1995)されているが、現状は不明である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。

備考 : 分布域の北限である奄美大島では、戦前に 2ヶ所で発見されているが、戦後は発見されていない。

文献 : 山崎 敬, 1995. ホソバノキミズ琉球に分布. 植物研究雑誌, 70: 176.

執筆者名 : 横田昌嗣

.....
和名 : オトギリマオ
分類 : イラクサ科 (APG 科名: イラクサ科)
学名 : *Gonostegia pentandra* (Roxb.) Miq. var. *hypericifolia* (Blume) Masam.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 情報不足 (DD)

形態の特徴 : 常緑の多年生草本。茎は長さ 50 cm になり、粗毛を密布する。葉は茎の下部では対生で、茎の上部では互生し、線状披針形~狭卵形、3 行脈があり、長さ 5~15 mm、幅 2~4 mm、全縁、鈍頭またはやや鋭頭、円脚~浅心脚、葉柄は長さ 1 cm 以下、托葉は広三角形、長さ 1 mm 位。雌雄異花で、花は腋生し、雄花は葉腋に 1~2 個がつき、やや無柄、花被片は 4~5 個、長楕円形、長さ 1 mm、雄蕊は 4~5 個、雌花は筒状。瘦果は楕円形~卵形、長さ 1 mm。

分布域（県外）：台湾、中国南部、インドネシア。
県内の分布：与那国島。
生育環境：低地に生える。
生育状況：島田（1917）、佐々木（1930）、Masamune（1954）では、島田彌市が与那国島で採集した標本（島田 No. 8398）をもとに報告されているが、これまで野外調査で確認されていない。
学術的価値：分布域の北限である。
減少の要因：もともと自生地と個体数が限られる。
備考：島田の標本は、台湾総督府中央研究所林業部の標本室に所蔵されているというが、この標本室の後継機関の台湾林業試験所植物標本館（TAIF）では、この標本を見つけることはできなかった。
文献：Masamune, G., 1954. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (IV). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 2: 59-117.
佐々木舜一, 1930. 林業部腊葉館目録. 台湾総督府中央研究所林業部報告, (9) : 1-592, 台湾総督府中央研究所, 台北.
島田彌市, 1917. 与那国島採集植物（予報）. 台湾博物学会会報, 7: 1-21.

執筆者名：横田昌嗣

和名：コウトウウラジロマオ
分類：イラクサ科（APG科名：イラクサ科）
学名：*Maoutia setosa* Wedd.
カテゴリー：情報不足（DD） 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：高さ2~4mになる常緑の低木、植物体全体に銀白色の密毛がある。葉は互生し、卵状披針形~長楕円状披針形、長さ10~20 cm、幅5~6 cm、鋭尖頭、浅心脚~広楔脚、微鋸齒縁、3行脈、下面は白短毛を密布し、葉柄は長さ1~4.5 cm。集散花序は腋生し、雌雄異花、花は2~5個ずつ集り、径1 mm、雄花の花被片は5個、卵形、雄蕊は5個、雌花の花被片は微小、子房は有毛。瘦果は卵状楕円形。
分布域（県外）：台湾（緑島、蘭嶼）、フィリピン。
県内の分布：石垣島。
生育環境：溪流近くの常緑樹林内に生える。
生育状況：高嶺（1952）により石垣島に産するとされたが、初島（1975）や初島・天野（1994）では石垣島に産することは疑問視されている。標本の裏付けはなく、野外調査でも確認はされておらず、現状は不明。
学術的価値：分布域の北限である。
減少の要因：もともと自生地が限られている。自生地の開発。

文献：初島住彦, 1975. 琉球植物誌（追加・訂正）. 沖縄生物教育研究会, 那覇, 235-236.
初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 38.
高嶺英言, 1952. 琉球林業試験場集報 No. 1, 八重山群島植物誌. 琉球林業試験場, 26.

執筆者名：横田昌嗣

和名：イワガネ
分類：イラクサ科（APG科名：イラクサ科）

学 名 : *Oreocnide frutescens* (Thunb.) Miq.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 高さ 4~5 m になる落葉低木。葉は長楕円形~卵形、長さ 6~12 cm、幅 2.5~5 cm、鋭鋸歯があり、鋭尖頭、葉脚は楔形、下面に白綿毛があり、葉柄は長さ 0.5~5 cm。雌雄異株、雌花と雄花の団集花序はともに無梗、小苞はやや鋭頭、雄花の花被は 4 裂、雄蕊は 4 個、雌花の花被は筒状。瘦果は卵形、長さ 1.5 mm。

分布域 (県外) : 四国、九州、屋久島、種子島、中国、ヒマラヤ。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 山地の常緑樹林に生える。

生育状況 : Masamune (1954) には沖縄島、宮古島、石垣島、西表島に産すると書かれていおり、Walker (1976) では沖縄島に産することが名護市源河山の標本 (Wilson No. 8103) を引用して報告されているが、現在は生育が確認できない。国内および台湾の主要な標本室にも標本が見つからないため、現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。

文 献 : Masamune, G., 1954. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (IV). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 2: 59-117.
Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 416.

執筆者名 : 横田昌嗣

和 名 : **タイワンヤマモガシ**
分 類 : ヤマモガシ科 (APG 科名 : ヤマモガシ科)
学 名 : *Helicia formosana* Hemsl.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

形態の特徴 : 低木または高さ 10 m ほどになる常緑高木。樹皮は紅褐色、若枝には褐色毛がある。葉は長楕円形~長倒卵形、長さ 15~25 cm、幅 5 cm 以上。葉腋から細い総状花序を伸ばし、多数の花をつける。果実は球形、径 1.5~2 cm、茶褐色。

分布域 (県外) : 台湾、中国、ベトナム。

県内の分布 : 与那国島。

生育環境 : 与那国島での生育環境は不明。台湾では、低海拔地の常緑樹林内に生える。

生育状況 : 与那国島での採集記録 (佐々木, 1930) があるが、これ以外の記録は全くなく、現状は不明である。

学術的価値 : 分布域の北限である。

備 考 : 島田彌市の 1917 年 10 月の与那国島調査により採集された植物の目録 (島田, 1917) では、学名は *H. formosana* だが、和名はヤマモガシとされている。タイワンヤマモガシとヤマモガシとを混同している可能性も考えられる。しかし、佐々木 (1930) では両者は明確に分けられ、島田の標本 (Shimada No. 8601, TAIF) はタイワンヤマモガシとして引用されている。Walker (1976) でもタイワンヤマモガシとして引用されている。それで今回はこれらの意見に従っておくが、標本の同定の再検討は今後必要であろう。

文 献 : 佐々木舜一, 1930. 林業部腊葉館目録. 台湾総督府中央研究所林業部報告, (9) : 1-592, 台湾総督府中央研究所, 台北。
島田彌市, 1917. 与那国島採集植物 (予報) . 台湾博物学会会報, 7: 1-21.

Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 1159pp.

執筆者名 : 新城和治*・立石庸一*

和名 : **アオモジ**
 分類 : クスノキ科 (APG 科名: クスノキ科)
 学名 : *Litsea cubeba* (Lour.) Pers.
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ5mくらいの落葉小高木。樹皮は灰色で、やや平滑、浅い縦すじが入る。若枝は暗緑色、無毛、2~3年で皮目ができる。葉は互生、長さ7~12mmの柄がある。葉身は長楕円状披針形~長楕円形、鋭尖頭、基部はくさび形、全縁、長さ7~12cm、洋紙質、上面は緑色、下面は粉白色、初め上面中肋に微毛があるが、のち無毛。雌雄異株。葉腋から出る短枝に2~4個の散形花序をつける。花序の柄は長さ5~12mm。漿果は球形、直径6mm、黒熟する。

分布域(県外) : 本州(岡山県、山口県)、九州、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、マレーシア、インド。

県内の分布 : 屋我地島?

生育環境 : 不明。

生育状況 : 九州や奄美諸島ではまれなものではないが、沖永良部以南では全く採集記録がない。初島・天野(1958)の目録で「屋我地島(正宗氏による)」と記され、以後の目録や植物誌類でこの記述が踏襲されているが、これはMasamune(1954)の分布記録「Yakusima; Nakanosima; Amami-osima, Yagati, (leg. Ipse!) Asato」を屋我地島と読んだことによるものと考えられる。しかし、1970年代に屋我地島を詳しく調査したが見つからなかった。「Asato」は名瀬市朝戸で、「Yagati」は屋我地島ではなく、「Yag-gati」の誤記で、奄美大島の役勝(ヤクガチ)とも考えられる。Masamune(1954)に引用されたYagatiで正宗自身が採集した標本が今のところ見つからないが、これを検することができれば、いずれかはっきりするだろう。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1958. 沖縄植物目録. 琉球大学研究普及部, 那覇市, 192pp.
 Masamune, G., 1954. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (IV). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 2(2): 1-59.

執筆者名 : 新里孝和*・立石庸一*

和名 : **コバノボタンヅル**
 分類 : キンポウゲ科 (APG 科名: キンポウゲ科)
 学名 : *Clematis pierotii* Miq.
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年草。葉は通常2回3出複葉、小葉は卵形~卵状楕円形、通常3裂、長さ1.5~5cm。散房花序は腋生し、通常1~3花をつける。花は白色で径3~4cm。

分布域(県外) : 四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島。

生育環境 : 山地の自然林の林縁部に生える。

生育状況 : 沖縄島、石垣島とも近年は全く確認されておらず、現状不明。

学 術 的 価 値 : 分布域の南限である。
減 少 の 要 因 : 自生地の開発。もともと個体数が少ない。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣

和 名 : **ホウライツツラフジ**
分 類 : ツツラフジ科 (APG 科名: ツツラフジ科)
学 名 : *Pericampylus formosanus* Diels
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形 態 の 特 徴 : つる性の多年草。葉身は広三角状卵形でやや全縁、長さ 5~7.5 cm で上面はやや無毛で光沢があり、
下面は微毛があり 5つの掌状脈が下面に突出する。
分布域 (県外) : 台湾、中国南部。
県 内 の 分 布 : 宮古島。
生 育 環 境 : 海岸の岩場にまれに見られる。
生 育 状 況 : 現状不明。
学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。
減 少 の 要 因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。

文 献 : 初島住彦・天野鉄夫・宮城康一, 1975. 宮古群島の植物. “沖縄県立自然公園候補地学術調査報告
(宮古群島)”, 沖縄自然研究会 (編), 沖縄県, 31-70.

執 筆 者 名 : 新城和治*・川上 勲*

和 名 : **ヨツバリマツモ**
分 類 : マツモ科 (APG 科名: マツモ科)
学 名 : *Ceratophyllum demersum* L. var. *quadrifidum* Makino
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 水中に生える多年草。葉は茎節上に輪生し、マツモとは楕円形の果実の基部に 2 個、上部に 2 個の
刺針がある点で区別される。
分布域 (県外) : 本州、朝鮮、中国。
県 内 の 分 布 : 沖縄島 (那覇市識名園)。
生 育 環 境 : 沼や池の水中に生える。
生 育 状 況 : これまで自生地は 1ヶ所のみ知られているが、現在は生育が確認できない。
学 術 的 価 値 : 琉球列島では限られた分布を示し、植物地理学上貴重である。
減 少 の 要 因 : もともと自生地が限られている。
備 考 : 基本変種のマツモは各地に産したが、近年は急減しており、ヨツバリマツモとともにほとんど見ら
れなくなりつつある。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。*種 *Ceratophyllum demersum* として
評価。

執 筆 者 名 : 新城和治*・新島義龍*

和名 : イシモチソウ
 分類 : モウセンゴケ科 (APG 科名: モウセンゴケ科)
 学名 : *Drosera peltata* Smith var. *nipponica* (Masam.) Ohwi
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 小形の多年生の食虫植物。茎は直立し、数葉をまばらに互生し、葉は三角で葉縁と上面に腺毛が密生する。夏頃に径 1 cm の白花を総状につける。
 分布域 (県外) : 本州 (関東以西)、四国、九州、台湾、朝鮮、中国。
 県内の分布 : 内離島。
 生育環境 : 日当りのよい湿地に生える。遷移が進んで森林になると衰退する。
 生育状況 : 自生地は 1ヶ所が知られているだけで、1996 年に行なわれた調査ではまったく確認することができず、現状不明。自生地と思われる場所は、遷移が進んで森林になっており、本種の生育には適さなくなっている。
 学術的価値 : 県内で唯一の産地である。
 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリ: Least Concern (LC)*。*種 *Drosera peltata* として評価。

執筆者名 : 新城和治*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

和名 : スナジマメ
 分類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)
 学名 : *Zornia cantoniensis* Mohlenbr.
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 多年草。茎は細く、束生し、地を這って四方に広がり、長さ 5~30 cm。葉は 2 個の小葉からなり、各小葉は長楕円形で両端は尖り、長さ 1~1.5 cm、幅 2~4 mm、裏面に腺点が疎らにある。托葉は大きく長さ 4~6 mm、著しく楕着し、披針形。花は黄色の蝶形花で長さ 8~10 mm、旗弁に淡紫色の脈が目立つ。豆果は長さ 1~2 cm、4~5 種子を含む節果で、種子ごとにくびれて小節果をつくり、小節果は楕円形で扁平、刺状の毛が密生する。
 分布域 (県外) : 四国 (高知県)、台湾、中国、東南アジア。
 県内の分布 : 石垣島?。
 生育環境 : 原野や道路端など比較的幅広い環境に生育するが、北限の四国では海岸の砂地に限られる。石垣島での生育環境は不明である。
 生育状況 : 松村 (1912) や牧野・根本 (1931)、根本 (1936) による日本産植物の名彙類ではスナジマメの分布地として琉球が挙げられているが、その典拠は不明である。Walker (1976) では唯一琉球産標本が引用され、そこではただ 1 点の標本「ISHIGAKI: Ishigaki City (Masamune, without date-TAI)」が引用されている。これ以降、石垣島が琉球唯一の産地とされるようになった。しかし、この標本の採集者による琉球の維管束植物誌 (Masamune, 1955) では、琉球の分布地として Amami-oshima と Okinawa があげられているだけで、Ishigaki はあげられていない。この標本が所蔵されているはずの TAI (台湾大学植物学系) で調査したが、この標本を確認することができなかった。また、日本国内の主要標本室でも、石垣島産はおろか奄美大島や沖縄島産の標本も所蔵されていない。
 学術的価値 : もし石垣に分布することが確実なら、台湾南部から石垣島から高知県と跳び跳びに分布していることになり、植物地理学的に興味深い種である。

文献 : 牧野富太郎・根本莞爾, 1931. 訂正増補, 日本植物総覧. 春陽堂, 東京, XIX+1936pp.
Masamune, G., 1955. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (V). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 3(1): 101-182.
松村任三, 1912. 帝国植物名鑑下巻頭花部後編. 丸善, 東京, 767pp.
根本莞爾, 1936. 日本植物総覧補遺. 春陽堂, 東京, X+1436pp.
Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 1159pp.

執筆者名 : 立石庸一*

和名 : フユザンショウ
分類 : ミカン科 (APG 科名: ミカン科)
学名 : *Zanthoxylum armatum* DC. var. *subtrifoliolatum* (Franch.) Kitam.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 1~4 m に達する常緑低木。葉は 3~7 枚の小葉からなり、葉軸には翼がある。葉柄の基部に 1 対の長さ 1.2~2 cm の刺がある。雌雄異株で、花は帯黄色。
分布域(県外) : 本州(関東以西)、四国、九州、朝鮮南部、台湾、中国。
県内の分布 : 沖縄島、久米島。
生育環境 : 低地林内に生える。
生育状況 : 近年全く確認されておらず、現状は不明。証拠標本も見つけることはできなかった。
減少の要因 : 低地林の伐採。もともと自生地と個体数が限られている。

執筆者名 : 新里孝和*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和名 : ホザキサルノオ(ウスバサルノオ)
分類 : キントラノオ科 (APG 科名: キントラノオ科)
学名 : *Hiptage benghalensis* (L.) Kurz
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑のつる性木本。葉は対生、卵形~卵状楕円形、長さ 8 cm、幅 4 cm になり、下面は有毛、葉柄は長さ 5 mm、有毛。総状花序は腋生または頂生し、花は白色、萼片は 5 個、長さ 4 mm、花弁は 5 個、長さ 13 mm、幅 9 mm、円状長楕円形、基部に長さ 2 mm の距があり、雄蕊は 10 個、花柱は 1 個。果実には 3 翼がある。
分布域(県外) : 台湾、中国南部、インド、マレーシア。
県内の分布 : 沖縄島北部。
生育環境 : 低地の常緑樹林に生え、高木に這い上がる。
生育状況 : 近年は全く確認されておらず、現状は不明。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。
備考 : 本種は国際自然保護連合(2000)により、世界の侵略的外来種ワースト 100 の 1 種に指定されている。

文 献 : IUCN, 2000. 100 of the World's Worst Invasive Alien Species. IUCN ISSG, New Zealand, 11pp.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣

和 名 : タイワンフシノキ (タイワンヌルデ)

分 類 : ウルシ科 (APG 科名: ウルシ科)

学 名 : *Rhus javanica* L. var. *javanica*

カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 高さ 4~8 m の落葉小高木。葉は奇数羽状腹葉で 9~13 個の小葉からなり、長さ 20~40 cm、葉柄には軟毛が密生する。小葉は楕円形で先は鋭く尖り、長さ 5~10 cm、縁に多数の鋸歯があり、裏面には軟毛が密生して黄褐色になる。雌雄異株で、花は小さく、枝先の大きな円錐花序に多数つき、黄白色で、花弁は 5 枚。果実は球形、橙赤色、径 5~6 mm。

分布域 (県外) : 台湾、中国、ヒマラヤ。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 低地の明るい林内や林縁にまれに生える。

生育状況 : 石垣島ではごく少数の個体が確認されているだけであり、西表島での現状は不明である。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : 自生地の開発と伐採。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執 筆 者 名 : 立石庸一*・伊波善勇*

和 名 : イヌソヨゴ

分 類 : モチノキ科 (APG 科名: モチノキ科)

学 名 : *Ilex kusanoi* Hayata

カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 落葉高木で全株無毛。枝は長枝と短枝があり、長枝は皮目が著しく、短枝は 1~4 葉、3~13 花をつける。葉は洋紙質、卵形、長さ 4~10 cm、幅 2.5~5 cm、鈍頭か短広鋭尖頭、鋭脚、鈍鋸歯縁、葉柄は長さ 5~8 mm。花序は短枝か長枝の基部に束生する。雄花は単生か 3 個の集散花序、花冠は径 4 mm。雌花は各束に 3 個。果実は球形、径 3 mm、赤熟する。

分布域 (県外) : 台湾 (蘭嶼、緑島)、フィリピン (バタン島)。

県内の分布 : 与那国島。

生育環境 : 近年は全く確認されておらず、現状不明。

生育状況 : 与那国島で 1917 年 10 月に島田彌市により採集された (島田, 1917; 佐々木, 1930)。また Masamune (1955) は与那国島のほか沖縄島にも産するとしているが、沖縄島産は未確認である。また、与那国からも島田 (1917) 以後まったく記録がない。

学術的価値 : 与那国島は標本による裏付けのある沖縄県唯一の産地となっている。フィリピン、台湾 (蘭嶼)、与那国島という特異な分布様式は、琉球列島の植物相の成立を論じるうえで重要である (初島・金井, 1974)。

備 考 : 島田 (1917) では *Ilex taiwaniana* Hayata タイワンイヌツゲとして収録されているが、この名は現在 *I. kusanoi* イヌソヨゴのシノニムとするのが定説である。佐々木 (1930) でも、イヌソヨゴとして島田の標本が引用されている。Hu (1953) は奄美大島のヒロハタマミズギ *I. poenantha* Koidz.

をイヌソヨゴのシノニムとした。それに従えば、奄美大島にもイヌソヨゴが分布することになる。しかし、Hatusima (1987) はヒロハタマミズキを中国の *I. macrocarpa* Oliver に合一した。山崎 (1989) や島袋 (1990 ; 1997) 、Ohba & Akiyama (1999) もこの意見に従っている。ヒロハタマミズキ *I. macrocarpa* は果実が直径 10 mm 前後と大きく、黒熟するなど、イヌソヨゴとは全くの別種である (Hatusima, 1987) 。島田の標本 (No. 15303, TAIF, 佐々木 (1930) による) を TAIF で確かめたところ、ヒロハタマミズキではないことが判ったので、ここでは従来の扱いに従っておく。

文献 : Hatusima, S, 1987. New or noteworthy plants from Japan. *J. Phytogeogr. Taxon.*, 35(2): 63-68.
 初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新発見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.
 Hu, S. Y., 1953. *Ilex* in Taiwan and the Liukiu Islands. *J. Arnold Arbor.*, 34: 138-162.
 Masamune, G., 1955. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (V). *Sci. Rep. Kanazawa Univ.*, 3(1): 101-182.
 Ohba, H. & S. Akiyama, 1999. Aquifoliaceae. “Flora of Japan, Vol. IIC”, K. Iwatsuki *et al.* (eds.), Kodansha, Tokyo, 82-92.
 佐々木舜一, 1930. 林業部腊葉館目録. 台湾総督府中央研究所林業部報告, (9) : 1-592, 台湾総督府中央研究所, 台北.
 島袋敬一, 1990. 琉球列島維管束植物集覧. ひるぎ社, 那覇, 794pp.
 島袋敬一, 1997. 琉球列島維管束植物集覧 [改訂版]. 九州大学出版会, 福岡, 855pp.
 島田彌市, 1917. 与那国島採集植物 (予報). 台湾博物学会会報, 7: 1-21.
 Walker, E. H., 1976. *Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands*. Smithsonian Institution Press, Washington, 1159pp.
 山崎 敬, 1989. モチノキ科. “日本の野生植物木本”, 佐竹義輔他 (編), 平凡社, 東京, 26-32.

執筆者名 : 新里孝和*・立石庸一*・横田昌嗣(追補)

和名 : ハマナツメ
 分類 : クロウメモドキ科 (APG 科名: クロウメモドキ科)
 学名 : *Paliurus ramosissimus* (Lour.) Poir.
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ: 絶滅危惧II類 (VU)

形態の特徴 : 高さ 5 m くらいに達する落葉低木。幼木は托葉の変化した刺がある。幼枝および花序に褐色の柔毛がある。葉は互生し、卵形または楕円形、長さ 5 cm くらい、3 行脈がある。花は腋生の短い集散花序につき、淡緑色で径約 5 mm。果実は倒円錐形の核果で、径 1~1.6 mm、白茶色の繊毛でおおわれ、上部の周縁に歯牙のある広い翼が発達し、中に 1 個の核を有する。
 分布域 (県外) : 本州 (静岡県以西) 、四国、九州、奄美大島、徳之島、朝鮮 (済州島) 、台湾、中国南部、インドシナ。
 県内の分布 : 沖縄島、宮古島、石垣島、西表島。
 生育環境 : 海岸林内に生える。
 生育状況 : 近年は全く確認されておらず、現状は不明。ヤエヤマハマナツメが本種と誤認された可能性がある。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。
 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和名 : ノブドウ

分類 : ブドウ科 (APG 科名: ブドウ科)
学名 : *Ampelopsis brevipedunculata* (Maxim.) Trautv. var. *heterophylla* (Thunb.) Hara
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 半木性の落葉つる植物。茎は長く伸長し、大きなものでは径 4 cm くらいになり、節で曲がり、ジグザグ状になる。葉は互生しほぼ円形、3~5 裂し、縁に鋸歯がある。巻きひげは葉と対生し、二又に分かれ、ブドウ属と違って節毎にでる。集散花序を葉と対生の位置にだし、帯緑黄色の小さな花を多数つける。液果には昆虫が入って虫えいになり、不規則な球形で白色から淡紫色を経て熟して淡青色になる。

分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、朝鮮、中国。

県内の分布 : 魚釣島。

生育環境 : 山地の自然林に生える。

生育状況 : 上陸して調査が行われた最後の調査 (1991 年) では、確認されていない。自生地では野生化したヤギが殖えており、食害が進んでいるものと思われる。

学術的価値 : 南九州まで分布し、琉球列島では魚釣島だけに分布し、植物地理学上重要である。

減少の要因 : 野生化ヤギによる食害。もともと自生地が限られている。

保全対策 : 野生化ヤギの駆除が急務である。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 初島住彦, 1991. 魚釣島の植物地理. 鹿児島県の植物 (鹿児島植物同好会誌), (11) : 62-66.
多和田眞淳, 1954. 尖閣列島の植物相について. 琉球大学農学部学術報告, 1: 75-89.

執筆者名 : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和名 : **アカミノヤブガラシ**
分類 : ブドウ科 (APG 科名: ブドウ科)
学名 : *Cayratia yoshimurai* (Makino) Honda
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年生のつる植物。茎は細く、巻きひげは葉と対生し、葉はとり足状の複葉で 5 個の小葉からなる。小葉は卵状披針形、長さ 4~9 cm、頂小葉の柄は長さ 1.5~4 cm、腋生の集散花序は長梗 (4~6 cm) を有し、多花をつける。液果はやや球形、紫赤色から黒色に熟し、径 7~12 mm、背面に溝がある。

分布域 (県外) : 九州、中之島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、中国。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地、丘陵地の林内に生える。

生育状況 : 奄美諸島では山地にやや普通に生えるが、沖縄県では自生地、個体数とも極めて少ない。近年は全く確認されていない。

減少の要因 : 自生地の伐採。ダム建設による自生地の水没。もともと自生地が限られている。

執筆者名 : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和名 : **サンカクヅル**
分類 : ブドウ科 (APG 科名: ブドウ科)

学 名 : *Vitis flexuosa* Thunb.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 落葉性のつる性木本。茎は細く線条があり、巻きひげは葉と対生し、2 岐する。葉は卵状三角形、浅心脚、長さ 4~10 cm。雌雄異株で、円錐花序は葉と対生し、長さ 4~7 cm、花序は赤褐色の綿くずのようなクモ毛で薄くおおわれる。花は小形で淡黄緑色。液果は球形、黒褐色に熟し、径 7 mm。
分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、朝鮮、中国、台湾 (蘭嶼)。
県内の分布 : 西表島。
生育環境 : 山地に生える。
生育状況 : 近年は全く確認されておらず、現状不明。
学術的価値 : 奄美大島から西表島、さらに台湾 (蘭嶼) と跳び跳びの分布をしており、植物地理学上興味深い。
減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地と個体数が限られている。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和 名 : フウセンアカメガシワ
分類 : アオギリ科 (APG 科名: アオイ科)
学 名 : *Kleinhovia hospita* L.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 情報不足 (DD)

形態の特徴 : 高さ 8~15 m に達する小高木。樹皮は平滑。葉は広卵形、長さ 10~20 cm、鋭尖頭、基部は心形、5~7 脈があり、葉柄は長さ 3~6 cm。円錐花序は疎らに花をつけ、長さ 20~40 cm。花は紅色、萼片は花弁より長い。果実は洋梨形で長さ 2~2.5 cm。
分布域 (県外) : 台湾、熱帯アジア、東部アフリカ。
県内の分布 : 宮古島?、石垣島?、西表島?、小浜島?、与那国島?
生育環境 : 低地林内に生える。
生育状況 : Masamune (1955) により記録されているが、琉球列島産の証拠標本は全く確認されていない。標本調査と野外調査でまったく確認されず、現状は不明。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : 木材として利用のための伐採。自生地の開発。もともと個体数が少ない。

文 献 : Masamune, G., 1955. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VI). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 3(2): 253-338.

執筆者名 : 横田昌嗣*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ミズマツバ
分類 : ミソハギ科 (APG 科名: ミソハギ科)
学 名 : *Rotala pusilla* Tulasne
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 高さ 3~10 cm の無毛の一年草。茎は赤色をおび、基部はふつう地を這い、分枝し、上部は斜めに立

ち上がる。葉は3~4個が輪生し、線形~長披針形、長さ6~10 mm、やや無柄。花は葉腋に1個ずつつき無柄、長さ1 mm、萼裂片は三角形、淡紅色で花弁はない。室果は球形、径1 mm。

- 分布域(県外) : 本州(中南部)、四国、九州、種子島、奄美大島、徳之島、朝鮮、台湾、中国、フィリピン、インド、アフリカ。
- 県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 水田や湿地に生える。
- 生育状況 : 現状は不明。
- 減少の要因 : もともと個体数が少ない。自生地の開発。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。**Rotala mexicana*として評価。
- 執筆者名 : 立石庸一*・豊見山元*

- 和名 : **ホザキキカシグサ(マルバキカシグサ)**
- 分類 : ミソハギ科 (APG科名: ミソハギ科)
- 学名 : *Rotala rotundifolia* (Roxb.) Koehne
- カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類 (EN)

- 形態の特徴 : 全株無毛の多年草。根茎は細く地面を這い、茎はほぼ直立して高さ10~30 cmになり、紫色を帯びる。葉は対生、楕円形~円形、長さ5~8 cm、全縁。花は茎の先に頂生する長さ3~6 cmの穂状花序につく。萼は広鐘型で、先は4片に切れ込む。花弁は倒卵形、淡紫色、長さ1.5~2 mm。果は楕円形、長さ2 mmほど。
- 分布域(県外) : 九州、台湾、中国南部、マレーシア、ヒマラヤ、インド。
- 県内の分布 : 沖縄島北~中部、石垣島?、西表島?。
- 生育環境 : 水田や湿地に生える。
- 生育状況 : 国頭、中頭から記録され(坂口, 1924)、以後、沖縄県の植物誌・目録類に所載され、さらにMasamune (1955)では石垣島や西表島までも分布域に挙げられているが、これらの記録を証拠づける標本は全く見出されていない。
- 備考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

- 文献 : Masamune, G., 1955. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VI). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 3(2): 253-338.
坂口總一郎, 1924. 沖縄植物總目録. 石塚書店, 首里, 152pp.

- 執筆者名 : 立石庸一*

- 和名 : **ミヤマハシカンボク**
- 分類 : ノボタン科 (APG科名: ノボタン科)
- 学名 : *Blastus cochinchinensis* Lour.
- カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II類 (VU)

- 形態の特徴 : 常緑低木で高さ2 mになる。小枝は細く円形で、黄色をおびた腺毛がある。葉は対生し膜質、葉身は披針形~楕円状卵形、長さ8~15 cm、幅2~5 cm、鋭尖頭、鋭脚、全縁、3~5行脈、上面は無毛、下面には黄色を帯びた腺毛がある。花序は葉腋に束生し、小数の花をつける。花は白色、径7~8 mm。

果実は、果、小形でつぼ状球形。

- 分布域（県外）： 屋久島、奄美大島、徳之島？、中国南部、インドシナ。
県内の分布： 沖縄島北部、石垣島？、西表島。
生育環境： 山地林内に生える。
生育状況： 沖縄島からは、田代安定が1887年に採集した国頭産の標本に基づいて報告された（松村, 1898; Ito & Matsumura, 1899）。Masamune (1955) は沖縄島の他、石垣島および西表島も分布域に挙げ、Walker (1976) は1927年に採られた国頭の標本と1940年に西表島で正宗により採られた標本とを引用している。しかし戦後は確認されておらず、現状は不明である。
学術的価値： 大陸要素の一つで、沖縄島での分布は遺存的なものと考えられる。沖縄の植物相の成立史を考察する上で重要な種である。
減少の要因： もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。
- 文献： Ito, T. & J. Matsumura, 1899. Tentamen Florae Lutchuensis. Sectio prima. Plantae Dicotyledoneae polypetalae. J. Coll. Sci. Univ. Tokyo, 12: 263-541.
Masamune, G., 1955. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VI). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 3(2): 253-338.
松村任三, 1898. 台湾植物雑記. 東洋学芸雑誌, (196) : 1-3.
Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 1159pp.
- 執筆者名： 新城和治*・立石庸一*

-
- 和名： オオバチドメ
分類： セリ科 (APG科名: セリ科)
学名： *Hydrocotyle nepalensis* Hook. f.
カテゴリー： 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー： 該当なし

- 形態の特徴： 常緑の多年草。茎は匍匐し、先は斜上し、高さ5~25 cm、数葉を互生する。葉は円状腎形、径3~6 cm、両面とも有毛、5~9浅裂し、葉縁に重鋸歯があり、葉柄は5~15 mm。散形花序は茎の上部に1~数個が束生し、長さ2.5 cm。果実は15~40個。
- 分布域（県外）： 本州、四国、九州、屋久島、奄美大島、徳之島、朝鮮、中国、インド、インドシナ、ネパール、インドネシア、ハワイ、アフリカ東部、オーストラリア。
県内の分布： 沖縄島。
生育環境： 山地の常緑樹林の陰湿な林床に生える。奄美諸島では雲霧帯に生える。
生育状況： 初島・天野(1994) では沖縄島に産することが記されているが、現状は不明。
減少の要因： もともと自生地と個体数が限られる。

- 文献： 初島住彦・天野鉄夫, 1994. “増補訂正琉球植物目録”, 沖縄生物学会, 西原町, 159.

- 執筆者名： 横田昌嗣

-
- 和名： ホウライアオカズラ
分類： ガガイモ科 (APG科名: キョウチクトウ科)
学名： *Gymnema sylvestre* (Retz.) Schult.

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 情報不足 (DD)

形態の特徴 : 常緑の藤本。小枝は褐色で、はじめは圧毛が密布しているが、後に無毛に近くなり、皮目が目立つ。葉は倒卵状長楕円形、長さ3~6 cm。葉腋につく集散花序に10花ほどをつける。花冠は径約3 mm、5深裂する。

分布域(県外) : 台湾、中国南部、インドシナ。

県内の分布 : 石垣島、与那国島。

生育環境 : 低地林や海岸林内に生える。台湾では海岸近くの低木林の樹上や岩上に這うようにして生育する様子が確認されているが、沖縄県での生育環境は不明。

生育状況 : 現地調査では、確認することはできなかった。標本調査でも、確実な野生と思われる沖縄県産の標本は確認されていない。

減少の要因 : 海岸林や低地林の開発。もともと自生地と個体数が少ない。薬用の採集。

執筆者名 : 立石庸一*・山城 考*・横田昌嗣(追補)

和名 : タイワンキジョラン (イリオモテキジョラン)

分類 : ガガイモ科 (APG科名: キョウチクトウ科)

学名 : *Marsdenia formosana* Masam.

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 情報不足 (DD)

形態の特徴 : つる性の低木。小枝は淡灰色で無毛。葉は対生、多肉質にならず、卵形、長さ6~7 cm。腋生の集散花序には長さ3 cm程の柄がある。花冠はやや鐘状、5深裂、長さ径とも約5 mm、花筒は短く喉部は無毛。

分布域(県外) : 台湾。

県内の分布 : 西表島、与那国島?。

生育環境 : 山地林内に生える。

生育状況 : 西表島では、近年はまったく確認されておらず、現状は不明。おそらく本種と思われるものが、最近与那国島で確認されており、今後の研究が必要である。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内では唯一の産地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

執筆者名 : 立石庸一*・山城 考*・横田昌嗣(追補)

和名 : シソノミグサ

分類 : アカネ科 (APG科名: アカネ科)

学名 : *Knoxia corymbosa* Willd.

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 一年草。茎は直立して細く、高さ1 mくらいに達し、全体に細毛がある。葉は対生し、線状披針形~卵状長楕円形で、長さ7~12 cm、幅1~3 cm、毛がある。花は葉腋の集散花序につき、白色、花冠は長さ2.5~4 mm、花筒の内面には毛がある。

分布域(県外) : 台湾、中国南部、インド、インドシナ、マレーシア、オーストラリア。

県内の分布 : 石垣島。

- 生育環境 : おそらく二次林の明るい林床か、日当たりのよい草地に生える。
生育状況 : 石垣島で1962年に採集された標本が東北大学理学部標本庫 (TUS) に所蔵されているが、近年はまったく確認されていない。
学術的価値 : 分布域の北限で、日本で唯一の産地である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : ハリザクロ (ハリクチナシ)
分類 : アカネ科 (APG科名: アカネ科)
学名 : *Randia spinosa* (Thunb.) Poir.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 情報不足 (DD)

形態の特徴 : 高さ8mに達する落葉性の小高木。若枝には長さ5~10mmの1対の刺があり、小枝は有毛。葉は対生、楕円形~狭倒卵形、薄い革質、長さ2.5~6cm、幅1.5~3cm、鋭尖頭、鋭脚、全縁、側脈は4~5対、葉柄は長さ3~5mm、托葉は卵形。花は葉腋に単生し、白色または後に緑黄色を帯び、萼は5個、卵形、長さ6~9mm、有毛、花冠は径1.2~1.8cm、有毛、5裂し、裂片は卵形~長楕円形。液果は球形~卵円形、長さ2~4cm、黄熟し、外果皮は厚い。

分布域(県外) : 台湾、中国南部、インド、マレーシア、アフリカ東部。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 低地の常緑樹林に生える。

生育状況 : Matsumura (1901) は、*R. dumetorum* Lam. の学名で八重山産の標本(田代安定採集)と石垣島産の標本(S. Tanaka No. 285)を引用して、琉球から本種を記録している。しかし、形態の記載では、萼は長さ12mmでやや有毛、花冠は長さ5~6mmと書かれており、必ずしも本種の特徴と一致しない。その後の野外調査では見つかっていないことから、現状は不明。石垣島に産するヒジハリノキ(シナミサオノキ)を誤認している可能性も考えられる。

学術的価値 : 分布域の北限。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : Masamune (1955) には、産地は不明であるが、本種の詳細な線画が掲載されている。

- 文献 : Masamune, G., 1955. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VII). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 4(1): 45-134.
Matsumura, J., 1901. Notulae ad plantas asiaticas orientales. Bot. Mag. Tokyo, 15: 2-4.

執筆者名 : 横田昌嗣

-
- 和名 : カワリバアサガオ
分類 : ヒルガオ科 (APG科名: ヒルガオ科)
学名 : *Ipomoea polymorpha* Romer et Schult.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 全株粗毛をもつ一年草。茎は直立し高さ10~45cmで分枝する。葉は卵状長楕円形、長さ2.5~3cm、鋸歯縁または羽状または掌状に3~7浅~深裂するなど変化が多い。花は葉腋に単生、花冠は鐘形で紅紫色。

分布域（県外）：台湾、中国南部、インド、インドシナ、マレーシア、オーストラリア。
 県内の分布：宮古島、伊良部島、石垣島、西表島、与那国島。
 生育環境：低地の日当りのよい草地に生える。
 生育状況：現状は不明。
 学術的価値：分布域の北限である。
 減少の要因：低地の開発。もともと個体数が少ない。
 備考：竹富町希少野生動植物種（2017年）。

執筆者名：立石庸一*・新納義馬*・横田昌嗣(追補)

和名：マルバノホロシ
 分類：ナス科（APG科名：ナス科）
 学名：*Solanum maximowiczii* Koidz.
 カテゴリー：情報不足（DD） 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：多年草。茎はつる状で全株無毛。葉は披針状長楕円形、長さ5~13 cm、幅1.5~4 cm。集散花序は茎の節間または葉の反対側につき、疎らに花をつける。花冠は深く5裂し淡紫色、径1 cm程、裂片は反り返る。果実は球形の液果で径7~10 mm、赤く熟す。
 分布域（県外）：本州（関東以西）、四国、九州、奄美大島、朝鮮、中国。
 県内の分布：沖縄島北部。
 生育環境：山地の林縁部に生える。
 生育状況：自生地はごく限られており、個体数は少ない。
 減少の要因：森林伐採。もともと自生地と個体数が限られている。

執筆者名：立石庸一*・山城 考*

和名：コフジウツギ（ウラジロフジウツギ）
 分類：フジウツギ科（APG科名：ゴマノハグサ科）
 学名：*Buddleja curviflora* Hook. et Arn.
 カテゴリー：情報不足（DD） 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：半常緑の低木。茎は高さ1~2 mになり、断面は円形で稜を欠く。葉は卵形~卵状披針形、長さ5~14 cm、幅1.5~6 cm、下面は灰白色、綿毛があり、灰緑色、葉柄は長さ1 cm。穂状花序は頂生し、長さ10~30 cm、花冠は4裂し、長さ1.5 cm、花冠は4裂し、裂片は長さ2.5 mm、萼は長さ3 mm、外面に細密毛をふく。室果は楕円形、長さ5 mm。
 分布域（県外）：四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島。
 県内の分布：沖縄島。
 生育環境：沖縄島では市街地や墓地に生える（山崎, 1965）。奄美大島では海岸近くの原野や林縁に生える。
 生育状況：琉球大学理学部の植物標本室（RYU）には、沖縄島的那覇市首里崎山町で採集された標本が2枚（多和田眞淳 RYU No. 28126, Aug. 1936, fl. ; 初島住彦 No. 33998, Oct. 1, 1972, st.）ある。多和田 RYU No. 28126 のラベルには「原野に産する」と書かれているが、初島 No. 33998 のラベルには「多和田氏の家のすぐ近くに1本だけ野生し、絶滅の恐れあり」と書かれている。自生地の現状は確認されていないが、那覇市の市街地にあることから開発により既に失われた可能性が高い。人家の近

くであり、栽培品が逸出した可能性も指摘されている（初島・天野，1958；山崎，1965）。現状は不明。

減少の要因：もともと自生地と個体数が少ない。

備考：若枝に灰白色の密毛をふくものをウラジロフジウツギ f. *nerenifera* (Makino) Yamazaki として区別する意見があり、鹿児島県本土から奄美大島までのものはウラジロフジウツギ型であるが、沖縄島の標本は四国や九州に分布する基本品種のコフジウツギ型である（山崎，1965）という。奄美大島でも少なく、絶滅寸前である。

文献：初島住彦・天野鉄夫，1958. 沖縄植物目録，琉球大学研究普及部，那覇市，83.
山崎 敬，1965. コフジウツギの学名. 植物研究雑誌，40: 159-160.

執筆者名：横田昌嗣

和名：ヒメクチバシグサ

分類：ゴマノハグサ科 (APG 科名: アゼナ科)

学名：*Lindernia tenuifolia* (Colsm.) Alston

カテゴリー：情報不足 (DD) 環境省カテゴリー：情報不足 (DD)

形態の特徴：一年草。茎は細く、斜上して長さ7~15 cmになる。葉は対生して柄がなく、線形~線状披針形、長さ5~17 mm、幅1~2 mm、基部はやや茎を抱く。花は茎上部の葉腋に単生、小花柄は長さ2~5 mmで、花時には直立するが、果時には開出さらには下向する。萼は鐘形、深く5裂、花冠は2唇形、紫色、長さ3~4 mm、雄蕊は2本、仮雄蕊も2本。蒴果は細長い円筒形で先はとがり、長さ4~6 mm、直径0.7~1 mm、残存している萼より際立って長い。

分布域(県外)：台湾、中国南部、ベトナム、カンボジア、マレーシア、インド、スリランカ。

県内の分布：宮古島、石垣島、西表島。

生育環境：湿地や水田に生える。

生育状況：初島・天野(1958)が石垣島・西表島を分布域として掲げたのが、琉球におけるヒメクチバシグサの分布に関する報告の最初と思われる。しかしその根拠となる標本・資料はなく、両島からはその後の記録は全くない。ところが宮古島では既に1920年代に採集された標本のあることがわかった。ただし、この島でもその後は全く確認されていない。

学術的価値：分布域の北限である。

備考：上の分布報告の著者ら自身が、後の植物目録で「疑問品」としている（初島・天野，1994）が、上述のように宮古島からの採品があるので、琉球での分布は確実のようである。この標本は坂口總一郎により、1922年に採集された2点である。ところがその頃はヒメクチバシグサと同定できなかったのか、坂口(1924)には収録されていない。竹富町希少野生動植物種(2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献：初島住彦・天野鉄夫，1958. 沖縄植物目録. 琉球大学研究普及部，那覇市，192pp.
初島住彦・天野鉄夫，1994. “増補訂正琉球植物目録”，沖縄生物学会，西原町，198.
坂口總一郎，1924. 沖縄植物總目録. 石塚書店，首里，152pp.

執筆者名：立石庸一*

和名：ケウリクサ

分類：ゴマノハグサ科 (APG 科名: アゼナ科)

学 名 : *Lindernia viscosa* (Hornem.) Bold.

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。茎は長さ 5~13 cm で斜上して密に毛が生え、断面は 4 角形。葉は対生して 1~4 mm の柄があり、卵形で長さ 1~2.5 cm、幅 0.6~1.5 cm、両面無毛。花序は茎の先に頂生し、長さ 1~2 cm、4~8 花をつける。萼は鐘形で 5 片に深く切れ込み、小花柄とともに腺毛がある。花冠は 2 唇形、淡紫色、長さ約 5 mm。雄蕊は 4 本あり、全て稔性がある。朔果は楕円状球形、長さ 2~2.5 mm で、残存する萼とほぼ同長かやや長い。種子は楕円形、長さ約 0.3 mm、褐色に熟し、小穴が散在する。

分布域 (県外) : 台湾、フィリピン、中国南部、ベトナム、カンボジア、マレーシア、タイ、ミャンマー、インド、インドネシア、ニューギニア。

県内の分布 : 与那国島?。

生育環境 : 湿地に生える。

生育状況 : Masamune (1955) による与那国島での分布の記録は、佐々木 (1930) による台湾総督府林業部腊葉館目録に引用された島田彌市採集の標本に基づいている。この標本はその後確認されておらず、またそれ以外の標本も与那国島から採られていない (Walker, 1976)。

備考 : 琉球の植物誌や目録類は Masamune (1955) に基づいて、「島田氏による」という注とともに与那国島を分布域に挙げている。しかし、Walker (1976) はこの植物を沖縄県のフロラからはずし、初島・天野 (1994) も、琉球植物目録の増補訂正版からこの種を除外している。最終的な判断は島田の標本の再検討に待たねばならないが、与那国島での分布には疑問がある。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1994. “増補訂正琉球植物目録”, 沖縄生物学会, 西原町, 393pp.

Masamune, G., 1955. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VII). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 4(1): 45-134.

佐々木舜一, 1930. 林業部腊葉館目録. 台湾総督府中央研究所林業部報告, (9) : 1-592, 台湾総督府中央研究所, 台北.

Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 1159pp.

執筆者名 : 立石庸一*

和 名 : オオナンバンギセル

分類 : ハマウツボ科 (APG 科名: ハマウツボ科)

学 名 : *Aeginetia sinensis* G. Beck

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。無葉緑の寄生植物。茎は短く、少数の鱗片をつけ、総状に数花をつける。小花梗は長さ 20~40 cm、花を単生し、萼は長さ 3~5 cm、鈍頭、淡紅紫色、花冠は長さ 4~6 cm、紅紫色、やや 2 唇形、5 裂し、花冠裂片の辺縁には細歯がある。室果は球形、長さ 8~10 mm。ナンバンギセルに似るが、萼はより長く、花冠裂片の縁に細歯牙がある点で区別できる。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、奄美大島、喜界島、台湾、中国。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 草原や林縁に生えるイネ科植物などの根に寄生する。

生育状況 : Masamune (1955) により沖縄島に産すると書かれているが、標本は引用されておらず、野外調査でも確認されていない。現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。

文 献 : Masamune, G., 1955. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VII). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 4(1): 45-134.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣

和 名 : ヤブタバコ

分 類 : キク科 (APG 科名: キク科)

学 名 : *Carpesium abrotanoides* L.

カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : やや大型の一年草。茎は高さ 50~100 cm、太くて丸く、上部は数本の長い枝を開出し、それぞれの枝は更に枝を分けて、その葉腋に頭花をつける。下部の葉は広楕円形で長さ 20~28 cm、幅 8.5~15 cm、基部は広い翼のある柄となり、質は薄く両面に短毛があり、下面に腺点がある。頭花は柄がなく、葉腋に 1 個ずつ下向きにつき、総苞は鐘球形、片は 3 列で瓦重ね状にならび、外片は短く円頭。瘦果は長さ 3.5 mm、先はくちばし状となって粘液を出し、臭気がある。

分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島 (宝島)、奄美大島、徳之島、沖永良部島、朝鮮、中国、ヒマラヤ。ヨーロッパおよび西アジアに帰化。

県 内 の 分 布 : 沖縄島南部、久米島、与那国島。

生 育 環 境 : 山野や家の近くの藪に生える。

生 育 状 況 : 1938 年に那覇市久米付近で記録されて以来、確認されていない (初島・天野, 1958; Walker, 1976)。一時的な帰化による生育の可能性も考えられる。1967 年に久米島で採集された標本があるが花も実もついていないので同定に若干の疑問が残る。与那国島の目録にも挙げられているが (新・新納, 1969; 藤本, 1972)、全く確認されていない。

学 術 的 価 値 : 分布域のほぼ南限である。

備 考 : 久米島の標本は鹿児島大学 (KAG) にあるが、ロゼットだけなので同定が難しい。

文 献 : 新 敏夫・新納義馬, 1969. 与那国島の植物相. 鹿児島大学理科報告, (18) : 71-111.

藤本義昭, 1972. 与那国島の生物 (1). 甲南出版, 神戸, 108pp.

初島住彦・天野鉄夫, 1958. 沖縄植物目録. 琉球大学研究普及部, 那覇市, 192pp.

Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 1159pp.

執 筆 者 名 : 立石庸一*

和 名 : ヤマヒヨドリバナ (ヤマヒヨドリ)

分 類 : キク科 (APG 科名: キク科)

学 名 : *Eupatorium variable* Makino

カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 多年草。茎は疎らに分枝し、高さ 30~100 cm に達する。葉は対生し、卵形~長楕円形で基部は切形またはやや心形になり、長い葉柄に続く。頭花は枝の先に集まって頂生の散房花序をつくる。

分布域 (県外) : 四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、喜界島。

県 内 の 分 布 : 久米島。

生育環境 : 近海地の草地や道路の法面に生える。
 生育状況 : 久米島の現状は不明。生育地は限られ、個体数は少ないものと思われる。
 学術的価値 : 分布域の南限である。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。低地部の開発。
 備考 : 奄美諸島ではやや普通に生える。

執筆者名 : 横田昌嗣*・宮城朝章*

和名 : **オグルマ**
 分類 : キク科 (APG 科名: キク科)
 学名 : *Inula britannica* L. subsp. *japonica* (Thunb.) Kitam.
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年草。茎は高さ 20~60 cm に達し、上方で疎らに分枝する。葉は互生し、広披針形~長楕円形、基部は無柄または半ば茎を抱く。頭花は黄色で直径 3~4 cm、枝先に 1 個ずつつく。
 分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、朝鮮、中国。
 県内の分布 : 伊平屋島、伊江島、沖縄島。
 生育環境 : 日当たりのよい原野や水田の畦などの湿った所に生える。
 生育状況 : 沖縄島では 1947 年に採集されているが、近年はまったく確認されていない。伊平屋島と伊江島の現状は不明。既に絶滅した可能性が高い。
 学術的価値 : 琉球列島では限られた分布を示し、植物地理学上貴重である。
 減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られている。

文献 : 池原直樹, 1989. 沖縄植物野外活用図鑑 第 9 巻. 新星図書出版, 75.
 仲田栄二, 1974. 伊平屋・伊是名諸島の植物. “伊平屋列島文化誌”, 仲田清英(編), 41-107.

執筆者名 : 立石庸一*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)

和名 : **タカサゴソウ**
 分類 : キク科 (APG 科名: キク科)
 学名 : *Ixeris chinensis* (Thunb. ex Murray) Nakai subsp. *strigosa* (Lev. et Vaniot) Kitam.
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 高さ 20~40 cm になる多年草。根生葉はへら状披針形で、羽状に裂けることが多い。頭花は枝の先につき、白色で淡紫色のふちどりがある。
 分布域(県外) : 本州、四国、九州、朝鮮、台湾、中国。
 県内の分布 : 沖縄島。
 生育環境 : 日当たりのよい原野に生える。
 生育状況 : 現状は不明。
 減少の要因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。

執筆者名 : 立石庸一*・池原直樹*

和名 : ヨメナ
分類 : キク科 (APG 科名: キク科)
学名 : *Kalimeris yomena* Kitam.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし
分布域 (県外) : 朝鮮 (済州島)、本州 (東海以西)、四国、九州、奄美大島、沖縄良部島。
県内の分布 : 伊平屋島?、沖縄島北部?、石垣島。
生育環境 : 草地に生える。
生育状況 : 石垣島で1920年代に採られた標本があるだけで、それ以外は3島とも全く確認されておらず、現状は分からない。現在普通に見られるのは、外来種のインドヨメナ *K. indica* (L.) Sch. -Bip. である。
減少の要因 : もともと自生地が限られている。外来種との競合。
備考 : 坂口 (1924) が沖縄島国頭と伊平屋島を挙げて沖縄植物總目録に所載したが、沖縄県からの初めての報告と思われる。このうち伊平屋島ではその後全く追認されていないが、新納・新城 (1959) に採録されたため、その後のこの島や琉球の植物誌・目録類で分布地として挙げられてきた。一方、国頭の方はその後全く採り上げられておらず、もちろん確認もされていない。その後、Kitamura (1937) は *Compositae Japonicae* で、石垣島産の標本 (T. Iwasaki, 30 Dec. 1922, KY0) を引用したが、これが標本によって分布が確認される沖縄県の唯一の記録である。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : Kitamura, S., 1937. *Compositae Japonicae, pars prima*. Mem. Coll. Sci. Kyoto Imper. Univ., ser. B, 13: 1-421.
新納義馬・新城和治, 1959. 伊平屋・伊是名諸島の植物. 琉球大学文理学部紀要 (理学編), (3) : 81-105.
坂口總一郎, 1924. 沖縄植物總目録. 石塚書店, 首里, 152pp.

執筆者名 : 立石庸一*・横田昌嗣(追補)

和名 : コメナモミ
分類 : キク科 (APG 科名: キク科)
学名 : *Siegesbeckia orientalis* L. subsp. *glabrescens* (Makino) Kitam.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし
分布域 (県外) : 朝鮮、北海道、本州、四国、九州、奄美大島、台湾、中国。
県内の分布 : 沖縄島北部。
生育環境 : 山地。
生育状況 : 沖縄島北部で採られた標本を基に琉球での分布が報告されているが (Kitamura, 1942)、以後全く確認されていない。また、Masamune (1955) は沖縄、宮古、石垣、西表の各島を挙げているが、上記以外は全く確認されていない。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。
学術的価値 : 大陸系の植物で琉球列島に点々と遺存しているものの一つと考えられる。

文献 : Kitamura, S., 1942. *Compositae Japonicae, pars tertia*. Mem. Coll. Sci. Kyoto Imper. Univ., ser. B, 16(3): 155-292.
Masamune, G., 1955. *Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VII)*. Sci. Rep. Kanazawa Univ., 4(1): 45-134.

執筆者名 : 立石庸一*・横田昌嗣(追補)

和名 : カンサイタンポポ

分類 : キク科 (APG 科名: キク科)

学名 : *Taraxacum japonicum* H. Koidz. (= *T. liukiense* H. Koidz. ; *T. okinawense* H. Koidz. ; *T. okinawense* var. *ecorniculatum* H. Koidz.)

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

分布域 (県外) : 本州 (長野県以西)、四国、九州、トカラ列島 (宝島)。

県内の分布 : 沖縄島、久米島。

生育環境 : 低地の草原に生える。

生育状況 : 1930 年代に沖縄島や久米島で採集されているが、以後は生育を確認するために十分な情報は得られていない。セイヨウタンポポ *T. officinale* Weber、シロバナタンポポ *T. albidum* Dahlst.、アカミタンポポ *T. laevigatum* DC. のような帰化植物に席捲されてしまった可能性がある。

学術的価値 : 分布の南限に当たる。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。帰化種との競合・交雑・繁殖干渉。

備考 : 久米島産の標本に基づいてリュウキュウタンポポ *T. liukiense* H. Koidz. (Koidzumi, 1933) が、沖縄島からオキナワタンポポ *T. okinawense* H. Koidz. (Koidzumi, 1936) とその変種ツノナシオキナワタンポポ var. *ecorniculatum* H. Koidz. (Koidzumi, 1936) が記載されたが、これらは現在すべてカンサイタンポポのシノニムとされている (Kitamura, 1957)。

文献 : Kitamura, S., 1957. Compositae Japonicae 6. Mem. Coll. Sci. Kyoto Imper. Univ., ser. B, 24(3): 42.

Koidzumi, H., 1933. *Taraxacum* novum Japonicum (I). J. Jpn. Bot., 9(6): 350.

Koidzumi, H., 1936. *Taraxacum* novum Japonicum (IV). J. Jpn. Bot., 12(9): 627.

Morita, T., S. P. J. Menken & A. A. Sterk, 1990. Hybridization between European and Asian dandelions (*Taraxacum* section *Ruderalia* and section *Mongolica*). New Phytol. 114: 519-529.

Takakura, K.-I., T. Nishida, T. Matsumoto & S. Nishida, 2009. Alien dandelion reduces the seed set of a native congener through frequency-dependent and one-sided effects. Biological Invasions, 11: 973-981.

執筆者名 : 立石庸一*・横田昌嗣(追補)

和名 : コバノヒルムシロ (トゲミズヒキモ)

分類 : ヒルムシロ科 (APG 科名: ヒルムシロ科)

学名 : *Potamogeton cristatus* Regel et Maack

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧II類 (VU)

形態の特徴 : 淡水性の多年草。水中茎は細く、多数分枝する。水中の葉と水面に浮く葉とは形が異なり、沈水葉は狭線形で長さ 4~6 cm、浮葉の葉身は長楕円形で長さ 2~2.5 cm。水面上に長さ 1 cm 近い穂状花序を出し、花被のない黄色を帯びた小さな花を多数つける。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、朝鮮、台湾、中国。

県内の分布 : 伊平屋島、与那国島。

生育環境 : 淡水中に生える。

生育状況 : 現状は不明。ミズヒキモ *P. octandrus* Poir. var. *miduhikimo* (Makino) Hara を誤認した可能性がある。

減少の要因 : 沼、池、水田の減少。

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : オオハマオモト

分類 : ヒガンバナ科 (APG 科名: ヒガンバナ科)

学名 : *Crinum asiaticum* L. var. *asiaticum*

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は長さ 60 cm になり、葉を束生する。葉は披針形、鋭尖頭、長さ 60~180 cm、幅 12~15 cm。散形花序は腋生し、数個出て、長さ 90~120 cm、多花を生じ、仏炎苞で包まれる。花は白色、花筒は長さ 7.5~15 cm、花冠裂片は線状、長さ 9 cm。雄蕊は深紅色、花柱は暗赤色。

分布域(県外) : インド、インドシナ、マレーシア、インドネシア、太平洋諸島。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 海岸の砂浜に生える。

生育状況 : 初島・天野 (1994) によって西表島に産することが記されているが、現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 広義のハマオモトは熱帯アジアに広く分布し、インドから太平洋諸島にかけて分布する基本変種のオオハマオモト var. *asiaticum*、琉球列島、台湾、中国南部に分布し、葉縁が波状となり、花被片が基本変種より長いタイワンハマオモト var. *sinicum* Baker、日本本土の暖地に分布し、葉幅が狭く、花被片が小さいハマオモト var. *japonicum* Bakerなどを区別する見解 (Baker, 1888) がある一方、これらを区別しない見解もある。ハマオモトは、気候条件や土壌条件で生育状態が大きく変化し、植物体や花の各部分の大きさは同一地域であっても変異が大きい。沖縄県で最も気候が温暖な南琉球の特有機物が多く漂着した海岸では、大きく生長することがある。これらの種内分類群が遺伝的な違いに基づくものであるかどうかは、今後再検討する必要がある。竹富町希少野生動物植物種 (2017 年)。

文献 : Baker, J. G., 1888. Handbook of the Amaryllideae including the Alstroemeriae and Agaveae. George Bell & Sons, London, 216pp.

初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 316.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : キリシマシャクジョウ

分類 : ヒナノシャクジョウ科 (APG 科名: ヒナノシャクジョウ科)

学名 : *Burmannia liukuensis* Hayata

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 腐生の一年草。茎は単一まれに 1 分枝し白色で細く、高さ 5~14 cm、小さな三角形の鱗片葉を数個散生する。まばらな 2 枝集散花序は頂生し、花は 3~8 (まれに 1) 個つき、帯白色、卵状円筒形、長さ 3~4 mm、3 個の狭い翼があり、3~5 mm の細い柄がある。萼裂片は広三角形、長さ 0.5 mm、鈍頭、花弁は円形でごく小さい。葯隔の基部に下垂する距がある。果実は球形、径約 3 mm。

分布域(県外) : 四国、九州南部、種子島、奄美大島?。

県内の分布 : 沖縄島北部。

- 生育環境 : 山地の腐植質の溜まった林床に生育する。
生育状況 : 種子島から記載され (Hayata, 1915)、沖縄県では国頭に産するとされている (坂口, 1924) が、標本や生育地は確認されておらず、現状不明。
学術的価値 : 分布域の南限である。

- 文献 : Hayata, B., 1915. *Icones Plantarum Formosananarum*, Vol. 5. 358pp.
坂口總一郎, 1924. 沖縄植物總目録. 石塚書店, 首里, 152pp.

執筆者名 : 新里孝和*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : **アオコウガイゼキショウ**
分類 : イグサ科 (APG 科名: イグサ科)
学名 : *Juncus papillosus* Franch. et Sav.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 多年草。茎は円筒状で直立し、高さ 20~30 cm、2~3 個の葉をつける。葉は全て単管状で茎葉で茎より短い。頭花は 2~3 花からなり、これが茎頂に多数集まる。
分布域 (県外) : シベリア東部、北海道、本州、四国、九州、朝鮮、中国。
県内の分布 : 沖縄島北部
生育環境 : 水田や湿地に生える。
生育状況 : 名護市 (名護町寄合原) で 1938 年に採集され、大井次三郎によって本種と同定された標本 (金城鉄郎 No. 508) が琉球大学理学部の標本室 (RYU) に所蔵されている。これは Walker によりハリコウガイゼキショウ *J. wallichianus* Laharpe と同定され、Walker (1976) で引用されている。またこの標本をタチコウガイゼキショウ *J. krameri* Franch. et Sav. と同定する見解もある。本種とその近縁種は、形態変異が著しいうえ、雄蕊の数などの特徴で識別するため、状態の良い標本が得られないと判断は難しい。
学術的価値 : 分布域の南限である。
減少の要因 : もともと自生地が限られている。湿地・水田の埋立。自生地の開発。

- 文献 : Walker, E. H., 1976. *Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands*. Smithsonian Institution Press, Washington, 302.

執筆者名 : 横田昌嗣

-
- 和名 : **クロホシクサ**
分類 : ホシクサ科 (APG 科名: ホシクサ科)
学名 : *Eriocaulon parvum* Koern.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

-
- 和名 : **ヌカボ**
分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学名 : *Agrostis exarata* Trin. subsp. *nukabo* (Ohwi) T. Koyama
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 繊細な多年草で、根茎は発達しない。稈は細く高さ 30~70 cm になる。葉は長さ 7~15 cm、幅 1.5~5 mm。花序の枝は稈に圧着するため細く見えて先は傾く。小穂は長さ 2 mm くらい、緑色で光沢がある。
- 分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、トカラ列島、奄美大島、喜界島、沖永良部島、朝鮮、台湾、中国、フィリピン。
- 県内の分布 : 沖縄島、魚釣島。
- 生育環境 : 平地および丘陵地に生える。
- 生育状況 : 現状は不明。
- 減少の要因 : もともと自生地が少ない。自生地の開発。野生化ヤギによる食害(魚釣島)。
- 保全対策 : 魚釣島では野生化ヤギの駆除が急務である。

執筆者名 : 立石庸一*・池原直樹*

-
- 和名 : **タイワンイヌビエ**
- 分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
- 学名 : *Echinochloa glabrescens* Munro ex Hook. f.
- カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ: 該当なし

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

-
- 和名 : **ヒメスズメガヤ**
- 分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
- 学名 : *Eragrostis pilosissima* Link
- カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ: 該当なし

-
- 和名 : **ウンヌケモドキ**
- 分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
- 学名 : *Eulalia quadrinervis* (Hackel) O. Ktze.
- カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ: 準絶滅危惧 (NT)

- 形態の特徴 : 帰化種のウンヌケ *Eulalia speciosa* (Debeaux) O. Ktze. に似ているが、茎の基部は赤褐色を帯び、黄褐色の毛を密生する葉鞘がない。
- 分布域(県外) : 本州(東海以西)、四国、九州。
- 県内の分布 : 西表島。
- 生育環境 : 原野に生える。
- 生育状況 : 1887 年に田代安定により採集され、西表島から 1923 年に記録されたが、以後確認されていない (Walker, 1976)。
- 学術的価値 : 分布の南限。
- 減少の要因 : 原野の開発。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press,

Washington, 1159pp.

執筆者名 : 立石庸一*

和名 : コバノウシノシツペイ
分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学名 : *Hemarthria compressa* (L. f.) R. Br.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年草で根茎は匍匐する。稈は平滑無毛で、斜上または傾伏、上方は直立して、高さ 70~100 cm になる。葉は線形、7~15 cm、辺縁を除き無毛、鞘の口部は有毛。穂状花序は単立または束生して、長さ 5~8 cm、花軸は太くてところどころ凹み、小穂とその柄は花軸の凹みにはまり込み、花序は全体として太い鞭状の花序となる。

分布域(県外) : 九州南部、種子島、屋久島、台湾、中国南部、インドシナ、インド。

県内の分布 : 沖縄島南部、西表島、小浜島。

生育環境 : 低地原野に生える。

生育状況 : 沖縄島では、1974年に南城市(当時佐敷村)で採集された標本があるが、現在は見つからない。他の島の現状は不明。

減少の要因 : 草原の開発および道路工事。

備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : 平田義浩, 1989. 佐敷町産種子植物. “佐敷町史, 三自然”, 佐敷町史編集委員会(編), 佐敷町, 93-196.

執筆者名 : 立石庸一*・池原直樹*

和名 : コツブチゴザサ
分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学名 : *Isachne globosa* (Thunb.) O. Ktze. var. *brevispicula* Ohwi
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 情報不足 (DD)

形態の特徴 : 多年草。稈は多少束生し、直立または下部が多少湾曲し、高さ 30~80 cm になる。葉は線状長楕円形、長さ 4~8 cm、幅 3~7 mm、表面はざらつく。円錐花序は長さ 3~13 cm、疎に分枝し、枝は細く、斜開して多少屈曲し、上半に小穂を疎につける。小穂は短くて円く、長さ 1.5 mm 内外。

分布域(県外) : 台湾。

県内の分布 : 西表島。

備考 : 基本変種のチゴザサは北海道、本州、四国、九州、琉球および台湾、東南アジア、オーストラリアに分布し、小穂は広倒卵形または倒卵状球形でやや大きく、長さ 2.2 mm 程。竹富町希少野生動植物種(2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。*種 *Isachne globosa* として評価。

執筆者名 : 立石庸一*

和名 : ウスギキンエノコロ

分 類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学 名 : *Setaria cinerea* T. Koyama
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

和 名 : コササキビ
分 類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学 名 : *Setaria plicata* (Lam.) T. Cooke
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 大形の多年草。稈は束生し高さ 80~130 cm になり、疎らに葉をつける。葉は長さ 15~30 cm、幅 1~3 cm、葉脈にそって深いしわがある。小穂は緑色ときに紫色を帯び、第 2 小花の横しわが目立つ。
分布域 (県外) : 九州、口永良部島、奄美大島、台湾、中国南部、インドシナ、ネパール、マレーシア、インド。
県内の分布 : 沖縄島南部。
生育環境 : 山地の林内に生える。
生育状況 : 1951 年に那覇市 (当時首里市) で採集された標本があるが、現状は不明。
減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られている。
備考 : ササキビの小型のものと区別が微妙で、沖縄県に真のコササキビが自生するのかについては、今後詳しい研究が必要である。

執筆者名 : 新城和治*・池原直樹*・横田昌嗣 (追補)

和 名 : ヒメウシノシッペイ
分 類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学 名 : *Thaumastochloa cochinchinensis* (Lour.) C. B. Hubbard
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 多年草。稈はやや硬質、基部で分枝してゆるく束生、斜上して高さ 20~40 cm、無毛。葉は線形、長さ 15 cm 内外、葉鞘は無毛で葉身より長い。穂状花序は単立、細長い円柱状、長さ 5~10 cm。
分布域 (県外) : 台湾、中国南部、インドシナ、フィリピン、ミクロネシア。
県内の分布 : 沖縄島、西表島。
生育環境 : 低地原野に生える。
生育状況 : 現状は不明。
減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られている。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 立石庸一*・池原直樹*

和 名 : ヤエヤマクワズイモ
分 類 : サトイモ科 (APG 科名: サトイモ科)
学 名 : *Alocasia atropurpurea* Engler
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 全体の高さが3.5~6 mになる常緑の多年草。茎は長さ2~5 m。葉身は広卵形で楕形とならず、鈍頭から鋭頭、基部は深い心形、側脈は7~10対。花茎は10~20 cm。仏炎苞の筒部は4~5 cm、舷部は10~12 cm。
- 分布域(県外) : フィリピン。
- 県内の分布 : 沖縄島中部、西表島。
- 生育環境 : 不明。
- 生育状況 : 沖縄島中部(Walker, 1976)と西表島(多和田, 1964)で採集されているが、現状は不明である。
- 学術的価値 : 分布域の北限で、日本で唯一の産地である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。
- 備考 : 本来の自生種かどうかは疑問である。竹富町希少野生動植物種(2017年)。IUCN カテゴリー: Critically Endangered (CR)。

- 文献 : 大橋広好, 1982. 日本の野生植物草本. 単子葉類. 平凡社, 東京, 137.
多和田真淳, 1964. 琉球植物見聞録. 沖縄生物学会誌, 1(2) : 76-79.
Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 1159pp.

執筆者名 : 新城和治*・立石庸一*

- 和名 : イトハナビテンツキ
- 分類 : カヤツリグサ科 (APG科名: カヤツリグサ科)
- 学名 : *Bulbostylis densa* (Wall. ex Roxb.) Hand.-Mazz.
- カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 一年草。稈は多数束生し、糸状、長さ5~40 cm。葉は稈の基部に束生し、短く、糸状。花序は頂生し、少数の小穂を疎らにつけ、長さ2~5 cm、小穂と鱗片は栗褐色、鱗片は前縁、長さ2 mm、卵形。瘦果は倒卵円形、長さ0.8 mm、表面にしわと細点がある。
- 分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、台湾、朝鮮、中国、インド。
- 県内の分布 : 石垣島、西表島。
- 生育環境 : 日当たりの良い原野や畑地の湿った土壤に生える。
- 生育状況 : 標本調査や野外調査で確認することができず、現状不明。
- 減少の要因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。
- 備考 : 変種のイトテンツキ(クロハタガヤ) var. *capitata* (Miq.) Ohwi は、花序が短縮して頭状となるもので、本州、四国、九州に分布し、石垣島と西表島(Masamune, 1956; Walker, 1976)に産する。竹富町希少野生動植物種(2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

- 文献 : Masamune, G., 1956. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VIII). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 4(2): 201-280.
Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 253-254.

執筆者名 : 横田昌嗣

- 和名 : アゼナルコスゲ(アゼナルコ)

分 類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学 名 : *Carex dimorpholepis* Steud.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は高さ 40~80 cm、葉を密に束生し、匍枝はない。葉は扁平、幅 4~10 mm、小穂は 4~6 個、円筒形、長さ 3~6 cm、上方の 2~4 個は雌性、他は雄性。雌花の鱗片は狭倒卵形、先には芒があり、柱頭は 2 個、果胞は広卵形、多数の乳房状突起があり、長さ 2.5~3 mm、くちばしは短く、急に狭くなる。瘦果は広倒卵形、長さ 1.5 mm。

分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、朝鮮、中国、インドシナ。

県内の分布 : 沖縄島?

生育環境 : 不明。

生育状況 : 沖縄県産の標本は確認されず、野外調査でも確認されないため、現状不明。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。

備考 : 本種の記録を疑問視する意見 (初島, 1975) がある。

文献 : 初島住彦, 1975. 琉球植物誌 (追加・訂正). 沖縄生物教育研究会, 那覇, 717.
坂口總一郎, 1924. 沖縄植物總目録. 石塚書店, 首里, 152pp.

執筆者名 : 横田昌嗣

和 名 : コウボウムギ
分 類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学 名 : *Carex kobomugi* Ohwi
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長く匍匐し、稈は硬く、鈍 3 稜形、長さ 10~20 cm。葉は革質、幅 4~6 mm、微鋸歯がある。雌雄異株または小穂は雄雌性があり、雌性の小穂は卵形、長さ 15 mm、雌花の鱗片は狭卵形、先端は芒となって突出し、柱頭は 3 個、果胞は革質、長さ 10 mm、くちばしは長い。堅果は 3 稜形。

分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、宝島、奄美大島、台湾、ウスリー、中国東北部、朝鮮、北アメリカ (帰化)。

県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 海岸の砂浜に生える。

生育状況 : Sonohara *et al.* (1956) や Masamune (1956) で沖縄県に産することが記されているが、標本による確認はできず、現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : Masamune, G., 1956. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VIII). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 4(2): 201-280.
Sonohara, S., S. Tawada, T. Amano & E. H. Walker, 1952. Flora of Okinawa. US Civil Administration of the Ryukyu Islands, Naha, 237pp.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : タイワンヒエスゲ
 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
 学名 : *Carex manca* Boott subsp. *takasagoana* (Akiyama) T. Koyama
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、葉を束生する。稈は長さ 30~60 cm、3 稜形。葉は数個つき、幅 3~5 mm。小穂は 3~5 個、やや離れてつき、頂生する 1 個は雌性、線形、長さ 1~3 cm、他の小穂は雄性、円柱形、長さ 2~5 cm、幅 5~6 mm、雌花の鱗片は卵形~楕円形、長さ 5 mm、柱頭は 3 個、果胞は紡錘形、長さ 7~8 mm、疎らに毛があり、くちばしはやや長い。瘦果は倒卵形~楕円形、長さ 4 mm。

分布域 (県外) : 台湾。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 常緑樹林の林床に生える。台湾では海拔の高い所に生える (Koyama, 1978) という。

生育状況 : 初島・天野 (1994) で石垣島に産することが報告されたが、詳細は不明。標本は確認されておらず、野外調査でも見つからない。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1994. “増補訂正琉球植物目録”, 沖縄生物学会, 西原町, 261.
 Koyama, T., 1978. Flora of Taiwan, Vol. 5. Epoch Publishing Co., Taipei, 328.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : フサスゲ (シラホスゲ)
 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
 学名 : *Carex metallica* Lev.
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。葉を密に束生する。稈は長さ 30~60 cm。葉は幅 3~6 mm。小穂は 5~10 個、頂生する小穂は雌雄性または雄性、円柱形~広線形、他の小穂は雌性 (上部の小穂は基部に多少の雄性部を持つ)、円柱形、長さ 2~5 cm、有梗、雌花の鱗片は狭卵形、柱頭は 3 個、果胞は狭卵形、長さ 7 mm、くちばしはやや長い。

分布域 (県外) : 本州 (山口県)、四国、九州、台湾、朝鮮。

県内の分布 : 沖縄島?

生育環境 : 山地の常緑樹林の林床に生える。

生育状況 : 沖縄県産の標本は確認されず、野外調査でも確認されないため、現状不明。

備考 : 本種の記録を疑問視する意見 (初島, 1975) がある。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。

文献 : 初島住彦, 1975. 琉球植物誌 (追加・訂正). 沖縄生物教育研究会, 那覇, 717, 722-723.
 坂口總一郎, 1924. 沖縄植物總目録. 石塚書店, 首里, 152pp.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : ゴウソ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Carex pruinosa* Boott subsp. *maximowiczii* (Miq.) Kuk.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。葉を束生し、短い匍枝がある。稈は長さ 40~70 cm。葉は幅 4~6 mm。小穂は 2~4 個、頂生する 1 個は雄性、線形、他の小穂は雌性、太い円柱形、長さ 2~3.5 cm、幅 10~14 mm、雌花の鱗片は卵形、柱頭は 2 個、果胞は広卵楕円形、長さ 3.5~4.5 mm、表面に小突起が密生し、くちばしは短い。

分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、南千島、中国、朝鮮。

県内の分布 : 沖縄島?。

生育環境 : 山間の湿地に生える。

生育状況 : 沖縄県産の標本は確認されず、野外調査でも確認されないため、現状不明。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。

備考 : 本種の記録を疑問視する意見(初島, 1975)がある。

文献 : 初島住彦, 1975. 琉球植物誌(追加・訂正). 沖縄生物教育研究会, 那覇, 717.
坂口總一郎, 1924. 沖縄植物總目録. 石塚書店, 首里, 152pp.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : ビトウクグ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Cyperus compactus* Retz.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎はしばしば球茎状となる。稈は硬く、3稜形、高さ 50~100 cm、幅 3~6 mm。葉は少数つき、線形、幅 5~9 mm、小隔膜がある。複散形花序は長さ 6~18 cm、苞は 3~5 個、枝は 3~8 個、小花序は 3~7 個、穂状花序は球形、幅 1~2 cm、密生した多数の小穂からなり、小穂はやや針形、長さ 5~8 mm、3~7 花からなり、鱗片は長楕円状披針形、柱頭は 3 個。瘦果は線状長楕円形、長さ 1.5 mm、3稜形。

分布域(県外) : 小笠原、台湾、中国南部、インド、ヒマラヤ、ネパール、マレーシア、マダガスカル。

県内の分布 : 南大東島。

生育環境 : 湿地や池沼に生える。

生育状況 : Masamune (1956) や初島・天野 (1994) で報告されているが、標本や野外調査で確認はされておらず、現状不明。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。

備考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 263.
Masamune, G., 1956. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VIII). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 4(2): 201-280.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : オオガヤツリ (オオハナビガヤツリ)

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Cyperus imbricatus* Retz.

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は木質。稈は太く、高さ 80~120 cm、3 角柱形。葉は稈の基部に生じ、広線形、稈より短く、幅 5~15 mm。複散形花序は長さ 10~12 cm、苞は 3~5 個、小花序は 2~7 個、穂状花序は円筒形、長さ 2~3 cm、幅 6~10mm、小穂は長さ 4~6 mm、鱗片は倒卵形、密に互列し、長さ 1.7 mm、雄蕊は 3 個、柱頭は 3 個。瘦果は長さ 0.8 mm、扁 3 稜形、楕円形。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、インド、マレーシア、世界の熱帯。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。

生育環境 : 湿地に生える。

生育状況 : Masamune (1956) と初島・天野 (1994) に記録があるが、標本調査と野外調査では確認することができず、現状不明。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 263.

Masamune, G., 1956. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VIII). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 4(2): 201-280.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : タイトウクグ

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Cyperus sesquiflorus* (Torrey) Marrfeld et Kuk. var. *subtriceps* (Nees) T. Koyama

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、木質。稈は束生し、高さ 10~30 cm、鈍 3 角柱形、基部に 2~3 個の葉がある。葉は稈より短く、狭線形、幅 2~3 mm。穂状花序は 1~3 個つき、苞 3~5 個、頂端の花序は長楕円状円筒形~長楕円形、長さ 10~15 mm、幅 5 mm、多数の小穂を密につけ、小穂は長さ 2 mm、扁平、卵形、1~2 花をつけ、鱗片は広卵形、雄蕊は 2 個、柱頭は 2 個。瘦果は楕円形、長さ 1.5 mm。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、インドシナ、ヒマラヤ、マレーシア、アフリカ。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育状況 : Masamune (1956) や初島・天野 (1994) で記録されているが、標本調査と野外調査では確認することができず、現状不明。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内唯一の産地である。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 264.

Masamune, G., 1956. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VIII). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 4(2): 201-280.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : タカオガヤツリ

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Cyperus tuberosus* Rottb.

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。類似の環境に生えるハマスゲ *C. rotundus* L. に似るが、より強壯で、長い匍匐茎を出し、先端に塊根をつける。稈は塊根から生じ、長さ 25~60 cm、基部に数葉をつける。葉は線形、稈より短く、幅 3~6 mm。散房花序は単一または分枝し、2 枚の葉状の苞があり、枝は 2~6 個、長さ 2~8 cm、2~11 個の小穂をつけ、小穂は長さ 8~20 mm、幅 1.5~3.5 mm、長楕円形~狭披針形、8~20 花をつける。瘦果は長楕円形、3 稜形。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、ヒマラヤ、インド、ヨーロッパ、オーストラリア北部。

県内の分布 : 小浜島。

生育環境 : 海岸の砂浜に生える。

生育状況 : 多和田眞淳により 1958 年に採集された標本が知られている (Walker, 1976) が、現状は不明。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。砂の採取。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 259.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : セイタカハリイ

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Eleocharis attenuata* (Franch. et Sav.) Palla

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は発達せず、匍枝も欠く。稈は多数が束生し、円く糸状、高さ 25~55 cm、幅 1 mm。小穂は頂生し、密に多花をつけ、卵形~広卵形、長さ 7~10 mm、幅 3 mm、鱗片は広卵形、長さ 2.5 mm、花柱基部は瘦果とほぼ同幅。瘦果は倒卵形、鈍 3 稜形、長さ 1.2 mm、刺針は 6 個、瘦果よりわずかに長い。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、中之島、宝島、徳之島。

県内の分布 : 沖縄島、宮古島。

生育環境 : 湿地に生える。

生育状況 : 標本調査と野外調査では確認することはできず、現状不明。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。湿地の開発。

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : ヤリハリイ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Eleocharis congesta* D. Don var. *subvivipara* (Bock.) T. Koyama
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。基本変種のオオハリイに似るが、小穂は線形、長さ 7~17 mm、幅 1.5~2.5 mm、鱗片は鈍頭、柱基は卵状三角形、幅は瘦果の 1/2~3/4 であることで区別される。
分布域(県外) : 本州、九州、台湾、インド、ミクロネシア。
県内の分布 : 沖縄島。
生育環境 : 湿地や水田に生える。
生育状況 : 標本調査と野外調査では確認することができず、現状不明。
学術的価値 : 琉球列島で唯一の産地である。
減少の要因 : 湿地の開発。水田の減少。
備考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。*種 *Eleocharis congesta* として評価。

執筆者名 : 横田昌嗣*

和名 : シカクイ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Eleocharis wichurai* Bock. var. *wichurai*
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、時に匍枝をだす。稈は多数が束生し、4稜形、高さ 30~50 cm、幅 0.5~1.5 mm。小穂は頂生し、密に多花をつけ、披針形~卵状長楕円形、長さ 10~15 mm、幅 3~5 mm、鱗片は楕円形~長楕円形、円頭~鈍頭、長さ 4~6 mm、花柱基部は瘦果の幅の約倍、雄蕊は 3 個、柱頭は 3 個。瘦果は広倒卵形、長さ 1.2~2.2 mm、刺針は 6 個、羽毛状、柱基と同長。
分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、中之島、奄美大島、徳之島、ウスリー、中国東北部、朝鮮。
県内の分布 : 沖縄島、石垣島。
生育環境 : 湿地に生える。
生育状況 : 標本調査と野外調査で確認されなかったため、現状不明。
減少の要因 : もともと自生地が限られている。湿地の開発。

執筆者名 : 横田昌嗣*

和名 : オキナワイヌシカクイ (リュウキュウハリイ)
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Eleocharis wichurai* Bock. var. *liukuensis* (Makino) Ohwi
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 情報不足 (DD)

形態の特徴 : 常緑の多年草。基本変種のシカクイに比べ、稈が丸いことで区別される。
県内の分布 : 沖縄島。
生育環境 : 湿地に生える。
生育状況 : 田代安定により沖縄島で採集された標本に基づいて記載された (Makino, 1904) が、その後分布に関する情報は得られておらず、現状不明。
学術的価値 : 沖縄島の固有変種。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。湿地の開発。水田の埋立。

文献 : Makino, T., 1904, Observations on the flora of Japan. Bot. Mag. Tokyo, 18: 97-115.

執筆者名 : 横田昌嗣*

和名 : チクシテンツキ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Fimbristylis dichotoma* (L.) Vahl var. *tikushiensis* (Hayata) T. Koyama
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。基本変種のテンツキに似るが、葉に長軟毛があり、瘦果が粗面で幅広い点で区別される (Hayata, 1915)。
分布域 (県外) : 台湾。
県内の分布 : 大東諸島、八重山諸島。
生育環境 : 湿地や原野に生える。
生育状況 : 初島・天野 (1994) に記録があるが、標本調査と野外調査で確認することができず、現状不明。
減少の要因 : もともと自生地が限られている。
備考 : 果実の形態は確認されていないので、同定に疑問が残るが、葉に長軟毛があるテンツキは、沖縄島北部の2ヶ所、石垣島の1ヶ所で確認されている。竹富町希少野生動物植物種 (2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。*種 *Fimbristylis dichotoma* として評価。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 266.
Hayata, B., 1915. Icones Plantarum Formosanarum, Vol. 6. 168pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・尾川原正司*

和名 : ビロードテンツキ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Fimbristylis sericea* (Poir.) R. Br.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、分枝する。稈は密に束生し、長伏毛があり、高さ10~30 cm、扁3稜形。葉は長さ7~20 cm、幅1.5~2 mm、線形、扁平、絹毛がある。花序は単一、枝は少数、苞は1~2個、小穂は3~10個、やや頭状に生じ、狭卵形、長さ6~10 mm、幅4 mm、鱗片は広卵形、長さ4 mm、雄蕊は2~3個、柱頭は2個。瘦果は広倒卵形、長さ1.5 mm。
分布域 (県外) : 本州、四国、屋久島、種子島、台湾、中国、インド、マレーシア、オーストラリア。

- 県内の分布 : 沖縄島、石垣島?、西表島?。
 生育環境 : 海岸の砂浜に生える。
 生育状況 : Sonohara *et al.* (1952) や Masamune (1956) に記録があるが、標本調査と野外調査で確認することができず、現状不明。
 学術的価値 : 琉球列島では限られた分布を示し、植物地理学上貴重である。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。海岸の開発。砂の採取。

- 文献 : Masamune, G., 1956. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VIII). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 4(2): 201-280.
 Sonohara, S., S. Tawada, T. Amano & E. H. Walker, 1952. Flora of Okinawa. US Civil Administration of the Ryukyu Islands, Naha, 237pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*

- 和名 : **オニテンツキ**
 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
 学名 : *Fimbristylis thomsonii* Bock.
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、木化する。稈は単生し、高さ 20~70 cm、幅 1.2~1.5 mm、扁平。葉は稈より短く、線形、幅 2~5 mm、扁平。複散形花序は長さ 5~12 cm、枝は 2~5 個、葉状の苞は 2~3 個、小穂は単生し、卵状長楕円形~長楕円形、密に 6~17 花をつけ、長さ 2.5~4 mm、幅 1.8~3 mm、鱗片は卵形、長さ 2.2~3.7 mm、柱頭は 3 個。瘦果は倒卵形、長さ 1.7~2 mm、幅 1 mm。オオヒラテンツキ *F. complanata* (Retz.) Link に似るが、植物体がより強壯で、花序の鱗片は栗色で、葉鞘の竜骨状隆起が明瞭でない点で異なる (Walker, 1976)。

- 分布域(県外) : 台湾、中国南部、インド、インドシナ、マレーシア。
 県内の分布 : 沖縄島中部。
 生育環境 : 山地の湿地や原野に生える。
 生育状況 : 初島・天野 (1994) に記録があり、具志川市 (現うるま市) 栄野比で採集された標本が引用 (Walker, 1976) されているが、現状は不明。
 学術的価値 : 分布域の北限である。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。
 備考 : 沖縄島の各地から記録されているオオヒラテンツキの標本中に、本種が混在している可能性があり、今後詳しく調査する必要がある。

- 文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 267.
 Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 249-250.

執筆者名 : 横田昌嗣*

- 和名 : **ヒロハノカラン (ダルマエビネ)**
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Calanthe alismaefolia* Lindl.

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は数個接して並び、2~3葉を束生する。葉は長さ13~20 cm、幅5.5~10 cm、楕円形~卵形、長さ7~10 cmのはっきりとした葉柄がある。総状花序は、長さ30~40 cm、10花程度をつける。花は平開し、萼片は広倒卵形、淡緑色、長さ8~10 mm、花弁は菱形状円形、白色、長さ6~8 mm、唇弁は半円形、長さ15 mm、白色で、基部に淡紫色の着色があり、基部で深く3裂し、中央裂片は倒卵形~広倒卵形で、先はさらに2裂し、上面中央に3~5個の黄色の隆起があり、側裂片は線形、基部に長さ8 mmの距がある。

分布域(県外) : 九州南部、屋久島、種子島、トカラ列島、台湾、ヒマラヤ。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 近年は全く確認されておらず、現状は不明である。

学術的価値 : 沖縄県で唯一の産地である。

減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。もともと自生地と個体数が少ない。

文献 : Garay, L. A. & H. R. Sweet, 1974. Orchids of Southern Ryukyu Islands. Harvard University, 122.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・横田昌嗣(追補)

和名 : キエビネ

分類 : ラン科 (APG科名: ラン科)

学名 : *Calanthe striata* Decne.

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は数個接して並び、2~3葉を束生する。葉は広長楕円形、長さ45~60 cm、花茎は長さ40~50 cmで、十数花をつける。花は黄色、萼片は長さ2.7~3 cm、長楕円形~狭卵形、花弁は長さ2.4 cm、狭楕円形、唇弁は3深裂し、側裂片は広楔形、中央裂片は楔形~長楕円形、上面に3~5本の板状隆起があり、基部に長さ5 mmの距がある。

分布域(県外) : 本州(東海道以西)、四国、九州、甌島、屋久島、台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 1ヶ所から記録されているが、標本に基づく報告はされていない。近年は全く確認されておらず、現状は不明である。

学術的価値 : 琉球列島で唯一の産地である。

減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。もともと自生地と個体数が少ない。

文献 : Garay, L. A. & H. R. Sweet, 1974. Orchids of Southern Ryukyu Islands. Harvard University, 118-119.

執筆者名 : 横田昌嗣*

和名 : タコガタサギソウ (ヒュウガトンボ、ヒメトンボ)

分類 : ラン科 (APG科名: ラン科)

学名 : *Habenaria sumatrana* (Schltr.) Schltr. var. *triangularis* (F. Maek.) Hashimoto

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。地中に楕円形の塊根があり、2~4枚の葉を根生する。葉は長さ2.5~8 cm、広披針形。総状花序は頂生し、長さ30 cmになり、10~20個の花をつける。花は白色で、平開せず、径3 mm、距は緑色、長さ1.5 mm、萼片と花弁は長さ4 mm、唇弁は3浅裂し、唇弁の側裂片は中央裂片と同じ長さで、近縁種のタカサゴサギソウ *H. formosana* のように糸状に長く伸びることはない。

分布域 (県外) : 九州 (長崎県、宮崎県)、台湾。

県内の分布 : 伊平屋島。

生育環境 : 日当たりのよい湿った草原、自然林あるいは二次林の明るい林床に生えると思われる。

生育状況 : 伊平屋島で数回にわたって探索を試みたが、確認することができず、現状は不明。

学術的価値 : 琉球列島で唯一の産地である。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 本種の学名については様々な見解があり、混乱している。上記の学名の基本変種はスマトラに産する。

文献 : 前川文夫, 1971. 原色日本のラン, 誠文堂新光社, 東京, 495pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヨウラクラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Oberonia japonica* (Maxim.) Makino

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : ごく小形の常緑の多年草。茎は下垂し、長さ1~4 cm、葉を2列に接してつける。葉は披針形、やや多肉質、長さ1~3 cm。穂状花序は頂生し、糸状、長さ2~8 cm、多数の花をつけ、包葉は3角状披針形、長さ1 mm。花は橙黄色、萼片と花弁は長さ0.7 mm、背萼片は卵形、側萼片は広卵形、花弁は卵形、唇弁は長さ0.8 mm、3裂し、側裂片は3角状長楕円形、中央裂片は長楕円形、先は2浅裂する。

分布域 (県外) : 本州 (関東以西)、四国、九州、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。森林伐採。

備考 : 植物体や花の大きさは環境によって変異が大きく、クスクスヨウラクラン *O. arisanensis* と区別が難しい場合がある。今後詳細な観察が必要である。

執筆者名 : 横田昌嗣*

2) シダ植物

和名 : ナンカクラン

分類 : ヒカゲノカズラ科 (PPG 科名: ヒカゲノカズラ科)

学名 : *Lycopodium hamiltonii* Spring

カテゴリー : 絶滅危惧 II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は下垂し、2~3回叉状に分岐し、長さ40 cm以上になる。葉は密生し、長さ10~15 mm。胞子嚢穂は頂生し、長さ5~15 cm。
分布域(県外) : 本州(伊豆半島、伊豆諸島、紀伊半島)、四国、九州、奄美大島、請島、徳之島、台湾、中国、フィリピン、インドシナ、ヒマラヤ、タイ、インド。
県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
生育環境 : 空中湿度の高い森林内の樹上や岩上に着生する。
生育状況 : かつては自然林にやや普通に見られたが、現在は森林伐採と盗掘により自生地・個体数とも非常に少なくなっている。
減少の要因 : 森林伐採。園芸用の採集。ダム建設による自生地の水没。
備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。
文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : **ボウカズラ**
分類 : ヒカゲノカズラ科 (PPG科名: ヒカゲノカズラ科)
学名 : *Lycopodium laxum* Presl
方言名 : ヒムラン(石垣島)
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は下垂し、長さ20~80 cm。葉は密生し、長さ7 mm、茎に密着する。胞子嚢穂は頂生し、長さ10~15 cm。
分布域(県外) : 台湾、中国、東南アジア、ポリネシア。
県内の分布 : 石垣島、魚釣島。
生育環境 : 山地の樹幹に着生する。
生育状況 : 魚釣島ではやや個体数が多かったが、増殖した野生化ヤギが森林生態系を悪化させている可能性がある。石垣島では4ヶ所で確認されているが、極めてまれで、個体数は少ない。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : 森林伐採。園芸用の採集。もともと個体数が少ない。野生化ヤギによる森林生態系悪化(魚釣島)。
保全対策 : 魚釣島では野生化ヤギの駆除が急務である。
備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。
文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)・比嘉清文(追補)・阿部篤志(追補)・加島幹男(追補)

和名 : **ヨウラクヒバ**
分類 : ヒカゲノカズラ科 (PPG科名: ヒカゲノカズラ科)
学名 : *Lycopodium phlegmaria* L.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は下垂し、分岐する。葉は卵状披針形で、長さ10~15 mm、円脚。孢子嚢穂は頂生し、長さ6~10 cm、分岐し、ひも状で径1.5~2.5 mm。

分布域(県外) : 九州南部(佐多岬)、屋久島、種子島、奄美大島、台湾、中国、東南アジア、ポリネシア、オーストラリア。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の陰湿な林内の樹幹に着生する。

生育状況 : 沖縄島では極めてまれで、4ヶ所に産するだけである。沖縄島北部の1ヶ所はダム建設で消失した。石垣島では1ヶ所で2001年にごく少数個体が確認されている。西表島では数ヶ所に点々と産し、自生地の大半は国立公園内にあり、開発の恐れはないが、個体数は少ない。

減少の要因 : もともと個体数が少ない。園芸用の採集。森林の伐採。ダム建設。

備考 : 竹富町特別希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 億首川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 99-110.
島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.
横田昌嗣・豊見山元, 1993. 琉球列島植物分布資料 11. 沖縄生物学会誌, (31): 67-69.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : **ヒメヨウラクヒバ**

分類 : ヒカゲノカズラ科 (PPG科名: ヒカゲノカズラ科)

学名 : *Lycopodium salvinioides* (Herter) Tagawa

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は下垂し、長さ20~50 cm、2~3回分岐する。葉は三角状卵形で、ヨウラクヒバより質が薄く、長さ10~15 mm、円脚。孢子嚢穂は頂生し、長さ6~10 cm、2~3回分岐し、ひも状で、長さ1.5~2.5 mm。

分布域(県外) : 台湾、フィリピン、ボルネオ?。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 空中湿度の高い山地林内の樹幹に着生する。

生育状況 : 1河川の流域からこれまでに数回散発的に発見されているが、極めてまれである。2016~2017年に3ヶ所で数個体が新たに確認された。

学術的価値 : 分布域の北限である。マレーシア系の植物で、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : 採集。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : **オイトウゲシバ**

分類 : ヒカゲノカズラ科 (PPG科名: ヒカゲノカズラ科)

学名 : *Lycopodium serratum* Thunb. var. *longipetiolatum* Spring

カテゴリー : 絶滅危惧 II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は直立し、基部でわずかに分枝し、高さ10~20 cm。葉は長楕円形~卵状長楕円形、長さ20~30 mm、幅3~5 mm、明らかな葉柄がある。孢子葉は栄養葉より短く、長さ3~5 mm、孢子嚢は葉腋に単生し、腎形、径1.5 mm。

分布域(県外) : 本州(伊豆諸島、近畿、中国)、四国、九州、奄美大島、徳之島、沖永良部島、台湾、中国、ヒマラヤ、マレーシア。

県内の分布 : 沖縄島北~中部、久米島、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の常緑樹林の林床に生える。

生育状況 : 沖縄島では数ヶ所に産することが知られているが、個体数は少ない。沖縄島中部の自生地では戦後確認されておらず、絶滅した可能性が高い。久米島の現状は不明。石垣島では1ヶ所に産するが、極めてまれである。西表島では数ヶ所に点々と産するが、個体数は少ない。

減少の要因 : 山地林の伐採。園芸用の採集。もともと個体数が少ない。

備考 : 基本変種のトウゲシバは、形態的な変異が大きく、多くの種内分類群が認められているが、それらの分類学的な取り扱いについては、様々な見解がある。オニトウゲシバを区別せず、トウゲシバに含める見解(Serizawa, 1975; 倉田・中池, 1990)もあるが、沖縄県に産するものは、すべてオニトウゲシバ型である。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 倉田 悟・中池敏之, 1990. 日本のシダ植物図鑑 第6巻. 東京大学出版会, 94-121.
 Serizawa, S., 1975. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (1). Sci. Rep. Takao Mus., 7: 1-53.
 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.
 Tagawa, M., 1939. Spicilegium pteridographiae asiacorientalis, 20. Acta Phytotax. Geobot., 8: 229-236.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : リュウキュウヒモラン

分類 : ヒカゲノカズラ科 (PPG科名: ヒカゲノカズラ科)

学名 : *Lycopodium sieboldii* Miq. var. *christensenianum* (Christ et Herter) Tagawa

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) **環境省カテゴリー**: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎はひも状で束生し、3~4回分岐し、長さ20~50 cm。葉は鱗片状で密生し、茎に圧着し、長さ2~5 mm。孢子嚢穂は頂生し、ひも状で、長さ5~15 mm。

分布域(県外) : 九州(熊本県以南)、屋久島、奄美大島、徳之島、中国。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の樹幹・岩上に着生する。

生育状況 : 沖縄島北部では自生地は限られ、個体数は極めて少ない。石垣島と西表島の標本は確認することができず、現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。山地林の伐採。園芸用の採集。

備考 : 基本種のヒモランとの区別が微妙で、区別しない意見もある。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : ツルカタヒバ

分 類 : イワヒバ科 (PPG 科名: イワヒバ科)
 学 名 : *Selaginella biformis* A. Braun ex Kuhn
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は匍匐して分岐し、長さ 30 cm になり、毛がある。葉は 2 型があり、4 列にならび、腹葉は長さ 2.5 mm、縁に微鋸歯がある。胞子嚢穂は頂生し、長さ 3 mm。

分布域 (県外) : 中国、東南アジア、インド、ニューギニア。

県内の分布 : 沖縄島北部 (本部半島を除く)。

生育環境 : 山地の崖や岩上に生える。

生育状況 : 恩納村と金武町以北の限られた河川沿いに生える。自生地は点々とあり、今すぐ絶滅の恐れはないが、自生地の多くはダム建設により水没し、自生地の数は減少している。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : 山地林の伐採。ダム建設による水没。自生地の開発。

文 献 : 仲松綾乃・傳田哲郎・横田昌嗣, 2004. ミタニクラマゴケ (イワヒバ科) は沖縄島に産するのか?. 沖縄生物学会誌, (42): 39-45.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成 5 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 羽地大川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 103-113.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成 6 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 平成 7 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-7.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 大保ダム建設発生土の処分候補地に係る生物環境調査データ (陸域・海域). 沖縄建設弘済会, 3-14, 117-135, 277-286, 349-373.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 平成 8 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 奥間川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-9, 99-112.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 億首川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 99-110.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 与那川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-10, 101-117.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 座津武川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-8, 87-95.
 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和 名 : コケカタヒバ
 分 類 : イワヒバ科 (PPG 科名: イワヒバ科)
 学 名 : *Selaginella leptophylla* Baker
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は匍匐し、まばらに分岐し葉を 4 列につけ、長さ 10 cm になる。葉は 2 型があり、腹葉は長楕円形、鋸歯があり、先端は鋭く尖る。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、フィリピン。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島、与那国島。
生育環境 : 山地の陰湿な崖に生える。
生育状況 : 沖縄島北部では、今回の調査で新たに2ヶ所で確認された。西表島では数ヶ所の自生地が知られるが、個体数は少なくまれである。与那国島の現状は不明。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : もともと自生地が少ない。自生地の開発。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新知見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.
島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.
阿部篤志, 2015. 大宜味村中央部石灰岩山地における希少植物調査 (最終報告). 事業年報 (平成25年度), 沖縄美ら島財団総合研究センター, 34-49.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : **イヌカタヒバ**
分類 : イワヒバ科 (PPG科名: イワヒバ科)
学名 : *Selaginella moellendorffii* Hieron.
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧II類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は直立し、長さ15~30 cm、3~4回羽状分岐する。葉は2型があり、4列にならび、腹葉は長さ2 mm。胞子嚢穂は頂生し、長さ5 mm。カタヒバに似ているが葉の縁が白くなり、毛があることで異なる。

分布域(県外) : 台湾、中国、フィリピン、インドシナ。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 溪流沿いや高地の日当たりの良い岩上や樹幹に着生する。

生育状況 : 西表島は1ヶ所、石垣島では3ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 本州や九州では栽培品の逸出が報告されているが、八重山諸島のものは自生である。本種は、全ゲノムが解読された最初のシダ植物として知られるが (Banks *et al.*, 2011)、遺伝子解読に用いられたのは沖縄県産の個体である。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : Banks, J. A., T. Nisiyama, M. Hasebe *et al.*, 2011. The *Selaginella* genome identifies genetic changes associated with the evolution of vascular plants. *Science*, 332(6032): 960-963.
小林史郎・横田昌嗣, 2001. 琉球列島植物分布資料 16. 沖縄生物学会誌, (39) : 99-102.
島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.

執筆者名 : 横田昌嗣*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・松島昭司(追補)

和名 : **イワヒバ**
分類 : イワヒバ科 (PPG科名: イワヒバ科)
学名 : *Selaginella tamariscina* (P. Beauv.) Spring

- 方言名 : クキ (沖縄島: 首里)
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし
- 形態の特徴 : 常緑の多年草。仮茎は直立し、長さ 25 cm になり、仮茎の先に多数の枝を束生する。枝は葉を密につけ、多数分岐し、長さ 20 cm になる。葉は 2 型があり、長さ 1.5~2 mm。胞子嚢穂は頂生し、長さ 5~15 mm。
- 分布域 (県外) : ロシア東部、北海道~九州、奄美大島、小笠原、朝鮮、台湾、東南アジア、インド。
- 県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、久米島、渡嘉敷島、座間味島、慶留間島、石垣島、西表島、魚釣島。
- 生育環境 : 岩壁に生える。
- 生育状況 : いずれの島でも各 1ヶ所の自生地が知られているだけで、個体数はわずかである。魚釣島では、増殖した野生化ヤギによる食害により絶滅している恐れがある。
- 減少の要因 : 園芸用の採集。もともと個体数が少ない。
- 備考 : 伊是名島の自生地は県の天然記念物に指定されている。沖縄県指定天然記念物 (伊是名城跡のイワヒバ群落) (1958 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文献 : 小林史郎・横田昌嗣, 2001. 琉球列島植物分布資料 16. 沖縄生物学会誌, (39) : 99-102.
島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.
豊見山元, 1994. 久米島のシダ植物. “久米島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術工芸・建築—”, 沖縄県立博物館 (編), 沖縄県立博物館, 12-25.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **イヌドクサ**
- 分類 : トクサ科 (PPG 科名: トクサ科)
- 学名 : *Equisetum ramosissimum* Desf.
- カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし
- 形態の特徴 : 常緑の多年草。地下茎は地中を匍匐し、地上茎は直立し、長さ 60~100 cm、節があり中空で分岐する。輪生する葉は長さ 3~5 mm。胞子嚢穂は直立し、長さ 1~2 cm。
- 分布域 (県外) : 本州、四国、九州、種子島、奄美大島、喜界島、台湾、中国、ヨーロッパ南部、アフリカ。
- 県内の分布 : 沖縄島 (北部~南部)。
- 生育環境 : 日当たりのよい湿地に生える。
- 生育状況 : 北部 (数ヶ所)、中部 (3ヶ所)、南部 (数ヶ所) に産するが、少ない。特に沖縄島南部では自生地が開発により失われている。
- 減少の要因 : 生育地の開発。もともと個体数が少ない。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 大保ダム建設発生土の処分候補地に係る生物環境調査データ (陸域・海域). 沖縄建設弘済会, 3-14, 117-135, 277-286, 349-373.
島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.
横田昌嗣・豊見山元, 1993. 琉球列島植物分布資料 11. 沖縄生物学会誌, (31) : 67-69.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : フユノハナワラビ
分類 : ハナヤスリ科 (PPG 科名: ハナヤスリ科)
学名 : *Botrychium ternatum* (Thunb.) Sw.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 九州以北では冬緑性、琉球列島では常緑性の多年草。葉は九州以北では長さ 50 cm になるが、琉球列島では長さ 10 cm 程度。葉は 2 型となり、栄養葉と孢子葉には長い葉柄があり、共通柄は短く、栄養葉は 3~4 回羽状に深裂し、5 角形、小羽片には浅い鈍鋸歯がある。孢子葉は 3 回羽状に分枝し、孢子囊群は球状。孢子の表面は平滑。

分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、種子島、奄美大島、台湾、朝鮮、中国、ネパール、インド。

県内の分布 : 硫黄島。

生育環境 : 火山の噴火口周辺の日当たりの良い草原に生える。

生育状況 : 個体数はきわめて少ない。孢子葉をつけた個体は確認されていない。

学術的価値 : 日本における分布域の南限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。

文献 : 立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2001. 沖縄県硫黄島で見出された分類学的あるいは植物地理学的に注目される維管束植物. 沖縄生物学会誌, (39) : 77-92.
立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2002. 硫黄島の植物相. 沖縄県文化振興会 (編), 沖縄県史資料編 13 硫黄島, 沖縄県教育委員会, 那覇, 57-104.

執筆者名 : 横田昌嗣*・立石庸一*・平岩 篤*

和名 : ミヤコジマハナワラビ
分類 : ハナヤスリ科 (PPG 科名: ハナヤスリ科)
学名 : *Helminthostachys zeylanica* (L.) Hook.
方言名 : ウザヌトマズィギー (宮古島)、ムカヂグサ (久米島)
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は這い、地上茎は直立し、長さ 20~40 cm。葉は 2 型があり、栄養葉は 3 羽片からなり、各羽片はさらに 3~4 裂し、裂片は長さ 6~18 cm。孢子葉は円柱形、長さ 4~20 cm。

分布域 (県外) : 沖永良部島、台湾、中国南部、東南アジア、ニューギニア、ポリネシア、ニューカレドニア。

県内の分布 : 沖縄島、久米島、宮古島、石垣島、小浜島、西表島。

生育環境 : 疎林内のやや湿地に生える。

生育状況 : 西表島では数ヶ所に生えるが、個体数は少ない。石垣島では、2ヶ所で確認されているが、1ヶ所は空港建設で自生地が消失した。沖縄島では 1ヶ所から報告されていたが、現在は確認できない。宮古島では 2ヶ所で確認されており、1ヶ所では個体数はやや多い。久米島と小浜島の現状は不明。

学術的価値 : 分布域のほぼ北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。森林の開発。ハブの解毒剤としての薬用の乱獲。

備考 : 宮古島市指定天然記念物 (ミヤコジマハナワラビ) (2012 年)。宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。竹富町特別希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.
立石庸一・新城和治, 1999. 斎場御嶽の植物. “国指定史跡斎場御嶽整備事業報告書 (発掘調査・資料編)”, 知念村教育委員会 (編), 知念村教育委員会, 43-84.

執筆者名 : 横田昌嗣*・川上 勲*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・佐藤宣子(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : コブラン

分類 : ハナヤスリ科 (PPG 科名: ハナヤスリ科)

学名 : *Ophioglossum pendulum* L.

方言名 : クーブラン (沖縄島)

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類 (EN)

形態の特徴 : 根茎は短く、数枚の葉を束生する。葉は帯状で、下垂し、栄養葉は長さ 30~100 cm、1~3 回分岐し、胞子葉は栄養葉の途中から出て、長さ 10~30 cm。

分布域(県外) : 屋久島、種子島、奄美大島、徳之島、小笠原、朝鮮、中国、台湾、旧熱帯。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 林内の樹幹に着生する。

生育状況 : 各地とも極めてまれである。西表島ではかつてはやや普通に見られたが、現在はほとんど見られない。

減少の要因 : 森林の開発。園芸用の採集。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.

横田昌嗣・豊見山元, 1993. 琉球列島植物分布資料 11. 沖縄生物学会誌, (31) : 67-69.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・北原 孝*

和名 : ホウライハナワラビ

分類 : ハナヤスリ科 (PPG 科名: ハナヤスリ科)

学名 : *Sceptridium formosanum* (Tagawa) Holub

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長さ 4 cm になり、1~2 葉をつける。葉は 2 型があり、栄養葉は五角形、2 回羽状複生、長さ 20~40 cm。胞子葉は 2~3 回羽状複葉で、栄養葉と同長。

分布域(県外) : 九州 (鹿児島県)、屋久島、種子島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、台湾、中国南部、ヒマラヤ。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 西表島では自生地は 2 ヶ所に限られ、個体数は極めて少ない。沖縄島と石垣島では近年確認されていない。

減少の要因 : 森林の伐採。もともと個体数が少ない。園芸用の採集。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.

横田昌嗣・豊見山元・比嘉清文・橋爪雅彦, 1994. 琉球列島植物分布資料 13. 沖縄生物学会誌, (32) : 61-65.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : ゼンマイ

分類 : ゼンマイ科 (PPG 科名: ゼンマイ科)

学名 : *Osmunda japonica* Thunb.

カテゴリー : 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 夏緑性の多年草。根茎は這い、数葉を束生する。葉は2型があり、栄養葉は2回羽状複生、長さ60～100 cm、羽片は3～6対。孢子葉は長さ20～30 cm、羽片は3～5対。

分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、奄美大島、東アジア、フィリピン、インドシナ、ヒマラヤ。

県内の分布 : 久米島。

生育環境 : 低地から山地の林内に生える。

生育状況 : 自生地は1ヶ所のみが知られていたが、近年は確認されていない。今回の調査でかつて生育したところを探したが、発見することはできなかった。絶滅したものと思われる。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。園芸用の採集。

備考 : 奄美大島では高地に生え、自生地は限られるが、道路の拡幅工事で消失した自生地がある。

文献 : 玉木 拓, 1958. ゼンマイ久米島に産す. 琉球大学生物クラブ誌, 2(1): 27-28.

初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄県, 1-39.

島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, (39): 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : タカサゴキジノオ

分類 : キジノオシダ科 (PPG 科名: キジノオシダ科)

学名 : *Plagiogyria adnata* (Blume) Bedd.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く斜上し、葉を束生する。葉は2型となり、栄養葉は1回羽状、長さ30～50 cm、羽片は10～23対で、頂羽片は不明瞭。孢子葉は栄養葉より長く伸びる。

分布域(県外) : 本州(伊豆半島、伊豆諸島以西)、四国、九州、屋久島、種子島、黒島、奄美大島、台湾、中国南部、東南アジア、インド。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 高地の林床や崖に生える。

生育状況 : それぞれの島では自生地は限られ、個体数は非常に少ない。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。

備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : リュウキュウキジノオ
分類 : キジノオシダ科 (PPG 科名: キジノオシダ科)
学名 : *Plagiogyria koidzumii* Tagawa
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は斜上し、先端に葉を束生する。葉は2型となり、栄養葉の葉柄は長さ10~40 cm、葉身は長さ20~45 cm、1回羽状、羽片は10~20対で有柄、微鋸歯がある。孢子葉は栄養葉の2/3程の長さ。

分布域(県外) : 台湾。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 山地林内のやや明るい岩壁や崖に生える。

生育状況 : 自生地は点在し、個体数は少ないが、局所的に群生する場合がある。2015~2016年の調査で、新たな自生地が数ヶ所見つかった。

学術的価値 : 基準産地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 国内希少野生動物種(2015年)。竹富町希少野生動物種(2017年)。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・加島幹男(追補)

和名 : カンザシワラビ
分類 : フサシダ科 (PPG 科名: フサシダ科)
学名 : *Schizaea dichotoma* (L.) Smith
カテゴリー : 絶滅危惧ⅠB類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く匍匐し、1葉をつける。葉は直立し、叉状に2~3回分岐し、長さ12~30 cm、先に長さ2~4 mmの孢子囊をつける。

分布域(県外) : 沖永良部島、台湾、東南アジア、ミクロネシア。

県内の分布 : 沖縄島、久米島、西表島。

生育環境 : やや乾燥した山地林内に生える。

生育状況 : 沖縄島では宜野座村、恩納村以北の数ヶ所で確認されている。久米島は1ヶ所のみ知られるが、現状不明。西表島では数ヶ所に産するが、いずれの自生地でも個体数は極めて少ない。

減少の要因 : もともと個体数が少ない。森林の伐採。園芸用の採集。

備考 : 竹富町希少野生動物種(2017年)。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.
新里孝和・比嘉 寿, 1976. 北明治山の植物. 沖縄生物学会誌, (14): 99-110.
横田昌嗣・島袋憲一, 1992. 琉球列島植物分布資料10. 沖縄生物学会誌, (30): 81-83.

執筆者名 : 横田昌嗣*・安田恵子*・加島幹男*・横田昌嗣(追補)・比嘉清文(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : フサシダ
分類 : フサシダ科 (PPG 科名: フサシダ科)
学名 : *Schizaea digitata* (L.) Sw.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。2cm 位の根茎から 15~30 枚以上の葉を束生する。葉は単葉、全縁、紙質、線形で長さ 30~40cm、幅 5mm 以下、基部は細く、黒褐色を帯び、三角柱状、裏面は中肋が板状に隆起し、中肋と縁の間に白い線が 2 条ある。葉の先端に、初めは緑色で、後に褐色になる 1.5~2.5cm の線形、紐状のソーラスを十数本房のようにつけ、それぞれには 4 列に球形の孢子囊が並ぶ。

分布域(県外) : 小笠原、インド、熱帯アジア、ニューギニア、ミクロネシア、マダガスカル。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 低地の常緑樹林の明るく、やや乾いた林床や林縁に生える。

生育状況 : 1986 年に中藤成実氏によって西表島で採集された標本が国立科学博物館に収蔵されていたが、長い間存在を見落とされていた。海老原 (2016) によって西表島産の標本があることが示され、再発見が期待されていた。2017 年に 1 ヶ所にごく少数個体が生育することが再確認された。1986 年の発見時には明るい草原であった自生地が、2017 年には遷移の進行で森林になっており、本種の個体数はかなり減少しているほか、全体として個体も小さくなり衰退傾向にあるようである。自生地のすぐそばまでアメリカハマグルマが侵入している。

学術的価値 : 琉球列島では唯一の自生地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。外来種 (アメリカハマグルマ) との競合。遷移の進行。

文献 : 海老原淳, 2016. 日本産シダ植物標本図鑑 I. 学研, 475pp.

執筆者名 : 横田昌嗣・阿部篤志・仲宗根忠樹

和名 : キクモバハラゴケ
分類 : コケシノブ科 (PPG 科名: コケシノブ科)
学名 : *Cephalomanes apiifolium* (Presl) K. Iwats.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く直立し、葉を束生する。葉身は卵形~卵状楕円形、長さ 11~22 cm、幅 8~17 cm、4 回羽状、裂片の幅は広く、葉柄は長さ 8~11 cm、直径 1~1.8 mm、長さ 3~5 mm の褐色の毛がある。孢子囊群は裂片の先につき、コップ状の包膜で包まれ、口辺は時にやや広がる。

分布域(県外) : 屋久島、台湾、東南アジア。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 高地の川沿いの岩上や崖に着生する。

生育状況 : 自生地は限られ、個体数は少ない。芹沢 (1972) によると、「西表島の山地にはそれほど少ないものではない。標高 200~400 m の沢沿いの岩上や崖状地に、イヌタマシダなどに混じって点在しているが、低地には見られない。」とあるものの、今回の調査では確認することができなかった。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 西表島の自生地は、国立公園に指定されており、開発される恐れはない。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 芹沢俊介, 1972. 琉球のシダ植物雑記 (一). 北陸の植物, 20: 5-9.
島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : **サキシマホラゴケ**
分類 : コケシノブ科 (PPG 科名: コケシノブ科)
学名 : *Cephalomanes atrovirens* Presl
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 根茎は短く、ほぼ直立し、葉を束生する。葉身は1回羽状、長さ4~8 cm、ソテツホラゴケに似るが、孢子囊群は葉身の先端部にのみつく。
分布域(県外) : 東南アジア、ミクロネシア、ポリネシア、オーストラリア北部。
県内の分布 : 石垣島、西表島。
生育環境 : 山地林内の陰湿な地上に生える。
生育状況 : 確実な自生地は西表島の1ヶ所だけとする意見(岩槻, 1992)があるが、本種と考えられるものが西表島では数ヶ所、石垣島では1ヶ所で確認されている。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 岩槻邦男, 1992. 日本の野生植物, シダ. 平凡社, 東京, 311pp.
島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・加島幹男(追補)

和名 : **ナンバンホラゴケ (シャムオニホラゴケ)**
分類 : コケシノブ科 (PPG 科名: コケシノブ科)
学名 : *Cephalomanes obscurum* (Blume) K. Iwats. var. *siamense* (Christ) K. Iwats.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし
形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、数葉を束生する。葉は2回羽状。オニホラゴケに似るが、小形で、葉軸に翼があり、包膜の唇部は多少反転して開く点で異なる。
分布域(県外) : 中国南部、インドシナ、タイ。
県内の分布 : 西表島。
生育環境 : 高地林内の岩陰の湿った所に生える。
生育状況 : 自生地は数ヶ所知られるが、個体数は少ない。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.
鎧 禮子, 1985. 西表島産オニホラゴケ属2種についての観察. 聖徳学園短期大学研究紀要, (18): 99-107.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・加島幹男(追補)

和名 : ヒメホラゴケ
分類 : コケシノブ科 (PPG 科名: コケシノブ科)
学名 : *Crepidomanes humilis* (Forster) v.d. Bosch
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の小形の多年草。根茎は長く這い、葉をまばらにつける。葉身は2回羽状、長さ2~5 cm、葉軸に翼があり、葉縁の細胞1~2列が細長くなる。包膜はコップ状で、先端部は開き、胞子嚢床は包膜から長くのびる。
分布域(県外) : 台湾、東南アジア、ミクロネシア、ポリネシア。
県内の分布 : 石垣島、西表島、内離島、与那国島。
生育環境 : 陰湿な林内の岩上に生える。
生育状況 : 西表島ではやや普通であるが、石垣島と与那国島では自生地は限られ、個体数は少ない。内離島の現状は不明。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。森林の開発。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : マメホラゴケ
分類 : コケシノブ科 (PPG 科名: コケシノブ科)
学名 : *Crepidomanes kurzii* (Bedd.) Tagawa et K. Iwats.
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑のごく小形の多年草。根茎は細く這う。葉身は1回羽状、長さ5~8 mm、羽片は3~4対、偽脈があり、偽脈の外に1列の辺縁細胞がある。包膜はコップ状で先はやや開く。
分布域(県外) : 台湾、中国南部、ヒマラヤ、東南アジア、インド、サモア、オーストラリア北部。
県内の分布 : 石垣島、西表島。
生育環境 : 陰湿な森林内の岩上に生える。
生育状況 : 石垣島・西表島とも自生地は少数ヶ所が知られるだけである。微小な植物で発見が難しいため、分布情報は限られる。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : マツバコケシダ
 分類 : コケシノブ科 (PPG 科名: コケシノブ科)
 学名 : *Crepidomanes latemarginale* (Eaton) Copel.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)
 形態の特徴 : 常緑のごく小形の多年草。根茎は細く這う。葉は掌状に3~6裂し、長さ6~20 mm、偽脈があり、偽脈の外に2列の辺縁細胞がある。包膜はコップ状で、孢子嚢床は包膜から長くのびる。
 分布域(県外) : 台湾、中国南部、インドシナ、アンダマン諸島。
 県内の分布 : 石垣島、西表島。
 生育環境 : 陰湿な森林内の岩上に生える。
 生育状況 : 自生地はごく少ない。微小な植物であるため、発見が困難で、分布情報は限られる。
 学術的価値 : 分布域の北限である。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。
 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : コケハイホラゴケ (ニセアミホラゴケ)
 分類 : コケシノブ科 (PPG 科名: コケシノブ科)
 学名 : *Crepidomanes subclathratum* (K. Iwats.) K. Iwats.
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の小形の多年草。根茎は長く這い、間隔をおいて葉を出す。葉身は2~3回羽状、長さ1.5~5 cm、葉身の細胞は格子状に透き通って見え、葉柄には翼がある。包膜は三角形。
 分布域(県外) : 九州(鹿児島県)、奄美大島。
 県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。
 生育環境 : 陰湿な林内の岩上に生える。
 生育状況 : 西表島ではやや普通であるが、石垣島では少ない。沖縄島では自生地はごく限られ、一部はダム建設で失われている。
 学術的価値 : 琉球列島の固有種である。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。森林の伐採。ダム建設による水没。
 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヒメチヂレコケシノブ
 分類 : コケシノブ科 (PPG 科名: コケシノブ科)

学 名 : *Hymenophyllum denticulatum* Sw.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の小形の多年草。根茎は長く這う。葉は長さ 3~8 cm、3 回羽状、葉柄と葉軸にはちぢれた歯状の翼がある。孢子嚢群は葉の上半部の中肋近くに生じ、包膜は 2 唇形、孢子嚢床は長くのびる。

分布域(県外) : 台湾、中国、インドシナ、タイ、インド、スリランカ、ポリネシア。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 陰湿な林内の岩上に生える。

生育状況 : 於茂登岳周辺の限られた地域にのみ産する。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の一部は登山道となっており、踏みつけや採集により減少している。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **ホソバコケシノブ**

分類 : コケシノブ科 (PPG 科名: コケシノブ科)

学 名 : *Hymenophyllum polyanthos* (Sw.) Sw.

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の小形の多年草。根茎は長く這う。葉身は長さ 3~17 cm、2~3 回羽状、葉軸に狭い翼があり、羽片の幅は 0.7 mm、葉柄は翼を欠く。包膜は 2 唇形で、長さ 1 mm。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、屋久島、黒島、奄美大島、徳之島、朝鮮、台湾、中国、ヒマラヤ、フィリピン、インドシナ、マレーシア、アメリカ。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島。

生育環境 : 樹幹上や岩上に生え、沖縄島では特に滝壺周辺の空中湿度が高い場所で見られる。石垣島の現状は不明。

生育状況 : 沖縄県では極めてまれである。

減少の要因 : 森林伐採。もともと自生地と個体数が少ない。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・安田恵子*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **リュウキュウコケシノブ**

分類 : コケシノブ科 (PPG 科名: コケシノブ科)

学 名 : *Hymenophyllum riukiense* Christ

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の小形の多年草。根茎は長く這い、まばらに分岐する。葉身は 3 回羽状、長さ 3~15 cm、裂片は幅 1 mm、葉柄は長さ 2~3 cm、ちぢれた広い翼がある。包膜は 2 唇形で先端には鋸歯がある。

分布域（県外）： 本州（和歌山県）、四国、九州南部、中国南部（海南島）、タイ。
 県内の分布： 沖縄島北部。
 生育環境： 自然林内の河川沿いの岩上に生える。
 生育状況： 自生地は限られる。群生することもあるが、個体数は少ない。
 減少の要因： 森林伐採。ダム建設。

文献： 島袋敬一，1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要，39：101-169.

執筆者名： 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名： マルバコケシダ
 分類： コケシノブ科 (PPG 科名: コケシノブ科)
 学名： *Trichomanes bimarginatum* v. d. Bosch
 カテゴリー： 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴： 常緑のごく小形の多年草。根茎は細く長く這う。葉は長さ 1.5~2 cm、単葉、楕円形、多数の偽脈があり、葉縁に辺縁細胞はない。孢子嚢群は葉の先端に数個つき、包膜はコップ状。
 分布域（県外）： 台湾、東南アジア、インド、ミクロネシア、ポリネシア。
 県内の分布： 魚釣島。
 生育環境： 高地の雲霧帯の巨岩上に生える。
 生育状況： 極めて狭い範囲に産し、個体数は少ない。1991年に生育が確認されているが、それ以降は上陸調査が行われていない。
 学術的価値： 分布域の北限である。
 減少の要因： もともと自生地と個体数が限られている。野生化ヤギの食害による森林環境の悪化。
 保全対策： 野生化ヤギの駆除が急務である。

文献： 島袋敬一，1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要，39：101-169.
 横田昌嗣・島袋憲一，1992. 琉球列島植物分布資料 10. 沖縄生物学会誌，(30)：81-83.

執筆者名： 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名： マメゴケシダ
 分類： コケシノブ科 (PPG 科名: コケシノブ科)
 学名： *Trichomanes motleyi* v. d. Bosch
 カテゴリー： 絶滅危惧 II類 (VU) 環境省カテゴリー： 該当なし

形態の特徴： 常緑のごく小形の多年草。根茎は細く長く這い、接して葉を出す。葉は単葉で先は浅裂し、卵形~長楕円形で、長さ 3~5 mm、多数の偽脈があり、葉縁に 1 列の辺縁細胞がある。孢子嚢群は葉の先端に 1 個つき、包膜はコップ状。
 分布域（県外）： 台湾、東南アジア、スリランカ、ミクロネシア。
 県内の分布： 石垣島、西表島。
 生育環境： 陰湿な林内の岩上または樹幹上に生える。

生育状況 : 自生地は石垣島と西表島でそれぞれ少数ヶ所知られるだけである。ごく微小な植物であるので、発見が難しく、分布情報は限られている。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : セイタカイワヒメワラビ (シマイワヒメワラビ)
分類 : コバノイシカグマ科 (PPG科名: コバノイシカグマ科)
学名 : *Hypolepis alpina* (Blume) Hook.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の大形の多年草。根茎は長く這う。葉は長さ 1.5 m になり、5 回羽状、粘毛が多く生時にはねばつく。孢子嚢群は葉縁につき、裂片の一部でおおわれる。
分布域(県外) : 本州(静岡県)、四国、九州、奄美大島、小笠原、台湾、マレーシア、ニュージーランド、ポリネシア。
県内の分布 : 沖縄島北部。
生育環境 : 向陽地の斜面や林縁に生える。遷移が進行すると衰退する。
生育状況 : 自生地は数ヶ所知られるが、個体数は極めて少ない。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。遷移の進行。

文献 : 中村 直・島袋守成, 1971. 沖縄諸島のシダ植物についての所見. 沖縄生物学会誌, 7 (9) : 41-49.
Serizawa, S., 1975. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (1). Sci. Rep. Takao Mus., 7: 1-53.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : オオイワヒメワラビ
分類 : コバノイシカグマ科 (PPG科名: コバノイシカグマ科)
学名 : *Hypolepis tenuifolia* (Forster) Bernhardt
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅 (EX)

形態の特徴 : 常緑の大形の多年草。根茎は横に這う。葉身は長さ 1.5 m、5 回羽状、あらい歯牙があり、脈上は有毛で、葉柄は長さ 50 cm になる。孢子嚢群は葉縁につき、裂片の一部でおおわれる。
分布域(県外) : 台湾、オーストラリア、ニュージーランド、ポリネシア。
県内の分布 : 沖縄島北部。
生育環境 : 山地の明るい林床や林縁に生える。遷移が進行すると衰退する。
生育状況 : 国頭村の数ヶ所で採集された記録があるが、1980 年以降は確認されていない。今後、攪乱された環境に散発的に出現する可能性がある。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : もともと自生地が限られている。採集。遷移の進行。

文献 : Serizawa, S., 1975. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (1). Sci. Rep. Takao Mus., 7: 1-53.
島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヤンバルフモトシダ
分類 : コバノイシカグマ科 (PPG 科名: コバノイシカグマ科)
学名 : *Microlepia hookeriana* (Wall. ex Hook.) Presl
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長く這い、葉をやや間隔をおいて生じる。葉身は1回羽状、長さ40~70 cm、毛が多く、羽片は20~30対、頂羽片があり、浅い鋸歯がある。孢子嚢群は羽片の縁近くにつく。
分布域(県外) : 台湾、中国、インドシナ、マレーシア、タイ、インド。
県内の分布 : 沖縄島北部。
生育環境 : 高地の林床に生える。
生育状況 : 自生地は北部3村の脊梁山地に数ヶ所知られるだけで、個体数は少ない。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地が少ない。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.
新里孝和, 1974. 与那演習林の植物. “羊歯植物目録”, 琉球大学農学部学術報告, 21: 633-653.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : コウシュンシダ
分類 : コバノイシカグマ科 (PPG 科名: コバノイシカグマ科)
学名 : *Microlepia obtusiloba* Hayata
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧II類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く這う。葉身は2回羽状、長さ30~80 cm、脈上に長い毛があり、羽片はまばらにつく。孢子嚢群は葉縁から少し内側につく。
分布域(県外) : 九州(大隅半島)、屋久島、台湾。
県内の分布 : 沖縄島北部、宮古島、西表島。
生育環境 : 山地の湿った林床に生える。
生育状況 : 各島とも自生地は限られ、個体数は少ない。
減少の要因 : 森林の伐採。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。
備考 : 屋久島と沖縄島の葉身が細長くなるものを変種のホソバコウシュンシダ var. *angustata* Serizawa として区別する意見がある。ホソバコウシュンシダは、国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : ウスバイシカグマ

分類 : コバノイシカグマ科 (PPG 科名: コバノイシカグマ科)

学名 : *Microlepia substrigosa* Tagawa

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は這う。葉は長さ 1~1.5 m、幅 50 cm、葉柄は 70 cm になり、3 回羽状複生、薄い草質、葉脈上に長い毛があり、孢子嚢群は小羽片の縁からやや内側につく。

分布域(県外) : 四国(高知県)、九州(宮崎県、鹿児島県)、屋久島、種子島、黒島、奄美大島、沖永良部島、台湾、中国。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。

生育環境 : 山地の常緑広葉樹林の林床に生える。

生育状況 : 沖縄島北部の 4ヶ所と西表島の 1ヶ所で記録があるが、個体数は極めて少ない。

学術的価値 : 琉球列島では限られた分布を示し、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : 山地林の伐採。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 自生地の一つは国指定の天然保護区域として保護されている。

文献 : 倉田 悟・中池敏之, 1979. 日本のシダ植物図鑑 第 1 巻. 東京大学出版会, 180-183.
Serizawa, S., 1975. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (1). Sci. Rep. Takao Mus., 7: 1-53.

執筆者名 : 横田昌嗣*・高良拓夫*

和名 : ヒメホングウシダ (コバノエダウチホングウシダ)

分類 : ホングウシダ科 (PPG 科名: ホングウシダ科)

学名 : *Lindsaea cambodgensis* Christ

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は細く長く伸び、葉を 5~10 mm 間隔で生じる。葉身は 2~3 回羽状長さ 5~13 cm、小羽片は長さ 3~5 mm、斜菱形。孢子嚢群は葉縁につき、1~3 個。

分布域(県外) : 屋久島、奄美大島、インドシナ。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 陰湿な自然林の林床や河川の源流部の水辺に生える。

生育状況 : 4ヶ所の自生地が知られるが、極めてまれである。

減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地と個体数が少ない。

文献 : 島袋敬一, 1985. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 40: 53-126.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : イヌイノモトソウ

分類 : ホングウシダ科 (PPG 科名: ホングウシダ科)
 学名 : *Lindsaea ensifolia* Sw.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は横走し、葉を接してつける。葉はやや 2 型となり、葉身は 1 回羽状複生、長さ 8~17cm、羽片は 3~8 対、線形~3 角状披針形、長さ 8~17cm、幅は栄養葉では 10~30cm、孢子葉では長さ 5~20cm、孢子嚢群は葉縁につき、包膜は線形。
 分布域 (県外) : 奄美大島、徳之島、台湾、熱帯アジア、ミクロネシア、ポリネシア、オーストラリア北部。
 県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島、小浜島、与那国島。
 生育環境 : リュウキュウマツの低木林の林床や乾いた原野などの日当たりが良い酸性土壌に生える。
 生育状況 : リュウキュウマツを里山として利用していた時代には各地に見られたが、近年は遷移が進行して常緑広葉樹林となり、林床が暗くなったため衰退したり、消失している。開発により自生地も消失している。沖縄島では少数ヶ所、西表島では数ヶ所、小浜島では 1 ヶ所に少数個体が残されているだけである。最も個体数が多い西表島では、自生地に外来種のアメリカハマグルマが侵入しており、絶滅が危惧される。石垣島と与那国島の現状は不明。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。遷移の進行。外来種との競合。
 備考 : 奄美大島では、自生地の開発により絶滅したものと思われる。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣・阿部篤志・豊見山元・加島幹男

和名 : アイノコホラシノブ
 分類 : ホングウシダ科 (PPG 科名: ホングウシダ科)
 学名 : *Sphenomeris intermedia* Lin, Kato et K. Iwats.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : ホラシノブ *S. chinensis* とハマホラシノブ *S. biflora* との雑種起源の複二倍体で中間型を示す。
 県内の分布 : 石垣島、西表島。
 生育環境 : 海岸からやや離れた路傍に生える。
 学術的価値 : 沖縄県の固有種である。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。
 備考 : ホラシノブとハマホラシノブの中間的なものは観察されることがあるが、単純な雑種か複二倍体かを区別することが難しい。

文献 : Lin, S. J., M. Kato & K. Iwatsuki, 1994. A taxonomic study of the fern genus *Sphenomeris* (Lindsaeaceae) in Japan. J. Jpn. Bot., 69: 127-141.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : ワラビツナギ
 分類 : ツルシダ科 (PPG 科名: ナナバケシダ科)
 学名 : *Arthropteris palisotii* (Desv.) Alston
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形態の特徴** : 常緑の多年草。根茎は長く這い、間隔をおいて葉をつける。葉身は1回羽状、長さ16~47 cm、下面には毛があり、浅い波状の鋸歯がある。孢子嚢群は葉縁よりにつき、円腎形の包膜でおおわれる。
- 分布域(県外)** : 奄美大島、徳之島、台湾、中国、東南アジア、ニューギニア、オーストラリア、ポリネシア、アフリカ。
- 県内の分布** : 沖縄島北部、石垣島、西表島。
- 生育環境** : 山林内の樹幹や岩上に生える。沖縄島では主に石灰岩地で見られるが、他の島嶼では非石灰岩地に生育している。
- 生育状況** : 沖縄島では5ヶ所の自生地があるが、個体数は少ない。一部は道路工事で消失した。石垣島では1ヶ所で少数個体が確認されている。2017年に西表島の1ヶ所で新たに確認された。
- 減少の要因** : もともと自生地と個体数が少ない。森林の伐採。園芸用の採集。
- 備考** : 沖縄島の自生地のうち、1ヶ所は沖縄県指定の天然保護区域、1ヶ所は国指定の天然記念物として保護されている。天然保護区域として保護されている自生地で、最近歩道建設が無秩序に進んでおり、歩道周辺を中心に採集や生育環境の悪化が進む恐れがある。現在でも盗掘されており、着生している岩ごと割り取られている事例が確認されている。石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。
- 文献** : 島袋敬一, 1985. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 40: 53-126.
高良美代子・高良拓夫, 2003. 沖縄県シダ植物分布ノート(2). 日本シダの会会報, 3(33): 858-859.
阿部篤志, 2015. 大宜味村中央部石灰岩山地における希少植物調査(最終報告). 事業年報(平成25年度), 沖縄美ら島財団総合研究センター, 34-49.
- 執筆者名** : 横田昌嗣*・豊見山元*・高良拓夫*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・比嘉清文(追補)・加島幹男(追補)

-
- 和名** : スキヤクジャク
- 分類** : ホウライシダ科 (PPG科名: イノモトソウ科)
- 学名** : *Adiantum diaphanum* Blume
- カテゴリー** : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

- 形態の特徴** : 常緑の多年草。根茎は短く、ほぼ直立し、葉を束生する。葉身は単羽状または下部で2回羽状、両面にまばらに毛があり、小羽片は長楕円形かゆがんだ菱形で、上縁には7~8個の鋸歯がある。孢子嚢群は鋸歯の切れ込んだところにつき、包膜は倒心形。
- 分布域(県外)** : 九州(奄岐島、平戸島)、屋久島、小笠原、台湾、中国、フィリピン、東南アジア、ニューギニア、オーストラリア、ニュージーランド、ニューカレドニア、フィジー。
- 県内の分布** : 沖縄島北部。
- 生育環境** : 河川中流部の溪流沿いに生える。
- 生育状況** : 沖縄島北部で1974年に少数個体が1回発見・採集されただけ(島袋, 1985)で、以後は全く確認されていない。発見者と共に実施した2004年の調査では発見することはできなかった。
- 学術的価値** : 沖縄島から屋久島、長崎県の島嶼と、日本国内では跳び跳びの特異な分布をしている。
- 減少の要因** : もともと自生地と個体数が少ない。
- 保全対策** : 自生地は国立公園として保護されているので、開発の恐れは少ない。
- 文献** : 島袋敬一, 1985. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 40: 53-126.
新里孝和, 1994. 与那演習林の樹木. “琉球大学農学部附属演習林創設40周年記念誌”, 琉球大学農学部附属演習林, 125-139.
- 執筆者名** : 新里孝和*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヒメウラジロ
 分類 : ホウライシダ科 (PPG 科名: イノモトソウ科)
 学名 : *Cheilanthes argentea* (S. G. Gmelin) Kunze
 カテゴリー : 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く斜上し、葉を束生する。葉身は長さ3~7 cm、上部は1回羽状、最下羽片のみ2回羽状、裏面は粉白で白色。孢子囊群は葉縁に生じ、連続する包膜でおおわれる。
 分布域(県外) : 本州、四国、九州、種子島?、ロシア東部、朝鮮、台湾、中国、フィリピン、インド。
 県内の分布 : 沖縄島、渡嘉敷島。
 生育環境 : 陽当たりの良い山地の岩上や路傍の石垣の隙間に生える。
 生育状況 : 沖縄島、渡嘉敷島(宮城, 1974)とも近年はまったく確認されていない。2016年に渡嘉敷島のかつて観察されている場所で丹念に探索したが、見つけることはできなかった。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。

文献 : 宮城康一, 1974. 慶良間列島の植物. “沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告書, 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島”, 沖縄自然研究会(編), 沖縄県, 143-168.
 島袋敬一, 1985. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 40: 53-126.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : イワガネソウ
 分類 : ホウライシダ科 (PPG 科名: イノモトソウ科)
 学名 : *Coniogramme japonica* (Thunb.) Diels
 カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長く匍匐する。葉身は1~2回羽状、長さ40~50 cm、羽片は3~5対、羽片は線状楕円形。孢子囊群は脈上につき、包膜はない。
 分布域(県外) : 北海道南部、本州、四国、九州、屋久島、種子島、朝鮮、中国、台湾、インドシナ。
 県内の分布 : 沖縄島北部。
 生育環境 : 山地の石灰岩地の林床に生える。
 生育状況 : 自生地はごく接近した2ヶ所に限られ、個体数は極めて少ない。自生地の近くまで通信施設の建設が進んでいる。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。森林の伐採。

文献 : Shimabuku, K., 1977. New or noteworthy ferns from Mt. Katsuu-dake, Okinawa Island. “Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.”, Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 3: 19-21.
 島袋敬一, 1985. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 40: 53-126.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : シマタキミシダ
 分類 : シシラン科 (PPG 科名: イノモトソウ科)

学 名 : *Antrophyum formosanum* Hieron.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、匍匐または斜上する。葉身は倒披針形、単葉、長さ 15~20 cm、全縁。孢子嚢群は脈上に連続してつく。

分布域(県外) : 奄美大島、台湾、中国。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 空中湿度の高い自然林内の岩上に生える。

生育状況 : 西表島には 3ヶ所の自生地があるが、個体数は著しく減少している。沖縄島では 2007 年に 1ヶ所で少数個体が確認されている。石垣島では 3ヶ所の自生地のうち、1ヶ所はダム建設で自生地の一部が水没した。

減少の要因 : 森林の伐採。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 奄美大島では採石により絶滅したと見なされていたが、2011 年に別の場所で再発見されている。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町特別希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 島袋敬一, 1985. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 40: 53-126.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・加島幹男*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ヒメシシラン
分類 : シシラン科 (PPG 科名: イノモトソウ科)
学 名 : *Vittaria anguste-elongata* Hayata
カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、葉をやや密につける。葉は線状、長さ 5~25 cm、幅 3~4 mm。孢子嚢群は葉縁の外側に出る溝の中につく。

分布域(県外) : 台湾、フィリピン。

県内の分布 : 石垣島、西表島、魚釣島。

生育環境 : 山地の樹幹や岩上に生える。

生育状況 : 西表島と魚釣島では数ヶ所に産するが、個体数は少ない。石垣島では 2012 年に 1ヶ所で確認されている。魚釣島では野生化ヤギによる森林破壊が続いており、絶滅が危惧される。

減少の要因 : 森林の伐採。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が限られている。野生化ヤギによる森林破壊(魚釣島)。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 島袋敬一, 1985. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 40: 53-126.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・松島昭司(追補)

和 名 : シシラン
分類 : シシラン科 (PPG 科名: イノモトソウ科)
学 名 : *Vittaria flexuosa* Fee
カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く匍匐し、鱗片を密生し、葉を密につける。鱗片は線形、褐色～黒褐色、長さ3 mm。葉は線形、長さ20～50 cm、幅4～7 mm、中肋は裏面に隆起し、孢子嚢群は裏面の葉縁の溝の中につく。
- 分布域(県外) : 本州(茨城県以南)、四国、九州、屋久島、中之島、奄美大島、徳之島、台湾、朝鮮、中国、インド、タイ、ミャンマー、インドシナ、マレーシア。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 常緑樹林の樹上や岩上に着生する。
- 生育状況 : 生育地は主に高地に限られ、数ヶ所に産することが知られるが、個体数は少ない。
- 減少の要因 : 森林の伐採。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が限られている。

- 文献 : 倉田 悟・中池敏之, 1987. 日本のシダ植物図鑑 第5巻. 東京大学出版会, 752-760.
Serizawa, S., 1978. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (3). Sci. Rep. Takao Mus., 9: 1-24.
島袋敬一, 1985. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 40: 53-126.

執筆者名 : 横田昌嗣

- 和名 : ミミモチシダ
- 分類 : イノモトソウ科 (PPG科名: イノモトソウ科)
- 学名 : *Acrostichum aureum* L.
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は太く、横走し、葉を束生し、根はかなり肥厚する。葉身は長さ60～200 cmになり、1回羽状、硬い革質で、上部数対の羽片に密に孢子嚢群をつける。
- 分布域(県外) : 台湾、中国南部、フィリピン、東南アジア、マイクロネシア、ポリネシア、熱帯アメリカ、アフリカ。
- 県内の分布 : 石垣島、西表島、与那国島。
- 生育環境 : 日当たりのよいマングローブ湿地に生える。
- 生育状況 : 自生地は石垣島に1ヶ所、西表島に3ヶ所、与那国島に1ヶ所知られるが、個体数は少ない。西表島の1ヶ所では、一部で湿地の開発と乾燥化が進み、個体数が減少している。西表島の1ヶ所は国指定の天然保護区域であるが、外来種のアメリカハマグルマが侵入しており、本種の生育環境が失われつつある。石垣島の自生地の一部は、開発により消失する恐れがある。与那国島の1ヶ所は与那国町の天然記念物として保護されているが、最近の道路工事で一部が破壊されて個体数が減少している。
- 学術的価値 : 分布域の北限であり、ミミモチシダ属はマングローブ域に生える唯一のシダ植物である。西表島の個体群は、他の島嶼のものと遺伝的に異なっているとの報告があり、現在詳細な比較研究が進められている。
- 減少の要因 : もともと自生地が少ない。自生地の開発。帰化植物との競合。
- 保全対策 : 石垣島の自生地は天然記念物として保護すべきである。西表島の自生地では、アメリカハマグルマを早急に駆除する必要がある。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

- 文献 : 島袋敬一, 1985. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 40: 53-126.
横田昌嗣・新城和治・比嘉清文, 1997. 琉球列島植物分布資料14. 沖縄生物学会誌, (35): 49-54.
赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究(与那国島・石垣島). “事業年報(平成27年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : **アシガタシダ**

分類 : イノモトソウ科 (PPG 科名: イノモトソウ科)

学名 : *Pteris grevilleana* Wall. ex Agardh

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く斜上する。葉身は2回羽状深裂、卵形からほぼ円形、長さ8~20 cm、脈間に偽脈があり、1個の頂羽片と1~2対の側羽片があり、下の羽片はさらに2小羽片に分かれる。

分布域(県外) : 屋久島、徳之島、台湾、中国、インドシナ、タイ、インド、フィリピン、ボルネオ。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の陰湿な林床に生える。

生育状況 : 沖縄島では2ヶ所の自生地があるが、個体数は極めて少なく、以前確認されている場所で探索を行ったが、今回の調査では発見することができなかった。そのうちの1ヶ所では採集により絶滅した可能性がある。石垣島と西表島では近年確認されておらず、現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。森林の伐採。園芸用の採集。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015年)。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 島袋敬一, 1985. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 40: 53-126.

島袋敬一・豊見山元, 1985. 琉球列島植物分布資料1. 沖縄生物学会誌, (23) : 43.

横田昌嗣・新城和治・島袋敬一, 1990. 琉球列島植物分布資料7. 沖縄生物学会誌, (27) : 53-55.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : **マツザカシダ**

分類 : イノモトソウ科 (PPG 科名: イノモトソウ科)

学名 : *Pteris nipponica* Shieh

カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く匍匐し葉を束生する。葉は2型となり、長さ70~100 cm、1回羽状、1個の頂羽片と1~2対の側羽片があり、下の羽片は2岐し、通常葉の中肋に沿って白斑が入る。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島。

県内の分布 : 沖縄島(北部~南部)。

生育環境 : 沖縄島では点々と数ヶ所に産し、低地の主に石灰岩地の林床に生える。

生育状況 : 中部~南部の自生地は、開発により消失しつつある。沖縄島北部では、自生地が開発される恐れがある。

学術的価値 : 分布域の南限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。森林の伐採。園芸用の採集。

文献 : 島袋敬一, 1985. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 40: 53-126.

横田昌嗣・新城和治・比嘉清文, 1997. 琉球列島植物分布資料14. 沖縄生物学会誌, (35) : 49-54.

阿部篤志, 2015. 大宜味村中央部石灰岩山地における希少植物調査 (最終報告). 事業年報 (平成 25 年度), 沖縄美ら島財団総合研究センター, 34-49.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : オオタニワタリ

分類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)

学名 : *Asplenium antiquum* Makino

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、多数の葉を放射状に出す。葉は単葉、長さ 1 m、幅 15 cm に達する。孢子嚢群は中肋から葉縁の 2/3 より葉縁側に達する。

分布域 (県外) : 伊豆諸島、紀伊半島、四国、九州、朝鮮、台湾、中国。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 国頭村から名護市にかけて高地の樹上や岩上に生える。沖縄島ではシマオオタニワタリと混生する場所があるが、オオタニワタリがより高地に生える傾向がある。

生育状況 : 自生地は限られ、乱獲により個体数は激減している。一部の自生地は、通信施設建設で失われた。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。森林の伐採。園芸用の採集。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : タイワンホウビシダ

分類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)

学名 : *Asplenium apogamum* Murakami et Hatanaka

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 常緑の多年草。葉は 1 回羽状、長さ 12~30 cm。孢子嚢群は線形、円形の包膜がある。ナンゴクホウビシダ *A. cataractarum* に似ており、根茎は横走するが、それほど長くならず、葉を 2~3 cm 間隔でやや接してつける。

分布域 (県外) : 奄美大島、徳之島、沖永良部島、台湾、中国南部、タイ。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 陰湿な山地林内の岩上や地上に生える。石灰岩地にも非石灰岩地にも生える。

生育状況 : 近年になって確認された種で、ナンゴクホウビシダと混同されていたため分布に関する情報が少ないが、ナンゴクホウビシダよりは自生地は少ない。沖縄島では 2014 年に 2 ヶ所で、石垣島では 2017 年に 1 ヶ所で確認されている。沖縄島の 1 ヶ所は、ダム建設により水没する可能性がある。西表島の現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。森林の伐採。ダム建設による水没。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : Murakami, N. & S. Hatanaka, 1988. A revised taxonomy of the *Asplenium unilaterale* complex in Japan and Taiwan. J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sect. III, 14: 183-199.

Murakami, N. & S. Hatanaka, 1988. Chemotaxonomic studies of *Asplenium* sect. *Hymenasplenium* (Aspleniaceae). Bot. Mag. Tokyo, 101: 353-372.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヒメタニワタリ

分類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)

学名 : *Asplenium cardiophyllum* (Hance) Baker

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く這い、細い柄の先に長さ 3~12 cm の葉をつける。葉は単葉、卵状披針形、心脚、全縁。孢子嚢群は線形で、中肋と葉縁の間に位置する。

分布域(県外) : 小笠原(母島)、中国南部(海南島)。

県内の分布 : 北大東島。

生育環境 : 低地の石灰岩の崖に生える。

生育状況 : 1ヶ所にごく少数の個体が生育しているだけである。自生地は国の天然記念物に指定されているが、自生地の周辺までサトウキビ畑の開墾が進み、乾燥化が進み、林内が明るくなって生育環境が悪化している。従来知られていた小集団は、著しく衰退し、個体が小さくなり、個体数も減少しているが、これまで知られていなかった小集団が 2014 年に発見された。

学術的価値 : 著しい隔離分布を示し、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。森林の乾燥化による生育環境の悪化。園芸用の採集。

保全対策 : 人工増殖を検討する必要がある。現在保全されている自生地だけでは個体数の維持は難しいと考えられる。周辺環境を幅広く保護区に指定するなど、対策を検討する必要がある。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物(2008年)保護増殖事業計画(2009年)。

文献 : 山崎 敬, 1972. 高等植物分布資料(78), ヒメタニワタリ. 植物研究雑誌, 47: 352.

山崎 敬, 1973. 大東島における貴重な植物. “大東島天然記念物特別調査報告”, 文化庁, 43-51.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : ウスバクジャク

分類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)

学名 : *Asplenium cheilosorum* Kunze ex Mett.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は横走し、径 2.5~4 mm、葉を接してつける。葉身は 1 回羽状、長さ 20~40 cm、幅 4~5 cm、羽片は 25~35 対、羽片の上側は羽状に浅裂する。孢子嚢群は羽片の鋸歯の中につき、長さ 2 mm。

分布域(県外) : 屋久島、種子島、奄美大島、台湾、中国、インド、熱帯アジア。

県内の分布 : 沖縄島、西表島。

生育環境 : 山地の沢筋の陰湿な斜面に生える。

生育状況 : 沖縄島では 2005 年と 2007 年に 1ヶ所で確認されている。西表島の現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。森林伐採。園芸用の採集。

備考 : 沖縄島の自生地は、国指定の天然保護区域であるが、採集により個体数が減少している。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : ラハオシダ

分類 : チャセンシダ科 (PPG科名: チャセンシダ科)

学名 : *Asplenium excisum* Presl

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は横走するがあまり長くは這わない。葉身は1回羽状、長さ30~40 cm、幅7~18 mm、羽片は15~27対。孢子嚢群は中肋の両側につく。

分布域(県外) : 小笠原、奄美大島、台湾、中国、熱帯アジア、アフリカ。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 陰湿な自然林の林床に生える。石灰岩地にも非石灰岩地にも生える。

生育状況 : 沖縄島で数ヶ所、石垣島で数ヶ所、西表島で1ヶ所の自生地が知られているが、個体数は少ない。沖縄島の一部の自生地は、ダム建設で水没した。石垣島の1ヶ所は、公園整備により生育環境が悪化し、個体数が激減している。西表島では、おそらく採集の要因で、個体が確認できなくなってしまった。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。森林の伐採。園芸用の採集。ダム建設による水没。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : Murakami, N. & S. Hatanaka, 1988. Chemotaxonomic studies of *Asplenium* sect. *Hymenasplenium* (Aspleniaceae). Bot. Mag. Tokyo, 101: 353-372.

沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 大保ダム建設発生土の処分候補地に係る生物環境調査データ(陸域・海域). 沖縄建設弘済会, 3-14, 117-135, 277-286, 349-373.

沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.

新里孝和, 1974. 与那演習林の植物. “羊歯植物目録”, 琉球大学農学部学術報告, 21: 633-653.

阿部篤志, 2015. 大宜味村中央部石灰岩山地における希少植物調査(最終報告). 事業年報(平成25年度), 沖縄美ら島財団総合研究センター, 34-49.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : トラノオシダ

分類 : チャセンシダ科 (PPG科名: チャセンシダ科)

学名 : *Asplenium incisum* Thunb.

カテゴリー : 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く斜上し、葉を束生する。葉はやや2型となり、葉身は2~3回羽状、長さ10~50 cm。孢子嚢群は短い線形で羽軸よりにつく。

分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、黒島、奄美大島、ロシア、朝鮮、中国、台湾。

県内の分布 : 沖縄島中部、宮古島。

生育環境 : 低地の明るい林床、岩上、石垣の隙間に生える。

生育状況 : 近年はまったく確認されていない。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。園芸用の採集。

備考 : 沖縄島の自生地は城跡公園であり、公園整備や除草の際、本種に留意する必要がある。

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : マキノシダ

分類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)

学名 : *Asplenium loriceum* Christ ex C. Chr.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、葉を束生する。葉は1回羽状、長さ15~40 cm になり、1個の頂羽片と2~5対の側羽片を持ち、羽片は長さ10~15 cm。孢子嚢群は線形で、長さ7 mm。

分布域(県外) : 台湾、中国、インドシナ。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 山地の川沿いの岩上に生える。

生育状況 : 4ヶ所の自生地が知られるが、個体数は極めて少ない。その内2ヶ所は、自生地周辺まで開発が進んでいる。

学術的価値 : 国内唯一の産地で、分布域の北限である。

減少の要因 : 森林の伐採。園芸用の採集。もともと自生地が少ない。

保全対策 : 本種の自生地には、他の貴重種も多く産することから、自生地全体を文化財として指定し、保全する必要がある。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物(2016年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : カミガモシダ

分類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)

学名 : *Asplenium oligophlebium* Baker var. *oligophlebium*

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く斜上し、葉を束生する。葉身は1回羽状、長さ7~25 cm、羽片の前側基部に耳片が発達し、葉縁はやや深く切れこみ、葉軸の先に不定芽をつける。孢子嚢群は葉縁と主脈の間につく。

分布域(県外) : 本州(近畿以西)、四国、九州、屋久島、奄美大島、徳之島。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の地上や岩上に生える。

生育状況 : 1887年に田代安定により採集されたが、以後は全く確認されておらず、現状不明。

学術的価値 : 分布域の南限である。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。園芸用の採集。森林伐採。

備考 : 変種のエジマチャセンシダ var. *iezimense* (Tagawa) Tagawa が伊江島に産する。

文献 : 立石庸一・松村俊一・山城 考・新城和治, 2004. 琉球列島植物分布資料 17. 沖縄生物学会誌, (42) : 61-67.

執筆者名 : 立石庸一*・松村俊一*

和名 : イエジマチャセンシダ

分類 : チャセンシダ科 (PPG科名: チャセンシダ科)

学名 : *Asplenium oligophlebium* Baker var. *iezimense* (Tagawa) Tagawa

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。基本変種のカミガモンシダに似るが、羽片は長三角形で、基部は広くさび形になる点で区別される。

県内の分布 : 伊江島。

生育環境 : 岩壁や崖面に生える。

生育状況 : 生育場所が1ヶ所のごく狭い範囲に限られ、個体数も極めて少ない。

学術的価値 : 伊江島の固有変種。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2017年)。

文献 : 初島住彦・宮城康一, 1974. 伊江島の植物. “沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告, 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島”, 沖縄県, 57-76.

島袋守成・中村直, 1976. 伊江島のシダ植物について. 沖縄生物学会誌, (14) : 71-77.

新里孝和・高原建二, 2002. “伊江島の植物図鑑”, 伊江村教育委員会, 201pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : トキワトラノオ

分類 : チャセンシダ科 (PPG科名: チャセンシダ科)

学名 : *Asplenium pekinense* Hance

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、葉を束生する。葉身は2~3回羽状、長さ10~20 cm、小羽片の先は尖る。葉柄の鱗片は褐色で、基部に毛がある。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、屋久島?、ロシア東部、朝鮮、中国、台湾。

県内の分布 : 沖縄島中~南部。

生育環境 : 低地の石灰岩の石垣に生える。

生育状況 : 近年までまったく確認されていなかったが、1998年に沖縄島南部で、1999年に沖縄島中部でそれぞれ少数個体が再確認されている。いずれの自生地も世界文化遺産に指定されている城跡や墓地で、公園管理のため石垣の除草が頻繁に行われており、沖縄島中部の自生地では除草により絶滅した可能性がある。沖縄島南部では、除草の際に配慮がなされており、現状では個体数は安定している。

減少の要因 : もともと個体数がきわめて少ない。草刈り。

文献 : 島袋敬一, 1973. 琉球列島におけるシダ植物の分布 (1). 沖縄生物学会誌, 10 (12) : 37-42.

島袋守成, 1986. 座喜味城跡の植物. “国指定史跡座喜味城跡整備環境事業報告書”, 読谷村教育委員会, 74-81.

執筆者名 : 横田昌嗣*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)

和名 : コウザキシダ
分類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)
学名 : *Asplenium ritoense* Hayata
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、斜上または直立し、葉を束生する。葉身は2~4回羽状、長さ10~20 cm、三角状披針形。孢子嚢群は線形で、裂片に1個ずつつく。
分布域(県外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、奄美大島、小笠原、朝鮮、中国、台湾。
県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島、与那国島。
生育環境 : 山地の岩壁に生える。
生育状況 : 石垣島では自生地の数はやや多いが、他の島では自生地は限られ、個体数は少ない。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。森林の伐採。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : ウスイロホウビシダ
分類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)
学名 : *Asplenium subnormale* Copel.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長く横走する、葉身は1回羽状で、ふつう長さ10~25 cm、幅7 cm前後。タイワンホウビシダ *A. apogamum* とラハオシダ *A. excisum* の中間のような形で、小さい。
分布域(県外) : 沖永良部島?、フィリピン、マレーシア。
県内の分布 : 沖縄島南部?、与那国島。
生育環境 : 石灰岩の岩上や地上に生える。
生育状況 : 与那国島では古くから知られていた1ヶ所では確認できなくなっていたが、2005年に別の2ヶ所で確認され、その後別の1ヶ所でも見つかっている。いずれの自生地でも個体数は極めて少ない。沖縄島の現状は不明で、絶滅した可能性がある。

学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。園芸用の採集。
備考 : 真のウスイロホウビシダは与那国島だけに産し(海老原, 2016)、沖永良部島と沖縄島のものは別種(タイワンホウビシダ *A. apogamum*) であるとする意見がある。国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2017年)。

文献 : 初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新知見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.
海老原淳, 2016. 日本産シダ植物標本図鑑 I. 学研, 475pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : オトメシダ
分類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)
学名 : *Asplenium tenerum* Forster
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く横走する。葉身は1回羽状、側羽片は20対程度あり、長さ25~40 cm、幅4~8 cmになり、鋸歯があり、葉柄は長さ10~20 cm。孢子嚢群は中肋から葉縁に達する。

分布域(県外) : 小笠原、台湾、東南アジア、ニューギニア、ミクロネシア、ポリネシア。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 山地の岩上に生える。

生育状況 : 自生地はごく狭い範囲に1ヶ所が知られるだけである。第一発見者と共に2015~2017年にかけて3回にわたって最初に発見された自生地周辺を探索したが、再発見することはできなかった。自生地周辺は史跡・名勝に指定されており、開発の恐れはないので、調査を続ければ再発見される可能性はある。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物(2018年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・豊見山元(追補)・松島昭司(追補)

和名 : アオガネシダ
分類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)
学名 : *Asplenium wilfordii* Mett. ex Kuhn
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、斜上から直立する。葉身は2~4回羽状、長さ10~35 cm、幅5~12 cm。孢子嚢群は線形で、裂片に1個ずつつく。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、奄美大島、徳之島、朝鮮、台湾、中国。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 川沿いの崖や樹上に生える。

生育状況 : 沖縄県では国頭村に1ヶ所の自生地が知られるだけである。近年確認されておらず、現状は不明。沖縄島北部から記録されたオオアオガネシダ *Asplenium austrochinense* Ching は、アオガネシダであるという見解が公表されている(海老原, 2016)。この記録を含めても、アオガネシダの沖縄島からの記録は2回だけになる。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。森林伐採。ダム建設による自生地の水没。

備考 : 奄美諸島では山地にやや普通に生える。

文献 : 海老原淳, 2016. 日本産シダ植物標本図鑑 I. 学研, 475pp.
島袋敬一, 1976. 琉球列島におけるシダ植物の分布(3). 沖縄生物学会誌, (14) : 89-97.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : **クルマシダ**
分類 : チャセンシダ科 (PPG科名: チャセンシダ科)
学名 : *Asplenium wrightii* Eaton ex Hook.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く直立し、葉を束生する。葉身は1回羽状、長さ30~80 cm、幅15~30 cm、羽片は10数対で、線状披針形、尾状鋭尖頭。孢子嚢群は少し曲がった線形。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、奄美大島、徳之島、朝鮮、中国、台湾、インドシナ、フィリピン。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の陰湿な岩上や崖に生える。

生育状況 : 自生地は狭い範囲に数ヶ所知られるだけで、個体数は極めて少ない。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。森林の伐採。園芸用の採集。

備考 : 自生地の多くは、国の天然保護区域に指定され、保護されている。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : **オオギミシダ**
分類 : シシガシラ科 (PPG科名: シシガシラ科)
学名 : *Woodwardia harlandii* Hook.
カテゴリー : 絶滅危惧 II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は細く、長く横走し、葉をまばらにつける。葉はやや2型、栄養葉は単葉か1対か2対の側羽片のある1回羽状、長さ20~40 cmになり、孢子葉は1回羽状、大きな頂羽片と2~3対の側羽片があり、栄養葉より大きくなる。孢子嚢群は線形で、羽軸の両側に接してならぶ。

分布域(県外) : 屋久島、台湾、中国南部、インドシナ。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 高地の林床に生えるが、東村では低地でも確認されている。

生育状況 : 沖縄島では5ヶ所に分布し、うち1ヶ所は群生するが、他の4ヶ所では個体数は少ない。石垣島では1ヶ所、西表島では1ヶ所に産することが知られるが、いずれも個体数は少ない。

減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地が限られている。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : **オキナワアツイタ**
分類 : ツルキジノオ科 (PPG科名: オシダ科)
学名 : *Elaphoglossum callifolium* (Blume) Moore
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く這い、褐色の鱗片を密生する。葉は接近して出て、単葉、2型となり、栄養葉の葉身は長さ18~24 cm、幅4~5 cm、厚い革質、葉柄は長さ5~11 cm、孢子葉は栄養葉と

同長でやや細く、下面一面に孢子囊をつける。

- 分布域（県外）：台湾、フィリピン、マレーシア。
 県内の分布：沖縄島北部。
 生育環境：山地の樹上に生える。
 生育状況：1ヶ所のみに自生し、個体数は極めて少ない。近年は全く確認されていない。
 学術的価値：分布域の北限である。
 減少の要因：森林伐採。もともと自生地が限られている。

文献：豊見山元, 1991. オキナワアツイタ (新称) *Elaphoglossum callifolium* (Blume) Moore 沖縄に産す. 沖縄生物学会誌, (29) : 45-47.

執筆者名：横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

- 和名：ツルキジノオ
 分類：ツルキジノオ科 (PPG 科名：ツルキジノオ科)
 学名：*Lomariopsis spectabilis* (Kunze) Mett.
 カテゴリー：絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴：常緑の多年草。根茎は非常に長くのびる。葉は2型となり、1回羽状、葉身は長さ25~50 cm、1個の頂羽片と3~10対の側羽片があり、羽片は狭線形、長さ6~9 cm。孢子囊群は孢子葉の裏に一面につく。

- 分布域（県外）：小笠原、台湾、フィリピン、中国南部（海南島）、ベトナム、ボルネオ、ジャワ、スマトラ。
 県内の分布：石垣島、西表島、与那国島。
 生育環境：山地の樹幹や岩上に着生する。
 生育状況：石垣島は4ヶ所、西表島は4ヶ所、与那国島は2ヶ所で確認されているが、いずれの地域でも極めてまれである。県内では小型の個体が多く、孢子葉をつけることは少ないが、与那国島の自生地で孢子葉をつけた個体が確認されている。
 学術的価値：分布域の北限である。
 減少の要因：もともと自生地が限られている。森林の伐採。園芸用の採集。
 備考：小笠原諸島のは、オガサワラツルキジノオ *L. boninensis* Nakai として区別する意見もある。石垣市自然環境保全条例保全種（2015年）。竹富町特別希少野生動物種（2017年）。

文献：倉田 悟・中池敏之, 1985. 日本のシダ植物図鑑 第4巻. 東京大学出版会, 700-703.
 Serizawa, S., 1977. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (2). Sci. Rep. Takao Mus., 8: 1-30.

執筆者名：横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・加島幹男(追補)・阿部篤志(追補)

- 和名：コミダケシダ
 分類：オシダ科 (PPG 科名：オシダ科)
 学名：*Ctenitis eatoni* (Bak.) Ching var. *iriomotensis* H.Ito
 カテゴリー：絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴：常緑の多年草。根茎は短く斜上し、葉を束生する。葉は1~2回羽状、最下の羽片はやや大きく切れ

こむ。孢子囊群は円腎形で、有毛の包膜で包まれる。基本変種のホラカグマに似るが小形で、葉身は細長い三角形となり、長さ 10~12 cm、幅 5 cm、羽片は小さく短い。

- 県内の分布 : 西表島。
- 生育環境 : 西表島の各地に広く産し、山地の湿った非石灰岩の岩肌に着生する。
- 生育状況 : 崖面に群生し、自生地は数ヶ所確認されている。自生地はすべて国立公園内にあり、開発される恐れは少ないが、基準産地は登山道沿いにあり、踏みつけと採集によって個体数が激減している。
- 学術的価値 : 西表島の固有変種。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。
- 備考 : 基本変種のホラカグマに似ており、移行形が知られる。ホラカグマは主に石灰岩上に生えるが、本変種は砂岩上に生える。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文献 : 中村 直・島袋守成, 1971. 沖縄諸島のシダ植物についての所見. 沖縄生物学会誌, 7 (9) : 41-49.
横田昌嗣・新城和治・比嘉清文, 1997. 琉球列島植物分布資料 14. 沖縄生物学会誌, (35) : 49-54.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・加島幹男*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : リュウキュウシダ
- 分類 : オシダ科 (PPG 科名 : オシダ科)
- 学名 : *Dryopteris hasseltii* (Blume) C. Chr.
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く斜上し、葉を束生する。葉は長さ 50~70 cm、3 回羽状、小羽片は深く切れ込む。孢子囊群は小羽片に 1~4 個つく。ナガバノイタチシダ *D. sparsa* に似るが、包膜を欠き、羽片基部の小羽片が内先に出る点でオシダ属の他種と異なり、カナワラビ属に似る。

- 分布域(県外) : 屋久島、台湾、東南アジア、ヒマラヤ、ニューギニア。
- 県内の分布 : 沖縄島北部、伊江島。
- 生育環境 : 沖縄島では高地のやや湿った林床に生える。伊江島では洞の壁に生育していたというが、現在は見られない。
- 生育状況 : 沖縄島からは 1923 年の記録では中頭からも報告されているが、現在確実な産地としては北部の 1ヶ所だけである。伊江島については現状不明。
- 学術的価値 : 希産種であり、オシダ属とカナワラビ属をつなぐ種として注目されている。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。園芸用の採集。
- 備考 : IUCN カテゴリー: Endangered (EN)

文献 : Serizawa, S., 1977. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (2). Sci. Rep. Takao Mus., 8: 1-30.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : タヌキシダ
- 分類 : オシダ科 (PPG 科名 : オシダ科)
- 学名 : *Dryopteris labordei* (Christ) C. Chr.
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、葉を束生する。葉は長さ 60 cm になり、三角状広卵形、2 回羽状、葉柄は淡褐色。孢子嚢群は辺縁よりにつき、包膜は円腎形。同地域に分布するホコザキベニシダ *D. erythrosora* var. *koidzumiana* によく似るが、本種は羽片数が少なく、鱗片は濃色で硬い。
- 分布域(県外) : 台湾、中国。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 高地の自然林の林床に生える。
- 生育状況 : 自生地はごく狭い範囲の 1 ヶ所に限られ、個体数は少ない。
- 学術的価値 : 分布域の北限で、日本で唯一の産地である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。
- 備考 : 自生地は国の天然保護区域に指定されており、開発の恐れはない。

文献 : Serizawa, S., 1977. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (2). Sci. Rep. Takao Mus., 8: 1-30.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **ムラサキベニシダ**
- 分類 : オシダ科 (PPG 科名 : オシダ科)
- 学名 : *Dryopteris purpurella* Tagawa
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、数葉を束生する。葉は芽立ちの時期は鮮紅紫色を呈し、葉身は長さ 30 ~45 cm、幅 20~35 cm、卵状三角形、葉身上部は急に細くなってホコ状となり、2 回羽状複生、葉柄と葉軸は紅紫色を帯び、葉柄は長さ 20~30 cm、小羽片は羽軸に直角に近い角度でつき、鱗片は黒褐色~黒色。孢子嚢群は中肋と辺縁の中間につき、包膜は円腎形、径 1.2 mm で小さい。
- 分布域(県外) : 本州(和歌山県、広島県)、四国(愛媛県、高知県)、九州、屋久島、朝鮮、中国。
- 県内の分布 : 石垣島。
- 生育環境 : 高地の常緑広葉樹林の林床に生える。
- 生育状況 : 自生地は 1 ヶ所知られるだけであり、ごく狭い範囲に生育し、個体数は極めて少ない。
- 学術的価値 : 琉球列島では極めて限られた分布を示し、植物地理学上貴重である。日本本土のムラサキベニシダとは形態的に異なることが指摘されており、詳細な研究が必要である。
- 減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。
- 保全対策 : 自生地は名勝および水源涵養林として保護されているが、本種の自生地周辺には、近年通信施設が数多く建設されており、生育環境が減少・悪化している。本種をはじめ数多くの貴重種が集中する雲霧帯などの山頂部の開発は、避けるべきである。本種の生育地は、天然記念物に指定するなどして保護すべきである。
- 備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種(2015 年)。

文献 : 倉田 悟・中池敏之, 1985. 日本のシダ植物図鑑 第 4 巻. 東京大学出版会, 540-543.
Serizawa, S., 1977. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (2). Sci. Rep. Takao Mus., 8: 1-30.

執筆者名 : 横田昌嗣*・高良拓夫*・横田昌嗣(追補)

和名 : **ウスバシダモドキ**

分類 : オシダ科 (PPG 科名 : ナナバケシダ科)
学名 : *Tectaria dissecta* (G. Forst.) Lellinger
カテゴリー : 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー : 絶滅 (EX)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、直立し、葉を束生する。葉は2回羽状深裂、両面に毛が多く、葉身は長さ45~60 cm、三角状長卵形、最下羽片の下側の小羽片は最も大きくなり、深裂し、葉柄は長さ20~40 cm、褐色の鱗片がつく。孢子嚢群は円形、包膜は円腎形。ウスバシダによく似ており、葉全体に毛を密生するが、葉質はウスバシダ *T. devexa* よりやや厚い。

分布域(県外) : 台湾、フィリピン、マレーシア、インド、ポリネシア、オーストラリア。

県内の分布 : 沖縄島中部。

生育環境 : 湿った林床に生える。

生育状況 : 沖縄からは1度の採集記録しかなく、現在は発見されていない。

学術的価値 : 国内唯一の産地で、分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。自生地の公園化に伴う下草刈り。

保全対策 : 自生地は国指定史跡の城趾公園であり、公園整備や除草をする際、本種のような貴重種には配慮が必要である。

文献 : Serizawa, S., 1978. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (3). Sci. Rep. Takao Mus., 9: 1-24.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : コモチナナバケシダ

分類 : オシダ科 (PPG 科名 : ナナバケシダ科)

学名 : *Tectaria fauriei* Tagawa

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、葉を束生する。葉は1回羽状、長さ50 cmになり、頂羽片と1~3対の側羽片がある。頂羽片の基部に無性芽をつけ、中軸に広い翼があり、最下羽片は2裂する。孢子嚢群は円形で、包膜は盾形。カワリウスバシダの質感で、形はナナバケシダやハルランシダに似るが、羽片付け根中肋より無性芽を生じる。

分布域(県外) : 徳之島、沖永良部島、台湾、インドシナ、タイ。

県内の分布 : 沖縄島中部。

生育環境 : 奄美諸島や台湾では石灰岩地の林床に生えるが、沖縄島では非石灰岩地に生える。

生育状況 : 自生地は1ヶ所のみ知られるが、自生地は米軍の射爆場となっており、立ち入ることができないため現状不明。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。軍事演習による自生地の破壊。園芸用の採集。

備考 : 特定国内希少野生動植物種に指定されており、採集や無許可の譲渡などは法律で禁じられている。特定国内希少野生動植物 (2016年)。

文献 : 中村 直, 1958. 琉球新産シダについて. 琉球大学生物クラブ誌, 2 (2) : 18-24.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : ナガバウスバシダ (サキミウスバシダ)

- 分 類 : オシダ科 (PPG 科名 : ナナバケシダ科)
- 学 名 : *Tectaria kusukusensis* (Hayata) Lellinger
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR)
- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、葉を束生する。葉は長さ 40~100 cm、2 回羽状、長楕円形、最下羽片は最も大きく、深く切れこみ、葉脈は遊離する。孢子嚢群は円形で、包膜は円腎形。この仲間では羽片がこまかく切れ込み、一見すると大きなケホシダのように見える。
- 分布域 (県外) : 台湾、中国南部 (海南島)、インドシナ。
- 県内の分布 : 石垣島。
- 生育環境 : 低地から高地の陰湿な林床や崖面に生える。
- 生育状況 : 自生地は 3 ヶ所知られるだけで、個体数は極めて少ない。自生地の 1 ヶ所は開発の恐れはないが、他の 2 ヶ所は開発により消失する恐れがある。
- 学術的価値 : 分布域の北限で、国内では唯一の産地である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。森林伐採。ダム建設による自生地の水没。
- 備 考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2016 年)。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。
- 文 献 : Serizawa, S., 1977. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (2). Sci. Rep. Takao Mus., 8: 1-30.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

- 和 名 : カレンコウアミシダ
- 分 類 : オシダ科 (PPG 科名 : ナナバケシダ科)
- 学 名 : *Tectaria simonsii* (Bedd.) Ching
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし
- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、葉を束生する。葉は長さ 1 m に達し、1 回羽状で、頂羽片は明瞭、側羽片は 2~3 対、最下羽片はさらに切れ込み、葉柄と葉軸は黒褐色。孢子嚢群は羽片中に不規則に散在し、無毛で円腎形の包膜に包まれる。
- 分布域 (県外) : 沖永良部島、台湾、中国、インドシナ、タイ、インド、スリランカ。
- 県内の分布 : 伊平屋島、粟国島、沖縄島北部、南大東島、伊良部島、西表島、波照間島。
- 生育環境 : 主として石灰岩地の常緑広葉樹林の林床に生える。
- 生育状況 : 伊平屋島の現状は不明。粟国島では 2010 年に 1 ヶ所で数個体が、波照間島では 2015 年に 1 ヶ所で数個体が確認された。沖縄島では数ヶ所に自生するが、個体数は少ない。南大東島では 1 ヶ所に少数個体を産する。今回の調査で新たに、伊良部島では 2 ヶ所で少数個体が、西表島では 2 ヶ所で少数個体が確認された。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。自生地の開発。園芸用の採集。
- 保全対策 : 本種が自生する低地の石灰岩地の森林は、開発されることが多いため、市町村や県の天然記念物に指定するなどして保全する必要がある。
- 備 考 : 沖縄島の自生地のうち、1 ヶ所は沖縄県指定の天然保護区域、1 ヶ所は国指定の天然記念物として保護されている。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文 献 : 豊見山元, 1994. 久米島のシダ植物. “久米島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術工芸・建築—”, 沖縄県立博物館 (編), 沖縄県立博物館, 12-25.
 豊見山元, 1998. 波照間島のシダ植物相. 波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美

術工芸一，沖繩県立博物館，25-31.

阿部篤志. 2015. 大宜味村中央部石灰岩山地における希少植物調査（最終報告）. 事業年報（平成25年度），沖繩美ら島財団総合研究センター，34-49.

阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖繩諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査II（栗国島・渡名喜島）. 日本植物園協会誌, (51): 80-85.

横田昌嗣・阿部篤志・佐藤宣子, 2016. 宮古諸島から新たに見つかった維管束植物. 宮古島市総合博物館紀要, (29): 121-128.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)・加島幹男(追補)・佐藤宣子(追補)

和名 : ヒメミゾシダ

分類 : ヒメシダ科 (PPG科名 : ヒメシダ科)

学名 : *Stegnogramma gymnocarpa* (Copel.) K. Iwats. subsp. *amabilis* (Tagawa) K. Iwats.

カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 常緑の小形の多年草。根茎は短く這う。葉は1回羽状複生、狭披針形、長さ6~13 cm、脈上に毛が多い。胞子嚢群は線状楕円形、黒色。類似の環境に生えるコシケシダに似るが包膜を欠き、大きさはかなり変化に富む。

分布域(県外) : 本州(中国)、四国(愛媛県、高知県)、九州、屋久島、奄美大島、徳之島。

県内の分布 : 沖繩島北部。

生育環境 : 山地溪流沿いの岩上や崖に生える。

生育状況 : 名護市から国頭村にかけての数ヶ所に自生が知られるが、個体数は少ない。自生地の幾つかは、ダム建設により水没して消失した。

学術的価値 : 分布域の南限で、基準産地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。ダム建設による水没。森林伐採。

備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 沖繩総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成5年度沖繩本島北部地域生物環境調査データ. 沖繩建設弘済会, 1-6.

沖繩総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成6年度沖繩本島北部地域生物環境調査データ. 沖繩建設弘済会, 1-6.

沖繩総合事務局北部ダム事務所, 1997. 平成7年度沖繩本島北部地域生物環境調査データ. 沖繩建設弘済会, 1-7.

沖繩総合事務局北部ダム事務所, 1998. 平成8年度沖繩本島北部地域生物環境調査データ. 沖繩建設弘済会, 1-6.

沖繩総合事務局北部ダム事務所, 1998. 奥間川生物環境調査データ. 沖繩建設弘済会, 3-9, 99-112.

沖繩総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖繩建設弘済会, 5-13, 151-168.

沖繩総合事務局北部ダム事務所, 1998. 与那川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-10, 101-117.

沖繩総合事務局北部ダム事務所, 1998. 座津武川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-8, 87-95.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩篤*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : ミゾシダ

分類 : ヒメシダ科 (PPG科名 : ヒメシダ科)

学 名 : *Stegnogramma pozoi* (Lagasca) K. Iwats. subsp. *mollissima* (Fisch. ex Kunze) K. Iwats.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草、根茎は長く這う。葉身は長さ 35~50 cm、1 回羽状複生、毛が多く、葉柄は長さ 25~40 cm。ケホシダに似るが、孢子嚢群はややソーセージ状で包膜を欠く。

分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、沖永良部島、朝鮮、台湾、中国、インド、スリランカ。

県内の分布 : 沖縄島北部、久米島、石垣島。

生育環境 : 沖縄県では、溪流近くや高地の陰湿な林床に生える。

生育状況 : 沖縄島では数ヶ所、石垣島では数ヶ所で確認されているが、いずれもごく狭い範囲に限られ、個体数は極めて少ない。久米島の現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。森林伐採。園芸用の採集。

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **アミシダ**

分類 : ヒメシダ科 (PPG 科名 : ヒメシダ科)

学 名 : *Stegnogramma wilfordii* (Moore) Serizawa

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は横走し、葉を束生する。葉身は長さ 20~50 cm、三角状長楕円形、羽状に浅~深裂し葉身下部は深く切れ込むが、沖縄産は裂片が独立する場合が多く、有毛、葉脈は網状。孢子嚢群は脈上に網状につき、包膜はない。

分布域(県外) : 本州(紀伊半島)、四国、九州、屋久島、奄美大島、台湾、中国。

県内の分布 : 沖縄島、西表島。

生育環境 : 高地の陰湿な林内の崖に生える。

生育状況 : 沖縄島では 1 ヶ所、西表島では 2 ヶ所に産する。自生地はごく狭い範囲に限られ、個体数は非常に少ない。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。森林伐採と林道建設(沖縄島)。園芸用の採集。

備考 : 沖縄島の自生地は、国指定の天然保護区域である。竹富町希少野生動植物種(2017 年)。

文献 : Serizawa, S., 1975. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (1). Sci. Rep. Takao Mus., 7: 1-53.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **タイワンハシゴシダ**

分類 : ヒメシダ科 (PPG 科名 : ヒメシダ科)

学 名 : *Thelypteris castanea* (Tagawa) Ching

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎はほぼ直立し、葉を束生する。葉身は長さ 20~30 cm、幅 10~15 cm、1 回羽状深裂~2 回羽状、長楕円状三角形、有毛、裏に腺点が多い。孢子嚢群は円形、包膜は腎形で有毛。ケホシダが繊細になり小形化したような形態をとる。

分布域(県外) : 台湾。

県内の分布 : 西表島。
生育環境 : 常緑広葉樹林内の崖や溪流近くの岩上、時に林道沿いの崖に生える。
生育状況 : 高地から比較的低海拔地まで島内の数ヶ所に点々と産するが、自生地数は限られる。群生する場合もあるが、個体数は限られる。
学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。
備考 : 西表島産は台湾産に比べて小形である。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : Serizawa, S., 1975. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (1). Sci. Rep. Takao Mus., 7: 1-53.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣 (追補)

和名 : **ゲジゲジシダ**
分類 : ヒメシダ科 (PPG 科名 : ヒメシダ科)
学名 : *Thelypteris decursive-pinnata* (van Hall) Ching
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 日本本土では夏緑性、沖縄県では常緑性の多年生草本。根茎は短く、斜上し、数枚の葉を束生する。葉は有毛、1 回羽状深裂~2 回羽状深裂、長さ 30~60 cm であるが、沖縄県では小型で切れ込みの回数が少ないものが多い。日本本土では、側裂片基部は耳状に広がって葉軸に合着し、上下に連なってジグザグ状を呈するが、奄美大島と沖縄県のものにはジグザグ状を呈しない。葉身下部の側裂片は短くなる。孢子嚢群は裂片の辺縁近くにつき、円形、包膜は有毛。
分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、黒島、奄美大島、朝鮮、台湾、中国、インドシナ、インド。
県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。
生育環境 : 九州以北では、林床や人家の石垣など至る所に普通に見られるが、西表島では、水のしたたり落ちる滝の崖面などにマツムラソウやオオクサアジサイなどと共に生える。奄美大島では、人家周辺の歩道の法面に生えることがある。
生育状況 : 沖縄島では 2 ヶ所で採集されているが、現状は不明。西表島では 1 河川の流域の数ヶ所で採集された記録があるが、極めてまれである。2004 年に新たに西表島の 1 ヶ所で生育が確認されたが、沖縄県で現在残された確実な自生地はここだけだけである。自生地は国立公園内にあり、容易に到達できない奥地にあるので、開発や採集の恐れはない。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。森林伐採 (沖縄島)。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 倉田 悟・中池敏之, 1983. 日本のシダ植物図鑑 第 3 巻. 東京大学出版会, 296-317.
中村 直, 1958. 琉球新産シダについて. 琉球大学生物クラブ誌, 2 (2) : 18-24.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣 (追補)

和名 : **クシノハシダ**
分類 : ヒメシダ科 (PPG 科名 : ヒメシダ科)
学名 : *Thelypteris jaculosa* (C. Chr.) Panigr.
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は這い、葉をやや疎らにつける。葉身は1回羽状、長さ60~120 cm、幅20~30 cm、頂羽片は明瞭で、側羽片は12~20対、葉身下部の羽片は急に短くなり、耳状となる。孢子囊群は中肋と葉縁の中間に位置し、有毛の円腎形の包膜で覆われる。
- 分布域(県外) : 九州南部、奄美大島、徳之島、沖永良部島、台湾、熱帯アジア。
- 県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 低地や山地の水辺に近いやや湿った林床に生える。沖縄島では主に石灰岩地に生えるが、石垣島では非石灰岩地に生える。
- 生育状況 : 沖縄島では数ヶ所に、石垣島では数ヶ所に産することが知られる。しばしば群生するが、生育地は限られる。沖縄島の自生地の一つは、現在建設中のダムが完成すると水没する恐れがある。西表島の現状は不明。
- 減少の要因 : 自生地の開発。森林伐採。
- 文献 : 豊見山元, 1986. 恩納岳と周辺地域のシダ植物. 沖生教研会誌(沖縄生物教育研究会), (19) : 31-33.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : ミミガタシダ
- 分類 : ヒメシダ科 (PPG科名 : ヒメシダ科)
- 学名 : *Thelypteris subaurita* (Tagawa) Ching
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く直立し、葉を束生する。葉は長さ50~120 cmになり、2回羽状、羽片はほぼ対生し、狭三角形。下部に近い羽片の下向きの第1小羽片は著しく突出する。孢子囊群は円形で包膜を欠く。
- 分布域(県外) : 屋久島、奄美大島、徳之島、台湾。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 道路沿いの湿った土手、明るい林内の斜面、がけ崩れ跡地などやや不安定な環境に生える。
- 生育状況 : 数ヶ所に産するが、自生地は不安定な環境であり、遷移が進行すると消滅する。いずれの自生地でも個体数は少ない。
- 減少の要因 : 自生地と個体数がもともと少ない。遷移の進行。
- 文献 : Serizawa, S., 1975. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (1). Sci. Rep. Takao Mus., 7: 1-53.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : イブダケキノボリシダ (ノコギリキノボリシダ)
- 分類 : メシダ科 (PPG科名 : メシダ科)
- 学名 : *Diplazium crassiusculum* Ching
- カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く這い、葉を束生する。葉は長さ20~45 cm、革質、1回羽状、1個の頂羽片と1~2対の側羽片を持ち、葉柄の鱗片は辺縁に小突起があり、黒褐色。孢子囊群は線形で、中肋よりにつく。キノボリシダ *D. donianum* によく似るが、羽片の鋸歯が粗く、葉質もやや薄く硬く、

羽片数も少なくなる傾向があり、単葉となることもある。

- 分布域（県外）：九州南部、中国、インドシナ。
 県内の分布：沖縄島北部、西表島。
 生育環境：山地の陰湿な崖に生える。
 生育状況：キノボリシダのように多くはなく、自生地も個体数も少ない。西表島の現状は不明。
 減少の要因：もともと自生地と個体数が少ない。森林伐採。ダム建設による水没（沖縄島）。
 備考：和名は、沖縄島北部の伊部岳に因む。キノボリシダに外見は似ているが、分子系統学的な研究ではミヤマノコギリシダやヒロハミヤマノコギリシダに最も近縁であることが判っている (Wei *et al.*, 2014)。ホソバミヤマノコギリシダは、本種とミヤマノコギリシダ (ホソバノコギリシダ) の雑種と考えられている (高宮, 2006)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
 文献：高宮正之, 2006. 高宮正之：鳥瞰だけではなく地域情報を活かした虫瞰の植物分類学—ノコギリシダ属を例として—。分類, 6(1): 1-24.
 Wei, R., H. Schneider & X.-C. Zhang, 2013. Toward a new circumscription of the twinosorus-fern genus *Diplazium* (Athyriaceae): A molecular phylogeny with morphological implications and infrageneric taxonomy. Taxon, 62(3): 441-457.
 執筆者名：横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣 (追補)

- 和名：クワレシダ
 分類：メシダ科 (PPG 科名：メシダ科)
 学名：*Diplazium esculentum* (Retz.) Sw.
 カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー：該当なし

- 形態の特徴：九州では夏緑性、沖縄以南では常緑性の多年草。根茎は直立し、葉を束生する。葉身は2回羽状、長さは1~2 m になり広卵形、小羽片は線状三角形。孢子嚢群は線形。ヒロハノコギリシダ *D. dilatatum* に似る大形のシダ。根茎は1 m 近くまで立ち上がり、葉脈が網状脈となる点で同属の他種と区別できる。
 分布域（県外）：九州、東南アジア。
 県内の分布：沖縄島中部。
 生育環境：明るい湿地に生える。
 生育状況：北中城村の放棄水田の湿地にイネ科植物とともに約200株の群落を形成していたが、その自生地は開発により消失した。最近、沖縄市の池の周囲に少数個体が生育していることが確認されている。
 減少の要因：自生地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。
 備考：東南アジアでは食用にするが、沖縄島で食用にするという情報は得られていない。IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。
 文献：豊見山元・新城兵一, 1992. 琉球列島植物分布資料9. 沖縄生物学会誌, (30) : 79-80.
 執筆者名：横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣 (追補)

- 和名：ヒロハミヤマノコギリシダ (タカサゴノコギリシダ)
 分類：メシダ科 (PPG 科名：メシダ科)
 学名：*Diplazium petri* Tardieu-Blot

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は這い、葉をやや密につける。葉身は1回羽状、深裂～全裂、長さ15～35 cm、羽片は披針状長楕円形。孢子嚢群は線形で、中肋に近くならぶ。ミヤマノコギリシダ *D. mettenianum* に似るが、葉身は三角状で羽片は深裂または全裂し、1.5 cm以上の長い葉柄をもち、根茎は短い。

分布域(県外) : 本州(三重県、広島県)、九州(鹿児島県)、屋久島、奄美大島、徳之島、台湾、中国、インドシナ、タイ、フィリピン。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の湿った林床下に生える。

生育状況 : 石垣島では2ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。沖縄島と西表島の現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。森林の伐採。

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : ハンコクシダ

分類 : メシダ科 (PPG科名 : メシダ科)

学名 : *Diplazium pullingeri* (Baker) J. Smith

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は斜上する。葉は1回羽状で、葉柄は長さ10～25 cm、葉身は長さ25～40 cm、葉全体に毛を密生する。側羽片は鎌状に曲り、柄はなく、基部は耳状にとがり、頂羽片はない。孢子嚢群は中肋に接してつき、線形。

分布域(県外) : 屋久島、奄美大島、徳之島、台湾、中国、ベトナム。

県内の分布 : 沖縄島、久米島、石垣島、西表島。

生育環境 : 高地の常緑広葉樹林の陰湿な林床に生える。

生育状況 : 沖縄島、石垣島、西表島では自生地はごく狭い範囲に限られ、個体数も少ない。久米島の現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。森林伐採。

備考 : 孢子嚢の配列のしかたから、この1種のみからなる単型属 *MonomeLangium* として独立させることもある。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : ニセシロヤマシダ

分類 : メシダ科 (PPG科名 : メシダ科)

学名 : *Diplazium taiwanense* Tagawa

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の大型の多年草。根茎は直立し、葉を束生する。葉は1.5 m以上に達し、卵状三角形、2回羽状、小羽片ははっきりした柄をもつ。孢子嚢群は中間生で、長楕円形。

分布域(県外) : 九州、奄美大島、徳之島、台湾、インドシナ、タイ。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の湿った林床や、水の流れのあるような場所に生える。

生育状況 : 自生地は点在し、ごく狭い範囲に限られ、個体数も少なくまれである。

減少の要因 : 個体数はもともと少ない。森林伐採。

文献 : 芹沢俊介, 1972. 琉球のシダ植物雑記 (一). 北陸の植物, 20: 5-9.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : オキナワコクモウクジャク

分類 : メシダ科 (PPG 科名 : メシダ科)

学名 : *Diplazium virescens* Kunze var. *okinawense* (Tagawa) Kurata

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎はやや長く這う。葉は2回羽状複生、葉は長さ1mになり、葉身は卵状三角形、小羽片には短い柄があり、基部は浅い心形、葉柄基部の鱗片は黒褐色、披針形。基本変種のコクモウクジャクと異なり、胞子囊群は中肋よりに位置する。

分布域(県外) : 本州(三重県、和歌山県)、四国(愛媛県、高知県)、九州(宮崎県、鹿児島県)、屋久島、種子島、悪石島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、台湾、中国南部。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。

生育環境 : 山地の常緑広葉樹林の林床に生える。

生育状況 : 沖縄島北部の2ヶ所と西表島1ヶ所で採集された記録があるが、個体数は極めて少ない。

学術的価値 : 国頭村は、本変種の基準産地である。

減少の要因 : 山地林の伐採。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 自生地の一つは国指定の天然保護区域として保護されている。

文献 : 倉田 悟・中池敏之, 1983. 日本のシダ植物図鑑, 第3巻. 東京大学出版会, 220-223.

Serizawa, S., 1977. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (2). Sci. Rep. Takao Mus., 8: 1-30.

執筆者名 : 横田昌嗣*・高良拓夫*

和名 : ノコギリシダ

分類 : メシダ科 (PPG 科名 : メシダ科)

学名 : *Diplazium wichurae* (Mett.) Diels

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長く這い、葉をまばらにつける。葉身は1回羽状、長さ20~40 cm、革質、羽片は鎌状で柄があり、基部は耳状にとがる。胞子囊群は羽軸近くにつき、線形。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、小笠原、屋久島、種子島、トカラ列島、喜界島、沖永良部島、朝鮮、台湾、中国。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の常緑広葉樹林下の斜面や壁面に生える。沖縄島では主に石灰岩地帯の林床に生えるが、東村の溪流沿いの非石灰岩の湿った崖でも観察されている。

生育状況 : 自生地は古生層石灰岩地では3ヶ所、非石灰岩地では1ヶ所知られているが、ごく狭い地域に限られ、個体数は少ない。

減少の要因 : 石灰岩地の開発。森林の伐採。

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : ホコザキノコギリシダ

分類 : メシダ科 (PPG 科名 : メシダ科)

学名 : *Diplazium yaoshanense* (Wu) Tardieu-Blot

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く横走する。葉身は1回羽状、長さ 50 cm に達し、葉柄は葉身と同長かやや長い。孢子嚢群は線状弓形で、長さ 1 cm。ミヤマノコギリシダ *D. mettenianum* に似るが、葉身上部の側羽片は急激に小さくなり、はっきりした頂羽片状となる。

分布域(県外) : 中国、インドシナ。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 高地の湿った林床や溪流沿いの斜面に生える。

生育状況 : 国頭村から名護市にかけて 3ヶ所の自生地が知られるが、個体数はごく少ない。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内唯一の産地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。森林伐採。

備考 : 自生地の一つは、国の天然保護区域に指定されている。本種はミヤマノコギリシダ(ホソバノコギリシダ)とイブダケキノボリシダの雑種だと考えられている(高宮, 2006)。

文献 : 高宮正之, 2006. 鳥瞰だけではなく地域情報を活かした虫瞰の植物分類学—ノコギリシダ属を例として—. 分類, 6(1): 1-24.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : リュウキュウキンモウワラビ

分類 : メシダ科 (PPG 科名 : キンモウワラビ科)

学名 : *Hypodematum fordii* (Baker) Ching

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く這い、黄金色の柔らかい鱗片で覆われる。葉は接近してでて、長さ 5~20 cm、五角状卵形、3回羽状深裂、下面に短腺毛がある。孢子嚢群は円形で、包膜にはまばらに腺毛がある。

分布域(県外) : 中国(広東省)。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 石灰岩地の切り立った崖の岩の窪みに生える。

生育状況 : 極めて限定された 1ヶ所のみで生育し、個体数は極めて少ない。自生地は国立公園であるが、自生地の近くまで開発されており、生育環境の悪化が危惧される。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。園芸用の採集。

備考 : 国内希少野生動物植物(2018年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : カザリシダ
分類 : ウラボシ科 (PPG 科名 : ウラボシ科)
学名 : *Aglanomorpha coronans* (Wall. ex Mett.) Copel.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は太く直径 5 cm くらいで、赤褐色の鱗片を密布する。葉は硬く 1 回羽状、長さ 60~100 cm、基部は幅広く心臓形となる。孢子嚢群は卵形で、包膜はない。

分布域 (県外) : 台湾、中国、ヒマラヤ、タイ、インドシナ。

県内の分布 : 沖縄島、南大東島、石垣島、西表島。

生育環境 : 明るい林内の樹上または岩上に着生する。

生育状況 : 沖縄島では 1930 年代には宜野湾市や浦添市で採集された記録があるが、現在は絶滅。石垣島と西表島でも極めてまれで、近年では西表島 1 ヶ所、石垣島 3 ヶ所の自生地が確認されているが、いずれも乱獲によりほぼ絶滅状態である。かつて群落が見られた石垣島の 1 ヶ所で 2016 年に丹念に探索を行ったが、発見することはできなかった。南大東島では確認することができず、おそらく絶滅。今後散発的な生育が確認される可能性は残されているが、現状では県内から絶滅した可能性が高い。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町特別希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 芹沢俊介, 1972. 琉球のシダ植物雑記 (一) . 北陸の植物, 20: 5-9.
横田昌嗣・新城和治・比嘉清文, 1997. 琉球列島植物分布資料 14. 沖縄生物学会誌, (35) : 49-54.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・豊見山元(追補)・松島昭司(追補)

和名 : イワヒトデ
分類 : ウラボシ科 (PPG 科名 : ウラボシ科)
学名 : *Colysis elliptica* (Thunb.) Ching (= *Leptochilus ellipticus* (Thunb.) Noot.)
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長く這い、まばらに葉をつける。葉はやや 2 型となり、1 回羽状、側裂片は 3~5 対、栄養葉は長さ 15~20 cm、孢子葉は栄養葉より大きい。孢子嚢群は線形で、包膜はない。オオイワヒトデ *C. pothifolia* によく似るが、植物体全体が小型で、根茎は細く、葉の表面は光沢があり、葉脈は見えないなどの点で異なる。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、請島、朝鮮、台湾、中国、インドシナ。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の溪流近くの岩上に生える。

生育状況 : 特定の河川の限られた場所にもみ分布し、個体数は少ない。

減少の要因 : もともと自生地が少ない。森林伐採。ダム建設による水没。

備考 : しばしばヤリノホクリハランと混生し、雑種ヒトツバイワヒトデ *C. simplicifrons* (Christ) Tagawa を形成することがある。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 大保ダム建設発生土の処分候補地に係る生物環境調査データ (陸域・海域) . 沖縄建設弘済会, 3-14, 117-135, 277-286, 349-373.

沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 与那川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-10, 101-117.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 座津武川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-8, 87-95.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : **タイワンクリハラシ**
 分類 : ウラボシ科 (PPG科名 : ウラボシ科)
 学名 : *Colysis hemionitidea* C. Presl (= *Leptochilus hemionitideus* (C. Presl) Noot.)
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長く這い、葉をやや疎らにつける。葉は単葉で、披針形、長さ 20~50 cm、幅 4~8 cm になり、葉柄は長さ 5~20 cm、鱗片は披針形、基部に突起がある。孢子囊群は長楕円形。
 分布域(県外) : 屋久島、種子島、奄美大島、台湾、中国、フィリピン、インドシナ、タイ、インド、ネパール。
 県内の分布 : 西表島。
 生育環境 : 空中湿度の高い常緑広葉樹林の溪流近くの岩上や地上に生える。
 生育状況 : 1972年に採集された記録(倉田・中池, 1981)があるが、それ以後確実な確認はされていない。その生育地は国立公園内にあるが、近年数多くの観光客が立ち入り、遊歩道が建設されており、環境の悪化、踏みつけ、採集が懸念される。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。
 備考 : 1972年に西表島で採集された標本が国立科学博物館(TNS)に所蔵されている。奄美大島では、それほど珍しいものではない。竹富町特別希少野生動物植物種(2017年)。
 文献 : 倉田 悟・中池敏之, 1981. 日本のシダ植物図鑑, 第2巻. 東京大学出版会, 280-283.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : **ハカマウラボシ**
 分類 : ウラボシ科 (PPG科名 : ウラボシ科)
 学名 : *Drynaria fortunei* (Kunze) J. Smith
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 冬緑性の多年草。根茎は太く径 2 cm くらいで、長く這い、鱗片を密布する。葉は極端な 2 型葉で、落葉溜めの泥除葉と光合成と生殖のための普通葉の区別がある。泥除葉は卵形で、長さ 4~11 cm、心脚、展開後すぐに褐変する。普通葉は 1 回羽状、長さ 20~35 cm、幅 10~17 cm、葉柄は長さ 5~10 cm。孢子囊群は普通葉の下面につき、卵形、包膜はない。
 分布域(県外) : 台湾、中国、ベトナム、タイ、ラオス。
 県内の分布 : 沖縄島北部。
 生育環境 : 明るい林内の樹上または岩上に着生する。
 生育状況 : 極めて限定された 1 地域に小コロニーを形成するだけである。自生地は国立公園であるが、すぐ近くまで開発が進んでおり生育地が改変される恐れがある。
 学術的価値 : 種としても属としても分布域の北限で、国内で唯一の産地である。
 減少の要因 : 自生地の開発。園芸用の採集。

備考 : 特定国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。特定国内希少野生動植物 (2018年)。

文献 : 津嘉山弘・仲宗根忠之・仲本朝彦・山内正一・山内盛吉・普久原朝助・外間元栄・島袋守成・豊見山元, 1991. 沖縄島よりハカマウラボシ *Drynaria fortunei* (Kunze) J. Sm. を報告する. 沖縄生物学会誌, (29) : 49-51.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : コウラボシ

分類 : ウラボシ科 (PPG科名 : ウラボシ科)

学名 : *Lepisorus uchiyamae* (Makino) H. Ito

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の小形の多年草。根茎は短く這い、葉をやや接近してつける。葉は単葉、長さ3~13 cm、線状披針形、孢子囊群は円形、葉身の上半部に中肋をはさんで5~13対つき、包膜はない。ノキシノブ *L. thunbergianus* に似るが小形で、根茎は長く這い、葉はやや薄く疎に出る。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、奄美大島、徳之島。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島北部、渡嘉敷島、屋嘉比島、座間味島、久米島、渡名喜島、栗国島。

生育環境 : 海岸近くの岩の割れ目や窪みに生える。

生育状況 : 各島ともごく限られた地域に産し、個体数は少ない。渡嘉敷島では2015年に1ヶ所で確認された。

学術的価値 : 分布域の南限である。

減少の要因 : 個体数はもともと少ない。自生地の開発。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 島袋敬一, 1975. 琉球列島におけるシダ植物の分布 (2) . 沖縄生物学会誌, (13) : 18-23.

豊見山元, 1994. 久米島のシダ植物. “久米島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術工芸・建築—”, 沖縄県立博物館 (編), 沖縄県立博物館, 12-25.

横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査II (栗国島・渡名喜島) . 日本植物園協会誌, (51) : 80-85.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : シナノキシノブ (オオクリハラン)

分類 : ウラボシ科 (PPG科名 : ウラボシ科)

学名 : *Microsorium fortunei* (Moore) Ching (= *Neocheiropteris fortunei* (T.Moore) Bosman ex Nakaike et A.Yamam.)

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は這い、径3~4 mm。葉は単葉で長さ40~70 cm、葉柄は長さ10~25 cm。孢子囊群は中肋の両側に1列に並び、円形、包膜はない。

分布域(県外) : 小笠原 (父島、母島)、インドシナ、インド。

県内の分布 : 石垣島。
 生育環境 : 岩上に着生する。
 生育状況 : 1947年に採集された標本が京都大学の標本庫 (KYO) に所蔵されているが、近年はまったく確認されておらず、現状不明。
 学術的価値 : 小笠原諸島と共に分布域の北限である。国内では分布が限定されている。
 減少の要因 : もともと個体数が少ない。自生地の開発。園芸用の採集。

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : ミツデヘラシダ
 分類 : ウラボシ科 (PPG科名 : ウラボシ科)
 学名 : *Microsorium pteropus* (Blume) Copel. (= *Leptochilus pteropus* (Blume) Fraser-Jenk.)
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長く這う。葉は長さ 15~20 cm、単葉または 3 出葉。孢子嚢群はほぼ円形で、包膜はない。
 分布域 (県外) : 台湾、中国南部、インドシナ、インド。
 県内の分布 : 石垣島、西表島。
 生育環境 : 山地の常緑樹林内の溪流沿いの陰湿な岩上に生育し、西表島では時として水深 0.5 m 程度の水中の岩上に生えることがある。
 生育状況 : 石垣島では 3 河川の流域に産するが、個体数は少ない。西表島では数河川の流域に産し、群生する場合もあるが、自生地の数は少ない。
 学術的価値 : 分布域の北限である。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。
 備考 : 外国産がミクロソリウムの名前で水草として熱帯魚店で販売されている。西表島の自生地の大半は、国立公園であり開発の恐れはない。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : タカウラボシ (ミズカザリシダ)
 分類 : ウラボシ科 (PPG科名 : ウラボシ科)
 学名 : *Microsorium rubidum* (Kunze) Copel.
 カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長く這い、葉を疎らにつける。葉は長さ 1.5m になり、長楕円形、1 回羽状深裂、側裂片は 12~16 対、葉柄は茶褐色、長さ 10~15 cm、葉柄基部に長卵形の鱗片がある。孢子嚢群は中肋と葉縁の中間に 1 列に並び、楕円形、孢子嚢群がつく場所の葉肉は窪み、包膜を欠く。
 分布域 (県外) : 奄美大島、台湾、中国、フィリピン、東南アジア、ミクロネシア。
 県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島、久米島、石垣島、西表島、与那国島。
 生育環境 : サガリバナ林の林床や放棄水田などの湿地に生える。
 生育状況 : 沖縄島では宜野座村、恩納村、沖縄市などに点々と産するが、自生地は開発により急激に失われている。西表島では 5 ヶ所に群生するが、自生地は限られている。石垣島では、2017 年に 1 ヶ所で確認されている。他の島の現状は不明。
 減少の要因 : 自生地の開発。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
文献 : 倉田 悟・中池敏之, 1981. 日本のシダ植物図鑑 第 2 巻. 東京大学出版会, 510-513.
執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : クリハラシ
分類 : ウラボシ科 (PPG 科名 : ウラボシ科)
学名 : *Neocheiropteris ensata* (Thunb.) Ching
カテゴリー : 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長く這う。葉は単葉で、葉身は長さ 20~40 cm、卵状長楕円形、葉柄は長さ 10~30 cm。胞子嚢群は葉身中に散在し、円形、包膜はない。外見はヤリノホクリハラシ *Colysis wrightii* に似るが、より大形で頑強で、胞子嚢群は円形である。
分布域(県外) : 本州、四国、九州、中国。
県内の分布 : 沖縄島中部。
生育環境 : 岩上に着生する。
生育状況 : 自生地は 1ヶ所のみ知られ、現在はまったく発見されない。故多和田真淳氏によると県外から持ち込まれた石碑用の石に着生していたという。沖縄のものはヒロハクリハラシ型であり、ヒロハクリハラシ *f. platyphylla* Tagawa の paratype で、京都大学の標本庫 (KYO) に収蔵されている。
減少の要因 : もともと自生地が限られている。自生地の公園化による除草。園芸用の採集。
保全対策 : 自生地は国指定の史跡で、城趾公園となっているが、公園整備や除草の際、本種などの貴重種には配慮する必要がある。

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : タイワンアオネカズラ (シマアオネカズラ)
分類 : ウラボシ科 (PPG 科名 : ウラボシ科)
学名 : *Polypodium formosanum* Baker (= *Goniophlebium formosanum* (Baker) Rodl.-Linder)
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 冬緑性の多年草。根茎は径 5 mm くらい、灰白色を帯びた緑色で、長く伸びる。葉は 1 回羽状、長楕円状披針形、葉身は長さ 40 cm になり、葉柄は長さ 9~20 cm、柔らかい草質で軟毛を密布する。胞子嚢群は円形で、中肋よりに 1 列にならび、包膜はない。
分布域(県外) : 屋久島、台湾、中国南部。
県内の分布 : 西表島。
生育環境 : 高地の自然林内の樹幹に着生する。
生育状況 : 西表島では 1 度記録されたのみで、その後は確認されていない。現状は不明。
学術的価値 : 分布が極めて限定された希産種である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。
備考 : 自生地は、現在は国立公園内にあり、開発の恐れはない。本種は台湾では、雲霧帯に普通に産する。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : 芹沢俊介, 1972. 琉球のシダ植物雑記 (一). 北陸の植物, 20: 5-9.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ヒトツバマメツタ

分 類 : ウラボシ科 (PPG 科名: ウラボシ科)

学 名 : *Pyrrosia adnascens* (Sw.) Ching

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 の 特 徴 : 小形の常緑多年草。根茎は長く這い、まばらに葉をつける。葉は革質、2型となり、栄養葉は長さ4~10 cm、倒長卵形、孢子葉は栄養葉より細長くなり、孢子葉群は円形で、葉の上半分に密生する。ヒトツバに似ているが、葉は明瞭な2型となり、小型で、多肉質である。

分 布 域 (県 外) : 台湾、中国南部、インド、東南アジア、ポリネシア。

県 内 の 分 布 : 沖縄島南部、渡名喜島。

生 育 環 境 : 明るく乾燥した森林の岩上または樹上に着生する。台湾や東南アジアでは、低地の日当たりが良い樹林や街路樹に普通に生育する。

生 育 状 況 : 極めて限定された地域に分布する (Shimabuku, 1976)。沖縄島では採集により激減したが、わずかに残された個体が最近確認されており (立石・新城, 1999)、別の新たな自生地が沖縄島南部1ヶ所で見つかったが、2016年の調査では、これら2ヶ所とも確認することができなかった。そのうちの1ヶ所は周辺の森林の遷移の進行で、環境が暗くなったことが原因である可能性がある。もう1ヶ所は国指定の史跡であるが、過度の除草と採集で絶滅した可能性がある。渡名喜島では、かつて採集された場所を中心に探索が試みられたが、発見することはできず、現状は不明 (阿部ら, 2016)。発見当時は里山として利用され明るかった環境が、近年は利用されなくなって遷移が進行し、暗い樹林になったため、本種の生育に適さなくなった可能性がある。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限で、国内では沖縄県にのみ分布する。

減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。遷移の進行。過度の草刈り。

文 献 : Shimabuku, K., 1976. Rare species of the ferns from Shimajiri, the southern part of Okinawa Island. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 2: 53-58.

玉木 拓, 1965. 渡名喜島のシダ. 沖縄生物学会誌, (2): 9-12.

玉木 拓, 1966. 琉球産シダ植物の分類, 生態の研究 (1). 沖縄生物学会誌, 3(5): 22-26.

立石庸一・新城和治, 1999. 斎場御嶽の植物. "国指定史跡斎場御嶽整備事業報告書 (発掘調査・資料編)", 知念村教育委員会 (編), 知念村教育委員会, 43-84.

阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 II (粟国島・渡名喜島). 日本植物園協会誌, (51): 80-85.

執 筆 者 名 : 立石庸一*・山城 考*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和 名 : タイワンビロードシダ

分 類 : ウラボシ科 (PPG 科名: ウラボシ科)

学 名 : *Pyrrosia linearifolia* (Hook.) Ching var. *heterolepis* Tagawa

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 の 特 徴 : 常緑の小形の多年草。根茎は長く這い、赤褐色の長い鱗片を密布する。葉は長さ5~15 cm、幅3~5 cm、単葉、線状披針形、両面に星状鱗片をビロード状に密布する。孢子葉群は円形で、中肋の両側

に2列にならび、包膜はない。基本変種のピロードシダに比べ鱗片が幅広い点で区別されている。

- 分布域（県外）：台湾。
- 県内の分布：沖縄島北部、渡名喜島。
- 生育環境：明るく風の良く当たる岩上にマット状に生える。
- 生育状況：極めて限定された地域に分布し、個体数も少ない。沖縄島北部の自生地は国立公園であるが、無秩序な開発により多数の個体と自生地が消失しており、極めて深刻な状態にある。渡名喜島では、ごく最近も生育が確認されている（阿部ら，2016）。
- 学術的価値：分布域の北限で、国内では県内にのみ分布する。
- 減少の要因：園芸用の採集。森林の伐採と開発。もともと自生地が限られている。

- 文献：島袋守成，1975. シダ植物の生育環境：辺戸岳におけるタイワンピロウドシダ (1) . 沖生教研会誌，(8)：25-26.
 玉木 拓，1966. 琉球産シダ植物の分類，生態の研究 (1) . 沖縄生物学会誌，3 (5)：22-26.
 阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣，2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査II (粟国島・渡名喜島) . 日本植物園協会誌，(51)：80-85.

執筆者名：横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

- 和名：ヒメウラボシ
- 分類：ヒメウラボシ科 (PPG 科名：ウラボシ科)
- 学名：*Grammitis dorsipila* (Christ) C. Chr. et Tardieu-Blot
- カテゴリー：絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I B 類 (EN)

- 形態の特徴：常緑の小形の多年草。根茎はごく短く、葉を束生する。葉は単葉で、線形、長さ2~8 cm、幅2~4 mm、赤褐色の毛が多い。孢子嚢群は円形で、中肋の両側に2列にならび、包膜はない。ノキシノブ *Lepisorus thunbergianus* をかなり小形にしたようなシダで、葉が薄く荒い毛が密生する。
- 分布域（県外）：九州南部、屋久島、奄美大島、徳之島。
- 県内の分布：沖縄島、石垣島。
- 生育環境：高地の湿度の高い林内の樹幹や岩上、または溪流沿いのやや日当たりの良い岩上に着生する。
- 生育状況：自生地は沖縄島では1ヶ所、石垣島では3ヶ所しか知られておらず、極めてまれである。石垣島では、しばしばシمامカデシダと混生し、シمامカデシダの幼植物と紛らわしい場合があるが、孢子嚢の有無で区別できる。
- 減少の要因：もともと自生地と個体数が少ない。森林の伐採。園芸用の採集。

- 文献：横田昌嗣・豊見山元・比嘉清文・橋爪雅彦，1994. 琉球列島植物分布資料 13. 沖縄生物学会誌，(32)：61-65.

執筆者名：横田昌嗣*・比嘉清文*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・加島幹男(追補)

- 和名：シمامカデシダ
- 分類：ヒメウラボシ科 (PPG 科名：ウラボシ科)
- 学名：*Prosaptia kanashiroi* (Hayata) Nakai ex Yamamoto
- カテゴリー：絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー：該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の小形の多年草。根茎は短く這い、葉を束生する。葉は単葉で、羽状に切れこみ、長さ10~30 cm、幅1.5~3 cm。両面に茶褐色の毛がある。孢子嚢群は裂片の先端の縁につき、包膜はポケット状。
- 県内の分布 : 石垣島、西表島。
- 生育環境 : 常緑樹林内の岩上に着生する。
- 生育状況 : 石垣島の山地ではまれではないが、自生地と個体数は限られている。西表島では極めてまれで(島袋, 1973)、これまで2回しか採集されておらず、現状は不明。
- 学術的価値 : 八重山諸島の固有種である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。森林伐採(石垣島)。ダム建設による水没。園芸用の採集。
- 備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。
- 文献 : 島袋敬一, 1973. 琉球列島におけるシダ植物の分布(1). 沖縄生物学会誌, 10(12): 37-42.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

<情報不足 (DD)>

- 和名 : **アツイタ**
- 分類 : ツルキジノオ科 (PPG科名: オシダ科)
- 学名 : *Elaphoglossum yoshinagae* (Yatabe) Makino
- カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は横走し、葉を密につける。葉はやや2型となり、葉身は単葉で、長さ10~30 cm、幅2~4.5 cm、葉柄は長さ2~8 cm、鱗片は長卵形。孢子嚢群は孢子葉の裏に一面につく。
- 分布域(県外) : 本州(八丈島、紀伊半島)、四国(高知県)、九州(鹿児島県)、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、インドシナ。
- 県内の分布 : 沖縄島、石垣島。
- 生育環境 : 山林中のやや陰湿な樹上か岩上に生える。
- 生育状況 : 近年はまったく確認されておらず、国内の標本庫でも証拠標本を確認することができなかった。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。森林の伐採。園芸用の採集。
- 備考 : 奄美諸島では雲霧帯に生える。沖縄島ものは、オキナワアツイタ *E. callifolium* と混同されていた可能性がある。倉田・中池(1979)や海老原(2017)でも沖縄県からアツイタの標本は引用されていない。石垣島のものも含めて、標本に基づいて検討する必要がある。
- 文献 : 海老原淳, 2017. 日本産シダ植物標本図鑑Ⅱ. 学研, 507pp.
倉田 悟・中池敏之, 1979. 日本のシダ植物図鑑 第1巻. 東京大学出版会, 538-541.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **ホソバシケチシダ**
- 分類 : メシダ科 (PPG科名: メシダ科)
- 学名 : *Cornopteris banajaoensis* (C. Chr.) K. Iwats. et Price

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は斜上し、数枚の葉を叢生する。葉は3回羽状、草質、広楕円形～三角状卵形、長さ60 cmになり、羽軸と小羽軸は無毛。孢子囊群は中肋近くにつき、円形、包膜を欠く。

分布域(県外) : 屋久島、種子島、小笠原(南硫黄島)、台湾、フィリピン、ニューギニア。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の林床に生える。

生育状況 : 初島・天野(1994)により、沖縄県から初めて報告されたが、報告された自生地周辺はほとんど米軍演習地であり、調査ができない状況にある。倉田・中池(1990)では沖縄県の標本は引用されていない。現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物(2016年)。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1994. “増補訂正琉球植物目録”, 沖縄生物学会, 西原町, 12.
倉田 悟・中池敏之, 1990. 日本のシダ植物図鑑, 第6巻. 東京大学出版会, 680-683.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : **デンジソウ**

分類 : デンジソウ科 (PPG科名: デンジソウ科)

学名 : *Marsilea quadrifolia* L.

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II類 (VU)

形態の特徴 : 夏緑性の水生植物。根茎は泥の中を長く這い、疎らに葉をつける。葉は2型となり、栄養葉の葉柄は長さ20 cmになり、羽片は4個、長さ幅は1~2 cm、倒卵状扇形で、四つ葉のクローバー状を呈し、孢子囊果は卵形、2~3個ずつ集まり、共通の果柄は葉柄の基部から1 cm程度上方からでる。孢子囊果の中には、大孢子囊と小孢子囊をつける。

分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、トカラ列島、奄美大島、朝鮮、中国、ロシア、インドシナ、ヨーロッパ、アメリカ。

県内の分布 : 伊是名島、西表島。

生育環境 : 水田やため池の水中に生える。

生育状況 : 国内の主要な標本庫に納められている標本では、孢子囊果をつけた明らかに本種と同定される標本は得られなかったため、現状不明。倉田・中池(1987)でも沖縄県産の標本は引用されていない。デンジソウと同定された1800年代末以降の多くの標本は、実際に検討したところ、本種に近縁なナンゴクデンジソウ *M. crenata* Presl と考えられるため、ナンゴクデンジソウが本種と誤認されている可能性が高い。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。湿地・池沼・水田の開発。

備考 : ナンゴクデンジソウは、鹿児島県と沖縄県、東南アジアに広く分布し、本種とは果柄のつく位置が葉柄基部である点で区別される。竹富町希少野生動植物種(2017年)。IUCNカテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : 倉田 悟・中池敏之, 1987. 日本のシダ植物図鑑, 第5巻. 東京大学出版会, 778-782.

執筆者名 : 横田昌嗣

〈除 外〉

- 和 名 : オオアオガネシダ
分 類 : チャセンシダ科 (PPG 科名 : チャセンシダ科)
学 名 : *Asplenium austrochinense* Ching
カ テ ゴ リ ー : 除外 環境省カテゴリー: 該当なし
- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、葉を束生する。葉は長さ 30~50 cm。アオガネシダ *A. wilfordii* に似るが、葉は 2 回羽状複葉で、葉質が厚く、最終裂片は幅広く、数脈がある。
- 分布域 (県外) : 台湾、中国南部。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 山地の岩上や樹上に生える。
- 生育状況 : かつて 1 度記録されただけで、近年はまったく確認されていない。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。
- 備 考 : 沖縄島北部で採集された標本は、アオガネシダの範囲内であったという見解が公表されたので (海老原, 2016)、除外する。
- 文 献 : 海老原淳, 2016. 日本産シダ植物標本図鑑 I. 学研, 475pp.
- 執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)